熊本県文化財調査報告　第58集

上の原遺跡 I

1983
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第58集

上の原遺跡 I

1983
熊本県教育委員会

序　文

下益城郡城南町は、古くから文化財の宝庫として知られ塚原古墳群、阿高・黒橋貝塚などの国指定史跡をはじめ、各種の文化財が点在しております。

ここに報告する上の原遺跡は、塚原古墳群の東南に隣接する複合遺跡で、圃場整備事業に伴って昭和53～55年度に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、旧石器～歴史時代の各種の遺構・遺物が検出されました。なかでも古墳時代の住居跡は、400基以上を数え塚原古墳群との関連において、集落と古墳群とが有機的に把握できる貴重な資料を得ることができました。

昭和56年度から調査資料の整理を進めておりますが、ここにその成果の一部を報告する運びとなりました。

調査を進めるにあたり県農政部、県宇城事務所、城南町をはじめ、多くの方々から御指導御協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

この報告書が広く県民の皆様に利用され、地域の理解や文化財の理解に活用されることを期待いたします。

昭和58年３月31日

熊本県教育長　外　村　次　郎

例　言

1．本報告書は、熊本県下益城郡城南町塚原に所在する上の原遺跡、塚原古墳群（上の原支群）の調査報告である。

2．調査は県営圃場整備事業に伴う事前調査として、熊本県農政部耕地第一課の依頼により熊本県教育庁文化課が行った。

現地調査は昭和53～55年度に実施し、昭和56年度以降は整理作業を実施している。

3．本書には、旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物、古墳に関する調査成果について収録した。遺跡の主体を占める４～７世紀の住居址群、および歴史時代の遺構と遺物については別途報告の予定である。

4．挿図の実測、製図は挿図目次に示すとおりである。掲載写真の撮影は、現地調査に関するものは各年度の調査員が行い、遺物写真については野田拓治、西住欣一郎が行った。

5．本書に使用した遺跡周辺地形図は、熊本県宇城事務所から提供を受けた。

6．本書の執筆は松本建郎、野田拓治、木崎康弘、古森政次、清田純一、森山栄一、西住欣一郎、田尻悦子が分担して行い、文責は文末に示した。

7．石器の材質については、高橋俊正氏（熊本大学教養部教授）に同定を依頼した。

8．本文中、記述に不統一な点もあるが、執筆者の責任においてそのまま掲載した。

9．本報告書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ章を松本健郎が、第Ⅲ章を野田拓治が担当した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の契機と調査概要

第１節　調査の契機と経過概要…… 1
第２節　調査の組織…… 2
１．53年度調査…… 2
２．54年度調査…… 2
３．55年度調査…… 3
４．56年度調査…… 3
５．57年度調査…… 3
第３節　成果の概要と本報告書の構成 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　上の原遺跡の位置…… 5
第２節　上の原遺跡周辺の地形と地質…… 6
第３節　歴史的環境…… 7

第Ⅲ章　53・54年度調査の成果

第１節　調査の概要……13
１．53年度調査……13
２．54年度調査……14
３．遺跡の層位と層序……16
第２節　調査経過……16
１．53年度調査……16
２．54年度調査……17
第３節　先土器・縄文時代の遺構と遺物……17
１．集石遺構……18
２．その他の出土遺物……22
第４節　弥生時代の遺構・遺物……60
１．竪穴住居址……60
２．甕棺墓……88

第Ⅳ章　55年度調査の成果

第１節　調査の概要……93
１．調査の概要……93

2．調査経過……93
第2節　縄文時代の遺構と遺物……96
1．集石遺構……96
2．土壙……96
3．縄文土器……97
4．石器……113
5．小結……128
第3節　弥生時代の遺構と遺物……131
1．甕棺墓……131
2．弥生土器……131
3．小結……135
第4節　塚原古墳群（上の原支群）の調査……137
1．古墳の配置と調査方法……137
2．1号墳……138
3．2号墳……145
4．3号墳……150
5．4号墳……157
6．5号墳……160
7．6号墳……161
8．7号墳……168
9．9号墳……170
10．10号墳……172
11．11号墳……172
12．12号墳……174
13．小結……186

第V章　考　察

第1節　出土遺物の検討……194
1．55年度調査区出土縄文土器の検討……194
2．弥生土器の編年……198
3．古墳出土須恵器の検討……203
第2節　弥生時代住居址と集落の構造……207
1．住居の構造……207
2．集落の構造……209
第3節　塚原古墳群をめぐる二・三の問題……211
1．将軍塚古墳の再検討……211
2．塚原古墳群の範囲……220

挿　図　目　次

第１図　上の原遺跡の位置(西住作成)……5
第２図　上の原遺跡・塚原古墳群周辺地形図
(宇城事務所原図)…… 折り込み
第３図　熊本周辺沖積火山灰土壌対比図(籾倉原図)……6
第４図　周辺遺跡分布図(清田作成)……8
第５図　上の原遺跡53・54年度調査区全図
(野田・広瀬・高野実測、野田製図)…… 13
第６図　53・54年度調査区遺構配置図
(野田・広瀬・高野実測、野田製図)…… 15
第７図　集石遺構分布図
(野田・豊崎実測、野田製図)…… 19
第８図　集石遺構(野田・豊崎実測、野田製図)…… 20
第９図　集石遺構出土土器(野田実測・製図)…… 21
第10図　上の原遺跡出土押型文土器文様分類表
(野田作成)…… 23
第11図　押型文土器(楕円文)(野田実測・製図)…… 27
第12図　押型文土器(楕円文)(野田実測・製図)…… 28
第13図　押型文土器(楕円文・山形文)(野田実測・製図)‥31
第14図　押型文土器(山形文)(野田実測・製図)…… 33
第15図　押型文土器(山形文・格子目文)
(野田実測・製図)…… 34
第16図　押型文土器(平行文)・撚糸文土器
(野田実測・製図)…… 35
第17図　塞ノ神式土器(野田実測・製図)…… 38
第18図　凹線文・精製磨研・粗製土器(野田実測・製図)‥40
第19図　西平式土器(野田実測・製図)…… 41
第20図　組織痕文・突帯文土器(野田実測・製図)…… 41
第21図　先土器時代の石器(木崎実測・製図)…… 44
第22図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 45
第23図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 47
第24図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 48
第25図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 50
第26図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 51
第27図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 52
第28図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 53
第29図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 54
第30図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 56
第31図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 57
第32図　縄文時代の石器(木崎実測・製図)…… 58
第33図　接合関係図(木崎実測・製図)…… 59
第34図　上の原13号住居址(野田実測・製図)…… 60
第35図　上の原24号住居址(野田実測・製図)…… 62
第36図　上の原24号住居址出土土器
(野田実測・製図)…… 64
第37図　上の原24号住居址出土土器
(野田実測・製図)…… 65
第38図　上の原24号住居址出土大陸系石器
(野田実測・製図)…… 65
第39図　上の原30号住居址(広瀬実測・野田製図)…… 66
第40図　上の原30号住居址出土土器(野田実測・製図)…… 67
第41図　上の原32号住居址(野田実測・製図)…… 68
第42図　上の原32号住居址出土土器(野田実測・製図)…… 69
第43図　上の原32号住居址出土石器
(野田実測・製図)…… 71
第44図　上の原36号住居址
(野田・広瀬・高野実測、野田製図)…… 72
第45図　上の原57号住居址
(野田・広瀬・高野実測、野田製図)…… 73
第46図　上の原36・57号住居址出土土器
(野田実測・製図)…… 74
第47図　上の原60号住居址
(広瀬・高野実測、野田製図)…… 76
第48図　上の原60号住居址出土土器(野田実測・製図)…… 77
第49図　上の原61号住居址
(広瀬・高野実測、野田製図)…… 79
第50図　上の原61・63号住居址出土土器
(野田実測・製図)…… 80
第51図　上の原63号住居址(野田実測・製図)…… 81
第52図　上の原66号住居址
(野田・広瀬・高野実測、野田製図)…… 82
第53図　上の原66号住居址出土土器(野田実測・製図)…… 83
第54図　上の原68号住居址
(広瀬・高野実測、野田製図)…… 84
第55図　上の原68号住居址出土土器(野田実測・製図)…… 85
第56図　上の原102号住居址(野田実測・製図) …… 86
第57図　上の原102号住居址出土土器
(野田実測・製図)…… 86
第58図　藤山１号住居址出土土器(野田実測・製図)…… 87
第59図　藤山１号住居址(野田・広瀬実測、野田製図)…… 88
第60図　藤山１・２号甕棺墓
(野田・広瀬実測、野田製図)…… 89
第61図　藤山１・２号甕棺
(野田・広瀬実測、野田製図)…… 90
第62図　磨製石器(野田・製図)…… 91
第63図　55年度調査区全体図
(宇城事務所原図、松本製図)…… 94
第64図　集石遺構、縄文土器実測図
(広瀬・清田実測、西住製図)…… 96
第65図　土壙実測図(森山・浦田実測、松本製図)…… 97
第66図　Ｅ－10－１号土壙出土石器実測図
(田尻実測、西住製図)…… 97
第67図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……100
第68図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……101
第69図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……102
第70図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……103
第71図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……104
第72図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……105
第73図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……106
第74図　縄文土器実測図(清田実測・製図)……107
第75図　石器実測図
(古森・田尻実測、古森・西住製図)……113
第76図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……114
第77図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……115
第78図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……116
第79図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……117
第80図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……118
第81図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……119
第82図　石器実測図(田尻実測、西住製図)……120
第83図　石器実測図(西住実測・製図)……121
第84図　石器実測図(西住実測・製図)……122
第85図　石器実測図(西住実測・製図)……123
第86図　石器実測図(西住実測・製図)……124

第87図　石器実測図(西住実測・製図)……125
第88図　石器実測図(西住実測・製図)……126
第89図　D－12－1号甕棺墓実測図
(高谷実測・松本製図)……131
第90図　甕棺実測図(田尻実測、西住製図)……132
第91図　弥生土器実測図(清田実測・製図)……133
第92図　古墳配置図(松本・勢田・浦田実測、西住製図)……137
第93図　古墳各部の名称と計測値(松本作成)……138
第94図　1号墳墳丘実測図
(野田・高谷実測、松本製図)……139
第95図　1号墳主体部実測図(野田実測、松本製図)……140
第96図　1号墳周溝1区遺物出土状態実測図
(野田実測、松本製図)……141
第97図　1号墳出土須恵器実測図
(松本・広瀬実測、松本製図)……142
第98図　1号墳出土須恵器実測図
(松本・広瀬実測、松本製図)……143
第99図　1号墳出土土師器実測図
(松本・広瀬実測、松本製図)……144
第100図　1号墳出土玉類・鉄器実測図
(松本・田尻実測、松本製図)……145
第101図　2号墳墳丘実測図
(江本・勢田・森山実測、松本製図)……146
第102図　2号墳主体部実測図(野田実測、松本製図)……147
第103図　2号墳周溝1区遺物出土状態実測図
(江本実測、松本製図)……148
第104図　2号墳出土須恵器実測図(松本実測・製図)……149
第105図　2号墳出土玉類実測図(田尻実測、松本製図)……148
第106図　3号墳墳丘実測図
(松本・勢田・古森・浦田実測、松本製図)……150
第107図　3号墳周溝1・4区遺物出土状態実測図
(勢田実測、松本製図)……151
第108図　3号墳出土須恵器実測図(松本実測・製図)……153
第109図　3号墳出土須恵器実測図(松本実測・製図)……154
第110図　3号墳出土須恵器実測図(松本実測・製図)……155
第111図　3号墳出土須恵器・土師器実測図
(松本実測・製図)……156
第112図　3号墳出土玉類・鉄器実測図
(松本・田尻実測、松本製図)……157
第113図　4号墳墳丘実測図(古森実測、松本製図)……158
第114図　4号墳周溝1区(下)、周溝2・3区(上)
遺物出土状態実測図(古森実測、松本製図)……158
第115図　4号墳出土須恵器、土師器実測図
(松本実測・製図)……159
第116図　5号墳墳丘実測図
(古森・清田実測、松本製図)……160
第117図　6号墳墳丘実測図(高木実測、松本製図)……161
第118図　6号墳主体部実測図
(高木・野田実測、松本製図)……162
第119図　6号墳周溝1区遺物出土状態実測図
(高木実測、松本製図)……163
第120図　6号墳周溝4区遺物出土状態
馬の埋納土壙実測図(高木実測、松本製図)……164
第121図　6号墳出土須恵器実測図(松本実測・製図)……165
第122図　6号墳出土須恵器、土師器実測図
(松本実測・製図)……166
第123図　6号墳出土鉄器実測図(松本実測・製図)……167
第124図　7号墳墳丘実測図
(古森・松本・浦田実測、松本製図)……168
第125図　7号墳主体部実測図(古森実測、松本製図)……168
第126図　7号墳周溝1区遺物出土状態実測図
(古森実測、松本製図)……169
第127図　7号墳出土須恵器、土師器実測図
(松本・広瀬実測、松本製図)……169
第128図　7号墳出土鏡片実測図(松本実測・製図)……170
第129図　9号墳墳丘実測図(江本・浦田実測、松本製図)……171
第130図　9号墳出土須恵器実測図
(松本・広瀬実測、松本製図)……172
第131図　10号墳墳丘実測図
(松本・勢田・清田・古森・浦田実測、松本製図)……172
第132図　10号墳主体部実測図(松本実測・製図)……173
第133図　11号墳墳丘実測図(勢田・浦田実測、松本製図)……173
第134図　11号墳周溝1区遺物出土状態実測図
(勢田実測、松本製図)……174
第135図　11号墳出土須恵器実測図
(広瀬実測、松本製図)……174
第136図　12号墳墳丘実測図(古森・浦田実測、松本製図)……175
第137図　12号墳出土馬埋納土壙実測図
(江本・勢田・清田実測、松本製図)……176
第138図　12号墳周溝1区遺物出土状態実測図
(清田・古森実測、松本製図)……177
第139図　12号墳出土須恵器実測図
(田尻実測、松本製図)……178
第140図　12号墳出土須恵器実測図
(田尻実測、松本製図)……179
第141図　12号墳出土須恵器実測図
(田尻実測、松本製図)……180
第142図　12号墳出土須恵器実測図
(田尻実測、松本製図)……181
第143図　12号墳出土赤焼土器、土師器実測図
(田尻実測、松本製図)……182
第144図　12号墳出土土師器実測図
(田尻実測、松本製図)……183
第145図　12号墳出土土師器、瓦質土器実測図
(田尻実測、松本製図)……184
第146図　12号墳玉類、鉄器実測図
(松本・田尻実測、松本製図)……185
第147図　陸橋部の方位(松本作成)……187
第148図　須恵器ヘラ記号集成図(松本作成)……189
第149図　馬を埋納した古墳(松本製図)……191
第150図　上の原遺跡弥生土器編年表(野田作成)……折り込み
第151図　須恵器(第II様式)編年(案)(松本作成)……204
第152図　塚原古墳群配置図
(小林久雄原図、三島格提供、松本製図)……211
第153図　塚原古墳群(縦貫道調査区)配置図
(『塚原』原図、松本製図)……211
第154図　丸山6号墳実測図(『塚原』原図、松本製図)……212
第155図　将軍塚古墳略測図
(小林久雄原図、三島格提供、松本製図)……213
第156図　将軍塚古墳の横穴式石室(小林久雄撮影)……213
第157図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図
(松本・清田・田尻実測、松本製図)……214
第158図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図
(松本・清田・田尻実測、松本製図)……215
第159図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図
(松本・田尻実測、松本製図)……216
第160図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図
(松本実測・製図)……217

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……9～11
第２表　縄文土器様式構造表……112
第３表　石器一覧表……127
第４表　出土石器点数の変化……128
第５表　石器石材一覧表……129
第６表　弥生土器様式構造表……135
第７表　古墳一覧表……186
第８表　馬の埋納土壙一覧表……192
第９表　馬歯・馬骨出土古墳一覧表……192
第10表　古墳の推定年代……193
第11表　縄文土器群の変遷……196
第12表　「黒髪式土器論」年譜略表……199
第13表　弥生時代住居址の形態と規模……207
第14表　弥生時代住居址の時期……209

図　版　目　次

図版１　上の原遺跡空中写真
図版２　上の原遺跡遠景
図版３　上の原遺跡空中写真
図版４　集石遺構、上の原13号住居址
図版５　上の原24・32号住居址
図版６　上の原63・57号住居址
図版７　上の原30号住居址
図版８　上の原36・60号住居址
図版９　上の原68・66・61号住居址
図版10　藤山１号住居址、藤山１・２号甕棺
図版11　弥生土器（24号住居址出土土器）
図版12　弥生土器（30・32・57号住居址出土土器）
図版13　弥生土器（60・61・66号住居址出土土器）
図版14　弥生土器（66・68・102号住居址出土土器、藤山１・２号甕棺）
図版15　縄文土器・大陸系石器（24・32号住居址）
図版16　縄文・弥生時代の遺構と遺物（55年度調査区）
図版17　１号墳
図版18　１号墳
図版19　２号墳
図版20　３号墳
図版21　３号墳
図版22　４号墳
図版23　５・６号墳
図版24　６号墳
図版25　６号墳
図版26　７号墳
図版27　９～11号墳
図版28　11・12号墳
図版29　12号墳
図版30　12号墳
図版31　１号墳出土遺物
図版32　１号墳出土遺物
図版33　１・２号墳出土遺物
図版34　２・３号墳出土遺物
図版35　３号墳出土遺物
図版36　３号墳出土遺物
図版37　３・４号墳出土遺物
図版38　６号墳出土遺物
図版39　６・７号墳出土遺物
図版40　９・11・12号墳出土遺物
図版41　12号墳出土遺物
図版42　12号墳出土遺物
図版43　12号墳出土遺物
図版44　12号墳出土遺物
図版45　12号墳出土遺物

第Ⅰ章　調査の契機と調査概要

第１節　調査の契機と経過概要

昭和52年７月、域南町教育委員会から、国史跡・塚原古墳群の東側に隣接する城南町大字塚原字上の原・破田のほぼ全域、大字藤山字東原の一部の約15haについて圃場整備の計画があるので、文化財の有無、調査について照会があった。これに対して、現地の東南部の一角に黒木塚遺跡という周知の遺跡が含まれており、圃場整備を実施する場合には調査が必要である旨回答がなされた。

同年10月、城南町企画課・県耕地一課・文化課で協議が行われた。文化課から調査は最低２年、調査経費もかなり多額になることを説明したが、城南町から、計画地区と塚原古墳群国指定地区の地権者がほとんど同一であり、地元としては是非ともほ場整備を実施したいという強い意向が伝えられた。その他、調査を実施する場合の費用負担、休耕補償の問題等が協議された。

同年12月、再度上記の三者協議が行われ、文化課に対して再度調査実施についての強い要請があった。

これらの協議を通じて、塚原古墳群指定地との関係もあり、53・54年度に調査を実施する方針が決定された。

53年度調査は、国庫補助事業として53年10月に着手し、54年３月までの間、施工予定地区約15haの全域試掘と藤山地区、上の原地区の一部の発掘調査を行った。試掘の結果、遺跡の範囲は約５haに及ぶものと推定され、53年度の発掘では約30基の住居址等が検出された。調査費は7,000,000円(国庫補助)。

引続いて、54年４月から54年度調査が開始された。当初予算は8,000,000円(国庫補助）の予定であったが調査量の増大により国庫補助分を2,000,000円増額し、さらに農政部局から約1,000,000円の負担があり、総経費は約11,000,000円となった。55年３月までの間に、上の原地区について発掘を行い、縄文時代の集石遺構、弥生時代・古墳時代の住居址（約90基）等を調査した。さらに、54年度調査区の北側部分約 1.2haの表土剥ぎ、遺構確認が実施された。

54年９月頃から一時期、調査の進展・終了時期等について地元・農政部局と齟齬を生じた。これらの問題を解決するため、55年３月中旬～４月中旬、城南町企画課・県耕地一課・県宇城事務所耕地一課・文化課による現地視察、調査工程等についての協議が行われた。

54年度調査終了時点において、未調査部分は約2.4haを残していた。その中で、55年２月に表土剥ぎを行った約1.2haの範囲に約140基の住居址が確認され、さらに表土剥ぎ未了部分の約1.2haについてもほぼ同数の遺構数が予想された。文化課としては、残りの調査面積（約2.4ha)、推定される遺構数（住居址270～280基）からみて単年度調査は困難であることを主張したが、一連の流れの中で、最終的には55年度中に現地調査を完了することで了解点に達した。

55年度の調査は55年５月に着手し、調査員常時10名、経費48,000,000円（国庫補助14,000,000円、農政部局負担34,000,000円）を投入する大規模調査となった。調査の進展に伴い、調査面積は約３haに拡大し、住居址数は約350基を数えた。さらに、53年度の試掘では確認されていなかった古墳も11基検出された。以前からのいきさつにより、調査期間の延長は望むべくもなく、調査量の増大は調査員への負担過重、調査内容の質的転換によってかろうじて相殺され、56年３月31日をもってすべての現地調査を完了した。

56年度以降は、現地の補足調査と資料の整理作業を行い、報告書作成を目途しているが、資料が膨大なため全資料の消化には至っていない。

（松本健郎）

第2節　調 査 の 組 織

調査は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

1．53年度調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査総括　合志太助（文化課長）　田中　繁（文化課長補佐）
隈　昭志（文化課文化財調査係長）

調査総務　望野正雄（文化課管理係長）　石原昭宏（文化課主事）

調査指導　乙益重隆（国学院大学教授）　岡崎　敬（九州大学教授）
白木原和美（熊本大学教授）　西谷　正（九州大学助教授）
三島　格（前福岡市立歴史資料館長）　小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹）

調 査 員　野田拓治（主査・文化課学芸員）
広瀬正照・下村智史・高野信子（文化課嘱託）

調査協力　城南町役場　城南町教育委員会　県農政部耕地第一課　県宇城事務所耕地第一課　城南町土地改良組合
（野田拓治）

2．54年度調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査総括　岩崎辰喜（文化課長）　真弓袈裟勝（文化課長補佐）
田辺宗弘（文化課長補佐）　隈　昭志（文化財調査係長）

調査総務　望野正雄（文化課管理係長）　石原昭宏（文化課主事）

調査指導　乙益重隆（国学院大学教授）　岡崎　敬（九州大学教授）
白木原和美（熊本大学教授）　西谷　正（九州大学助教授）
甲元真之（熊本大学助教授）　小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹）
置田雅昭（天理大学附属天理参考館学芸員）　三島　格（前福岡市立歴史資料館長）
田中　琢（奈良国立文化財研究所）　原口正三（嶋上高校教諭）

調 査 員　野田拓治（主査・文化課学芸員）
広瀬正照・高野信子（文化課嘱託）
上記の他に、緒方　勉（文化課参事）、杉村彰一・村井真輝・松本健郎・大田幸博・高谷和生（文化課技師）、島津義昭・高木正文・江本直（文化課学芸員）、田添夏喜・安達武敏・勢田広行（文化課嘱託）の応援を受けた。

調査協力　城南町教育委員会　城南町役場　県農政部耕地第一課　県宇城事務所耕地第一課　城南町土地改良組合　村端常春（塚原区長）　平山修一・高木恭二・木下洋介（宇土市教育委員会）　豊崎晃一（城南町教育委員会）　清田純一（別府大学）　池田栄史・森山栄一・速水信也・古庄浩明（国学院大学）　松尾法博・古城史雄（熊本大学）　吉田好範
（野田）

3．55年度調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査総括　岩崎辰喜(文化課長)　田辺宗弘(文化課長補佐)
隈　昭志(文化課文化財調査係長)

調査総務　大塚正信(文化課経理係長)　松崎厚生(文化課参事)
矢野みゆき(文化課主事)

調査指導　乙益重隆(国学院大学教授)　岡崎　敬(九州大学教授)
白木原和美(熊本大学教授)　三島　格(前福岡市立歴史資料館長)
小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹)　西谷　正(九州大学助教授)
甲元真之(熊本大学助教授)

調 査 員　松本健郎(主査・文化課技師)　村井真輝(文化課技師)　高木正文・野田拓治（文化課学芸員）　勢田広行・広瀬正照・清田純一・古森政次・森山栄一・浦田信智・高野信子（文化課嘱託）　吉田好範(文化課臨時調査員)
上記の長期担当者の他、緒方勉(文化課参事)、平岡勝昭・橋本康夫・高谷和生(文化課技師)、江本直(文化課学芸員）が実測作業等を援助した。

調査協力　県農政部耕地第一課　県宇城事務所耕地第一課　城南町役場　城南町教育委員会　城南町土地改良組合　甲佐高校郷土研究部　徳本　明（城南町文化財保護委員）　村端常春（塚原区長）　武末純一（北九州市立歴史博物館）　平山修一・高木恭二・木下洋介（宇土市教育委員会）　豊崎晃一（城南町教育委員会）　池田栄史（国学院大学大学院）

（松本）

4．56年度調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査総括　岩崎辰喜(文化課長)　田辺宗弘(文化課長補佐)
林田茂一(文化課長補佐)　隈　昭志(文化課文化財調査係長)

調査総務　大塚正信(文化課経理係長)　松崎厚生(文化課参事)
谷　喜美子(文化課主事)

調査指導　西谷　正(九州大学助教授)　武末純一(北九州市立歴史博物館)
徳本　明(城南町文化財保護委員)

調 査 員　松本健郎(主査･文化課技師)　野田拓治(文化課学芸員)
広瀬正照(文化課嘱託)　田尻悦子(文化課臨時調査員)

調査協力　県農政部耕地第一課　県宇城事務所耕地第一課　城南町教育委員会

（松本）

5．57年度調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査総括　岩崎辰喜(文化課長)　林田茂一(文化課長補佐)

	隈　昭志（文化課文化財調査係長）	
調査総務	大塚正信（文化課経理係長）	松崎厚生（文化課参事）
	谷喜美子（文化課主事）	
専門調査員	高橋俊正（熊本大学教授）	大迫靖雄（熊本大学助教授）
	西中川　駿（鹿児島大学助教授）	
調 査 員	松本健郎（主査・文化課技師）	野田拓治（文化課学芸員）
	清田純一・西住欣一郎・田尻悦子（文化課嘱託）	
調査協力者	県農政部耕地第一課　県宇城事務所耕地第一課　城南町教育委員会　徳本　明（城南町文化財保護委員）　豊崎晃一（城南町教育委員会）	

（松本）

第３節　成果の概要と本報告書の構成

53年度から55年度にわたる現地調査では約6.8haを発掘し、旧石器から近世までの遺構・遺物が検出された。

旧石器時代に属するものは、54年度調査で数点の旧石器（ナイフ型石器・三稜ポイントなど）が出土したが、本来の包含状態での検出ではない。

縄文時代の土器・石器は各年度・各地区から出土し、その数もかなりの量にのぼる。時期的には早期から晩期へと連続しているが、早期と晩期の土器が多い。遺構としては押型文土器を伴う集石遺構、性格不明の土壙が検出された。

弥生時代の遺構・遺物は数少ないが、住居址と甕棺が出土した。住居址は13基であるが、住居址からの出土遺物は当該期の標準資料となるべきものである。遺構に伴わない弥生土器も各区から出土しているが、きわめて散在的で、量も少ない。

上の原遺跡の主体を成すのは４世紀後半～７世紀の住居址群で、その総数は454基に達する。住居跡の大半は５世紀代に含まれ、塚原古墳群と併行する大集落である。住居址に伴う土器の量は莫大なもので、その他鉄製品、玉類などが出土している。集落の北端には11基の埋没した円墳が検出され、塚原古墳群の四至を限る重要な資料となった。

歴史時代の遺構・遺物は少ないが、周溝墳墓・土壙墓・掘立柱建物跡・道路状遺構などが検出され、古代～中世の須恵器・土師器・布目瓦・青磁・白磁・須恵質土器・銅製品などが出土している。

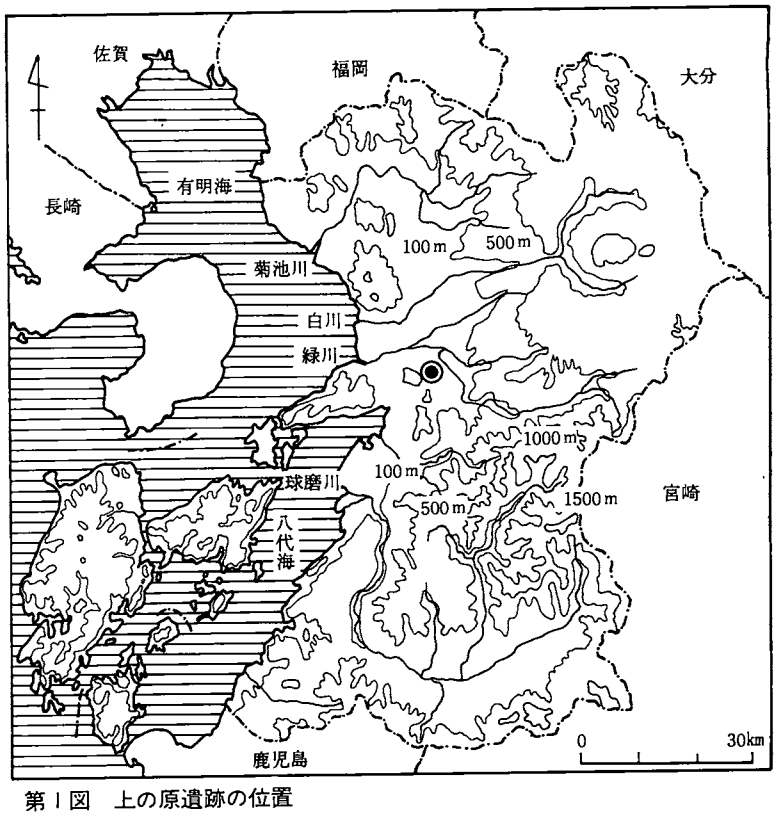
台地の開発に伴うと考えられる遺構に、多くの溝がある。調査区のいたる所に縦横に大小の溝が走り、土地境や畦畔に沿うものが多い。溝に伴う遺物はきわめて少ないが、大部分は近世以降の所産である。

以上のように、上の原遺跡は各時代にわたる各種の遺構・遺物を含む複合遺跡であるが、実測図等の資料、出土遺物の量がきわめて多く、その整理作業は完了していない。これらの全てを同時に出版するのも無理があるので、２～３冊に分冊して報告する計画である。本報告書では、53～55年度調査を通じて、旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物、古墳について調査成果を報告する。遺跡の主体を占める４～７世紀の集落、歴史時代の遺構と遺物については、資料の整理を待って報告する予定である。（松本）

第II章　遺跡の位置と環境

第１節　上の原遺跡・塚原古墳群(上の原支群)の位置（第１図）

上の原遺跡は熊本県下益城郡城南町大字塚原字上の原を中心として、藤山字東原の一部にかけて所在する。遺跡の大部分を占める字名をとって上の原遺跡と命名した。調査区の北端に検出された古墳は塚原古墳群の一部であるので、古墳については塚原古墳群（上の原支群）と呼び、各古墳は上の原1～12号墳（但し、8号墳は欠番）と呼ぶこととした。調査区の北端の約１haについては住居址群と古墳群とが混在しているので、同一地域について住居址群を上の原遺跡、古墳群を塚原古墳群（上の原支群）と呼び分けている。



第１図　上の原遺跡の位置

上の原遺跡の位置する下益城郡城南町は熊本平野の東南端に位置し、熊本市街からは直線距離にして約10kmの距離にある。熊本平野は白川・緑川の二大水系を中心として形成された県内最大の沃野で、九州でも筑後平野に次ぐ大平野である。熊本平野の西側は有明海に面し、北・東・南側は台地・丘陵・小山塊によって画され、その境界付近には各時代の遺跡が豊富である。

熊本平野には、白川・緑川以外にも中小の河川が流入しているが、平野の南縁部を緑川の一支流である浜戸川が東西に流れている。

熊本平野の東南隅より浜戸川沿いに遡ると、北側に舞の原台地、南側に上の原遺跡の立地する塚原台地が東西に延びている。城南町の中心地である隈庄は、舞の原台地の南西裾部に開けている。

塚原台地は南北最大幅約500ｍ、東西の長さ約2.3kmの台地であるが、対岸の舞の原台地ほどの広大さはない。

塚原台地のほぼ中央部を九州縦貫自動車道（高速道路）が南北に走り、塚原台地の下をトンネルで通過している。この塚原トンネルの直上、およびその東西の一帯が塚原古墳群で、塚原台地の中央部から西端部にかけて古墳が分布している。

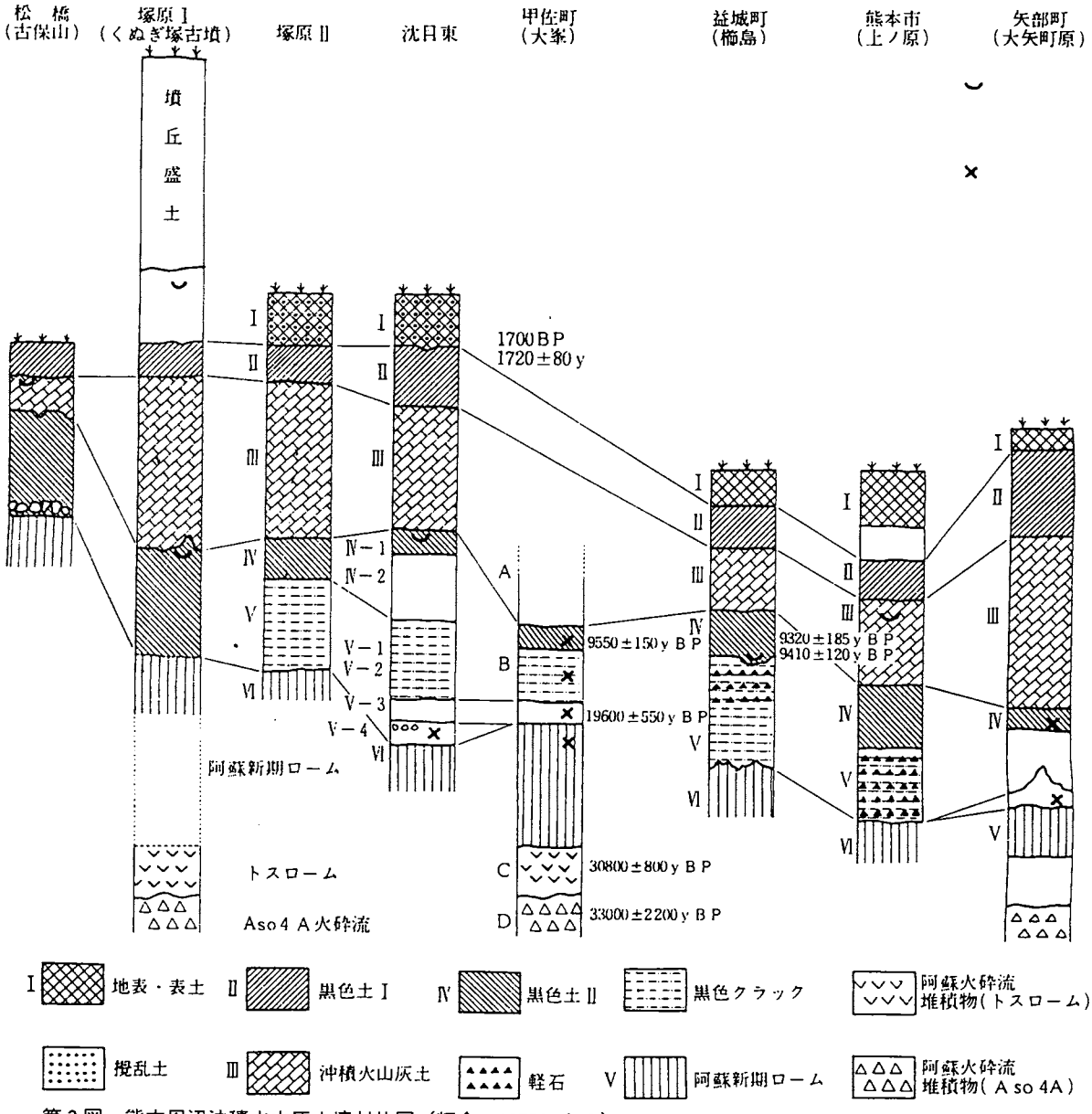
上の原遺跡は塚原古墳群の東南に隣接し、その接触点においては住居址と古墳とが混在していることは前述のとおりである。（松本）

第２節　上の原遺跡周辺の地形と地質（第２・３図）

塚原台地は火山灰に厚く被われた洪積台地で、台地頂部の標高は30～40ｍ前後を測る中位段丘である。台地の北側は比較的緩やかに浜戸川の沖積低地へと続き、この北斜面から平野部の微高地にかけて現在の集落が占地している。浜戸川による沖積平野は幅１km前後と狭く、塚原台地の対岸には広大な舞の原台地が開けている。

塚原台地は厚い阿蘇火砕流堆積物に被われているが、旧地形を反映した微起状が多い。起状の低地は集水により浸食され易く、樹枝状開析が進んで複雑な地勢を呈している。ただ、塚原古墳群から上の原遺跡の一帯にかけての、塚原台地の西部～中央部は比較的平担な畑地であったが、台地の周縁部、とくに南・東側は複雑な起状が多い。

台地の西側と南側は浜戸川の小支流である滑（なめり）川によって画されているが、とくに南側には大小の開析谷が複雑に発達し、所によっては段丘崖を成している。この段丘崖の各所に阿蘇溶結凝灰岩の露頭がみられ、これらの露頭に横穴が造られている。



第３図　熊本周辺沖積火山灰土壌対比図（籾倉　1975による）

台地の西側は滑川を隔てて、標高314.4mの雁回山を頂点とする木原山塊へと連なり、熊本平野の南縁となっている。台地の南側は松橋町方面の低山地や丘陵に連なっている。これらの後背山地・丘陵は中生層からなっている。

塚原台地の地質については、塚原古墳群における地質調査結果が公表（第3図）されているが、隣接する上の原遺跡でも変化は認められない。調査地の基準層序は下記のとおりである。

Ⅰ層　表土層で、厚さ20～40cm前後の所が多い。調査地の大半は畑地であったので、耕作土に当る場合が多い。この台地一帯は以前ゴボウの栽培が盛んで、溝状の深掘りが多い。

Ⅱ層　黒色火山灰土で、弥生時代以降の包含層に当るが、削平や耕作などによって総じて薄い。その現像は台地頂部に著しく、Ⅱ層が欠落する部分もみられた。

Ⅲ層　黄褐色火山灰土で、大半の遺構はこの上面で確認した。弥生・古墳期以降の遺構は本来Ⅱ層が切り込み面に当るが、遺構の覆土と色調が類似していることから確認が困難で、Ⅱ層下面～Ⅲ層上面までを重機によって排土した。Ⅲ層中には所謂赤ホヤ火山灰を含み、その色調は明黄褐色で粘性に欠けている。

Ⅳ層　黒褐色土で、色調はⅡ層に類似している所もあるが、Ⅱ層に比べて粘性に富んでいる。

Ⅴ層　黒褐色～暗褐色土で、Ⅳ層との変化面は凹凸が多い。長石などが肉眼でも観察され、固化が著しくニガ土と呼ばれるものである。

Ⅵ層　黄褐色の新期ローム層で、旧石器の包含層に当る。

Ⅶ層　調査区北端の切通し面の観察で、Ⅵ層の下部に赤褐色～赤黄褐色のトスロームが観察された。

これらの地層には起状があり、地点によって厚・薄の差があり、局部的には欠落することもある。（松本）

第3節　歴史的環境（第4図）

上の原遺跡周辺には、隣接する塚原古墳群をはじめとして、先史時代から歴史時代におよぶ数々の遺跡が豊富である。それらは、(1)塚原台地縁辺部、(2)舞の原台地縁辺部、(3)吉野山山麓部に集中し、一部(4)永・丹生宮・赤見集落等の徴高地においてみられる。又、緑川以北では、秋只台地・北甘木丘陵、平野部では、御幸木部などに遺跡の集中がみられる。

これら遺跡の分布には浜戸川、緑川両河川の影響が大きいことはいうまでもないが、それぞれの地域において遺跡の分布状況、内容を異にする。したがってここでは、(1)～(4)の地域ごとにその特徴を述べる。

(1)　地域の概観

(1)地域は、塚原を中心に阿高・尾窪・藤山集落及び鰐瀬集落の一部を含む地域をさす。この地域には、阿高、御領の両貝塚、塚原古墳群、上の原遺跡等が含まれ、最も濃密な分布を示す地域である。さらに最も古く開発された地域でもあり、上の原遺跡からは先土器時代遺物も出土している。同地域は塚原古墳群[註1]、或いは数々の横穴群に象徴されるように古墳時代にその隆盛をむかえ、以後衰退する地域である。

▲ 縄文時代貝塚　◌ 古墳群　⊕ 寺院址

▲ 弥生時代貝塚　■ 集落址　◎ 中世城

⊖ 弥生時代甕棺　□ 散布地　⊥ 石造物

● 円　墳　▽ 蔵骨器(火葬墓)

前方後円墳　∩ 窯　跡

横穴墓　⬢ 官衛跡

第４図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡地名表

遺跡番号	所在地	指定区分	種別	名称	備考
1	嘉島町大字井寺字富屋敷	国	古墳	井寺古墳	装飾墳(幾何学文) 横穴式石室・直刀
2	大字宮の本字西原・西光寺		甕棺墓 箱式石棺	宮の本遺跡	弥生甕棺・石庖丁 箱式石棺
3	大字下天嘉字カキワラ		貝塚	カキワラ貝塚	縄文前・後期土器
4	大字北甘木字剣原		甕棺墓	剣原遺跡	甕棺
5	大字北甘木字塔の本		古墳	御前塚古墳	
6	御船町大字豊秋字沼辺		城跡	城塚城跡	
7	大字豊秋字沼辺		古墳	御所塚古墳	円墳
8	大字豊秋字久保			久保遺跡	昭和48～49年県文化課発掘 縄文時代早・晩期土器・石器・弥生前期土器・須恵器・土師器とともに９基の石棺が検出された。
9	大字豊秋字久保		古墳	長塚古墳	帆立貝式前方後円墳、昭和48年久保遺跡調査のおり周溝を確認。須恵器
10	大字豊秋字秋		古墳	帰帆山古墳	円墳・横穴式石室 須恵器
11	大字小坂字下原			小坂大塚古墳	円墳・横穴式石室 鏡・甲冑・玉類他
12a	城南町大字坂野字山畑	町	古墳	鎧塚古墳	円墳
b	大字坂野字山畑	町	古墳	坂本古墳	円墳 装飾古墳
c	大字坂野字迫	町	古墳	迫甲古墳	円墳 箱式石棺
d	大字坂野字迫	町	古墳	迫乙古墳	円墳 箱式石棺
e	大字坂野字東天神原	町	古墳	東天神原甲古墳	円墳
f	大字坂野字東天神原	町	古墳	東天神原乙古墳	円墳 箱式石棺　**吉野山古墳群**
g	大字坂野字東天神原	町	古墳	東天神原丙古墳	箱式石棺
h	大字坂野字東天神原	町	古墳	大塚山西古墳	円墳 箱式石棺
i	大字坂野字東天神原	町	古墳	大塚山南古墳	円墳
j	大字坂野字東天神原	町	古墳	大塚山東古墳	円墳
k	大字坂野字東天神原	町	古墳	大塚山古墳	円墳
l	大字坂野字迫	町	古墳	吉野山古墳	舟形石棺
m	大字坂野字迫	町	古墳	寺ノ山古墳	箱式石棺 土師器
n	城南町大字坂野字山畑		古墳	葉山古墳	円墳 須恵器出土
o	大字築地字葉山	町	古墳	山畑古墳	箱式石棺
p	大字今吉野字丸山		古墳	保生園古墳	円墳
13	大字坂野字西天神原	町	横穴	西天神原横穴群	３基
14	大字坂野字西天神原			西天神原遺跡 益城軍団推定地	昭和54年県文化課調査。縄文・弥生・土師・須恵・瓦質土器出土・溝・住居址など
15	大字今吉野字東原		横穴	今村横穴群	須恵器片出土。20数基
16	大字今吉野字西原	町	貝塚	今村貝塚	縄文晩期土器出土
17	大字今吉野字西原		甕棺墓	今村原遺跡	弥生中期甕棺出土
18	大字永字屋敷		散布地	永遺跡	弥生中期終末期土器
19	大字丹生宮字西土取		散布地	丹生宮河底遺跡	弥生中期終末期土器
20	大字赤見字前田	町	散布地	赤見遺跡	昭和55年県文化課調査 弥生後期～中世（土器・陶磁器）
21	大字赤見字前田	町	寺院跡	金福寺跡	薬師堂・石造物あり 青磁出土
22	大字碇字山城・竹尾	町	散布地	碇遺跡	弥生後期終末期土器
23	大字宮地字宮本		甕棺墓	西福寺遺跡	
24	大字宮地字宮本	町	寺院跡	熊寺跡	須恵器（奈良～平安）
25	大字宮地字宮本	町	塔	七社宮の宝塔塔身	
26	大字宮地字宮本		古墳	熊寺古墳	円墳
27	大字宮地字祇園寺		寺院跡	祇園寺跡	隈牟田荘の初期荘寺・須恵器・石造物出土
28	大字宮地字宮本		横穴	宮本横穴群	数基
28'	大字宮地字一丁畑		散布地	一丁畑遺跡	弥生中期土器・石庖丁・石斧
29	大字宮地字囲	町	貝塚	囲貝塚	弥生後期土器・須恵器・石庖丁
30	大字隈庄字古城	町	城跡	隈庄城跡	瓦出土
31	大字隈庄字古城		古墳	城の鼻古墳群	箱式石棺
32	大字隅庄字古城	町	塔	隅庄城の多重塔礎石	１基は正平８年２月の銘あり
33	大字隅庄字古城		横穴	城の鼻横穴群	20数基

遺跡番号	所在地	指定区分	種別	名称	備考
34	城南町大字宮地字祇園寺	町	散布地	祇園寺遺跡	弥生中期土器・磨石剣・石庖丁
35	大字宮地字溝口	町	貝塚	中尾貝塚	弥生土器
36	大字宮地字居屋敷		寺院跡	能仁寺跡	文永2年創建、城南最古の禅寺
37	大字宮地字構口	町	散布地	構口遺跡	弥生中期土器 石庖丁
38	大字隈庄字上ノ山		甕棺墓	上ノ山遺跡	弥生中期甕棺
39	大字隈庄字安幕		散布地	安幕遺跡	弥生後期終末期土器
40	大字宮地字新御堂		散布地	新御堂遺跡(1)	縄文晩期
41	大字宮地字新御堂		散布地	新御堂遺跡(2)	弥生中期～後期土器・石庖丁、巴形銅器
42	大字下宮地字向権現	町	散布地	向権現遺跡	弥生後期土器
43	大字沈目字迎原・西原		散布地	迎原西・東遺跡	弥生土器 石庖丁
44	大字下宮地字居屋敷		古墳	下宮地古墳	
45	大字隈庄字一ノ町		古墳	一ノ町古墳	円墳
46	大字下宮地字萱	国	貝塚	黒橋貝塚	縄文中～後期
47	大字下宮地字三ツ石		古墳	三ツ石1号古墳	円墳
48	大字下宮地字三ツ石		古墳	三ツ石2号古墳	円墳
49	大字沈目字池頭・塚本		散布地	沈目遺跡	縄文早期(押型文・撚紋) 沈目式標式遺跡
50	大字沈目字奥野		横穴	沈目横穴	土製管玉、6基
51	大字沈目字奥野		集落跡	沈目・沈目奥野遺跡	集落跡（古墳・弥生） 縄文土器・弥生後期土器・土師器出土
52	大字沈目字立山		甕棺墓	沈目立山遺跡	昭和51年県文化課調査 弥生前期甕棺（壺棺） 縄文早・後期土器など出土
53	大字沈目字立山	県準	古墳	甚九郎山古墳	昭和33年小林久雄他によって調査。同55年沈目立山遺跡調査のおり周溝の一部を発掘。前方後円墳
54	大字陳内字狐塚	県準	古墳	狐塚古墳	前方後円墳 馬具・鉄鏃出土 昭和33年小林久雄他によって調査
55	大字陳内字狐塚		散布地	狐塚遺跡	弥生土器・土師器など出土
56	大字陳内字舞ノ原		国府	益城国府推定地	瓦・須恵器・土師器など出土
57	城南町大字陳内字近道原		散布地	近道原遺跡	弥生土器・土師器
58	大字陳内字錦川		横穴	天ノ平横穴群	63基
59	大字陳内字野口		散布地	野口遺跡	弥生土器・土師器出土
60	甲佐町大字中山字下道免		横穴	下道免横穴群	
61	城南町大字陳内字道上北前田		寺院跡	陳内廃寺	昭和32年小林久雄他によって調査。伽藍遺構・蔵司礎石・布目瓦・釘・青磁
62	大字陳内字道上		散布地	道上遺跡	弥生後期土器
63	大字陳内字本村	県準	窯跡	陳内窯跡	平瓦・軒平瓦・須恵器
64	大字陳内字城尾		城跡	陳内城跡	
65	大字鰐瀬字天神原		散布地	天神原遺跡	縄文・弥生土器出土
66	大字鰐瀬字北の畑		散布地	土鹿野遺跡	縄文晩期土器
67	大字鰐瀬字亀島		窯跡	東亀島瓦窯跡	布目瓦
68	大字鰐瀬字西境の松		窯跡	野田窯跡	須恵器
69	大字鰐瀬字宮の前		郡家？	益城郡家跡（大明神遺跡）	布目瓦
70	大字鰐瀬字宮の前		散布地	宮の前遺跡	縄文土器・石斧 石庖丁
71	大字鰐瀬字南原		散布地	南原遺跡	縄文早・後・晩期土器
72	大字鰐瀬字西南原		散布地	鰐瀬遺跡	縄文
73	大字鰐瀬字西萱場		散布地	西萱場遺跡	縄文晩期土器
74	大字鰐瀬字志道寺		散布地	志道寺遺跡	縄文晩期土器
75	大字鰐瀬字志道寺		散布地	志道寺跡	須恵器・土師器・青磁
76	大字鰐瀬字山ノ神		火葬墓	山ノ神火葬墓	蔵骨器
77	大字鰐瀬字権現尾		古墳	権現尾古墳	円墳
78	大字藤山字三石野		散布地	三石野遺跡	縄文晩期土器
79	大字藤山字上柿田		散布地	星野屋敷遺跡	縄文早・晩期土器
80	大字藤山字柿田		散布地	柿田遺跡	縄文晩期土器 十字型石器
81	大字藤山字六地蔵		古墳	六地蔵2号墳	円墳
82	大字藤山字六地蔵		古墳	六地蔵1号墳	円墳

遺跡番号	所在地	指定区分	種別	名称	備考
83	城南町大字藤山字南植野		横穴	メリ穴横穴群	6基
84	大字藤山字植野		横穴	植野横穴群	須恵器・15基
85	大字藤山字鶴		横穴	鶴横穴群	須恵器・20基
86	大字藤山字古川		横穴	ハシゴダン横穴群	須恵器・22基
87	大字藤山字長原	町	横穴	長原横穴群	5基
88	大字東阿高字一尾	町	横穴	一尾横穴群	須恵器
89	大字東阿高字一位田	町	横穴	ウシクビ横穴群	須恵器
90	大字東阿高字一位田	町	横穴	一位田横穴群	須恵器出土・16基
91	大字東阿高字城山		城跡	阿高城跡	
92	大字東阿高字城山		火葬墓	一の字山遺跡	蔵骨器
93	大字東阿高字城山		城跡	阿高城跡	
94	大字阿高字影熊・山口	町	横穴	阿弥陀尾横穴群	須恵器・亀甲・人骨
95	大字阿高字影熊		古墳	影熊古墳	円墳
96	大字阿高字西原		甕棺墓	西原遺跡	弥生甕棺
97	大字阿高字城山		火葬墓	阿高火葬墓	骨製笄・蔵骨器
98	大字東阿高字八ツ尾	町	横穴	御領横穴群	須恵器・亀甲・人骨
99	大字東阿高字八ツ尾	国	貝塚	御領貝塚	昭和26年小林久雄・坪井清足他によって調査。縄文後期、早・前・中・後・晩期土器出土、御領式標式遺跡。
100	大字阿高字東原	県	貝塚	阿高貝塚	縄文中・後期土器 骨角器・阿高式標式遺跡 昭和52年城南町調査
101	大字東阿高字千々屋寺	町	横穴	アンドン坂横穴群	亀甲
102	大字東阿高字南飛の尾	町	横穴	飛の尾横穴群	須恵器
103	大字東阿高字竹部原		散布地	竹部遺跡	縄文後・晩期土器
104	大字東阿高字岸		古墳	岸2号古墳	円墳
105	大字東阿高字岸		古墳	岸1号古墳	円墳・箱式石棺 鉄剣・貝輪
106	大字東阿高字岸		古墳	岸3号古墳	円墳
107	城南町大字塚原字敷田		貝塚	敷田貝塚	縄文早・晩期土器
108	大字塚原字松手		散布地	松手遺跡	縄文後期土器
109	大字塚原字破田		甕棺墓	権現社遺跡	弥生式甕棺
110	大字塚原字丸山		火葬墓	火葬場裏古墳北遺跡	蔵骨器
111	大字塚原字丸尾・丸山・北原	国	古墳 散布地	塚原遺跡	昭和47年～49年九州縦貫道建設に伴い県文化課が調査。103基の方形周溝基、円墳等が検出された他縄文・弥生時代の各種遺物も多量に出土した。なお現在墳丘が残存する古墳は、8基のみである。県文化財報告第16集「塚原」
111a	大字塚原字丸尾	国	古墳	りゅうがん塚古墳	円墳
b	大字塚原字丸山	国	古墳	くぬぎ塚古墳	円墳・横穴式石室
c	大字塚原字丸山	国	古墳	三段塚古墳	円墳
d	大字塚原字丸山	国	古墳	丸山2号墳	円墳・箱式石棺
e	大字塚原字丸山	国	古墳	琵琶塚古墳	前方後円墳、円筒埴輪
f	大字塚原字北原	国	古墳	花見塚古墳	前方後円墳　鉄剣、鉄鏃 金環、玉類
g	大字塚原字北原	国	古墳	石ノ室古墳	円墳　円筒状石製品 横口式家形石棺
112	大字塚原字上の原		集落跡 古墳	**上の原遺跡**	昭和53～55年にかけて県文化課が調査。474基の住居址の他土壙・竪穴・カメ棺等を検出。又、古墳11基も検出された。他に縄文時代から近世におよぶ各種遺物が出土した。
113	大字尾窪字黒木塚		古墳	黒木塚遺跡	
114	富合町大字木原字明熊		古墳	木原古墳	横穴式石室
115	城南町大字出水字居屋敷		散布地	山の上遺跡	縄文早・晩期土器 弥生土器・土師器・須恵器
116	大字出水字居屋敷		横穴	出水居屋敷横穴群	須恵器・数基
117	大字出水字西窪		横穴	西窪横穴群	須恵器、10基
118	大字高	町	石塔	高の石造宝塔	正応4年の銘あり
119	大字蜷瀬字免の本		古墳	鏡ノ巣古墳	円墳

(2)地域の概観

(2)地域は、今村、宮地、舞原、沈目、陳内、鰐瀬の各集落を含む地域をさす。この地域では、沈目集落を中心として東と西の地域で若干の差異がみられる。東地域は、沈目遺跡に代表されるごとく、押型文土器からの遺跡がみられ、弥生時代から古墳時代へと遺跡は断続的に維持されるが、古墳時代中期までは、(1)地域のごとく華やかではない。この地域が発展をみせるのは、古墳時代後期からのことである。それは、甚九郎山、孤塚両前方後円墳によって象徴される。歴史時代にいたり、同地域は隆盛を極める。陳内廃寺や益城郡家等の存在は端的にそれを表わしている。さらに、同地に国府の存在も推定[註2]されている。このことを考慮すれば、歴史時代において同地域は、肥後の一大拠点であったことも推測される。

西北域の遺跡は、新御堂遺跡(1)にみられるように、縄文時代晩期に出現する。以後断絶し、弥生時代中期から後期にいたって、一丁畑遺跡、囲貝塚等に代表されるように多くの遺跡が集中する。古墳時代以降顕著な発展をみせないが、遺跡は断続的に維持される。中世にいたり、再び隆盛をみる。36坊を備えたと伝えられる久満寺[註3]、祇園寺の存在はそれを裏付けるものである。

(3)地域の概観

(3)地域は、吉野、坂本、築地、出水の各集落を含む地域である。この地域では、縄文・弥生時代の遺跡にとぼしい。僅かに西天神原遺跡等で出土[註4]をみるが、希薄である。(3)地域が隆盛をみるのは古墳時代中期から後期にかけてであり、吉野山の山頂から山麓部にかけて5世紀から6世紀にかけての古墳が集中し、以後衰退する。今吉野西天神原は益城軍団の推定地とされているが[註5]、1979年の調査では礎石と思われる石材は確認したものの軍団そのものを裏付ける遺構は検出されていない[註6]。

(4)地域の概観

(4)地域は、碇・赤見・丹生宮・永集落を含む地域をさす。縄文遺跡は存在せず、弥生後期以降の遺跡が現在まで6ヶ所確認されている。1980年に調査された赤見前田遺跡[註7]では、弥生終末期から中世におよぶ広範囲の遺物が出土した。

(清田純一)

註

註1．野田拓治他『塚原』熊本県文化財調査報告第16集　1975

註2　松本雅明「益城国府考」『日本談義』179号　1958

註3　『隈庄合戦覚書』に記載あり。

註4　島津義昭他『益城郡衛』熊本県文化財調査報告第32集　1978

註5　松本雅明他『城南町史』1965

註6　島津義昭他『益城郡衛』熊本県文化財調査報告第32集　1978

註7　豊崎晃一他『赤見前田遺跡』熊本県文化財調査報告第53集　1981

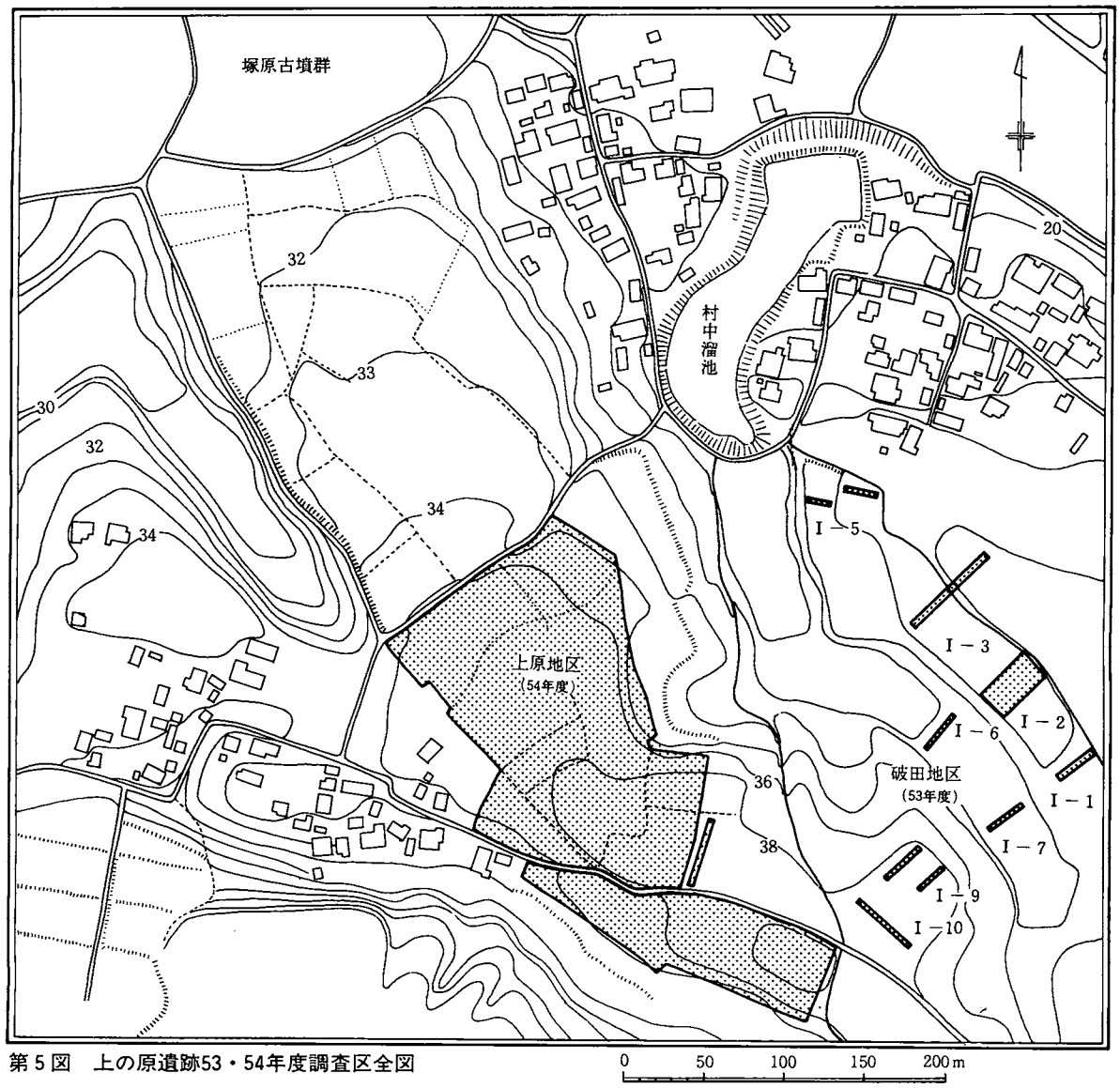
第Ⅲ章　53・54年度調査の成果

第１節　調査の概要

１．53年度調査

上の原遺跡の発掘調査区は、破田地区（塚原字破田）・藤山地区（藤山字東原）・上の原地区（塚原字上の原）から成るが、後述の「調査の経過」でその経緯を明らかにしたとおり、破田地区については試掘のみで本調査を行っていない。残る藤山・上の原地区については全面調査を実施し、このうち昭和53年度は藤山地区と上の原地区の一部の調査を行った。

まず藤山地区では、３地区1500㎡にわたって表土（耕作土層）の除去と遺構の検出作業を行ない、調査地区の北西部（藤山地区）に竪穴住居址１軒（弥生時代）と、西側約40ｍの地点（藤山地区）に小型甕棺２



第５図　上の原遺跡53・54年度調査区全図

基（弥生時代）を検出した。また竪穴住居址の西側一帯（藤山地区）には縄文早期土器を伴う集石が認められたが、耕作による破壊が著しく、遺構として確認するには至らなかった。また最南端の藤山Ⅲ区では、縄文土器（早期、晩期）の細片を検出したが何ら遺構は検出することが出来なかった。藤山Ⅰ区とⅡ区とに挟まれた地区は墓地で、墓標も散乱して無縁墓地化していたが、数ケ所に直径２～３ｍの墳丘(土まんじゅう)が認められた。墓地北側は土取りにより凹地となっていて、この土取りに際して箱式石棺が出土したと伝えられる。地元では通称「黒木塚」と呼んできた。その後同地区については圃場整備地区から除外することで決着したため、その所在については明らかにすることが出来なかった。（野田）

２．54年度調査

前年度の３月初めより、上の原地区（第Ⅱ工区）の一部の表土除去と遺構検出作業を実施していたが、54年度は４月当初より前年度に引き続き同作業を継続した。最終的に全体の半分の約3.8haについて発掘を完了したが、残る約4.0ｈａ分については55年度以降に調査を実施することとなった。

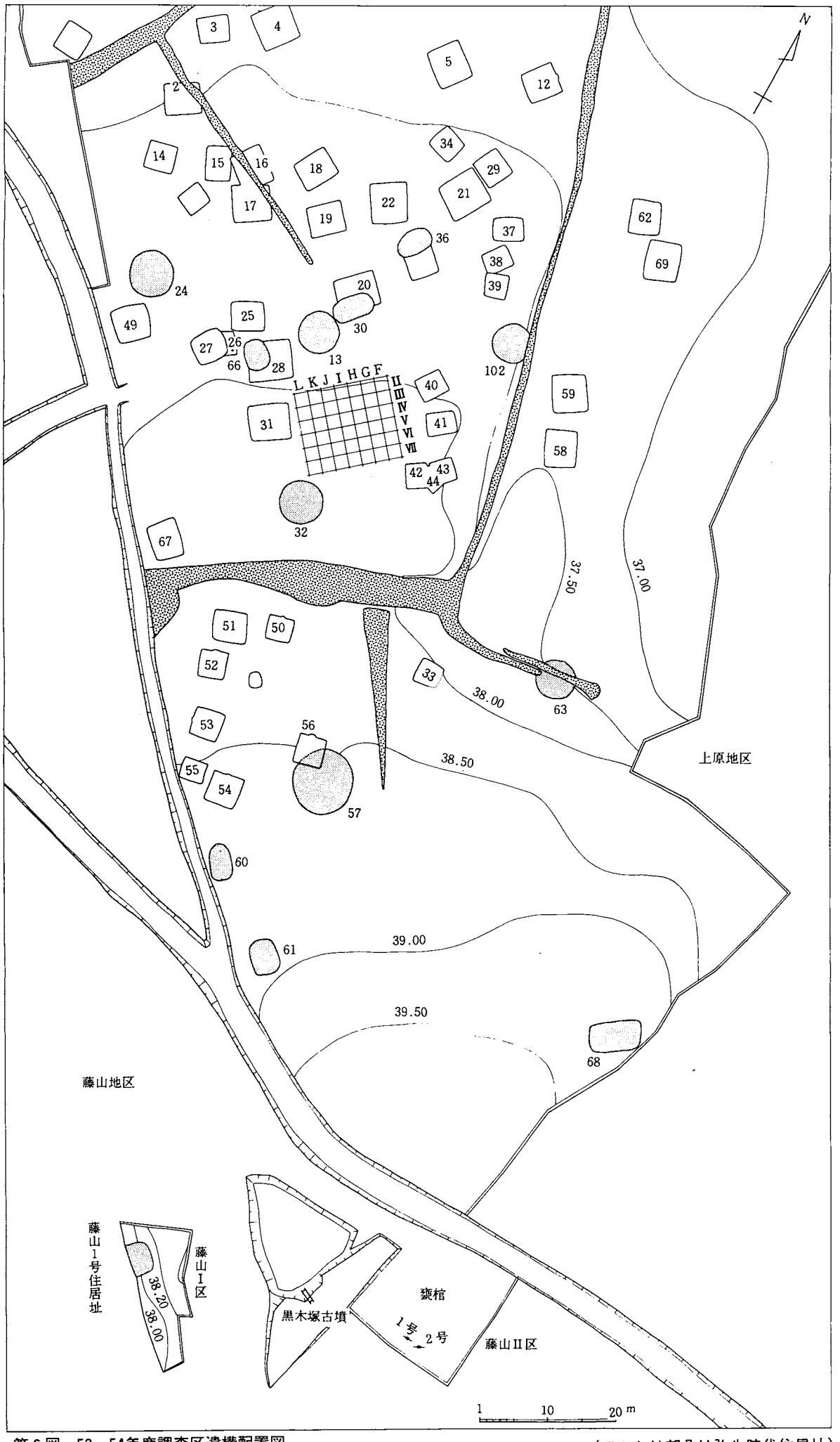
検出した遺構のうち、主体となるのは古墳時代特に５世紀代を中心とする竪穴住居址群で総数105軒に及んだ。これらの配置状態は第６図に示すとおりである。特に北側部分に濃密に分布しており、多くは５世紀代の住居址が中心となっている。また調査区に部分的に７世紀代の住居址群が重復し、調査区中央西側の一画にも６世紀代の竪穴が集中してみられた。一方弥生時代の竪穴は計12軒を検出した。これらの竪穴住居址の平面プランには、ほぼ正円形のものと長楕円形のものとの二者があり、前者は大型で後者はやや小規模なものが主体となっている。これらの住居址群の分布は調査区の南側の広い範囲に点在していて、その一部は前年度の藤山地区にまでおよんでいる。

以上各時代及び各時期の竪穴住居址は、それぞれ掘り込み面の深さに相違点がある。このことは重機を使用して、調査区を一律に削り取ったために、それぞれの住居地の掘り込みの深さについての比較には正確さに欠ける点も多いが、概して、弥生時代のものが深く、古墳時代のものも時間が下降するに従って、浅くなるといった傾向がうかがえる。たとえば７世紀以降のものでは、壁面のほとんどは失なわれ、床面の一部の痕跡を残すものがあり、重機によって表土除去したために、完全に失なわれた遺構も無かったとは言いがたい。この点は調査者自身の自戒を含めて、今後の警鐘としなければならない。

縄文時代では、調査区のほぼ中央部北寄りに集中して集石遺構を検出した。これらの遺構に伴った遺物は少なく、報文中に図示した縄文時代資料の多くは、弥生、古墳時代の竪穴住居址内に混入したもの、あるいは近世の溝状・道路状の遺構中に、さらに後世の撹乱により表土中に散乱したのである。またこれらの遺物の中には先土器時代遺物も含まれるが、これらについても目的的な調査によって検出したものではない。したがって縄文時代の遺構について確認出来たものは集石遺構のみである。

歴史時代の遺構については、掘立柱建物址を１棟分検出し、同時代の遺物もわずかに出土しているが、検出遺構が少ない為、これらの背景についての材料を提供するまでには至っていない。

なお本書では、先土器・縄文・弥生時代の各遺構、遺物について報告し、古墳時代以降のものについては、別途報告の予定である。（野田）



第6図　53・54年度調査区遺構配置図　（アミかけ部分は弥生時代住居址）

3．遺跡の層位

上の原遺跡の基本的層位は、Ⅰ層＝表土層（耕作土）、Ⅱ層＝黒色土、Ⅲ層＝黄褐色土層（沖積火山灰土）、Ⅳ層＝黒色土（黒ボク）、Ⅴ層＝ローム層（阿蘇新期ローム）からなる。まずⅡ層は、弥生～古墳時代遺物の包含層で、厚さは地点によって異なるものの概ね10～40cmの間である。Ⅱ層の下部には縄文時代後・晩期の遺物を含むが、Ⅱ層中をさらに分層することは困難である。Ⅲ層は縄文時代早期を中心にする包含層である。（厚さは20～30cm）。集石の多くはⅢ層中に認められⅣ層には達していない。Ⅳ層はいわゆるクロボクと呼ばれる土壌で、厚さ40cm前後である。Ⅳ層中には遺物の出土をみていない。おそらく無遺物層とみられる。

検出した遺構のうち、古墳時代以降の住居址では、Ⅱ層中より掘り込まれ、床面はⅣ層、深いものではⅤ層に達している。一方弥生時代の住居址も、同じくⅡ層中より掘り込まれるが床面はほとんどⅤ層に達していた。したがって特に古墳時代以降の住居址では、プランの検出をはじめ、床面、柱穴、壁面の確認とも困難を極めた。加えて無数の攪乱溝（ごぼう植付のためトレンチ）によっていたるところが壊されていたことも、発掘作業の上で大きな障害となった。

以上、上の原遺跡の土層の特色は、隣接する塚原古墳群における状況とほとんど変わることはなく、阿蘇火砕流堆積物を堆積原因とした中位段丘面に属し、遺構の集中する範囲は標高30～40ｍの間である。このうち古墳時代の住居密集地区は標高35～38ｍを限界としてこれより以下にあり、一方、弥生時代の住居址群は標高35～40ｍの間に集中していて、両者の分布範囲に微妙な差異が認められる。また縄文時代の遺構・遺物は標高30～40ｍの範囲内にまんべんなく分布している。（野田）

第２節　調査の経過

1．53年度調査

本遺跡の調査は、昭和53年４月に調査を開始することで準備を進めていたが、遺跡全体が畑地帯である為作物等の関係で、地権者全体の発掘承諾に手まどり、実際に調査員が現地に足を踏み入れたのは、秋10月の中頃であった。

昭和53年10月13日（金）～14日（土）、調査担当者（野田・広瀬・下村）３名で現地踏査を行い、城南町農林商工課（堀氏）とともに、圃場整備予定地区の確認作業を行った。なお、10月16日～20日は、同じく県営圃場整備事業に伴って調査も終盤を迎えていた鹿央町吉井原遺跡の調査応援の為、上の原遺跡の調査を一時中断した。

10月23日（月）、現地に調査事務所建設と発掘調査器材等の搬入を行なう。これ以降、先に現地踏査の結果をもとに、圃場整備地区内における調査面積の割り出し作業と調査期間等をさらに詳細に算出するための試掘を開始した。工事施行面積は約13haに及び、行政区分からみれば、塚原字上の原の大部分、同字破田の一部、及び藤山字上の原の一部、３地区からなっている。塚原字上の原地区に30ケ所、同字破田地区に４ケ所、藤山地区に５ケ所の計39ケ所にトレンチを設定し、同年11月１日まで作業を継続した。この結果、破田地区は10ケ所のトレンチとも、包含層は全く残存せず、調査地区から除外した。他の２地区については、ほぼ全面的に包含層及び随所に古墳時代の遺物を伴う遺構を検出した。これらの試掘結果をもとにして、調査スケジュールを立案した。同年10月４日、城南町役場農林商工課担当者・県宇城事務所耕地課・地元地権者

及び県教育庁文化課職員の四者による協議を城南地区土地改良事務所で行った。この席上、試掘結果に基づき遺跡の性格・年代・範囲等について詳細に解説し、文化課としての所見を述べた。協議の結果、工事施工予定地を３つの工区に分け、まず第Ⅰ工区（破田地区）は除外し、藤山地区を第Ⅱ工区、上の原地区を第Ⅲ工区とした上で、53年度については、第Ⅱ工区および第Ⅲ工区の一部を調査し、第Ⅲ工区の残りを昭和54年度に実施することで、四者間での意見の一致をみた。

11月17日、藤山地区の調査を開始した。調査面積は約1500m²で、ほぼ全体の表土層（耕作土）をユンボで除去し、順次遺構の検出を継続した。この結果、縄文早期の集石遺構、弥生時代の竪穴住居址１軒、同じく弥生時代の小型甕棺２基を検出した。しかしこれらの遺構以外に遺構を検出することが出来なかった。また調査区北西部の墓地に、古く黒木塚と呼ばれる箱式石棺が出土したとの記録があり、頭初この部分の調査を主目的にしていたが、墓地全体を施行範囲から除外することになった。したがって、黒木塚が実在したとするなら、今も同地に埋れているはずである。その後、同地区の調査は12月末まで継続した。

昭和54年１月20日より、第Ⅲ工区の調査を開始した。第Ⅲ工区は全面積約３haに及び、巾約150ｍ長さ約230ｍで通称上原丘陵のほぼ全体に及んでいる。したがって調査地区のほぼ中央を南北に走る農道を境界として、まず農道の南側からユンボによる表土除去作業を開始した。以後、断続的に重機を使用しながら遺構の検出作業を継続し、同年３月末までの間に第Ⅲ工区南側6,500m²についての遺構のプラン検出作業を終えた。この結果遺構の数は、弥生時代、古墳時代の竪穴住居地の数は100軒以上に及び、他に縄文時代の集石遺構を検出した。なお竪穴住居地の数は、引きつづき昭和54年度の調査によって、新たに20基近くが追加されることになる。

また３月末までに、１号住居址から17号住居址までについての発掘・実測作業を終了した。（野田）

２．54年度調査

昭和54年４月16日、調査を再開する。引き続き18号以降、19号の順に発掘作業を継続する。以後残る調査区について順次遺構プランの検出作業と各住居址の発掘作業をくりかえし、最終的に古墳時代（５～６世紀）の住居址105軒、弥生時代（前期末～中期初頭）の竪穴13軒（藤山地区の１軒を含む）、小型の竪穴状の遺構２基、平安時代の掘立柱建物１棟、縄文時代の集石遺構、近世の道路状遺構、同溝状遺構など多種多様の遺構を検出した。

同年４月から翌昭和55年１月末まで、同作業を継続したが、54年度調査の終盤を迎えた２月上旬から文化課より８名の調査員の応援を得て、残り20軒の竪穴住居地の実測作業を急ピッチですすめた。２月23日（土）本年度分の発掘作業をすべて終了した。

一方、３月より、第Ⅲ工区北側について、機械により表土除去作業を開始した。約１ケ月間の作業であったが、53・54年度に実施した第Ⅲ工区南側に比べ、数倍の密度で竪穴住居址の発見がつづいた。（野田）

第３節　先土器・縄文時代の遺構と遺物

先土器及び縄文時代の遺物はかなりの数が出土したが、そのほとんどは、弥生時代、古墳時代の各住居群の覆土中、さらに近世の溝状遺構や極近年の耕作溝から検出したものである。その主たる原因は時間的制約のために、縄文時代以前の遺構にまで、調査の手をさしのべることが出来なかった諸般の事情によるもので

あることは明らかである。こうした中にあって、調査区中央部に、縄文式土器を伴う集石群を検出し調査出来たことは幸いであった。

1．集石遺構（第7図）

調査区中央部の13号・32号・102号の各弥生時代住居址に挟まれた地区に、集石群を発見した。特に密集地点を中心とした14×24mの範囲に2×2mのグリットを84個設定して掘り下げた。なおグリット名は北から南へⅠ～Ⅶ、東から西へA～Nとし、各グリットについては、たとえばⅠ－A区、Ⅶ－N区というような呼び方をしている。同地区の表土およびII層（黒色土）の一部は機械を使用して取り除いたが、すでにその作業の過程でII層の一部に礫が現われはじめていた。しかしこれらII層中の礫群は現位置を保っていたものではなく、図示した集石のすべてはIII層（黄褐色土）中に包含されたものである。III層の厚さは地点により多少異なるが、概ね30～40cmであり、礫群はIII層中にとどまり、IV層（ニガ土）には至っていない。礫群の分布範囲は東西14m、南北15mで、この中で特に礫が密集する部分について、それぞれ集石1～4と呼称した。これらのうち、集石遺構と呼べるものは2基で、他は単なる礫の集合であり、遺構としての認定は困難であるが、ここではすべて集石遺構と仮称しておきたい。

(1)集石遺構1（第8図）

東西、南北とも約1mの範囲内に、手のひら大から細片まで大小40個近くの礫からなり、すべて砂岩で角礫がほとんどを占めるが、うち数点は自然面を残すものも認められた。いずれも火を受けていて、無数の亀裂を生じたものが少なからずあった。集石の基底面はIII層下部にあたるが、明確な落ち込み等は検出できなかった。

(2)集石遺構2（第8図）

東西約1m、南北約1.3mの範囲内に大小100個近くの礫の集合からなっている。すべて砂岩で2点は自然面が残る円礫の一部で、他は角礫であった。概ね、どの礫にも火を受けた痕跡が明瞭であり、火を受けたために亀裂を生じ、ボロボロくずれる礫も少なくなかった。礫群はIII層中の上下30cmの厚さの中にあり、特に基底部近くのわずかなくぼみの中に、大小6個の礫が南北の方向に長さ約30cmにわたって連っており、石組み炉の一部と推定した。しかし石組みが接する地山面は火を受けた痕跡はなく、焼土なども検出することは出来なかった。

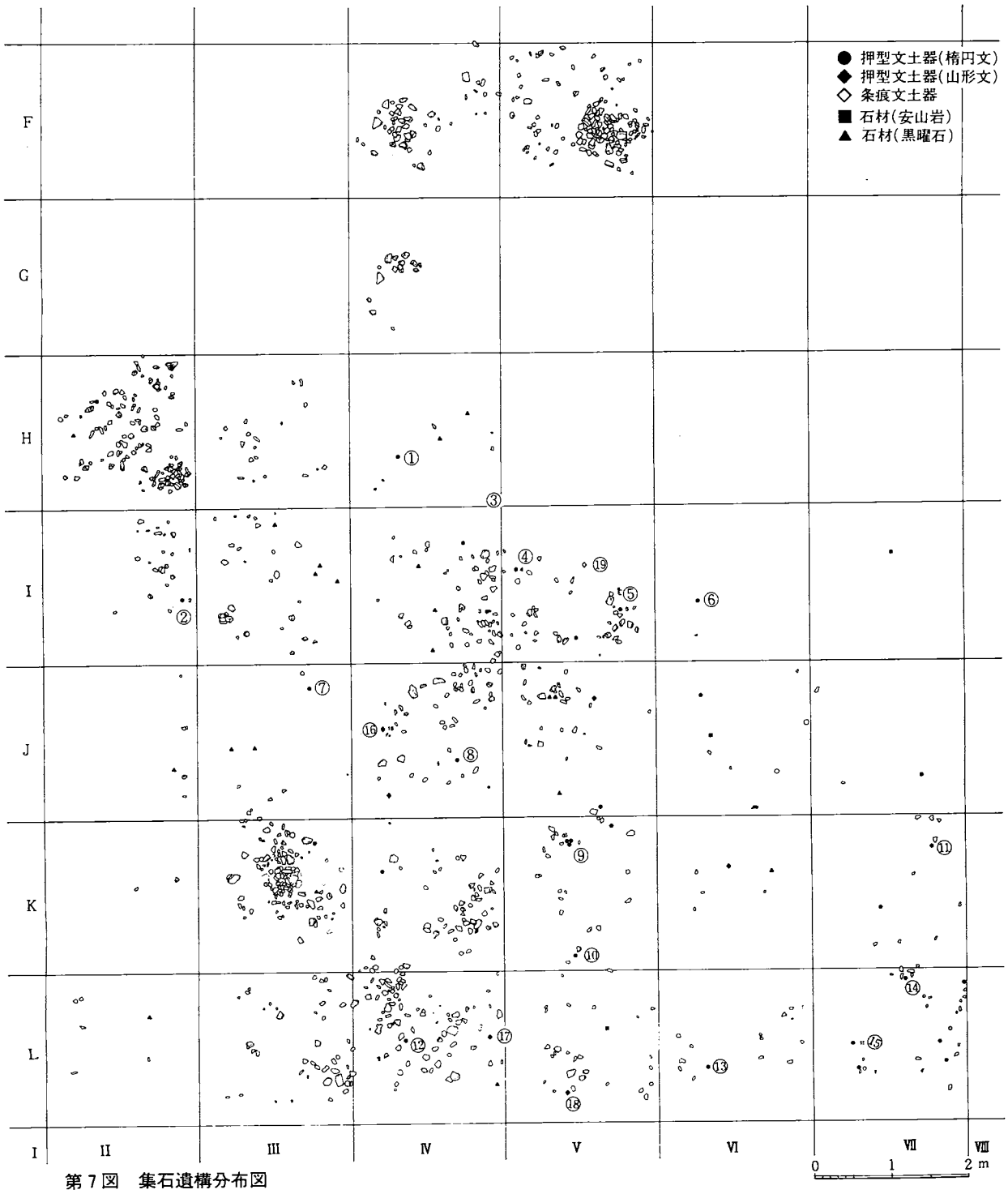
(3)集石遺構3（第8図）

H－II区の北側に、東西1.7m、南北約1.2mのやや広い範囲に散在する集石と、このすぐ南側に近接して東西約0.7m、西北0.6mの狭い範囲にやや密集した集石を検出した。後者を3－a、前者を3－bとした。3－aは約40個近くの大小の礫からなり、出土レベルもほぼ一定している。すべて砂岩角礫で、火を受けている。3－aから3－bにかけて、すなわち南から北にかけてはわずかに低く傾斜していて、3－bはおそらく3－aの集石が人為的かあるいは時間の経過の中で自然に移動し分散したものではないかと推定する。

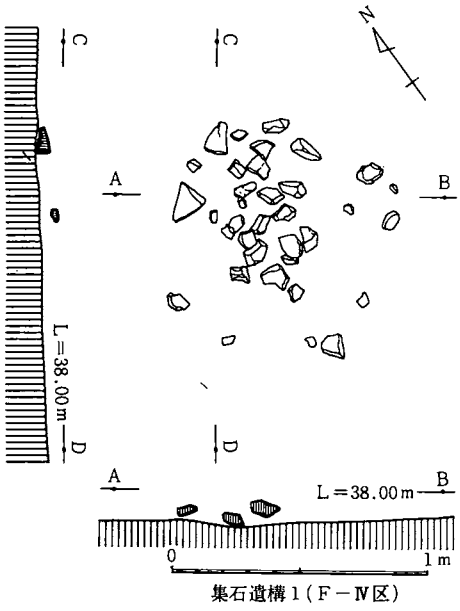
いずれにしても前述した集石１と類似するものであろう。

(4)集石遺構４（第８図）

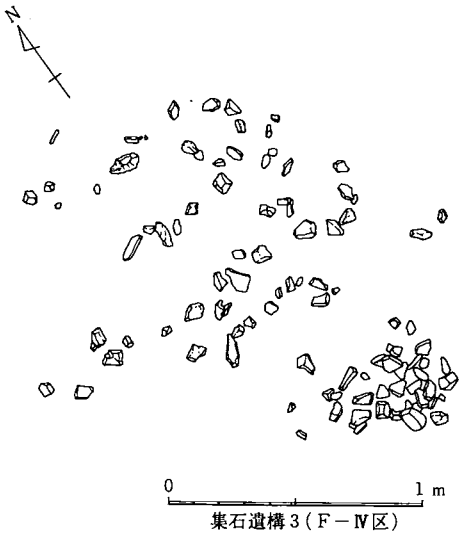
Ｋ－Ⅲ区に検出したもので、東西約1.4ｍ、南北1.5ｍの範囲の中で、大小約130個余りの砂岩角礫からなっている。集石は上下の高低差が最大で30cmを測ったが、集石の基底部のほぼ中央部に、0.62×0.45ｍの平面形が不正楕円形を呈するくぼみがあり、この落ち込みの中央基底部に接して、大小11個の円礫・角礫を使用して１辺ほぼ0.25ｍの方形に組み合わせた石組みを検出した。石組の上端面は概ね面をそろえて置かれていて、火を受けていた。また石組が接している地山基底面は焼土化こそしてはいないものの、焼土粒がわずか



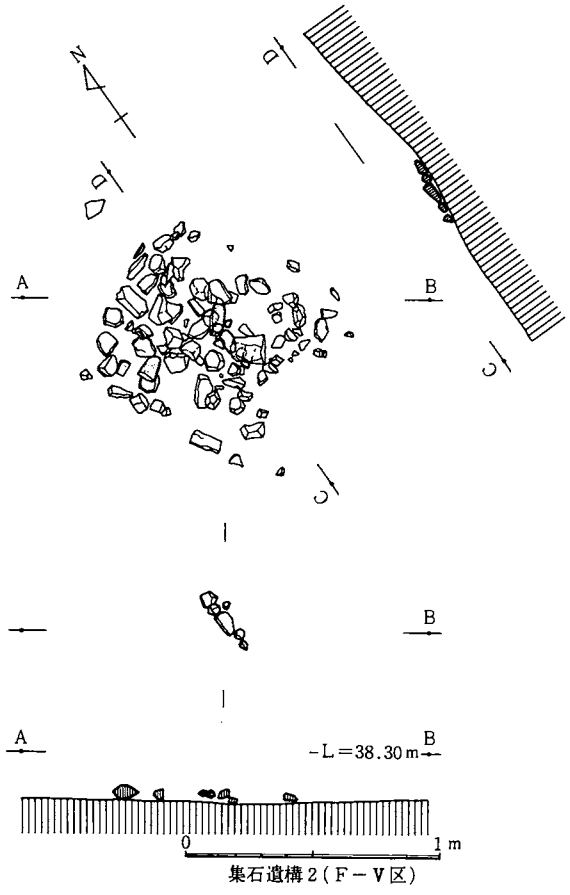
第７図　集石遺構分布図



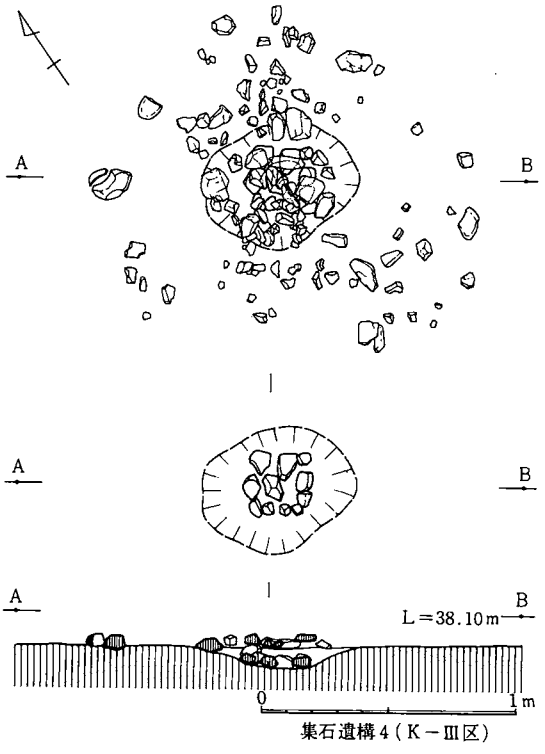
集石遺構1（F－Ⅳ区）



集石遺構3（F－Ⅳ区）



集石遺構2（F－Ⅴ区）



集石遺構4（K－Ⅲ区）

第8図　集石遺構

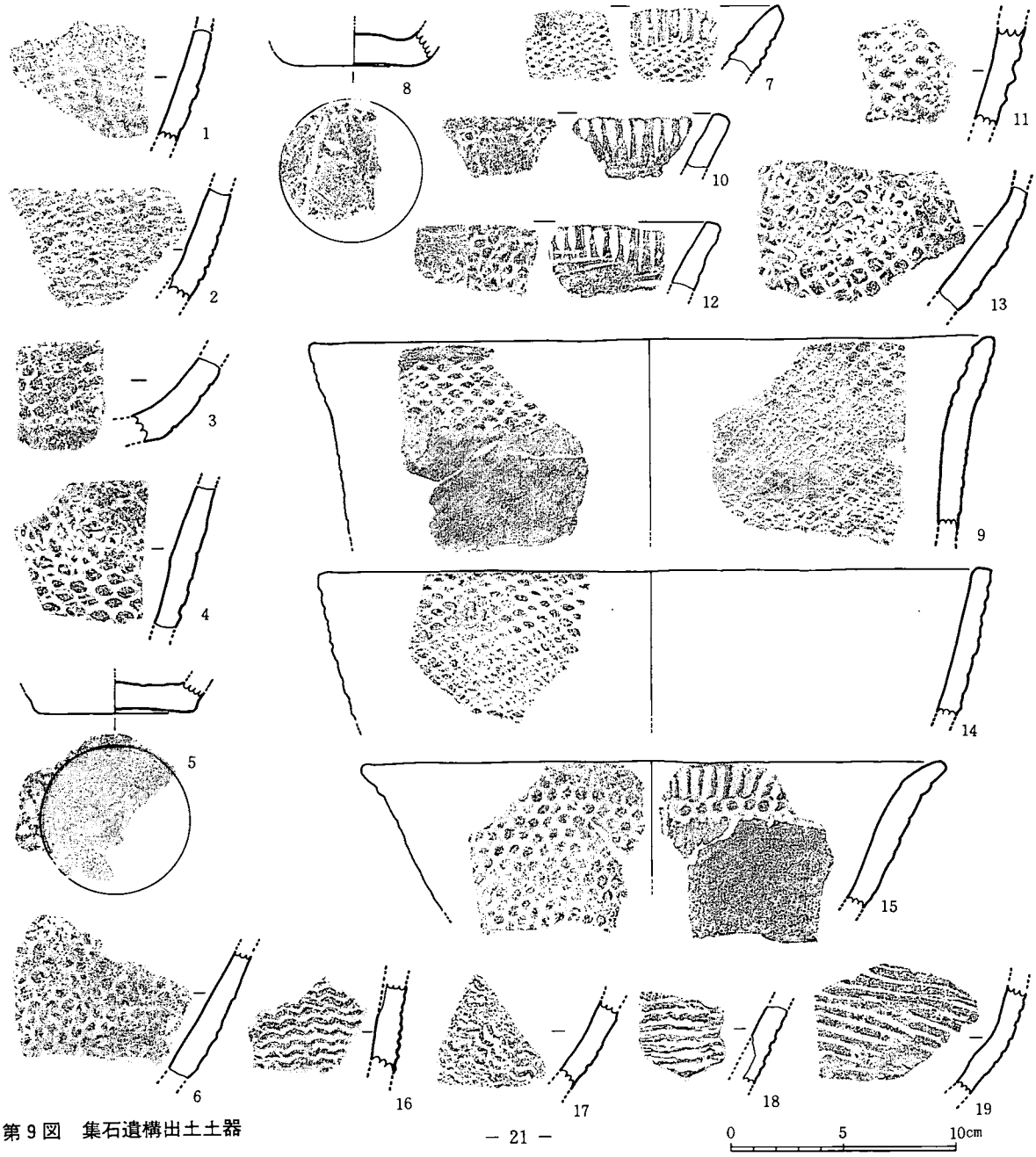
に混入していた。中央石組は炉と推定され、石組上部や周囲の礫群は、炉の崩壊とともに周辺へ散乱したものであろう。

以上の各集石遺構以外にも、礫が集石する地点があるが、遺構として確認できたのは、集石遺構２および４であり、他の集石の多くは集石遺構１および３と同じような性格のものであろう。すなわち、集石遺構４→同２→同１・３は集石炉の廃絶とその崩壊過程のそれぞれの段階を示すものではなかろうか。

以上の集石遺構に伴い、あるいは同一層中に計19点の土器片と、19点の石器・剥片が出土し、これらについては第９図に示した。土器については以下順を追って説明を加えるが、石器については、後節で述べる。

(5)集石遺構出土の土器（第９図）

集石遺構出土の土器は、押型文土器18点、条痕文土器１点の計19点で、調査区全体の同時代の土器の出土量に比べれば、極めて微々たるものである。18点の押型文土器のうち、楕円文15点、山形文３点で、格子目文は出土していない。（野田）



第９図　集石遺構出土土器

2．その他の出土遺物

(1) 縄文式土器

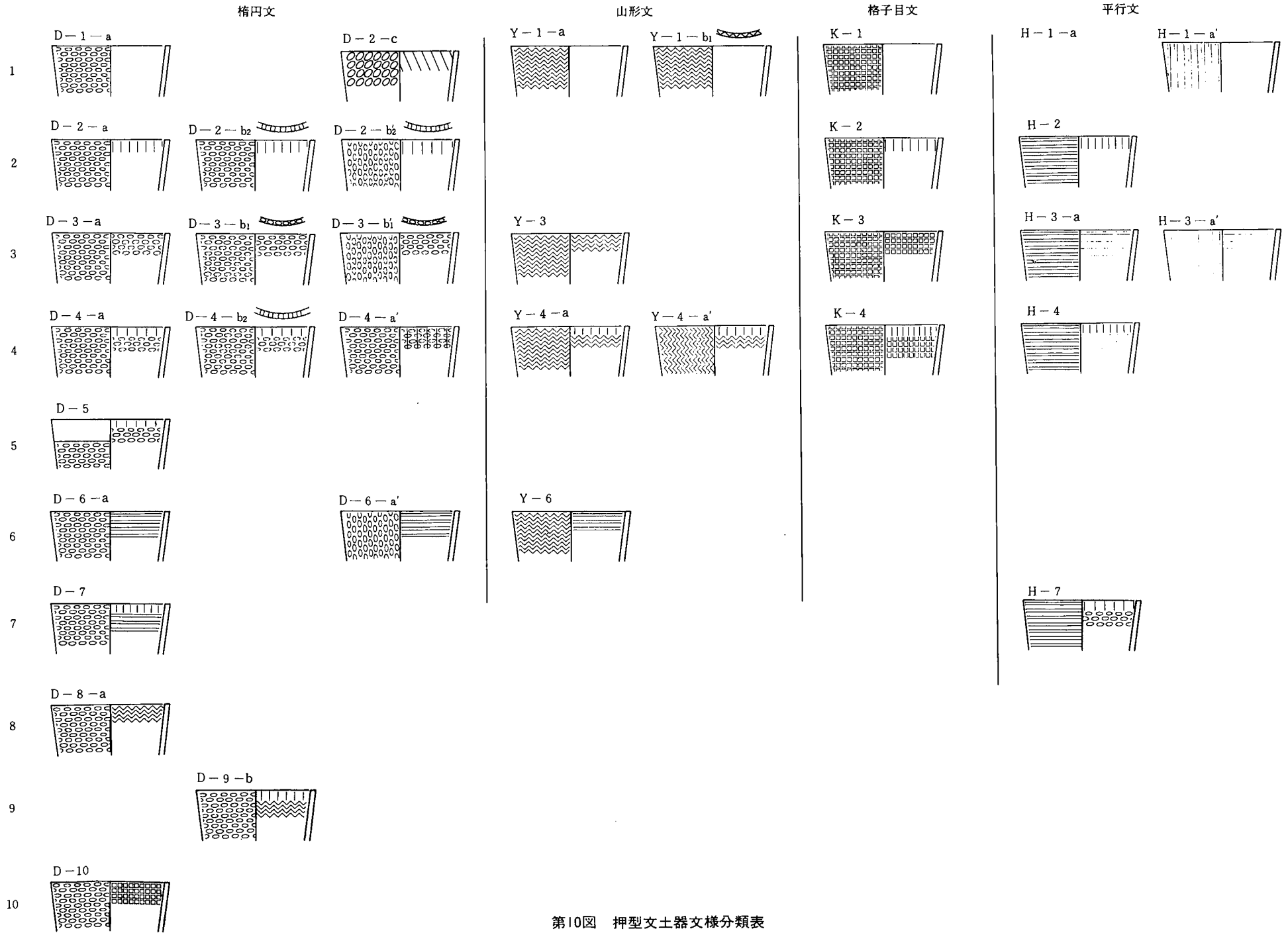
前述した集石遺構に伴出した押型文を主体とする土器群の他に、多くの縄文式土器が出土した。これらのほとんどは弥生・古墳期の竪穴住居址の覆土に含まれていたものや、近世の溝状遺構等によって攪乱を受けたために耕作土中に散乱したものである。したがって各土器および土器群に対して、層位的な関係に基づく相対年代を与えることは困難であるが、以下出土土器を形式学的方法によって類別し、併せて資料の解説を行なうこととする。

出土土器の中で、特に大部分を占めるものは押型文土器で、従来の呼称方法で言えば、楕円文・山形文・格子目文がある。この他に内外面に平行する条痕様の文様を持つものがあり、これは棒状の原体に平行する刻目を施したもので器面を回転押捺させたもので、ここでは前三者に加えて、「平行（押型）文土器」と呼ぶことにした。また押型文土器に通有に見られる施文法によって、棒状原体に細い縄を巻きつけて器面を回転させた「撚系文土器」などが認められたが、楕円文・山形文・格子目文・平行文の４種についてのみ類別を「押型文土器」の範疇として取り扱った。撚系文等については個別に類別を試みた。

押型文土器（第10図）

従来、押型文土器を区別する場合には、単に器面の文様によって、楕円文・山形文・格子目文というような呼び方が一般的であった。しかし詳細を観察すると、器体外面の文様、口縁部内面の文様、口唇部の文様の有無と種類、さらに器体の内外面で異なった２種類の文様を組み合わせたものまで多種多様なものが認められる。またこうした文様構成に加えて器体のプロポーション、すなわち口縁部・胴部・底部にいたる各部位の形態変化も複雑であり、こうした複雑多岐にわたる「押型文土器」をいかに大系的にとらえるかが当面の重要な課題であった。

上の原遺跡出土の押型文土器は、コンテナケースで約10坏分、点数で言えば、5000点は下らない。文様別構成比率から見れば、楕円文62％、山形文33％、格子目文２％、平行文２％、その他１％であり、楕円文が全体の６割以上を占める結果となった。こうした多量の土器の多くは細片であり、部位も判明しないものが多く、その一つ一つについて、図示し解説を加えることは物理的に不可能である。したがって、ここでは口縁部・底部の破片をすべて抽出し、また比較的大形の胴部破片の中で、形態・施文方法・施文原体が復原出来るものなどを加えて、その欠を補うこととした。類別に際して、完形品が皆無であることを考慮し、まず第一に、口縁部外面の文様によって大別した。なお楕円文＝Ｄ、山形文＝Ｙ、格子目文＝Ｋ、平行文＝Ｈとそれぞれ略記号を用いた。第二に、Ｄ・Ｙ・Ｋ・Ｈのそれぞれの中で、口縁部内面の施文方法の差異によって、１～10に分けた。この場合、楕円文が出土量に比例して最も多くのバリエーションが認められたので、当然楕円文を基準とした類別となった。また本遺跡出土の押型文全体の傾向として、口縁部外面は横位施文が主体であるため、横位施文を、縦位施文に優先させた。Ｄ－１～Ｄ－９のうち、Ｄ－５の口縁部外面に無文帯を有する特異な例を除くと、口縁部内面の文様構成の違いによる類別である。第三に、口唇部の施文の有無によって細分した。すなわち、口唇部に施文の無いものを「ａ」、施文したものを「ｂ」とした。また、口唇部の施文方法が、原体を回転施文したものと櫛目状の原体条痕を施したものとがある。回転施文のものを「b_1」、原体条痕のものを「b_2」とした。さらに「ａ」・「ｂ」のうち、口縁部外面の施文が縦走するものについては、それぞれ「ａ′」・「ｂ′」のように「′」を付した。以上のような方法によって試みた各類別結果



第10図　押型文土器文様分類表

とその特徴をまとめると以下のようになる。

A　口縁部の文様変化

①　楕円文

〈D－1－a類〉　口縁部外面に横走楕円文を施し、口縁部内面および口唇部が無文帯となるもの。

〈D－2－a類〉　口縁部外面に横走楕円文を、口縁部内面上端に、原体条痕を施したもの。

〈D－2－b_2類〉　D－2－aの口唇部に、原体条痕を施文したものである。

〈D－2－c類〉　口縁部外面に、粗大な楕円文を斜走させ、内面に原体条痕を施したものである。基本的には〈D－2－a類〉に帰属するものであるが、特異性を考慮して、独立させた。

〈D－3－a類〉　口縁部外面に横走楕円文を施し、口縁部内面に、一定の巾の横走楕円文を施したもので、文様帯の巾は、棒状原体の長さに規制されることが一般的である。

〈D－3－b_1類〉　D－3－aの口唇部に、外面と同一の原体を回転して施文したものである。

〈D－3－b_1類〉　口縁部内面はD－3－aと同様であり、口縁部外面に縦走楕円文を施したもの。

〈D－4－a類〉　口縁部外面に横走楕円文を施すが、口縁部内面の上端部が原体条痕、下部に外面同様の横走楕円文を組み合せたもの。

〈D－4－b_2類〉　D－4－aの口唇部に、内外面と同一の原体条痕を施文したもの。

〈D－4－a'類〉　D－4－aと口縁部内面は一致するが、口縁部外面に縦走楕円文と原体条痕を重複して施したもの。

〈D－5類〉　口縁部外面の上端に一定の巾の無文帯をおき、無文帯の下は横走楕円文を施すものである。

〈D－6－a類〉　口縁部外面に横走楕円文を施し、内面に平行文を施すものである。なおこの平行文は外面と同一原体を用いて、横方向に押し引いた場合と、これとは異なる平行文原体を回転施文した場合とが考えられるが、出土例では、前者の場合は証明する方法を見い出せず、ほとんど後者のようである。

〈D－6－a'類〉　内面はD－6－aと同じであるが、外面に縦走楕円文を施したものである。

〈D－7類〉　D－6の口縁部内面の上端に原体条痕を加えたものである。

〈D－8－a類〉　D－9と同じく内外面の文様が異なるもので、外面に横走楕円文を施し、内面に山形文を横走させるものである。これと逆の場合、すなわち外面が山形文、内面が楕円文の組み合せも想定されるが、本遺跡の場合には出土していない。

〈D－8－b類〉　D－8－aの口唇部に外面と同一の原体を回転施文したものである(図省略)。

〈D－9－b類〉　口縁部外面に横走楕円文を施し、内面に格子目文を施したもので、D－8と同様に内外面で異なる文様の組み合せの例である。

②　山形文

〈Y－1－a類〉　口縁部外面に横走山形文を施し、内面および口唇部が無文帯となるものである。

〈Y－1－b_1類〉　口縁部外面はY－1－aと同一であるが、口唇部に原体条痕を持つものである。楕円文D－2－b類・D－3－b類・D－4－b類・D－8－b類では、すべて、原体を回転施文していたのに対し、本類では原体を使用したか否かは判明しないが、口縁部に平行する条痕を施したものである。

〈Y－3類〉　口縁部内外面に横走山形文を施したものである。

〈Y－4－a類〉　口縁部外面に横走山形文、内面上端部に原体条痕、下位に横走山形文を施したものである。

〈Y－4－a′類〉　口縁部内面はY－4－aと同一であるが、外面に縦走山形文を施したものである。

〈Y－6類〉　口縁部外面は横走山形文を施し、内面に平行文を施すものである。なおこの場合は、D－6－a・D－7の場合と同様、外面とは異なる平行文原体を回転させたものである。本類は細片であるため図示できず、類別表にのみ掲げた。

以上、山形文の場合には、楕円文D－2・D－5に相当するY－2およびY－5、さらにY－7以下については認められなかった。楕円文に比較すると、著しくバリエーションの巾が狭くなっている。

③　格子目文

山形文に比較して、さらにバリエーションが小さくなり、大別した四類のうち最も少ない。

〈K－1類〉　口縁部外面にのみ横走格子目を施したもので、内面および口唇部は無文帯となる。

〈K－2類〉　口縁部外面に横走格子目文、内面上端部に原体条痕を施したものである。

〈K－3類〉　口縁部内外面に格子目文を施したものである。なお手法上、内面の横走は明らかであるが、外面では横走・縦走の区別が不明なものがある。しかし、観察により判定できたものでは、横走および斜走のものがあり、縦走するものは認められなかった。

〈K－4類〉　口縁部外面に横走格子目文､内面上端部に原体条痕､下位に横走格子目文を施したものである。

④　平行文

文頭で述べたごとく、いわゆる貝殻状の条痕に類似するが実は棒状のものに平行する溝を刻んだ原体を回転施文したものを「平行押型文」と呼んだ。原体の圧痕を詳細に観察すると、平行する沈線にはわずかに凹凸が認められむしろ直線的なものは少ない。したがって必ずしも棒状原体に溝を刻んだものとは断言できず、むしろ無繊維質の紐を棒に巻き回転施文したかに観察できるものがある。いずれにせよ、こうした文様を、貝殻条痕文・撚糸文と区別する意味から一括して「平行文」あるいは「平行押型文」と総称した。

〈H－1－a類〉　口縁部外面にのみ平行文を施し、内面および口唇部が無文帯となるものである。

〈H－1－a′類〉　口縁部外面に縦走平行文を施したものである。

〈H－2類〉　口縁部外面に横走平行文を施し、内面上端部に原体条痕を施すものである。

〈H－3－a類〉　口縁部内外面に横走平行文を施したものである。

〈H－3－a′類〉　口縁部外面に縦走平行文、内面に横走する平行文を施したものである。

〈H－4類〉　口縁部外面に横走平行文、内面上端に原体条痕、下位に横走平行文を施したものである。

〈H－7類〉　口縁部外面に平行文を施し、内面上端に原体条痕、下位に横走楕円文を施したものである。

以上、D・Y・K・Hのそれぞれについての類別を試みたが、これに関連して、さらに二、三の問題について補足しておかなくてはならない。

〔1〕 器体外面の施文方向については、口縁部および胴部の一部についての方向を基準としたが、胴部下半および底部近くにおける施文方向については異なる場合があることが充分考えられるが、ここでは胴部の一部を含む口縁部の施文方向を第一義的に取り扱った。

〔2〕 口縁部外面については先に横走することが通例であると述べたが、細部を観察すると、右下りの斜走、左下りの斜走もあって、これらは横走に近いものからかなりの傾斜をもつものまで多様に変化している。これらを一括して横走としたが、これは縦走としたものの中に、縦走に近い右下りあるいは左下りの斜走があることも考慮して、大まかに区分するにとどめた。

〔3〕 口縁部内面に施された原体条痕は、かつて原体条痕文（八幡・賀川、1955）として認識されたものであるが、これには明らかに原体を使用したものと、別個の工具を使用したものとがあり、その判定は困難を

極めるが、これらの文様については「原体条痕」なる名称を踏襲し、個別的な問題については、個々の資料の解説の中で述べることにした。

〔4〕「平行文」なる名称を新たに与えたが、名称の適否については諸般の批判を待つとして、従来、北海道、東北の一部を除くほぼ全国的な範囲に分布する押型文土器は、大別して楕円文・山形文・格子目文の名称で呼ばれてきた。しかし本遺跡では前述三種の文様に加えて、原体を回転させることにより、平行沈線を表現した一群の土器があった。そのバリエーションは、山形文、格子目文をしのぐものがあり、明らかに押型文土器の一隅に加えるべきではないかと考えた。原体については、さらに解明されなければならない点も多いが、一応「平行文」・「平行押型文」の名を使用することにした。

なお、「平行文」として総称した文様の中に、例えば、D－7類とした土器（第13図52）や、D－6－a′類とした土器（第12図51）などのように、明らかに外面の楕円文原体とは異なった原体を回転施文したものがあることからすれば、これまでこの種の文様に対して適当な名称が与えられずに今日至ったことこそ、むしろ不思議な感じさえ受ける。

B　底部の形態

底部破片は集石遺構出土のものを加えると計15点が出土した。口縁部破片に比べると、その出土量は極めて少なかった。15点のうち文様ごとの割合は、楕円文10、山形文３、平行文１、不明１であった。これらは形態によって次の六つに類別することが出来た。

〈底部ａ〉　胴部下半は尖り気味となるが、底部が小さく不安定な平底を呈するもので、楕円文にのみ見られた。

〈底部ｂ〉　底部が丸底となるもの。

〈底部ｃ〉　胴部下半が丸味をもって膨み、丸底気味の平底となるもの。

〈底部ｄ〉　胴部下半と底部の境が明瞭で、完全な平底となるもの。

〈底部ｅ〉　底部が上げ底状の平底となるもの。

〈底部ｆ〉　底部が裾広がりとなり、安定した平底となるもの。

以上ａ～ｆ類のいずれの場合にも、底部および底部に相当する部分には文様を施した例は認められなかった。また、いわゆる「尖底」は皆無であり、本遺跡出土の押型文土器の年代的な特徴を示すものであろう。

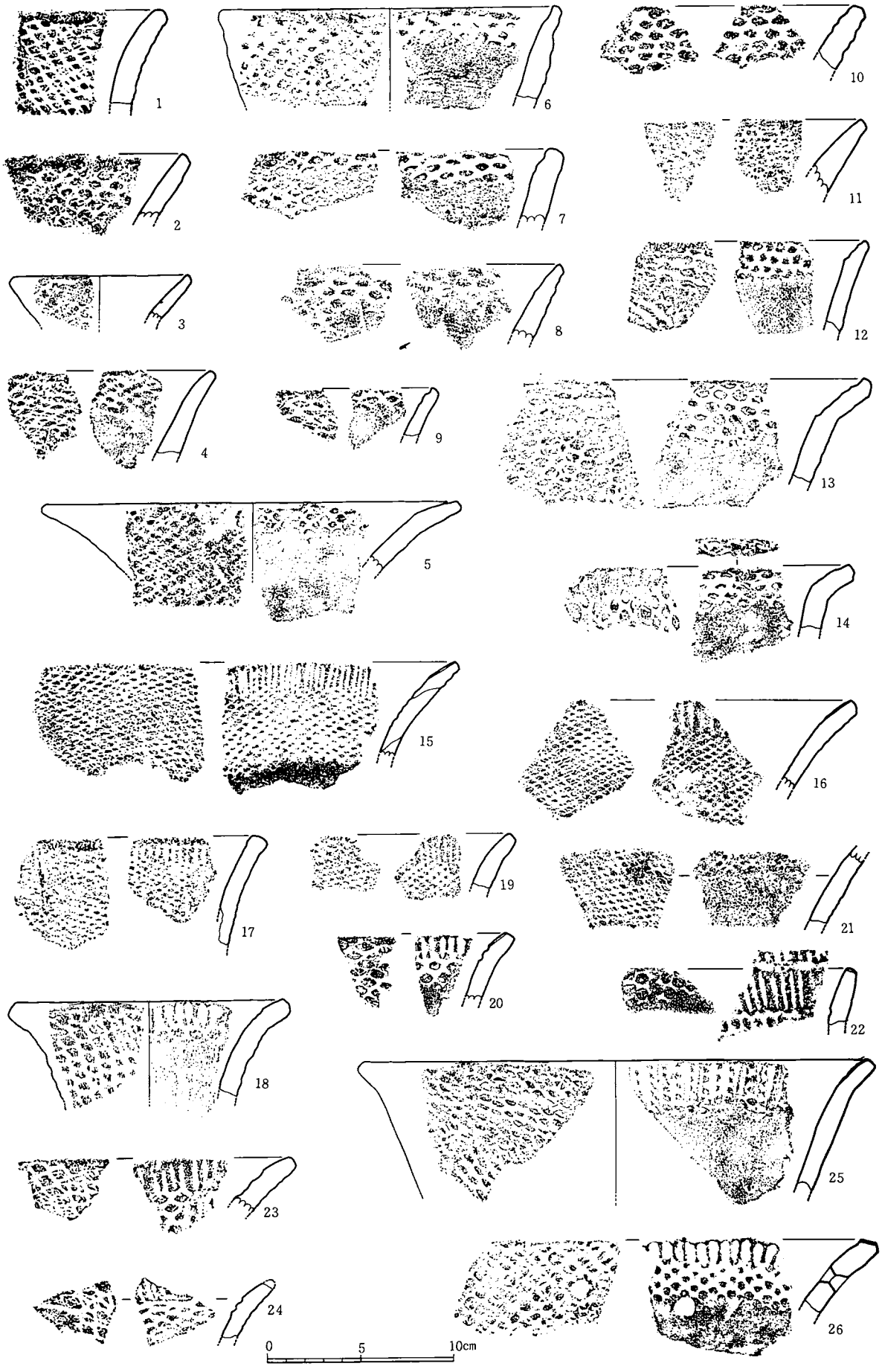
C　押型文土器各説

上記の類別結果に基づき、以下出土土器の特徴について説明を加える。

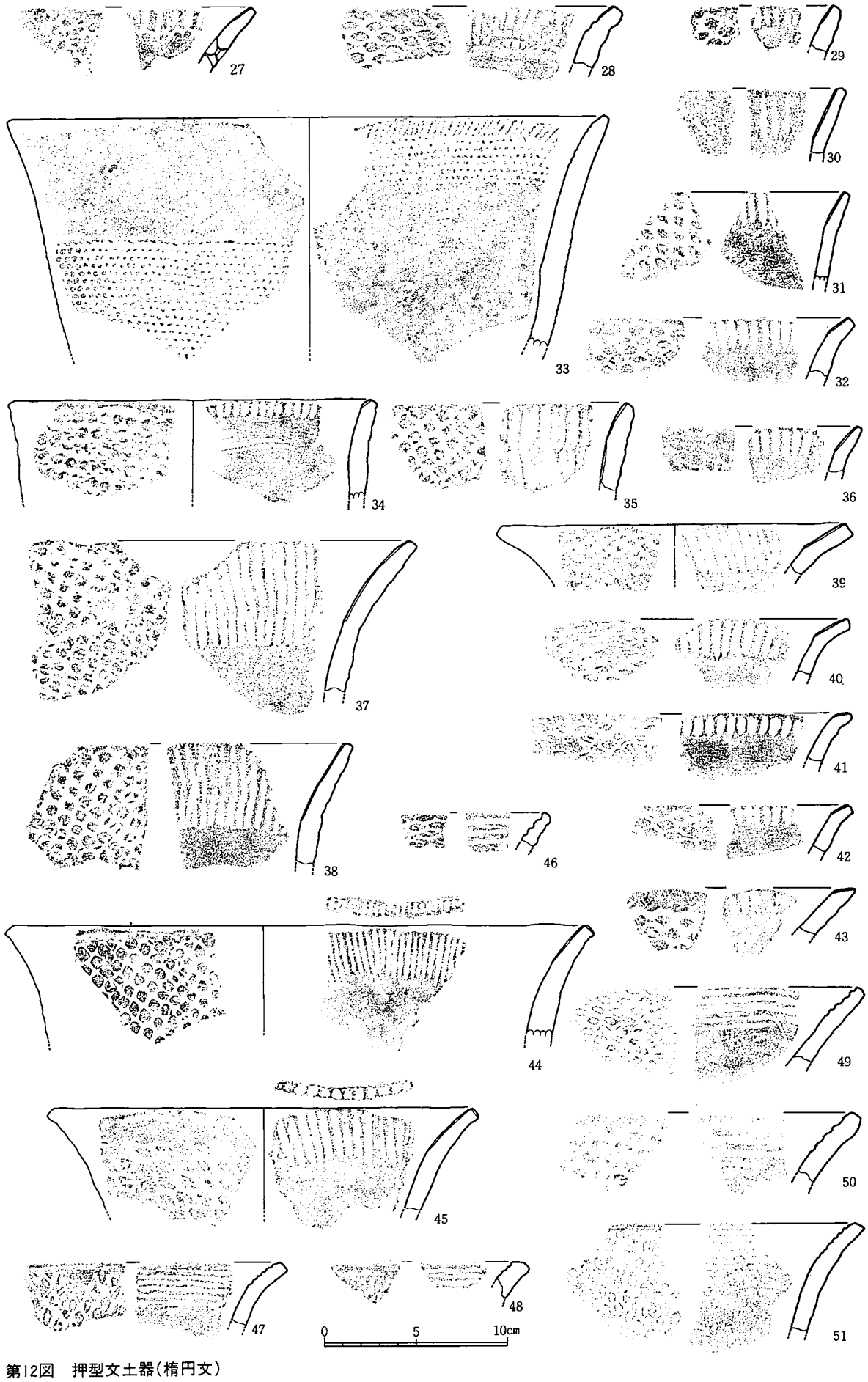
①楕円文（第11図～第13図52～59）

〈D－1〉（第11図１～３）

１はわずかに外弯する口縁を有し、外面に比較的小さな右下りの楕円文を施す。器壁は厚く、口縁端部は角ばる。２は外面に横走楕円文を施し、口縁部は外反する。器壁はやや薄いが口縁先端近くで薄くなり、端部は外傾する。また口縁端部は二次的な火を受け器面が荒れ、黒変している。３は出土例中、最も小型の土器で、胴部から口縁部近くでゆるやかに屈曲し、わずかに内弯気味に外反するもので、器壁は薄く、端部は外傾する。なお口縁部外面の楕円文は左下りの斜走である。１・２は黄褐色を呈し、焼成良好である。３は暗



第11図　押型文土器(楕円文)



第12図　押型文土器(楕円文)

褐色で焼成不良で、大小の砂粒を含む。

〈D－2－a〉（第12図29～32、34～45）

計13点を数える。口縁部外面の楕円文は、29・32・35・39～42が横走、31・45が右下り、35・37・38が横走および傾走の重複した楕円文を施している。また34は楕円が横方向に連なるいわゆる「連珠文」である。口縁部の形態には、直立するもの（29・34・35）、外弯するもの（37・38）、内面の原体条痕を施すことにより「く」字形に屈曲するもの（30～32・36～42）などがある。また原体条痕を口縁部内面上端と口唇部との間に施した結果、口唇端部が尖るもの（43）や丸味を持ちながらも尖り気味になるもの（41）などがある。いずれにせよ口縁部内面に原体条痕を施すことによって、口縁部が直行するもの（34・35）を例外として、口縁部が外弯ないし、屈曲して外反するものが多く、口縁部の形態が内面の原体条痕の有無によって左右されたことを示している。色調は30～33が黄褐色で焼成良好である。胎土に石粒を多く含む。29・34・35は暗褐色を呈するが焼成は比較的良好で、石粒を多く含む。

〈D－2－b〉（第12図44・45）

口縁端部に原体条痕を施したものである。44は復原口径31.7cmを測る大形品である。口縁部はゆるやかに外弯する。外面は楕円文を縦走させている。器壁は厚く、先端に移るに従い薄くなり、端部は角ばりおわる。いずれも黄褐色を呈し、焼成良好である。胎土中に大小石粒を含む。

〈D－2－c〉（第11図4～13）

口縁部が直立気味に外反するもの（4・6～11）と、内面の横走楕円文を施すことにより、この部分から屈曲して外反するもの（13）、さらに口縁部が大きくラッパ状に開き、口縁部の上端面に文様が施されるもの（5）がある。外面の楕円文は、横走するもの（4～8・10）が主体であるが、右下りの斜走するもの（9・12）も認められる。

〈D－3－b'_1〉（第11図14）

口縁部の形態は13（D－3－a）に類似し、口縁先端近くで、強く屈曲して外反するもので、口唇部に内外面と同一の原体を回転施文している。器壁は極めて厚く、黄褐色を呈し、焼成は極めて良好である。胎土中に砂粒を多く含む。

〈D－4－a〉（第11図15～20・23～27）

15～17・19・21の5点は、外面に細かな横走ないし右下りの楕円文、内面に外面と同様の横走楕円文を施す。口縁部の形態は、すべて外反し、端部は角ばるものが多い。これらに比べて文様の単位が大きい18・20・23・24・26・27でも、外反する口縁が主体を占める。なお、26では内面の原体条痕が口唇部との間に施され、口縁端部が尖がる。また唯一補修孔の穿れた例である。

15～17および19は暗褐色ないし黒褐色を呈する。二次的な火を受けたためか、器面が荒れてもろくなっている。18・20・23～27は黄褐色を呈し、焼成極めて良好である。なお26は胎土が緻密で器面ににぶい光沢をもつ。

〈D－4－b_2〉（第11図22）

D－4－a類の口唇部に原体条痕を施したものである。外面はやや右下り、内面は横走楕円文を施す。口縁部の形態は、D－4－aと異なり、直立気味に立ち上る。暗褐色を呈し胎土緻密であるが焼成不良である。

〈D－4－c〉（第11図25）

口唇部内面に横走楕円文と原体条痕を重複させた例で、基本類型はD－4－aに求められ、言わばその亜流と考えられる。外面は右下りのやや小さな楕円文を施すが、口縁部から胴部下位に移行するに従って、縦方向に近い右下りとなる。口縁部は大きく外反し、端部でわずかに「く」字状に屈曲し、端部は角ばる。や

や暗い黄褐色を呈し、胎土中に大小の石粒を多く含むが焼成は良好である。

〈D－5〉（第12図33）

口縁部外面の上半は幅6.5cmの無文帯をもうけ、以下を細かな横走楕円文を施す。内面は左下りの原体条痕と横走楕円文の組合せとなる。楕円文原体は細かく丁寧に刻まれていて、他に例を見ない。色調暗褐色で焼成も極めて良好である。口縁郎は外反し、先端で薄くなり、端部は角ばる。胴部はわずかに膨みをもつ。出土数は1点にすぎない。暗褐色を呈し、胎土は緻密であるが、焼成はやや悪く、器面が荒れている。

〈D－6－a〉（第12図49・50）

外面に横走楕円文、内面に横走の原体条痕を施している。49の口縁部は外反し、肉薄であるのに対し、50では外弯気味に開き、肉厚である。49は黄褐色で胎土は緻密である。50は淡暗褐色を呈し、胎土はやや粗い。焼成はいずれも良好である。

〈D－6－a′〉（第12図47・48・51）

口縁部内面はD－6－a類と同一で、外面に縦走楕円文を施している。口縁部は外反し、端部は角ばる。特に口縁内側の横位原体条痕を施すことによって、結果的に口縁部がさらに外弯したものである。3点ともやや暗い黄褐色を呈し、焼成良好である。

〈D－7〉（第13図52～54）

口縁部外面に横走楕円文、内面は原体条痕と横位の平行文を組み合せたものである。52胴部はわずかに膨みをもち、口縁部は外弯気味に大きく開く、口縁上端部に原体条痕を施し、ほぼ水平となっている。なお口縁部内面の平行文は棒状のものに平行する沈線を刻んだ原体を横方向に回転施文したものと思われ、上部の原体条痕と異っているが、この原体条痕文と外面の楕円文との原体は同一であろう。52と53の文様の単位はよく類似する。54の口縁部内側の原体条痕は、52・53に比べて著しく長くなっている。

〈D－8〉（第13図57）

口縁部外面は横走楕円文、内面に原体条痕と横走山形文を組み合せたもので、D群とY群との組み合せの一例であり、両群をつなぐものである。口縁部は外反し、端部は角ばる。やや赤味を帯びた暗褐色を呈し、胎土は粗く焼成不良である。

〈D－9－b_2〉（第13図58・59）

58・59とも口縁部外面に単位の大きい楕円文を横走させる。内面は原体条痕と横走楕円文との組合せで、口唇部にも原体条痕を施している。口縁部は外反し端部は角ばっている。器面が荒れていて、文様は不鮮明である。いずれも暗褐色を呈し、胎土も粗く焼成不良である。

〈D－10〉（第12図28）

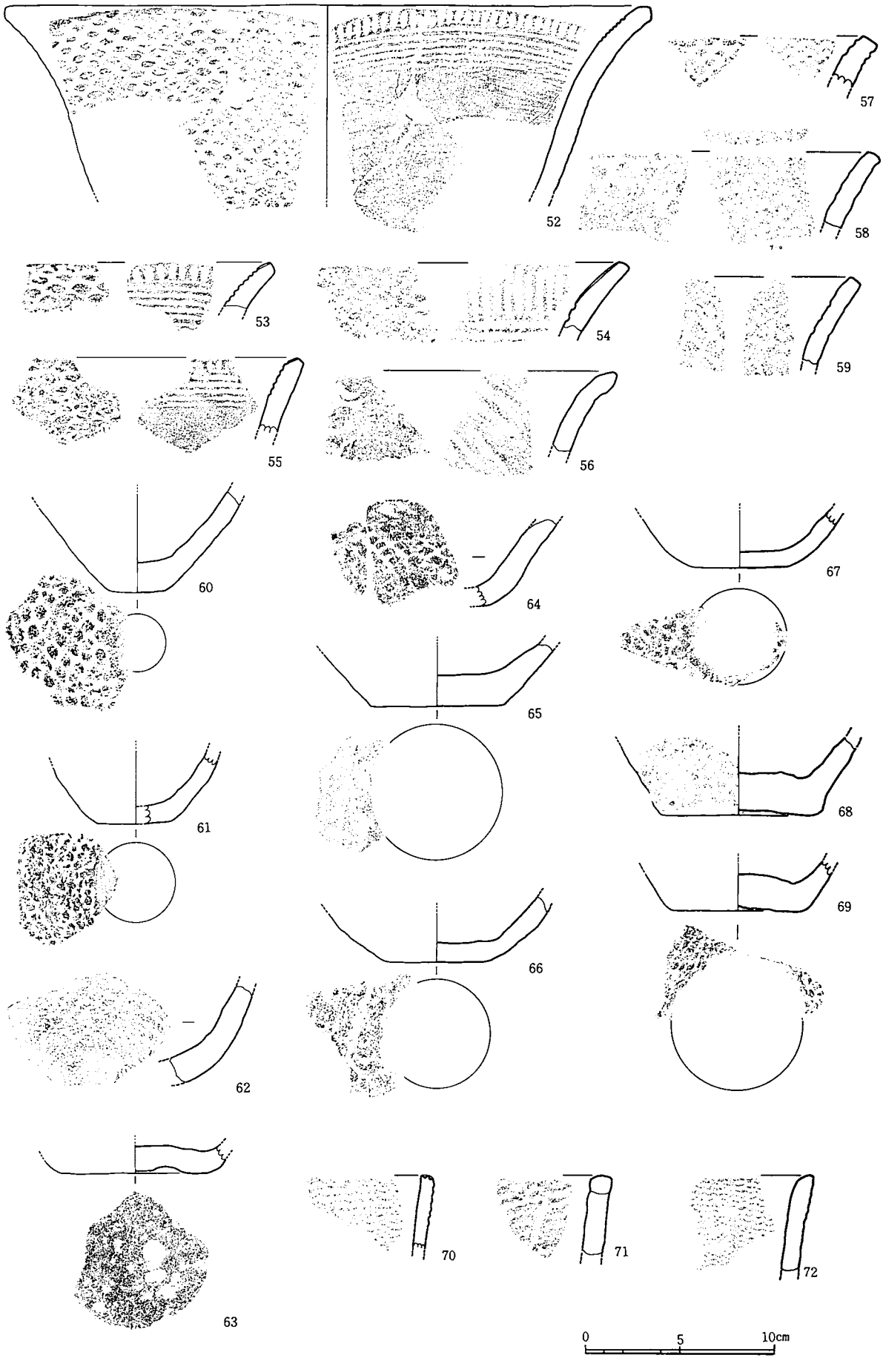
口縁部外面に横走楕円文、内面に横走の格子目文を施している。D群とK群との組み合せで、両群をつなぐものである。外面は横走楕円文、内面は原体条痕と格子目文との組み合わせである。口縁部は外反し、器壁は先端部でやや薄くなり、端部は角ばる。明褐色を呈し、焼成良好である。

② 山形文 （第13図70～72、第14図73～98、第15図99～106）

〈Y－1－a〉（第13図71・72）

71・72は口縁部外面に横走山形文、71は左下りの山形文を施す。内面は2点ともナデ調整する。文様の単位は72が小さく71が大きくなる。口縁部は両者とも直立する。71は暗褐色、72は明褐色でいずれも焼成良好である。

〈Y－1－b〉（第13図70・73）



第13図　押型文土器(楕円文・山形文)

口縁部外面に横走山形文を施し、内面はナデ調整したものである。70の口唇端部は口縁部と併行する原体を回転施文している。口縁部は直行する。73の口唇部は口縁部と平行する原体条痕を施し、端部の調整をおこなっている。70は暗褐色で焼成やや悪く、73は赤褐色を呈し、焼成は極めて良好である。胎土に白色石粒を多く含む。

〈Y－2〉（第15図102）

1点のみ出土していて復原口径16.4cmを測る。比較的小型品である。胴部から大きく外反して、口縁部にいたり、端部は外傾する。外面は細かな右下りの山形文、内面には原体条痕を施している。

〈Y－3〉（第14図74～81）

内外面に横走山形文を施すものであるが、出土例7点とも内外面の施文原体は一致する。口縁部はすべて外反し、77～79では口縁端部が丸く終るが、これは原体端部が口縁部外面の上端よりやや下で回転させている為であろう。他の口縁端部は角ばる。なお79は、口縁端部を欠失するため、本類に属するか、Y－4－a（a'）に属するかは判明しないが、胴部にやや膨みを持っていて、33（D－5）や52（D－7）と同じような特徴をもつものである。

〈Y－4－a〉（第14図82～103）

計15点が出土している。口縁部外面の施文方向は一様ではなく、ほぼ横方向のもの（82・84・85～87・89・91～94）、右下りのもの（83・90）、左下りのもの（84・95）、などが認められる。ところが比較的大型の破片である82の場合は、横方向と左下りとが認められ、部位によって異なる場合が少なくなかったものと考えられる。いずれも大きく外反する口縁を有するもので、内外面の山形文の単位は細かなもの（82・83）から粗大なもの（87）まで様々であり、内外面の山形文はすべて同一原体を使用したものである。口縁端部は角ばるものが主であるが、先端が尖り気味となるもの（85・86・96）や、鋭く尖るもの（88）も認められる。なお内外面の山形文の単位が小さいもの（82・83）では、器壁が薄く、逆に単位の大きなもの（87・92）では比較的肉厚なものが認められる。

〈Y－4－a'〉（第15図99～101）

3点出土した。99は復原口径24.2cmを測った。胴部は外反して立ち上り、口縁部でさらに外弯する。外面に細かな山形文を縦走させている。100・101も外反する口縁部で、外面の山形文は縦方向に近い右下りの回転施文である。口縁端部は100が丸く、101が角ばる。

〈Y－6〉

細片で図示できなかったが1点出土した。口縁部外面は細かな横走山形文、内面は平行文を施す。平行文は回転施文によるものである。

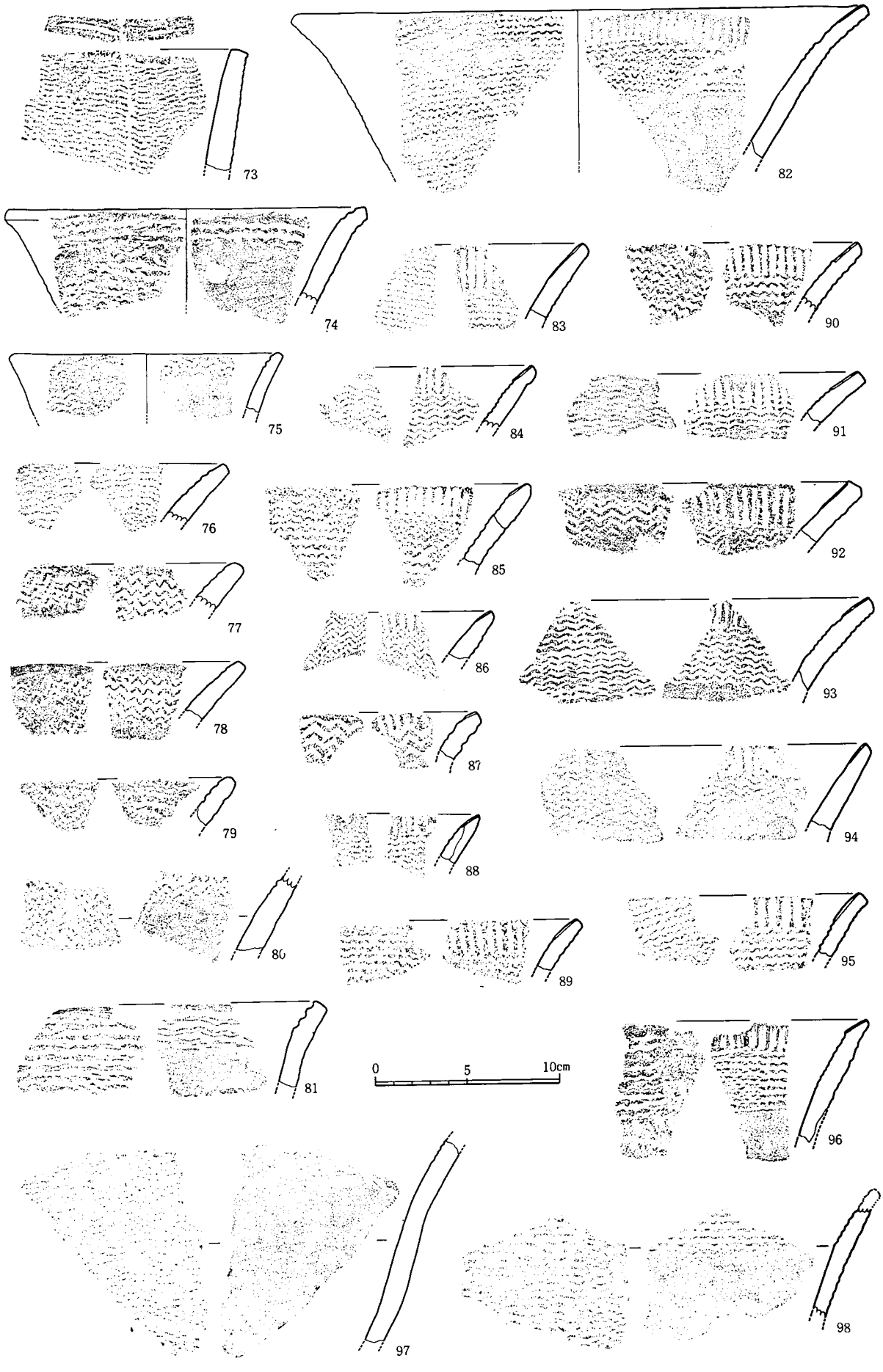
〈胴部破片〉（第15図103）

103は大型品の胴部破片であるが、胴部の膨みはほとんどなく、外面に山形文を縦走させている。器壁は厚く明瞭な輪積痕が認められる。黄褐色を呈し焼成極めて良好である。胴部復原径は上端部で33.0cm、下端部で30.1cmを測り、本遺跡出土例中では最も大型のものに属する。

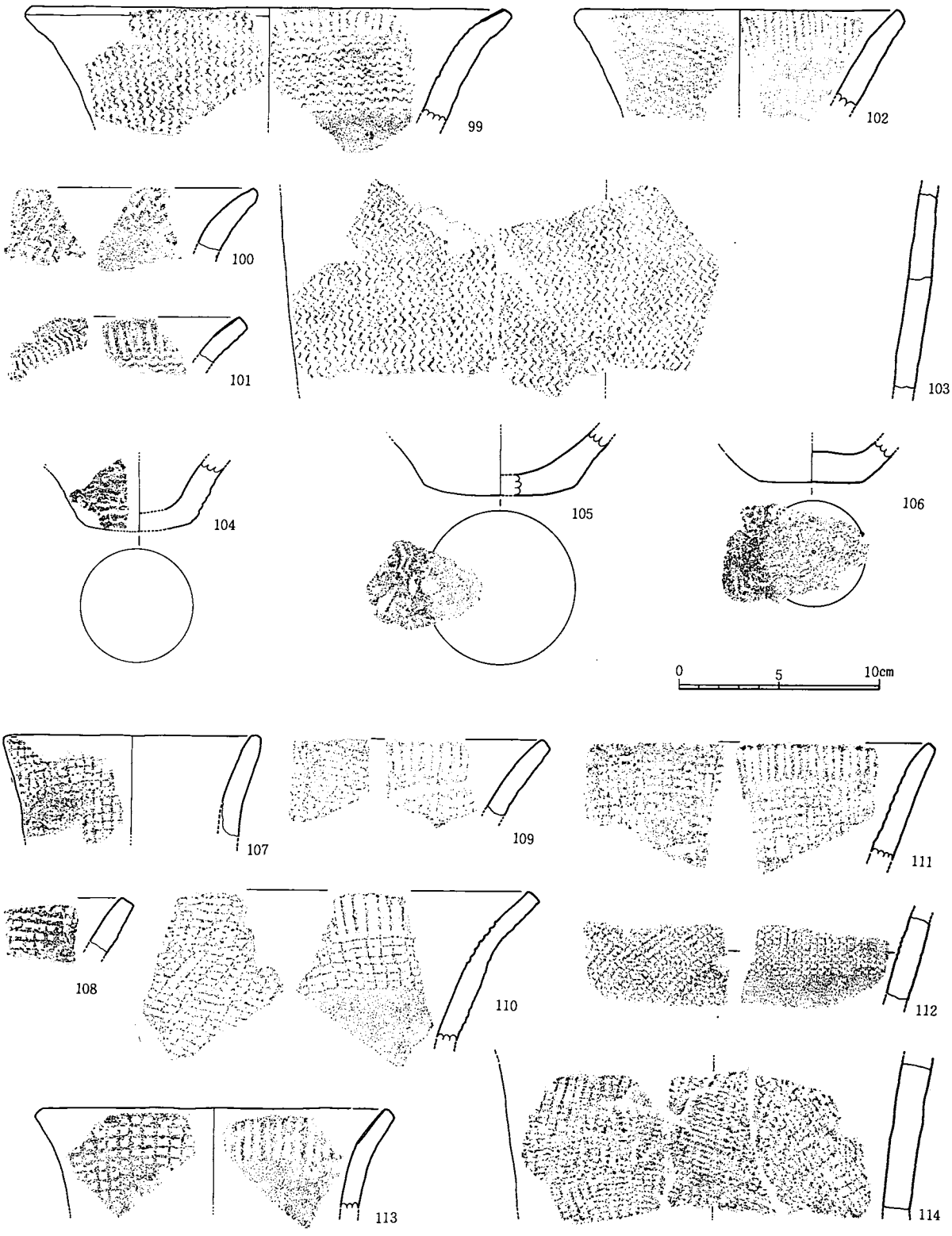
③ 格子目文

〈K－1〉（第16図107・108）

107は直立する胴部から、口縁部がわずかに外反するもので、端部は丸くおわる。外面に横走格子目文を施している。黒褐色を呈し、二次的な火を受けたためか器面が荒れている。胎土中に乳白色の軟かい石粒を多く含む。108は口縁部が外反し、端部が角ばる。107に比べて肉厚である。外面に横走格子目文を施し、内面



第14図　押型文土器(山形文)



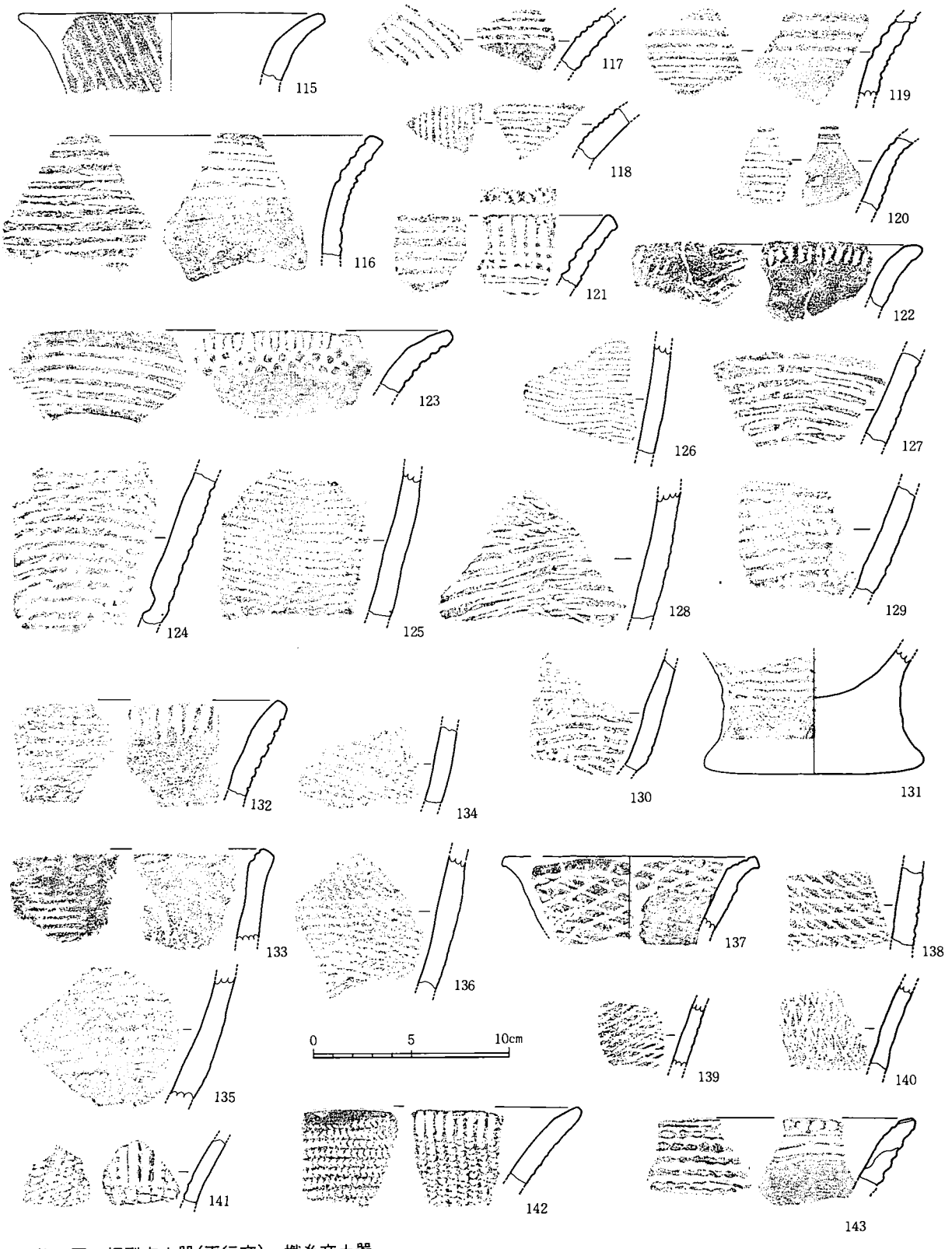
第15図　押型文土器(山形文・格子目文)

および口唇部は横ナデ調整により仕上げている。暗褐色を呈し、多少の石粒を含み焼成は良好である。

〈K－2〉（第15図113）

口縁部は外弯気味に開き、端部が角ばる。外面は単位の大きい格子目文を横走させ、内面には原体条痕を施している。暗褐色を呈し焼成やや不良である。胎土は粗く石粒を多く含む。

〈K－3〉（第15図112）



第16図　押型文土器(平行文)・撚糸文土器

口縁部はほとんど欠失するものの、わずかに口縁端部の一部と思われる部分が残っている為に、K－4類に見られる内面の原体条痕は入る余地はなく、また細片で図示出来なかったものの中に同種のものがあることを確認して、1類として設定した。口縁部外面は右下りにややカーブを描いて施文されていて、内面は横走させる。暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に小石粒を含むが緻密である。

〈K－4〉（第15図109～111）

口縁部外面に横走格子目文、内面は原体条痕文と横走格子目文との組合せである。しかし110では、口縁部を横方向、以下を右下りに回転施文を施した結果、その境界部分で、やや屈曲して口縁部が開いている。109・110は直立気味に外反する口縁である。いずれも比較的肉厚で端部が角ばっている。

〈胴部破片〉（第15図114）

胴部中位の破片とおもわれる。上下端部は輪積みによる粘土ひも接合面から破損している。施文方向は、横方向、左下り、右下りと部位により異なっているが、右下りの施文が基調となっている。器壁は極めて厚く最大1.5cmを測った。また胴部復原径は上端部で21.6cm、下端部で19.6cmを測った。色調は淡い暗褐色で、焼成はやや不良である。

④　平行文

〈H－1－a′〉（第16図115）

口縁部から胴部にかけて、右下りの平行文を施したものである。器面を観察すると明らかに原体を回転させたもので、おそらく棒状のものに巾広い平行沈線を刻んだ原体を使用したものであろう。口縁部は外弯気味に大きく開いている。復原口径15.5cmを測る小型品である。やや赤味を帯びた黄褐色で焼成良好である。胎土は緻密で光沢をもつ。

〈H－2〉（第16図122）

外面に不定方向の平行文を、内面に原体条痕文を施している。口縁部は外弯気味に大きく開き、端部は尖り気味となる。灰褐色を呈し焼成良好である。

〈H－3－a′〉（第16図118）

口縁端部を欠失するが、外面に縦方向、内面は横方向の平行文を回転施文している。内外面の原体は同一のものである。

〈H－3－a〉（第16図116・117・119・120）

内外とも横方向の平行文を回転施文したものである。116・119は、やや単位が大きく粗い原体を使用している。原体の沈線の刻み方も粗雑である。口縁部はいずれも外弯気味に大きく開くものである。117は外面を右下りにややカーブを描くように回転施文している。原体の平行沈線は、114（H－1－a′）とは逆に、巾広い沈線を刻んだものであろう。120は内外面とも細い平行文を施している。以上4点とも灰白色を呈し、器面は粗いが焼成は良好で、131の底部とともに、一見して他と識別できるほど特徴的な一群である。

〈胴部破片〉（第　図124～130）

これらのうち、明らかに回転施文したものは、124・127・129の3点にすぎない。これらは前述した口縁部116・119および底部131と関連をもつものであろう。他の平行文については条痕文と思われるが、原体は不明である。125・126は黄褐色を呈し、128は赤褐色で焼成良好である。

〈H－7〉

外面に平行文、内面は原体条痕と横走楕円文を組み合わせたものである。口縁部は大きく外反し、端部は

やや丸味を帯びる。内面の原体条痕は楕円文のそれを使用したものであろう。灰黄褐色を呈し、胎土緻密で焼成良好である。おそらく（Ｄ－６類）との関連が問題となろう。

⑤　底部

〈楕円文底部〉（第13図60～62・64～69）

60はａ類で、胴部下半部が尖り気味となり、小さな平底をつくるものである。胴部器壁に対し、底部が著しく肥厚している。やや赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土緻密で焼成は極めて良好である。

61は小型品の底部であるが、ｃ類であろう。

62・64は、外底部のほとんどを欠失するため、詳細は判明しないが、ｂ類あるいはｄ類に属すものであろう。65はｄ類、66・67はｃ類、68・69はｅ類である。特に65の底部が肉厚であるのに対して、66・67の２点は胴部器壁とほぼ同じような厚さのままである。68・69はやや上げ底気味の平底で胴部下半の器壁に比べて著しく肉厚である。以上のようにｄ類底部では、ｆ類を除くａ～ｅ類の底部があるが、全体的にはかなりのバリエーションはあり、形式学的には、やや不安定な丸底気味の平底から定形化した平底への段階まで含むものである。なお63は文様は不明であるが、ｄ類とｆ類との中間的なものであろう。

〈山形文底部〉（第15図104～106）

３点出土した。104・105はｃ類であるが、底部は不安定な丸底気味で、さらに外弯気味に立ち上り胴部へ移行する形態は楕円文底部の中には見出せないものである。底郡の厚みは胴部のそれと大差なく、この点では楕円文底部Ｃ類と類似している。106はｄ類で104・105に比べて底部が肉厚である。104・105はいずれも黄褐色を呈し、焼成は良好である。106もやや淡い黄褐色を呈し、焼成はやや不良で、胎土も粗く石粒を多く含む。

〈平行文底部〉（第16図131）

底部ｆ類である。裾開きの安定感のある底部で、非常に肉厚である。外底部周縁はやや丸味をもち、強く内弯しながら胴部へ移行する。底部に対して胴部の器壁は著しく薄くなる。底部外面に横走平行文が施されている。色調は灰白色で胎土は粗く、口縁部〈Ｈ－３－ａ〉類の116・119と類似している。

撚糸文土器

撚糸文土器は計９点出土した。これらのうち口縁部破片は３点で、他は胴部破片である。口縁部の破片は３類に分けられる。

〈１類〉（第16図132）

口縁部外面に、２段撚り（Ｌ／Ｒ）の縄文を棒状工具に巻きつけ横方向に回転施文し、内面に原体条痕を施す。口縁部はゆるく外反し、端部は角ばる。器壁は厚い。

〈２類〉（第16図133）

１類と同様、口縁部外面に２段撚り（Ｌ／Ｒ）の縄文を巻きつけた原体を横位に回転し、また内面にも原体の一部を回転させている。口縁部は直立し、端部で小さく外反する。

〈３類〉（第16図137）

外面および口縁部内面に、２段撚り（Ｌ／Ｒ）の縄文を棒状工具に格子目状に巻きつけたものを横方向に回転施文したものである。胴部は外反し、口縁部で強く屈曲し、端部は角ばる。復原口径12.9cmの小型品で

ある。色調は赤褐色で焼成は極めて良好である。胎土に多量の石粒を含んでいる。

〈胴部破片〉

134・135は、132・133と同じく２段撚り（Ｌ／Ｒ）の原体による回転施文である。134では横位および縦方向に施文され、135では横走撚糸文である。136は２段撚（Ｒ／Ｌ）の原体により、不定方向に施文されている。138・139は、137と同様格子目の巻きつけた撚糸文原体を回転施文したものである。137・138ともやや赤みを帯びた褐色で焼成良好である。139は棒状工具に無節縄文を格子目状にゆるく巻きつけたもので縦方向に回転施文している。

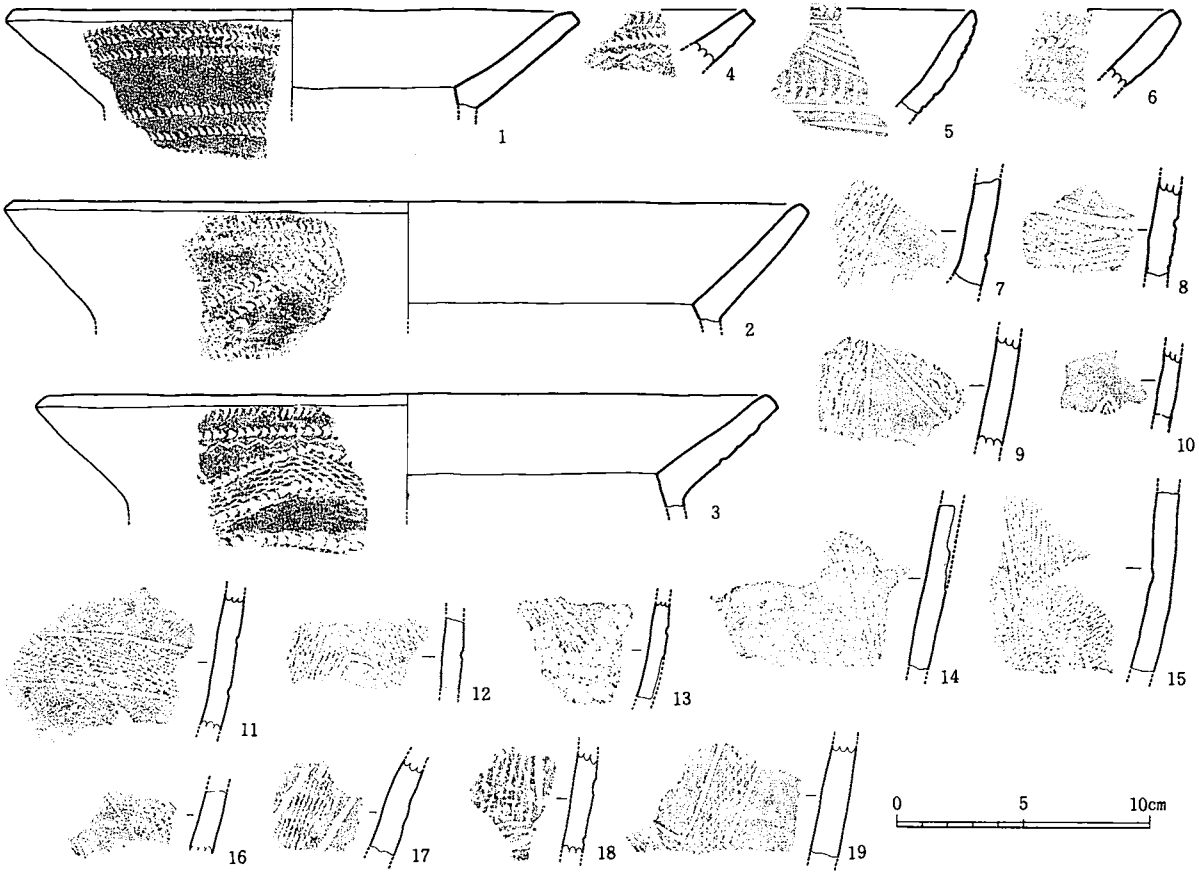
その他の土器

141は外面に組織状の圧痕を残し、内面は口縁部上端に縦方向下部に横方向の原体条痕を施したものである。小破片で器面が磨滅しているため、原体の復原はできない。

142は山形文原体の頂部と頂部を結ぶように平行沈線を刻んだものと思われ、外面は横走し、内面は原体条痕と縦方向に回転施文したものである。押型文土器の一種であるが、極めて特異な文様である。未だ他に類例を見ない。黄褐色を呈し、焼成はやや良好である。胎土は粗く、器面の風化が進んでいる。

塞ノ神式土器

計19点が出土し、口縁部破片６点、胴部破片13点である。１～３は頸部で屈折して口縁部が外反し、４～



第17図　塞ノ神式土器

5も頸部を欠失するが、1～3と同じく頸部で屈折するものであろう。口縁部の文様は大きく4種類に分けることができる。

① 口縁部

〈a類〉（第17図1・2）

1は口縁部外面上端に三条の刺突列点文、下位に二条の刺突列点文をおそらく山形に配したものであろう。復原口径22.5cmを測るやや小型の土器である。頸部は鋭く屈折し、口縁部はやや内弯気味に開く。端部は角ばっている。色調は黒褐色、胎土はやや粗く、白色の小石粒を多く含んでいる。2も1と同じく、外面に平行する三条の刺突列点文、下位に二条の列点文を山形に配している。なお頸部にも一条の列点文が残っている。復原口径31.7cmを測る大型品である。色調・胎土とも1に極めて類似する。

〈b類〉（第17図3・4）

口縁部外面上端に二条の刺突列点文、さらにその下に線刻山形文を一条巡らせている。下位には二条の刺突列点文を山形に区画した中に網目文を施している。頸部にも押し引き列点文が一条施されている。4は口縁端部の破片であるが、残存部での文様構成は3と同じである。4は頸部で鋭く屈折し、口縁部は直線的に外反し、端部は角ばっている。色調は3・4とも暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

〈c類〉（第17図5）

口縁部外面上端から、刺突列点文と沈線をそれぞれ一条ずつ平行に巡らせ、さらに四条を1単位とした沈線を斜めに配している。下位に縦長で瓜形状の連続刺突文と二条の沈線を巡らせる。口縁部は内弯気味に開き、端部は尖り気味となる。淡褐色を呈し、焼成やや不良である。胎土も粗く石粒を多く含む。

〈d類〉（第17図6）

口縁部上半部と下半部にそれぞれ沈線を挟んだ上下二条の平行刺突文を巡らしたものである。口縁部は外反し、端部は角ばる。灰褐色を呈し焼成やや不良で、胎土も粗くザラザラしている。

② 胴部

胴部破片13点について文様構成によって次の3つに分けることができる。

〈e類〉（第17図16・19）

二条の沈線で区画された中に網目文を配したものである。黄褐色を呈し、胎土は粗い。

〈f類〉（第17図11～15・17）

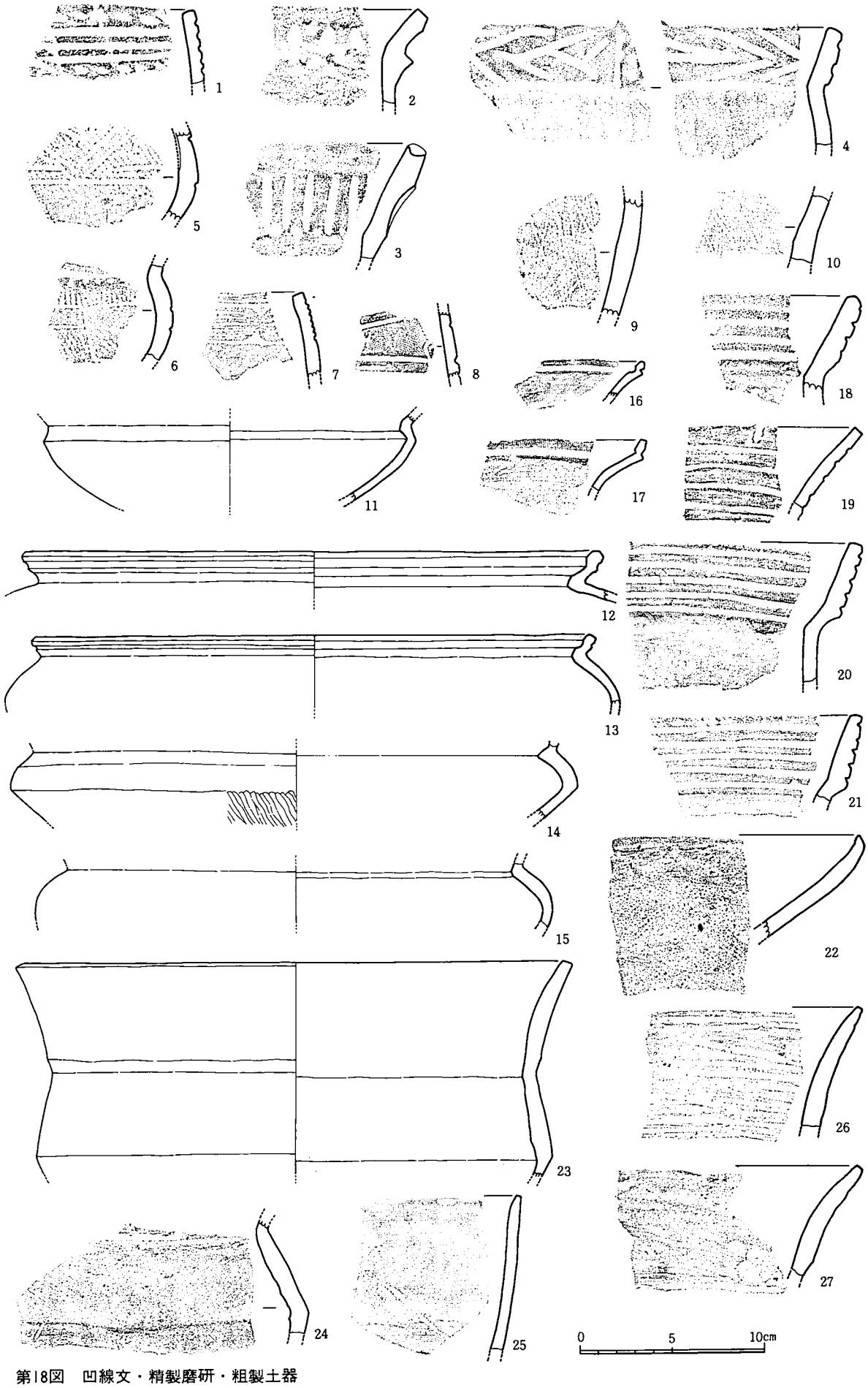
二条の沈線で区画された中に細かな撚糸文を配したものである。器壁は全体的に薄く、暗褐色を呈し焼成やや不良である。胎土に多量の石粒を含むが器面は丁寧にナデ調整されている。文様は平行するもの、斜行するもの、山形になるもの、十字形に交叉するものなどがある。

〈g類〉（第17図7～9）

二条の平行沈線で区画された中に、やや粗い撚糸文を施したものである。赤みを帯びた褐色を呈し、器面の調整は粗い。特にf類と比較して、撚糸文の単位・色調・胎土が著しく異なる土器群である。

後晩期の土器

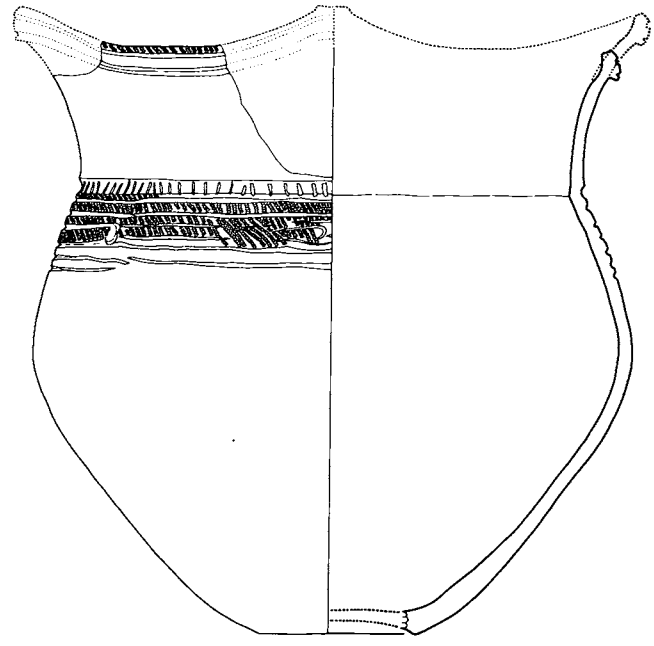
① 凹線文系土器（第18図1～4）1は口縁部が内傾して立ち上るもので、外面に三条の平行凹線文と上下に連続凹線を施している。赤褐色を呈し、胎土は緻密である。2は口縁部が屈曲肥厚し外面に断面三角形の粘土帯の貼付けを施し、この上部に連続刺突文を巡らせる。淡い黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。3



第18図　凹線文・精製磨研・粗製土器

の口縁部は外反し肉厚である。外面に幅３cmにわたって帯状に削られ、この部分に縦方向の凹線文と刺突文とが交互に施される。４は膨みをもつ胴部から頸部が屈曲して、口縁部はわずかに外反する。口縁部文様帯は縦方向の凹線で区画された中に刺突文を施し、この左右に「く」の字状および「逆く」の字状の凹線文様を配置している。胴部は縦方向へラケズリ調整されている。

なお１は北久根山式系、２～４は出水式系土器群である。



第19図　西平式土器　0　5　10cm

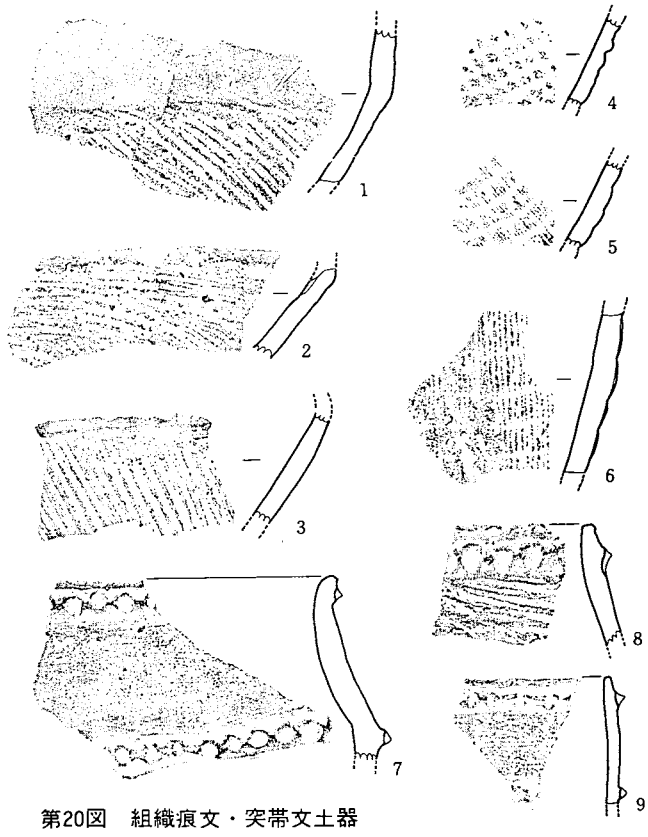
② 磨消縄文系土器他

（第19図、第18図５・６・８）

第19図は24号住居址の北西部11.5ｍの地点の第Ⅱ層下部から出土したもので、遺構に伴ったものではない。広口の深鉢形土器で、口縁部を部分的に残すにすぎないが、四方に山形口縁をもつものであろう。頸部の屈曲は弱く、口縁部はゆるやかに外弯して立ちあがり、端部は屈曲して内傾する。口縁上端は角ばり外部で小さく垂下する。胴部は中位よりやや上に最大径があり角張っている。底部は上げ底となる。口縁端部外面と胴部に磨消縄文帯を施している。口縁部は上下二条の沈線を巡らせ、磨消縄文は上部の沈線と口縁上端とのわずかな間隙に施される。胴部は７条の平行沈線を巡らせ、縄文は上部から５～６本目の沈線まで施している。沈線は４本目の沈線をそのまま下に「つ」字状に止めている。残存部での間隔は、円周のほぼ6分の1にあたる。沈線は縄文を施文前に施した部分と、施文後に施した部位が認められる。施文原体は単節斜縄文＝R{$\frac{L}{L}$である。器面は内外面とも丁寧に研磨されている。色調は暗褐色ないし黒褐色を呈する。

標式的な「西平式土器」に比較して、器形は全体として後出的な要素を認められるが、文様構成は「西平式」の範疇に含められるものである。

5･6は大きく膨らむ胴部破片で、5は外面に縄文を施したのち2条の沈線で平行･Ｖ字状に区画し、部分的に磨消している。6は平行及び縦方向の沈線で区画され、頸部に列点文を施している。5･6とも肉厚で灰黄褐色を呈し、胎土は粗い。8は微細な縄文を施している。黒褐色を呈し、器壁は薄く焼成も良好である。9･10は外面に歯文状の文様を細線で描いている。



第20図　組織痕文・突帯文土器

③ 精製磨研土器（第18図11～25）

11～15は精製浅鉢形土器、16・17は深鉢形土器で、11を除くとすべて口縁部の小破片である。11は小形の浅鉢形土器で口縁部と底部を欠失する。12・13は口縁部が「く」字形に強く屈折して外反し、口縁部の内外面に沈線を巡らせる。14・15はいずれも口縁部を欠失している。14は胴部が屈折するのに対し、15では弯曲していて13に類似する。特に14の胴部の屈折部を境として以下を縦方向の丁寧なヘラミガキで調整している。16・17も頸部が外反し、口縁端部で小さく屈折して立ち上るもので、内外面に一条の沈線を巡らせるものである。

18・20・21は有段口縁の外面に平行沈線を巡らせた精製深鉢形土器である。沈線は18・19が四条、20・21が五条である。沈線の断面形は18・20・21の3点は鋭い「V」字形であるのに対して19の「U」字状のものとは対照的である。19は外反する口縁部外面に四条の沈線をめぐらせたものである。器壁は前の3点に比べて極めて薄い。

23・24は胴部が屈折して、頸部が「く」字形をなす深鉢形土器で、内外面ともやや粗雑な研磨が施されている。22は口縁端部は小さく内側に弯曲する浅鉢形土器である。25は内外面とも丁寧に研磨された深鉢形土器である。なお23の復原口径30.2cm、胴部最大径28.0cmを測った。

17は御領式、11～12・16は天城式、13は天城式ないし古閑式、14～15・19～25は古閑式にそれぞれ比定され、縄文後期後葉～晩期前葉にかけての土器群である。

以上の土器群は一部縄文後期後葉のものを含むが、全体として晩期の前半期の所産であり、古閑式ないし、前半期後葉を含む時期に位置付けられる土器群である。

④ 粗製土器（第18図26・27）

26・27は外弯気味に開く深鉢形土器で、外面に条痕をもつものである。26・27とも古閑式土器に比定することができる。

⑤ 条痕文土器（第20図1～3）

胴部で屈曲する浅鉢形土器破片で、屈曲部を境として上部を研磨し、下部に条痕文を施す。条痕文は1・3は右下り、2は横位に施される。また2は屈曲部に接合面が認められる。接合方法は、下位粘土帯の内側に上位粘土帯を重ねている。これらの土器群は組織痕文土器と供伴することが多いが、胴部下半の条痕は組織痕そのものを消すために施されたものではなかろうか。1・3は赤褐色を呈し、焼成も良好である。2は黄褐色で部分的に赤味を帯る。いずれも縄文晩期前葉に位置付けられる。

⑥ 組織痕文土器（第20図4～6）

4はカゴ目状の圧痕で、深く明瞭な痕跡を残している。器壁は薄く、焼成良好である。5・6は細長い繊維を一定の間隔で糸を綴じたものである。1～3の条痕文土器群と同じく晩期前葉に位置付けられる。

⑦ 凸帯文土器（第20図7～9）

7は胴部で屈曲して「く」字形をなし、口縁部は内傾気味に立ち上る。口縁部外面と胴部に二重の凸帯を貼り付け、指頭による刻み目を施している。口縁部外面は横方向のナデ調整を施している。18も口縁上端部直下に凸帯を貼り指頭で刻目を施すが、器面は条痕による調整である。9も二条の凸帯をめぐらせたもので、胴部の屈曲はなく、口縁はやや内傾気味に直行する。器壁は極めて薄く、凸帯には棒状工具を押し当てた刻目である。いずれも夜臼式に比定できる。（野田）

3．先土器・縄文時代の石器

(1) 先土器時代（第21図）

遺構確認途中の竪穴住居址覆土中及び表土層より先土器時代に属すると考えられる石器が検出された。この石器の検出によって上の原台地上に先土器時代の包含層の存在が予想されることになった。唯、圃場整備計画の中で包含層削平の危険性がないため調査対象外となった。従って先土器時代石器群の全貌は、不明であり、その片鱗を示す資料ということになる。

検出された石器は、ナイフ形石器２点（内、台形石器１点)、掻器１点、削器１点、尖頭状石器（三稜尖頭器）２点、以上６点である。石質は、台形石器をのぞく５点が安山岩で、台形石器は、珪岩である。

１は、ナイフ形石器である。横長剝片を素材とし、素材の先端部に刃滑し加工を加えている。加工は、裏面からのものに限られ、状態は荒い。２は、ナイフ形石器で一般に台形石器と称されるものである。素材として横長剝片を用い、両側縁に裏面方向からの刃潰し加工を加え台形状に仕上げている。３は、掻器である。比較的厚手の横長の剝片を素材とし、基部を除くすべての縁辺に丁寧な加工を施して刃部を作り出している。所謂「円形掻器」と称されるものに相当しよう。４は、削器で、横長の剝片を素材としている。素材の先端部に裏面方向からの加工を施している。５は、尖頭状石器（三稜尖頭器）製作の過程で生じた調整剝片である。加撃は、尖頭状石器の稜上から行われたもので、これによって石器の先端部は失われていることになる。又、表裏両面に残されている素材の面から、この石器が剝片素材であることがわかる。６は、尖頭状石器(三稜尖頭器）である。先端部及び基部を欠損している。加工は、稜及び両側縁からのものである。

(2) 縄文時代

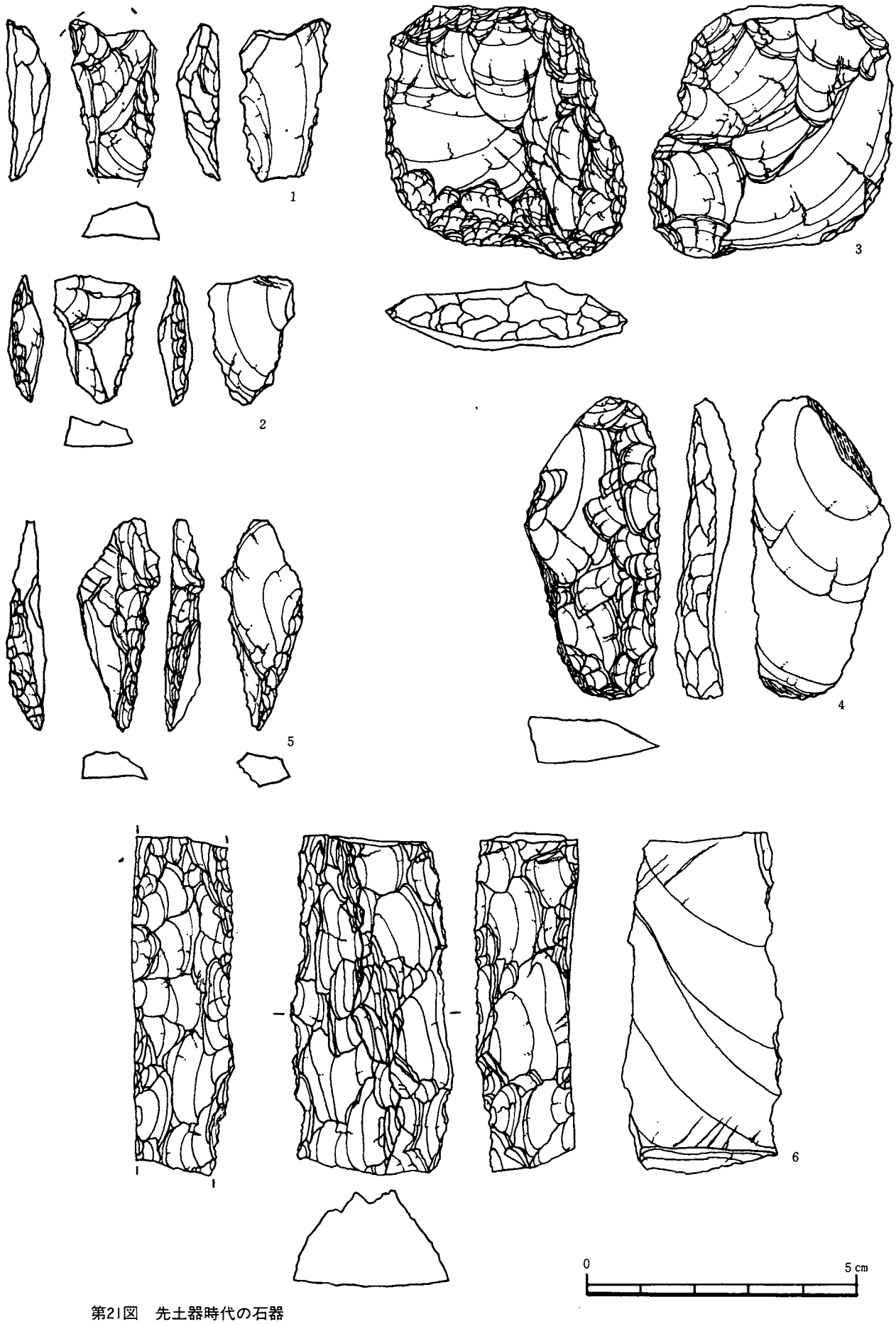
縄文時代に属すると考えられる石器には、削器、石錐、楔形石器、石錘、石鏃、敲打器、打製石斧、礫器、円盤状石器、磨製石斧、局部磨製石斧、大形粗製石匙、石皿、磨石類、二次加工ある不定形石器、剝片、砕片、石核がある。しかし、これらのほとんどが表面採集及び住居址覆土中のものであり、その所属時期については不明な点が多い。

① 削器（第22図１～６）

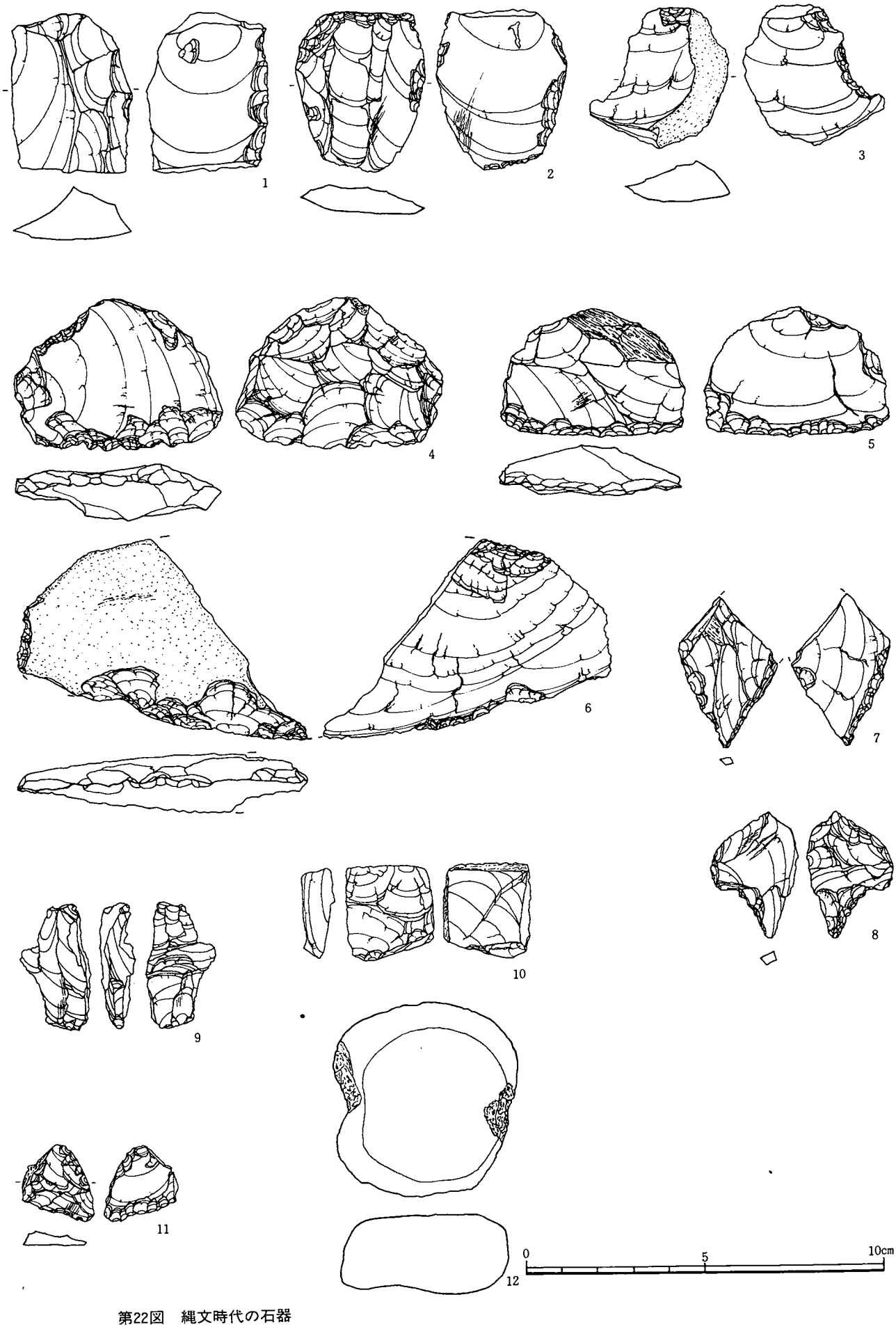
１は、刃器状剝片の左側縁に加工を施して刃部を作っているものである。石質は、流紋岩である。２は、寸づまりの剝片を素材とし、左側縁及び右側縁の一部に加工を加えている。表面の稜上及び先端部附近に磨痕を観察することができる。石材は、安山岩である。３は、縦長の不定形剝片を素材とし、その左側縁に加工を施している。石材は、珪岩である。４は、横長の剝片を素材とし、素材の右側縁及び左側縁に加工がある。刃部の状態は、鋸歯縁をなす。石材は、珪岩である。５は、横長剝片の先端部、表裏両面に加工を施して刃部を作っている。石材は、珪岩である。６は、幅広の横長剝片を素材として、素材の先端部、表裏両面に加工を施した削器である。石材は、ホーンフェルスである。

② 石錐（第22図７・８）

７は、横長の剝片を素材とし、素材の左側縁には表面から、右側縁には裏面からの加工による錐部をもつ。石材は、安山岩である。８は、厚手の横長剝片を素材とし、素材の表面を中心にして丁寧な加工を施して作り出した錐部をもつ。石材は、安山岩である。



第21図　先土器時代の石器



第22図　縄文時代の石器

③　楔形石器（第22図９～11）

截断面ある石器、ピエス・エスキーユと呼ばれる石器である。９は、平面形が長方形を呈するもので、上下両端に特有の微細な調整が施されている。石材は、黒曜石である。この石器は、押型文土器を伴う集石部分よりの出土である。従って、押型文土器段階のものと考えてさしつかえなかろう。10は、平面形が正方形を呈するものである。本資料も上下両端に微細な調整が観察される。石材は、サヌカイトである。11は、正面形が三角形を呈しているが、上下両端の特徴的な調整があることから楔形石器と判断した。石材は、良質の黒曜石である。

④　石錘（第22図12）

礫石錘とよばれるもので、両側縁に抉入部をもつ。抉入部は、敲打によって作り出され、素材としての偏平礫を大きく変えることがない。

⑤　石鏃（第23図１～15）

石鏃の形態は、茎に注目すれば、すべて無茎石鏃として分類される。そして、さらにその無茎石鏃を脚部作り出しの状況及び形状から６つの形態に分類できる。

第Ⅰ形態（１・２）

基部が大きく抉入するもので、その為に脚部が長くなる。長脚鏃とよばれるものである。その典型例である。２は、抉入部が比較的浅いが、脚部の形状より第Ⅰ形態と判断した。縄文時代早期に特徴的にみられるものである。

第Ⅱ形態（３～６）

脚部が二等辺三角形を呈し、Ｖ字状に切り込まれた抉入部を持つ石鏃である。抉入部の状況は、するどく切り込まれたもの（３・４）、浅く切り込まれたもの（５・６）の二様がみられた。

第Ⅲ形態（７・８）

抉入部がＵ字状に切り込まれ、全体の形状が横広である。脚部それぞれの末端部は広く、両末端部合わせて石鏃本体の2/3前後となる。

第Ⅳ形態（９・10）

全体の形状が柳葉形をとるごとく、幅に対して全長が長い。脚部の状況は異なる（９・10）が、形状的な点でまとめた。

第Ⅴ形態（11）

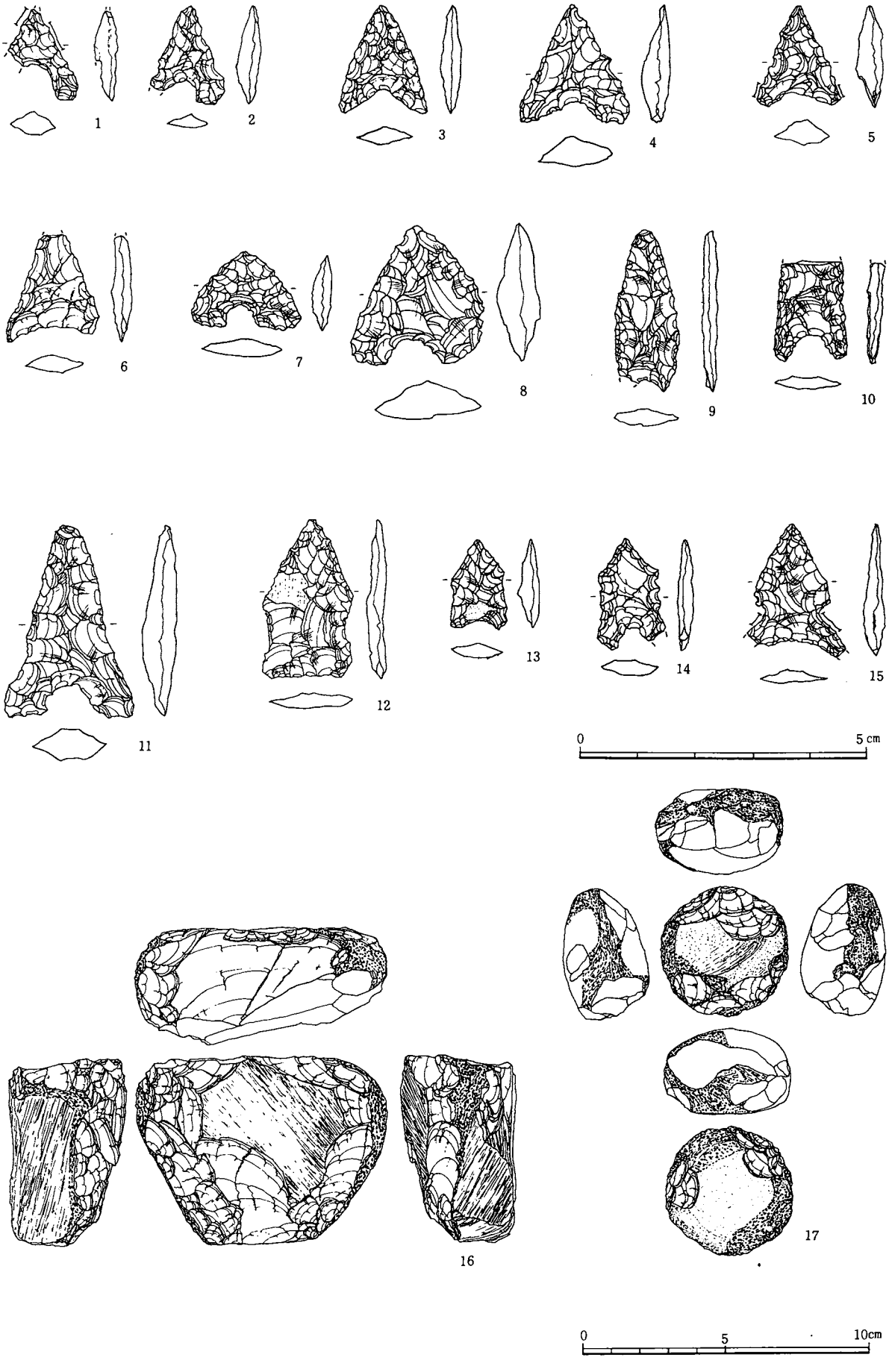
第Ⅳ形態と比較し、幅が広い、両側縁が脚部近くでややくびれ、異形部分磨製石器の形状をとるが、本資料には磨製部分がみられない。

第Ⅵ形態（12～15）

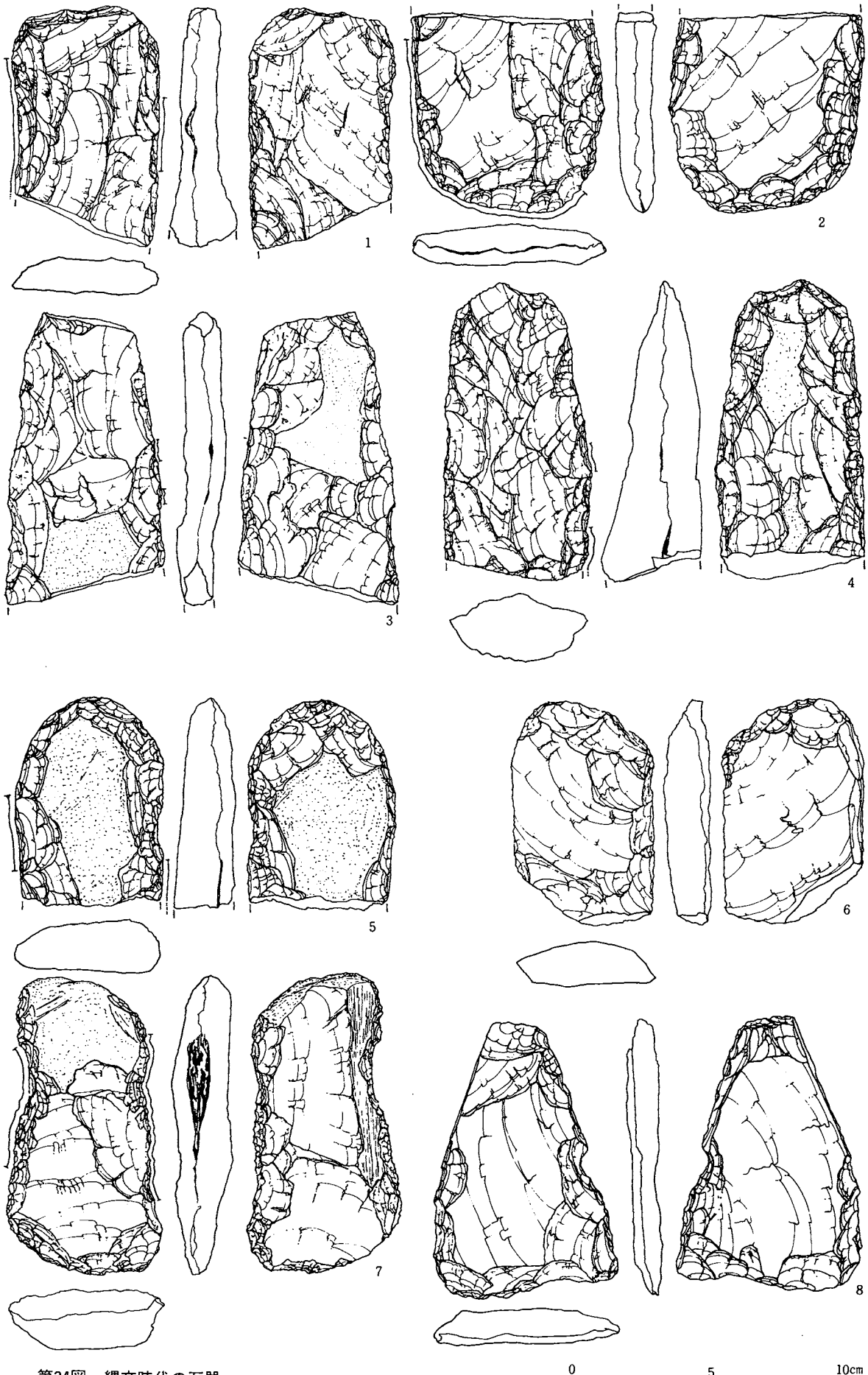
五角形石鏃といわれるものである。側縁部中央に突出部がみられる点に特徴がある。基部の状態は、脚部をもたないもの（12）、脚部をもつが短いもの（13・14）、脚部が大きくつき出すもの（15）がみられる。縄文時代晩期に特徴的にみられる。

⑥　敲打器（第29図）

１は、ホーンスタイン製の敲打器である。縁辺部分にそって敲打痕がみられ、それに伴い剥離がみられた。一見、石核を思わせるが、縁辺部の状況より敲打器と判断した。２は、玄武岩製の敲打器である。縁辺部に



第23図　縄文時代の石器



第24図　縄文時代の石器

敲打痕がみられ、しかも１と同様剥離痕がみられた。縁辺部は、使用のため、かなり荒れた状況を呈している。

⑦　打製石斧（第24図、第25図１～４）

打製石斧は、刃部の状態及び側縁部の状態より、四つの形態に分類できた。

第Ⅰ形態（第24図１～６、第25図１・２・３）

刃部が弓状の丸みを帯びた形状を呈し、かつ側縁が直線的となる。側縁の状態は、両側縁が平行なもの（第24図１・２・４・５、第25図１）と刃部がやや幅広で側縁が刃部側に向ってひろがるもの（第24図３、第25図２・３）とがある。

石材は、千枚岩のもの（第24図４）をのぞきすべて安山岩である。素材には横長の剥片（第24図１・２、第25図３）及び扁平な礫（第24図３・５）が使用されている。唯、石斧に対応する横長の剥片は、出土していないが、石斧の未加工品（第24図６）及び残置された素材面から横長剥片素材は、ある程度裏付けられるものと考えられる。

使用時の磨耗痕と思われるものも認められる。刃部のみのもの（第24図１）、刃部及び基部にみられると考えられるもの、（第24図５）、基部から側縁部の一部にまで及ぶもの（第24図２）の三様が資料中にある。中でも第25図１の資料は、顕著で刃部附近・稜線に磨耗痕が及んでいる。一方、打製石斧の側縁の一部に残される着柄の際に生じたと考えられる磨耗痕も認められる。この場合、磨耗痕は、石斧本体中央部より上半部に残され、そのことからも着柄痕と考えてさしつかえなかろう。唯、資料が少ないため着柄状態の復原に係わる両側縁の部位の傾向はつかめなかった。

第Ⅱ形態（第24図７）

刃部が弓状の丸みを帯びた状態を呈し、かつ側縁部が内弯するものである。両側縁の抉入部を中心にして顕著な着柄痕が認められる。石材は、粘板岩で、素材となる剥片は、横長剥片である。

第Ⅲ形態（第24図８）

刃部・側縁部が直線的で、しかも片刃のものである。その状態から考えれば、直刃式片刃打製石斧、トランシェ様石器と呼ばれるものに近似しよう。唯、刃部の状態が素材面ではなく、調整によって作り出されたものであり、大きな違いは指摘できる。石材は、硬質頁岩で、素材となる剥片は、横長剥片である。

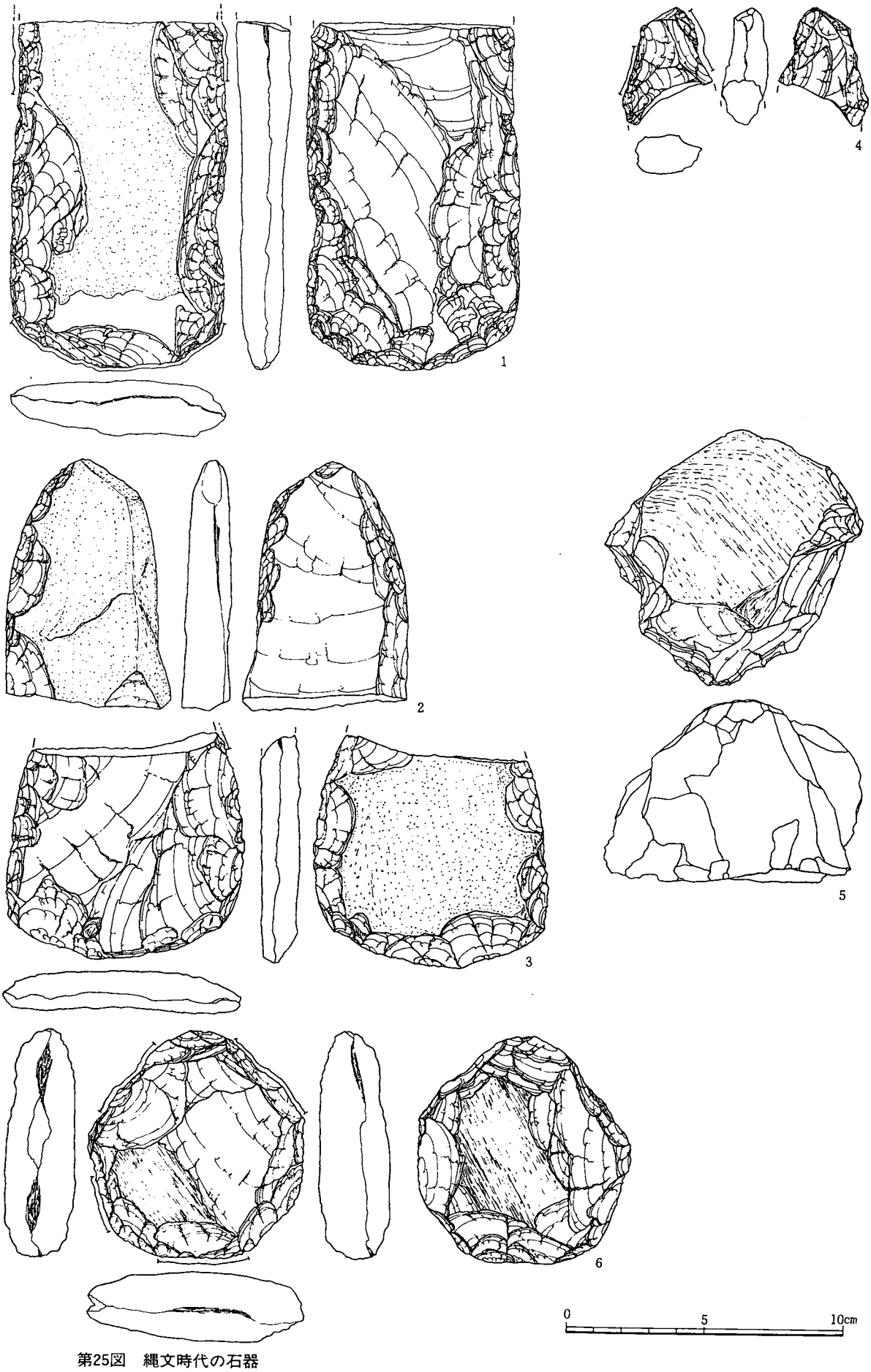
第Ⅳ形態（第25図４）

刃部の状態は、不明であるが、基部部分が狭くなり、かつつまみ状を呈するものである。唯、刃部及び側縁部の状態が不明であり、形状は、明確にできないが、洋梨の形状を呈するものと考えられる。石材は、安山岩である。

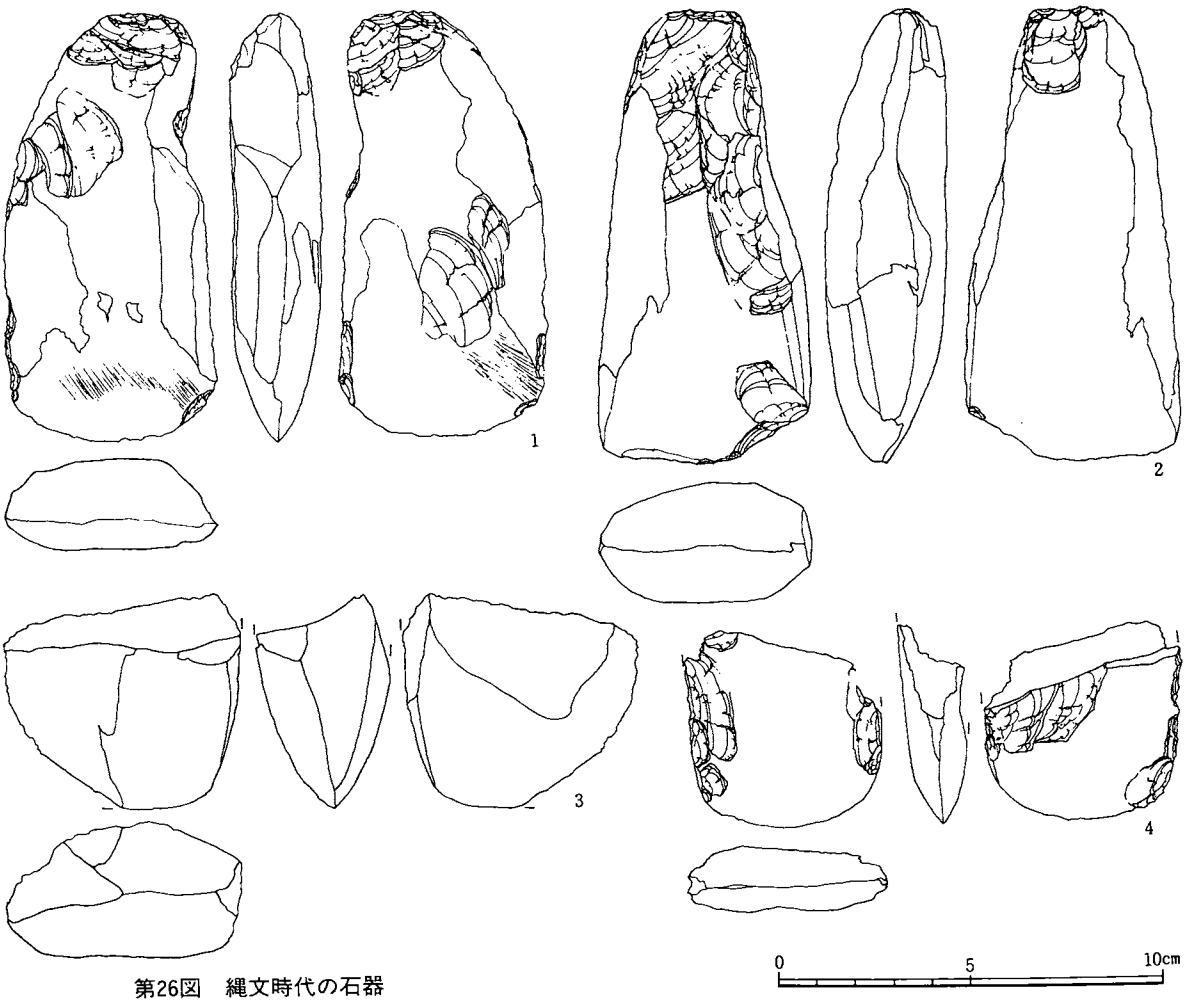
以上、打製石斧は、第Ⅰ～Ⅳの形態に分類が可能となった。唯、打製石斧の所属時期については不明な点が多いが、傾向として縄文時代後期後半～晩期にかけて集中することから、ほぼこの時期のものと考えたい。しかし、形態各々の時期的な偏りは不明である。また、形態各々の量的関係では、55年度分を加味しても圧到的に第Ⅰ形態が多い。このことは、縄文時代期後半～晩期の遺跡の傾向と合致する。

⑧　礫器（第25図５）・円盤状石器（第25図６）

礫器は、礫を半割し素材としている。そして、その剥離面より加撃を加え、かつ礫面より剥離面方向への加撃を加え、刃部を作り出している。石質は、ホーンスタインである。円盤状石器は、表裏両面に礫面及び



第25図　縄文時代の石器



第26図　縄文時代の石器

節理面を残し、周辺より求心的な加工が施されたものである。石器縁辺部には、かなりの磨耗痕がみられ、その状態は、ほとんど差異はなく、使用時のものなのか、着柄時のものなのか不明である。石質は、雲母片岩である。

⑨　磨製石斧（第26図）

磨製石斧の刃部の状態は、１・３が円刃（以下、状態の名称は、佐原真氏の用語による）、２・４が直刃であり、またすべて両凸刃である。

以上、刃部の観察から形態を考慮すれば、円刃式両凸刃形石斧（１・３）及び直刃式両凸刃形石斧（２・４）という分類も可能となろう。

さて、これを縦斧・横斧という関係でみていけば、使用痕の可能性があるものがみられる石斧は、２点のみで、１と２である。１は、斜めに走る線状痕が観察できることから、縦斧として、また２は刃部にほぼ垂直に走る線状痕が観察されることから横斧として認定することが可能となる。これは、すなわち、１の円刃と２の直刃の対応関係と呼応してもいる。唯、これについては資料的に少ないことから不明と考えることが妥当であろう。

⑩　局部磨製石斧・大型粗製石匙（第27図）

１は、局部磨石斧である。表面の刃器及中央部、裏面に刃部に磨製部分がみられ、また表面の右側縁寄り

に敲打面が観察された。大型の横長剝片を素材とし、石材は安山岩である。

2は、大型粗製石匙である。大型の横長剝片を素材とし、その縁辺部に簡単な加工を施し、さらにつまみ部に抉入加工をくわえ、全体の形状を作っている。縁辺部には、つまみ部附近に着柄痕と思われる磨滅痕が、刃部にも使用時のものと思われる磨滅痕が観察された。石材は、安山岩である。

⑪ 石皿（第28図1～4）・凹石（第28図5・6）

1・2は、河原石を素材とし、作業面が二枚あるもの（1）、一枚のもの（2）である。作業度は、両者とも低く、凹部は顕著ではない。3・4は、欠損品である。その中でも3は、かなり磨滅の状況が激しい。

5・6は、凹石である。両者とも一面全体に敲打痕がみられ、部分的に円形ないし楕円形の皿状を呈した凹部がみられる。5は、側面部にも敲打痕が観察され、しかも表裏両面に凹部がみられる。

⑫ 磨石類（第29図）

磨石は、敲打痕の有無及び位置より3つの形態に分類することが可能である。

第Ⅰ形態（8）

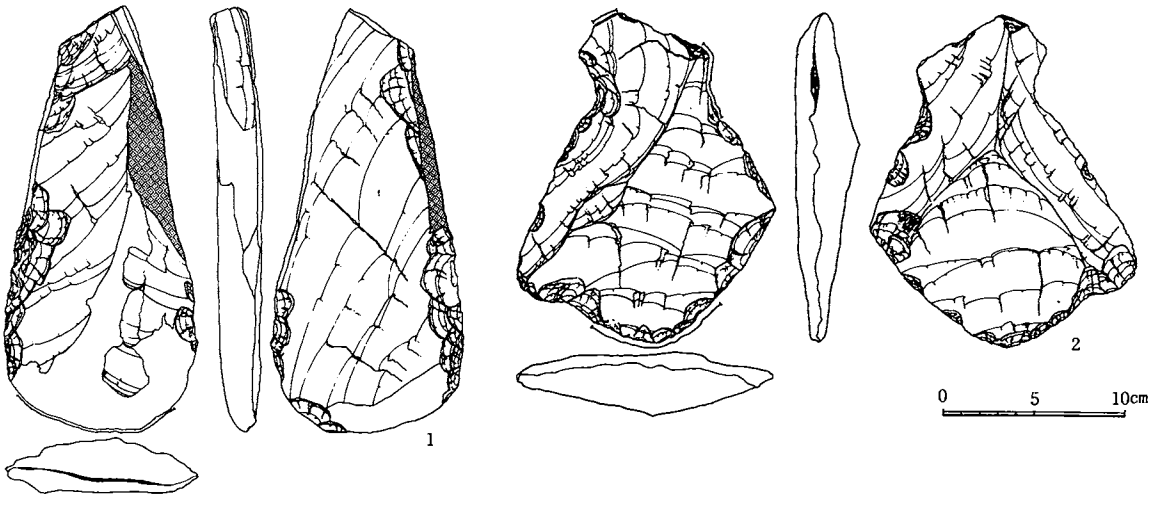
敲打痕がまったくみられず、磨痕のみが観察されるものである。

第Ⅱ形態（1～7・10）

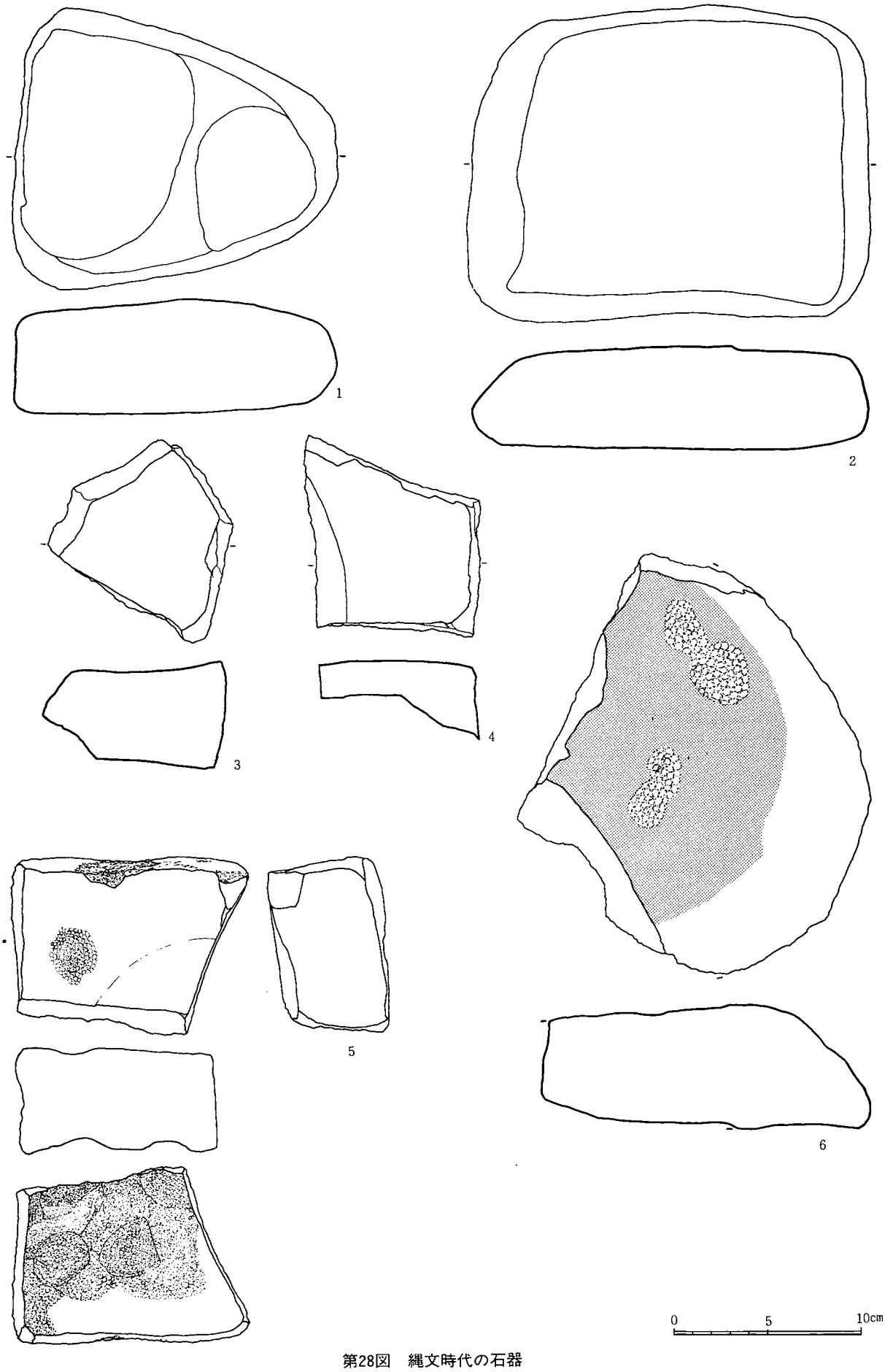
磨痕と同時に側縁部・表裏面に敲打痕がみられるもの（1・3～7・10）と表裏面にみられるもの（2）とがある。また表ないし裏面の敲打痕では、その断面が皿状にくぼむもの（1～3・5・7・10）とそうではないもの（4・6）がある。唯、この差は、使用頻度の差と判断しておきたい。

第Ⅲ形態（9・11～14）

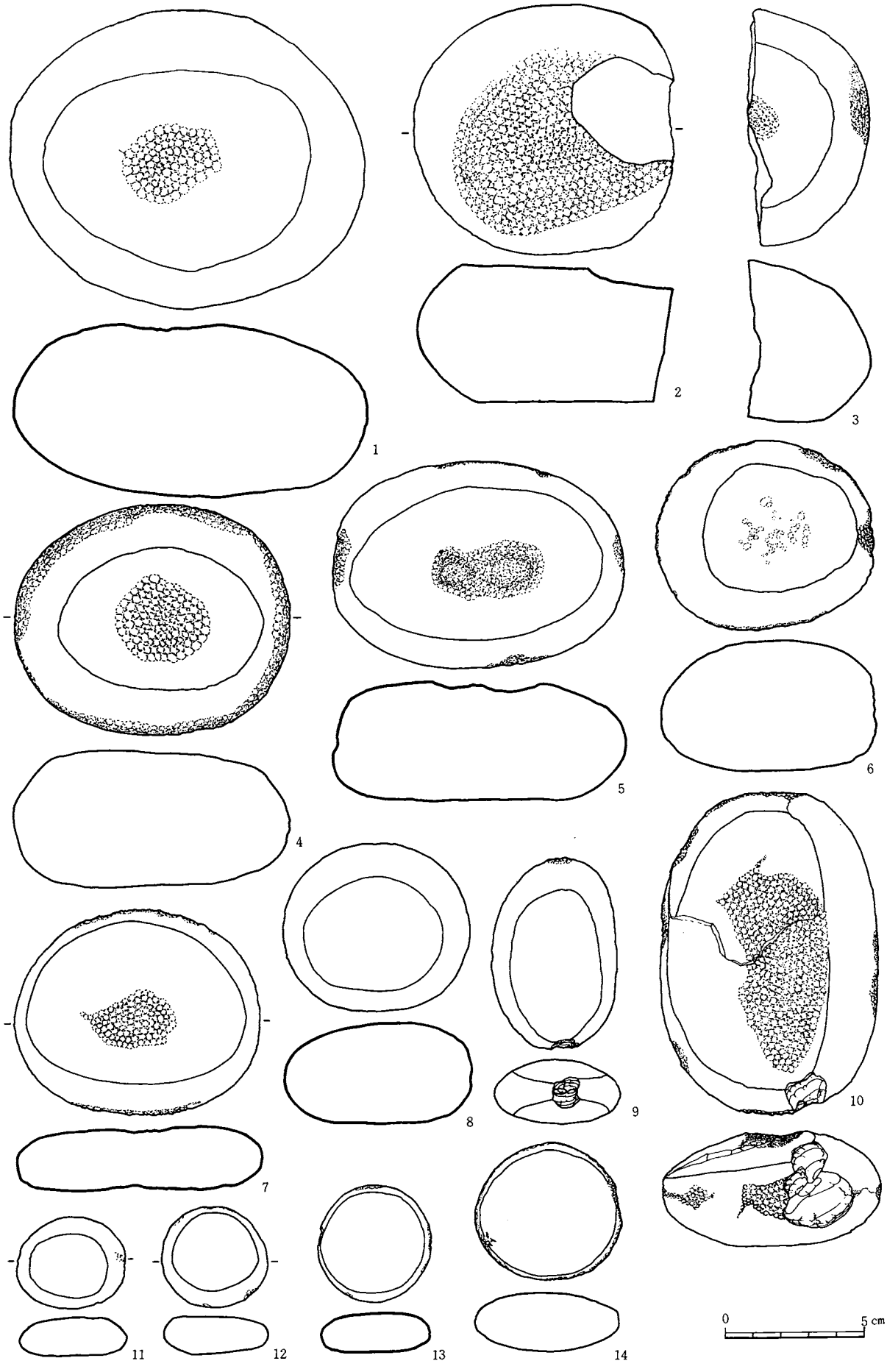
磨痕と同時に側縁部のみに敲打痕がみられるものである。敲打具としての機能が推定されよう。



第27図　縄文時代の石器



第28図　縄文時代の石器



第29図　縄文時代の石器

⑬　二次加工ある不定形石器（第30図１～６）・使用痕ある剥片（第30図７・８）

１は、左右両側縁の一部に裏面方向からの加工がみとめられる。石材は、流紋岩である。先土器時代に属する石器である可能性がある。２は、刃器状剥片の右側縁部に裏面方向からの加工が施されたものである。石材は、黒曜石である。３は、刃器状剥片の左右面側縁の一部に裏面方向からの加工が施されたものである。石材は黒曜石である。４は、刃器状剥片の左側縁に表面及び裏面からの加工がある石器で、石材は黒曜石である。５は、縦長の剥片を素材とし、左側縁に裏面からの、右側縁に表面からの加工が施された石器で、石材は、黒曜石である。６は、縦長剥片の先端に表面からの加工を加えた石器である。石材は、黒曜石である。

次に、７・８は、使用痕ある剥片であるが、横長の不定形の剥片を素材とし、その先端部に使用痕がみとめられる。石材は、７が黒曜石で、８がサヌカイトである。

⑭　剥片（第30図９～22）・石核（第31図）

剥片は、剥片の形状（縦長・横長）及び表面の剥離の状態から観察した。

縦に長い剥片（縦長剥片）には、刃器状のもの（９～11)、この場合、剥片剥離の状況は、上、下方向からの剥離。一方、上下及び横からの剥離痕が残されるものもある（12～15)。この場合、剥片は、前者のものと比較して、定形化していない。

次に横長剥片では、上下両端からの剥離にかぎられるもの（19・20・22・23）と求心的な剥離痕が残されているもの（16・17・21)、及び求心的ではないが、斜め方向からの剥離痕が残されているもの（18）とがみられる。

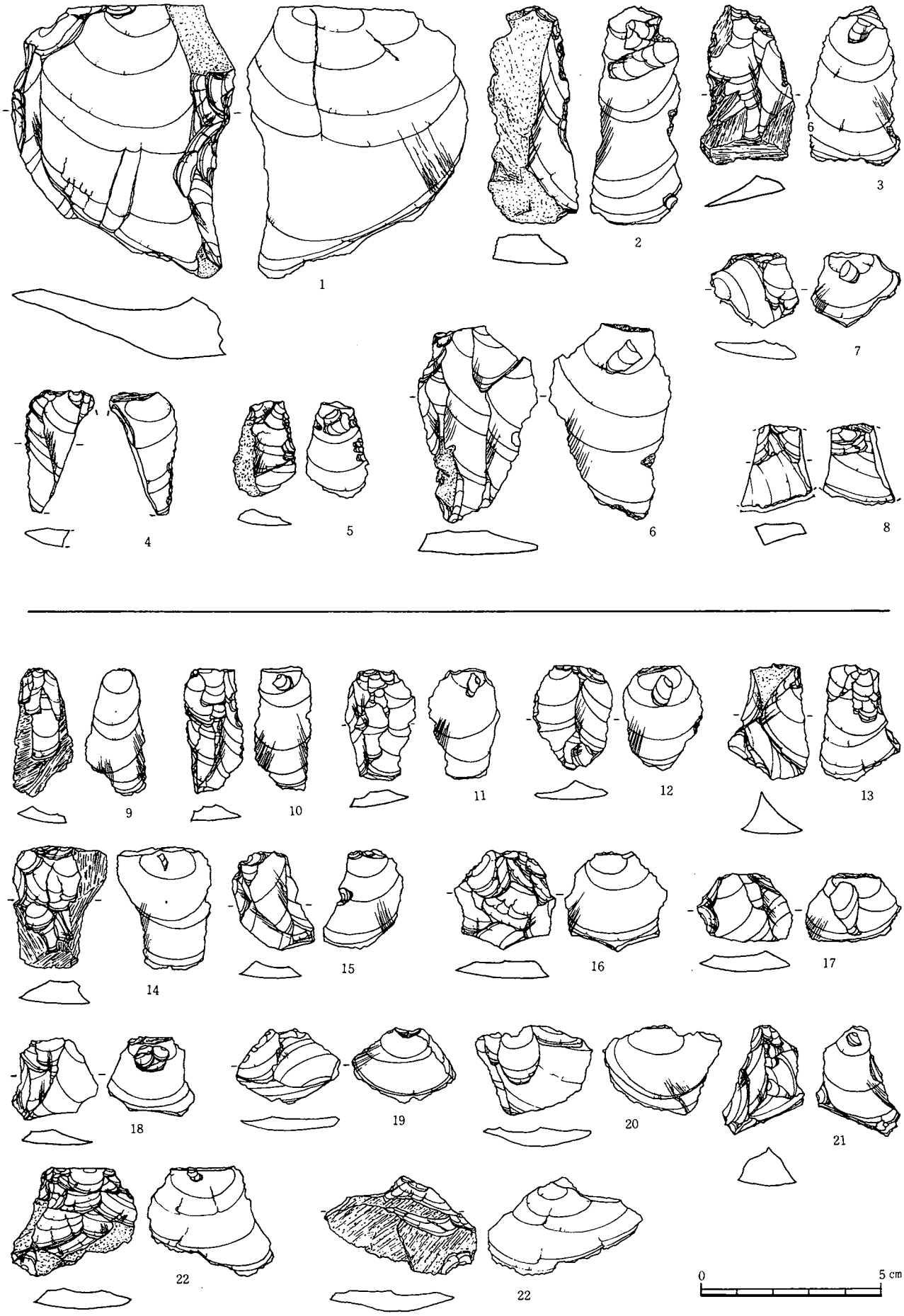
以上五つの剥片にまとめたが、これらを上記した記述順に、縦長剥片ａ・ｂ、横長剥片ａ・ｂ・ｃと呼称したい。それぞれの剥片のａ・ｂがどの様な関係にあるのかということは、不明である。しかし、このそれぞれが、石核の状態を示すものであることも充分考えられる。しかしながらこの場合、それぞれの剥片に対応すると考えられる石核の存在が必要である。そこで石核に着目したい。

剥片に対応する石核としては、横長剥片に対応するもの（第31図）のみが出土した。これらの石核を観察すると、石核の一端から交互に剥片剥離を行い、結果両刃礫器の状態を示すもの（１・２）と求心的な剥離痕を残す面があるもの（３）とがあることを知る。そこで、それぞれの石核を便宜上、石核Ⅰ（この中で２は先土器時代に属する可能性が高い）及びⅡと呼称して、そこに残された剥離痕の状態から剥離される剥片の状態を考えてみたい。

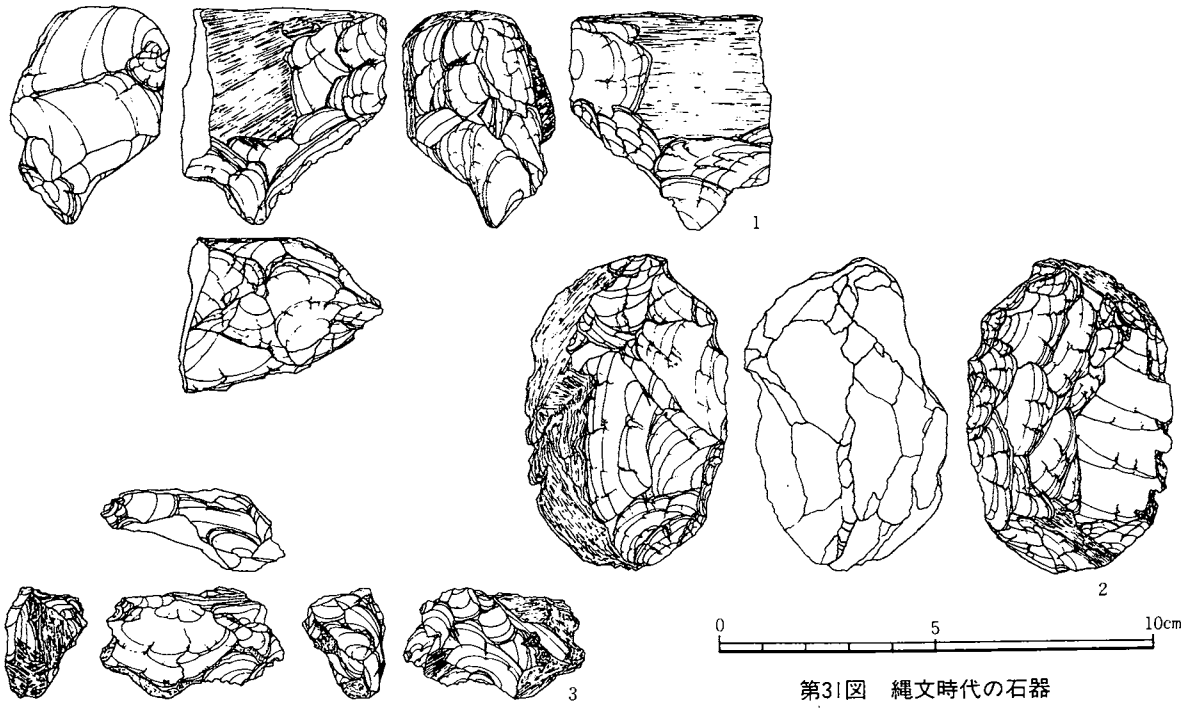
石核Ⅰ（１・２）は、交互の剥片剥離技術となるため石核の一端から他端に向って剥離が進行する。従って剥片には上下方向からの剥離痕が残ることはない。剥片に残る剥離痕は、石核中央部では同一方向、以下剥離が上下に進行する過程で、斜め方向の剥離痕が加わって行くものと考えられる。この状態を示すものは、横長剥片ｃ及び同一方向からの剥離痕を残す剥片の一部である可能性が高い。

一方、石核Ⅱ（３）は、どうであろうか。この場合、石核には、かなり求心的剥離に近い面がみられる。すなわち、上下及び右方向からの剥離である。唯、石核の表面は、新しい剥離が下端まで貫けており観察不可能である。以上の事を考えると石核Ⅱに対応する剥片は、横長剥片ｂの可能性が高い。そして、横長剥片ａの一部も対応することも考えられる。

以上の分析は、あくまでも接合関係から導き出したものではなく、不備な点が多くある。今後、縄文時代の剥片剥離技術の研究の上で接合関係をふくめた具体的な研究が熊本県下でものぞまれるところである。



第30図　縄文時代の石器



第31図　縄文時代の石器

⑮　上の原遺跡における剥片剥離技術の一端―接合例より―（第32・33図）

上原遺跡では、時期不明の接合資料が出土している。石材は、サヌカイトで、剥離されたものは、いずれも平面形が三角形をなす横長の不定形剥片である。これは、原石の形状に大きく左右されているために三角形の形状をとるものだと言える。

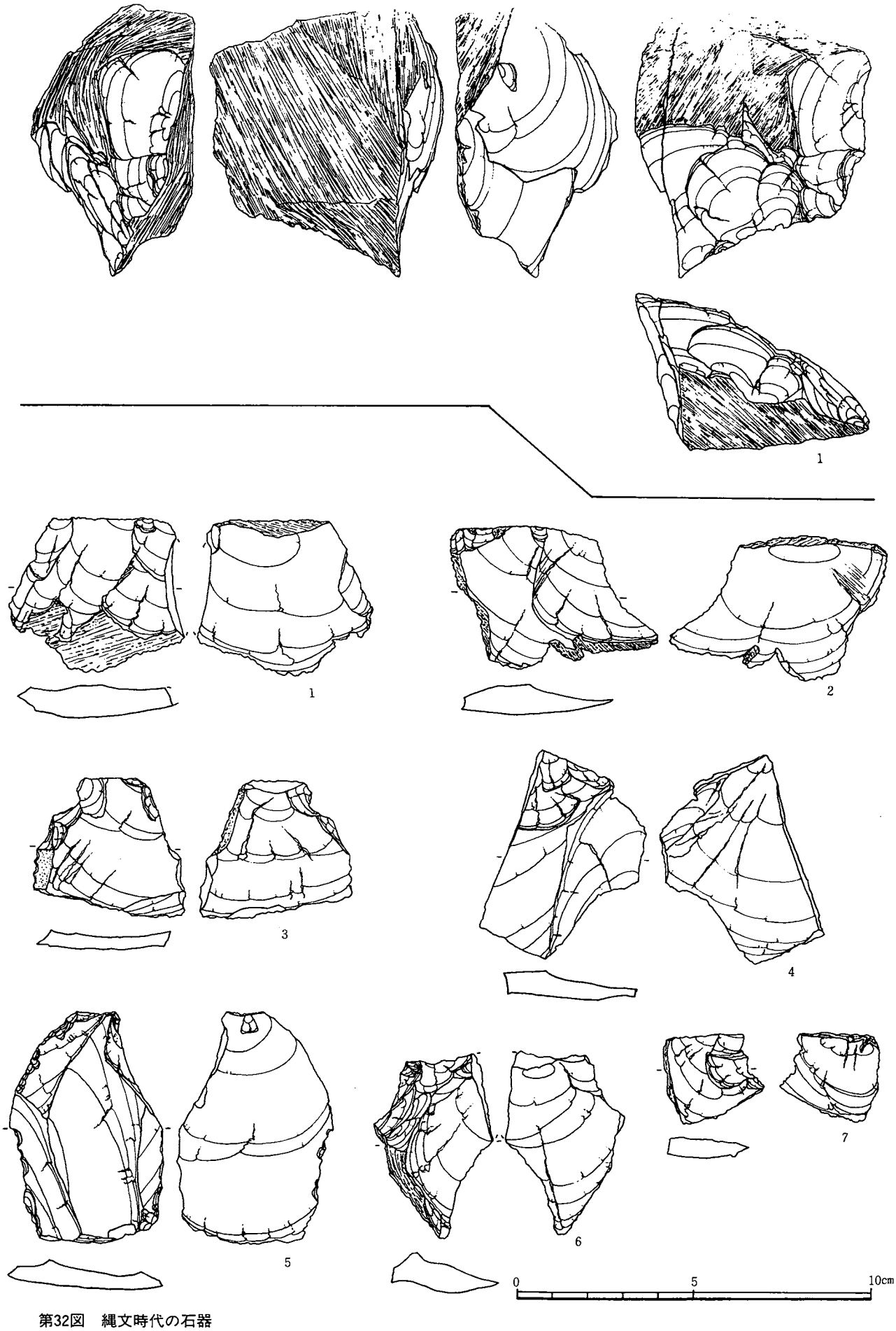
さて、この接合関係を剥片剥離の進行過程にそって観察していきたい。本資料で観察される第一次の剥片剥出は、表面の左側に見られる。そして、次の剥片剥出は、その右側に進行する（１）。この二つの剥片剥出は、剥片全体接合の表面に残された二枚の剥離痕の状態より判断できる。次に剥片剥出は、もう一度、左に位置をかえる（２）。以上第三次の後、第四次は、表面に残された稜を目印にしたかのように右に位置をかえる（３）。続いて、左に、そして同様に右（４）、左（５）という順をふんで行く（第33図）。

すなわち、表面観からの進行状況は、「左→右」ないしは「右→左」の繰り返しを示し、打点の位置は、除々に右側に移行して行く。これを打面方向から観れば、打点の位置は、除々に右側に移行して行く。これを打面方向から観れば、打点は、右斜め方向へ稲妻形に移行していくことがわかる。

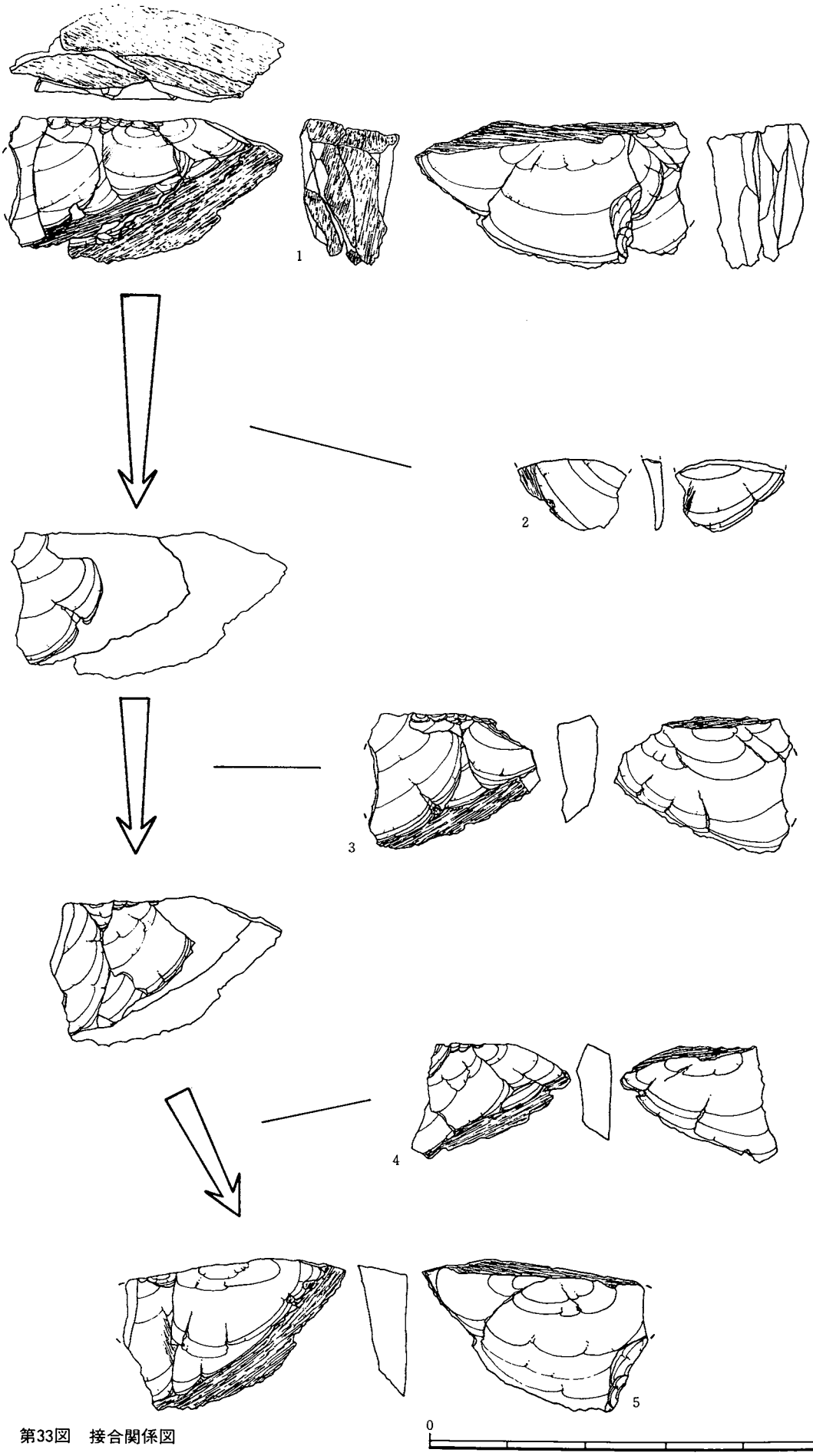
では、石核の素材は、どのように用意されるのであろうか。第32図は、その片鱗をうかがわせるものである。この資料は、一つの素材を分割し、その一つを石核に採用して、剥片剥出を開始した最初の剥片と石核に採用されなかったものとの接合例である。この場合、石核に採用されていないものに残された剥離痕は、分割前の剥片剥離作業であろうか。一つに裏面に残された剥離痕を切った形で分割が行われている。二つに残された剥離痕によって分割面は菱形をとり、打面に対して下縁部は平行関係にある可能性が高い。以上の事を考え合わせれば、問題の剥離痕は、石核整形の意味でのものと考えることが妥当であろう。

上記した二つの接合例は、そのまま直接的に同一の剥片剥離技術として結び付ける訳にはいかない。従って、ここでは石核を用意する場合、石核の素材を分割し、その分割面から剥片剥出を開始する技術が一つあるということ、及び剥片剥離技術の一つとして稲妻形に打点を移行していくものがあるということと分離しておきたい。

（木﨑康弘）



第32図　縄文時代の石器



第33図　接合関係図

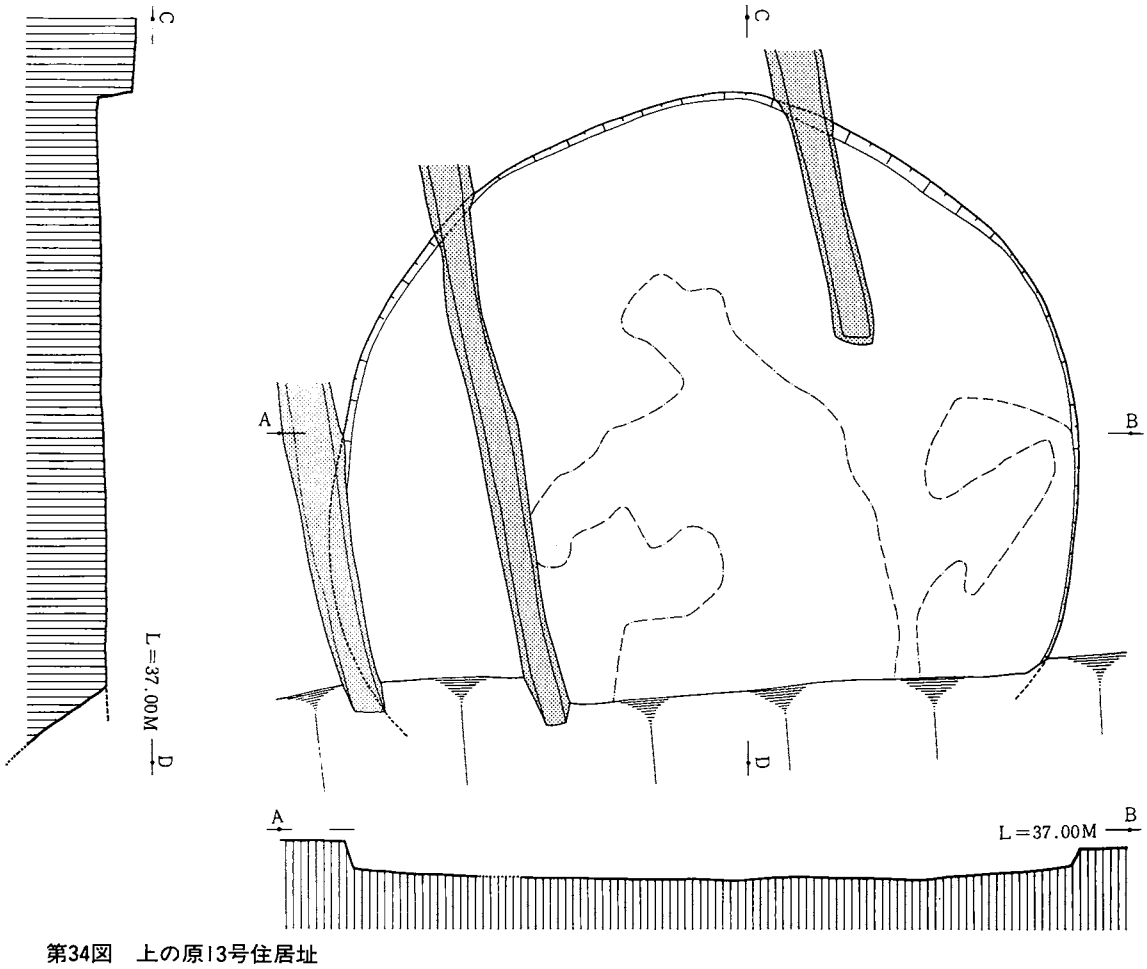
第４節　弥生時代の遺構と遺物

1　竪穴住居址

弥生時代の遺構は、昭和53年度の調査によって検出した竪穴住居址１軒（藤山１号住）と２基の甕棺があり、54年度では12軒の竪穴住居址を検出している。特に54年度分の12軒については、古墳時代以降の竪穴住居址とも合せて検出した順に従って、上原1･2･3号住居址のように機械的に呼んだために、やや複雑になったことは否めない。したがって２ヶ年にわたる調査によって検出した118基の住居址のうち、弥生時代の住居址は上原13号・24号・30号・32号・36号・57号・60号・61号・63号・66号・68号・102号・さらに藤山１号を加えた13基である。これらの住居址の平面プランには、円形のものと長楕円形のものとの二者があって、円形プランは第13号・24号・32号・57号・63号・102号の６軒で、長楕円形プランは第30号・36号・60号・61号・66号・68号および藤山１号の７軒である。以下順を追って説明を加える。

(1)上の原13号住居址（第34図）

30号住居址の西に隣接し、66号住居址との間に位置している。したがって、30・13・66号の３軒の住居址は、北東から南西方向にほぼ一列に並んでいる。住居址の平面プランは略円形で、長径6.0ｍ、短径5.8ｍを



第34図　上の原13号住居址

測る。南西部側が全体の$\frac{1}{4}$程度を近世の溝状遺構により削平・撹乱を受け、また北西から南東方向に走る三条の耕作溝によって、それぞれ壁面・床面を失っている。

壁高は確認できた地山面（Ⅲ層）から、最大27.0cm、最少で18.0cmを測るが上部からかなり削平を受けていて、かならずしも旧状を示すものではない。住居址中央部は壁側に比べてわずかに深くなっている。床面中央部と東側の一部に踏みしめられ硬化した床面を残すが、他の部分は軟かい。床面には柱穴・炉址等は認められず、又住居址の周囲においても同様であった。

床面および埋没土中からの遺物の出土は細片を除くと、住居址そのものに伴うものは皆無であった。したがって本住居址についての年代決定をすることは困難であるが、他の諸例から、円形プランであること、埋土中に弥生期の土器細片を検出していることなどから、ここでは他の弥生期の住居址群と一連のものとして取り扱うこととした。

(2)上の原24号住居址（第35図）

弥生期の住居址群の中で、北西の端にあり、13号住居址の西約26ｍの地点に位置している。住居の規模は長径7.2ｍ（東西）、短径7.0ｍ（南北）で、床面積約40.7㎡を測るほぼ正円形の住居である。確認できた地山面（第Ⅲ層）からの掘り込みの深さ、すなわち壁高は最大で0.85ｍ、最小でも0.50ｍを測った。プラン確認面はⅢ層中位であるが、床面はⅤ層下部に達している。床面は南側に比べて北側がわずかに低いものの、ほぼ水平面を保っている。また、壁直下の部分を除くと、ほぼ全面硬く踏みしめられている。床面のほぼ中央に0.60×0.58ｍの平面形が不正円形で、断面形Ｕ字状の地床炉様のものを持つが、わずかに炭化物が認められたものの、焼土など火を使用した明瞭な痕跡は認められなかった。

地床炉様ピットの周囲にほぼ同心円上に19個の柱穴掘形を検出した。柱穴の規模・深さはばらつきがあるものの、Ｐ１～Ｐ10・Ｐ12・Ｐ14・Ｐ16～Ｐ17については、上屋を支える中心的な柱の掘形で、他の掘形はいわば補助的なものであろう。

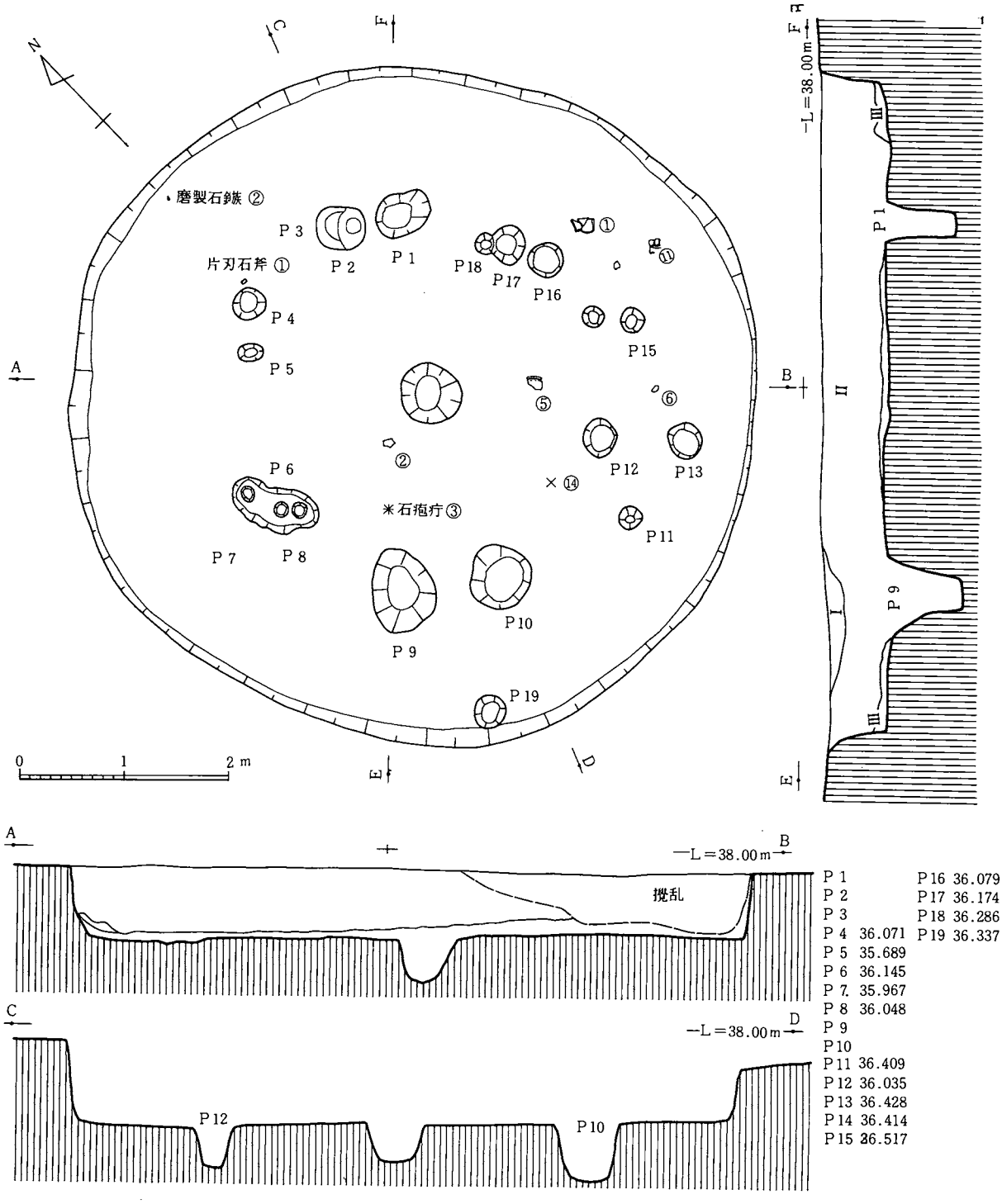
住居址内の埋没土は３つの層からなり、１層は黒色土層で本遺跡標準層序でいうⅡ層に相当する有機質の土層である。２層は暗褐色土層で住居内覆土層の大部分をしめ、床面近くまで及んでいる。遺物の多くは２層の下面から、一部３層上面（床面）に接して出土した。３層は硬化した床面を含む残位層で地山層（Ⅴ層）の細かなロームブロックを含む、おそらく住居構築時の床面整地とその後の若干の堆積物を含む土層である。

13軒の住居址の中では、出土遺物の量も多く、種類もバラエティーに富んでいる。土器は細片をも含めると約60点近くが出土したが、このうち図化することができたものは、第36・37図に示した14点である。このうち、１・２・５・６の甕形土器、11の壺形土器、14の朝鮮無文土器は、床面に密着して出土したもので、本住居址の年代を決定する上で、重要な位置を占める土器群である。そのほか３・４の甕形土器、７・８・９の甕形土器底部、10・12・13の壺は住居址内埋没土層のうち２層上・中位から出土したものである。

一方、いわゆる大陸系磨製石器が３点出土している。北側の壁側に磨製石鏃（第38図の②）、Ｐ４の北側に接して扁平片刃石斧（第38図の①）、さらにＰ９の北側に石庖丁（第38図の③）がそれぞれ出土している。いずれも床面に密着して出土していて、前述の土器群と同一時期の所産と考えられる。

〈出土遺物〉

住居址覆土中から出土した土器は、計60点に及んだが、これらのうち完形品は皆無で、復原図化すること



P 1		P16	36.079
P 2		P17	36.174
P 3		P18	36.286
P 4	36.071	P19	36.337
P 5	35.689		
P 6	36.145		
P 7	35.967		
P 8	36.048		
P 9			
P10			
P11	36.409		
P12	36.035		
P13	36.428		
P14	36.414		
P15	26.517		

第35図　上の原24号住居址

ができた破片は14点であった。前述したように、14点のうち24号住居址に伴うとみられる土器は、第36図の1・2・5・6・11・14の6点で、他は上層覆土に包含されていたものである。

①甕形土器

甕形土器には大別して3者があり、A＝口縁部は断面が台形をなす刻目凸帯、肩部にも一条の刻目凸帯をめぐらすもの、B＝同じく「L」字状の口縁で肩部に一条の沈線をめぐらせるもの、C＝「L」字状口縁で口縁下部に何ら文様をもたないものからなる。

甕A（第36図1・2）

1はわずかに内傾する口縁部外面に断面三角形の凸帯をめぐらし、端部に約1cm前後間隔の刻目をヘラ状の工具で施している。また口縁上端部はほぼ水平となる。肩部ややふくらみ、この部分に断面三角形の小さな凸帯をめぐらせ、端部は口縁部と同様1cm前後の間隔の刻目をほどこしている。内外面とも刷毛目調整するが口縁部内外面および、口縁と凸帯の間は刷毛目調整のあと横ナデにより仕上げられている。復原口径21.7cm。胴部最大径21.0cm。焼成良好で、多量の砂粒を含む。2は1同様口縁下部に断面三角形の刻目凸帯をめぐらせるもので、口縁部は内傾気味に立ち上り、外面に粘土ひもを貼り付けた口縁部をつくり、先端部は下り気味となる。口縁端部には肩部の凸帯と同様に1cm前後の間隔の荒い刻目をほどこしている。肩部はややふくらみをもっている。内外面とも刷毛目調整し、口縁部内外面と、凸帯の上下は、貼り付けの際に横ナデされる為に刷毛目が消される。器壁は全体に厚くつくられているが、口縁部と胴下半では、器壁が薄くなる。復原口径27.5cm、胴部最大径24.5cmを測る。焼成良好で、多量の砂粒を含んでいる。胴部外面の上半部に炭化物の付着がみられる。

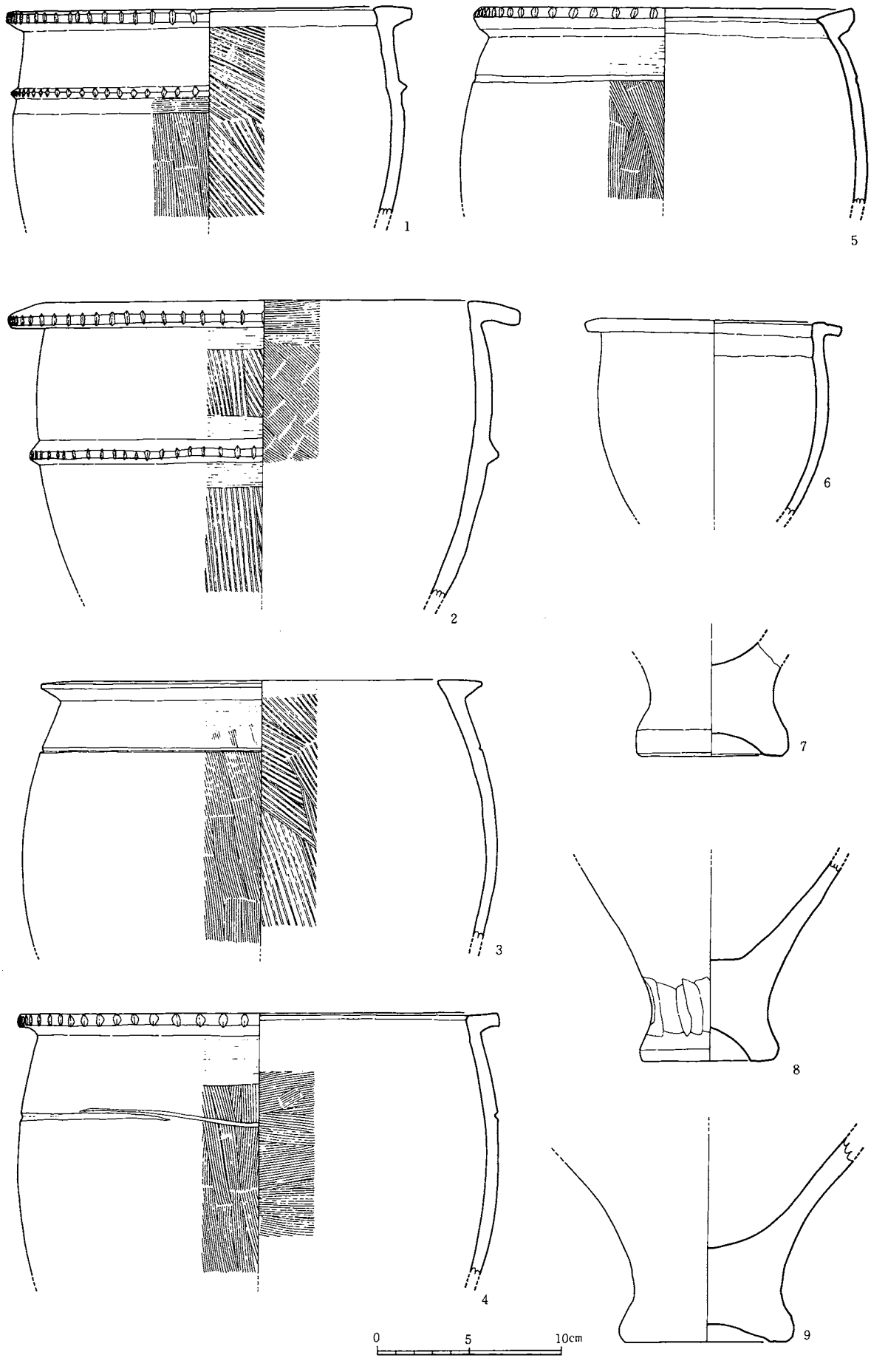
甕B（第36図3～5）

いずれも口縁下部に一条の沈線をめぐらせたものである。3は口縁部が内傾して立ち上がり、外面に断面「U」字形の粘土ひもを貼り付けて口縁をつくっている。口縁部上端面は水平で、刻目は施していない。口縁下2.7cmに一条の沈線をめぐらしている。胴部は大きくふくらんでいる。内外面とも刷毛目調整し、口縁部内外面のみ横ナデにより仕上げる。器面は二次焼成のためにもろくなっている。復原口径23.7cm、胴部最大径25.6cmである。4は「L」字状口縁で端部にほぼ1cm間隔の荒い刻目をめぐらし、口縁下に一条の沈線をめぐらせるものである。沈線の始まりと終りには上下にずれている。5も同種の甕形土器であるが、口縁部が厚くつくられていて、口縁部上端面が内側に傾斜している。また口縁内部が小さく突出している。4、5とも内外面刷毛目調整し、口縁部内外面のみ横ナデにより仕上げている。4の復原口径25.6cm、胴部最大径25.8cm、5の復原口径20.5cm、胴部最大径21.9cm。

甕C（第36図6）

口縁部は直立気味に立ち上り、「L」字状口縁をなす。口縁端部は外側が下がり気味となり、端部は角ばる。器面は荒れていて刷毛目調整されたか否かは判明しない。復原口径13.8cm、胴部最大径12.3cmで、甕形土器の中では最も小型の部類に属する。

7～9は甕形土器底部破片である。いずれも厚くつくられていて、上げ底となっている。外面は黄褐色を呈し器面の磨滅、剝落等は見られないが、内面はすべて暗褐色（チョコレート色）に変色している。

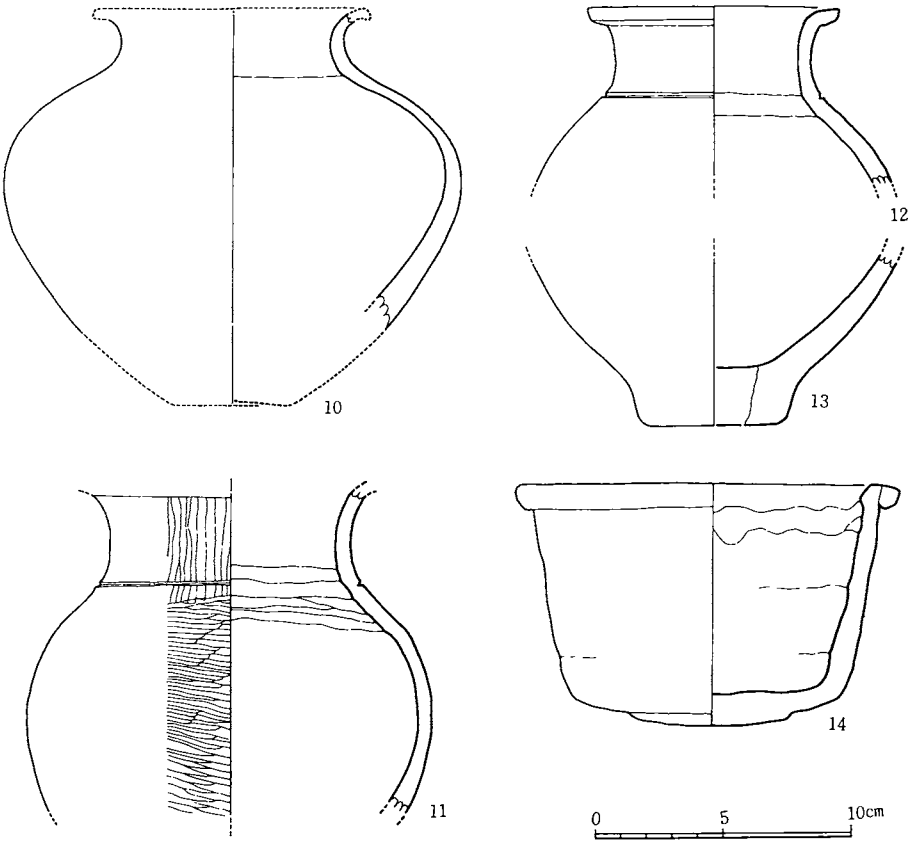


第36図　上の原24号住居址出土土器

②壺形土器（第37図）

壺形土器は、頸部外面に一条の沈線をめぐらせるもの（A）と、沈線を持たないもの（B）との二者がある。

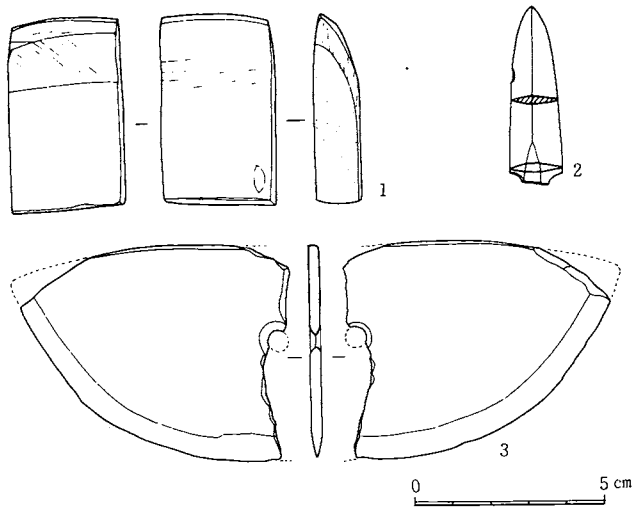
11は口縁端部と底部を欠失する破片で、胴部は球形をなし、頸部にゆるやかにくびれて、口縁部近くで外方へ小さく屈曲している。頸部はタテ方向のヘラミガキのあと一条の沈線をめぐらし、胴部以下はヨコ方向のヘラミガキを施している。暗褐色を呈し、胎土はちみつで焼成良好である。胴部最大径16.0cmを測る。12は胴部以下を欠失する小破片である。11同様頸部外面に一条の沈線をめぐらせている。大きく膨らんだ胴部から頸部は外弯気味に直立し、端部で外方へ強く屈曲している。器面は荒れているが外面の一部にヘラミガキの痕跡が認められる。復原口径9.8cmを測る。13は壺形土器底部破片である。膨らんだ胴部から底部が突出した平底となる。全体に厚くつくられている。外面は器面が荒れているが、内面は丁寧な横方向のヘラミガキが施されている。



第37図　上の原24号住居址出土土器

③朝鮮無文土器（第37図14）

全体の$\frac{2}{3}$程度を残す比較的大形の破片である。体部はストレートに開き、口縁部外面に断面が不正な円形を呈する粘土ひもを貼り付けている。底部は円形に小さく尖出している。全体の調整は粗雑で、器壁も厚くつくられている。色調は黄褐色を呈している。口径15.0cm、器高 9.6cmを測る。



第38図　上の原24号住居址出土大陸系石器

④大陸系石器（第38図）

扁平片刃石斧（第38図１）

粘板岩製で、長さ5.05cm、巾3.0cm、厚さ1.2cmを測る。全体に欠損部分がなく、使用痕も認められない。背部は直線的で、腹部は緩やかな円味をもち、刃部は鋭い。また腹部側

の刃部も小さく刃をつくり出している。両側面は目に沿って剝離された際の自然面をそのままのこし、刃部付近のみ研磨している。他は全体に丁寧な研磨をほどこしている。

石庖丁（第38図３）

頁岩質砂岩で全体の$\frac{1}{2}$を欠失する半月型外弯刃の一種である。背部の端が欠失しているが、ゆるやかなカーブをもち、刃部も大きく外弯している。孔は中央よりやや背部寄りに穿れている。身の断面は極めて薄く、刃部は両刃となる。

磨製石鏃（第38図２）

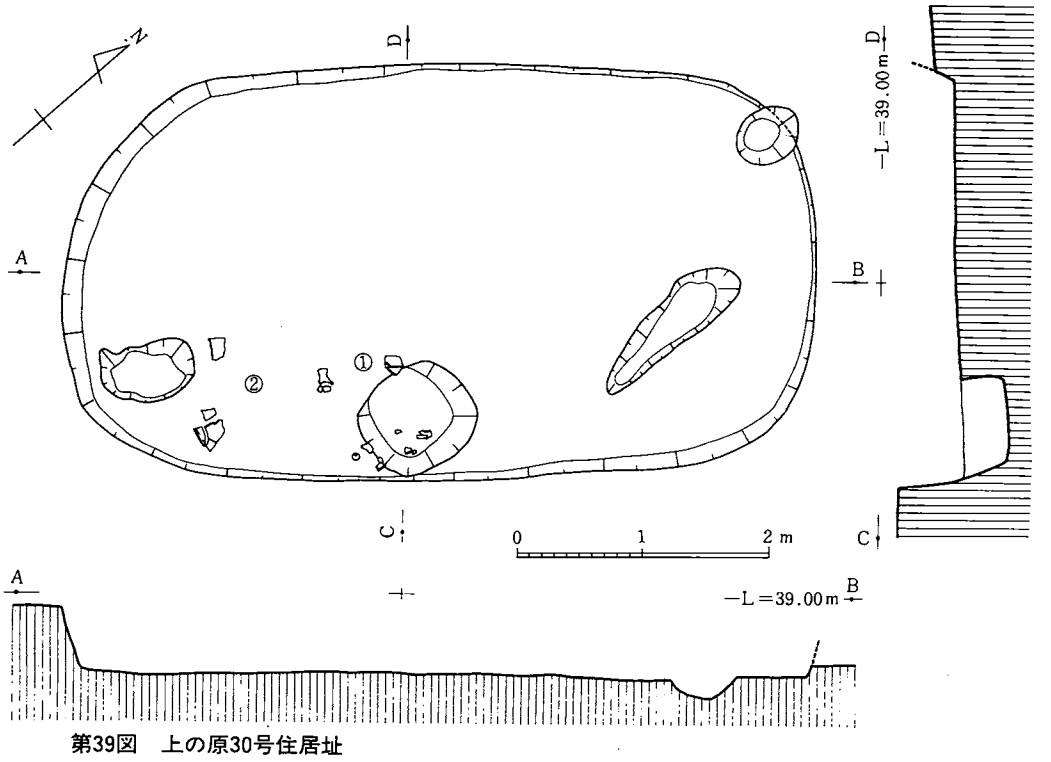
石庖丁（３）と同様頁岩質砂岩のもので、茎を欠失するが長さ4.2cmを測る。いわゆる柳葉形石鏃でこのタイプの石鏃の中では小型の部類に属する。鏑は明瞭で先端が尖っている。断面は扁平な菱形で、茎の部分の断面形は長方形となる。

(3)上の原30号住居址（第39図）

第30号住居址の北東側に隣接して位置している。住居の平面プランは長楕円形を呈し、規模は長軸線上（A－B）で5.93m、短軸線上（C－D）で3.25mを測る。長軸の方位は、N－48°－Eである。また北側と西側の壁は第20号住居址（古墳期）によって大きく削平を受けているが、第30号住居址床面が深く掘り込まれているため、かろうじて全体のプランを確認することができた。

床面はほぼ全面にわたって硬く踏みしめられていて、西側長辺の壁に沿って方形の貯蔵穴を有している。貯蔵穴の規模は0.82m×0.88mで深さは床面から0.35m、断面形は逆台形を呈する。この左床面の北側と南側に不整形な落ち込みがあるが、柱穴は認められなかった。

壁高は確認できた地山面（Ⅲ層）で最大0.50mで、Ⅳ層を約20cm程掘り下げて底面としている。床面はほぼ水平面を保っている。住居址内の埋没土層は２層で、上層は暗褐色有機質土層が、埋没土の大部分を占め



第39図　上の原30号住居址

ている。下層は床面直上に厚さ５cm前後のうすく堆積した黒褐色腐蝕土層である。出土遺物はこの下層に含まれ、あるいは床面に密着して出土したものである。

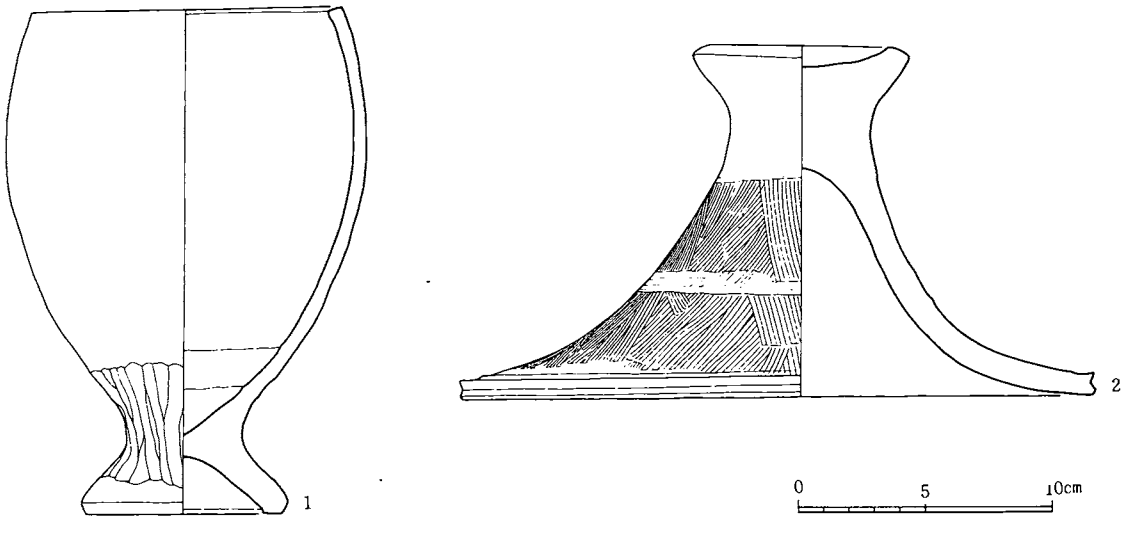
出土遺物は第40図に示した２点のみである。１は台付深鉢形土器で、南西部隅近くに散乱した状態で出土していて、２は蓋形土器で貯蔵穴内上層から貯蔵穴周囲にかけて散乱した状態で出土している。２点とも床面に密着するか、床面直上の腐蝕土層中から出土したものである。

なお北西部隅の柱穴は、20号住居址（古墳期）のものである。

〈出土遺物〉（第40図１・２）

１は脚付深鉢形土器で、ほぼ完形品である。胴部がやや長めで、膨らみをもつ。口縁部は内傾気味に立ちあがり、端部が角ばりおわる。いわば甕形土器から口縁部を取り除いた形態である。脚台は大きく開き肉厚である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、底部から脚部にかけてのくびれ部の外面は、タテ方向のヘラケズリで調整している。この器形は他遺跡でもほとんど出土例をみないものである。口径12.3cm、器高19.65cm、胴部最大径14.3cm、脚部口径7.8cmを測る。全体に暗褐色を呈し、焼き上がりも良好である。

２は蓋形土器でほぼ完形品である。おそらく、甕形土器の蓋であろう。つまみ部の上面がくぼみ、つまみ部は同筒状のものを強くしぼり、内部に粘土を充鎮したもので、厚いつくりとなっている。体部から底部にかけて大きくラッパ状に開き、底部端は角ばり、「V」字状のくぼみがめぐる。外面は刷毛目調整で、内面はヨコナデにより仕上げている。また、つまみ部と口縁端部はヨコナデ調整されている。色調は黄褐色で焼成は良好である。つまみ部口径8.5cm、底径25.1cm、器高13.6cmを測る。



第40図　上の原24号住居址出土土器

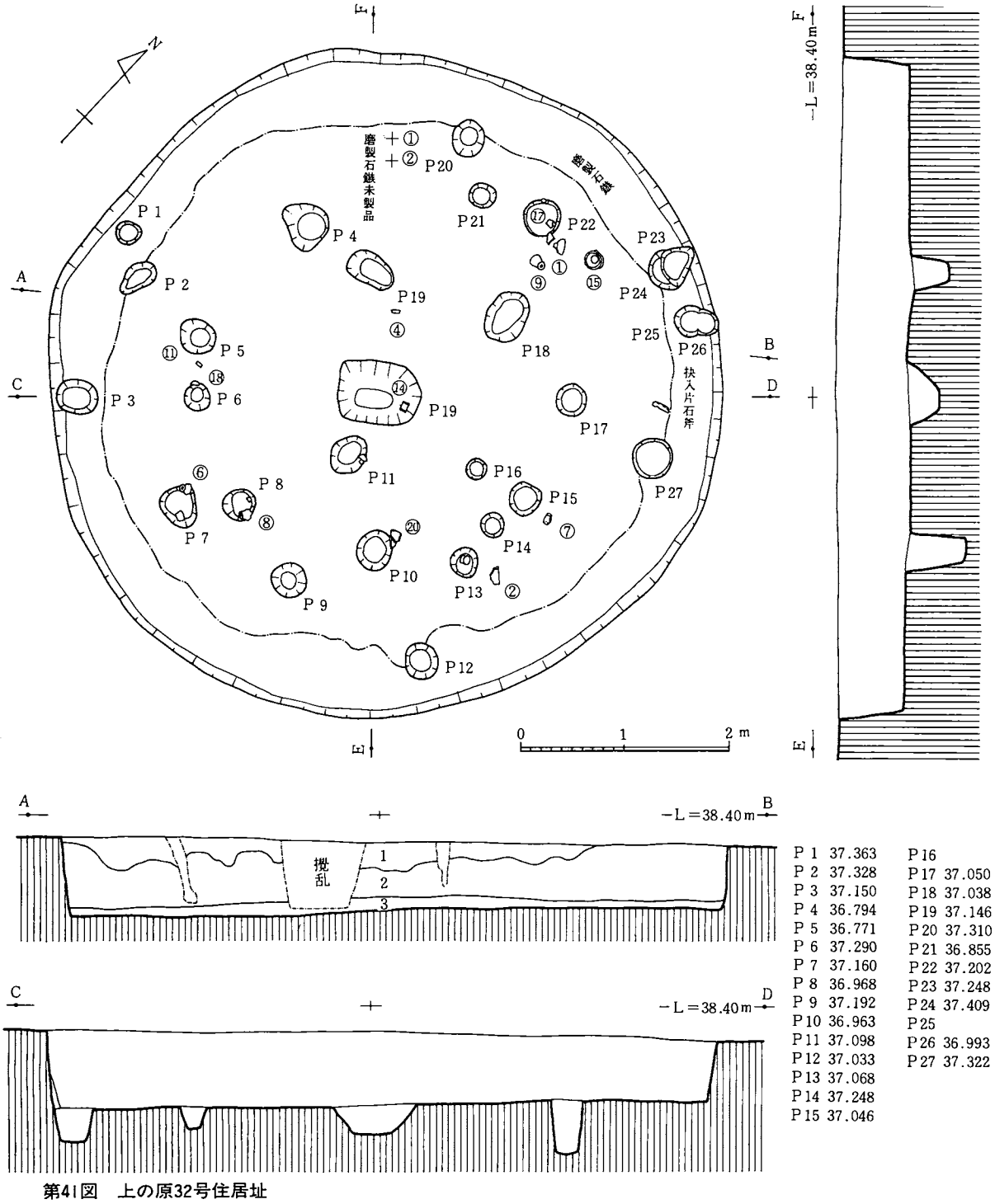
(4)上の原32号住居址（第41図）

第13号住居址の南18.5ｍの地点に位置している。住居址の平面形はほぼ正円形を呈し、長径6.42ｍ、短形6.25ｍを測る。規模・プランから比較すると24号住居址に最も類似している。

壁高は確認できた地山面（Ⅲ層）で最大で0.75ｍ、最少で0.60ｍを測る。Ⅳ層を約40cm掘りこんで床面としていて、南側がやや深くなるもののほぼ水平面を保っている。床面中央に規模が長軸0.79ｍ×短軸0.60ｍで平面形隅丸方形、断面形が逆台形を呈する地床炉様の土坑が検出された。しかし、少量の炭化物を含む土

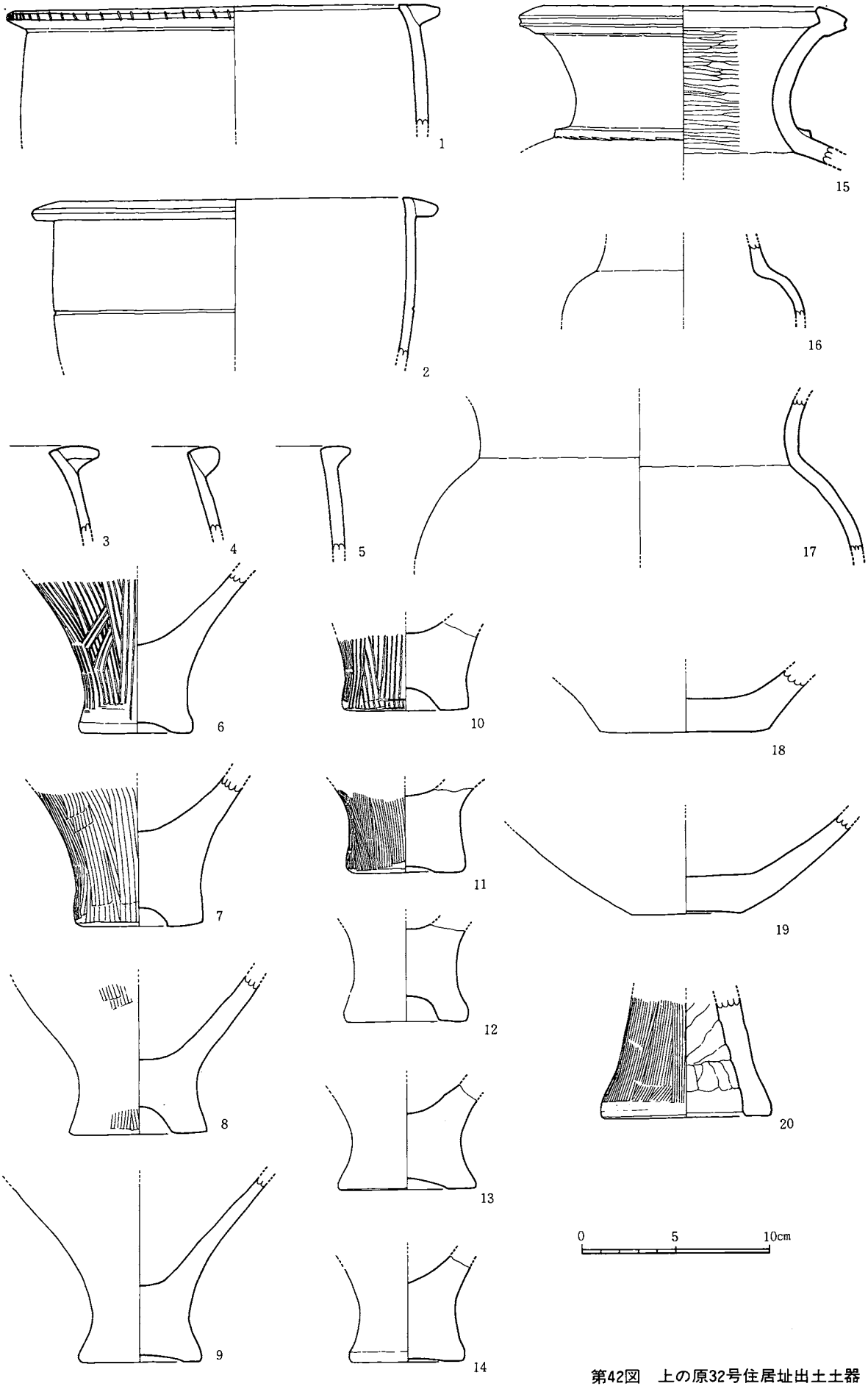
層を確認したものの、焼土など火を使用した痕跡は認められなかった。床面は壁近くを除く住居の中心部の径約5.1～5.2mの範囲が硬く踏み固められた床面で、この部分を中心として大小あわせて26個の柱穴を検出した。このうちＰ４・５・８・10・15・18の６個の柱穴は、上屋を支える主な柱の掘形と推定され、他はこれに付属した支柱を納めるものか補助的なものであろう。

住居内の埋没土は３層からなり、１層は黒色土層、２層は暗褐色土層、３層は床面直上に堆積した暗褐色腐蝕土層で、炭化物や焼土粒など含んでいる。１～３層のうち土器はすべて２層中に出土し、３層出土のものは皆無である。特に１層はレンズ状の堆積をなしているが、上部がかなりの厚さで削平されているために、構築時の掘り込みの深さは、少なくとも１m前後か、それ以上あったと推定される。



P 1	37.363	P16	
P 2	37.328	P17	37.050
P 3	37.150	P18	37.038
P 4	36.794	P19	37.146
P 5	36.771	P20	37.310
P 6	37.290	P21	36.855
P 7	37.160	P22	37.202
P 8	36.968	P23	37.248
P 9	37.192	P24	37.409
P10	36.963	P25	
P11	37.098	P26	36.993
P12	37.033	P27	37.322
P13	37.068		
P14	37.248		
P15	37.046		

第41図　上の原32号住居址



第42図　上の原32号住居址出土土器

出土遺物のうち土器は細片を含めると26点出土しているが、すべて床面より上部約0.15～0.30ｍの間の２層中から出土したもので、３層中あるいは床面に密着して出土したものは認められなかった。一方、磨製石鏃（第43図３）・同未製品２点（第43図１・２）は床面に密着した状態で抉入片刃石斧はいずれも３層中に出土したものである。

なお第42図に図示したもののうち、甕形土器１・２・４・６・８・９・11・13、壺形土器15・17・18、器台20の計12点は２層から出土し、甕３・５・７・10・12・14と、壺形土器16・19の計８点は、２層上面から１層の間に出土したものである。したがって、本住居址の出土遺物は石器類を除くと、住居の使用年代を示すものではなく、廃棄後の埋没年代を示すものと考えなければならない。

〈出土遺物〉

①甕形土器（第42図１～14）

甕形土器は頸部破片は５点（１～５）出土している。いずれも口縁端部が断面三角形の粘土帯を、外面に貼り付けたものである。口縁端部に刻目を施すのは１のみで、２～４にはみられない。また１では口縁下4.8cmに一条の沈線をめぐらせるが、他の土器は小破片であるため沈線の有無は判明しない。なお、４・５の口縁部内側が直立するのに対し、１・２・３のものでは、口縁部内側が小さく突出している。１～５はすべて内外面刷毛目調整しているが、２以外は器面が磨滅しているため、細部の調整は判明しない。６～14は甕形土器底部破片である。外底部の上底の強弱は変化に富んでいて、わずかに凹むもの（９・11・14）から、底部の中央が強く凹むもの（７・８・10・13）まで、２～３段階のものが認められる。しかし完全な平底は出土していない。すべて刷毛目調整され、肉厚なつくりが特徴である。

②壺形土器（第42図15～19）

壺形土器は５点出土した。15は口縁部が頸部から朝顔状に開く壺で、口縁端部の内側が小さく張り出し、口縁端部上面は先端部で内側が低く傾斜している。頸部外面に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯の下部に斜め方向の刻みを施している。内面はヘラミガキ、外面は横ナデ調整している。口径17.6cmを測る。16・17は頸部から胴部にかけての破片で、いずれも頸部と胴部の境界は不明瞭である。16は小型の壺で外面は横方向のヘラミガキで仕上げている。17は大型壺で、頸部にタテ方向の刷毛目が認められる。18・19は壺形土器底部破片で、18は平底でやや外反気味に胴部に移行し、19はわずかに上げ底となり、膨らみながら胴部に移行する。いずれも肉厚である。

③器台（第42図20）

器台裾部の破片で、ほとんど直線的に開いている。全体に厚いつくりであるが、端部ではさらに厚みを増している。外面はタテ方向の刷毛目、内面は指頭による調整を施し、タテ方向のしぼり目が残る。

④大陸系石器（第43図）

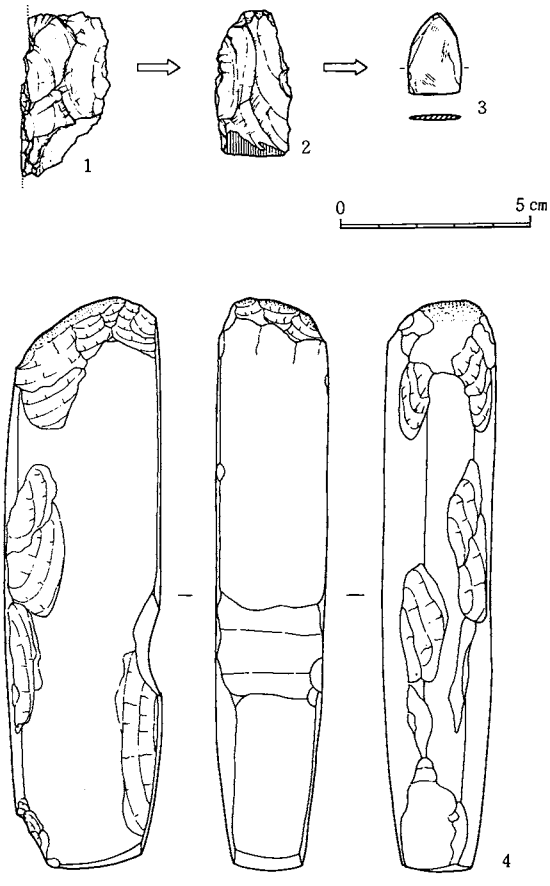
柱状抉入石斧（第43図４）

住居址中央部寄りの床面に接して出土したものである。砂岩で全面研磨により仕上げられている。先端部は使用されたために剝離し刃部が失われ、また腹部・背部・側面の表面の一部は研磨後の剝離を受けているが、ほぼ完形品に近いものである。方柱状をなし、背部・腹部とも丸味をもっている。抉入部は長さ2.2cm、深さ0.3cmで、通有のものに比較すると浅くなっている。抉部から基部にかけては全体に細くなっていて、

基部は孤状に研ぎ出されている。長さ14.6cm、高さ3.6cm、腹部巾2.9cm、抉入部の巾最大 2.9cm、最小2.15cmを測る。

磨製石鏃及び未製品（第43図１～３）

磨製石鏃及び未製品が合わせて３点出土した。いずれも住居址床面に接して出土したものである。石材はすべて硬質の粘板岩である。１は長さ 4.2cm、巾2.35cmを測る石鏃未製品である。加工の過程で三面を折損したものとみられるが、残る一側面にかなり細かな調整が施されている。おそらく荒割りの工程から打調整の段階に入ったものであろう。２は長さ3.8cm、巾2.0cm、厚さ0.4cmを図る。打調整を終了し、概ね長い二等辺三角形の形態をとっている。基部の両面にわずかな研磨が認められることから、打調整の段階を終了し、研磨の工程に入ったものであるが、未だ刃部の加工は行なわれていない。３は完形品で長さ2.1cm、基部の巾1.3cm、厚さ0.15cmを測る。無茎三角式のものに比べるとやや細身である。側辺及び基部もやや丸味をもっている。また刃部は鋭く、側辺も鋭く研磨されている。



第43図　上の原32号住居址出土石器

以上３点は磨製石鏃の製作過程の異なる２つの未製品と製品であり、石鏃製作過程を示すものとして重要な発見であるが、それ以上に住居址内で石器の製品化が行なわれていたという事実を証明するものとして、極めて重要な意味をもつものと思われる。また住居址内での石鏃製作が原材料の確保から始まり製品化に至る一連の製作工程の中のどの段階から行なわれたのかが、さらに重要な問題となろう。

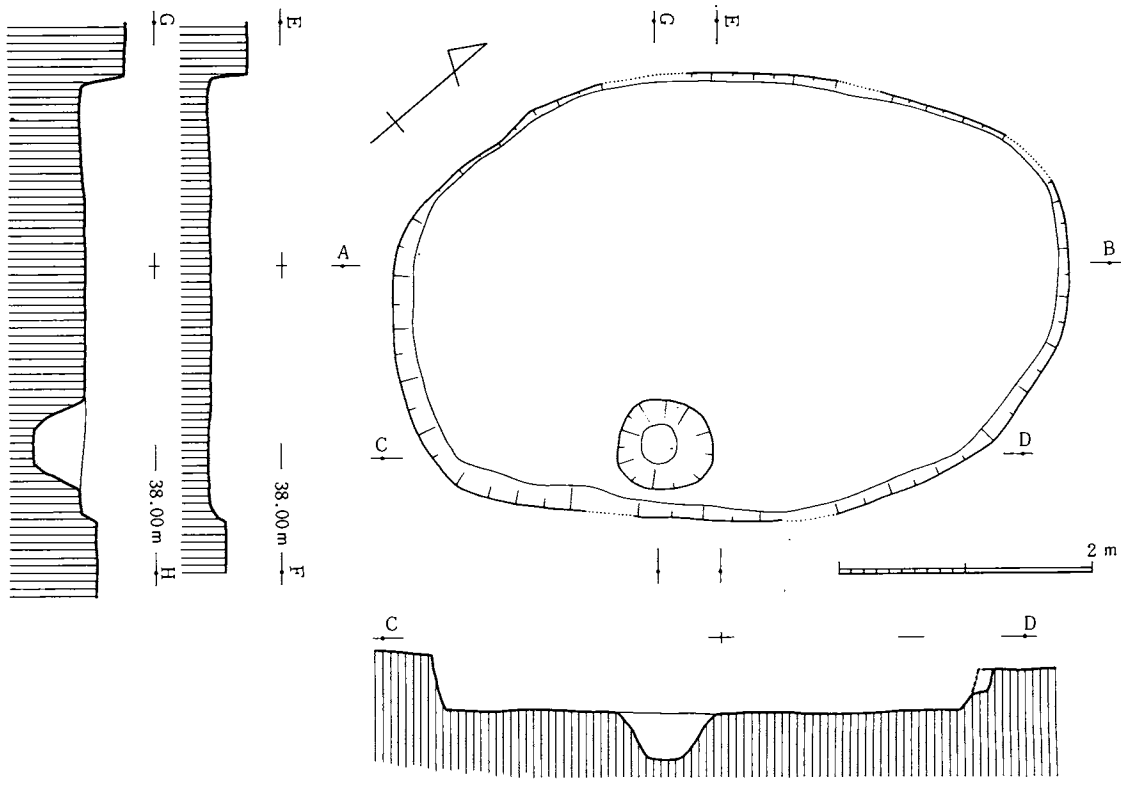
(5)上の原36号住居址（第44図）

30号住居址の北約13m、102号住居址の西約21mの地点に位置している。南東部の約半分が第23号住居址（古墳期）と重複している。23号住居址床面との比高差が約10～15cm程あり、全体のプランを検出することができた。30号等と同じく平面形が長楕円形を呈し、長軸線上で5.35m、短軸線上で3.47cmの小型の竪穴である。長軸の方位はＮ－50°－Ｅで、30号住居址のＮ－48°－Ｗに極めて近い数値を示している。

壁高は確認できた地山上面（Ⅲ層）から最大で0.50mを測り、Ⅳ層を約10～15cm掘り下げて床面としている。床面は全面硬く踏み固められていて、ほぼ水平面を保っている。床面の東側長辺の壁に沿った中央部に貯蔵穴様の土坑を設けている。土坑の平面形は不正な円形を呈し、断面形は逆台形を呈している。その他床面には柱穴等は全く確認できなかった。

住居址内の埋没土層は上下２層が確認でき、上層の黄褐色土層で下層は床面直上に厚さ５～10cmにわたって堆積した暗褐色の腐蝕土層で、貯蔵穴様土坑の内にも同種の腐蝕土が埋没していた。

出土遺物は壺形土器破片１点（第46図１）のみで、住居内埋没土下層中より出土したものである。



第44図　上の原36号住居址

〈出土遺物〉（第46図１）

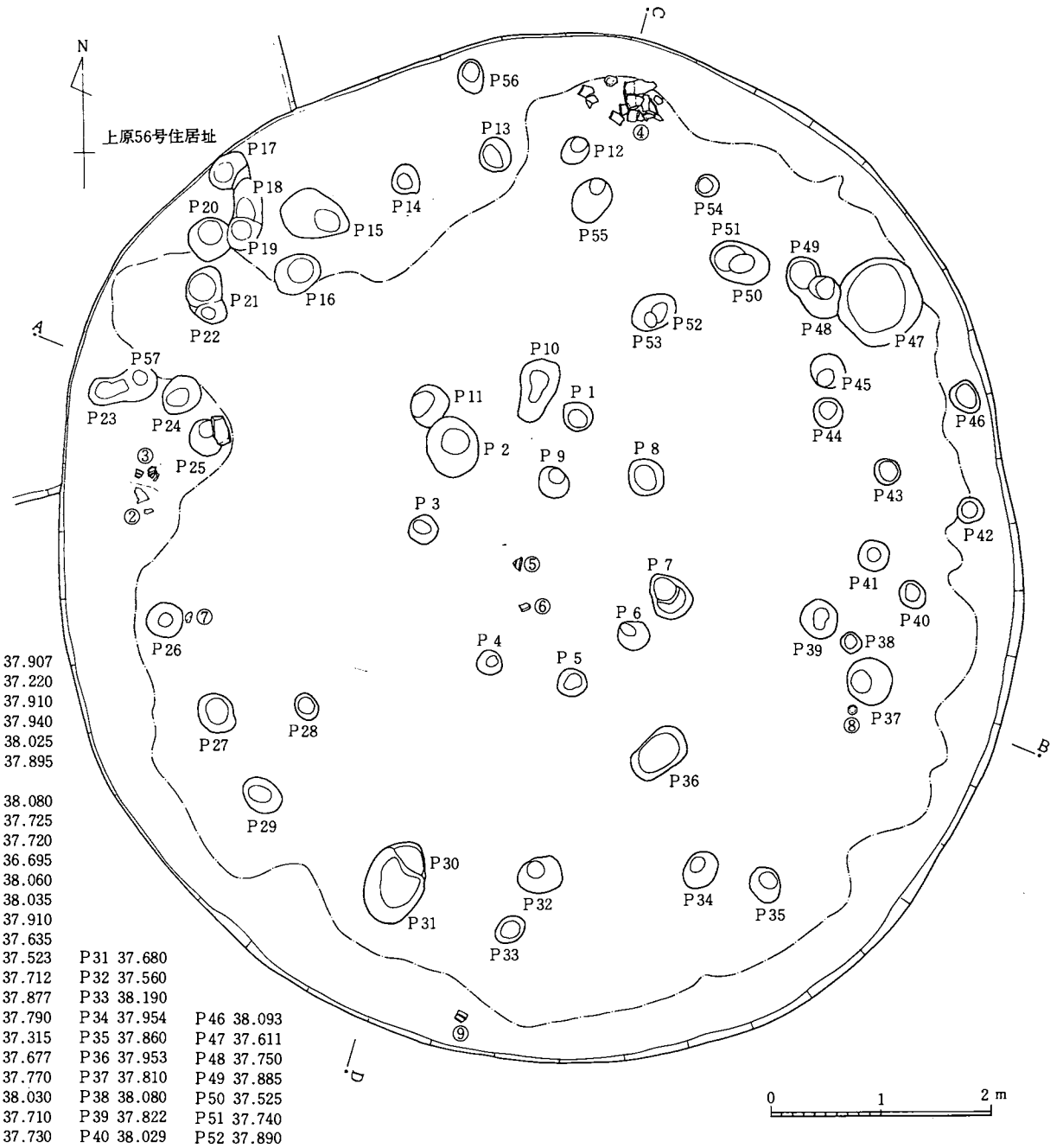
出土遺物は壺口縁部破片１点のみである。頸部から口縁にかけて大きく開く広口壺であるが口縁部内側が、強くナデつけられたために端部が内方に小さく突出している。内外面ともヘラミガキによりていねいに仕上げられている。色調は黄褐色で焼成は良好である。復原口径22.9cmを測る。

(6)上の原57号住居址（第45図）

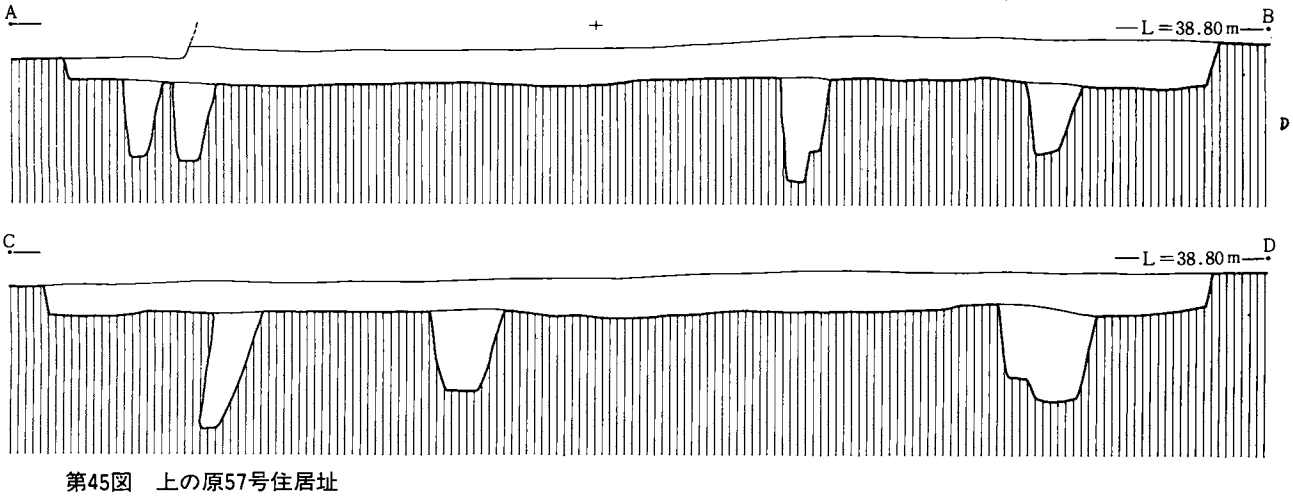
32号住居址の南約40ｍの地点に位置し、さらに南約27ｍの地点に61号住居址、南西約19ｍの地点に60号住居址がある。住居址の北西部の一隅は56号住居址（古墳時代後期）と重複している。住居址の平面プランはほぼ円形で、長径9.36ｍ、短径8.70ｍを測り、13軒の住居址の中で最も規模が大きいものである。

壁高は確認できた地山面（Ⅲ・Ⅳ層）から、最大で0.35ｍ、最少で0.22ｍを測る。床面は壁側の巾約0.20ｍ～0.80ｍを除いた内側が、硬く踏み固められている。特に北西部の56号住居址との重複部分では、巾およそ1.15～1.30ｍ、長さ1.65ｍの硬化面の突出がみられ、その先端部は壁近くにまで及んでいる。またこの突出部の左右に、２～３個の柱穴が並んでいる。おそらく住居の出入口部の可能性が強く、Ｐ16－Ｐ20(Ｐ19)あるいはＰ15－Ｐ18（Ｐ17）の柱穴列Ａ－１とＰ25－Ｐ23（Ｐ24・Ｐ57）の柱穴列Ａ－２は、出入口部に関連する施設ではなかろうか。

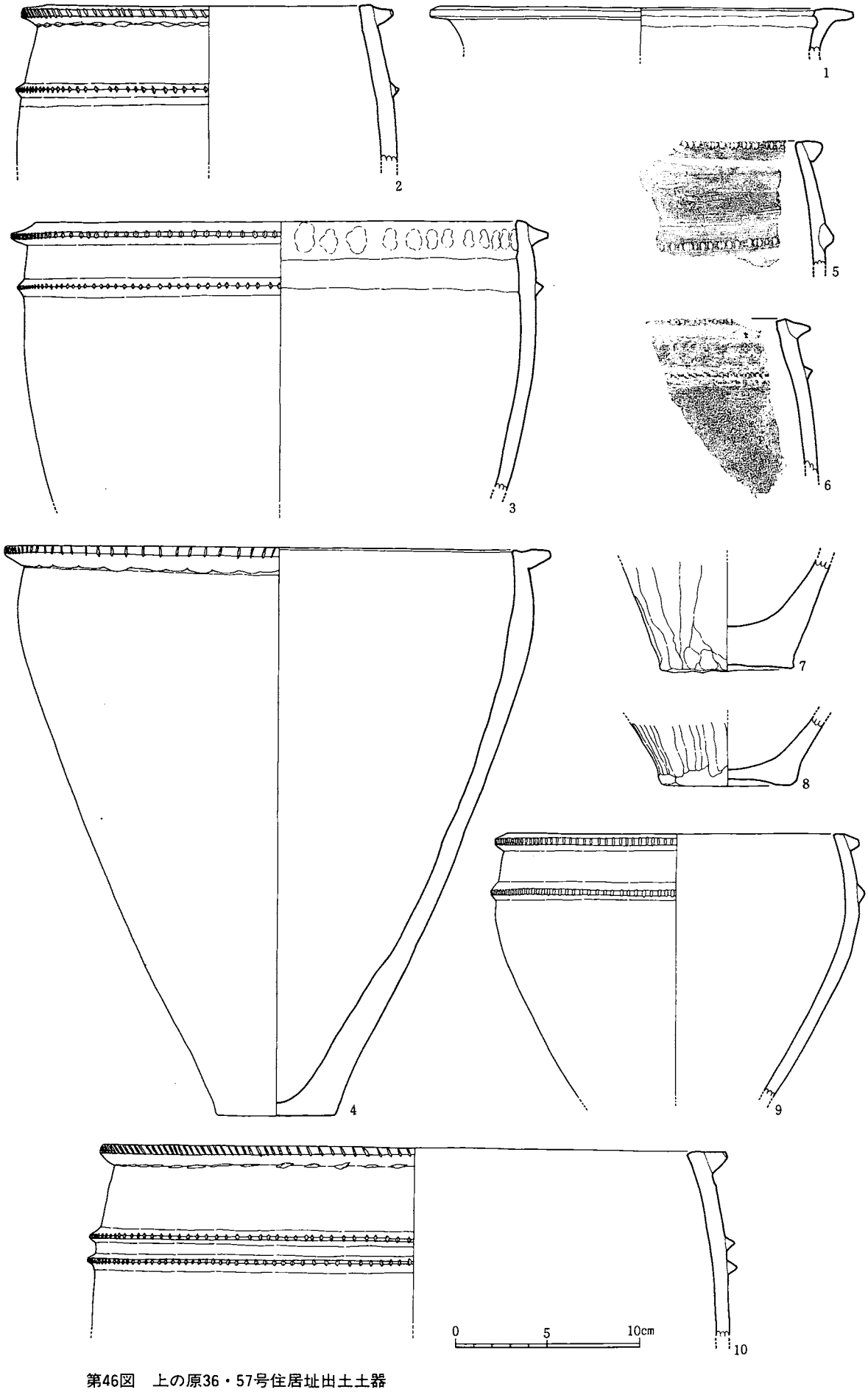
床面には前述の柱穴を加えると、計57個の柱穴を検出した。これら柱穴群は、床面の中心部を径2～2.5ｍで同心円上にめぐる柱穴列Ｂ（Ｐ１→Ｐ２→Ｐ３→Ｐ４→Ｐ５→Ｐ６→Ｐ７→Ｐ８→Ｐ１）と、壁に沿って



P 1	37.907		
P 2	37.220		
P 3	37.910		
P 4	37.940		
P 5	38.025		
P 6	37.895		
P 7			
P 8	38.080		
P 9	37.725		
P10	37.720		
P11	36.695		
P12	38.060		
P13	38.035		
P14	37.910		
P15	37.635		
P16	37.523	P31	37.680
P17	37.712	P32	37.560
P18	37.877	P33	38.190
P19	37.790	P34	37.954
P20	37.315	P35	37.860
P21	37.677	P36	37.953
P22	37.770	P37	37.810
P23	38.030	P38	38.080
P24	37.710	P39	37.822
P25	37.730	P40	38.029
P26	37.770	P41	28.020
P27	37.940	P42	38.120
P28	37.780	P43	38.085
P29	38.080	P44	38.070
P30	37.860	P45	37.805
		P46	38.093
		P47	37.611
		P48	37.750
		P49	37.885
		P50	37.525
		P51	37.740
		P52	37.890
		P53	37.830
		P54	38.175
		P55	37.400
		P56	37.890
		P57	37.440



第45図　上の原57号住居址



第46図　上の原36・57号住居址出土土器

直径約７ｍでやはり同心円上にめぐる柱穴列Ｃ〔Ｐ12→Ｐ13→Ｐ14→Ｐ16（Ｐ15）→Ｐ25→Ｐ26→Ｐ27→Ｐ29→Ｐ30→Ｐ32→Ｐ34→Ｐ37→Ｐ40→Ｐ43→Ｐ48（Ｐ49）→Ｐ54〕がある。さらに東側から北側にかけて、Ｐ38を基点として内側をめぐる柱穴列Ｄ〔Ｐ38→Ｐ41→Ｐ44（Ｐ45）→Ｐ50（Ｐ51）→Ｐ55〕などが認められる。おそらく柱穴列ＢおよびＣ（Ｄ）は上屋を支える主柱・支柱の関係を示し、柱穴列ＣおよびＤは住居の建替え・拡張に関係するものであろうか。

住居址内覆土は暗褐色で、床面直上には炭化物・焼土粒を多く含む黒褐色土が、平均0.10～0.15ｍ前後堆積し、住居址中央部は薄く、壁に近づくに従って厚くなっている。出土遺物のほとんどは土器片であり、他に土砂とともに混入したとみられる自然石（円礫・角礫砂岩）も認められた。土器２～８のうち、５・６の甕形土器口縁部破片は覆土上層（暗褐色土）から出土したものであり、２～４、７・８の５点については、床面に密着した状態で出土したもので、本住居址の年代を決定する上で重要な遺物である。なお、４の甕形土器は横転状態で土圧により押しつぶされた状態で出土したもので、復原して完形となった。その他覆土上層から多くの土器細片が出土したが、図示することが不可能なものが多く、省略せざるを得なかった。

〈出土遺物〉（第46図２～10）

出土遺物はすべて土器で、甕形土器８個体分を数えた。このうち、胴部に一条の刻目凸帯をめぐらすもの甕Ａ類５点（２・３・５・６・９）と二条の刻目凸帯をめぐらすもの甕Ｄ類(10)、さらに胴部に何ら文様を持たないもの甕Ｃ類（4）が各１点ずつ出土した。

２・５・６の甕形土器は、内傾気味に立ち上がり、外面に断面三角形の凸帯を貼り付けて口縁部をつくり、刻目を施している。口縁下に断面三角形の刻目凸帯を一条めぐらす。口縁端部は５を除くと先端部が下がっている。

３は直立気味に立ち上がり、同じく断面三角形の凸帯を貼りつけて口縁をつくっている。２・３・５・６の４点とも、内外面に刷毛目は認められず、ヨコナデ調整されている。２の復原口径は20.0cmを測り、５・６も同程度の法量であろう。また３は、復原口径29.0cmを測る大型品である。９は、胴部の最大径が上部にあり、強く張っているのに対し、胴下半部は細くなる。刻目凸帯は最大径のやや上部にめぐらされている。口縁部は３同様断面三角形の凸帯を貼り付けてつくるが、端部には間隔の狭い丁寧な刻目をほどこしている。また先端部はわずかに下っている。

10は胴部に二条の刻目凸帯を有するもので、本遺跡出土例中唯一の土器である。口縁部は２・３・５・６と同様、断面三角形の凸帯を貼り付けて口縁部をつくり、端部にやや間隔の狭い刻目を施している。器面の調整はヨコナデを施し、刷毛目は認められない。色調は黄褐色で、焼成は極めて良好で器面はにぶい光沢を放つ。復原口径34.0cmを測る大型品である。

４は「Ｌ」字状口縁の端部に刻目を施したものである。肩部がわずかに膨らむものの、胴部はほぼ直立し、底辺付近でわずかにくびれる。底部は上げ底である。器壁は全体に厚く、特に肩部と底部で厚く、底部の中程が著しく薄くなっている。器面はほぼ全面荒いミガキで仕上げ、口縁部内外面はヨコナデ調整である。色調は黄褐色で焼成も極めて良好である。おそらく貯蔵用の甕形土器であろう。

７・８は甕形土器底部破片で、わずかに上げ底となる。特に８では外底部周縁が輪状に突出している。７・８とも器体外面はタテ方向のヘラケズリで調整されている。器面の調整手法は異なるものの、形態上は４の底部破片に類似する。なお８の底部中央は薄く、７では底部全体が厚くつくられている。いずれも黄褐色を呈し焼成も良好である。

(7)上の原60号住居址（第47図）

57号住居址の南西約19ｍの地点に位置し、さらに南約15ｍには61号住居址がある。住居址の平面プランは長楕円形を呈し、長軸線上で5.41ｍ、短軸線上で3.30ｍを測る小形の竪穴である。長軸方位はＮ－42°－Ｗで、61号住居址に近く、30・36・68号住居址と比較するとほぼ80度近く西にふれている。

壁高は確認できた地山面（Ⅲ層）から、最大0.33ｍを測るが、北西側は上部から削平されて浅くなっている。床面は北側の一部を除いて、全体が硬く踏み固められている。床面には６個の柱穴を検出したが、整然とは配置されていない。

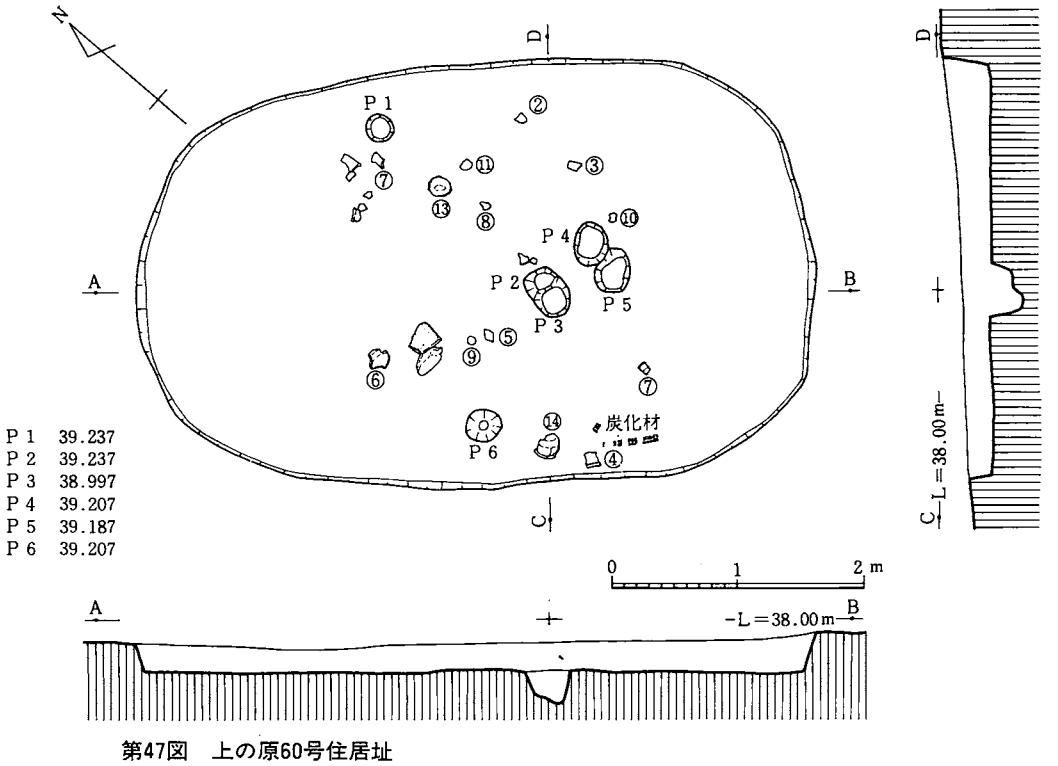
住居址内の埋没土層は暗褐色を呈し炭化材や炭化物を多く含むが、これらを明確に分層することは出来なかった。

出土遺物は床面のうち硬化した部分に散乱した状態で出土した。土器は細片を加えると計19点出土し、多くは住居内覆土の中～上位より出土した。これらのうち、④の甕形土器、⑥・⑧の甕形土器底部および⑭の鉢形土器は、床面からほぼ５㎝以内の覆土下層から出土しているが、床面に密着して出土したものは皆無であった。なお住居址内の中央から西側に出土した砂岩の平平な板石および砂岩の円礫は床面にほぼ密着していたものである。これらの石材のうち板石の上面には石皿状の摩擦痕のある凹みがあり、火を受けた痕跡も認められた。おそらく住居址内で使用されたものであろう。また住居址西壁長辺に沿った覆土最下層部に、炭化した柱材と推定さるるものが巾0.1ｍ、長さ0.44ｍにわたって残存していた。

〈出土遺物〉

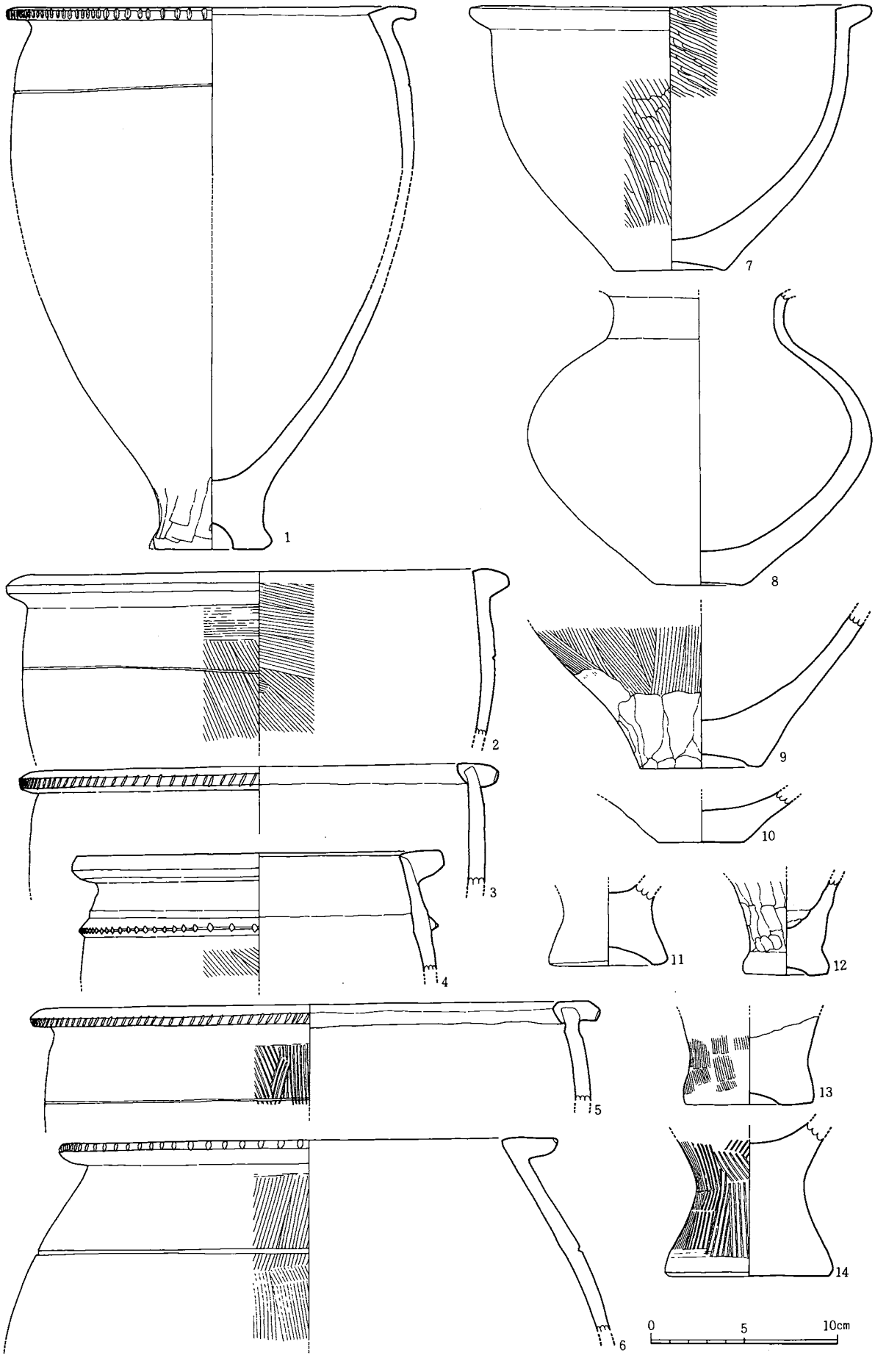
①甕形土器（第48図１、７、11～14）

甕形土器は計10個体分が出土した。このうち器体全体が判明したものは１点のみで、他は口頸部ないし底部の破片である。また胴部に刻目凸帯をめぐらせる甕Ａ類（５）、一条の沈線をめぐらせる甕Ｂ類（１・２・



P 1　39.237
P 2　39.237
P 3　38.997
P 4　39.207
P 5　39.187
P 6　39.207

第47図　上の原60号住居址



第48図　上の原60号住居址出土土器

5・6)、 何ら文様を持たない甕C(3)の三者が認められる。さらに胴部の膨れ具合や、口縁部粘土帯の接合方法にも二つの方法が認められる。

1は唯一全体が復原できたものである。肩部にふくらみを持ち、内傾して立ちあがり、外面に粘土帯を貼りつけて口縁部をつくる。口縁端部はやや弯曲して先端が下がり、0.5～0.8cmの間隔のまばらな刻目を施す。内側は鋭く尖って稜をなす。口 下3.5～4.0cmに一条の沈線をめぐらせる胴部から底部に移行するにしたがって細くなる。底部は直径1.8～2.2cmの半球形状に窪ませた上げ底をつくっている。器壁は胴部に対して、底部が著しく肥厚している。器体底部外面に刷毛状工具による調整がみられるほかは、ナデ調整による仕上げである。口径22.25cm、胴部最大復原径21.8cm、器高29.0cm、底径約6.7cmを測った。2は直立する口縁部外面に、断面台形の粘土帯を貼り付けたもので、口縁下3.2～3.7cmに一条の沈線をめぐらせる。内外面とも刷毛目調整のあと、口縁部内外面を横ナデにより仕上げる。復原口径27.2cm、胴部最大径25.5cmを測る。3・5は直立する口縁端部に上方から粘土帯を接合したために、断面形がより「T」字形に近くなったもので、内側への張り出しがさらに強くなっている。5では口縁下に一条の沈線をめぐらせるが、3ではその有無が判明しない。いずれも内外面を刷毛目調整し、色調暗褐色で焼成は良好で、肩部に炭化物が付着する。3の復原口径25.8cm、胴部最大径24.6cm、5の復原口径30.6cm、胴部最大径29.4cmを測った。6は強く張った胴部から、口縁部が著しく内傾して立ち上り、外面に断面三角形の粘土帯を貼り付けて口縁をつくっている。口縁端は幅広く平坦化し、先端部に間隔の広い刻目を施している。内外面とも刷毛調整のあと、口縁下 4.7cmの部位に、断面「V」字形の鋭い沈線をめぐらせている。色調黄褐色で多量の砂粒を含み、焼成良好である。復原口径26.9cmで、胴部最大径は口径をはるかに越えている。

4は内傾して立ちあがる口縁部外面に断面台形の太い粘土帯を貼り付け、内側が小さく張り出して稜をなす。口縁下約2.0cmに、口縁部の貼り付粘土帯に比べて小さな断面三角形の刻目凸帯をめぐらせている。内外面とも刷毛目調整のあと、口縁部内外面は横ナデにより仕上げられている。復原口径19.6cm、胴部最大径19.2cmを測る。灰褐色を呈し、焼成やや不良である。

11～14は甕形土器底部で、上げ底となるもの(11～13)と平底となるもの(14)の二者があって、上げ底の中でも外底部全体が窪められたもの(11)と、外底部の中央が部分的に窪められたものとがある。11は底径6.4cmで比較的小型の甕の底部で、12はヘラ状工具による荒い調整で仕上げられ、さらに小型の甕の底部とみられる。12・13のうち、特に13は(底径8.9cm)底部の厚さが6.15cmを測り、大型の甕の底部であろう。外面は単位の大きい刷毛目が施されている。11を除くと焼成は良好である。

②壺形土器(第48図8～10図)

壺は3点出土し、うち2点は底部破片である。8は胴部中位が強く張り、底部がやや上げ底気味の平底となるもので、頸部は強くくびれて立ち上り、口縁部近くで、さらに外側に屈曲する。口縁端部を欠失するものの、24号住居址出土の壺10に比較すると、胴部の張りは弱く頸部も短かい。外面および頸部内面は細かなヘラミガキで仕上げられる。9は外底部が輪状に突出した上げ底で、10は平底である。9の胴部は刷毛目、底部外面をヘラ状の工具で削り調整している。10は器面が荒れているため調整方法は不明である。

③鉢形土器(第48図7)

鉢形土器(7)は1点のみ出土している。直立する口縁部外面に断面三角形の粘土帯を貼り付けたもので底部はわずかに上げ底となっている。内外面とも右下り方向の丁寧なヘラミガキを施している。黄褐色を呈し、焼成良好である。口径21.5cm、器高14.0cm、底径5.8cmを測る。

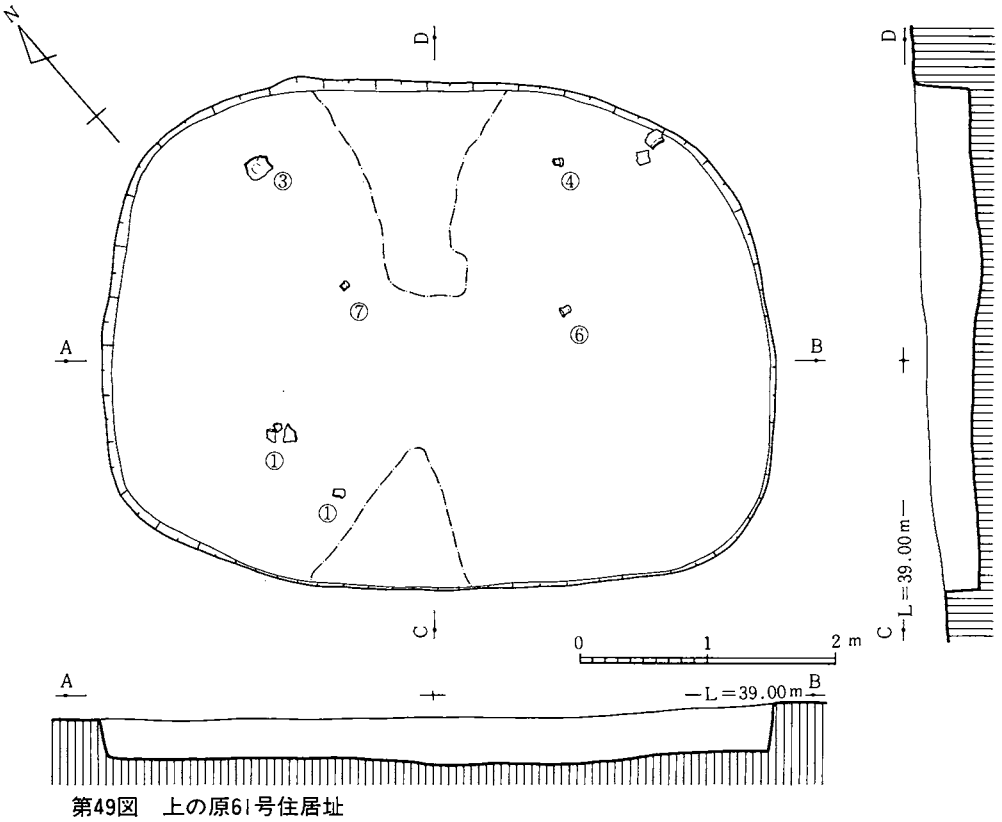
(8)上の原61号住居址（第49図）

60号住居址の南東約15m、57号住居址の南約27mの地点に位置している。住居址の平面プランは長楕円形を呈し、長軸線長で5.30m、短軸線上で3.45mを測った。長軸方位はN－49°－Wである。

壁高最大0.42mで最少0.26mを測った。床面は中央から西側が部分的に低く凹むほかは、ほぼ水平面を保っている。住居はⅢ層中～下位で検出し、Ⅴ層を0.05～0.10m掘り下げて床面としている。床面はそれぞれ長辺の壁側の一部分を除いて硬く踏み固められていて、柱穴、貯蔵穴等の掘込みは認められなかった。

住居内覆土は暗褐色を呈し、炭化物・焼土粒が多く混っている。覆土の分層は出来なかった。

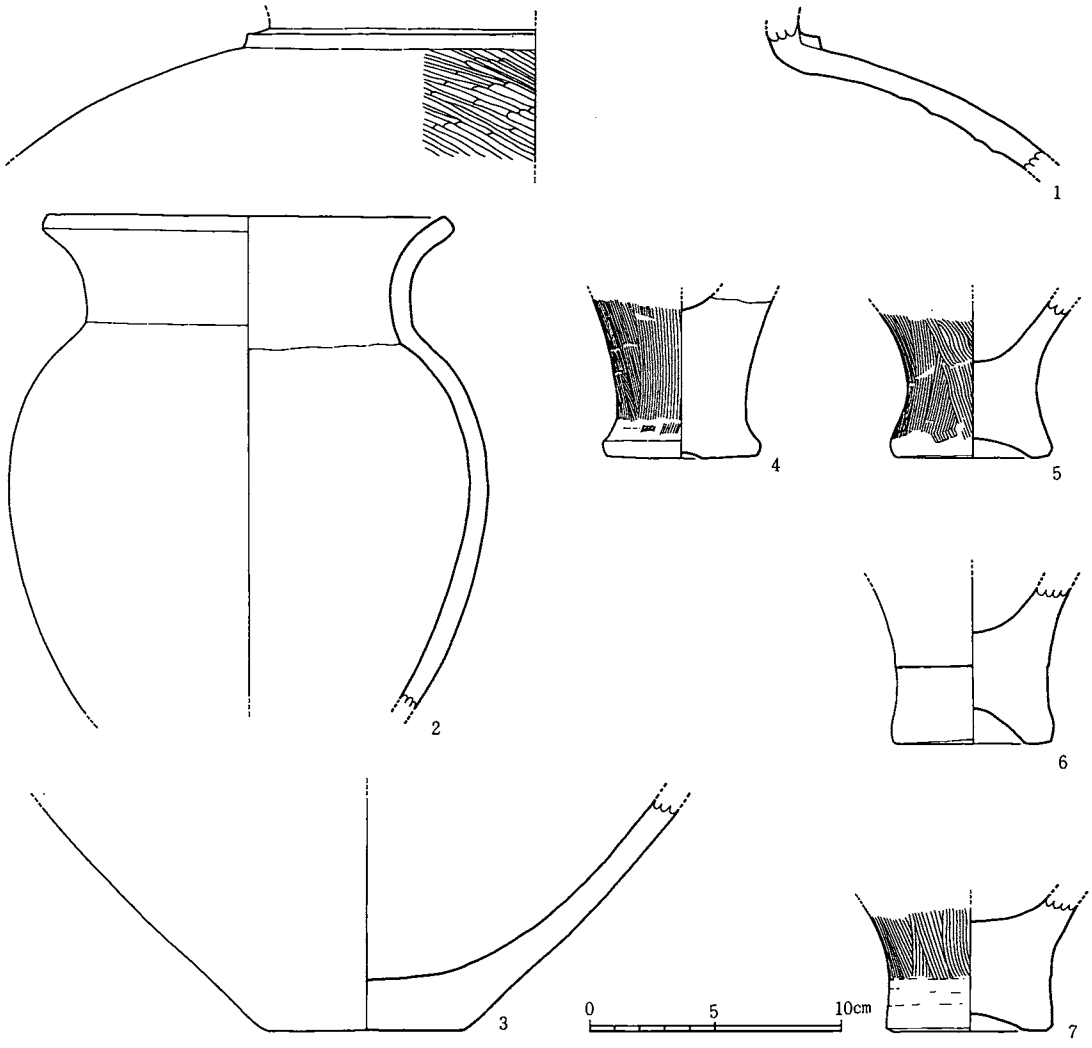
出土遺物はすべて土器で、細片を加えると計18点を数えるが、すべて破片であり覆土中層から上層に出土し、床面に接したものは3の壺底部破片のみであった。それぞれの土器の最下面と床面との間の覆土の厚みは、1 0.25m、2 0.08m、4 0.15m、6 0.29m、7 0.23mで、5は覆土上層から出土したものである。



第49図　上の原61号住居址

〈出土遺物〉（第50図1～6）

出土土器の数、種類とも少なく、大型壺（1・3）と小型の壺（2）、甕形土器底部破片3点（4～6）合わせて6点のみである。1は胴部が強く張り、頸部で屈曲するが、頸部はほとんど欠失している。胴部と頸部との屈曲部（接合部）外面に断面四角形の凸帯をめぐらせている。外面ともヘラミガキ、内面は刷毛目のあとヨコナデにより仕上げている。胴部最大径が30cmを測る大型の壺である。色調は灰褐色ないし黄褐色で焼成は良好である。3も1に類似する壺の底部とみられるが、内外面とも荒れていて調整方法は不明である。2は底部を欠失するが、倒卵形の胴部に外弯気味に開く口頸部をもつ壺形土器で、胴部と頸部の境は不明瞭



第50図　上の原61・63号住居址出土土器

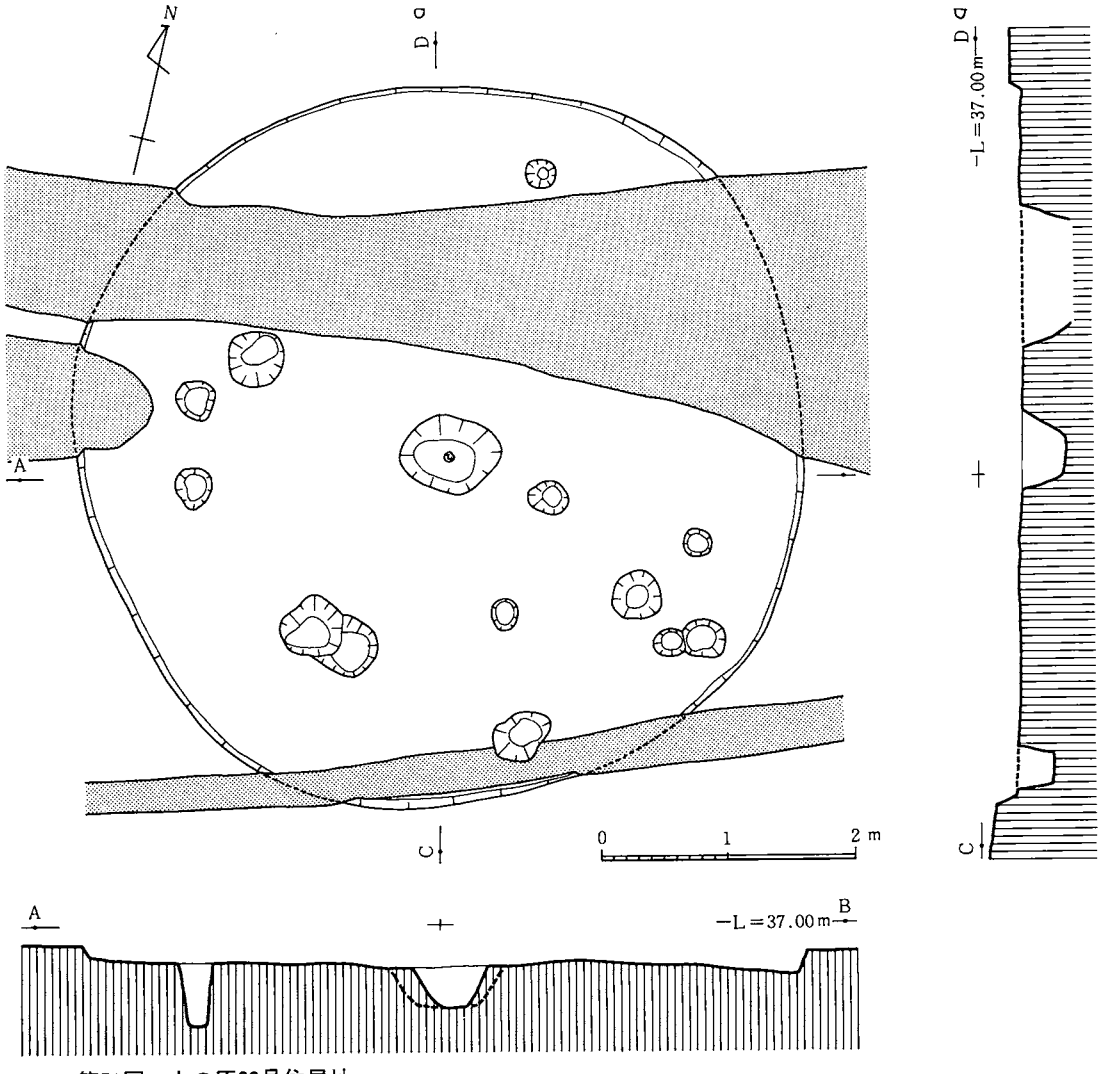
である。器壁は全体に厚く、内外面ともヘラミガキが施され、口縁部内外面は横ナデ調整されている。色調は暗褐色で焼成良好である。復原口径16.3cm、胴部最大径18.8cmを測る。

4～6は甕形土器底部破片で、4は外底部の中央に径1.5cmの小さなくぼみを施した程度の上げ底である。外底部全体もゆるやかなカーブで張り出していて、極めて不安定なものとなっている。5・6はいずれも外底部全体を上底にしたものである。4～6の2点とも外面は刷毛目調整し、底部の厚味は、4が5.6cm、5が3.0cm、6が2.9cmを測った。4に比較して5・6が粗く薄くつくられている。3点とも暗い黄褐色を呈するが、内面はいずれも暗褐色を呈している。

(9)上の原63号住居址（第51図）

32号住居址の北西45m、57号住居址の北東37mの地点に位置している。住居址は、二条の溝状遺構と一条の耕作溝によって撹乱を受けているものの、ほぼ円形のプランが復原できる。長径5.85m、短径5.85mを測った。

壁高は上部からかなり削平されていて、最大で0.18mを残すにすぎない。プランはすべてV層上面で検出



第51図　上の原63号住居址

し、同層を床面としている。床面は撹乱を受けた部分を残くと、ほぼ全面に良好な硬化した床面が確認できた。また床面中央に平面形が不正楕円形、断面形が逆台形を呈する地床炉様の土壙を検出した。土壙内には炭化物・焼土粒を含む土層が確認できたが、土壙地山面に直接火を受けた痕跡はなかった。地床炉様の土壙の周辺に計13個の柱穴を検出したが、撹乱によって失なわれた柱穴も数個以上あったものと思われる。

住居址内覆土は１層のみ残存していて、炭化物・焼土粒を含む暗褐土層である。出土遺物は床面中央地床炉状土壙内から甕形土器底部１点（第50図７）のみ出土しただけである。

〈出土遺物〉（第50図７）

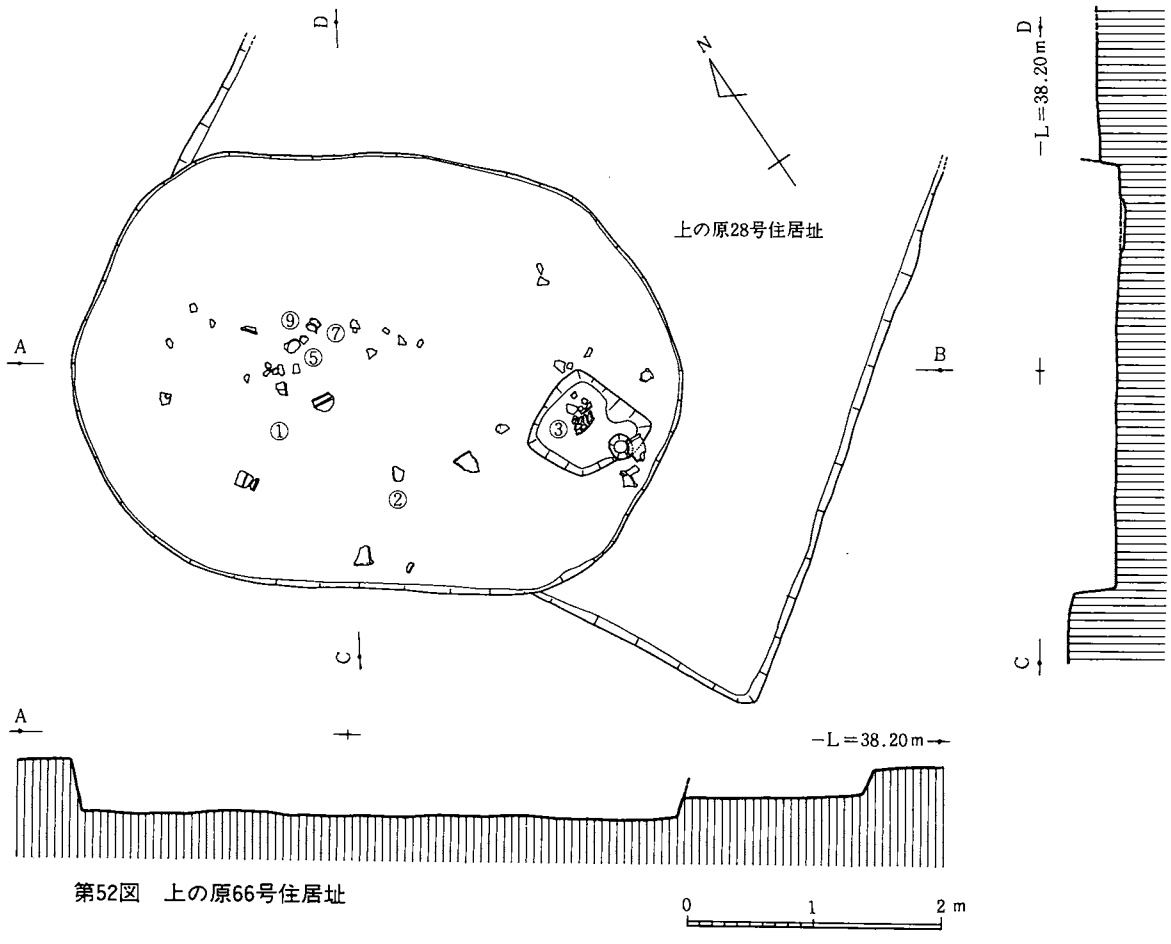
出土遺物は甕形土器底部破片で、１点のみである。外底部をわずかにくぼませた上底で、全体に肥厚している。外面は刷毛目のあとヨコナデで仕上げる。また内底部は黒褐色で器面が荒れてザラザラしている。

⑽上の原66号住居址（第52図）

13号住居址の西側５ｍにあり、13・24・32号３軒の住居址に囲まれた地点に位置し、さらに28号住居址（古墳期）と大部分重複している。住居址の平面は長楕円形プランあるいは隅丸六角形を呈する。長軸線上

で4.83m、短軸線上で3.37mを測り、長軸方位はN－55°－Wである。

壁高は最大で0.45mを残している。28号住居址と重複しない部位での地山確認面はⅢ層中位で、Ⅳ層を床面としていてⅤ層には達していない。28号住居址床面との深さの差はほぼ0.15m前後あるために、重複部分



第52図　上の原66号住居址

のプランでは28号住居址床面と壁面で明確に検出することができた。床面の東隅に貯蔵穴状の浅い土壙を設けていて、土壙内には炭化物を多く含む土層が堆積していた。

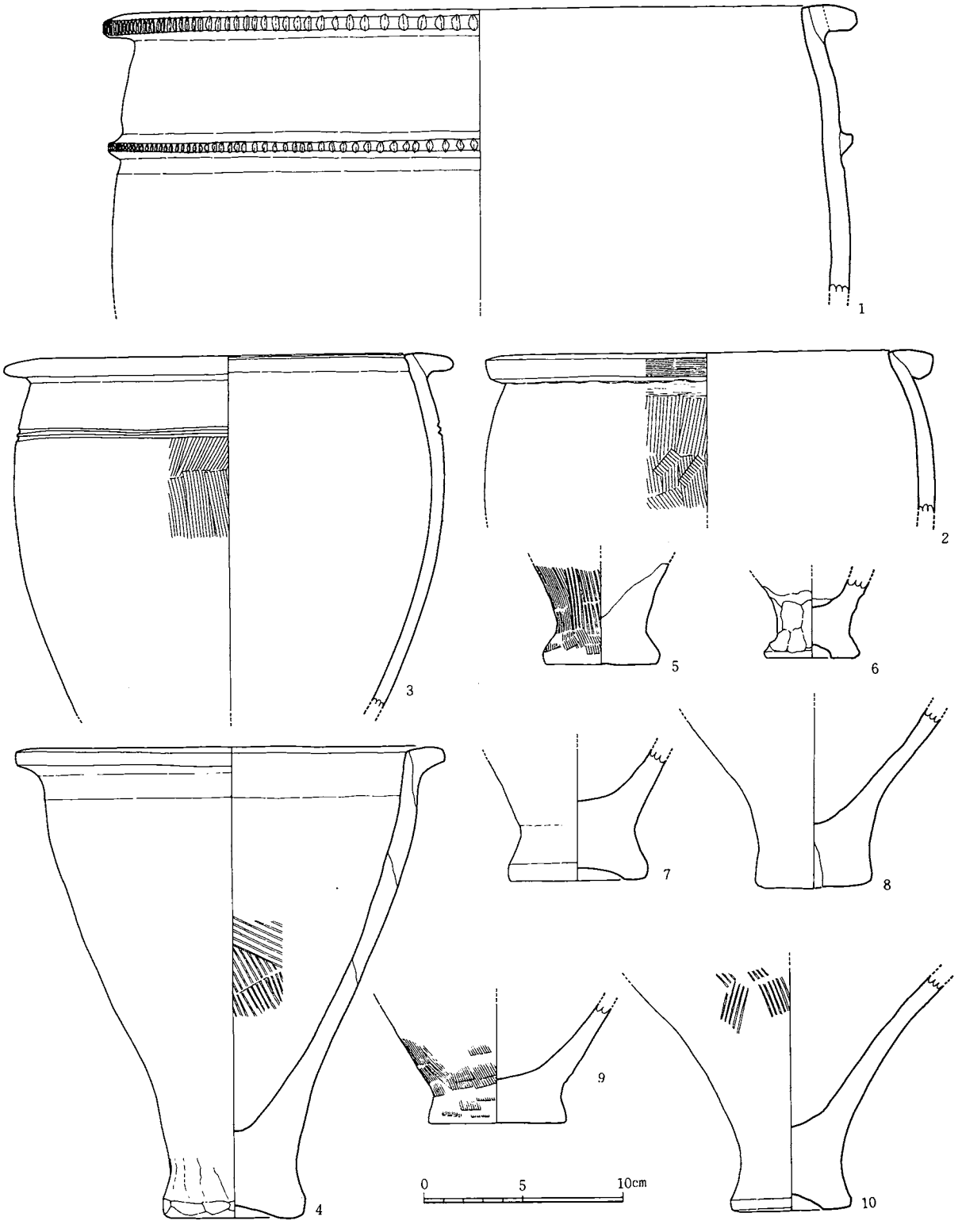
住居址内覆土は上下2層が認められ、上層は黄褐色土で、下層は炭化物や焼土粒を多く含んだ暗褐色土層で0.10m前後の厚さで床面全体に堆積していた。出土遺物は細片を加えると計23点にのぼるが、すべて甕形土器の破片である。ほとんどが床面より上部の覆土層中に出土したもので、唯一2の甕形土器口縁部破片1点（第53図2）のみ床面に密着した状態で出土したものである。なお1の甕形土器（第53図1）は床面西半分のかなり広い範囲に散乱し、3の甕形土器（第53図の3）は壁近くの覆土中から破片の一部が貯蔵穴内に傾斜をもって流れ込んだ状況を示している。

〈出土遺物〉（第53図）

出土遺物は、すべて甕形土器で9個体分を数えた。甕形土器には、胴部に一条の刻目凸帯をめぐらすA（1）、胴部に一条の沈線をめぐらすB（3）、胴部に文様をもたないC（2・4）の三者がある。

1は直立する口縁部外側に断面三角形の粘土帯を貼り刻み目を施したもので、いわゆる「L」字状をなし、上端部はわずかに丸みをもち、先端がやや下り気味となる。口縁下4.9cmに断面三角形の刻目凸帯をめぐら

す。内外面は刷毛目調整するが、器面の磨滅が著しい。2は口縁部が内湾気味に立ち上り、外面に断面三角形の粘土帯を貼り付け、口縁上端はわずかに張り出して丸味を持つ。内外面は刷毛目調整のあと、口縁部内面、上端部を横ナデにより仕上げる。復原口径22.3cm、最大口径22.3cmを測る。色調黄褐色で焼成良好である。胎土中に大小の石粒を含むが、仕上調整が丁寧であるため器表面にはほとんど認められない。3はやや



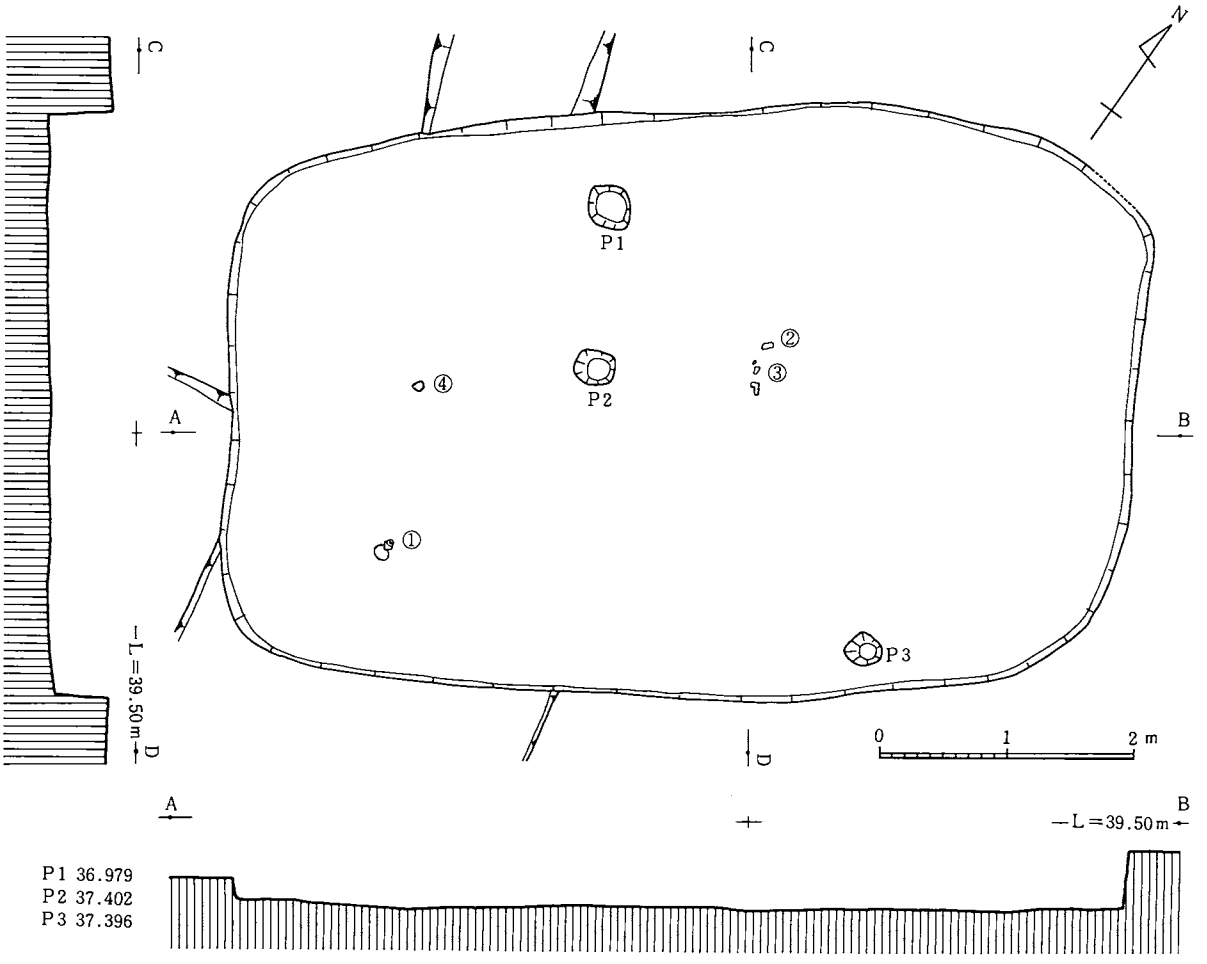
第53図　上の原66号住居址出土土器

強く張った胴部から口縁部が内弯気味に立ち上がり、外面に断面三角形の粘土帯を貼り付ける。口縁先端はやや下り気味となる。口縁下2.3cmに二条の平行沈線をめぐらしている。内外面とも刷毛目調整したのち、口縁部内外面を横ナデにより仕上げる。復原口径22.5cm、最大口径21.5cmを測る。色調は黄褐色で、胎土に石粒を多く含み、焼成は良好である。4はほとんど張りのない胴部から、口縁部はやや開き気味に直立し、外面に断面三角形の粘土帯を貼り付ける。いわゆる「く」の字状の口縁をなす。胴部下半から底部にかけて細くなり、上げ底の底部にいたる。底部は外底部をわずかにくぼめた上げ底で、著しく厚いつくりとなっている。器壁全体も厚く、仕上げもやや粗雑である。底部外面にヘラ状の工具の調整痕と胴部内面に単位の大きな刷毛目痕が認められる。甕形土器の中で器形全体が判明したものはわずかであるが、この種の甕形土器は種類が少なく、特異な形態と言わねばなるまい。口径21.4cm、器高23.4cmを測る。

5～10はいずれも甕形土器底部破片である。8・9は平底のものであるが、9は8に比べ安定感があり、また薄くつくられている。9は底部外面を刷毛目調整したためにややくびれている。5は、外底部中央を指頭でわずかに押した程度の上げ底で、伝統的な手法が残存しつつも形骸化し、ほとんど平底のままである。外面には単位の大きい刷毛目が施される。7・8は、外底部を低い円錐状にくぼめた上げ底で、厚いつくりである。6は小型の甕形土器の底部で、60号住居址出土の11（第48図）と同様、手づくね土器を想起せしめる粗雑なつくりであるが、底部の上げ底の手法などは、よくその特徴を備えている。

(11)上の原68号住居址（第54図）

調査区の南東部の端にあり、63号住居址の南東52.5mの地点に位置している。住居址の平面形は長楕円形



第54図　上の原68号住居址

（隅丸の長方形）を呈していて、長軸線上で7.09m、短軸線上で4.13mで長楕円形の住居址の中では最も規模が大きい。長軸線上の方位は（磁北）N－55°－Eで、30・36号住居址に比較して、わずかに東へふれている。

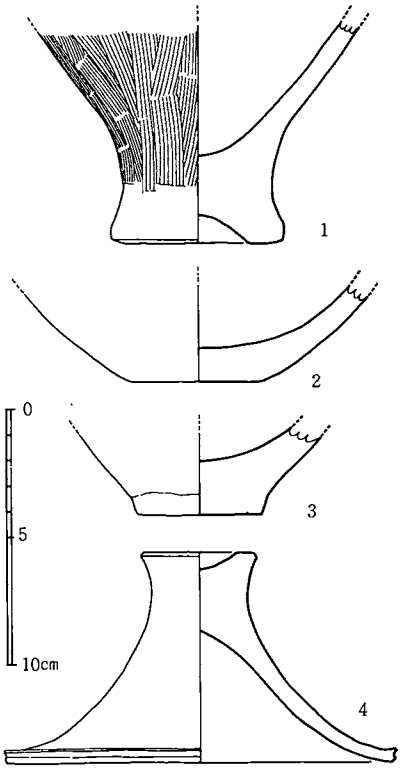
壁高は最大0.50mを残すが、プラン確認面はⅣ層上位であり、旧状は少なくとも0.70m以上を有していたものと推定される。床面はほぼ全面硬く踏み固められ、Ⅴ層を約0.20m掘り下げている。柱穴は4個検出したが、配列には整然さを欠く。貯蔵穴等は検出できなかった。

住居址内覆土は、分層することは困難であり、炭化物を多少含む暗褐色土が、床面まで堆積していた。覆土中からの出土遺物は極めて少なく、細片を含めて計8点にすぎない。このうち1～4の4点とも覆土下層からの出土であるが、床面に接したものは皆無であった。なお1の小形の壺形土器に接するようにして磨石が出土している。

〈出土遺物〉（第55図）

出土量は極めて少なく土器計4点にすぎない。甕形土器底部破片1（1）、壺形土器底部破片2（2・3）、蓋形土器1（4）である。

1は低い円錘状にくぼめた上底の底部で、厚いつくりである。外面は刷毛目調整され、底部近くは横ナデによりていねいに仕上げている。黄褐色を呈し、焼成は極めて良好である。2・3は平底の壺形土器底部破片で、2は丸味をもった胴部からそのまま移行するが、3では底部近くで弱く屈曲して底部に至る。2・3とも内外面やや荒いヘラミガミで仕上げている。4は小型の蓋形土器である。つまみ部はわずかにくびれ、上面が、甕形土器底部同様に浅くくぼんでいる。体部から裾部にかけて大きく朝顔状に開き、端部は角ばり、中央部が「V」字状にくぼんでいる。器面にはわずかに刷毛目状のものが観察できるが、磨滅が著しく細部の観察はできない。つまみ部の口径4.6cm、裾部口径15.4cm、器高8.3cmを測る。



第55図　上の原68号住居址出土土器

⑿上の原102号住居址（第56図）

36号住居址の東約21m、63号住居址の北50mの地点に位置している。また102号・63号・68号は、丘陵縁辺に沿って、ほぼ一直線に並んでいる。住居址の西側は耕作溝によって撹乱を受け、また東側は地山の傾斜に加えて、上部からの削平が著しく、プランの検出はできなかった。残る北側と南側も二条の耕作溝によって部分的に撹乱を受けているが、これらを考慮して復元すれば、径5.3m×5.9mのほぼ楕円形プランが推定できる。

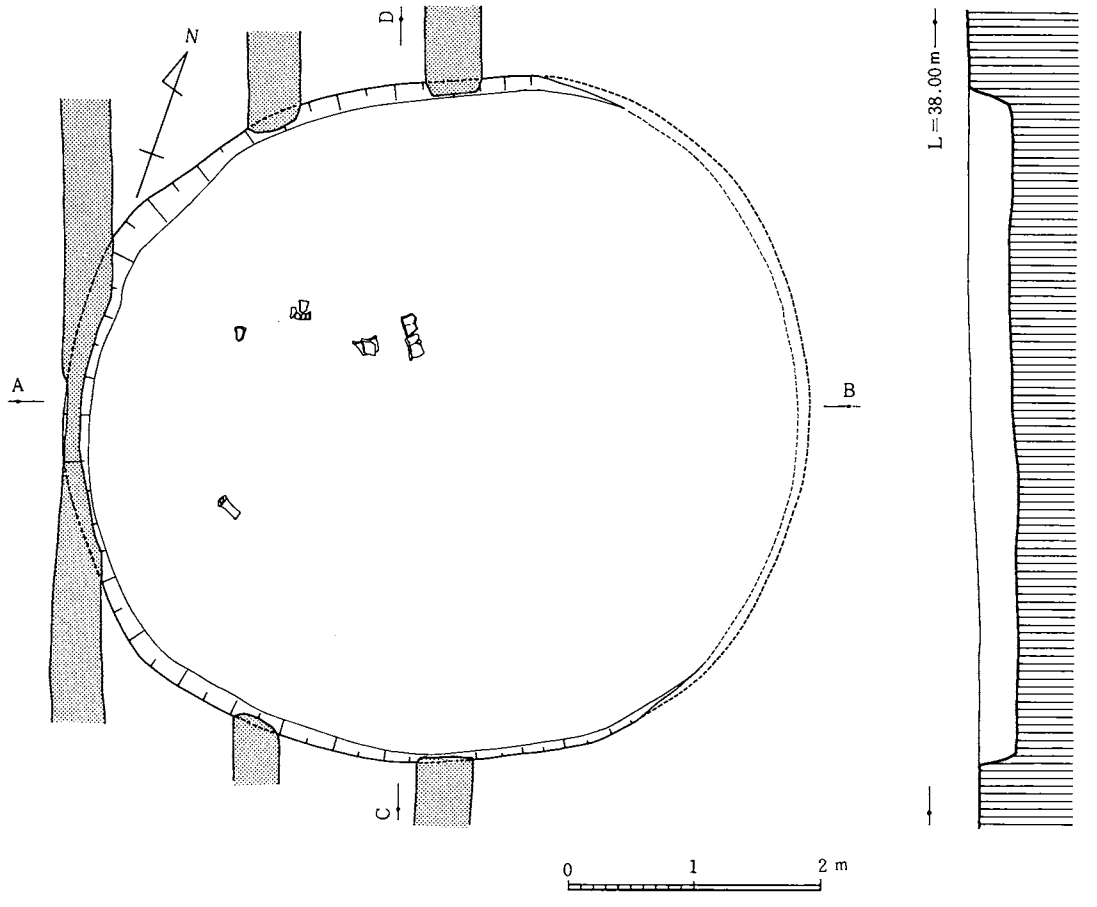
壁高は最大0.50mを測る。プラン確認面はⅣ層下面で、Ⅴ層を約30～40cm据り下げて床面としている。床面は西壁側の一部に低い部分があるが、全体的には水平面を保っている。残存する床面はすべて硬く踏み固められていて、柱穴・炉址・貯蔵穴などは認められなかった。

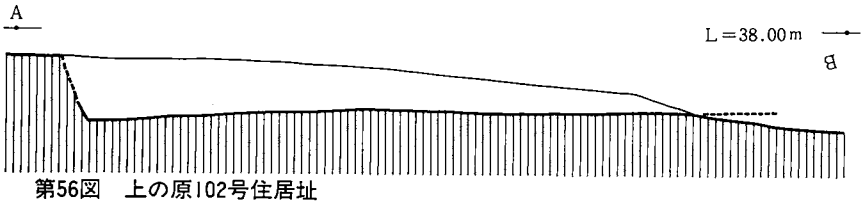
住居址内覆土は、暗褐色土で炭化物・焼土粒を多少含んでいた。覆土の分層は出来なかった。出土遺物は

土器のみで、計19点６個体分が出土し、甕１、壺３、器台２点であった。いずれも覆土下層に出土したが、床面に密着するものは無かった。

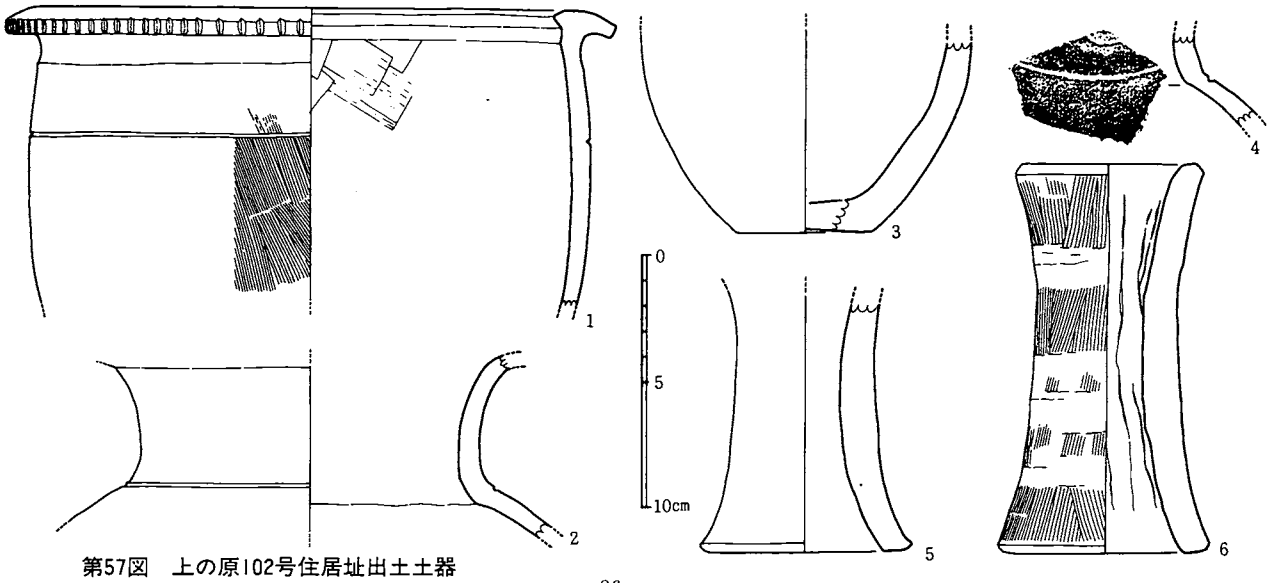
〈出土遺物〉（第57図１～６）

土器の出土量は少なく、甕形土器１（１）、壺形土器３（２・３・４）、器台２（５・６）の計６点である。





第56図　上の原102号住居址



第57図　上の原102号住居址出土土器

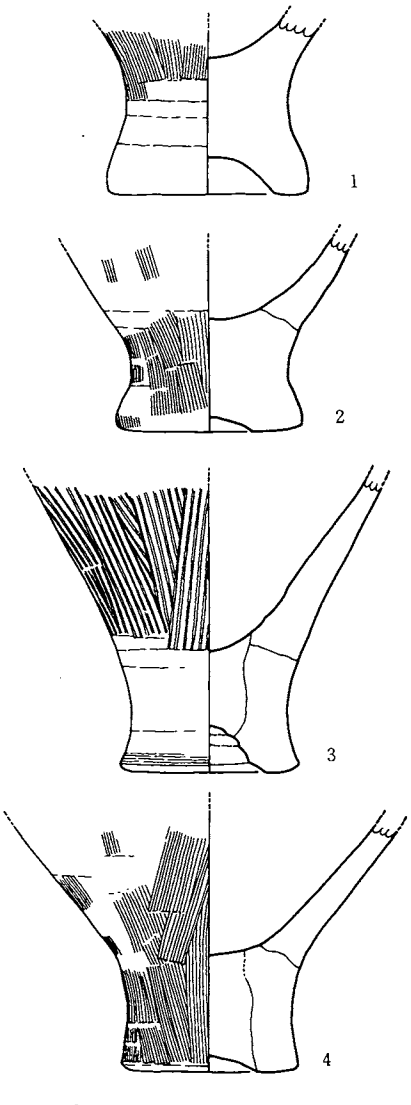
1は「L」字形口縁をもつ甕形土器であるが、口縁端部内面が突出するため、むしろ「T」字形口縁に近づいている。胴部の膨らみはわずかで、口縁下4.0cmに一条の沈線をめぐらせる。内外面は刷毛目調整されるが、口縁部内外面から外面の沈線の間は、横ナデにより仕上げられている。色調は黄褐色で、胴上半部に炭化物が付着している。焼成は良好である。

2・4は壺形土器頸部破片で、膨らみをもつ肩部から屈曲して頸部が外弯気味にまた立ち上り、さらに口縁部付近で外方へ屈曲する。肩部と頸部の境に一条の沈線をめぐらせている。3は壺形土器の胴部下半から底部にかけての破片で、胴部はふくらみ、底部はやや上げ底状になる。内外面とも荒いヘラミガキが施される。

5・6は器台で、5は上半部を欠失し、6は完形品である。いずれも筒状の体部で、受部・裾部がわずかに外反する。6は外面をタテ方向の刷毛目のあと部分的に横ナデ調整する。内面はタテ方向の幾条ものしぼり目が走る。5・6とも器壁の厚みは最大1.5cm前後あり、厚いつくりが特徴となっている。5は暗褐色、6は黄褐色ないし灰褐色で、胎土中に大小の石粒を多量に含む。焼成は良好である。

(13)藤山1号住居址（第59図）

住居址群の中で最も南側の端に位置している。行政区分から言えば、城南町藤山区字東原に在り、藤山1号住居址と仮称したが、藤山地区での住居址検出数は1軒のみである。藤山1号住居址から南側についても面的な遺構の検出を実施したが、後述する甕棺を除いては何ら遺構らしきものは検出できなかった。したがって本住居址を同時代の集落の一応の南限と考えておきたい。



第58図　藤山1号住居址出土土器

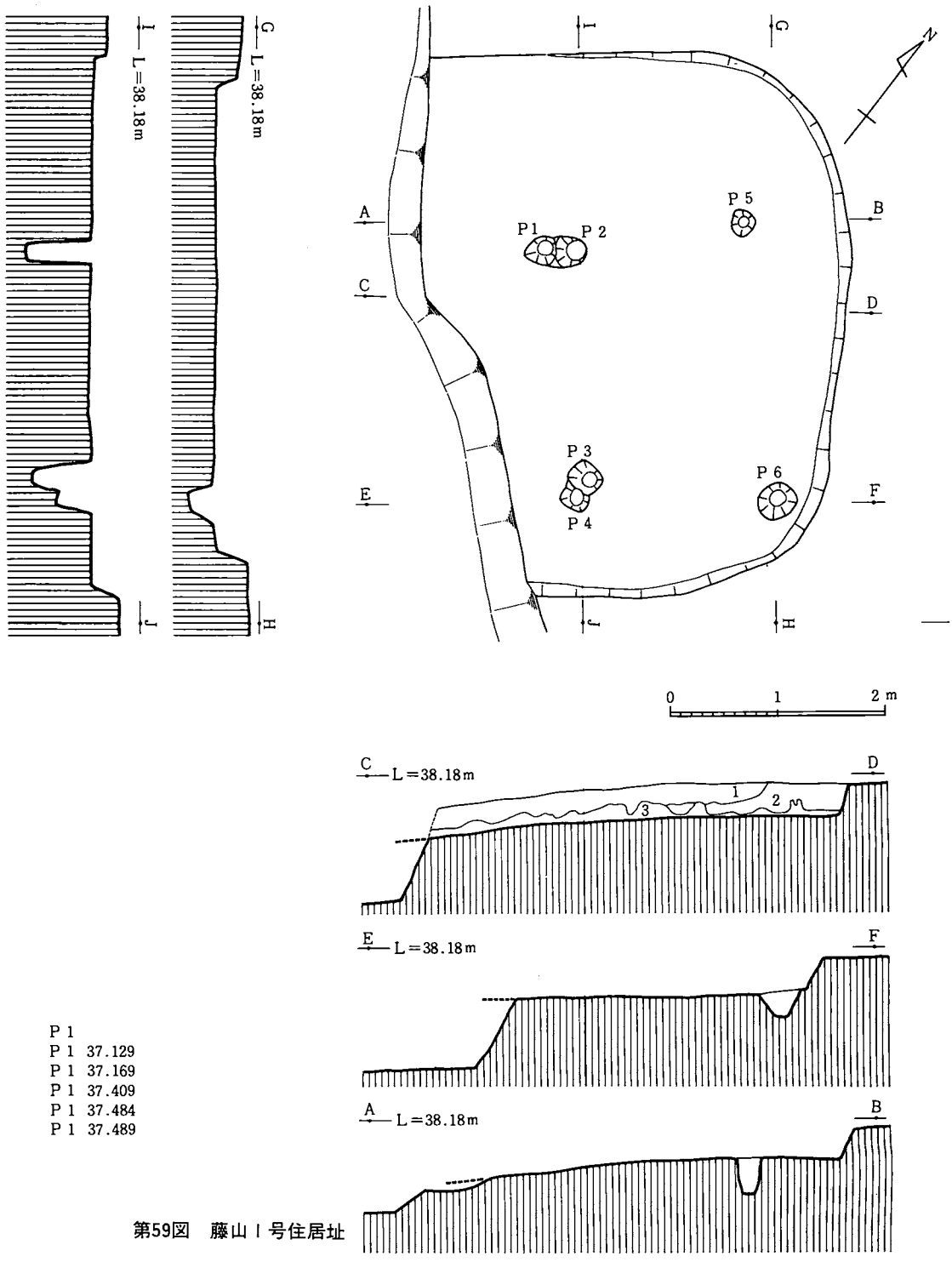
住居址は南西側を耕地整理の際に大きく削平されているので全体のプランを明らかにすることはできなかったが、他の例から推して、隅丸方形ないし、隅丸の長方形になるものと思われる。残存部での中軸線上の長さ（Ⅰ－Ｊ）は4.98m、Ａ－Ｂでは3.98mを残すだけである。なお主軸方位はⅠ－Ｊを基準とした場合はＮ－39°－Ｗで、Ａ－Ｂを基準にすればＮ－51°－Ｅとなる。

壁高は確認できた地山面から、最大0.28mを残している。床面は全体的に硬くふみしめられ、残存部ではⅠ－Ｊ・Ｇ－Ｈでは水平面を保つものの、Ａ－Ｂ・Ｃ－Ｄ方向では、南西方向でいずれも低くなっている。床面には6個の柱穴を検出したが、それらの配置状態は住居全体のプランとの関連では判然としない面が多い。

住居址内覆土は3層からなり、上層から1は黒色土、2は黄褐色土、3は暗褐色土層である。1は本遺跡標準層序でいうII層に類似し、2層は同III層に近い。3は炭化物、焼土粒を含むものである。出土遺物の量は少なく、土器片12点を数えるにすぎない。土器はすべて1・2層中に出土し、3層ないし床面に密着して出土したものはなかった。

〈出土遺物〉（第59図）

出土遺物はすべて甕形土器底部破片で、4点を数えた。いずれも肉厚で外底部をわずかに窪めた上げ底であるが、上げ底の深さは各個体によってばらつきがみられる。器体外面は刷毛目調整し、その後ヨコナデするものもある。内面はすべて暗褐色を呈し、風化してザラザラとしている。（野田）



P 1
P 1 37.129
P 1 37.169
P 1 37.409
P 1 37.484
P 1 37.489

第59図　藤山1号住居址

2　甕　棺　墓

調査区の南端、藤山地区内に甕棺2墓を検出した。藤山1号住居址の東側約40mに位置し、上原地区の68号住居址の南約50mの地点に位置している。2基の壺棺の間は約1.4mで、極めて近接している。これを藤

山１号棺・同２号棺と仮称した。２基の甕棺の周辺についてもかなりの広い範囲について精査したが、２基以外に検出できなかった。

(1) １号甕棺墓（第60・61図）

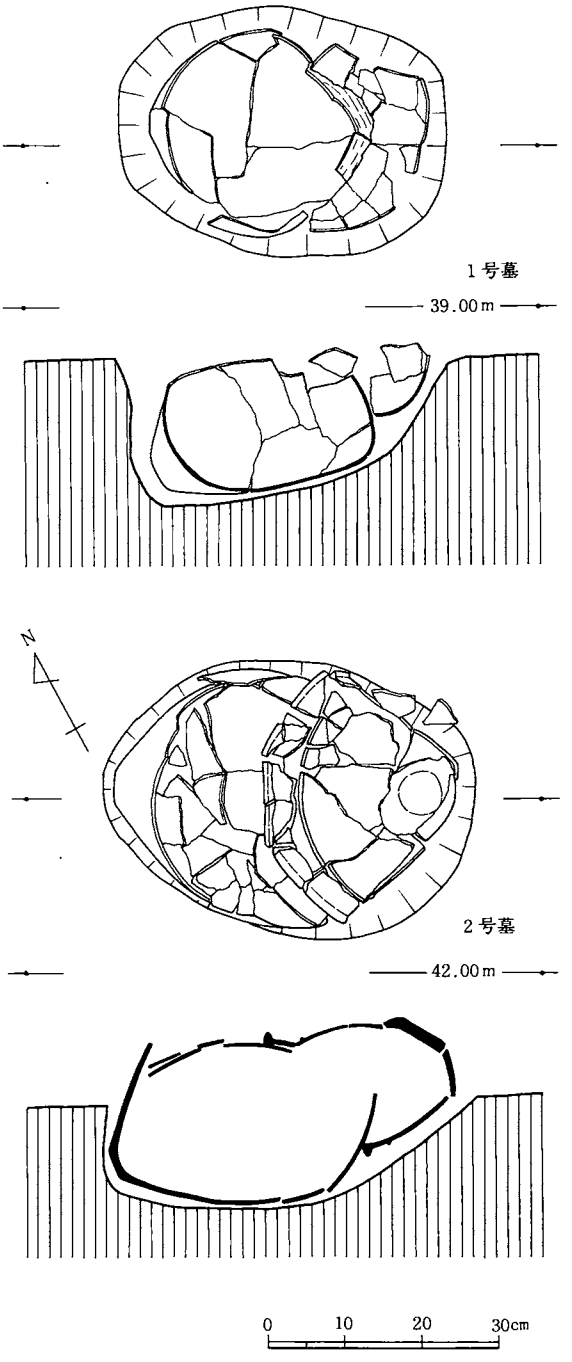
胴張長方形の墓壙に納められている。墓壙の規模は長軸0.43ｍ、短軸0.33ｍ、深さは確認できた地山面から最大0.20ｍで、床面は傾斜をなしている。墓壙は耕作等により削平を受けた際に上下甕とも一部分を破損していた。上下甕はいずれも壺の口頸部を打ち欠いて合せ口としている。主軸方位はＮ－28°－Ｗで、埋葬傾斜角度は＋28°である。接合部の目貼りは認められず、棺内に人骨・副葬品等の遺存は無かった。

上甕

壺形土器の口頸部を打ち欠いたもので、下甕より一回り小型である。口縁部は不明であるが、最大径が胴部上半にあり、底部は平底である。外面はほぼ全面右下り方向の丁寧なヘラ磨きを施し、内面も丁寧なナデ調整により仕上げている。色調は暗褐色を呈する。胴部最大径22.4cm、底径6.8cm、現存高19.2cmを測る。

下甕

上甕とほぼ同形の壺で、口頸部を打ち欠いたものを使用している。最大径が胴部上半にあり、底部は上甕に比較して小さな平底である。外面はほぼ全面丁寧なヘラ磨きを施している。磨きの方向は頸部から肩部は横方向、それ以下はタテないし右下りである。内部はナデ調整を施している。頸部直下から肩部にかけて、ヘラ状工具の先端部を使用した七本を単位とした孤状沈線を三方に描いている。器壁は全体として薄いが、底部は厚いつくりとなっている。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。胴部最大径29.8cm、底径56.0cm、現存高29.6cmを測る。



第60図　藤山１・２号甕棺墓

(2) ２号甕棺墓

長楕円形の墓壙に納められている。墓壙の規模は長軸48.5cm、短軸35.7cmを測り、棺ぎりぎりに掘られている。墓壙の深さはわずか14.5cmを残すにすぎず、上部は削平を受けている。上下甕とも土圧により押しつぶされてはいたが、ほぼ旧状を残していた。上

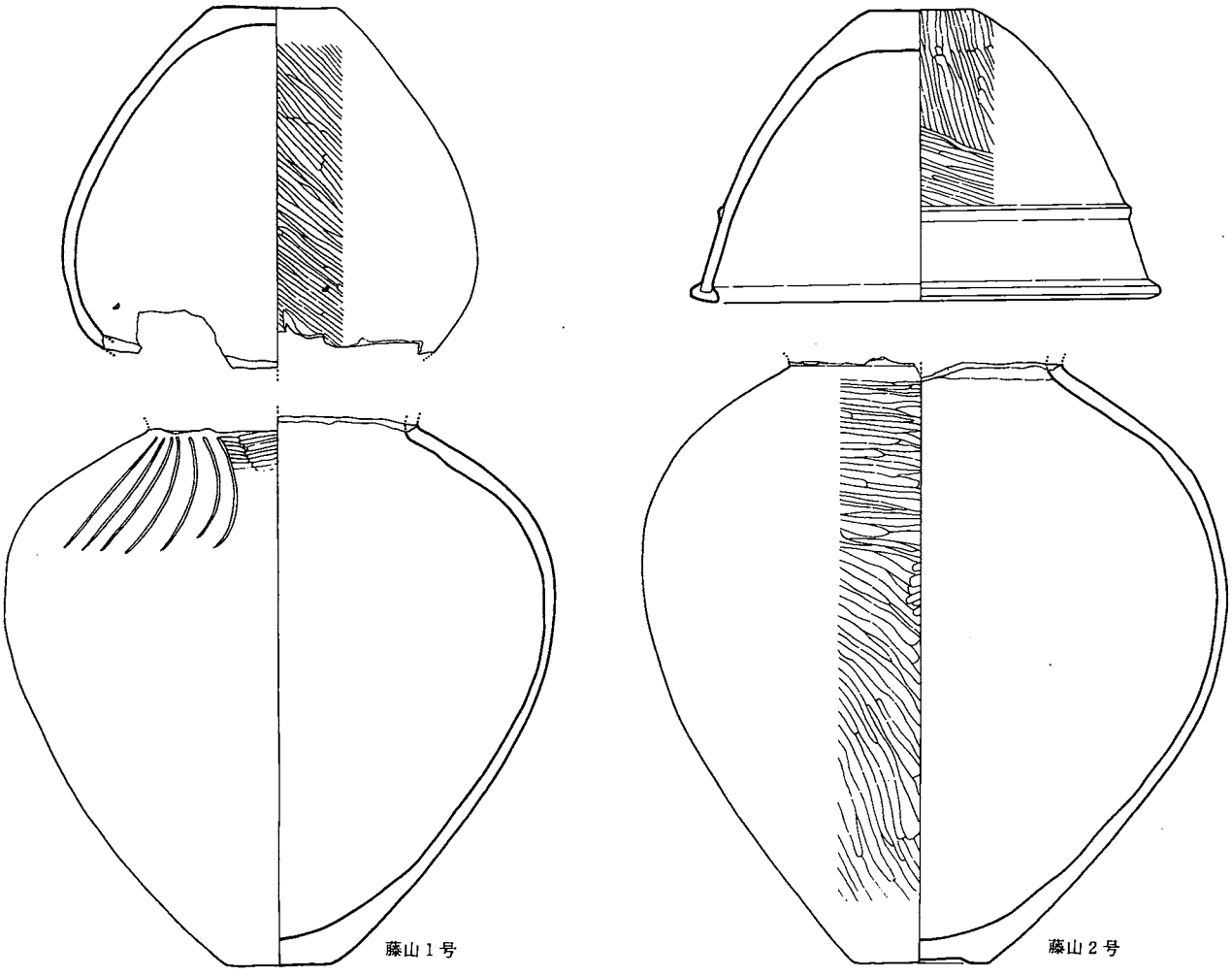
甕は鉢形土器、下甕は壺形土器の口頸部を打ち欠いて合せ口としている。主軸方位はN－23°－Wで埋葬傾斜角度は＋23°であった。接合部の目貼りは無く、棺内に人骨・副葬品の遺存は認められなかった。

上甕

鉢形土器を転用したもので、口縁部は未発達の「T」字状で、内側がわずかに突出し、口縁部上端が外側で下がるような傾斜をもっている。胴部上半に断面三角形の凸帯を一条めぐらせている。胴部は丸味をもち、底部は平底である。外面は口縁部から胴部凸帯までは横ナデによる丁寧な調整を施し、以下ヘラ磨きで仕上げている。ヘラ磨きの方向は、上半部では右下り、下半部から底部の間はタテに近い右下りである。器壁は胴部は薄いのに比較して、底部は著しく厚いつくりとなっている。なお口縁部は胴部上端部に粘土帯を接合して造られている。色調は灰黄褐色で焼成やや不良である。口径25.3cm、底径5.6cm、器高15.5cmを測る。

下甕

口頸部を打ち欠いた壺形土器である。器体のプロポーションは1号棺上下の壺とよく類似するが、1号棺下甕よりさらにひと回り大型である。最大径は胴部上半にあり、底部は外底部周縁が輪状に突出した上げ底となる。外面は胴上半部が横方向、下半部が右下りの丁寧なヘラ磨きを施し、頸部のみ横ナデ調整で仕上げる。内面は丁寧なナデ調整で仕上げている。色調は黄褐色で部分的に暗褐色を呈する。胴部最大径31.7cm、底径7.2cm、現存高32.4cmを測る。



第61図　藤山1・2号甕棺　0　10　20cm

(3)その他の出土遺物

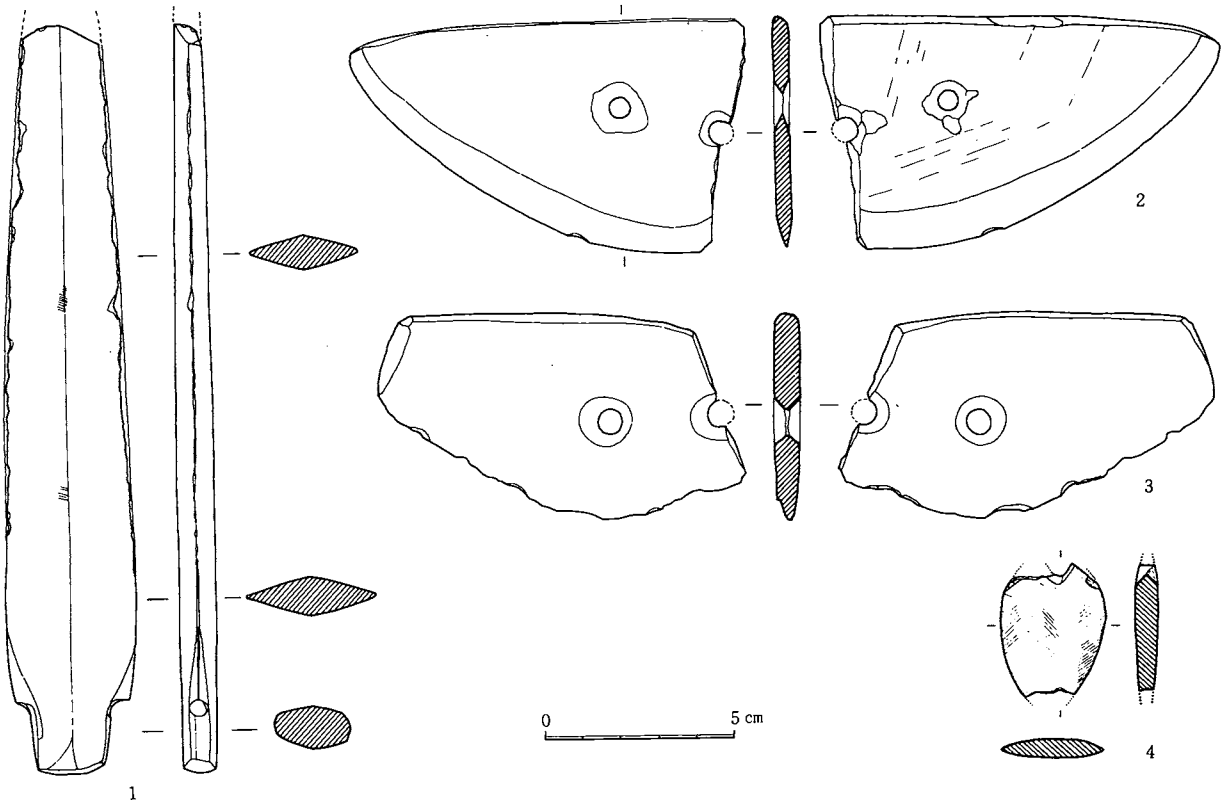
調査地区の各所から弥生時代の石器が出土した。いずれも遺構に伴うものではなく、包含層および採集品である。

磨製石剣（第62図１）

32号住居祉の北側７ｍの地点のII層（黒色土層）中に先端部を上にして約20°の傾斜をもって出土したもので、遺構に伴出したものではない。いわゆる鉄剣型石剣で粘板岩系の石材である。鍔を欠き、左右の刃部が刃こぼれをしているが、鎬を明瞭に研ぎ出している。茎をえぐるように削りその角度は直角に近い。身部の断面は扁稜形で、基部の断面は楕円形をなすが、シャープに面取りされている。全体のつくりは極めて精巧で、石材の目の集合を鎬に合わせるなど、原材をうまく生かしている。長さ19.5cm、身巾最大 3.4cm、茎巾3.0cm、基部長2.2cm、同巾2.1cmを測る。

石庖丁（第62図２・３）

２・３の石庖丁はいずれも調査区内での採集品である。２は頁岩質砂岩製で孔から折損している。いわゆる半月型外弯刃で２孔を交互から穿っている。背部中央は直線的であるが端部でややカーブを描き、半月状に研り出された刃部の孤はゆるく、全体として幅狭である。刃部は両刃で刃部側と背部との厚みは一定で、0.4cmを測り身薄の製品である。器面の研磨は孔から背側では背に対してほぼ直角方向、直角に近い右下り方向で、刃部側では刃部と平行に研磨されている。３も頁岩質砂岩製で半月型外弯刃の範疇に入るものであろう。刃部はほとんど欠損し、背部及び端部は再加工が加えられていて、原形が判然としない。２孔を有



第62図　磨製石器

しいずれも交互から穿たれている。2の石庖丁に比べて身が厚く、刃部は残存部位では両刃である。器面全体の磨滅と風化が進行して、研磨の方向は判明しない。

不明石器（第62図４）

調査区内からの採集品である。砂岩製で楕円形を呈する磨製石製品である。楕円形の器面は一方が広く、他方が狭くなっていて、幅広側は欠損するが中央と左右にそれぞれ１ヶ所の計３ヶ所に交互から研磨された抉りが認められ、また幅狭側も先端部を欠損している。石錘あるいは垂飾具であろうか、用途・年代とも特定出来ない。長さ3.5cm、巾2.7cm、厚さ0.6mを測る。（野田）

第Ⅳ章　55年度調査の成果

第１節　調査の概要

１．調査の概要

54年度調査が終了した時点で、調査未了部分は約3.8haを残していた。この内、54年度調査区に隣接した約1.2haについては54年度中に表土剥ぎ、遺構確認が行われていた。前年度担当者からの引継では、表土剥ぎ終了部分に約100基の住居址が確認され、重複の複雑な部分があるので住居址数は若干増加する可能性があり、その北側部分については、53年度の試掘結果から約1haについて遺構の広がりが予想されるということであった。

54年度後半から55年度初めにかけて、数回にわたり農政部局、地元との協議が行われ、最終的には55年度中に残りの全地域について現地調査を終了するとの結論に達した。これらの経緯を経て、調査面積約2.2ha、主たる調査対象となる住居址数270基（表土剥ぎ完了部分140基、未了部分130基）を想定し、具体的な調査計画を作成した。試算では調査員常時10名、作業員30～35名を必要とし、調査費として5,000万円が計上された（最終的な所要経費は4,800万円）。

調査員及び作業員は４班の調査班に編成し、各班の調査員の指示によって調査作業を進めた。渉外、事務処理、各班の総括は松本が行い、重要事項などについては調査員会議（ミーティング）で検討した。

調査区の区分は20ｍ方眼のグリットを設定した。53・54年度調査の主軸線に合わせて設定したため、方位などは任意のものとなっている。地区表示は西から東へＡ～Ｉ、南から北へ０～14とした。遺構名は、住居址、土壙などについては区ごとに付し、区名を冠してＡ－１－１住、Ｂ－１－１号土壙などとした。ただし、古墳については発見順に上の原１～12号墳（８号墳は欠番）とし、溝・道路状遺構など広域にわたる遺構についても独自の名称を付した。

調査面積が広範囲に及ぶため、表層の排土は重機で行った。その場合、Ⅱ層下面～Ⅲ層上面までを重機で排土し、その下部は人力で行った。（松本）

２．調査の経過

55年度の現地調査は55年５月８日に着手し、56年３月31日に終了した。日曜・祝祭日・雨天などを除き、延々11ヵ月間に亘り、同一遺跡で四季を過す長期調査であった。

現地調査を実施した日は調査班（４班）ごとに調査日誌を記入したが、その綴りは厚さ12.5cmに達した。調査内容も多岐にわたるので経過の詳細については割愛するが、概要を抽記することとしたい。

55年４月　調査工程、調査費用などについて農政部局・地元と協議。国庫補助申請などの事務処理を進める一方、現地を踏査して調査計画を立案する。

55年５月８日　現場事務所建設。

55年５月９日　調査員８名（村井・松本・勢田・広瀬・清田・高野・森山・吉田）、作業員23名で調査作

第63図　55年度調査区全体図

業を開始。20mグリットの設定、遺構確認作業を行う。

55年5月11日　住居址の発掘を開始。A－1・2区で道路状遺構を検出。

55年5月12日　調査区を縦横に走る溝の年代・性格を知るため、1班は溝の調査に着手。溝に伴う遺物はきわめて少ない。住居址発掘班では、4～5世紀の住居址と7世紀代の住居址とが混在していることが判明。

55年5月27日　本日より古森が調査に加わる。

55年6月4日　山内・吉田の両教育次長・岩崎文化課長が現地視察。

55年6月10日　本日より高木が調査に加わる。

55年6月12日　この頃から梅雨のため天候不順。田植などにより作業員の出勤率も低下傾向であるが、土が水分を含んでいるため遺構の確認には好条件である。

55年7月15日　6～7月と続いた梅雨もようやく明けかかる。各調査班ごとに住居址の発掘作業を続ける。調査作業も軌道にのり、作業員を35名に増員する。

55年7月22日　本日より野田が調査に加わる。

55年8月1日　F－6－6住より第Ⅰ様式の須恵器出土。7世紀代の住居址を除いて、須恵器を出土した唯一の住居址である。

55年8月12日　甲佐高校社会部の藤川先生他生徒12名、調査に参加。

55年9月2日　九州農政局、県耕地第一課、県宇城事務所耕地第一課から視察。

55年9月9日　表土剝ぎ未了部分について、表土剝ぎ範囲、排土場所の確定のため、調査予定地区周縁部の再試掘を開始。この試掘によって、調査範囲が従来の予想よりも拡大すること。古墳が埋没していることが判明。

55年10月1日　E－4－7住から、朝鮮半島製と思われる鉢が出土。外面に格子叩き目を施し、土師質の焼成である。

55年10月15日　表土剝ぎ未了部分について、重機を入れて表土剝ぎを開始（11月13日まで）。

55年10月16日　本日より浦田が調査に加わる。

55年11月14日　新たに表土剝ぎを行った部分について遺構確認。樹根などによる撹乱が多く土層は見づらい。従来の分と合わせて住居址は315基に達し、古墳1基を確認。

55年12月5日　住居址の調査と併行して古墳の調査を開始。冬場になり、朝のうちは霜のため作業が難行する。

55年12月25日　55年の調査作業終了。年末まで調査員は鹿央町の浦大間古墳群の調査応援に出向く。

56年1月6日　56年の作業を開始。

56年1月10日　調査区北端の表土剝ぎ作業開始。北側になると住居址の数は減ってくるが、北端には10基の古墳が新たに出現し、古墳は計11基となった。

56年2月　住居址の調査と古墳の調査を半々の勢力で進める。

56年2月28日　6号墳周溝より馬の埋納土壙を検出。中から馬歯が出土。

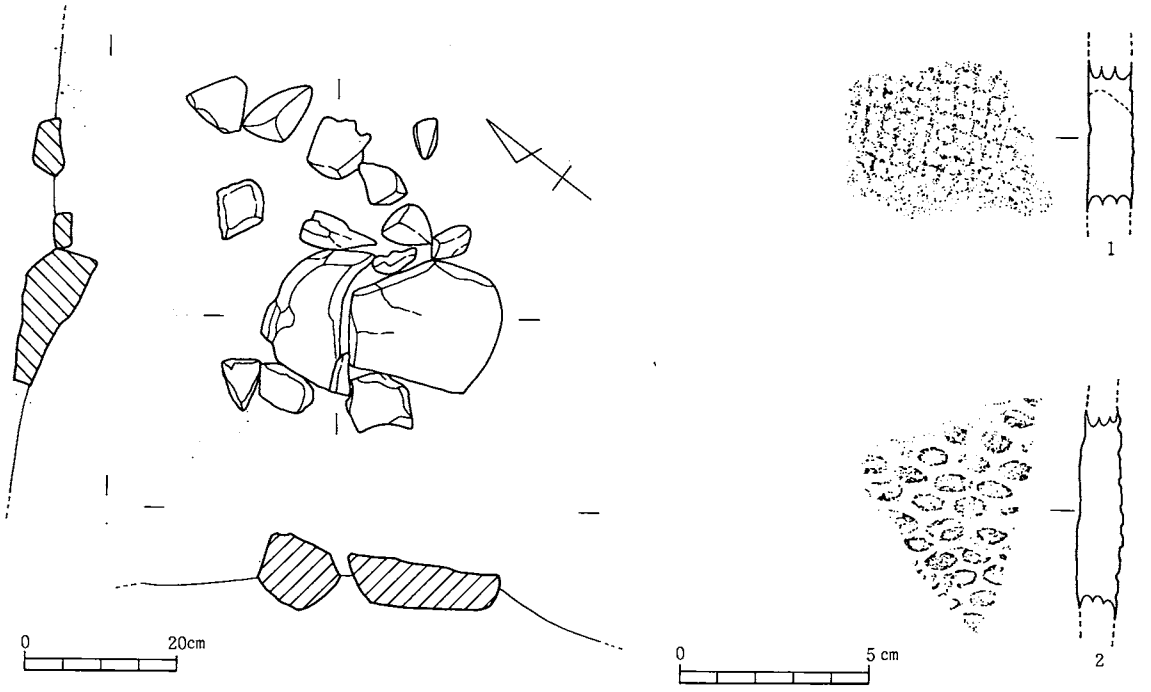
56年3月18日　12号墳周溝においても馬の埋納土壙を検出。

56年3月31日　現地での調査作業をすべて終了。調査器材、出土遺物などを点検、整理し、撤収を行う。

（松本）

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１．集石遺構



第64図　集石遺構・縄文土器実測図

(1)集石遺構（第64図）

Ｃ－４区の北端に押型文土器を伴う集石遺構が検出された。大小14個の礫が40cm程の範囲に集合し、これらの礫群の間に押型文土器が２点出土した。礫は安山岩の角礫が多く、大半は火気を受けて変色していた。礫群はほぼ一重で、Ⅲ層の黄褐色土中にあったが、その下部には土壙などは検出されなかった。　（松本）

(2)出土遺物（第64図１・２）

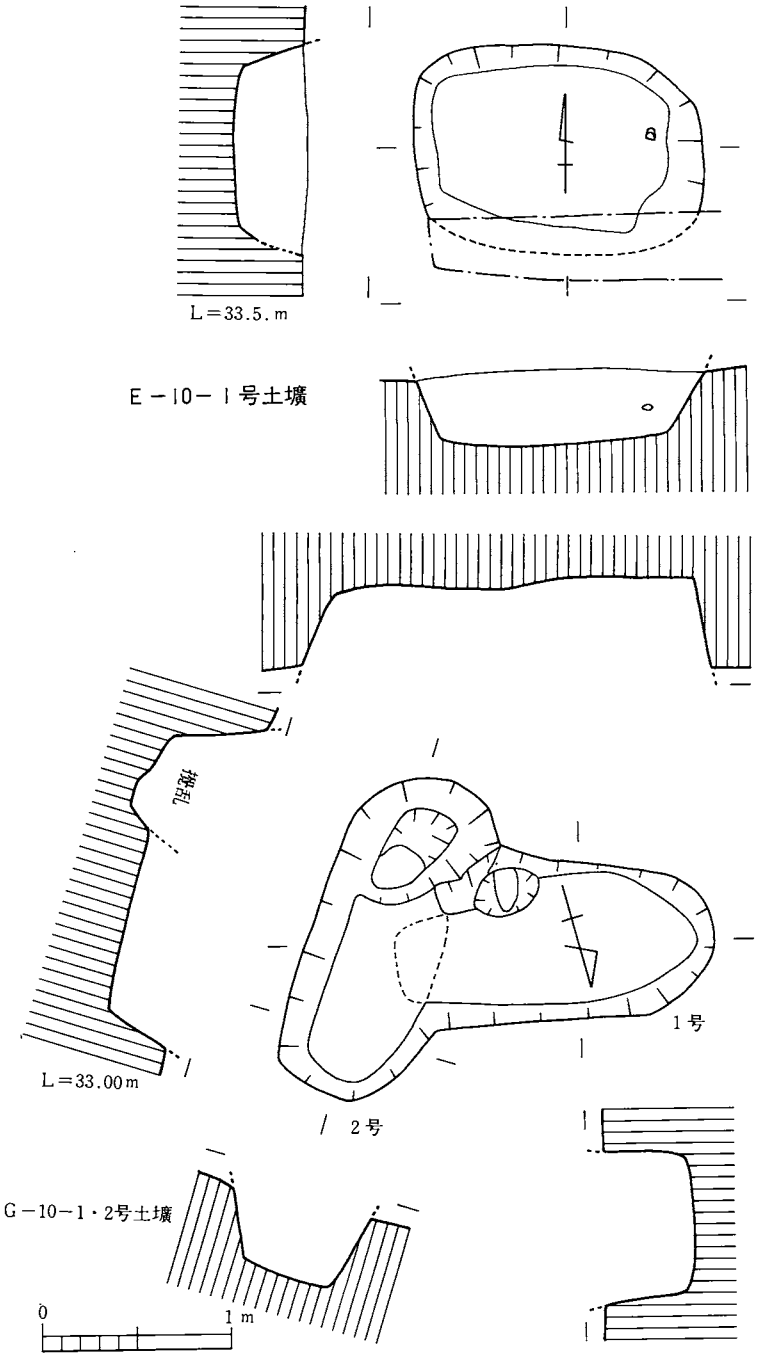
１は外面に格子目文を、２は楕円文を施している。内面は２点とも無文で、ナデによる調整である。１の胎土には２㎜前後の石英、長石、角閃石を含み、焼成はやや不良で、色調は明褐色を呈する。２には１㎜前後の角閃石を含み、灰白色を呈する。　（清田）

２．土　壙

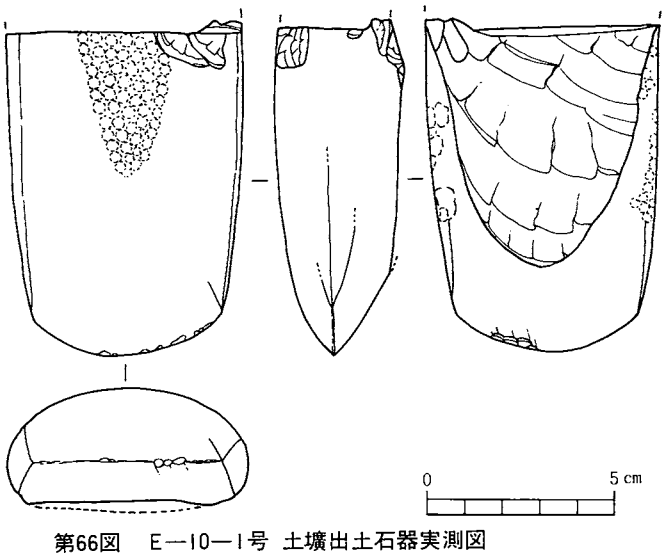
縄文期の土壙が、Ｅ－10区とＧ－10区に計３基検出された。いずれも小型の土壙で、遺物がきわめて少なく、単独で検出されたためその性格については不明な点が多い。

(1)Ｅ－10－１号土壙（第65図）

南側をゴボウの耕作によって撹乱されているが、長さ1.52m、推定幅1.1m、深さ40cm前後を測る。平面



第65図　土壌実測図



第66図　E－10－1号 土壌出土石器実測図

形はやや不整な隅丸長方形を呈し、中から半折した磨製石斧が1点出土した。その他には出土遺物はない。

磨製石斧（第66図）は細粒砂岩製で、残存部重量は265.10ｇを測る。基部には調整時の敲打痕を残し、刃部は本来円刃であったものが、使用によりわずかに偏刃気味となっている。刃縁は磨耗しており、主軸斜行の線状痕が片面にみられる。　（松本・田尻）

(2)G－10－1・2号土壌（第65図）

主軸がほぼ直交するように切り合っている。さらに南側には後世の撹乱があり、覆土の状態で前後関係を判定することはできなかった。

遺存部からみると、1号土壌は楕円形、2号土壌は隅丸長方形に近い。幅は共に80cm前後で、長さは1.6～1.7ｍ前後と推定される。

出土遺物は皆無で、所属時期の確定は困難であるが、覆土の色調からみて縄文期に属するものと考えられる。
（松本）

3．縄文土器

上の原遺跡を含む塚原台地では、従来より土師器・須恵器・弥生土器などとともに縄文土器が採集[註1]され、遺物包含層及び遺構の存在が予想された。昭和53年度の試掘、54年度の調査によって予想通り遺物包含層の確認、遺構の検出が行なわれ、多量の遺物が出土した。55年度の調査においても、早期から晩期におよぶ約1,200片の土器が検出された。特に早期、晩期の土器が集中的にみられ、出土土器片全体の約95％にもおよんだ。本稿では、これらのすべてを紹介することは紙面の都合上できないが、図化の可能なものに関しては、できるかぎり掲載

した。これらは、現在西北九州において確認される縄文土器型式の中で20型式を含んでいる。出土した土器は、深鉢が中心であるが、浅鉢・鉢・高杯等もみられる。ここでは、これらを形態の相違によって細分する。

(1)深　鉢

深鉢A類（第67図1～5、17）　口縁帯がなく外傾直行する頸部を有し、押型文を施文する形態である。

A－1類（1～5）　A－1類は、外面に押型文、内面に原体条痕＋押型文を施文するものであり、山形文（1～3）、楕円文（4、5）の2種がみられる。器壁は一定しており、約1.0cm前後を測り、胎土中に0.1cm前後の角閃石、石英粒等を含む。焼成は比較的良好である。施文は横走するもの（1、4）と縦走するもの（2、3、5）がみられる。

A－2類（17）　A－2類は、内外面に押型文をほどこし、原体条痕を有しないものである。器壁は1.0cmを測り、胎土内に0.05～0.1cmの石英・角閃石粒等を含む。焼成は比較的良好である。施文は横走する。

深鉢B類（第67図6～16、18～37）　B類は、口縁帯がなく外反する頸部を有し、押型文を施文する形態である。

B－1類（6～11）　B－1類は、外反する口縁部の外面に押型文、内面に原体条痕＋押型文を施文するものであり、山形文（6～9）、楕円文（10、11）の2種がある。器壁はA類と同様1.0cm前後を測り、胎土内に0.1cm前後の石英・角閃石粒等を含むが、0.2cm前後の石英粒を多く含むものもある(11)。焼成は比較的良好である。施文はすべて横走する。

B－2類（12～16）　B－2類は、外面に押型文、内面に原体条痕のみをほどこすものであり、山形文（12～14）、楕円文（15～16）がある。器壁はA類同様1.0cm前後を測り、胎土内に0.05～0.1cmの石英・角閃石粒等を含む。焼成は比較的良好である。施文はすべて横走する。

B－3類（18～21）　B－3類は、内外面に押型文をほどこすものであり、山形文（18、19）、楕円文（20、21）の2種がある。又外面に楕円文、内面に山形文をほどこすもの（22）もみられ、口唇部まで施文するもの（20、21）などもある。器壁は0.6cm程度の薄手から1.3cmの厚手のものまでみられる。胎土には、0.1cm前後の石英・角閃石粒等を含む。焼成は一部をのぞいてほぼ良好である。施文は、横走するもの（18、19、22）と縦走するもの（20、21）がある。

B－4類（23～34）　B－4類は、外面のみに押型文をほどこすものであり、楕円文（23～29、35～37）、格子目文（30～33）、山形文（34）がある。また端部下に無文帯をもうけるもの（34～37）があり、他とは区別される。器壁は0.7cmの薄手のものから1.5cmを測る厚手のものまでみられる。胎土は器厚にはさほど関係なく、0.1cm前後の石英・角閃石粒等を含む。焼成は一部をのぞいてほぼ良好である。施文はすべて横走する。

深鉢C類（第67・68図38～41）　口縁帯がなく直立する頸部を有し、押型文を施文する形態である。

C－1類（38）　C－1類は、内外面に押型文をほどこすものである。38は外面に楕円文、内面に格子目文をほどこす。焼成は良好である。

C－2類（39～41）　C－2類は、外面のみに押型文をほどこすものである。39・41は山形文、40は格子目文であるが、山形文はほとんどそのおもかげをとどめない。胎土内には0.1～0.15cmの石英・角閃石粒等を含む。

頸部～腹部（第68図42～76、第69図77～114）　山形文（42～66）、楕円文（67～111）、格子目文（112～114）がみられる。いずれもA～C類に包括される。ほとんどが細片のため器形の復原は不可能であるが、44

・45・67・68・69・104等は、端部直下の破片であり、端部までの形態を推測することは可能である。いずれもＢ類に包括され、67は内面に原体条痕を残しておりＢ－１類に、 104 は、内面に文様を有しないＢ－３類になるものと思われる。このほか43・83・90・94・106・108 等もＢ類に含まれる可能性が強い。施文方法は、押型を横走・縦走・斜走させるものの３種がみられ、重複して施文するもの（45・52・54・66）もみられる。

深鉢Ｄ類（第70図126、130） 口縁帯がなく、外反する頸部の内外面に原体条痕或いは斜走する縄文を施文する形態である。胎土内には、0.1cm前後の石英粒を多く含む。焼成は126は不良、130は比較的良好である。

深鉢Ｅ類（第70図127、129～139） 頸部から腹部にかけて、直立もしくは僅かに外反し、外面に二枚貝条痕（127、131～137、139）、櫛目条痕(129)、撚糸文（138）を施文する形態である。条痕文は横走したものが多いが、縦走したものと横走したものを組み合せたもの（127、136、139）もある。胎土は押型文土器と類似しており、0.1～0.2cmの石英粒等を含む。焼成は131、136、137をのぞいてほぼ良好である。

深鉢Ｆ類（第70図128） 口縁帯がなく外傾直行し、内外面に二枚貝条痕をほどこす形態である。外面には重孤文を描出しており、あきらかに調整目的のみではなく、文様としての要素が強い。器壁は、1.0cm を測る。胎土は良く精製されており、0.05cm前後の砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。

深鉢Ｇ類（第70図149） 反りぎみに外傾する口縁部を有し、頸部で屈曲して胴部にいたる形態であり、口縁部から頸部にかけて刺突連点文をほどこす。胎土には、0.1cm前後の石英粒を含む。焼成は良好である。

深鉢Ｈ類（第70図147、148） 僅かにふくらむ胴部外面に斜行する粗雑な縄文をほどこす形態である。147は器壁が0.8cm、148は1.0cmを測る。胎土には、0.05～0.1cmの石英、角閃石粒等を含む。焼成は良好である。

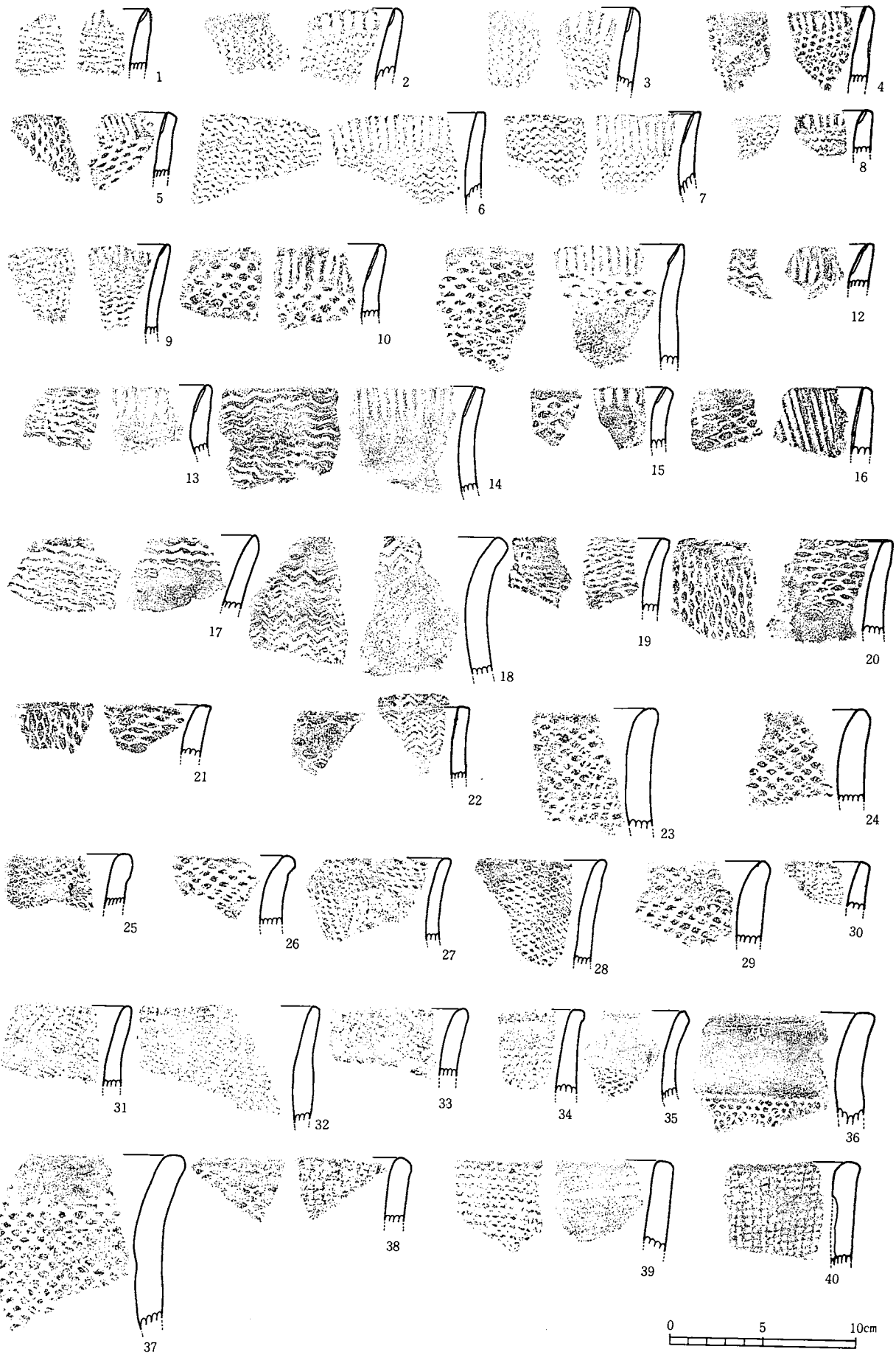
深鉢Ｉ類（第70図150～162） 僅かに外反する頸部を有し、胴部に弱いふくらみをもつ形態である。外面には0.8cm前後幅の凹線によって幾可学文様を描く。口唇部が波状になるもの（155、156)もみられる。器壁が薄手のもので0.5cm、厚手のもので1.0cmを測り、若干端部付近が肥厚するもの（150、155、156）もみられる。胎土内には0.1cm前後の石英粒を含む。焼成は良好である。

深鉢Ｊ類（第71図163、167、169、170、197） 肩部に最大径を有し、短く外反する頸部の上に口縁帯をもうけ、口縁帯にヘラ削り文・沈線文を施こす形態である。

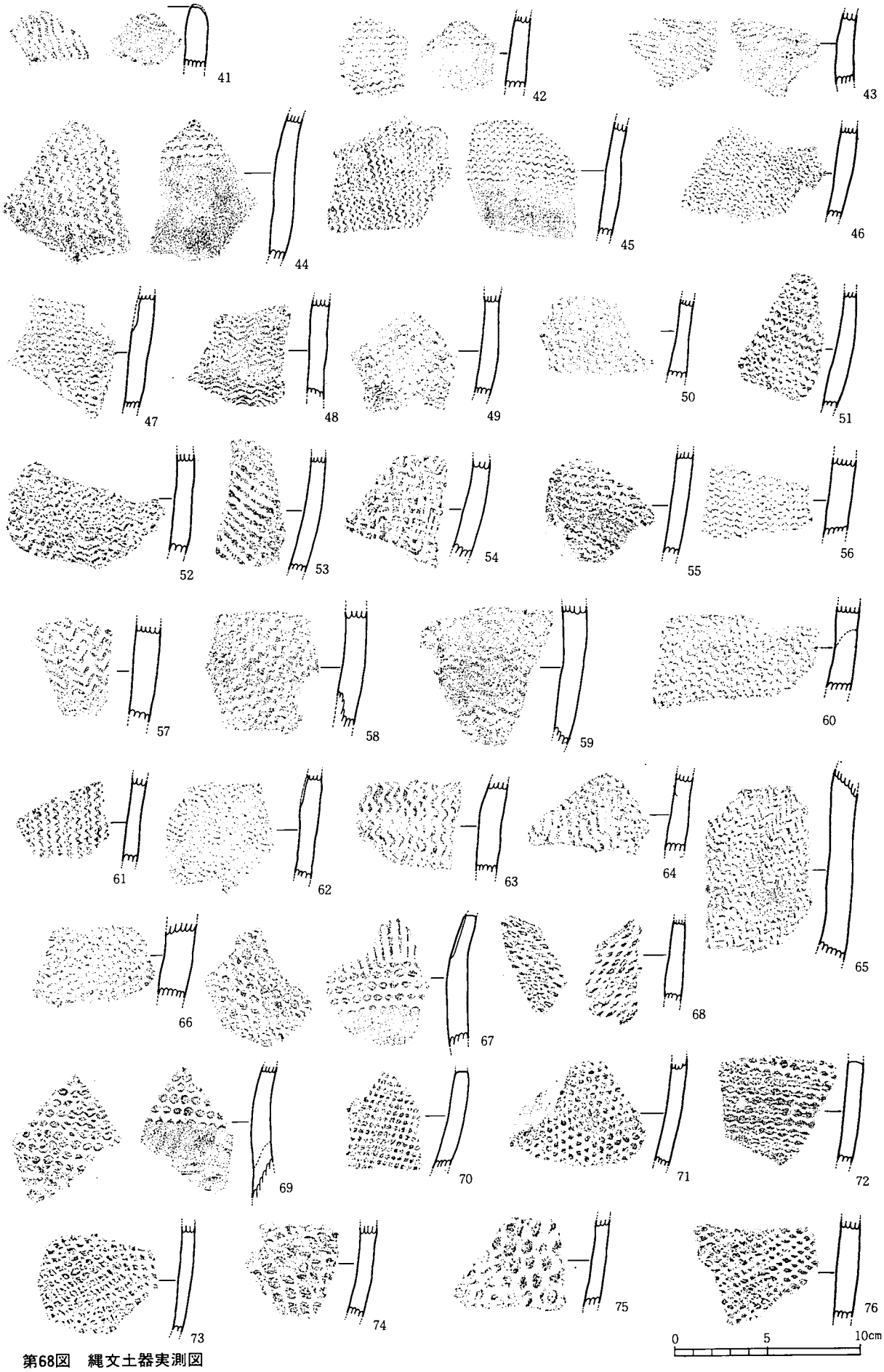
Ｊ－１類（163、167） Ｊ－１類は、僅かに内傾する口縁部が肥厚し、三日月文（163）或いは口唇部が波状をなし、斜走する凹線文（167）を施文する形態である。調整は、内外面ナデによる。胎土内には0.05～0.1cmの石英粒等を含む。焼成は良好である。

Ｊ－２類（169、170、189、197） Ｊ－２類は、やや外傾する形態であり、 170 はやや肥厚し、口縁部は沈線文をほどこす。 169 の頸部には刺突による連点もみられる。又口唇部に豚鼻状突起を有するもの（188）もある。胎土には、0.05～0.1cmの石英粒などが含まれる。焼成は良好である。

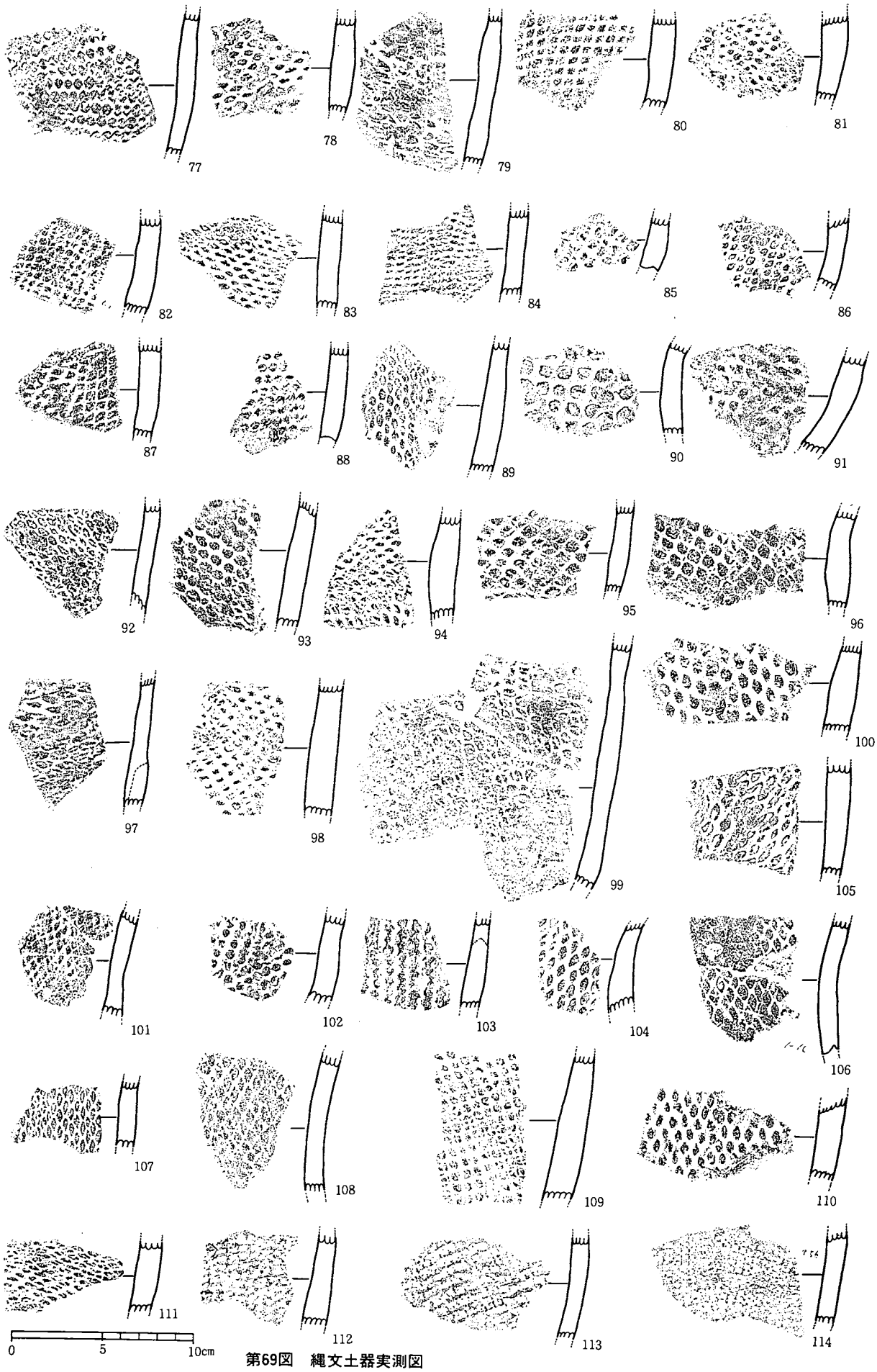
深鉢Ｋ類（第71図164～166、168、171、172） 端部から頸部にかけてほぼ直立し、口縁帯を有しない形態である。口縁部外面に沈線文をほどこすもの(164、165、171、172)、口唇部に沈線をほどこすもの(166)、



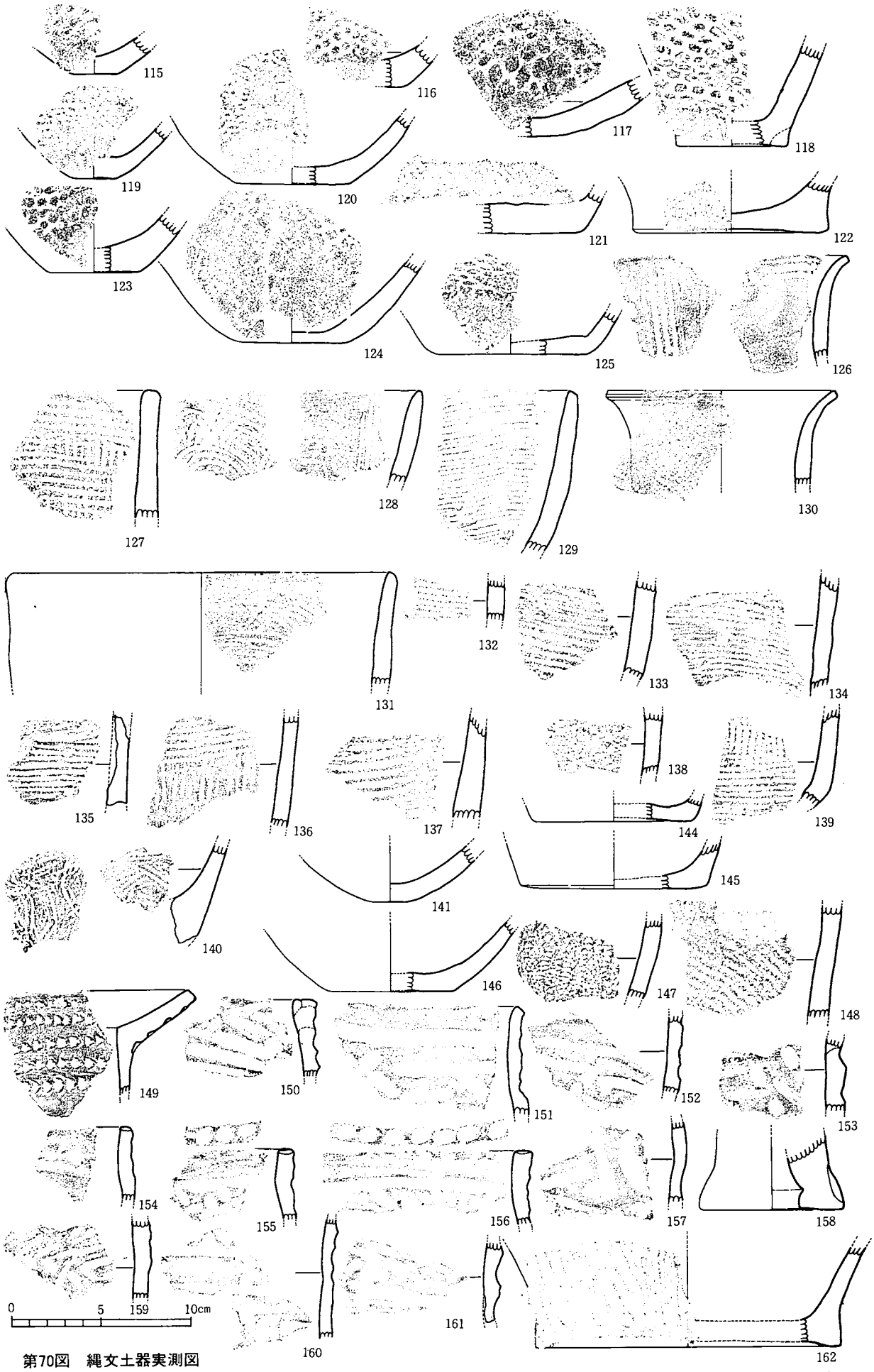
第67図　縄文土器実測図



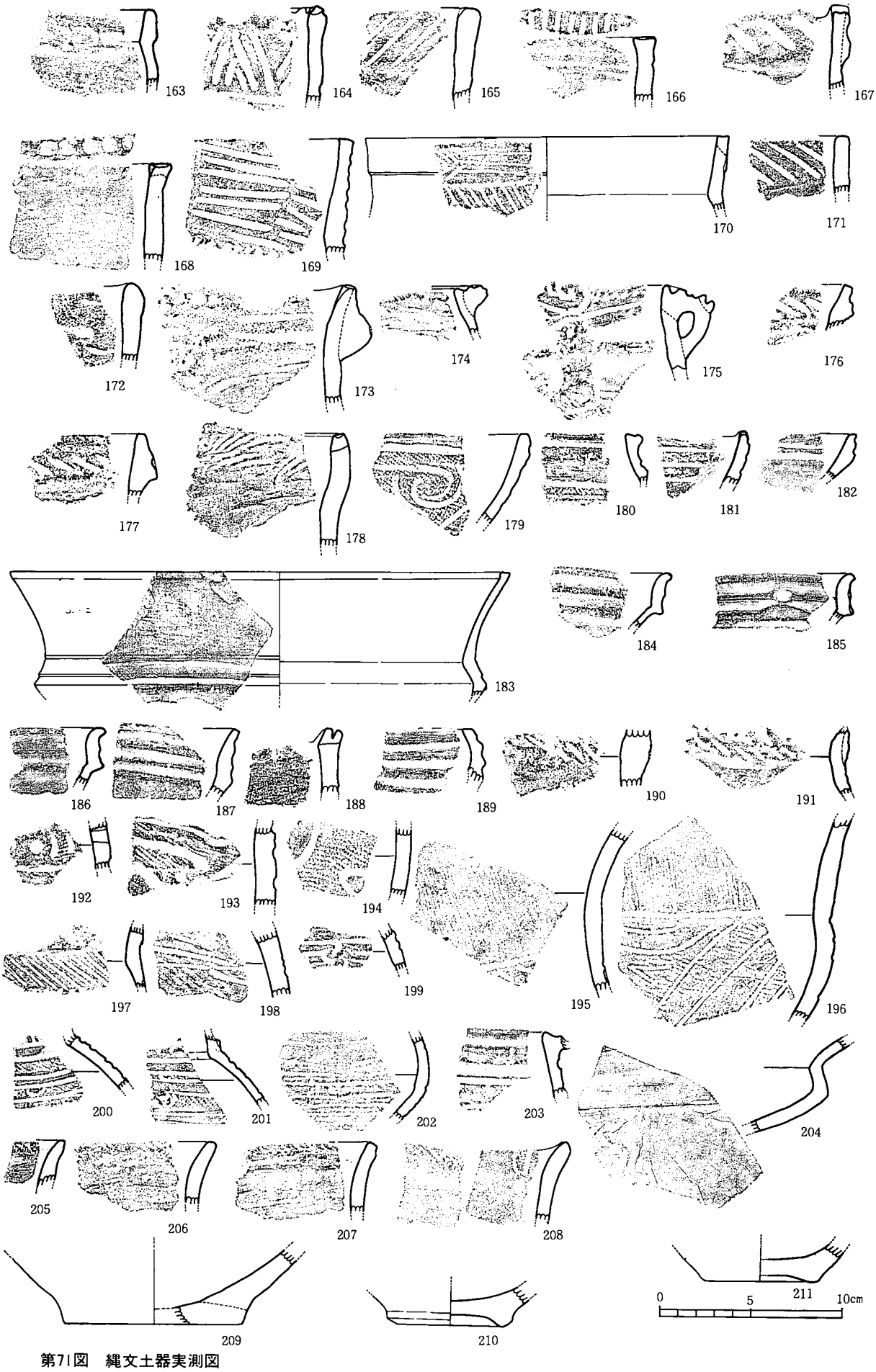
第68図　縄文土器実測図



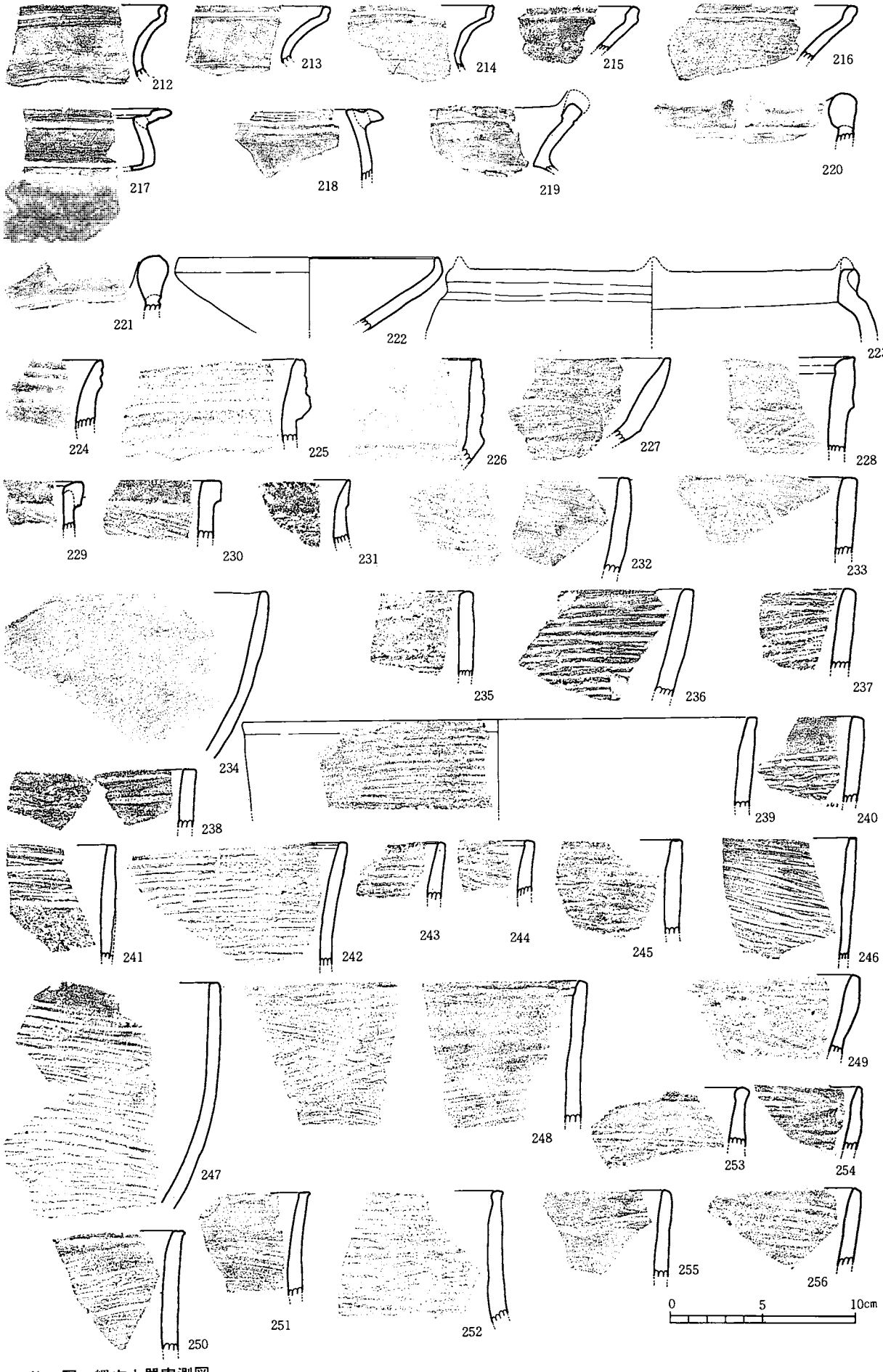
第69図　縄文土器実測図



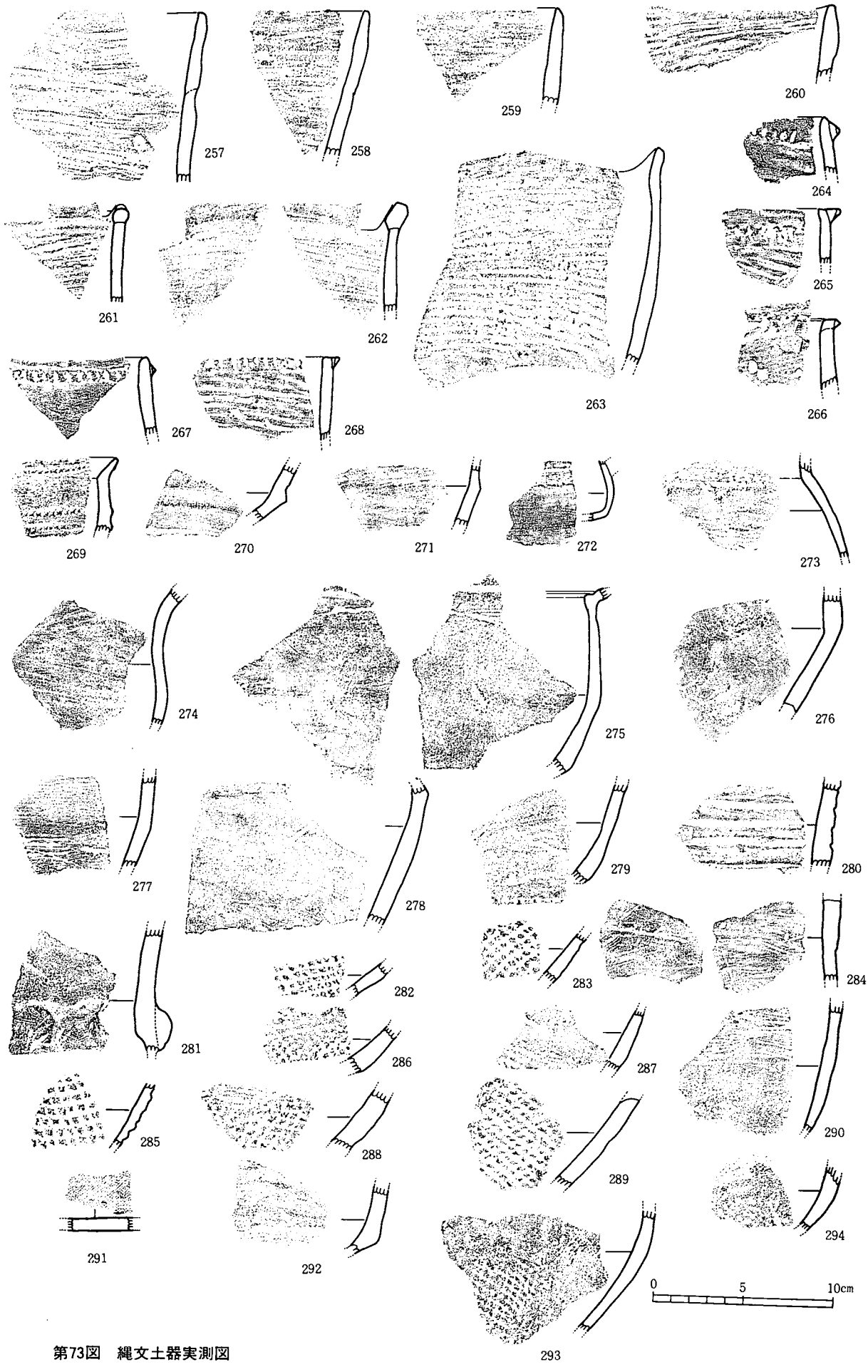
第70図　縄文土器実測図



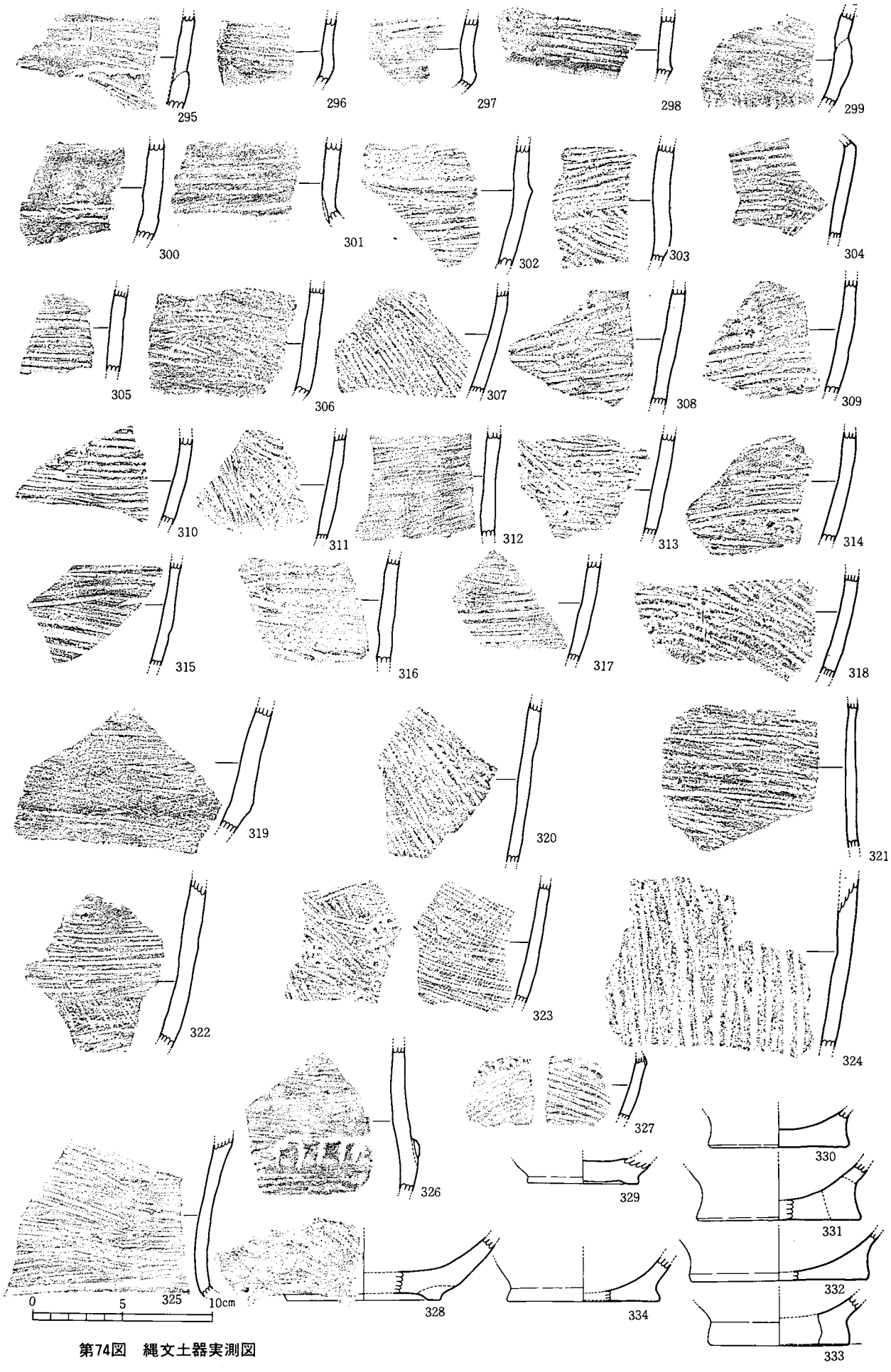
第71図　縄文土器実測図



第72図　縄文土器実測図



第73図　縄文土器実測図



第74図　縄文土器実測図

無文のもの（168）があり、口唇部が波状をなすもの（164、168）もある。胎土内には0.05～0.1cmの石英粒などが含まれる。調整は内外面ナデによる。焼成は良好である。

深鉢Ｌ類（第71図174、175、180、192～194、203）　頸部が短く外反し、肩部に胴部最大径をもち、肥厚する口縁部を接合する形態である。端部に輪状の把手を有するもの(175)もある。文様は、口縁部から腹部にかけてみられる。174 は、口唇部に工具による刺突文及び沈線文をほどこし、把手下端部に縄文をほどこす。175、180、203 は、いずれも口唇部に沈線を有し、180 は肩部下端に帯状に縄文をほどこす。192～194は、0.3～0.4cm幅の渦巻状、曲線状凹線によって縄文を区割する。さらに凹線内を磨消すもの(194)、穿孔を有するもの（192）がある。調整は内面磨きにより、胎土内には0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

深鉢Ｍ類（第71・72図173、176、177、190、191、225）　外反する頸部から長く伸びる肩部に、肥厚する口縁帯を有する形態であり、口縁部に横走或は斜走する沈線ををほどこす。波状突起を有するものもみられる。170の胎土には0.1cm前後の石英粒等を多く含む。焼成は不良である。

深鉢Ｎ類（第71図178）　波状を呈する口縁部が内弯し、外反する頸部を有する形態であり、口縁部に斜走する粗雑な縄文を配し、頂部に刺突文を施す。調整は内外面ヘラ状工具によるケズリによる。胎土内には、0.1cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

深鉢Ｏ類（第71図195、196、198～202、205～208）　外反する頸部から、くの字に屈折して胴部最大径を有する肩部に移行する形態である。

Ｏ－１類（195、196、198、199、205～208）　Ｏ－１類は、端部外面（205～208）、及び端部内面(208)に擬似縄文をほどこし､肩部の沈線間を磨消す｡ハイガイによる擬似縄文（195、196)、沈線文（198、199）をほどこすものがみられる。調整は内外面ともヘラ磨きによる。胎土は比較的精製され、0.05cm前後の石英粒等を僅かに含むもの(205～208)と、0.1cm前後の石英粒等を多く含むもの（195、196、198、199）がみられる。焼成は良好である。

Ｏ－２類（200、201）　０－２類は、くびれ部に刺突連点文を配し、肩部に沈線文及び擬入組文間を磨消す縄文をほどこす形態である。調整は、内外面とも横方向の丹念な磨きによる。胎土は良く精製されており、0.05cm前後の石英・角閃石粒を僅かに含む。焼成は良好である。

Ｏ－３類（202）　Ｏ－３類は、肩部から腹部にかけて横走する沈線及び〆字状の沈線間を磨消す、マキガイによる擬似縄文をほどこす形態である。調整は、外面磨き、内面ナデによる。胎土内には0.1cm前後の石英粒を多く含む。焼成は良好である。

深鉢Ｐ類（第71図189）　内弯する口縁帯に３条の凹線文をほどこす形態である。調整は、内外面横方向の丹念な磨きによる。胎土内には、0.1cm前後の石英粒等を多く含む。焼成は良好である。

深鉢Ｑ類（第72・73図224、226、228、231、271、274、276～278）　外反する頸部にほぼ直立する口縁帯を有し、胴部において逆「く」の字に屈折又は、屈曲する形態である。

Ｑ－１類（224、226）　Ｑ－１類は、口縁帯に横走する沈線を施す形態である。224 は２条、226 は５条の沈線を施す。胎土内には、0.05～0.1cmの石英・角閃粒等を含む。焼成は良好である。

Q－2類（228、231）　Q－2類は、口縁帯に文様を有しない形態であるが、 228 は頸部上端に沈線をほどこす。調整は、内外面ナデによる。胎土内には0.05cm前後の石英・角閃石粒等を含む。焼成は良好である。

深鉢R類（第72･73図220、221、234、261～263）　外傾直行或いは外反する頸部を有し、口唇部に突起を有する形態である。

R－1類（220、221、234）　R－1類は、精製研磨された土器である。リボン状突起を有するもの(220、221)、山形状突起を有するもの（234）がある。いずれも胎土は良く精製されており、僅かに0.03cm前後の角閃石粒等を含む。焼成は良好である。

R－2類（261～263）　R－2類は、外面或いは内外面の調整を二枚貝による条痕のまま放置する粗製土器である。リボン状突起を有するもの（261、262）と山形突起を有するもの（263）がある。 261、263 の内面調整はナデによる。胎土内には0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

深鉢S類（72～74図232、233、235～260、295～324）　外傾直行或いは僅かに外反する頸部を有し、胴部が屈折或いは直行する形態を有し、外面或いは内外面に二枚貝による条痕を放置する粗製土器である。内面の調整は、丹念な磨きによるもの（247）のほかはナデによる。胎土は、R－2類と同じである。焼成は良好である。

深鉢T類（第73・74図264～269、326、327）　外面に刻み目突帯を有する形態である。

T－1類（264、327）　T－1類は、口唇端部から肩部にかけてふくらみをもち、胴部で屈折し、突帯を施す形態であり、端部直下に突帯を有する。調整は内外面ともナデによるが、外面には二枚貝による条痕が残る。胎土内には0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

T－2類　（265、268）　T－2類は、胴部上半が直立する形態であり、口唇部は突帯を有する。外面に二枚貝による条痕が明瞭に残り、内面はナデによって調整される。胎土内には、0.05～0.1cmの石英粒等を含む。焼成は良好である。

T－3類（266、267、326）　T－3類は、頸部が外反し、胴部で丸く屈曲し突帯を施す形態であり、端部に突帯文を有するもの（266）、端部直下に突帯を有するもの（266）がある。内外面ナデによって調整されるが、 266、326 には外面に不明瞭な二枚貝による条痕の痕跡がみられる。胎土はT－1類に類似する。

T－4類（269）　T－4類は、強く外反する頸部を有し、肩部が僅かにふくらみ急角度に傾斜する形態であり、口唇端部直下に1条、肩部に2条の細い突帯を施す。調整は内外面ともナデによる。胎土内には0.05～0.1cmの石英粒を含む。焼成はやや不良である。

(2)　鉢

鉢A類（第72図227）　内弯ぎみに外傾する口縁部を有し、口縁部外面を二枚貝による条痕のまま放置する形態である。調整は外面貝殻条痕による荒調整のあと荒い磨きによる。胎土には、0.05cm前後の石英・角閃石粒等を含む。焼成は良好である。

鉢B類（第72図228、229）　ほぼ直立する頸部に肥厚する口縁帯をもうけ、外面胴部全体に二枚貝による条痕を施す形態である。口縁部及び内面はナデによって調整する。胎土内には、0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

鉢C類（第73図275、279～294）　内傾して伸びる肩部を有し、腹部及び底部への移行部において逆「く」の字に屈曲し、底部に組織痕をほどこす形態である。組織痕文には、(1)網目（282～289、293、294）、(2)むしろ目（292）、(3)布目（291）の3種がみられる。調整は内外面丹念な磨きによるものとナデによるものがみられる。胎土内には0.05cm前後の石英・角閃石粒等を含む。焼成は良好である。

(3) 浅　鉢

浅鉢A類（第71図179、181）　口縁帯をもうけず、端部から内弯ぎみに底部に向う形態である。

A－1類（179）　A－1類は、外面全体に配した縄文の上に沈線によって描かれた入組文を施す形態である。内面の調整は丹念な磨きによる。胎土内には　0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

A－2類（181）　A－2類は、端部が波状を呈し、外面に横走する沈線を施す形態であり、沈線間に細線羽状文を描出する。内面の調整は丹念な磨きによる。胎土内には、0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

浅鉢A類（第71図183、204）　口縁帯を有せず、長く外反し「く」の字に屈曲して肩部にいたる形態である。肩部は短く内傾し、腹部で再び逆「く」の字に屈曲する。肩部に2条の凹線をもつもの（183）ともたないもの（204）がある。調整は内外面とも丹念な磨きによる。胎土はよく精製されており、僅かに0.3cm前後の石英粒等を含む。

浅鉢B類（第71図182、184～187）　外反或いは内弯する頸部の上に口縁帯を有する形態である。

B－1類（182）　B－1類は、内弯する頸部に直立する口縁帯を有し、2条の沈線を施す形態である。調整は、内外面とも丹念な磨きによる。胎土は良く精製されており、0.05cm前後の石英・角閃石粒を僅かに含む。焼成は良好である。

B－2類（184～187）　B－2類は、外反直立する口縁部に2条ないし3条の凹線を施す形態である。凹線間に楕円形の凹点文を施すもの（185）もみられる。内外面横方向の丹念な磨きによって調整する。胎土は良く精製されており、0.05cm前後の石英・角閃石粒を僅かに含む。焼成は良好である。

浅鉢C類（第72図212～216、219）　長く伸び、外反或いは外傾する頸部の上に口縁帯をもうける形態である。

C－1類（212～214）　C－1類は、外反する頸部に1条（213）或いは2条（212、214）の沈線を施す短い口縁帯を有する形態である。内外面横方向の丹念な磨きによって調整される。胎土は良く精製されており、0.05cm前後の石英粒などを僅かに含む。焼成は良好である。

C－2類（215、216）　C－2類は、外傾直行する頸部に1条の沈線を施し、僅かに外傾する短い口縁帯をもうける形態である。調整は内外面とも丹念な磨きによる。胎土は良く精製されており、僅かに0.03cm前後の石英粒を含む。焼成は良好である。

C－3類（219）　C－3類は、不明瞭な口縁帯に1条の沈線を施し、さらに口唇部にリボン状の突起を接合すると思われる形態である。調整は、内外面横方向の丹念な磨きによる。胎土は良く精製されており、0.03cm前後の砂粒が僅かに含まれる。焼成は良好である。

浅鉢D類（第72・73図217、218、272）　肩部と口縁部が逆「L」字に接合し、底部への移行部で逆「く」の字に屈曲する形態である。口縁部外面には1条の沈線、内面には段を有する。調整は内外面とも丹念な磨

きによる。胎土は、精製されており、僅かに0.03cm前後の石英粒を含む。焼成は良好である。

浅鉢E類（第72図223）　肩部に最大径を有し、屈折して頸部にいたり、短かく外反して、直立する口縁部に向う形態である。口縁部には山形突起を有する。外面全体には丹塗りの痕跡がみられる。調整は内外面ともナデによる。整形は比較的粗雑であり、胎土にも0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

(4) 高　杯

高杯A類（第72図222）　脚台部近くから外傾直行し、端部直下で内弯する形態である。内外面横方向に丹念な磨きが施される。胎土は良く精製されており、僅かに0.03cm前後の角閃石粒などを含む。焼成は良好である。

(5) 底　部

底部A類（第70図140）　尖底を呈し、外傾直行して胴部にいたる形態である。内外面に細い貝殻条痕が施される。胎土には、0.1cm前後の石英粒等を多く含む。焼成は良好である。

底部B類（第70図115、116、117、119、120、123、124、125、141、146）　平底を呈し、僅かに内弯しながら立ち上る形態である。

B－1類　（115、116、117、119、120、123、124、125）　B－1類は、外面もしくは内外面に押型文を施す形態である。内面の調整はナデによる。胎土は深鉢A・B類に類似する。焼成は良好である。

B－2類（141、146）　B－2類は、内外面ナデによる調整が施された形態である。

底部C類（第70・71・74図118、122、162、209、329～332）　胴部への移行部で外反する形態である。

C－1a類（118、122）　C－1a類は、外面に押型文を施す形態である。内面の調整はナデによる。胎土は深鉢C類に類似する。焼成は良好である。

C－1b類（162）　C－1b類は、外面に斜走する凹線文を施す形態である。内面調整はナデによって行い、胎土内には滑石粒を含む。焼成は良好である。

C－2類（209）　C－2類は、底部が外傾し、内外面ナデによって調整する形態である。胎土内には、0.1cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

C－3類（330～334）　C－3類は、内傾する底部を呈する形態であり、内外面ナデによって調整する。胎土内には0.05cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

底部D類（第71・74図210、211、327、328）　上底を呈する形態である。

D－1類（210、211）　D－1類は、内外面磨きによって調整する形態である。胎土内には0.1cm前後の石英粒等を多く含む。焼成は良好である。

D－2類（328、329）　D－2類は、外面に二枚貝による条痕を施す形態である。内面調整はナデによる。胎土内には0.05～0.1cmの石英粒等を含む。焼成は良好である。

(6) 脚　台

脚台A類（第70図158）　下半部にふくらみをもち、上半部がほぼ直立する形態であり、下半部に瓜形

様の連点文をほどこす。胎土内には0.1cm前後の石英粒等を含む。焼成は良好である。

上の原遺跡（55年調査区）より出土した縄文土器は、深鉢・浅鉢・鉢・高杯に分類される。これらは、形式の細分によって、数様式を含んでいることが明らかとなった。したがってここでは、現在肥後において型式認定されている土器様式を基準として、Ⅰ式からⅩⅩ式を設定する。なおⅠ・Ⅱ・ⅨⅩ・ⅩⅩ式は、肥後においていまだ型式認定されておらず、本遺跡の資料のみで様式を設定するのは無謀に等しいが、上の原遺跡の縄文土器の変遷を考える上で、また今後、縄文土器編年を確立する上で一つの布石となることを願って、あえて四型式をもうけた。さらに数様式において細分の可能性が示唆されるが、本遺跡では、それを行なうにたり得る資料の出土をみていないので、あえてそれは行わなかった。各様式については様式構造表（第２表）に示す通りである。

（清田）

第２表　縄文土器様式構造表

時期	様式		上の原遺跡出土器形式 深鉢	浅鉢	鉢	高杯	脚台	底部	出土点数
早期	Ⅰ	1群	A－1 2 B－1 2・3	——	——	——	——	B－1	465 楕円(320) 山形(128) 格子(17)
	Ⅱ		C－1 2	——	——	——	——	C－1a	
	Ⅲ(手向山式)		D	——	——	——	——	B－2	1
	Ⅳ(円筒形土器)	2群	E	——	——	——	——	+	30
	Ⅴ(塞ノ神式)		G	——	——	——	——	+	1
	Ⅵ(轟A式)	3群	+	——	——	——	——	A	1
前期	Ⅶ(轟C式)		F	——	——	——	——	+	1
中期	Ⅷ(竹崎式)	4群	H	——	——	——	——	+	9
	Ⅸ(阿高式)		I	——	+	——	A	C－1b	23
後期	Ⅹ(南福寺式)	5群	J－1	——	+	——	——	+	1
	Ⅺ(出水式)		J－2 K	——	+	——	——	——	6
	Ⅻ(鐘ヶ崎式)	6群	L	A－1	——	——	——	+	4
	ⅩⅢ(北久根山式)		M－N O－1	+	——	——	——	C－2	6
	ⅩⅣ(西平式)		O－2	B－1	+	——	——	——	8
	ⅩⅤ(三万田式)		O－3	A－2 A′ B－2	+	+	+	+	9
	ⅩⅥ(御領式)	7群	P	+	+	+	+	D－1	4
晩期	ⅩⅦ(天城式)		Q－1	C－1	+	+	+	+	27
	ⅩⅧ(古閑式)		Q－2	C－2	A	——	O	C－1	50
	ⅨⅩ		R－1 S R－2	C－3 D(E)	B C	A	+	D－2	337
	ⅩⅩ	8群	T－3 T－2(T－4)	+	+	+	+	+	8

備考　＋は存在が予想されるもの
——は存在しないと考えられるもの

註

註１　小林コレクション中に上の原遺跡において採集された縄文土器がみられる。

4．石器

(1)石匙（第75図１・２）

つまみ状の小突起をもつ横型石匙である。１は幅広く、厚みも1.1cmを測る。刃部の形状はごくわずかに弓状を呈すが、直線的である。小突起は大きな剥離によって設けられている。２は全体が正三角形につまみを付けた形状を呈す。刃部は直線的であり、表面は深く調整を行い、裏面は縁辺部のみを浅く調整している。つまみ状の小突起は、大きな剥離によるものであり、１よりはえぐりのカーブは緩やかである。

(2)削器・掻器（第75図３・４・５）

削器に分類できると考えられる　３はやや縦長剥片の一側縁に両面より調整し刃部を作り出している。５は両面共にわずかに自然面を残したまま、一側縁に刃部を作り出している。刃部は直線的であり両面より粗く加工した上に細部調整している。

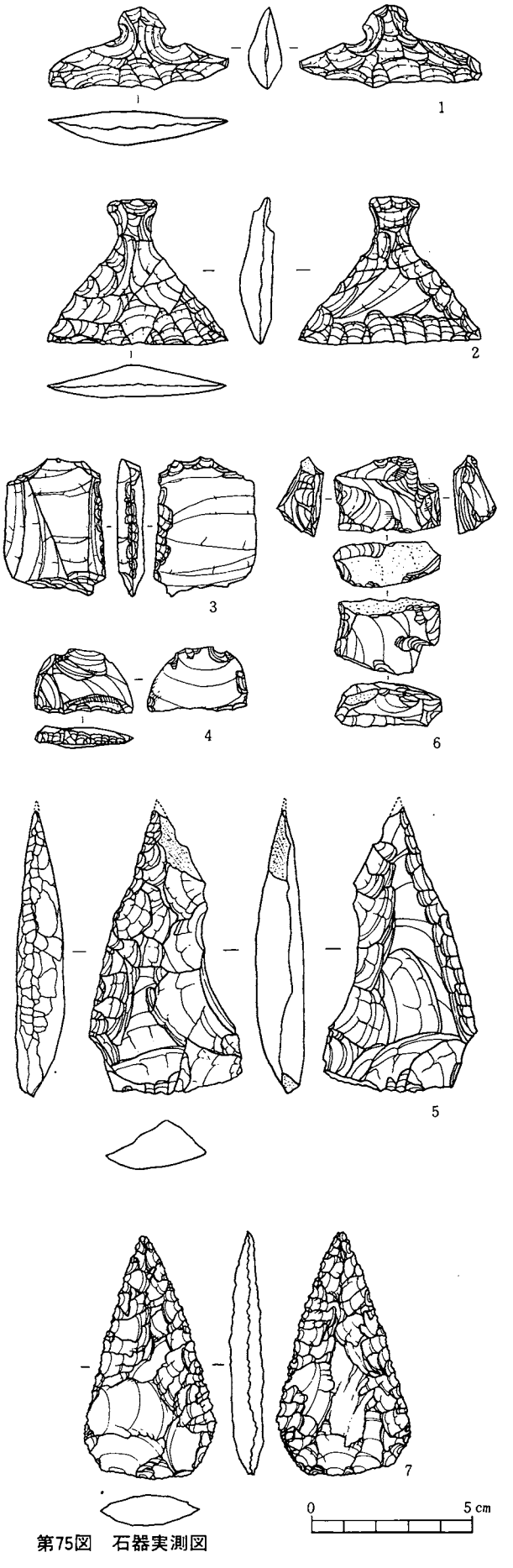
４は剥片の一方に急角度の調整を行い、刃部を作り出している。刃部の調整は表面のみを細かく行っている。

(3)楔形石器（第75図６）

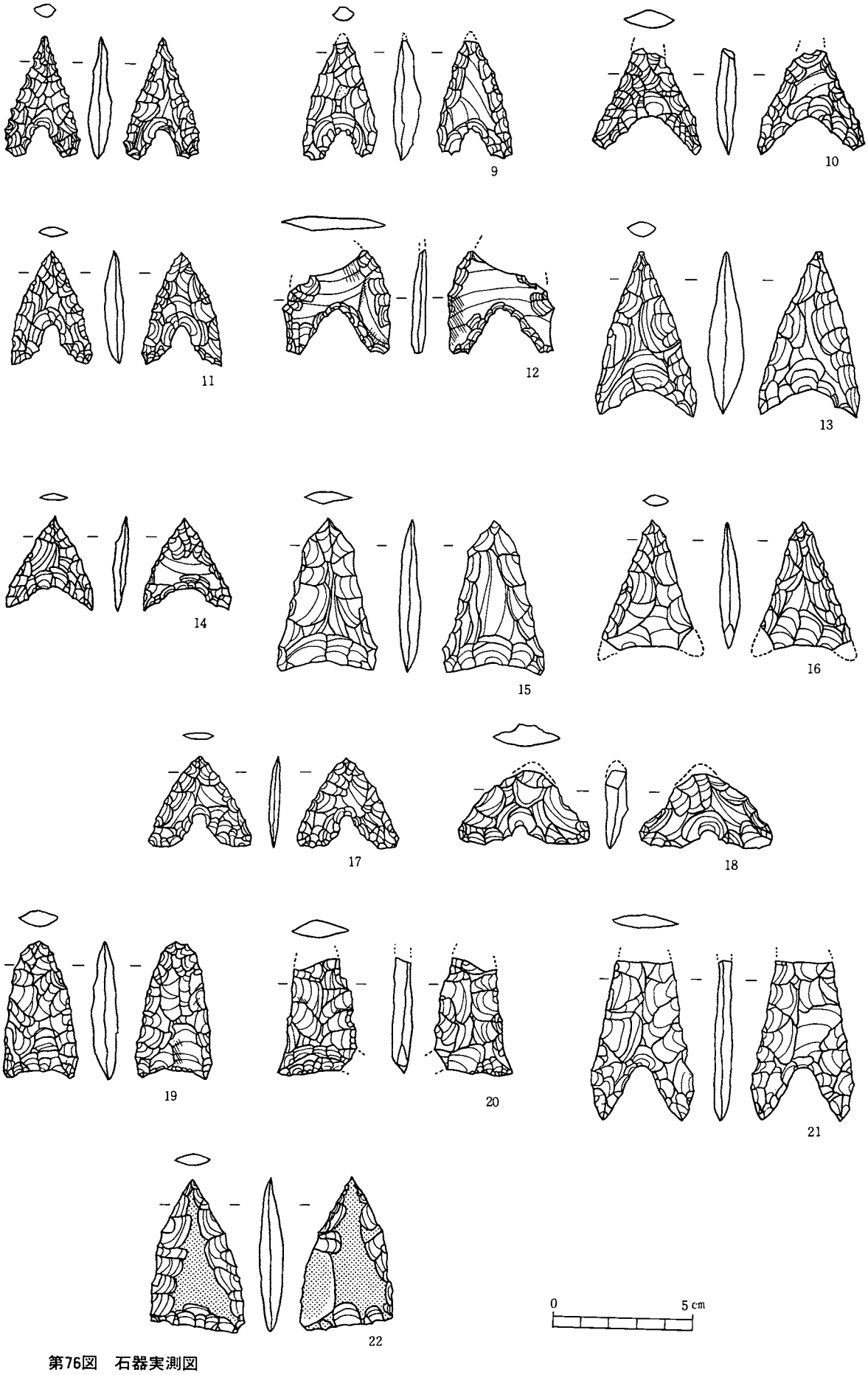
形状はほぼ台形を呈し、側面形は三角形をなす。上下両端と左側辺に微細な特有の調整が見られる。
（田尻）

(4)尖頭器（第75図７）

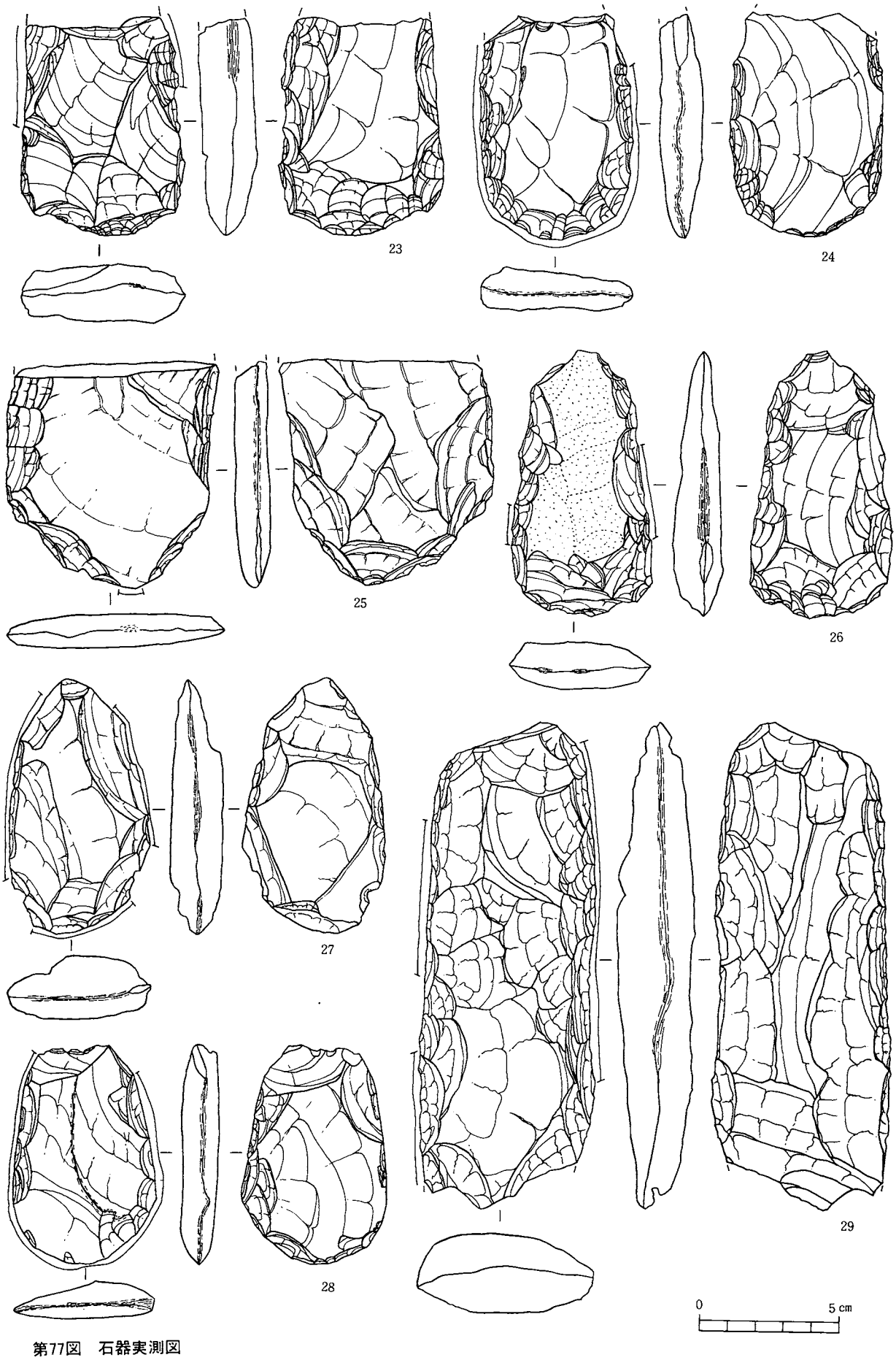
色調はダークグレイを呈している。形状は二等辺三角形を呈す。器面調整は表裏面とも全周から施されており、剥離は押圧平坦剥離法によっているようである。なお、裏面中央部に素材の際の剥片の主要剥離が観察されるが、剥離方向は不明である。全長7.6cm、最大幅4.1cm、中央部厚さ1.0cmを測る。この種の尖頭器は、その特徴からみて縄文時代早期の石器組成の一部と考えられ、当遺跡では押型文土器に伴うと考えてよい。類例として、佐賀県盗人岩洞穴、長崎県深江田中、熊本県里ノ城遺跡出土例などがあ



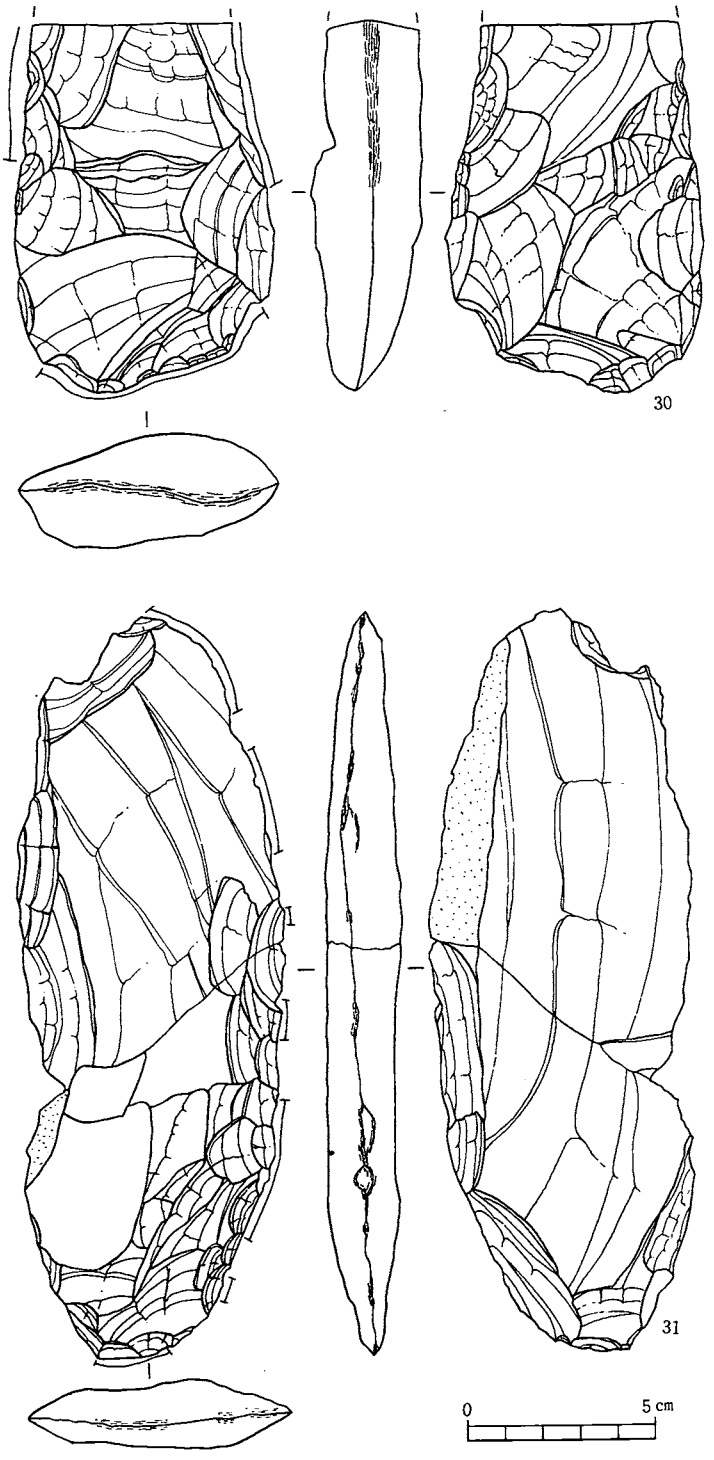
第75図　石器実測図



第76図　石器実測図



第77図　石器実測図



第78図　石器実測図

り、いずれも縄文時代早期の所産とされている。（古森）

(5)石鏃（第76図８～22）

出土した石鏃はすべて無茎鏃に分類されるもので、54年度調査区報告における分類に従った。[註1] 脚部の作り出しの形状および状況により６分類されている。

出土点数は17点であり、図化したのは15点であった。ⅠとⅥ形態はなくⅡ～Ⅴ形態に属するものと、局部磨製石鏃１点であった。

第Ⅱ形態（第76図８～16）に属する石鏃は11例と一番多く、図化しなかった２点もⅡ形態に含まれると考えられる。８の縁辺は鋸歯状を呈しており、丁寧な調整である。12は薄い剥片の縁辺部のみを調整した剥片鏃であり、先端部は欠損している。15・16の基部は大きな剥離により作り出しており、やや平坦な感じである。

第Ⅲ形態（第76図17・18）は２点のみである。17は表裏面共に細かい剥離であるが、18は全体に粗い調整である。基部のえぐりも17は細かい剥離により作り出しているが、18は１～２回の大きな剥離によるものと考えられる。18は先端部が欠損する。

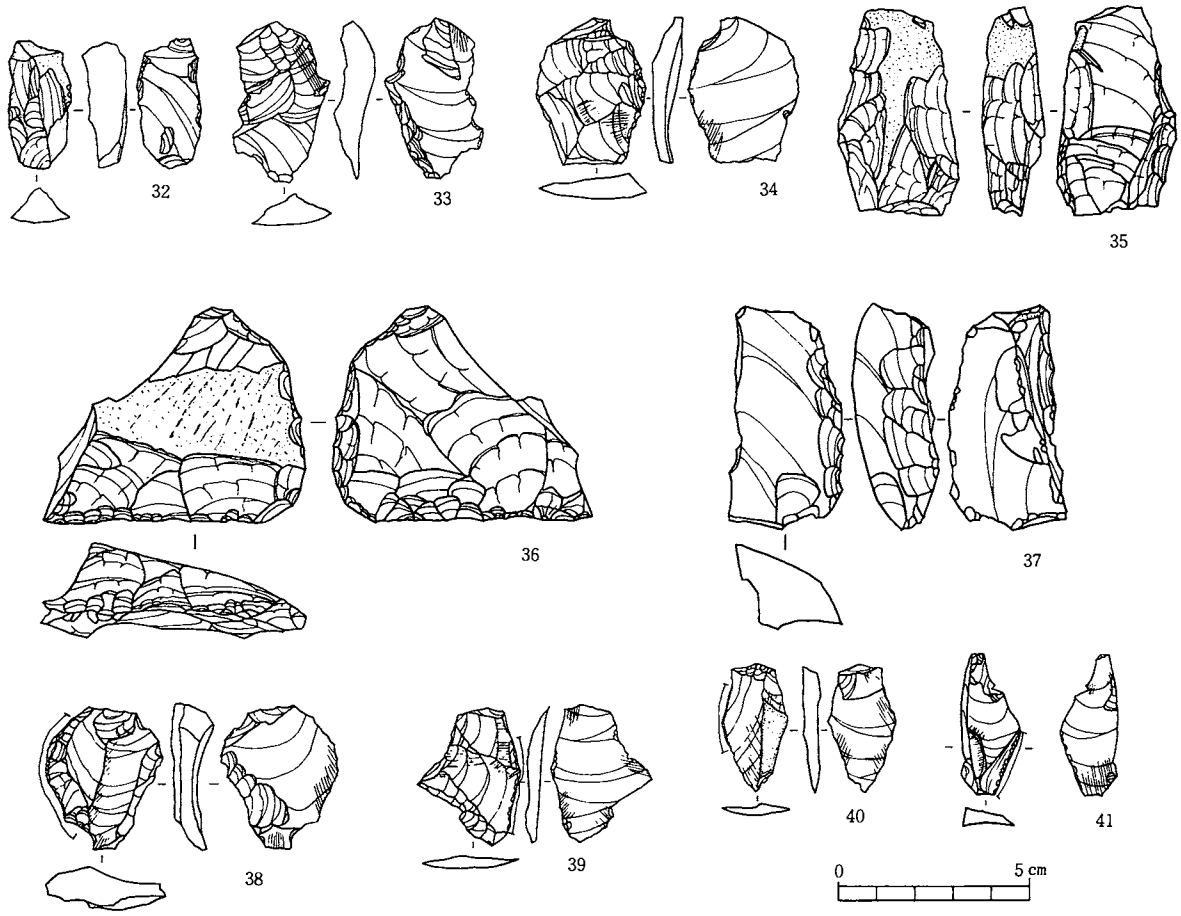
第Ⅳ形態（第76図19・20）は２点のみで、表裏面共に細かい剥離調整を行っている。基部のえぐりは少なく、平坦な感じである。19の先端部はカーブが緩やかで丸味を持つ感じである。

第Ⅴ形態（第76図21）は１点のみの出土であり、先端部の欠損のため全体の形状は不明であるが、全体が大型であり基部の作り出しと形状から考えて第Ⅴ形態に分類した。器厚は薄く、薄茶を呈す。

局部磨製石鏃（第76図21）形状は二等辺三角形を呈し、基部は直線的である。表裏面共に縁辺部を剥離調整した後で、わずかに磨いている。

(6)打製石斧（第77・78図23～31）

54年度調査区報告における分類に従った。[註2] 刃部と側縁部の状態により４分類されている。55年度調査区に



第79図　石器実測図

おいては、総出土数は９点であり、すべて第Ｉ形態のみであった。第Ｉ形態は刃部が弓状の丸みを帯び、側縁が直線的で平行になる。

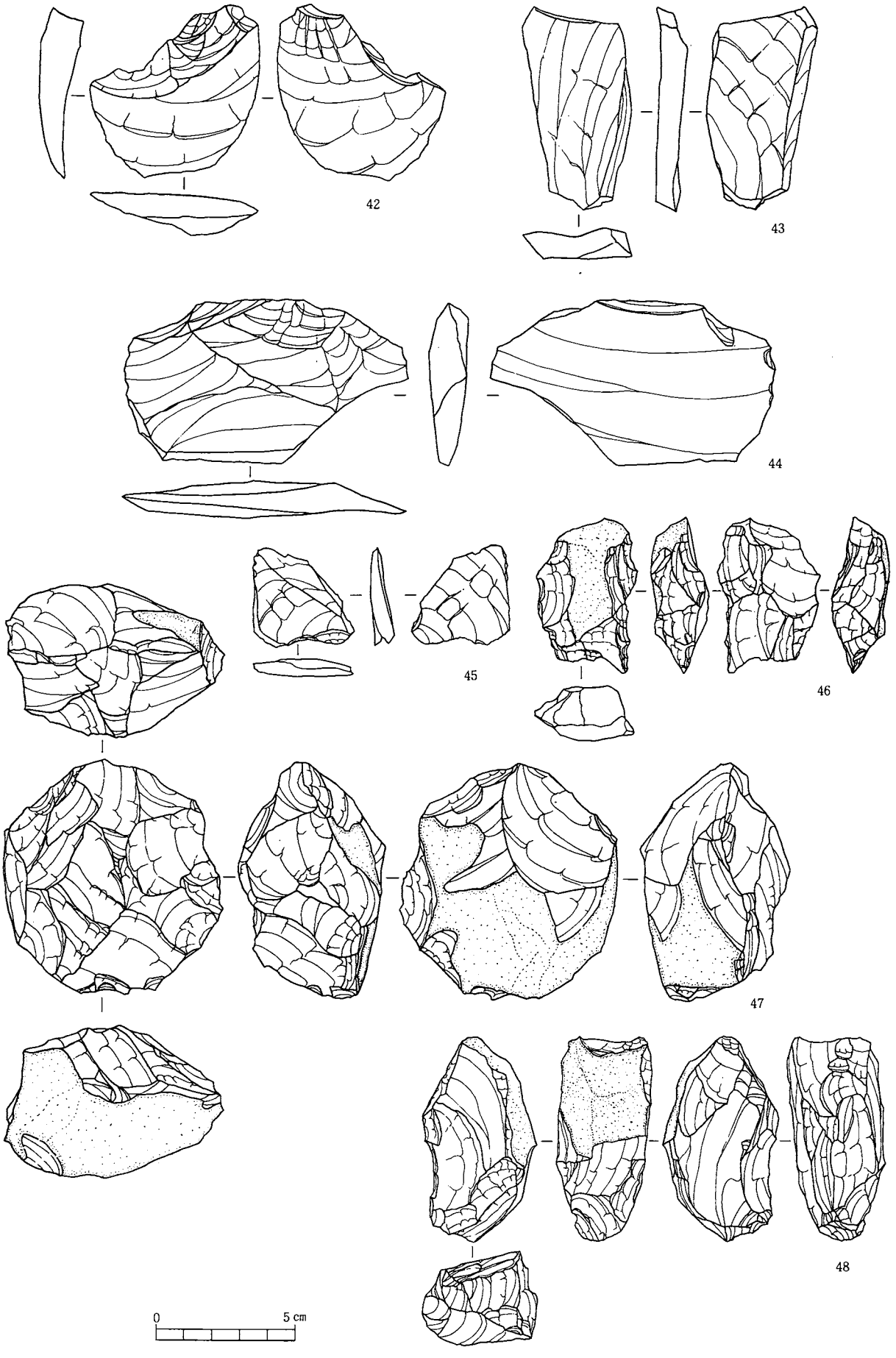
23・30は厚めの石材に粗い剥離を行い、刃部及び側縁のみをやや細かく調整している。30の刃部はかなり損耗が見られる。24は横長剥片の縁辺部のみを細かく剥離調整しており、欠損部分を除く縁辺部はすべて磨耗が見られる。25の刃部は殆ど欠損しており、一部分に欠損前の刃部の磨耗が見られる。26は先端部がやや幅広の石材を使用し、表面に自然面を残したまま縁辺部を加工調整している。裏面は粗い剥離のみであり、刃部と側縁部に磨耗が見られる。27・28は他に比べるとやや小型で縁辺部は欠損部分を除き磨耗が見られる。28は稜線にも磨耗が見られる。29と30は表裏面共に粗い剥離であり、器厚がある。31は横長剥片の縁辺部を加工調整したものと考えられる。一側辺には自然面を残したままであり、部分的に縁辺部に磨耗が見られる。

(7)二次加工のある不定形石器（第79図32～37）

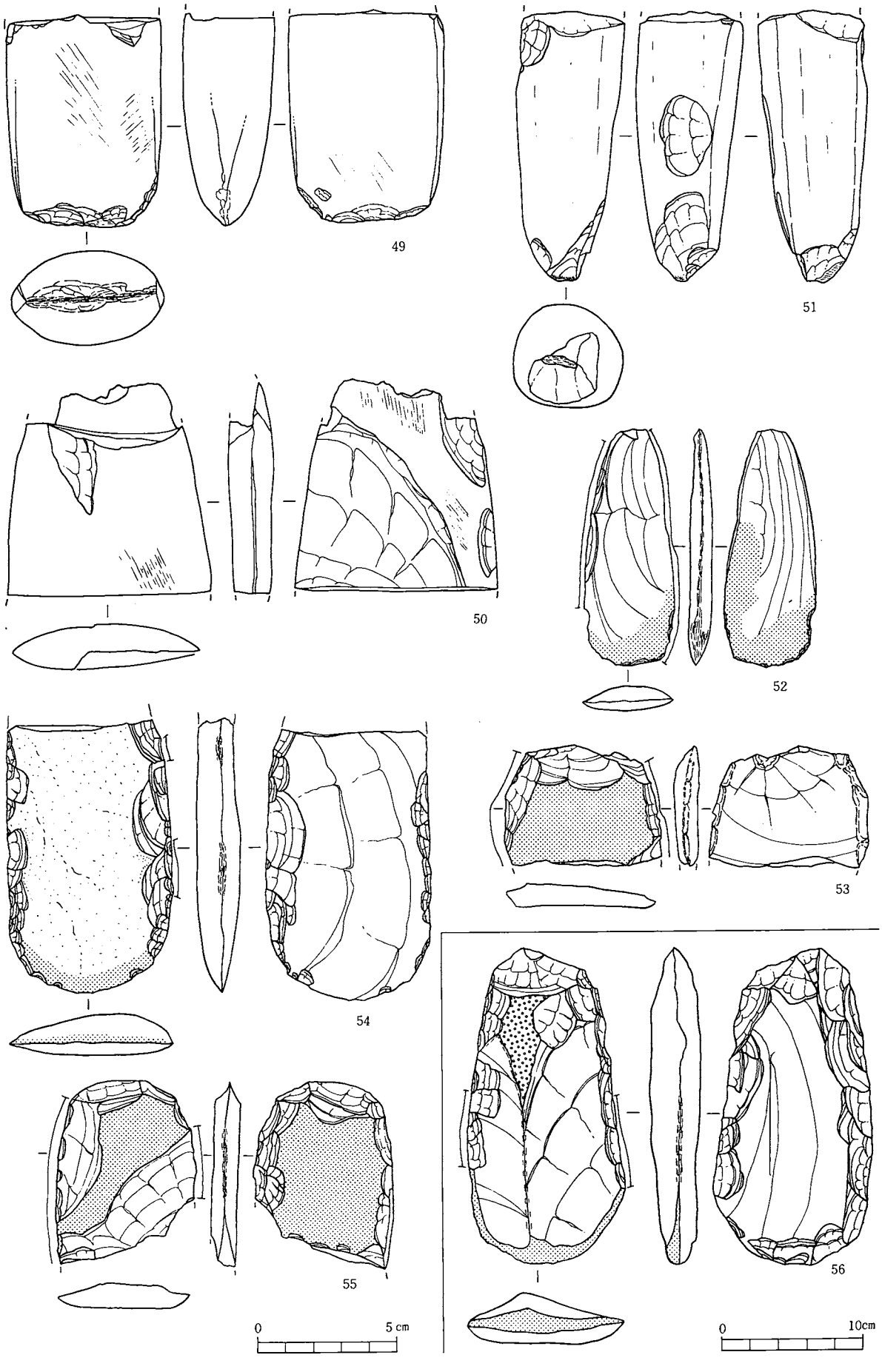
33は剥片の裏面一側縁に急角度の二次加工を行っている。36は表面に自然面を残し、一側辺の両側から細かい剥離調整し刃部を作り出している。最大器厚2.5cmと厚く、表面刃部は急角度である。37は全体が風化し、不透明で黒曜石特有の光沢をなくしている。一側辺の両側より浅い剥離を行っているのが古い時期のもので、その他は剥離痕から見て新しい時期と考えられる。

(8)使用痕のある剥片（第79図38～41）

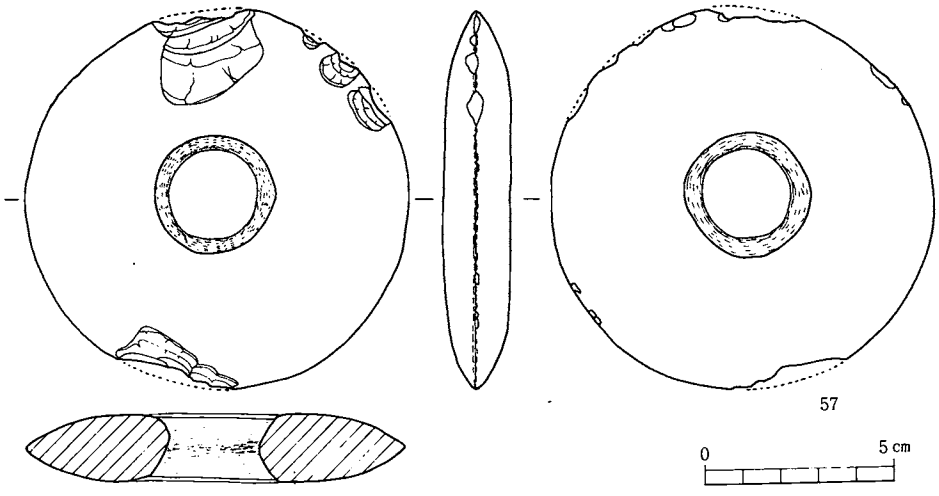
すべて黒曜石の剥片である。使用時のものと思われる微細な剥離痕が顕著に残っている剥片のみを図化した。



第80図　石器実測図



第81図　石器実測図



第82図　石器実測図

(9)剥片（第80図42～45）

調整時に生じると思われる黒曜石の剥片は多かったが、石核との接合資料はなく、石核との関係を推測させるのみであり、その分析は中途半端なものとなってしまった。

(10)石核（第80図46～48）

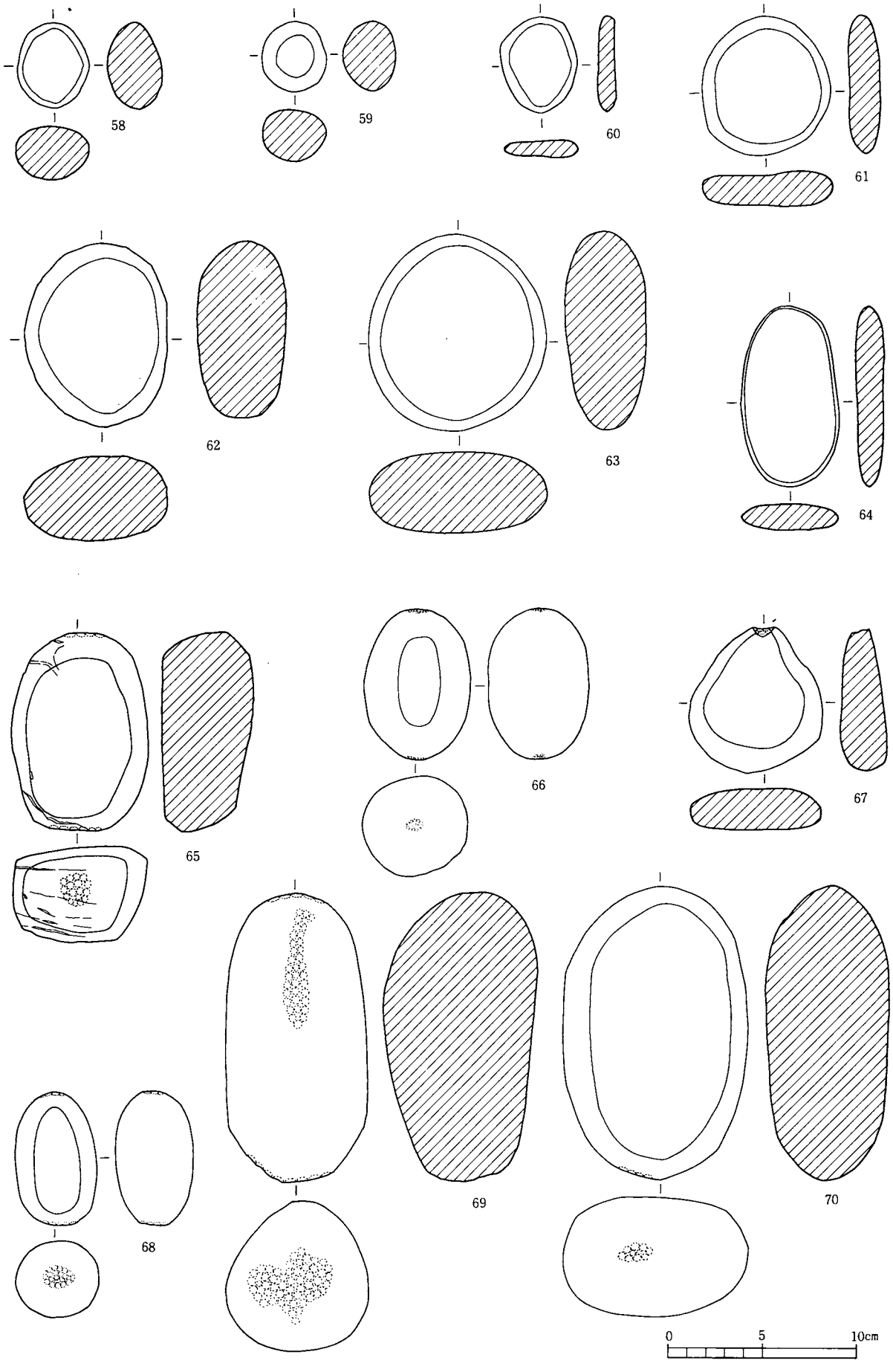
石核は3点出土しており、すべて剥離作業面が一定しておらず、多面体を呈す。46は主に両側より2面にかけて剥離作業を行っている。47は2面にかけて求心的な剥離を行っており、旧石器時代の石核である可能性も感じさせる。48は主要剥離を片側から2面にかけて行っている。

(11)磨製石斧（第81図49～51）

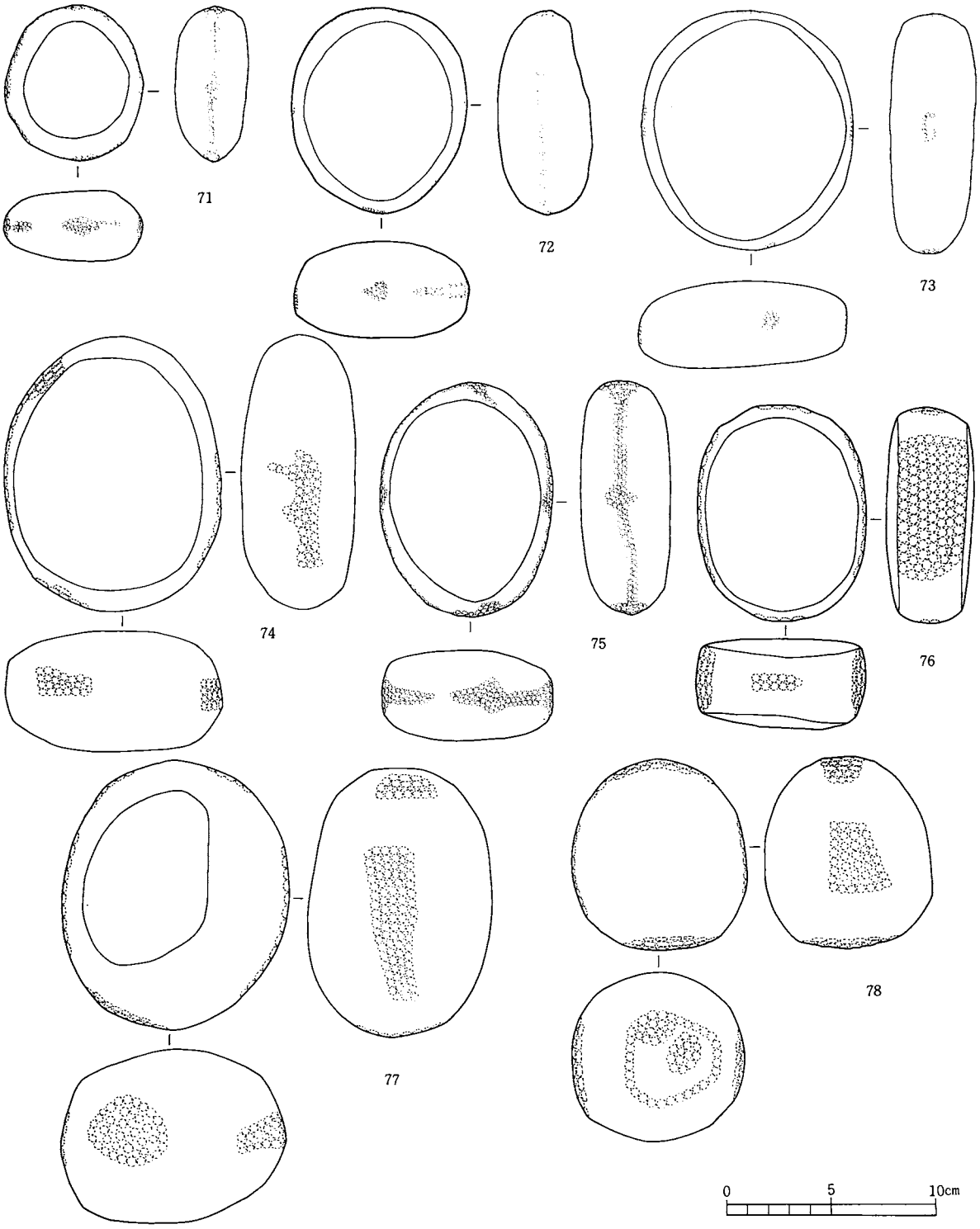
49は両蛤刃の磨製石斧であり、基部は欠損している。刃縁は本来円刃であったと考えられるが、かなり損耗し直線的になっている。使用時における線状痕も損耗がはげしいためか観察できなかった。基部は主軸に対して右下り、左上り方向の磨きを行っている。50は刃部も基端も欠損しているが現存最大器厚1.7cmと薄型である。器表には新しい剥離が目立つ。51は長軸の先端に損耗があり、ハンマーストーンに似た役割があったと考えられる。一端が欠損していることから、磨製石斧の二次利用とも考えられる。

(12)局部磨製石斧（第81図52～56）

52は薄型剥片を使用し、刃部と両側縁のみを磨いている。刃部は両蛤刃の形態をとり、刃縁はわずかに損耗している。53と55は側縁部を粗く剥離調整し、基部の中央部のみを磨き平坦にしている。また、側縁部は上端部を除き磨耗が見られる。54は表面に自然面を残したまま側縁部のみを粗く調整し、刃面をわずかに磨き刃部を作り出している。しかし、刃縁にわずかに損耗が見られることから、使用時における磨耗にすぎないのかもしれない。56は長さ22.6cm、幅11.3cm、厚さ3.6cmと他の石斧より群を抜いて大型である。側辺部のみを粗く剥離調整している。刃部をわずかに磨いていると思い、局部磨製石斧に分類したが、刃縁はかなり丸味を持っており、使用時における磨耗ではないかとも考えられる。そうすると、かなり使用頻度が高かったことがうかがえる。また、表面の稜線は磨耗し、基部に近い部分から中程にかけては稜線の磨耗とは違うわずかに凸凹した感じの痕跡があり、着装痕ではないかと思われる。



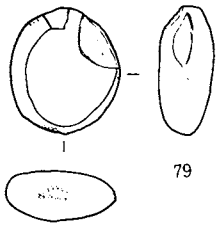
第83図　石器実測図

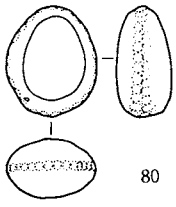


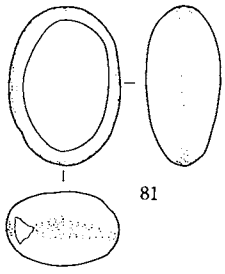
第84図　石器実測図

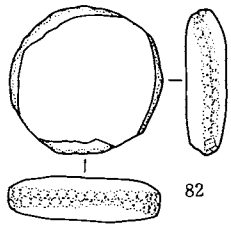
⑬環状石斧（第82図57）

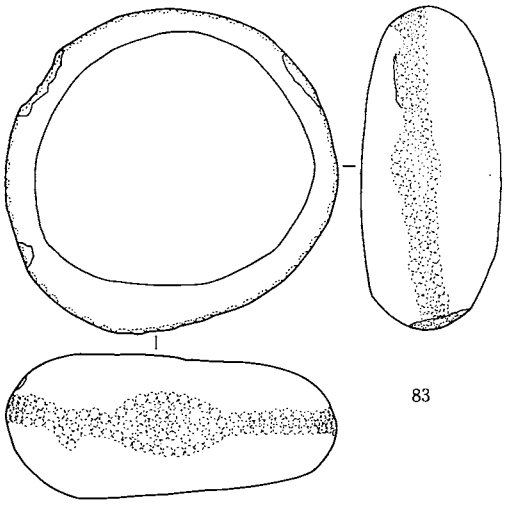
径10cm、孔径2.4cmの円盤状で、円に沿って全体をよく磨いている。周縁の刃は磨耗し、ごくわずかに丸味を持つ。また使用時のものと考えられる剝離が6ヶ所に見られ、主要剝離はほぼ対称上に見られる。貫通孔には整形時における敲打痕が見られる。また全体に磨耗しているが、特に凸部が顕著である。B－2区Ⅲ層上部（黄褐色土）中より出土している。近くの尾窪遺跡より表採品として類例があげられる。[註3]　（田尻）

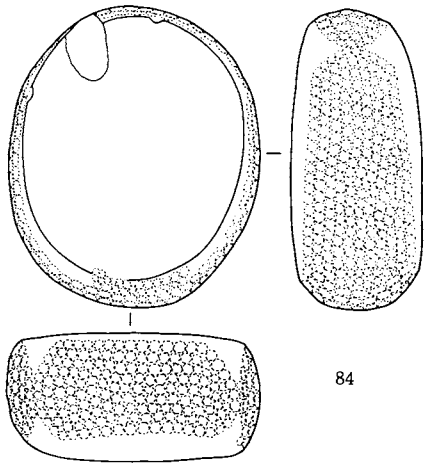

79

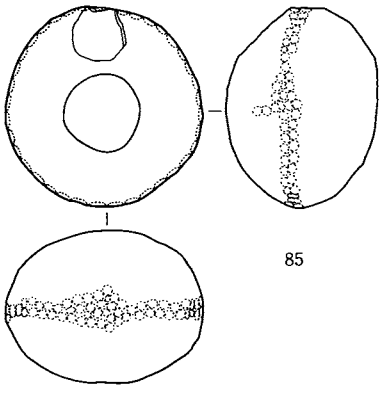

80

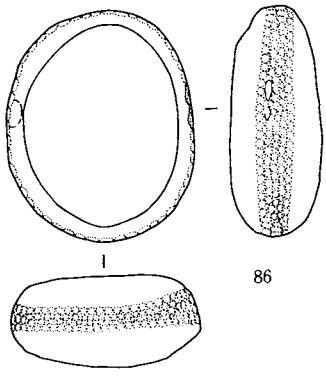

81

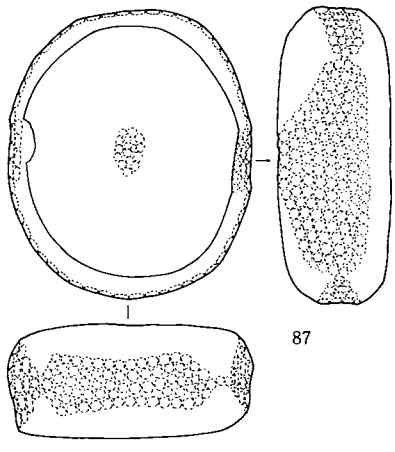

82

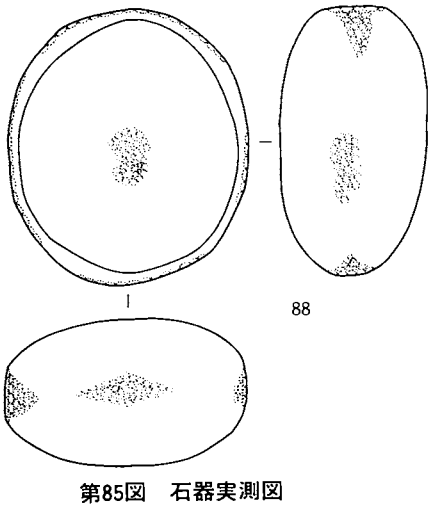

83

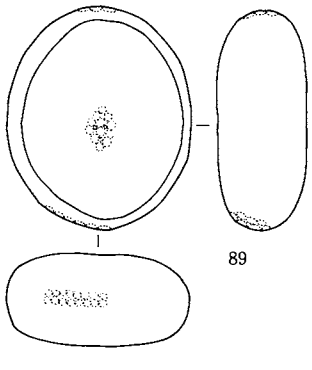

84

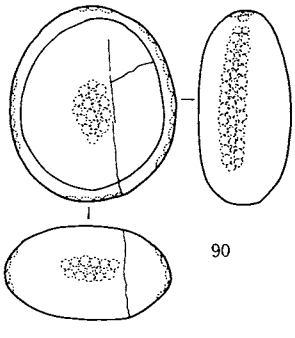

85

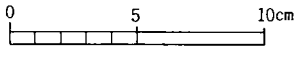

86


87

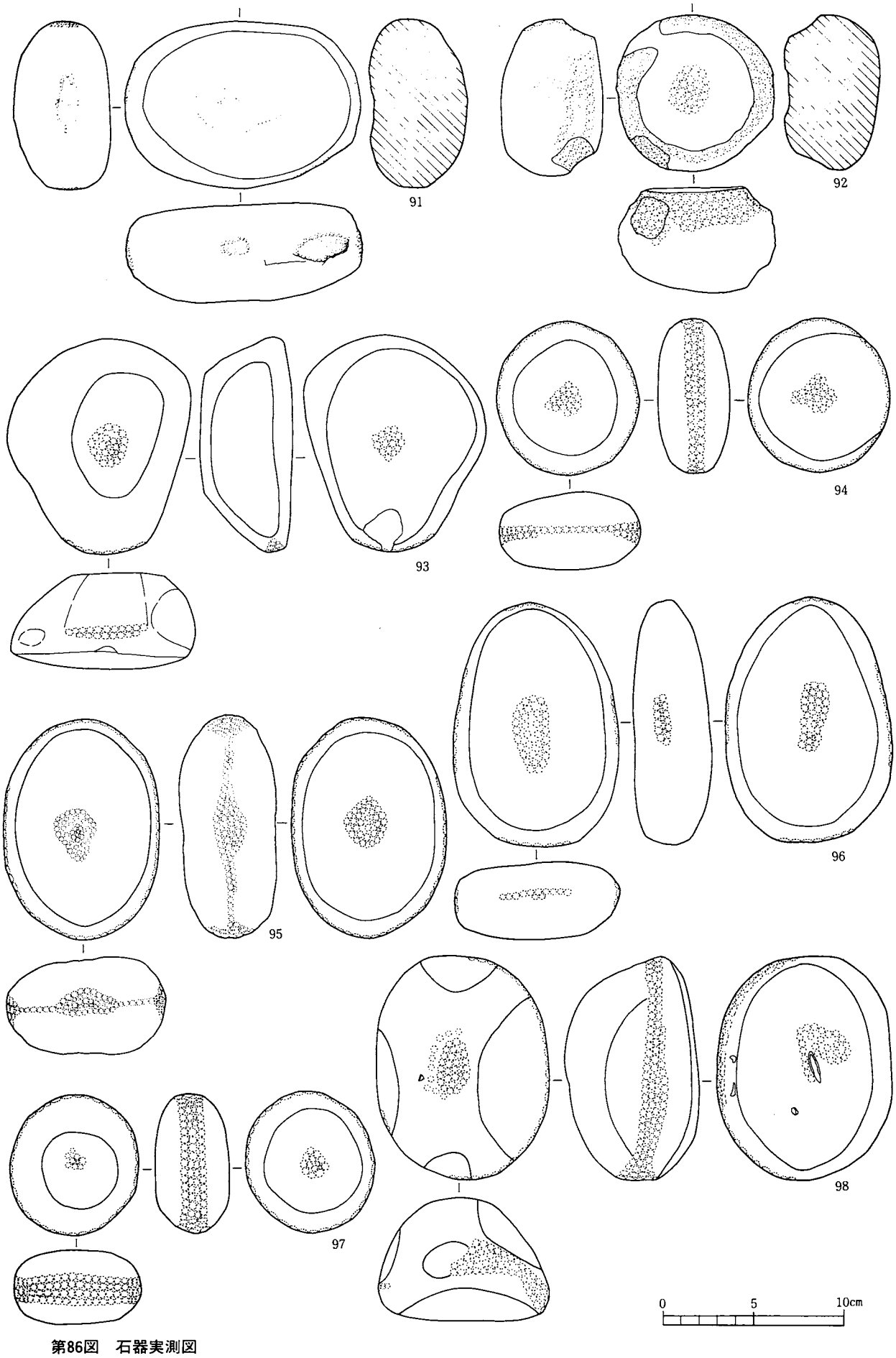

88


89

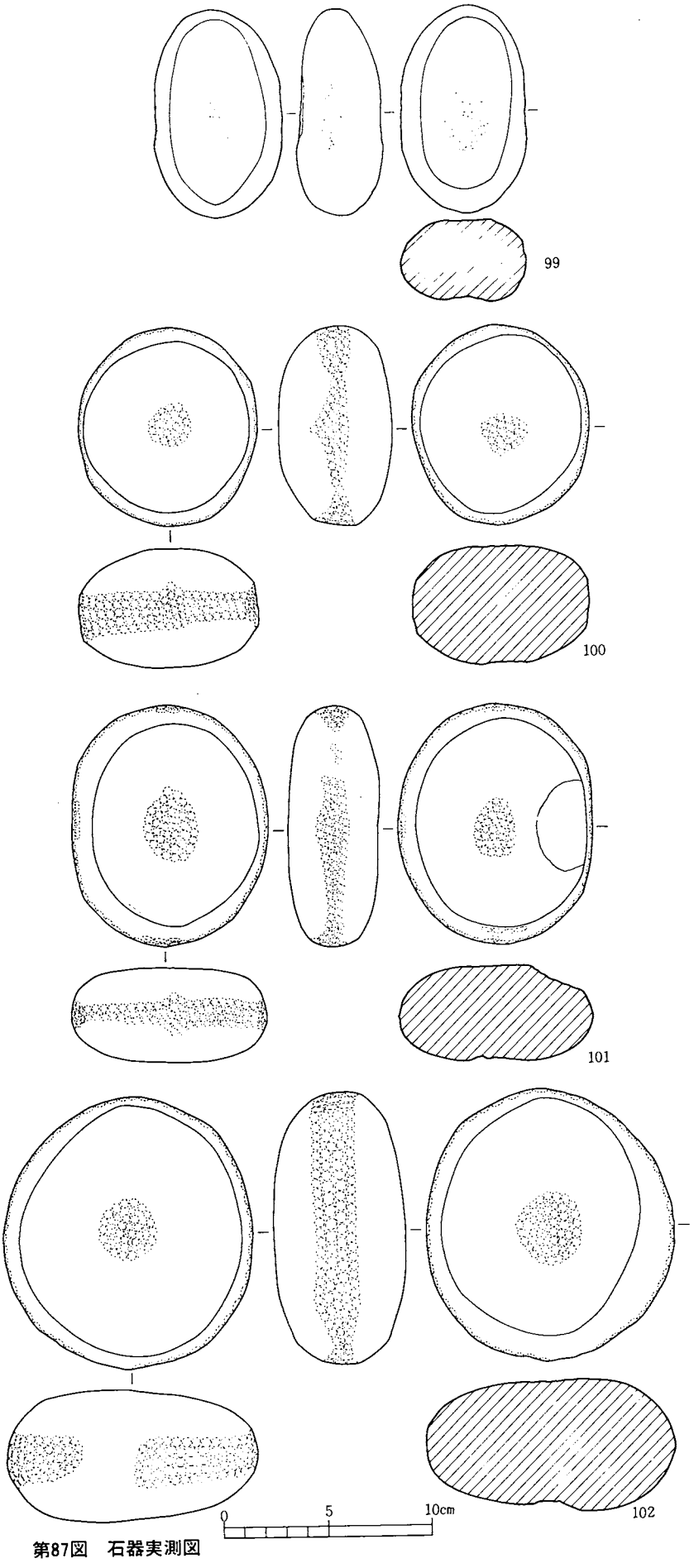

90



第85図　石器実測図



第86図　石器実測図



第87図　石器実測図

⑭磨石類（第83～88図）

出土した石器は、磨痕・敲打痕・凹みを併せて有するものが多い。ここでは、磨石・敲石・凹石と呼ばれている石器を含めて、磨石類として取扱う。

出土した磨石類は、欠損品を含めて78点を数える。磨石類は、その形態および使用痕の組み合わせから、次のように分類できる。分類可能な石器は65点である。類毎の内訳は、Ⅰ類７点、Ⅱ類26点、Ⅲ類32点である。分類不可能な磨石類は、Ⅱ・Ⅲ類に含まれる可能性が強い。

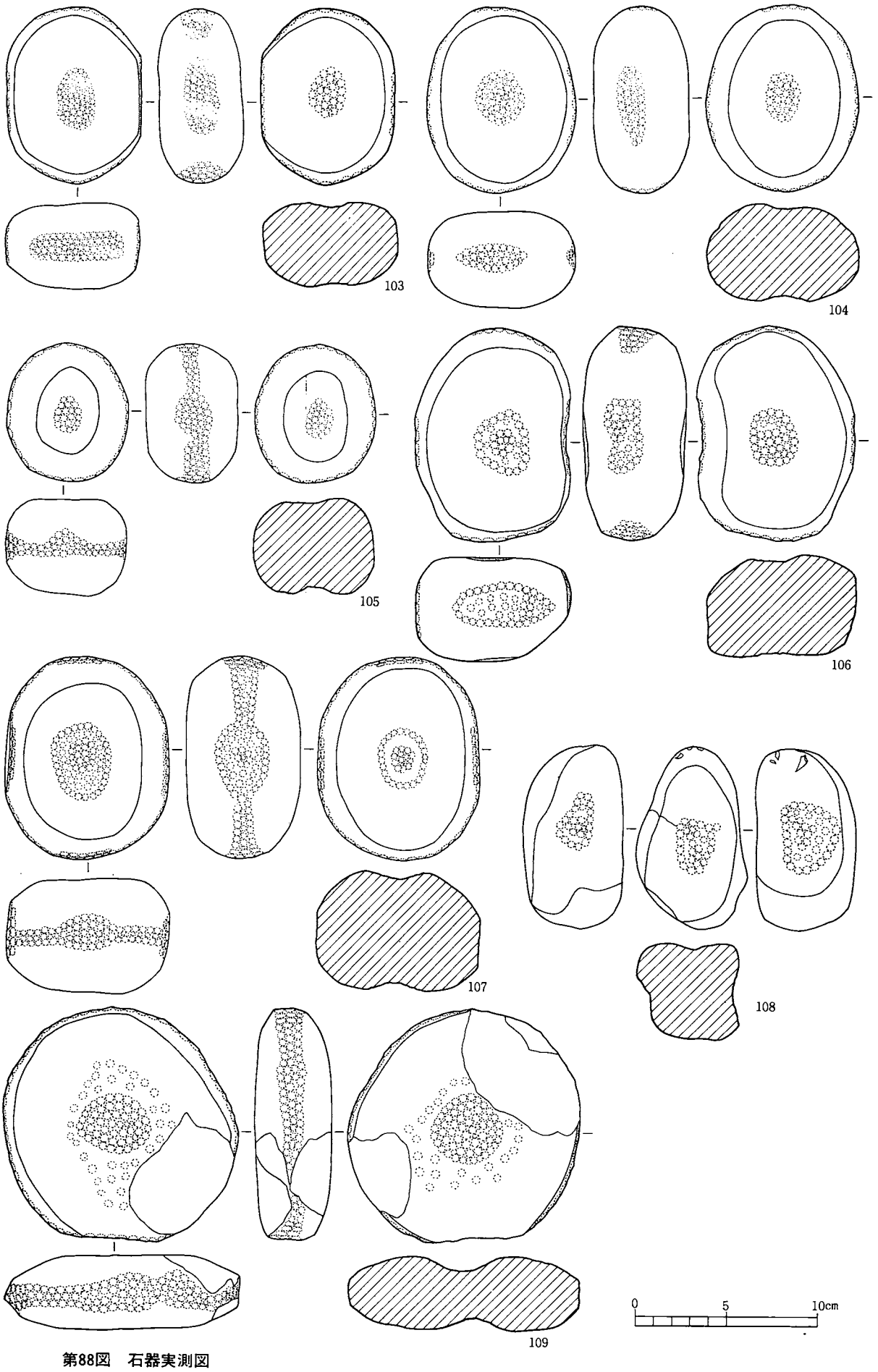
Ⅰ類　磨痕のみを有するもの（第20図58～64）。

58～60・62・64は表・裏面の両面あるいは片面に磨痕がみられるが、61・63は表・裏面、および側面にも磨痕が見られる。

Ⅱ類　磨痕と敲打痕を併せて有するもの（第20図65～70、第21図71～78、第22図79～86）。

67・70は長軸の一方の端部に敲打痕を残す。65・66・68・69は長軸の両端部に敲打痕をもつ。14～22は周縁部に敲打痕がある。80～86の敲打痕は周縁全体を巡る。76・84は面取りしたような側面をもつ。

Ⅲ類　磨痕・敲打痕を併せて有するが、側縁部以外に敲打痕が表面および裏面の中央部にも見られるもの（第22図87～90、第23図91～98、第24



第88図　石器実測図

第3表　石器一覧表

挿図番号	番号	出土地点	石材	重量(g)	器種
第12図	1	F－6－6住	流紋岩	8.6	石匙
	2	E－4－11住	流紋岩	15.3	石匙
	3	1号墳周溝Ⅰ区	流紋岩	12.2	削器
	4	F－8区採集	黒曜石	4.1	掻器
	5	D－2－10住	流紋岩	47.30	削器
	6	H－9－2住	黒曜石	10.35	楔形石器
	7	G－8区採集	チャート	24.65	尖頭器
第13図	8	F－2－4住	黒曜石	0.6	石鏃Ⅱ
	9	F－0－4住	黒曜石	(0.9)	石鏃Ⅱ
	10	4号墳黒色土	黒曜石	(0.7)	石鏃Ⅱ
	11	F－6住居内	黒曜石	0.7	石鏃Ⅱ
	12	D－5－4住	黒曜石	(0.5)	石鏃Ⅱ
	13	E－3－2住	流紋岩	2.0	石鏃Ⅱ
	14	F－6－6住	黒曜石	0.4	石鏃Ⅱ
	15	F－4－3住	流紋岩	(1.5)	石鏃Ⅱ
	16	D－6採集	流紋岩	(1.0)	石鏃Ⅱ
	17	B－1－2住	チャート	0.6	石鏃Ⅲ
	18	F－3－2住	ガラス質安山岩	(0.9)	石鏃Ⅲ
	19	C－1－1住	黒曜石	1.3	石鏃Ⅳ
	20	B・C－7区採集	黒曜石	(0.9)	石鏃Ⅳ
	21	F－2－13住	チャート	(1.4)	石鏃Ⅴ
	22	E－7・8住	ガラス質安山岩	1.8	局部磨製石鏃
第14図	23	採集	輝石角閃石安山岩	(123.7)	打製石斧Ⅱ
	24	F-9-3·4·5住	角閃石安山岩	(81.9)	打製石斧Ⅱ
	25	D－10－5住	結晶片岩	(112.55)	打製石斧Ⅱ
	26	E－8区採集	流紋岩	86.5	打製石斧Ⅱ
	27	採集	ガラス質安山岩類	97.0	打製石斧Ⅱ
	28	B－4区採集	ガラス質安山岩類	66.30	打製石斧Ⅱ
	29	4－4G－11住	輝石角閃石安山岩	(384.20)	打製石斧Ⅱ
第15図	30	B・C－7区採集	ガラス質安山岩類	(235.40)	打製石斧Ⅱ
	31	B・C－7区採集	ガラス質安山岩類	309.95	打製石斧Ⅱ
第16図	32	E－11－3住	黒曜石	5.55	二次加工のある不定形石器
	33	採集	黒曜石	6.40	二次加工のある不定形石器
	34	H－10－4住	黒曜石	7.50	二次加工のある不定形石器
	35	F－1－7住	ガラス質安山岩類	26.70	二次加工のある不定形石器
	36	採集	ガラス質安山岩類	76.40	二次加工のある不定形石器
	37	採集	黒曜石	36.90	二次加工のある不定形石器
	38	C－4－2・3住	黒曜石	9.25	使用痕のある剝片
	39	G－9－2住	黒曜石	2.95	使用痕のある剝片
	40	F－2－5住	黒曜石	1.85	使用痕のある剝片
	41	D－3－7住	黒曜石	2.70	使用痕のある剝片
第17図	42	F－2－1住	流紋岩	30.0	剝片
	43	採集	熔結流紋岩	25.40	剝片
	44	H－9－2住	熔結凝灰岩	80.25	剝片
	45	採集	熔結凝灰岩	6.75	剝片
	46	E－8区	熔結凝灰岩	41.3	石核
	47	E－6－1住	ガラス質安山岩類	350	石核
	48	G－7－3住	熔結凝灰岩	120.4	石核
第18図	49	B－1－2住	細粒砂岩	(212.10)	磨製石斧
	50	1号墳周辺排土	角閃石輝石安山岩	(104.45)	磨製石斧
	51	E－10－5住	輝石角閃石安山岩	(194.95)	磨製石斧
	52	D－3－6住	細粒砂岩	28.00	局部磨製石斧
	53	4号墳周辺	細粒砂岩	27.85	局部磨製石斧
	54	1号墳周辺排土	輝石角閃石安山岩	112.40	局部磨製石斧
	55	C－5区溝中	緑色片岩	47.60	局部磨製石斧

挿図番号	番号	出土地点	石材	重量(g)	器種
第18図	56	D－8区Ⅲ層	輝石角閃石安山岩	1,043.65	局部磨製石斧
第19図	57	B－1区Ⅲ層	ガラス質安山岩類	252.95	環状石斧
第20図	58	H－9－2住	角閃石安山岩	72	磨石Ⅰ
	59	F－9－2住	輝石角閃石安山岩	49.4	磨石Ⅰ
	60	H－10－1住	熔結凝灰岩	37	磨石Ⅰ
	61	D－7－1住	輝石角閃石安山岩	130	磨石Ⅰ
	62	G－10－2住	輝石角閃石安山岩	503.7	磨石Ⅰ
	63	B－2－1住	角閃石輝石安山岩	598.4	磨石Ⅰ
	64	C－3－3住	緑色片岩	120	磨石Ⅰ
	65	採集	砂岩	628.9	磨石Ⅱ
	66	G－10－2住	砂岩	332.2	磨石Ⅱ
	67	F－7－6住	含礫粗粒砂岩	181.1	磨石Ⅱ
	68	F－6－4住	角閃石輝石安山岩	186.2	磨石Ⅱ
	69	E－2－1·2住 南側pit	角閃石輝石安山岩	1,415.5	磨石Ⅱ
	70	C－8区溝	含礫砂岩	1,437.5	磨石Ⅱ
第21図	71	F－7－3·4·5住	輝石角閃石安山岩	221.8	磨石Ⅱ
	72	G－10－2住	角閃石輝石安山岩	517.5	磨石Ⅱ
	73	G－2－2住	輝石角閃石安山岩	768.7	磨石Ⅱ
	74	D－3－2住	輝石角閃石安山岩	1,072.3	磨石Ⅱ
	75	F－6区Ⅲ層	輝石角閃石安山岩	582	磨石Ⅱ
	76	採集	輝石角閃石安山岩	617.3	磨石Ⅱ
	77	D－7－8住	輝石角閃石安山岩	1,058.4	磨石Ⅱ
	78	B－5－1住	輝石角閃石安山岩	863.7	磨石Ⅱ
第22図	79	H－10－1住	砂岩	(62.9)	磨石Ⅱ
	80	E－6－3住	輝石角閃石安山岩	(46.5)	磨石Ⅱ
	81	F－7－10住	砂岩	(115)	磨石Ⅱ
	82	採集	輝石角閃石安山岩	(85.7)	磨石Ⅱ
	83	E－2－2住	輝石角閃石安山岩	1,330.7	磨石Ⅱ
	84	F－6－6住	角閃石輝石安山岩	(959.4)	磨石Ⅱ
	85	F－4区採集	角閃石安山岩	(507.7)	磨石Ⅱ
	86	F－6－1住	熔結凝灰岩	283.6	磨石Ⅱ
	87	F－2－8住	砂岩	770	磨石Ⅲ
	88	F－7－9住	角閃石輝石安山岩	866	磨石Ⅲ
	89	F－1－8住	輝石角閃石安山岩	362.9	磨石Ⅲ
	90	E－4－3住	輝石角閃石安山岩	250.7	磨石Ⅲ
第23図	91	G－9－2住	輝石角閃石安山岩	1,048.9	磨石Ⅲ
	92	E－12－1住	砂岩	588.4	磨石Ⅲ
	93	D－4－2住	角閃石輝石安山岩	808.5	磨石Ⅲ
	94	D－3－1住	輝石角閃石安山岩	400	磨石Ⅲ
	95	F－4－9住	輝石角閃石安山岩	809.5	磨石Ⅲ
	96	F－2－1住	砂岩	744.2	磨石Ⅲ
	97	E－1－5住	角閃石安山岩	350	磨石Ⅲ
	98	E－4－12住	輝石角閃石安山岩	1,201.25	磨石Ⅲ
第24図	99	E－1－8住	砂岩	352.5	磨石Ⅲ
	100	D－5－4住	輝石角閃石安山岩	674.3	磨石Ⅲ
	101	A－1－1住	輝石角閃石安山岩	(776.3)	磨石Ⅲ
	102	E－4－9住	輝石角閃石安山岩	1,437.7	磨石Ⅲ
第25図	103	F－7－7住	輝石角閃石安山岩	520	磨石Ⅲ
	104	F－3－4住	輝石角閃石安山岩	676.5	磨石Ⅲ
	105	F－3－4住	輝石角閃石安山岩	396.5	磨石Ⅲ
	106	E－2－2住	輝石角閃石安山岩	833.9	磨石Ⅲ
	107	C－3－4住	輝石角閃石安山岩	1,003.6	磨石Ⅲ
	108	E－9－2住	角閃石安山岩	438	磨石Ⅲ
	109	E－7－7住	砂岩	(960.7)	磨石Ⅲ

備考　(　)は現存値

図99～102、第25図103～109)。

中央部の敲打が片面だけに見られるものがある。91・92の中央部は浅く凹む。87～90の中央部は凹まない。87は面取りしたような側面をもつ。92の周縁上半部には溝状のものが巡る。

中央部の敲打痕が表裏両面にあるものが存在する。93～98は両面とも中央部が凹まない。99～102は両面のうち片方の中央部が凹む。103～107、109は両面とも中央部が凹む。1点のみであるが、108は三つの凹みを有する。103・106・107・109は面取りしたような側面をもつ。

中央部の凹みは、深浅の差はあるが、いずれも皿状を呈する。（西住）

註

註1　木﨑康弘分類に従う。

註2　木﨑康弘分類に従う。

註3　野田拓治教示による。

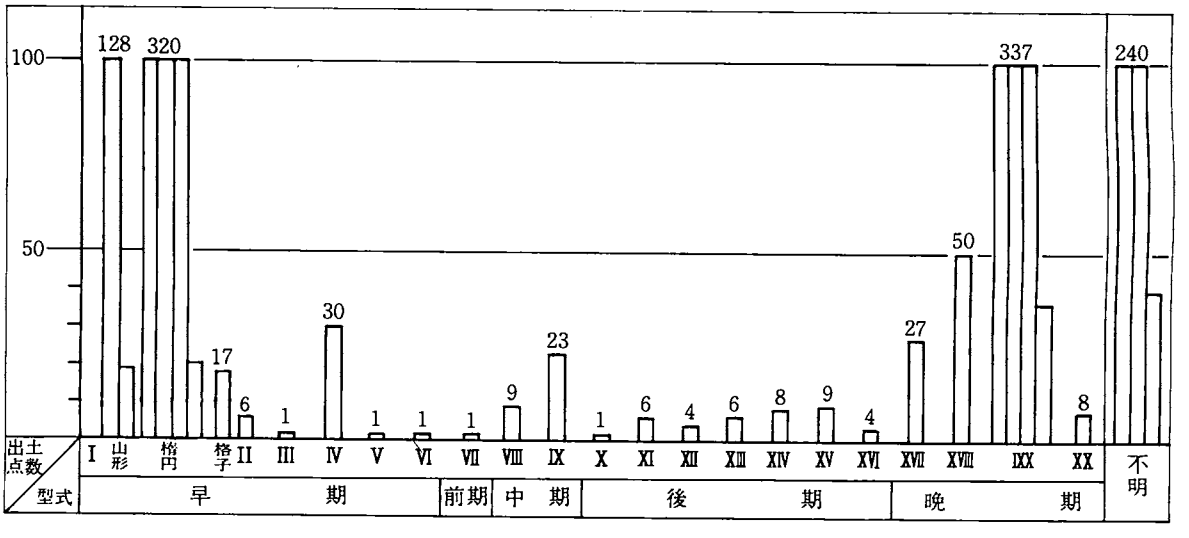
5．小　結

縄文時代の遺構・遺物は、古墳時代のそれと比較してごく少量にすぎないが、上の原遺跡の歴史的変遷を知る上で貴重な資料である。

遺構は、押型文土器を伴う集石1基（C－4区）、及び詳細が不明な土壙三基（E－10、G－10区）のみである。それに比して遺物量は豊富で、早期後半から晩期後半におよぶ約1,200点の土器、166点の石器が出土した。

遺物量に比べて遺構が希薄なのは、①調査区において、後世の遺構（住居址・古墳・溝・土壙等）によって破壊された。②遺構確認が、その多くにおいてⅢ層上面で行われており、すくなくともⅢ層下部ないしⅣ層下部、或いはⅤ層にかけて掘り込まれる早期の遺構については、多くを検出することができなかったことが考えられる。これは、遺物のほとんどが、住居址の埋土内から検出されることからも推察される。特に住居址密集度の高いD・E・F－4・5・6区よりの出土が多いことからもうなずける。

第4表　出土土器点数の変化



土器についていえば、時期によっても変動がみられる。「第４表　出土土器点数の変化」で示した通り、早期後半と晩期の中葉のものがその多くを占めるが、早期後半から晩期後半にわたって土器の出土がみられ、遺跡は、断続的に維持されていたことがうかがえる。これらの土器は、隣接する塚原古墳群[註1]、尾窪中世墳墓群[註2]などでもみられるところであり、このことは上の原遺跡を中心とする地域が、縄文人の活動領域として適していたことを端的に表わしている。これは、背後に雁回山をひかえており、台地上の原野には、小動物の存在が考えられるところから、食料獲得の場として適し、遺跡の周囲には数ヵ所に湧水がみられるところから、居住域としても適していたことがうかがえる。ただ先述の通り、一部をのぞいて前期から後期におよぶ土器が極端に少ないところから、この間の活動の拠点が別地域にあったことがうかがえる。すなわち、肥後において前期以降にみられる貝塚の存在は、これを裏付けるものである。本遺跡周辺でも、現水田面近くに阿高貝塚[註3]・黒橋貝塚[註4]・御領貝塚[註5]・敷田貝塚がみられ、台地の比較的中央部に位置する上の原遺跡等から縁辺部への移動が示唆される。このことは、全国的にみられる気候の温暖化と海進現象に起因することが考えられるが、それによって海上活動が活発化したことは言うまでもない。このことは、寒冷化と海退現象が考えられる晩期に再び土器が増加することからもうなずける。

石器は総数166点出土している。器種は石匙・掻器・削器・楔形石器・尖頭器・石鏃・局部磨製石鏃・打製石斧・二次加工のある不定形石器・剥片・石核・磨製石斧・局部磨製石斧・環状石斧・磨石類があげられる。しかしながら、ほとんどが住居址・古墳周溝の覆土中からの出土、及び採集品であり、土器との共伴関係、出土層位、石器の組成などについては不明な点が多い。個々の石器をみると、旧石器時代に所属する可能性のある石器も数点見られるが、詳細については不明である。

器種を見ると、磨石類の出土数が石器全体の約45%を占めるのに対して、石皿は出土数が非常に少ない。また、石錘などの漁撈具は今回の調査では検出できなかった。

第４表は出土石器石材一覧表である。使用されている石材[註6]は次のとおりである。

火成岩　黒曜石・ガラス質安山岩・輝石角閃石安山岩・角閃石安山岩・流紋岩。

堆積岩　凝灰岩・熔結凝灰岩・チャート・砂岩・細粒砂岩・含礫粗粒砂岩・含礫砂岩。

変成岩　結晶片岩・緑色片岩。

第５表　石器石材一覧表

器種／石材	石匙	掻器	削器	楔形石器	尖頭器	石鏃Ⅱ	石鏃Ⅲ	石鏃Ⅳ	石鏃Ⅴ	局部磨製石鏃	打製石斧	二次加工のある不定形石器	使用痕のある剥片	剥片	石核	磨製石斧	局部磨製石斧	環状石斧	磨石類Ⅰ	磨石類Ⅱ	磨石類Ⅲ	磨石（分類不明）	点数
黒曜石		1		1		8	1	2				13	4	9									39
チャート					1				1					3									5
流紋岩	2		2			3					2			3									12
安山岩(類)							1			1	7	2		5	1	2	2	1	5	15	18	9	69
片岩											1						1		1				3
凝灰岩														3	2				1	1		2	9
砂岩																1	2			6	5	15	29
点数	2	1	2	1	1	11	2	2	1	1	10	15	4	23	3	3	5	1	7	22	23	26	166

石器全体から見て安山岩の占める割合は約41%であり、特に磨石類は約62%が安山岩を石材として使用している。

本来ならば、器種ごとに分折し考察を加えねばならないが、今回は特に気付いたことについて箇条書きにしてみる。

○打製石斧の刃縁の多くは欠損分を除き大部分に磨耗が見られる。又、磨耗が稜線に及ぶ石器もあり、これらのことから使用頻度が高かったのではないかと考える。

○側縁部においても、かなり磨耗が見られるが、着装痕の状態についてははっきりせず、着装時の磨耗か、使用時の磨耗か区別しえない石器も多かった。

○局部磨製石斧は、実際に局部的に磨製されたのか使用時における磨耗にすぎないのか判断基準が曖昧であった。

○磨石Ⅲ類の中で、中央の敲打部が凹む石器と凹まない石器、凹みの数は石器の使用頻度の差と考える。

○磨石Ⅱ類とⅢ類の違いは使用頻度の差か使用目的の差か明確な答えをもっていない。(清田・西住・田尻)

註

註1　47～48年度に行われた縦貫道調査区で、早期～晩期の土器が出土している。また、51年に実施された塚原古墳群範囲確認調査でも、古墳の分布する広範な地域から縄文土器が出土している。

江本直「縄文時代、その他の遺物」『塚原』熊本県文化財調査報告第16集　1975

隈昭志・緒方勉・杉村彰一『塚原古墳群調査報告書』　熊本県教育委員会　1976

註2　高木正文・江本直「その他の遺物」『尾窪』　熊本県文化財調査報告第12集　1973

註3　西田道世・島津義昭『阿高貝塚』　城南町文化財調査報告第1集　1978

註4　西田道世他『黒橋』　熊本県文化財調査報告第20集　1976

註5　坪井清足「御領貝塚の発掘調査」『城南町史』　1965

註6　石材の同定は、熊本大学教養部・高橋俊正教授による。

第３節　弥生時代の遺構と遺物

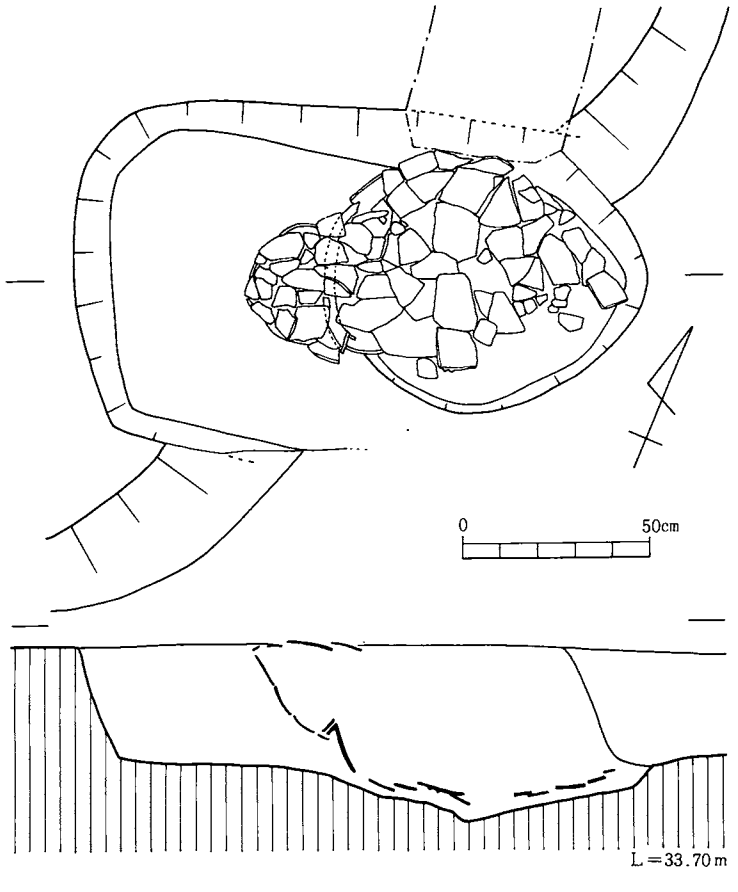
１．甕棺墓（第88・89図）

Ｄ－12区、６号墳の周溝３区の墳丘側に甕棺が１基出土した。墓壙の東側部分、および下甕の約半分を６号墳の周溝によって削除されている。墓壙は遺存している西側部分で幅90cm強を測り、平面形は隅丸長方形を呈している。墓壙底は、棺の埋置に合わせて東側が深くなっている。

墓壙主軸および棺の埋置方位はＳ－67°－Ｗで、棺は約20°の傾斜で埋置されている。上甕・下甕ともに、ヒビ割れが著しい。

上甕は現在器高約40cm、胴部最大径32.4cm、底部径6.5cmを測る。胴部に刻目凸帯が二条巡り、底部はわずかに丸味をもつ平底でやや不安定である。凸帯を胴部に貼り付け、継ぎ目を強く横ナデした後、刻目を入れている。胴上半部は細かい刷毛目の上からわずかに横ナデが入る。底部から胴下半部にかけては斜め方向の単位の大きいヘラミガキが入り、部分的には刷毛目の上にも残っている。内面は底部から胴部にかけて$\frac{3}{4}$程は浅い刷毛目が縦方向に入る。その他の部分は横ナデを行っている。刻目凸帯から口縁部にかけて１ヶ所黒斑を有する。口縁部は打欠いて使用されている。胎土・焼成は良く明褐色を呈す。

下甕は約$\frac{1}{2}$が現存するのみである。復原すると器高78.5cm、口径45.6cm、胴部最大径67cm、底部径12cm、器壁は0.8cm～1.0cmを測る。胴部に二条の凸帯をもち、外面は縦方向の刷毛目調整を行い、凸帯の継ぎ目部分は横ナデしている。内面と底部はナデを行っており、口縁の内側は全周にわたりわずかに打ち欠いている。口縁と胴部の継目は内側から強く横ナデしたものと思われる。胎土・焼成は良く、色調はやや赤味がかった明褐色を呈す。（松本・田尻）



第89図　Ｄ－12－１号 甕棺墓実測図

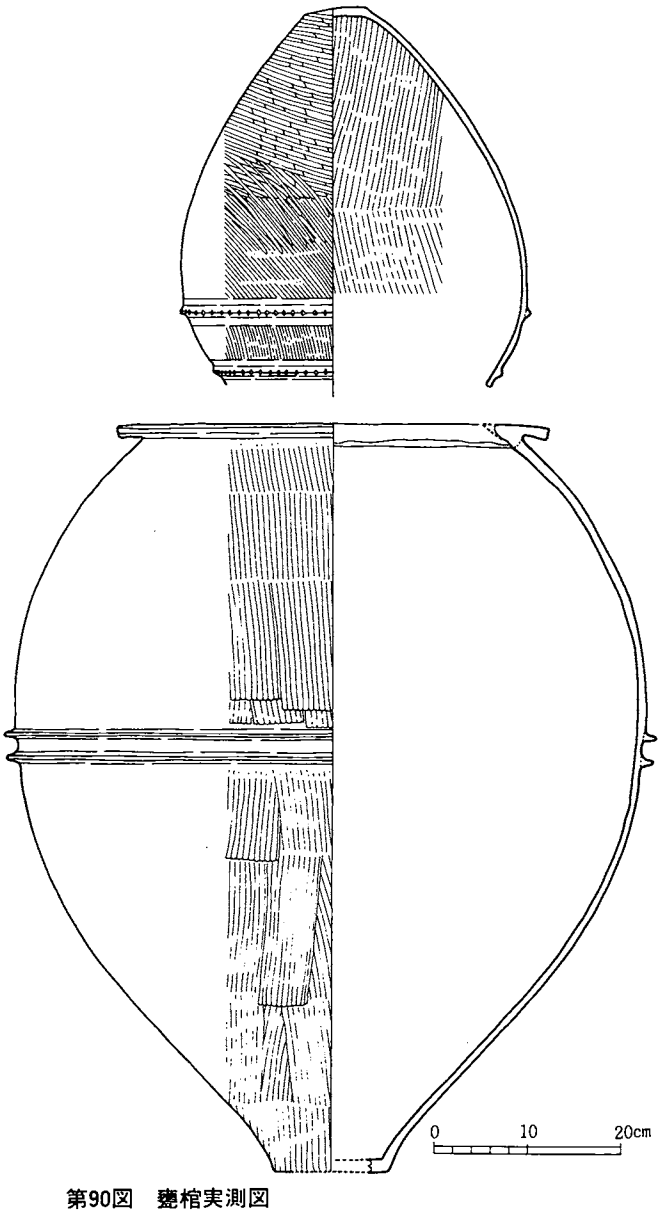
２．弥生土器（第91図）

弥生土器の存在は、縄文土器同様調査前から予想された[註1]。54年度調査地区においては住居址・甕棺等の検出をみたが、55年度調査地区においては甕棺の出土はみたものの、その他の遺構の検出はできなかった。しかし約60点にのぼる弥生土器が、古墳時代住居址内或いは古墳の周溝内より検出された。これは、数様式を欠きながらも前期から後期まで継続している。

ここでは甕・壺・高杯・その他の器形を形態の相違によって細分する。

(1)甕

甕Ａ類（２、５～６）　Ａ類は、口唇端部及び端部直下に刻み目突帯を有する形態であり、突帯の位置によって



第90図　甕棺実測図

2類に細分できる。

A－1類（5）　A－1類は口唇端部直下に突帯を有する形態である。 5 は肩部が僅かにふくらみ、調整は内外面ナデによる。胎土内には0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

A－2類（2、6）　A－2類は口唇端部に突帯文をほどこし、突帯直下に胴部最大径を有する。腹部はほぼ直行して底部にいたる。調整は、内外面ナデによる。胎土内には0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

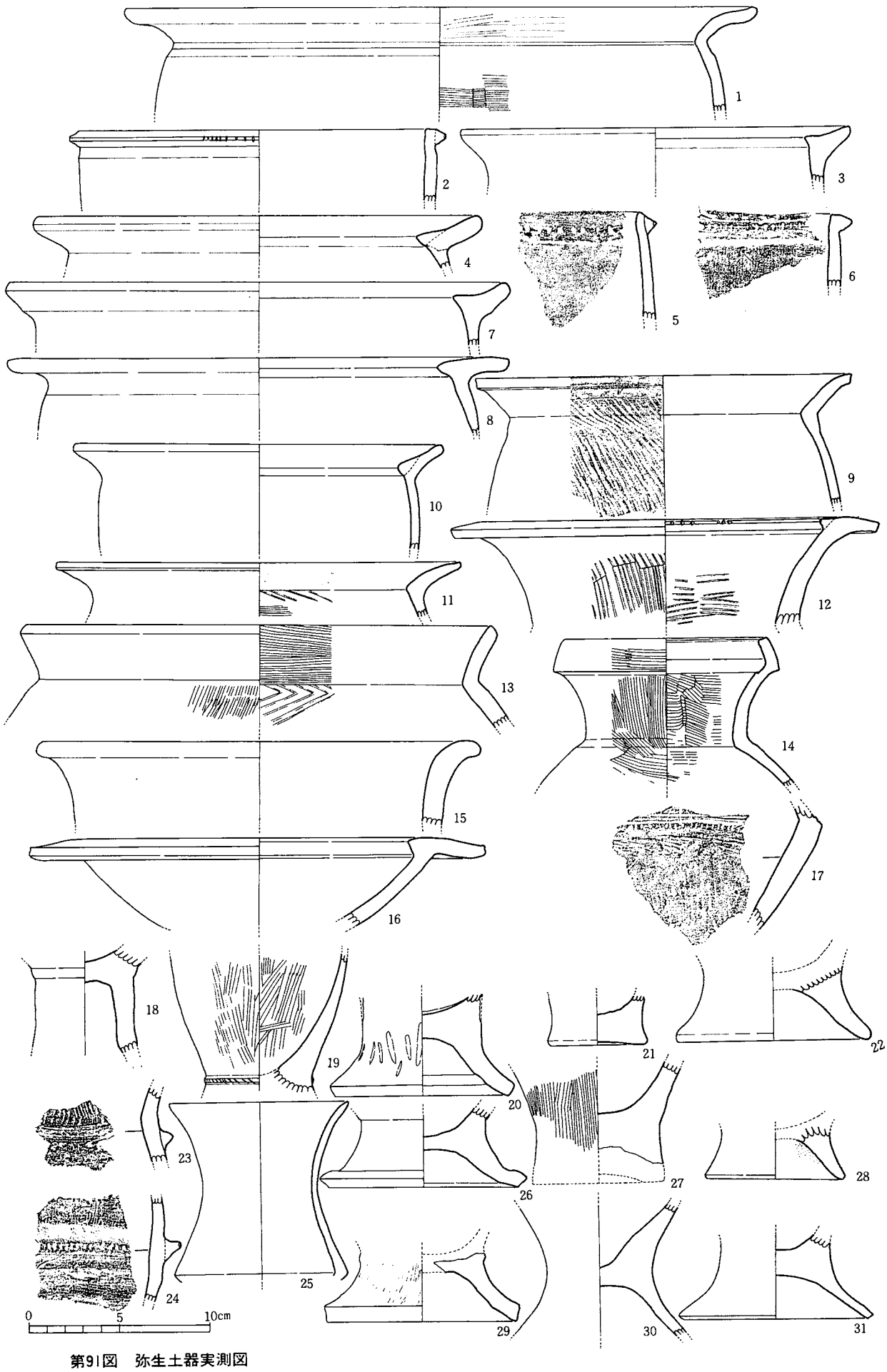
甕B類（8）　B類は、ふくらみながら腹部へ向う肩部に、口縁部が逆「L」字形に接合され、僅かに内側へ張り出しをもつ形態である。口縁部内面は端部から内側へ1.50cmの位置を頂点として内外へ傾斜する。調整は、内外面ナデによる。胎土内には、0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

甕C類（3、4、7、10）　C類は、肩部から腹部にかけてふくらみをもち、頸部で屈曲して口縁部にいたる形態である。口縁部は、反りぎみに外傾し、端部は丸い。内外面の調整はナデによる。胎土内には0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

甕D類（1、9、11、13）　D類は、口縁帯をもたず、頸部が外傾し、くの字に屈折して胴部にいたる形態である。

D－1類（1、13）　D－1類は、肩部に胴部最大径を有する形態である。 1 は、頸部中半で再び屈折し端部へいたり、丸い端部を呈する。 2 は僅かに外反する頸部を有し、端部は断面三角形を呈する。調整は、 1 が外面全体、 2 が外面口縁部をナデ、他はハケ目による。胎土内には、0.05～0.1cmの石英粒などを含む。

D－2類（9、11）　D－2類は、腹部に最大径を有する形態である。 9 は屈折部直下にふくらみをもち、頸部が僅かに外反する形態であり、端部断面三角形を呈する。 11 は肩部から頸部へ強く外反して端部に至り、端部に向かうにつれて器壁が薄くなる。調整は、 9 が外面荒いハケ目、内面ナデにより、 11 が外面ナデ、内面ハケ目のあとナデによる。胎土は粗く0.05～0.1cmの石英粒などを多く含む。焼成は良好である。



第91図　弥生土器実測図

(2) 壺

壺A類（15）　A類は、頸部が外反し、口縁帯を有しない形態であり端部は丸い。内外面横方向の磨きが施される。胎土内には0.1cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

壺B類（12）　外反する頸部内面に細かい刻み目を有する突帯を貼り付けて、口縁部を形成する形態である。調整は、口縁部及び口縁部直下は横方向のナデ、頸部は粗いハケ目による。胎土内には0.1cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

壺C類（14）　C類は、僅かに内弯ぎみに傾斜する口縁部を有し、頸部への移行部で逆くの字に屈折する。頸部は外反し、肩部への移行部で再びくの字に屈折し僅かにふくらみをもつ肩部へ移行する。調整は、外面及び内面頸部以下はハケ目、内面口縁部はナデによる。胎土内には0.05～0.1cmの石英粒などを含む。焼成は良好である。

壺D類（17）　D類は胴部片のため詳細は不明であるが、所謂そろばん玉状を呈する腹部を有する形態であり、屈折部に刻み目をほどこし、胴部上半部に沈線文及び重孤文を施文する。調整は外面ハケ目のあとナデ、内面はハケ目による。胎土には、0.05～0.1cmの石英粒などを含む。焼成は良好である。

壺E類（23、24）　E類は、肩部（23）及び腹部（24）の破片であり、詳細は不明である。両方とも突帯を有しており、24 には刻み目をもつ。調整は内外面ともハケ目のあとナデによる。胎土内には、0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

(3) 高杯

高杯A類（16）　内弯する胴部を有し、逆「L」字状に屈折して口縁部にいたる。口縁部内面は端部から内側へ2.0cmの位置を頂点として外弯ぎみに内傾し、内側へやや張り出す。調整は、内外面ナデによるが、外面胴部にはハケ目の痕跡がみられる。また全面に丹塗りがみられ、内面ではさらにその上を磨いており、口縁部内面には暗文がみられる。胎土には、0.1cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

(4) 脚台・底部

脚台A類（12）　A類は、高杯の脚台部と思われる。杯部から脚台部へ外反ぎみに移行し、ほぼ直立する形態である。調整は、外面縦方向の磨き、内面は削りによる。胎土内には0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

脚台B類（20、26、29、31）　B類は、甕の脚台部である。脚台高が低く、外反して端部にいたる形態であり端部断面は長方形を呈する。

B－1類（20、26、29）　B－1類は、器壁が比較的厚手のものである。調整は 26、29 が 外面ハケ目のあとナデ、内面ナデによる。20 は外面ケズリのあとナデ、内面ナデによる。

B－2類（31）　B－2類は、器壁が比較的薄いものである。調整は器壁が荒れており明確にわからないが、内面に粗いハケ目が残る。胎土内には0.1cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

脚台C類（22、28）　C類は、脚台高が低く、外反して端部にいたり、端部が丸い形態である。調整は、

内外面ともナデによるが、 28 には内面に砂粒が付着する。胎土内には、0.05cm前後の石英粒などが含まれる。焼成は良好である。

脚台D類（30） D類は、脚台部から胴部へ外反して移行し、脚台部が長く伸びる形態である。調整については、器壁が荒れており、明確にわからないが、外面に僅かにハケ目の痕跡がみられる。焼成は良好である。

底部A類（21、27） 上底を呈し、器壁が厚く僅かに外傾する形態である。胴部へは、外反ぎみに移行する。調整は21が外面ナデ、内面ケズリにより、27が外面ハケ目、内面ナデによる。胎土内には、0.05cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。

その他 19は、内弯ぎみに広がる胴部を有し、くびれ部に刻み目突帯を施す形態であるが、器種は不明である。内外面ハケ目によって調整する。胎土内には0.1cm前後の石英粒などを含む。焼成は良好である。26は外反する頸部を有し、胴部への移行部で逆「く」の字形の屈曲する形態であり、コップ形とでも仮称すべきものである。

以上に述べたように上の原遺跡（55年度分）より出土した弥生土器は、甕・壺・高杯・その他に分類される。細分は器種ごとに行ったが、これらは数様式を含んでいることが明らかである。したがってここでは、現在肥後において様式設定されている土器を参考の上、Ⅰ式からⅦ式を設定する。各様式については様式構造表に示した通りである。（清田）

註

註1 小林コレクションの中に上の原遺跡採集の弥生土器がみられる。

第6表 弥生土器様式構造表

時期	上の原遺跡出土弥生土器様式	上の原遺跡出土弥生土器形式						出土点数
		甕	壺	高杯	その他	脚台	底部	
前期	Ⅰ式	A－1	＋	＋	――	＋	＋	1
	Ⅱ式	A－2	A	＋	――	＋	＋	4
中期	Ⅲ式(須玖式)	B	B	A	――	＋	＋	5
	Ⅳ式(黒髪式)	C	E	＋	――	a b－1	a	16
後期	Ⅴ式	D－1	C D	＋	20	C	＋	10
	Ⅵ式	D－2	＋	＋	＋	b－2	＋	8
	Ⅶ式	＋	＋	＋	＋	d	＋	6

3．小 結

(1) 遺構・遺物のあり方

本遺跡（55年度調査区）より検出された弥生時代の遺構は、6号墳と重複する甕棺墓1基のみであり、他に遺構を伴わない土器60点が出土した。いずれも後世の住居址、古墳、溝、土壙などの埋土内より出土しており、詳細を明らかにすることはできなかった。ただその形態上の特徴から、中期中葉から後期のものが中心であり、53・54年度調査区において、前期末から中期初頭の土器が集中的にみられる現象とは相違する。

甕棺は、前述の通り6号墳周溝内壁より単発的に検出された。器形からみて中期後半に比定されよう。

同期の甕棺は、周辺地域でも数遺跡で確認されている。塚原台地では、権現社遺跡[註1]、西原遺跡[註2]などで検出例がある。いずれも単発的に検出されている。

(2) 編　年

55年度調査区出土の弥生土器は、Ⅰ式を上限とし、Ⅶ式を下限とする。その間、前期から後期におよぶ5様式が存する。これらは、相互間の共通性によって、3群に大別することが可能であり、それらには、時期差及び地域差が考えられる。ここでは、これらの土器群の特徴を述べ編年を試みたい。ただ本遺跡より出土した土器は、出土点数が僅少であるために、全組成を把握することは不可能であった。したがってここでは、出土量が最も多い甕をその指標として編年を行う。

Ⅰ群　Ⅰ群は、口縁端部或いは直下に刻み目突帯をほどこす土器であり、Ⅰ式・Ⅱ式がこれに含まれる。いずれもその形態上から、城ノ越式[註3]以前に比定される。

Ⅱ群　Ⅱ群は、所謂T字形の口縁を有する土器群であり、Ⅲ式・Ⅳ式がこれに含まれる。いずれも中期に比定される土器であり、Ⅲ式が須玖式[註4]もしくは高三潴式[註5]に相当する。甕棺も同期と考えられる。

Ⅳ式は、黒髪式に相当する土器であり、Ⅲ式とほぼ同時期と考えられる。Ⅲ式が福岡平野にその中心をもつのに対し、Ⅳ式は、熊本平野にその中心をもっており、菊池川流域では、黒髪式と須玖式を組合せた甕棺も検出されている[註6]。

Ⅲ群　Ⅲ群は、所謂くの字形口縁を有する土器群であり、Ⅴ式からⅦ式がこれに含まれ、Ⅴ式→Ⅵ式→Ⅶ式の編年が考えられる。これらはその底部形態から黒髪式を踏襲したとする考え方[註7]が一般的である。

Ⅴ式に相当する土器を出土する遺跡として、下南部遺跡[註8]、秋永遺跡[註9]がある。

Ⅵ式に相当する土器を出土する遺跡として、石原亀甲遺跡[註10]、宮山遺跡[註11]がある。

Ⅶ式に相当する土器を出土する遺跡として、陣内遺跡[註12]、西弥護免遺跡[註13]、諏訪原遺跡[註14]などがある。　（清田）

註

註1　第1表周辺遺跡地名表参照。

註2　註1に同じ。

註3　中期初頭に位置づけられる。
乙益重隆『弥生式土器集成―九州―』1964

註4　中期中葉に位置づけられる。

註5　中期中葉から後葉に位置づけられる。

註6　鹿央町吉井原遺跡、同早馬塚遺跡などに例がある。

註7　乙益重隆『弥生土式土器集成―九州』1964

註8　広瀬正照・大城康雄『下南部遺跡調査報告書』1979

註9　緒方勉「黒髪式土器雑考―甕形土器の底部変化をもとにして―」『谷頭遺跡』1978

註10　1976年発掘調査、弥生時代後期の住居址が検出された。

註11　緒方勉『宮山遺跡』1971

註12　清田純一『陣内遺跡』1982

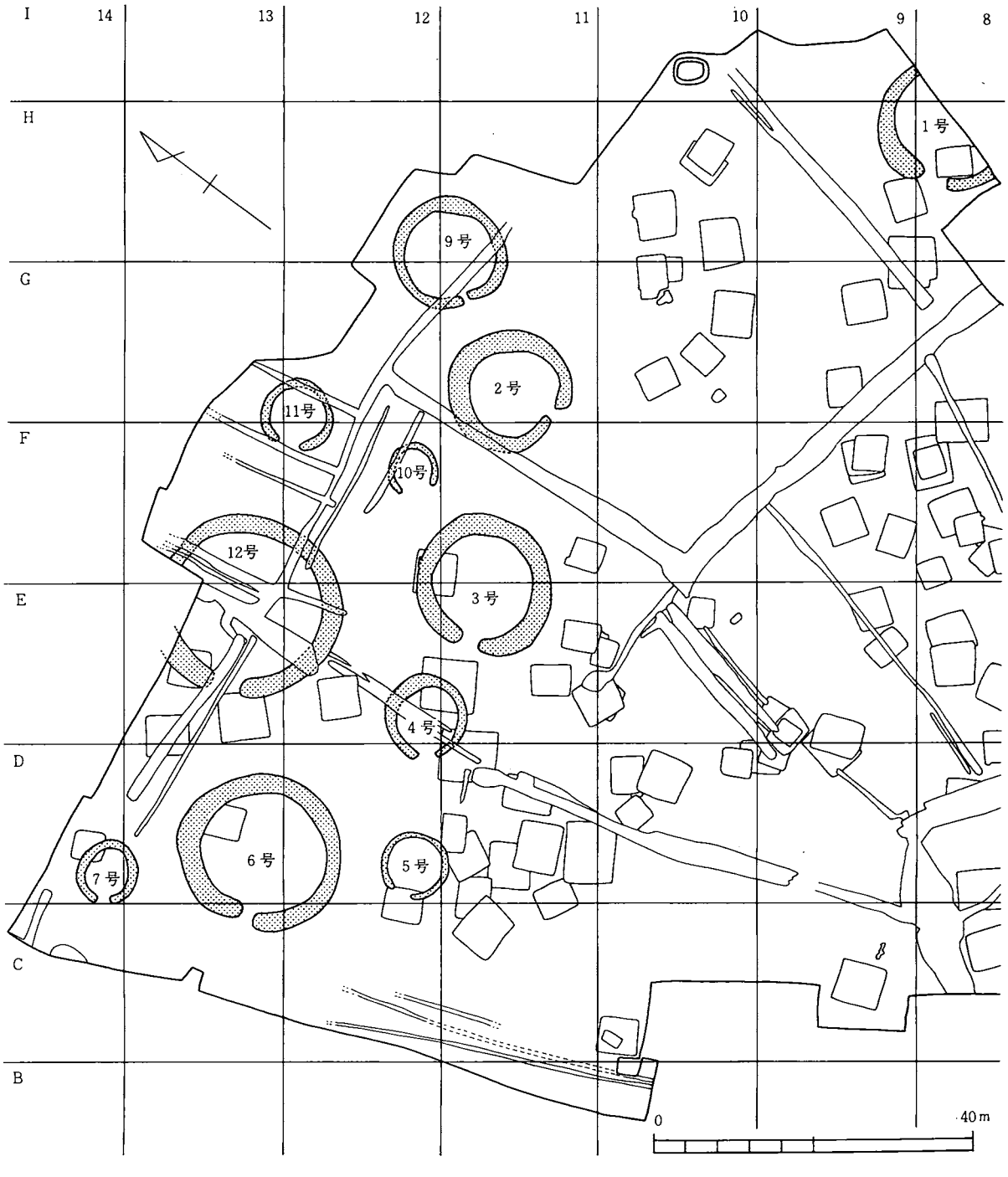
註13　瀬丸敬二他『西弥護免遺跡概報』1980

註14　緒方勉他『諏訪原遺跡調査概報』1971

第４節　塚原古墳群（上の原支群）の調査

１．古墳の配置と調査方法

(1)古墳の配置と旧状（第92図）



第92図　古墳配置図

55年度調査区の西北端部の東西約140m、南北約50mの範囲に11基の円墳が検出された。2～12号墳の10基は4～10mの間隔をもって一群をなし、その群から約50m離れて1号墳がある。全体の配列は、東西に帯状に分布している。各古墳は切り合うことなく、一定の間隔とある程度の方向性をもって築かれている。

古墳が占地する一帯はほぼ平坦な地形であるが、耕作等の関係でわずかな起状がみられ、周溝確認面での標高は32～33.40m前後を測る。

調査区一帯の旧状はほぼ平坦な畑地で、古墳の残丘などは観察されなかった。53年度の試掘でも古墳の存在は予測されておらず、古墳の存在が明らかとなったのは、55年度調査もかなり進んだ55年9月であった。

以前、畑の耕作中に石棺が出土したとの伝聞があり、排土の処理先、調査範囲を確定する目的もあって、再度調査区周辺部の試掘を行ったところ、試掘溝に古墳の周溝が検出され、その存在が確認されたものである。

古墳はすべて地表下に埋没しており、墳丘および主体部の大部分は削平され、周溝と主体部の痕跡を残す状態であった。さらに、縦横に掘られた中世以降の溝、ゴボウ等の耕作等によって随所に攪乱を受けており、総じて遺存状態は良くない。

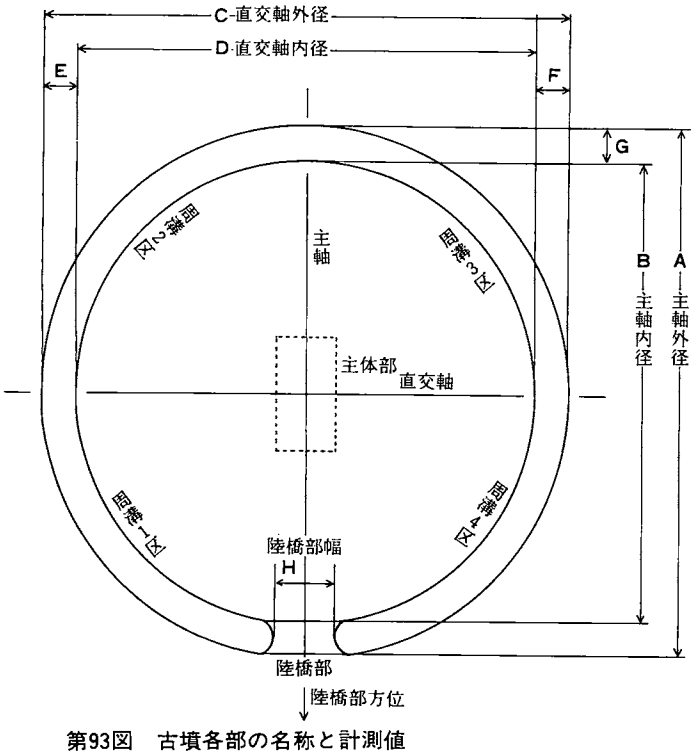
(2)調査方法(第93図)

55年9月の周辺部試掘によって古墳の周溝が検出されたため、その範囲を確認した上で調査区を拡大し、表土剝ぎを行った。古墳は地表下40～70cmに埋没しており、第Ⅲ層上面までは重機による排上を行った。

第Ⅲ層上面を清掃すると古墳の輪郭が確認でき、陸橋のほぼ中心を貫く主軸を設け、それと直交する軸とによって古墳を4分割して調査を進めた。各部の名称、計測値等は第93図に示すとおりである。

古墳は東から西へ発見順に号数を付けた。8号墳は当初周溝のごく一部が確認された状態で命名したが、拡張して精査した結果、古代の墳墓と判明したので欠番とした。したがって、1～12号墳と呼称する古墳の総数は11基である。

(松本)



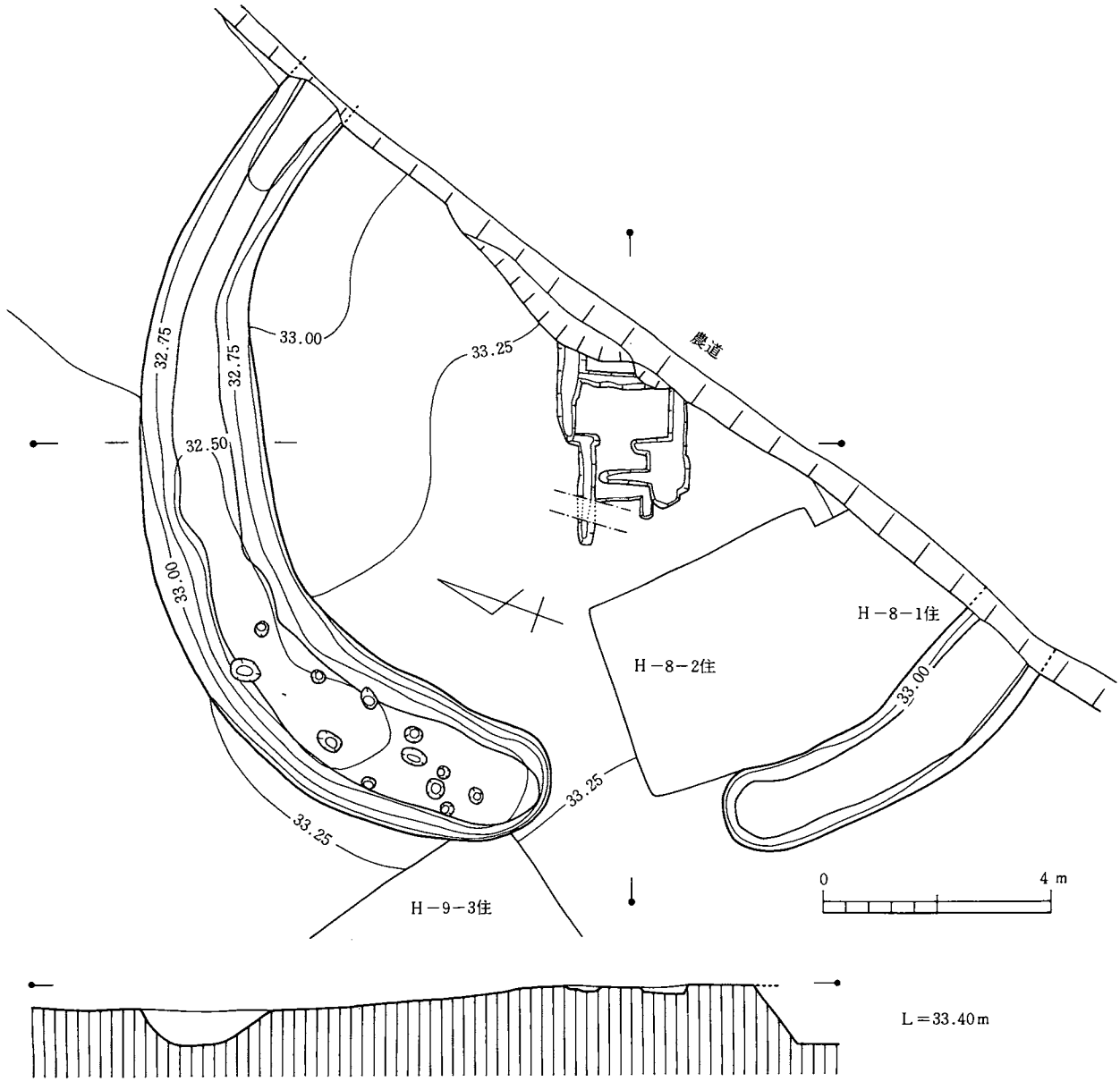
第93図　古墳各部の名称と計測値

2．1号墳

(1)墳丘・周溝(第94図)

1号墳は東側を農道によって切断され、その東側は調査区外にあるため未調査である。陸橋部付近にはH－8－1・2住、H－9－3住が重複している。

周溝外径は14m前後を測る中型の円墳で、平面形はやや不整な円形である。周溝幅は削平の度合などによって不均一で、1.3～2.7mと差があり、深さも30～100cmと差がみられる。周溝1区と4区はほぼ同レベルで確認、検出しているので、本来広狭、深浅の差があったものであろう。



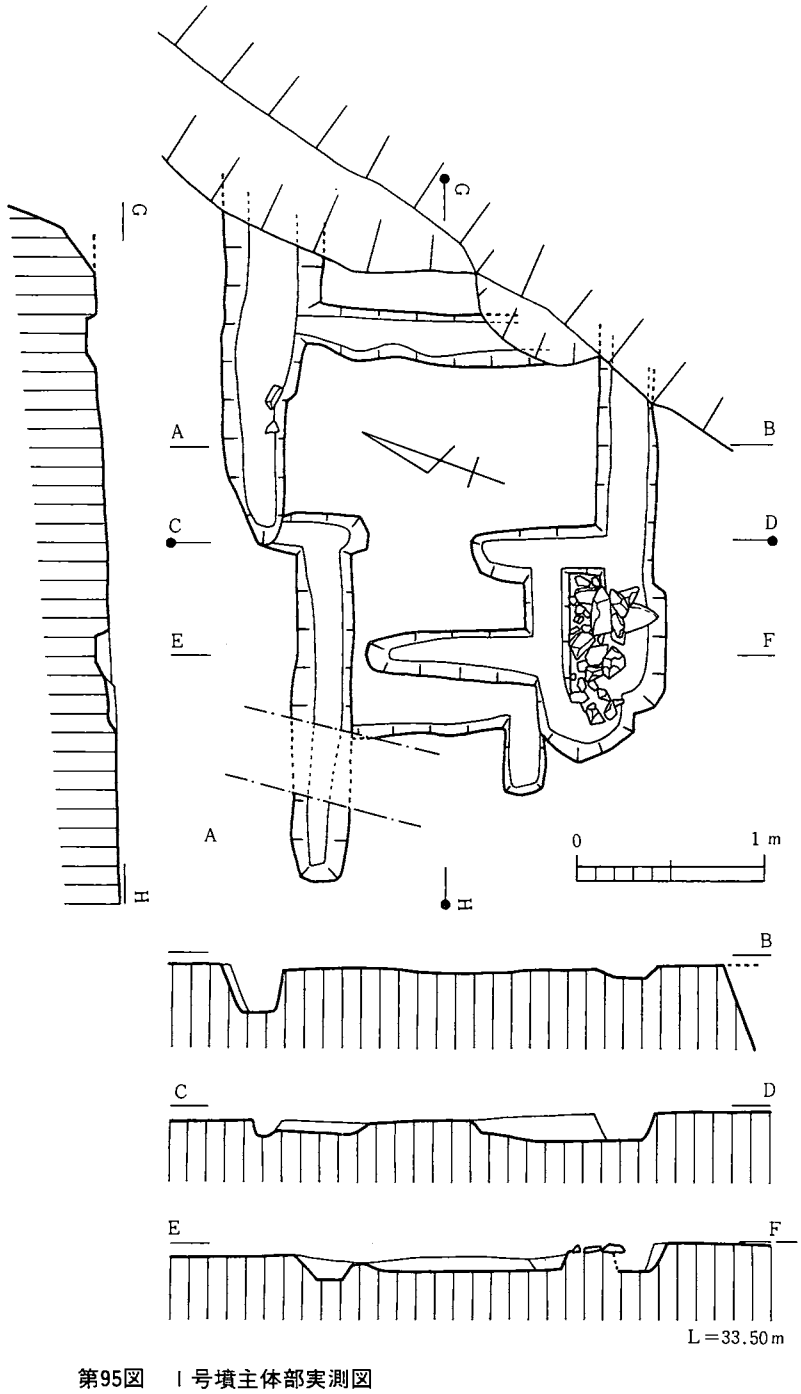
第94図　1号墳墳丘実測図

周溝の断面は逆梯形を呈し、周溝内堆積土は6層に区分できた。1層は黒褐色土で、2層は暗褐色土である。2層は下部になるにしたがって色調が明るくなる。古墳に伴う土器類はすべて1・2層からの出土である。3層は明褐色土で、周溝1区の陸橋部付近にとくに厚く、上面はやや硬化していた。4層はニガ土を含む暗褐色土で、5層はローム粒を含む褐色土、6層はロームを多く含む明褐色土である。4～6層は周溝掘削時、若しくは直後の堆積土と考えられる。

(2)主体部（第95図）

墳丘のほぼ中心部に掘方が検出されたが、掘方の一部は農道によって削平されており、全形を知り得ない。掘方の溝は幅・深さとも20～40cm前後を測り、中から多くの凝灰岩片を検出した。

この掘方から想定される主体部は、第一に横口式石棺であり、他の諸例からみて棺蓋は家形を呈するものであろう。石棺の幅は1.5m前後と推定され、かなり大型の石棺となる。棺の前面、陸橋部の方向には羨道状の立石を備えていたものと考えられる。他に考えられるのは、塚原古墳群中のくぬぎ塚古墳タイプの横穴



第95図　1号墳主体部実測図

式石室がある。くぬぎ塚古墳石室は遺存状態が悪く、細部については不明であるが、石障状の腰石の上に小口積みに周壁を積んでいる。使用石材は凝灰岩が多く、玄室内法は幅1.6m、長さ3mと考えられている。石室が盛土中に築かれていることは1号墳とは異なる。

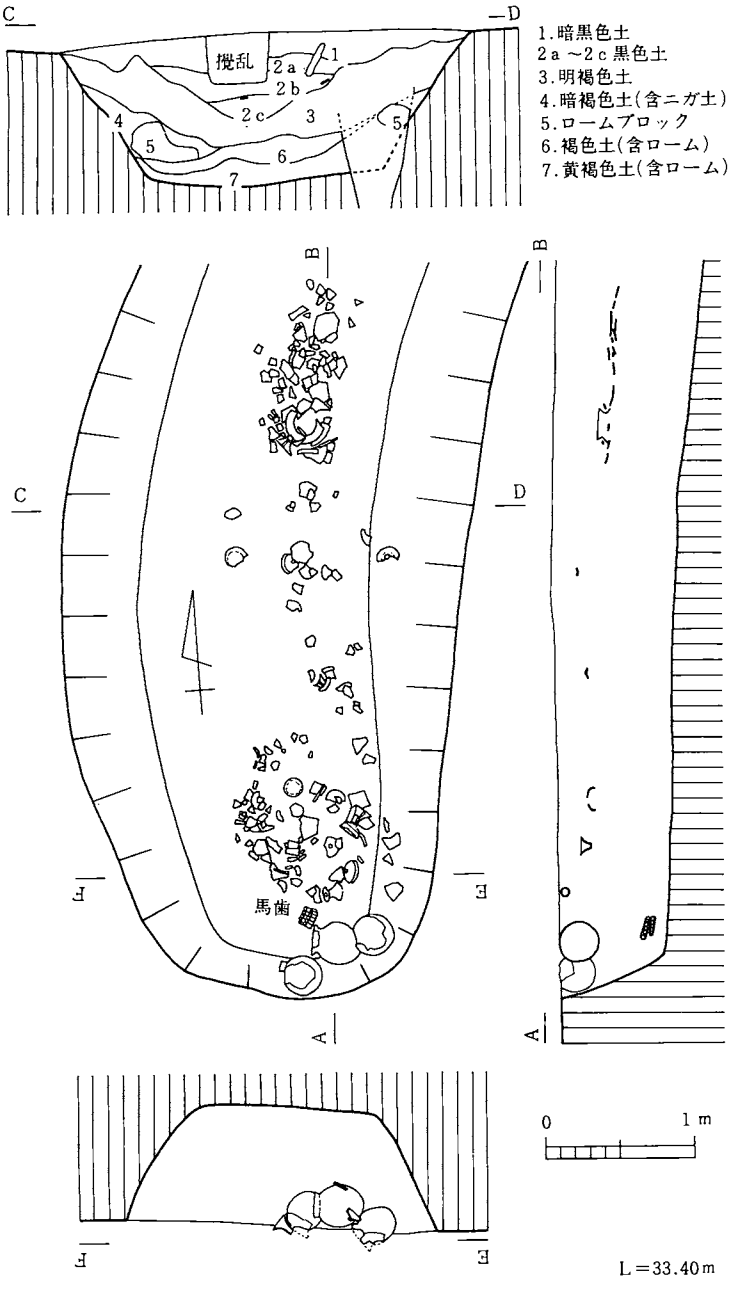
以上のように、1号墳の主体部としては横口式家形石棺、くぬぎ塚古墳タイプの石室の両者の可能性が考えられるが、掘方の配置、石棺又は石室が基底面（Ⅲ層）に掘り据えられていること、及び調査者の主観的判断から横口式家形石棺と考えたい。棺材は掘方内より多数の凝灰岩片が出土しており、他の横口式家形石棺と同様、凝灰岩と考えられる。

(3)遺物の出土状態（第96図）

出土遺物はすべて周溝内から出土したもので、須恵器・土師器・玉類・鉄器が出土している。土師器は住居址に伴うものの混入が多く、住居址と重複している周溝4区から多く出土している。その他、周溝4区から管玉が1点出土した。

古墳に伴う遺物のほとんどは周溝1区から出土した。1区の遺物は1・2層中に含まれている。陸橋部のすぐ横には土師器の甕が3個並べられ、そこから2区の方向へ須恵器を主体とする土器群が雑然と出土した。土器には完形品もあるが、土師器甕以外は廃棄された状態である。土器群の2区寄りには、須恵器の大型甕が口縁部を下にして破砕されていた。土器に混じって、鉄器（鉄鏃・刀子）・ガラス製丸玉が出土した。

周溝1区の陸橋部横から馬歯が出土した。6・12号墳でみられるような土壙はなく、周溝内に直接埋納したものである。馬歯は周溝底から10～15cm上のレベル、5層中に含まれている。周溝内堆積土の3層はとくに1区で厚く、他の区ではきわめて少ないことから、この3層は周溝に納めた馬を埋めるための人為的な埋土と考えられる。3層上面が固化していたことも、このことを裏付けるものであろう。このようにみると、馬の埋納は古墳築造直後、あるいは初葬時に行われたと考えられる。（森山栄一・松本）



第96図　Ⅰ号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態実測図

(4)出土遺物

すべて周溝内から出土したもので、須恵器、土師器、玉類、鉄器がある。土師器は住居址から混入したものが多く、古墳に伴うものはきわめて少ない。

須恵器（第97・98図１～32）

器種としては蓋杯、高杯、坩、短頸壺、甕があり、同一器種の中でも形態差がみられる。量的には蓋杯、高杯が多い。

杯蓋（１～５）のうち、１は周溝１区の１層からの出土であるが、１点だけ古式（第１様式）の様相を呈している。他にはこれに対応するものはなく、出土状態とも合せて混入の疑いが強い。

２～５は同様の器形で、口径13.5～14.2cmを測る。天井部と体部の境はわずかに稜をなすが、稜は丸味を帯び、稜の下を押圧することによって効果を高めている。口唇部には段が付くが、その段も弱い。

杯身（12～14）は蓋（２～５）に対応するもので、口径11.8～12.1cm、器高4.5～５cmを測る。体部にはわずかに丸身を残し、立上りも1.5cm前後の高さをもつが、立上りは内傾し、先端部は丸く仕上げられている。

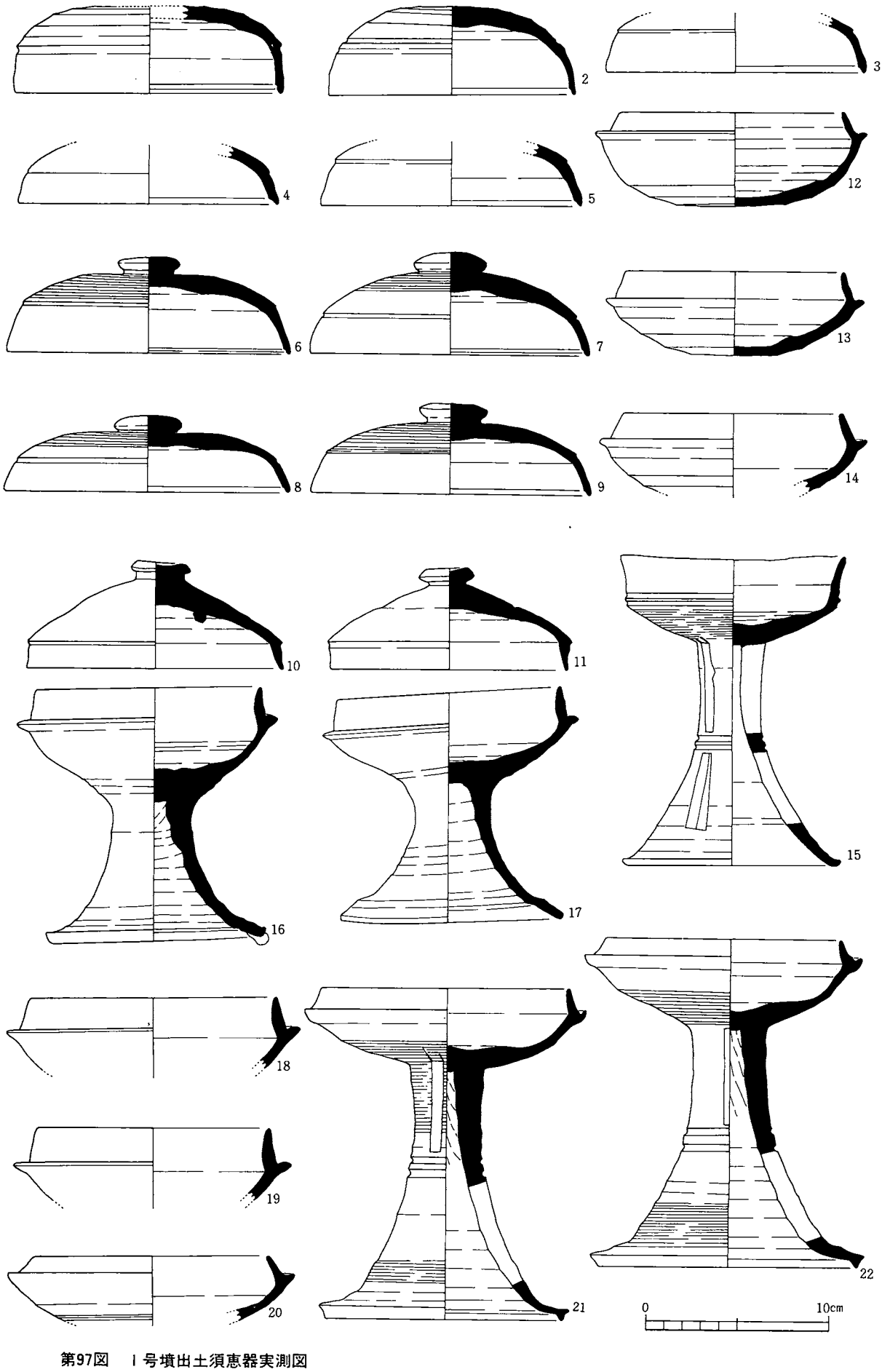
６～11は有蓋高杯の蓋であるが、６～９、10・11の２種に分類できる。６～９は大型のつまみを有し、口径は15.2～15.4cmを測る。天井部には強いカキ目を施している。外面には薄く自然釉が付着し、黒色に発色している部分がある。器形、焼成などきわめて類似しており、同一窯での生産と考えられる。

10・11は他とはまったく異った器形、焼成で、銀灰色に発色している部分がある。頂部がわずかに窪むつまみを有し、天井部は比較的直線的に傾斜し、直角に折れて体部へと続く。天井部の器壁はきわめて厚く、内外面とも横ナデ、ナデ調整である。

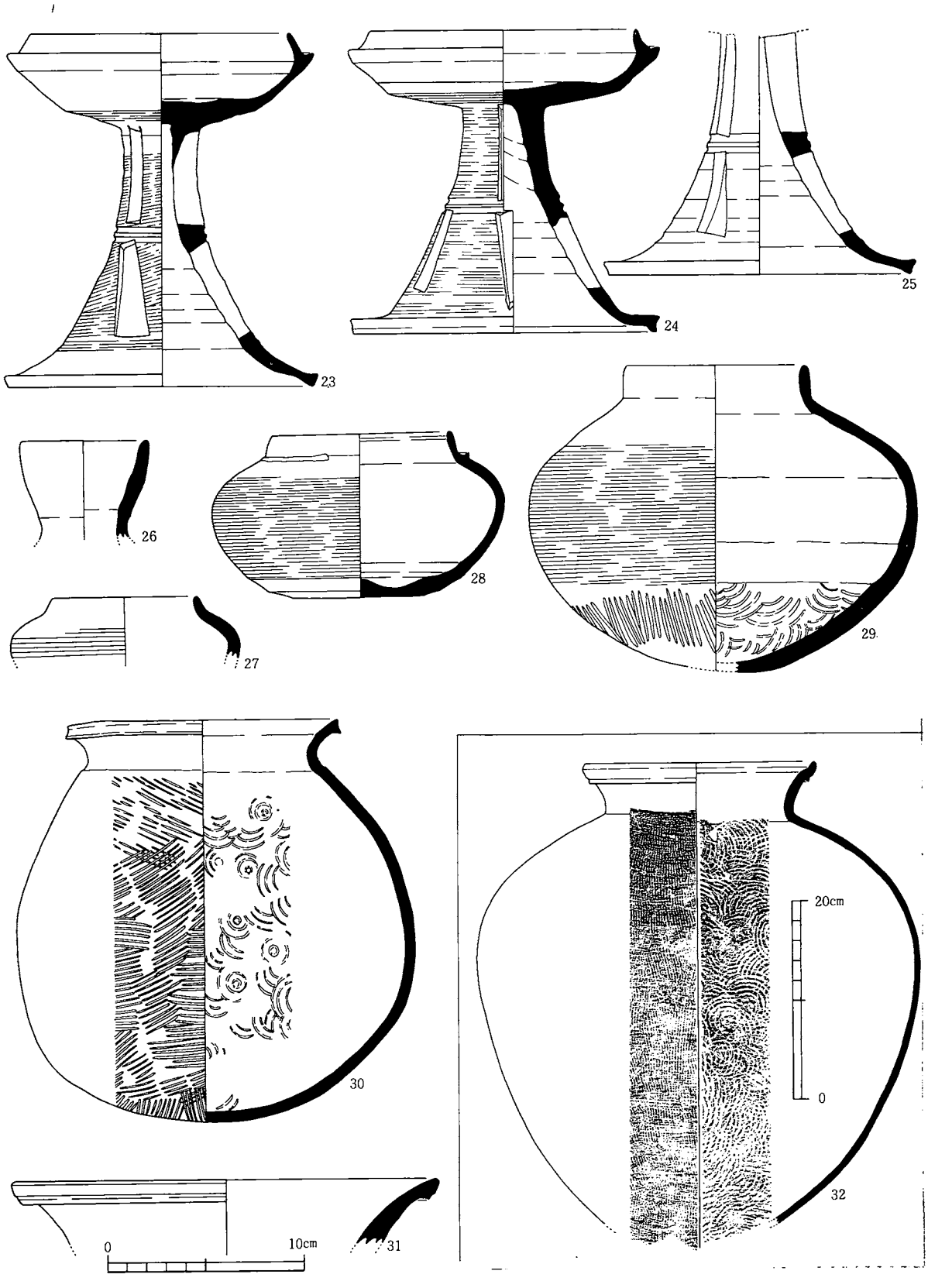
高杯には無蓋高杯（15）と有蓋高杯（16～25）がある。有蓋高杯は形態（とくに脚部の形態）により４種類に分類される。

無蓋高杯（15）は杯部が大きくひずみ、焼成が悪くて軟質である。長脚二段透しで、透し窓は上下段とも三方にある。

16・17は10・11とセットとなるもので、焼成や色調が同一である。立上りは垂直に近く、脚部は大きくラ



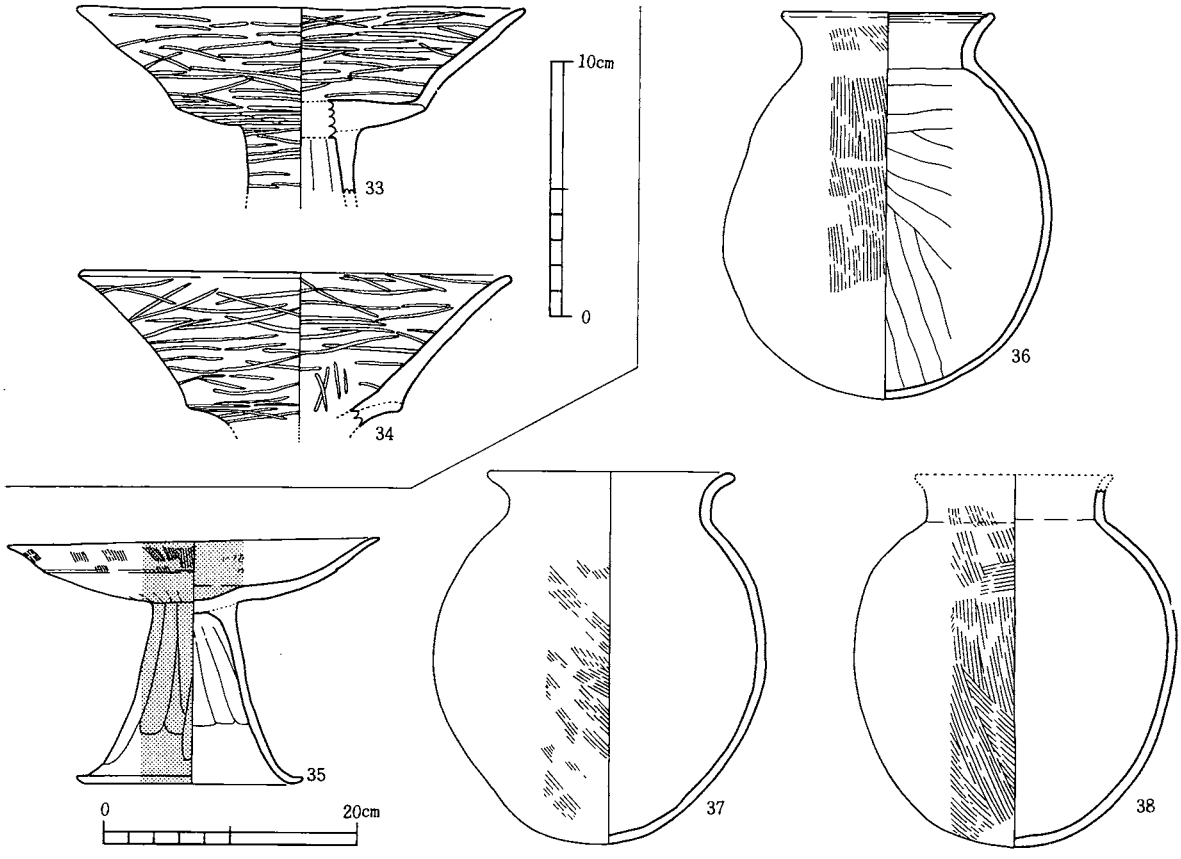
第97図　1号墳出土須恵器実測図



第98図　1号墳出土須恵器実測図

ッパ状に開く。18・19は同種の高杯の破片で、各々約1/3大の破片である。16・17はほぼ完形品であり、18・19は器形、色調がわずかに異なるので、4個体が存在したことになる。

21～25は長脚二段透しの有蓋高杯である。21・22は上下段とも二方に長方形透しをもち、上下段の透しは千鳥に配している。杯部の器形もきわめて類似している。



第99図　1号墳出土土師器実測図

23・25は上下段とも三方に透し窓があり、上段のものは長方形、下段のものは梯形である。24は上段二方、下段四方に長方形透しがある。21～25は透し窓の形態などに相異があるが、杯部の器形や焼成、色調はきわめて類似しており、同時期と考えられる。

26は提瓶の口縁部砕片で、復原口径は6.6cmを測る。胴部は細片がわずかに見られるにすぎない。

27・28は坩で、29は短頸壺である。27は小破片からの復原で、口径7.4cmを測る。28は口径9.2cm、器高8.4cmを測り、蓋を重ね焼した痕跡がある。29はほぼ完形品で、胴部外面の中位はカキ目の上を横ナデし、外底部には平行叩き目が残る。

30は下ぶくれの胴部で、胴部外面には細い平行叩き目の上に部分的なナデ調整が行われているが、ほぼ全面に叩き目が残っている。わずかにひずみがあるが、口径約14cm、器高20.4cmを測り、底部は不安定な丸底である。32は大型の甕で口径23cm、胴部最大径約45cmを測る。周溝1区から破砕して出土したが、図示した部分の約8割を復原することができた。その他、甕の破片は多数出土しており、叩き目などの相異から数個体分が認められる。

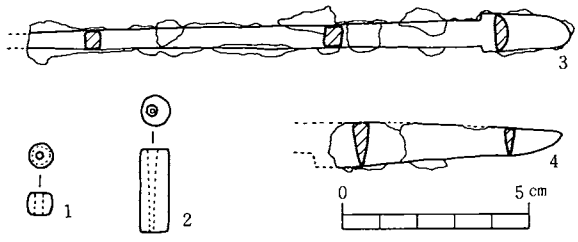
土師器（第99図33～38）

古墳に伴う土師器はきわめて少なく、破片を含めても10個体程度である。

33・34は高杯で、杯部内外面には雑なヘラミガキが施されている。整形、調整ともに雑で、供献用の儀器と考えられる。胎土、焼成は良く、色調は淡赤褐色を呈する。

35は大型の高杯で、杯部口径約29cm、器高19cmを測る。杯部は浅く、皿状を呈する。杯部内外面、脚部外面には赤面顔料が塗布されている。

36～38は胴部下半に煤が付着し、煮沸に使用したものを供献している。器形の細部には相異があるが、出



第100図　1号墳出土玉類・鉄製品実測図

土状態から一括遺物と考えられるものである。3個体とも造りが雑で、器壁も厚い。36は胎土は良く灰褐色、37・38は胎土に砂粒を含み、暗赤褐色を呈し、二者は内面調整の方法も異なる。（松本）

玉類（第100図1・2）

ガラス製丸玉と碧玉製管玉が各1点出土した。1は長さ6㎜、径7㎜前後を測り、上下の平坦部はやや丸味を帯びる。色調は青色で、透明感がある。2は長さ22㎜、径7.5㎜前後で、主に片側からの穿孔である。碧玉特有の濃緑色を呈する。（田尻）

鉄製品（第100図3・4）

3は片丸造鏨箭式の長茎鏃で、遺存長は14.4cmを測る。茎の先端は折れており、篦被ぎの有無は不明である。4は刀子で、茎の部分は欠失している。遺存長6.2cm、厚さは3～4㎜を測る。この他にも鉄器の断片が数点出土しているが、細片である。（松本）

3．2号墳

(1)墳丘・周溝（第101図）

周溝の西側を深い溝によって切られているが、その他の部分の周溝は比較的良く残っている。墳丘の中心部はわずかに小高くなっているが、周溝の北側部分は深く削平を受けている。

周溝外径は14.85～15.80mを測る中型の円墳で、平面形はやや不整な円形を呈している。周溝幅は周溝1・4区では1.4～1.7mであるが、2・3区では2.15～2.88mと広い。深さも2・3区が深く、1・4区は浅い。周溝の断面は逆梯形を呈し、外側に比べて墳丘側の法面の傾斜が緩やかである。

周溝内堆積土は5層に区分できた。1層は黒褐色土で、遺物を多く含み、粘性に欠けている。2層は褐色土で、地点によって厚薄の差がある。3層は暗褐色土で、ほぼ全域に20～30cmの厚さでみられた。4層は褐色土であるが、2層に比べると粘性が強く、部分的に凝灰岩の細片を含んでいる。このことから、4層は主体部を構築する段階での堆積物と考えられる。5層はロームの再堆積土で、掘削時に掘残されたものであろう。周溝底は浅い所ではⅤ層（ニガ土）までの掘削であるが、大部分はⅥ層（ローム）まで達している。

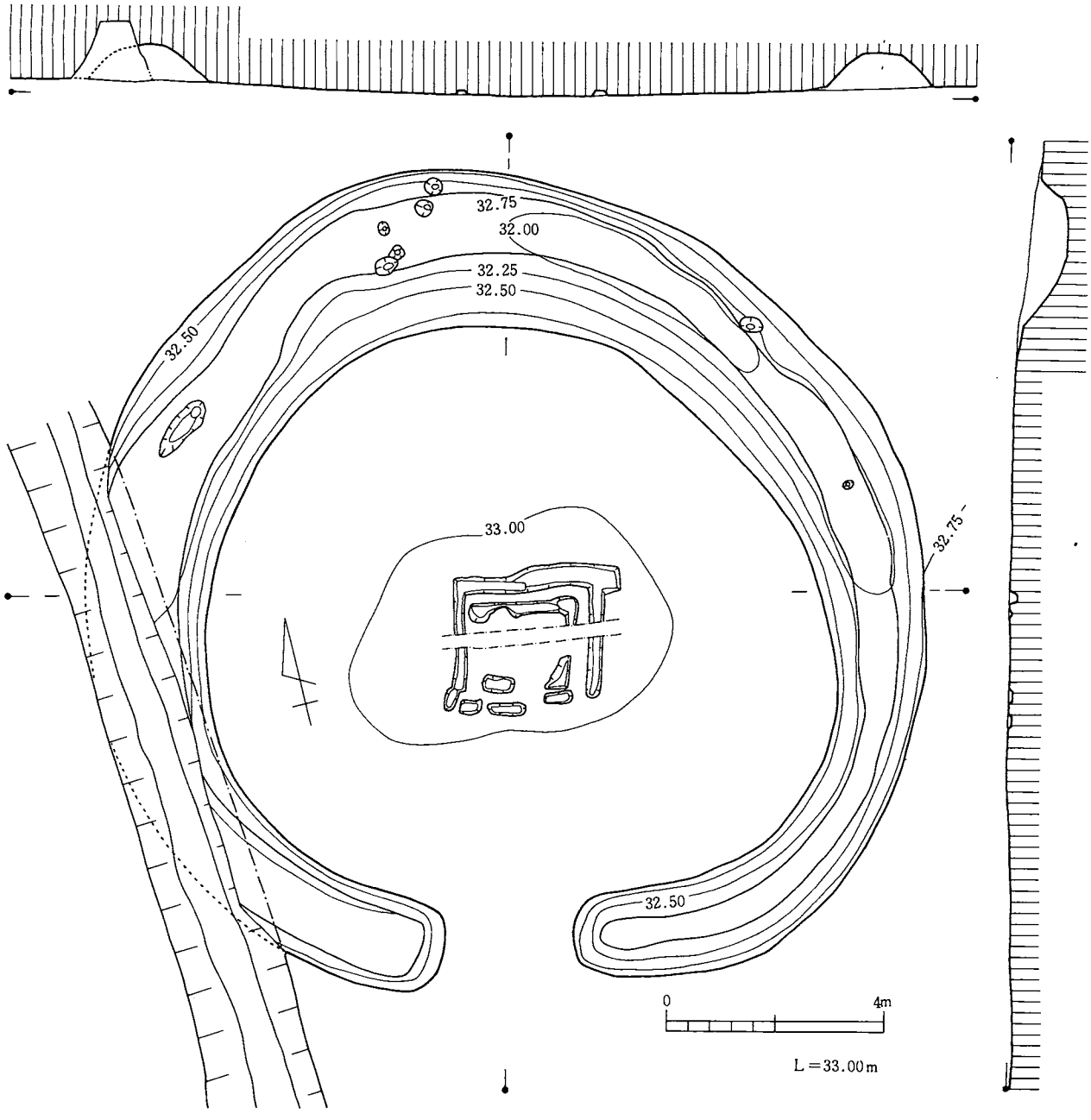
(2)主体部（第102図）

主体部自体は削平されて残っていないが、墳丘の中心部からやや陸橋部寄りに主体部の掘方が検出された。

掘方の外形は略方形で、西側を除いて二重に溝が巡っている。外側の溝は東・北・西側では連続しているが、南側では断続的である。内側の溝も北側を除いて断続しており、西側にはみられない。掘方の幅は16～40cm、深さ6～15cmを測り、部分的に凝灰岩の破片がみられた。

主体部の構造は、掘方の形状・規模からみて石棺ではなく、横穴式石室であったと考えられる。

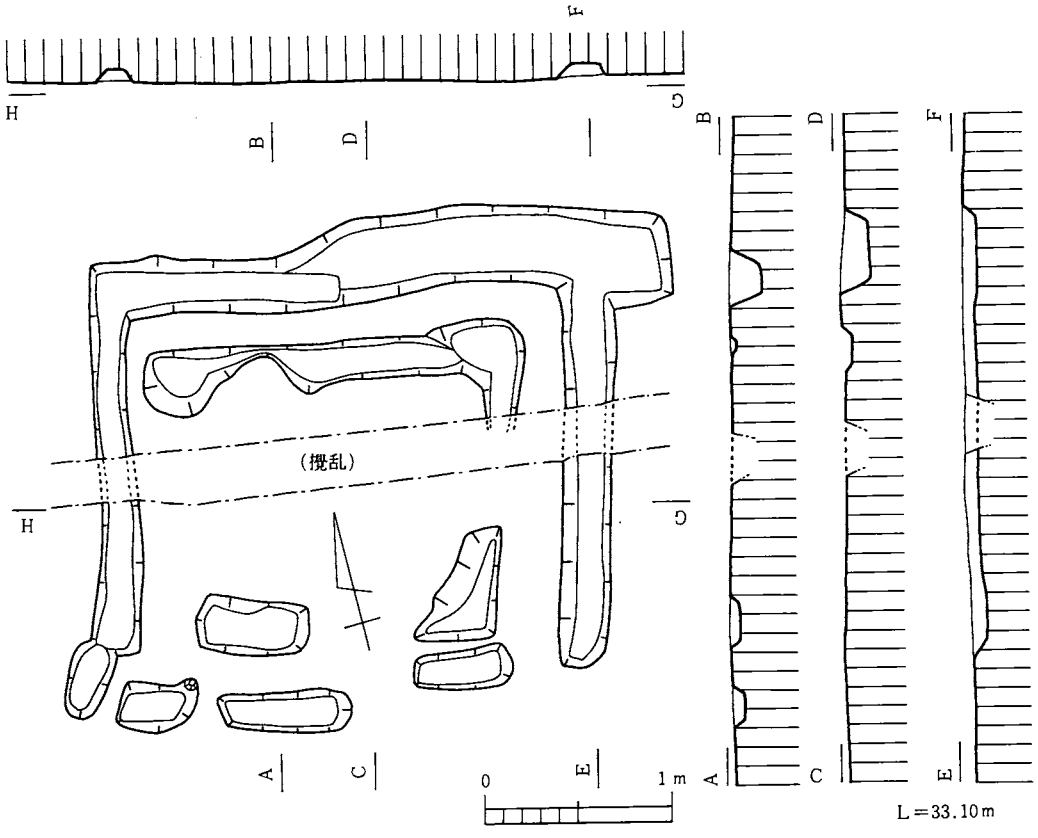
塚原古墳群中、石室を主体部とする古墳はくぬぎ塚古墳、将軍塚古墳の2例が知られている。前方後円墳



第101図　2号墳墳丘実測図

の花見塚古墳も横穴式石室であったというが、構造などは不明である。くぬぎ塚古墳の石室は前述したような長方形プランで、他地域には類例の少ない石室である。将軍塚古墳の石室は後述（第5章第3節）するように、方形プランの石障系石室で、石障の内法で1.7m前後を測る小型の横穴式石室である。石室の平面形は一辺約2.0m前後のほぼ方形を呈し、周壁に沿って石障を巡らし、石障区画内は石室主軸に平行して2区に区分されている。周壁は安山岩板石を小口積みにし、石障の高さまでは垂直に近いが、その上部は穹窿形に持送っている。

2号墳の場合、外側に巡る溝の内法が東西2.2～2.3m、南北1.9m前後である。二重に巡る掘方から、内側のものを石障の掘方、外側のものを側壁の掘方とも考えられる。その場合、石障で区画される空間が狭すぎる感がある。くぬぎ塚古墳様の石室構造とすれば、内側の掘方の解釈に苦しむ。南側の掘方の断続、陸橋部の方向などから、羨道は南側に開口していたことは肯首できるが、具体的な構造については不明とせざるを得ない。掘方内、周溝内から凝灰岩片が出土しており、使用石材に凝灰岩が含まれていたことが窺える。



第102図　2号墳主体部実測図

(3)遺物の出土状態（第103図）

周溝1区のほぼ中間地点から、須恵器と土師器がまとまって出土した。大半は須恵器で、土師器は数点にすぎない。完形品は皆無で、すべて破砕されており、1層からの出土である。遺物群の西側は溝によって切られているため、全体の配置状態については不明であるが、遺存している部分についてみる限り、墳丘方向から転落したものが多いようである。

周溝1区の陸橋部近くから管玉と凝灰岩片が出土したが、これらは主体部の破壊に伴って移動したものであろう。

その他、周溝の各区から土師器片と凝灰岩片が出土している。2号墳自体は住居址との重複はないが、これらの土師器は住居址に伴うものの混入である。

(4)出土遺物

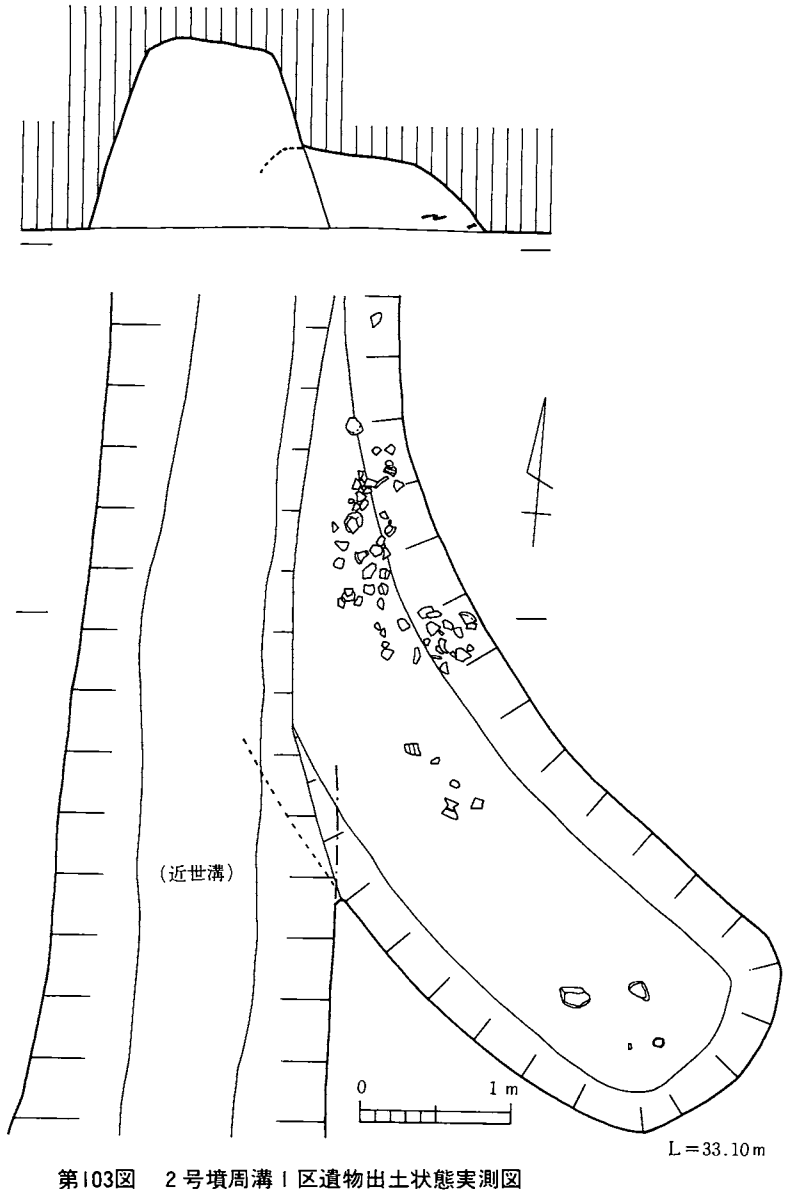
すべて周溝内から出土したもので、須恵器、土師器、玉類、鉄器があるが、量は少ない。

須恵器（第104図1～19）

蓋杯、高杯、器台、甕、台付長頸壺があるが、完形品は1点もなく、すべて破損している。

杯蓋（2～4）には形態差がみられる。2は復原口径12.7cm、器高5.6cmを測る。天井部の約3/4はヘラ削りされているが、体部との境の稜は丸味を帯びている。

杯身（5～9）にも形態差があり、5～8は蓋の3に、9は4に対応するものであろう。



第103図　2号墳周溝1区遺物出土状態実測図

高杯には有蓋高杯と無蓋高杯とがある。有蓋高杯の蓋（1）は頂部が扁平なつまみを有し、内面には暗緑褐色の自然釉が濃く付着し、外面は黒色に発色している部分が多い。有蓋高杯（10・11）は長脚二段透しで、上下段とも三方に透し窓がある。外面には蓋と同様の自然釉が付着し、黒色に発色している部分も多い。この特色は1号墳出土の有蓋高杯にもみられ、同一生産地の可能性が強い。

12～14は無蓋高杯である。13は12に比べて杯底部と体部の境が明瞭である。14は小型の脚部で、脚下端は段をなして大きく横へ開いている。

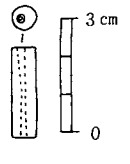
器台（15～17）はいずれも細片であるが、器形や焼成などからみて同一個体と考えられる。

18は復原口径14.6cmを測る小型の甕で、内外面とも横ナデ調整である。色調は灰色の部分が多いが、部分的には黒色に発色している。

19は口頸部、胴部、脚部が直接には接合しないが、器形や焼成からみて同一個体とみてよい。いずれも焼成が悪く、軟質の淡灰色を呈している。口頸部は約1/3大、胴部は約1/4大の破片である。脚部はほぼ完形で、三方に三角形の透し窓がある。（松本）

玉　類（第105図）

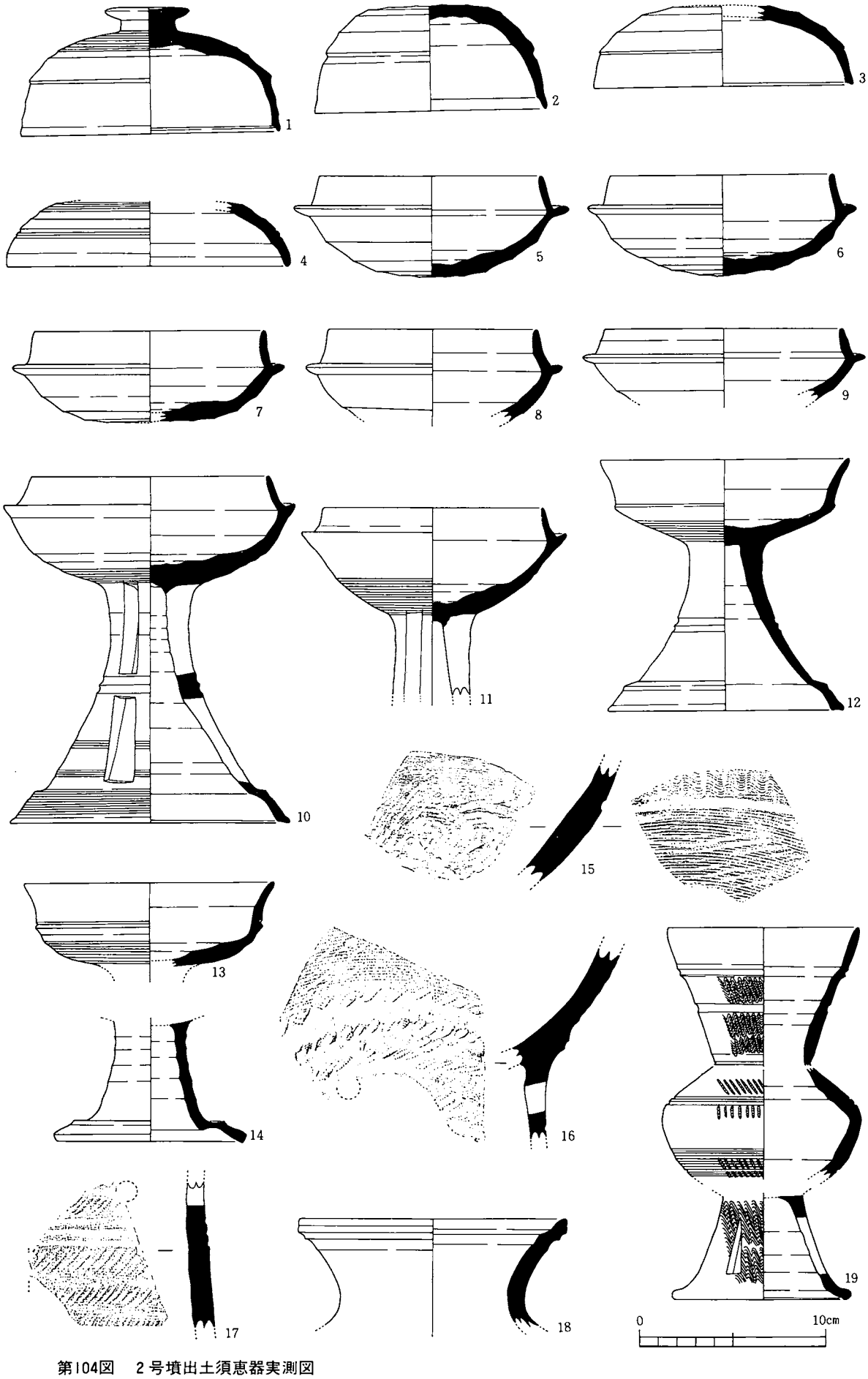
周溝内から碧玉製管玉が1点出土している。長さ24㎜、径6㎜、孔径2㎜前後で、両側穿孔である。表面は酸化が進み、白緑色を呈している。（田尻）



第105図
2号墳出土
玉類実測図

鉄製品

鉄鏃か刀子の破片と思われるものが2～3点出土したが、細片のため詳細については不明である。（松本）



第104図　2号墳出土須恵器実測図

4．3号墳

(1)墳丘・周溝（第106図）

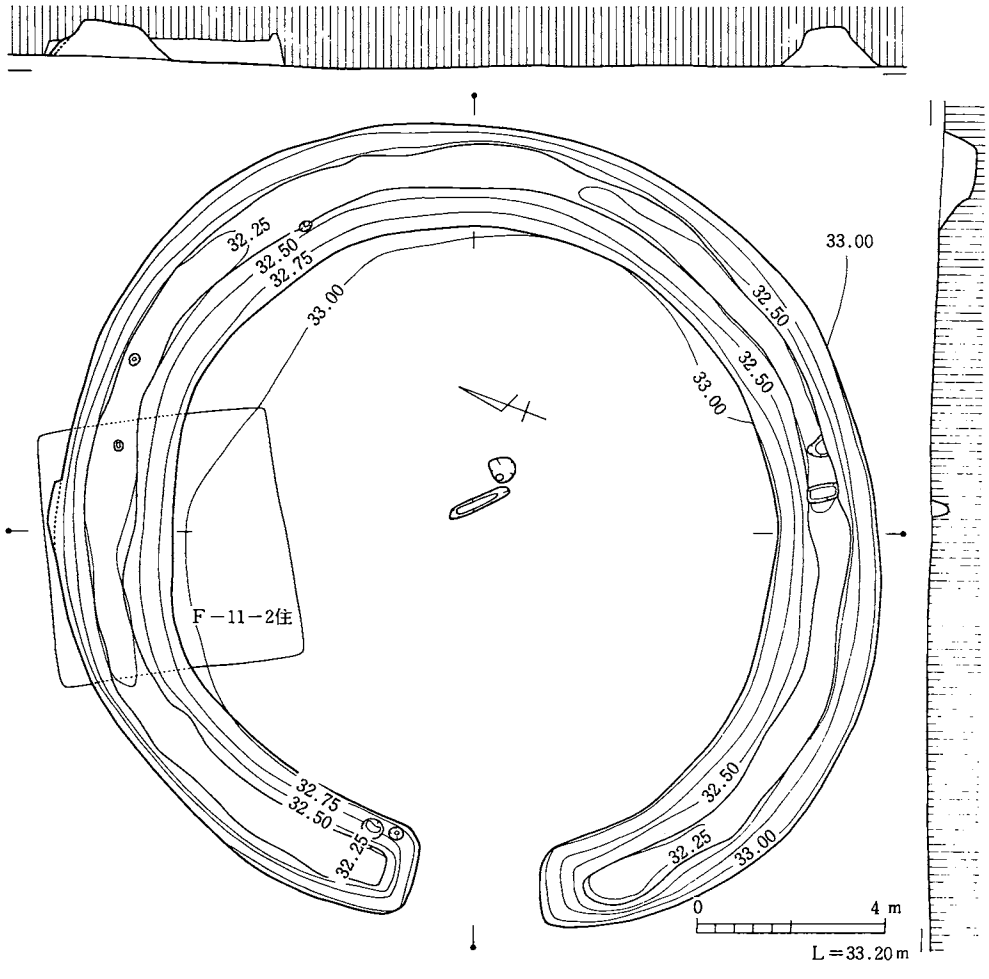
ゴボウの耕作により部分的な攪乱を受けているが、溝などによる大きな攪乱はなく、周溝が良く残っている。周溝外径の最大値18.20m、最小値16.80mを測る中規模の円墳である。全体の形は比較的整った円形を呈し、北西部でF－11－2住と重複している。

周溝の幅は2.0～2.6mを測り、断面はわずかに隅丸の逆梯形を呈する。周溝底にはわずかに高低差があり、深さは65～80cmを測る。

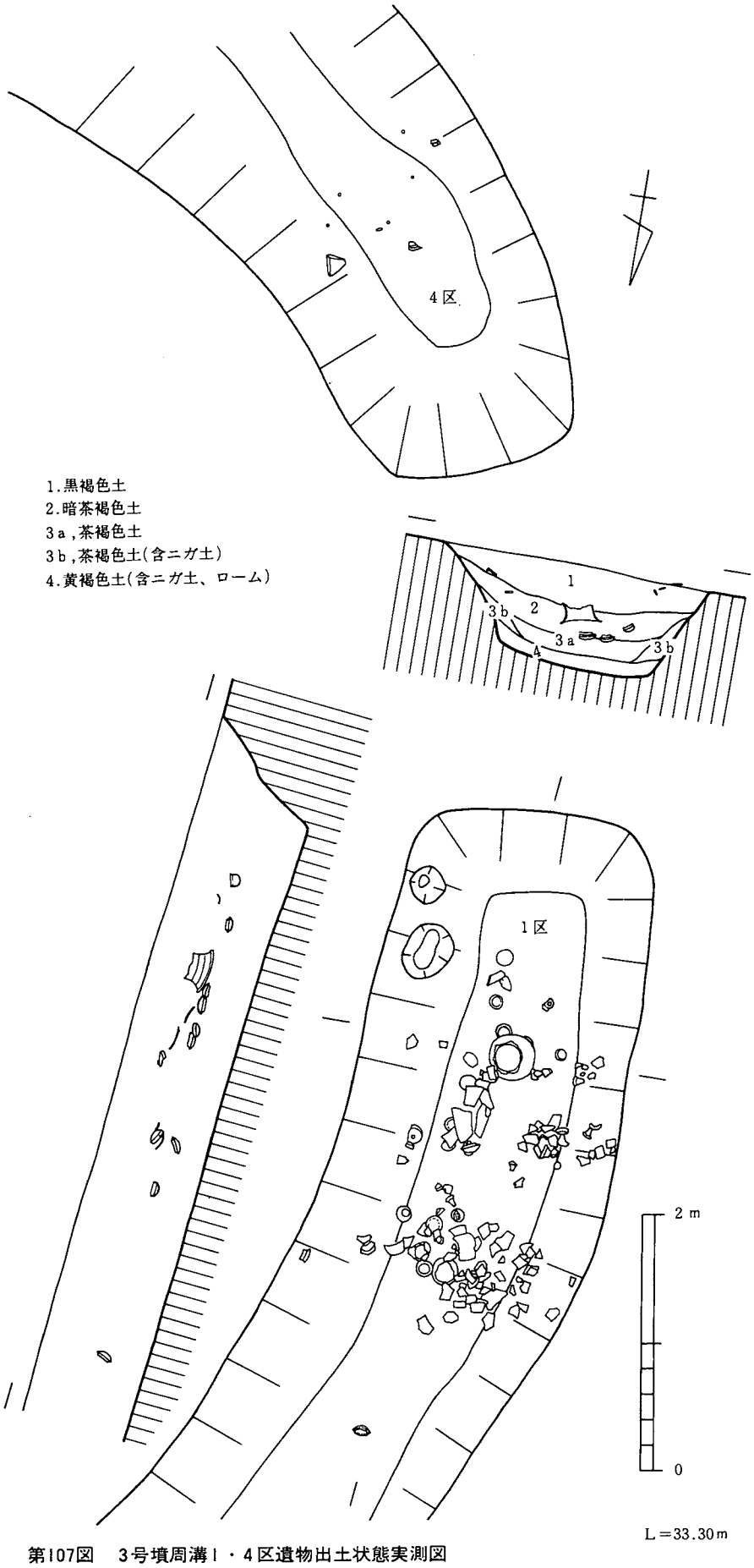
周溝内堆積土は概ね4層に区分できた。1層は黒褐色土で、2層は暗褐色土である。1・2層は類似した土質であるが、1層の方が粘性が弱い。3層はニガ土やロームブロックを含む茶褐色土で、地点によっては2～3層に細分できる。4層はロームを多く含む黄褐色土である。3・4層は周溝掘削時、あるいはその直後に堆積したもので、有機物による汚染や遺物の包含は認められない。

(2)主体部

墳丘部分はすべて削平され、主体部は遺存しない。墳丘のほぼ中心部に2個の掘込みがあり、長楕円形の掘込みの中からガラス製丸玉が出土した。これらは主体部を組込む掘方の一部と考えられるが、全体の配置などについては不明である。周溝1・4区の上層から凝灰岩の破片が数点出土しており、主体部の石材に凝灰岩の使用が窺われる。



第106図　3号墳墳丘実測図



第107図　3号墳周溝1・4区遺物出土状態実測図

(3)遺物の出土状態

（第107図）

周溝内から多量の土器が出土し、出土量は12号墳に次いで多い。これらの土器は他の古墳と同様、周溝1区に集中している。

周溝1区の土器の出土状態は上下2層に分れる。下層のものは2層に含まれるもので、須恵器の蓋杯、甕などが比較的整然と配列されていた。これらの土器は完形品が多く、初葬時に埋置されたものと考えられる。これに対して、上層（1層）の出土状態は散在的で破片が多く、中には墳丘部から転落したと推測されるものも含まれる。

周溝2・3区からは土師器片が出土し、多くはF－11－2住との重複部分に集中していた。これらの土師器は古墳に伴うものではなく、住居址からの混入である。

周溝4区も遺物量はきわめて少なく、総数で10点余である。須恵器の小破片が1点含まれているが、ガラス製丸玉、鉄鏃片、鉄片、凝灰岩片が1層でもかな

り高い位置で出土している。これらの遺物は、主体部の破壊に伴って二次的に移動したものと考えられる。また、攪乱部分から寛永通宝が1点出土した。

前述したように、主体部の掘方の一部からガラス製丸玉が4点出土している。これらの玉類は、周溝4区から出土したものに類似している。

(4)出土遺物

須恵器、土師器、玉類、鉄器、銭貨が出土している。玉類の一部が主体部の掘方から出土した以外は、すべて周溝からの出土である。

須恵器（第108～111図1～46）

今回調査した11基の古墳のうち、須恵器の量が最も多い。器形としては蓋杯、高杯、提瓶、坩、壺、甕がある。

杯蓋（1～12）は6種に分類できる。1～5は口径11.9～12.7cm、器高4.9～5.2cmを測る。天井部の3/4以上がヘラ削りされているが、器壁はいずれも厚い。天井部と体部の境には稜が付くが、やや丸味を帯び、凹線との併用がみられる。口唇部には明瞭な段が付く。7は天井部に扁平化がみられ、体部はやや外開きである。天井部の3/4以上がヘラ削りされ、器壁は薄い。天井部と体部の境の稜は比較的鋭いが、口唇部の段は弱い。8は7に似た器形であるが、口径は15cmと大きい。9・10は天井部が丸味をもち、体部との境も沈線、凹線を巡らすことによって稜としている。10の口唇部には1条の沈線を巡らしている。6は天井部と体部の境がさらに不明瞭で全体に丸味を増している。天井部の2/3以上はヘラ削りされているが、器壁は厚い。11・12は器高が低く、天井部と体部の境はきわめて不明瞭である。器壁は比較的薄いが、ヘラ削りは雑である。

杯身は4種に分類できる。17～21は蓋の1～5に対応するもので、口径10～10.9cm、器高4.7～5.8cmの一群である。立上りは1.5～2cmと高く、先端には明瞭な段が付く。20が焼成不良で軟質である他はきわめて焼成が良く、硬質で、造りが良い。22～24は口径11.2～12.4cm、器高5.2cm前後の一群である。立上りは2cm前後と高いが、やや内傾し、先端部は丸い。24の内底部には円心円叩き目が残っている。25は口径11.6cm、器高4.3cmを測るが、立上りは1.5cm未満で、内傾している。26・27はさらに立上りが短く、小型化している。器高も4cm未満で、扁平な造りである。27の外底部には火襷がみられる。

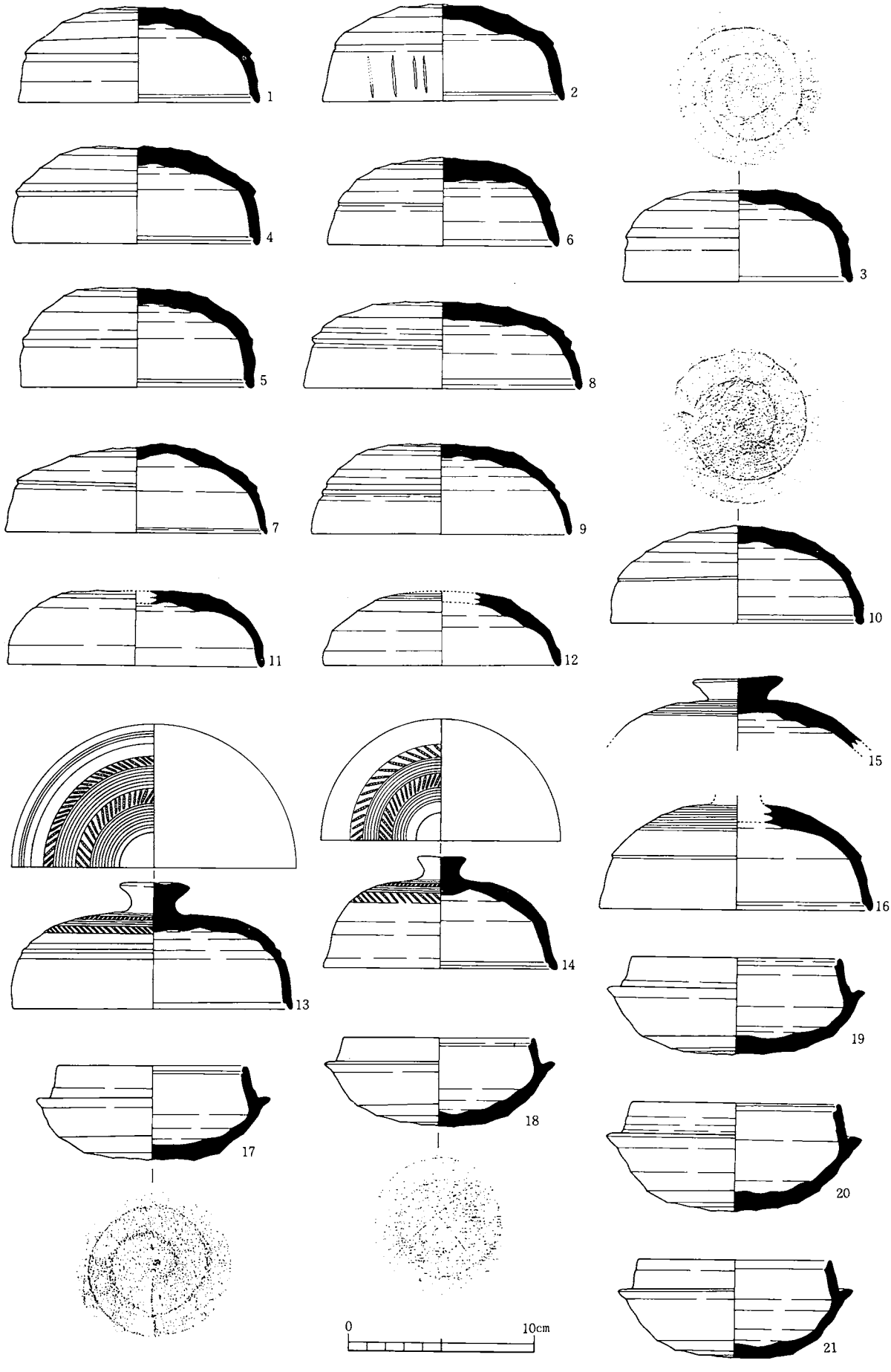
高杯には無蓋高杯と有蓋高杯とがある。29は長脚一段透しの無蓋高杯で、透し窓は三角形である。ほぼ完形品で、杯部口径9.9cm、器高11.5cmを測る。30は大型の無蓋高杯であるが、杯部は大きくひずんでいる。内外面とも濃緑灰色の自然釉が付着し、黒色に発色している部分も多い。31・32は同様の器形であるが、杯部の稜と脚下端部の細部が異なる。

13～16は有蓋高杯の蓋であるが、13・14の天井部にはカキ目の上に櫛歯文を二重に巡らしている。13は焼成不良のため軟質で淡灰色であるが、14は焼成も良く、暗灰色を呈し、内外面に火襷がみられる。15・16は同一の器形と考えられるが、胎土や内面の色調は茶褐色を呈している。33は長脚二段透しの有蓋高杯で、胎土・色調などは15・16と類似し、大きさからみてもセットをなすものと考えられる。34も長脚の有蓋高杯であるが、透し窓はなく、脚下端部は大きく外開きになっている。

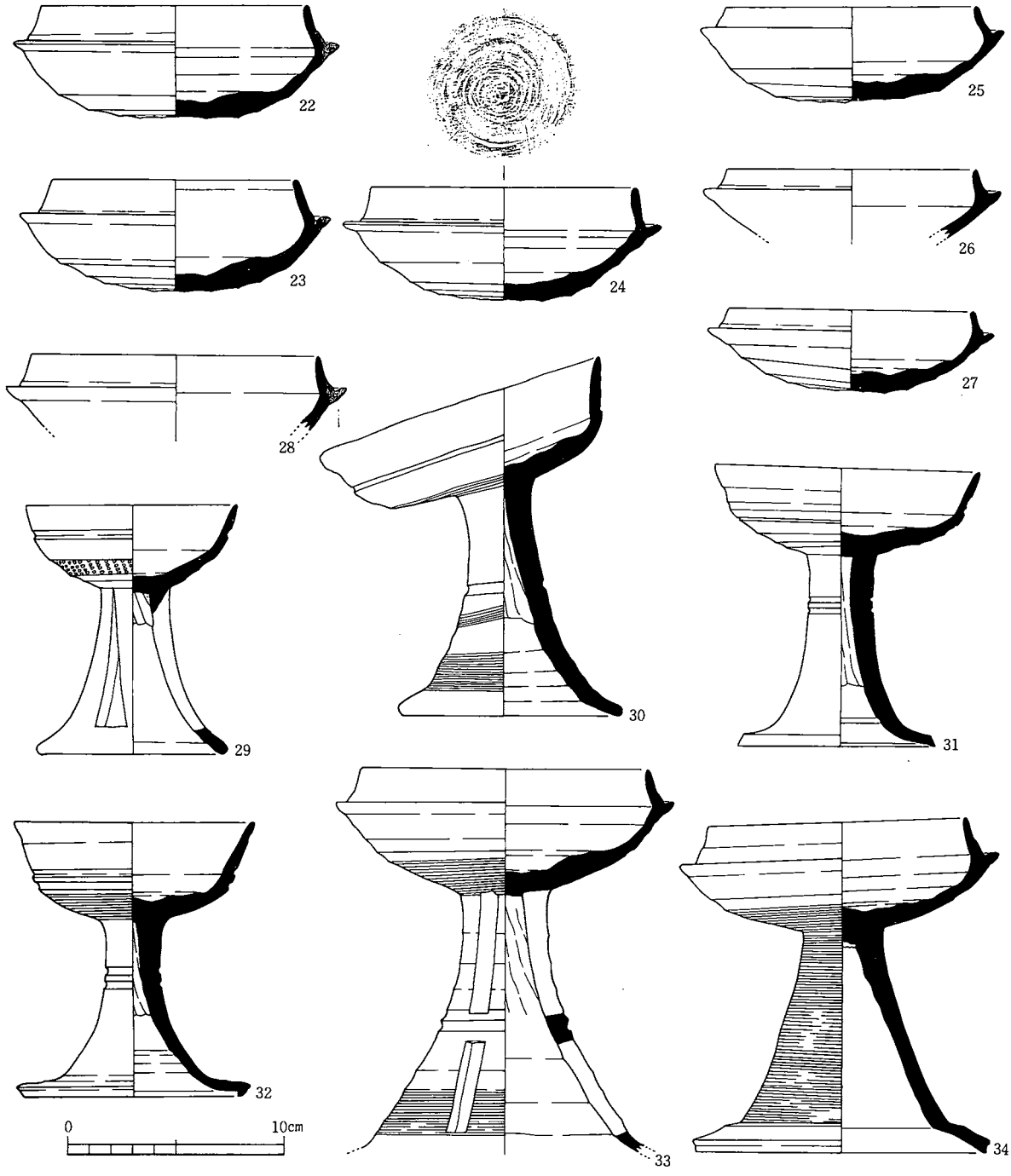
35・36は提瓶の口縁部であるが、形態は異なる。36は口縁部が単純で、頸部が長い。胴部は図化できるものがないが、約13cmと厚みのあるものが出土している。

37は坩で、ほぼ完形である。肩部には蓋を重ね焼した痕跡がある。

38は短頸壺で、口頸部は内傾している。肩部には櫛歯文を三重に巡らす。外面には薄い自然釉が付着し、



第108図　3号墳出土須恵器実測図

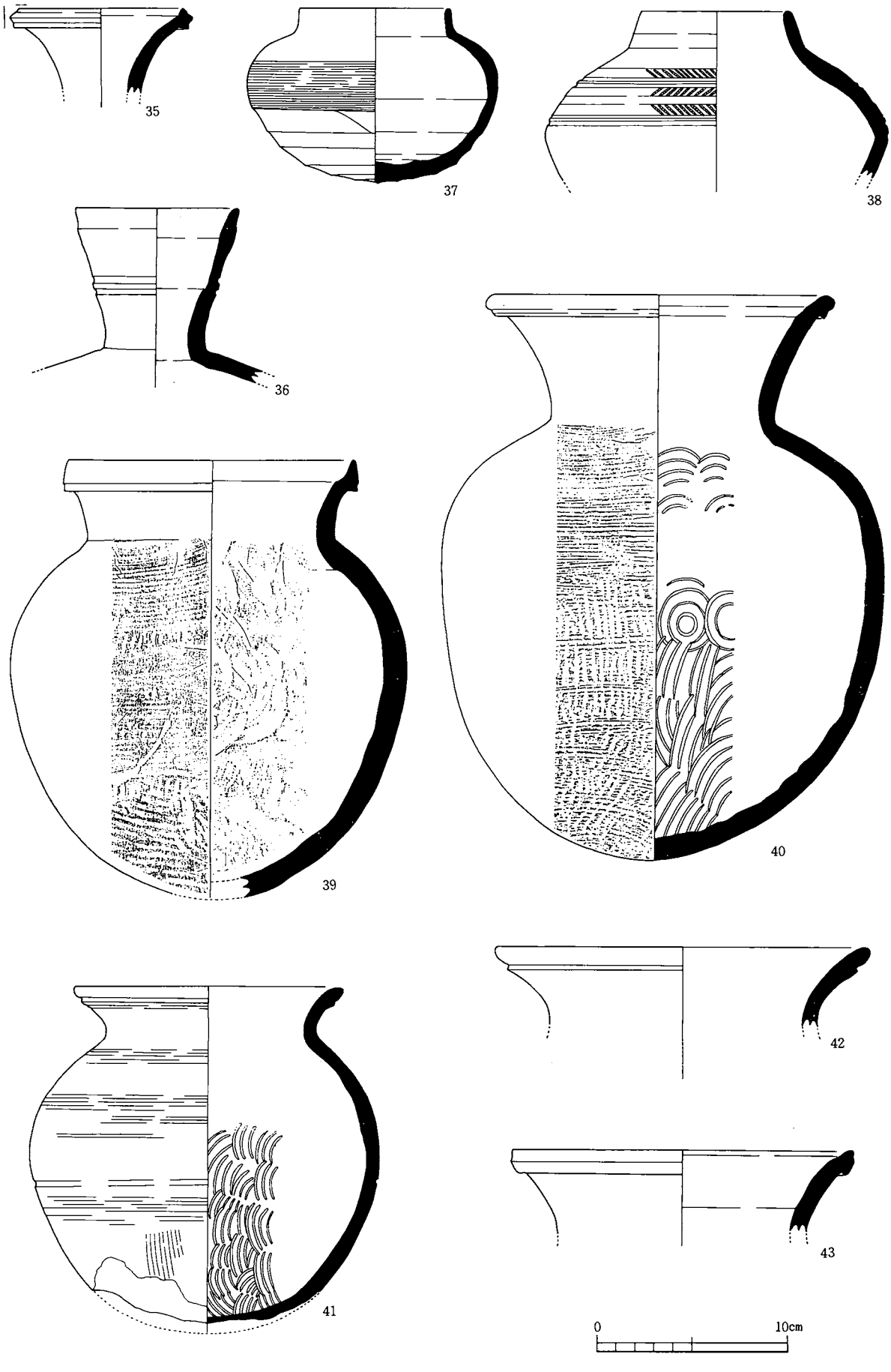


第109図　3号墳出土須恵器実測図

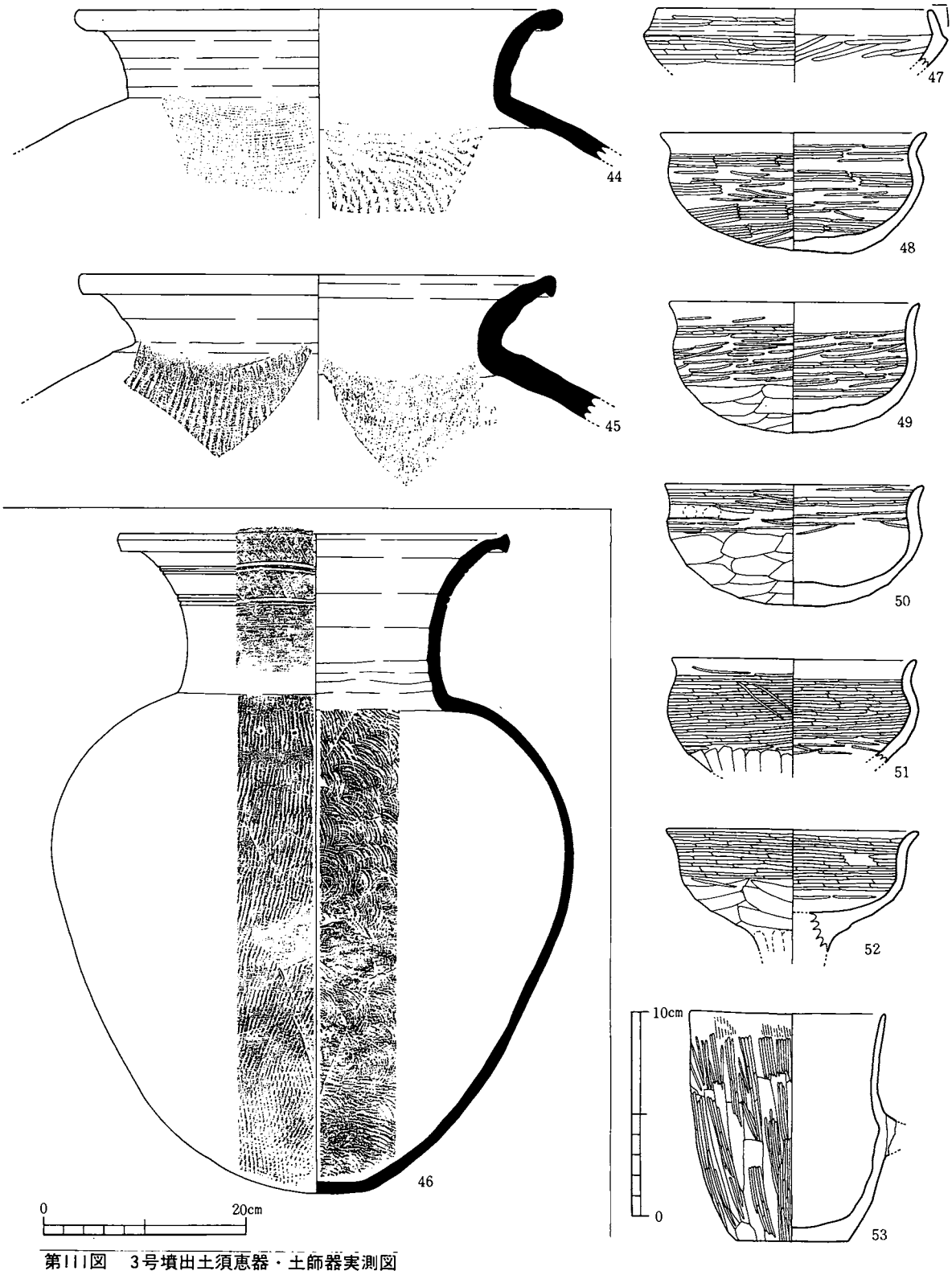
火襷がみられる。

39・40は広口の壺である。39の胴部は球形に近く、荒い平行叩き目の上にカキ目を施しているが、器壁はきわめて厚い。口縁部は屈折してほぼ垂直に立っている。40の口縁部は大きく開き、胴部はやや長胴である。胎土および器面は茶褐色の部分が多い。

41～43は小型の甕で、41・42の口縁形態はきわめて類似している。44・45は中型の甕で、いずれも口縁部内面、胴部外面に自然釉が付着している。44は口径24.1cm、45は23.6cmを測る。46は口径38.8cm、器高64.4cmを測る大型の甕で、胴部は破砕して出土したが、全体の7割位を復原することができた。この他、数個体分の口縁部、胴部の破片がある。



第110図　3号墳出土須恵器実測図



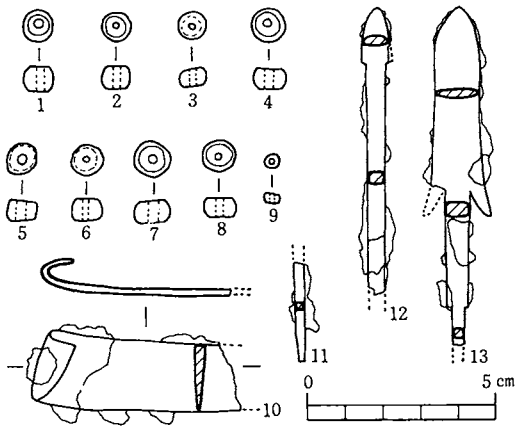
第111図　3号墳出土須恵器・土師器実測図

土師器（第111図47～53）

住居址から混入した土師器が多量に出土したが、古墳に伴う土師器は少ない。

47は須恵器の杯を模倣した杯身で、外面はヘラミガキ調整である。

48～51は盌で、49は完形、48もほぼ完形である。器形、法量、調整方法にわずかに差があるが、概して雑な造りである。胎土、焼成は良く、赤褐色を呈している。



第112図　3号墳出土玉類・鉄製品実測図

52は脚付鉢で、鉢部は盌に類似している。

53は甑を模したと考えられるが、底部の穴はない。把手も片方にしかなく、供献用の仮器である。内外面とも雑な調整で、器形もひずんでいる。胴部には縦長の黒斑がある。

この他、器面に漆を塗った小型の土師器片がある。細片のため器形は不明であるが、小型台付壺であろう。(松本)

玉　類（第112図１～９）

ガラス製丸玉８点とガラス製小玉が１点、周溝４区と主体部の掘方より出土している。

ガラス製丸玉（１～８）は長さ4.5～７㎜、径８～10㎜、孔径1.5～3.5㎜を測り、全体の形にもばらつきがみられる。３・５・６は上下の平坦面がやや丸味を帯び、５は他に比べて特に不整形である。色調はすべて濃紺色である。

９は長さ2.5㎜、径４㎜、孔径１㎜の小玉で、色調は不透明な淡緑色である。　（田尻）

鉄製品（第112図10～13）

手鎌（10）は一端を欠失しているが、幅1.7～2cmの鉄板の一端を折り返している。木質の付着はみられない。12は片丸造鑿箭式の長茎鏃で、遺存長は7.5cmを測る。13は両丸造柳葉腸抉篦被式の鉄鏃で、遺存長は8.9cmを測る。この他にも、鉄器の断片が２～３点出土している。　（松本）

５．４号墳

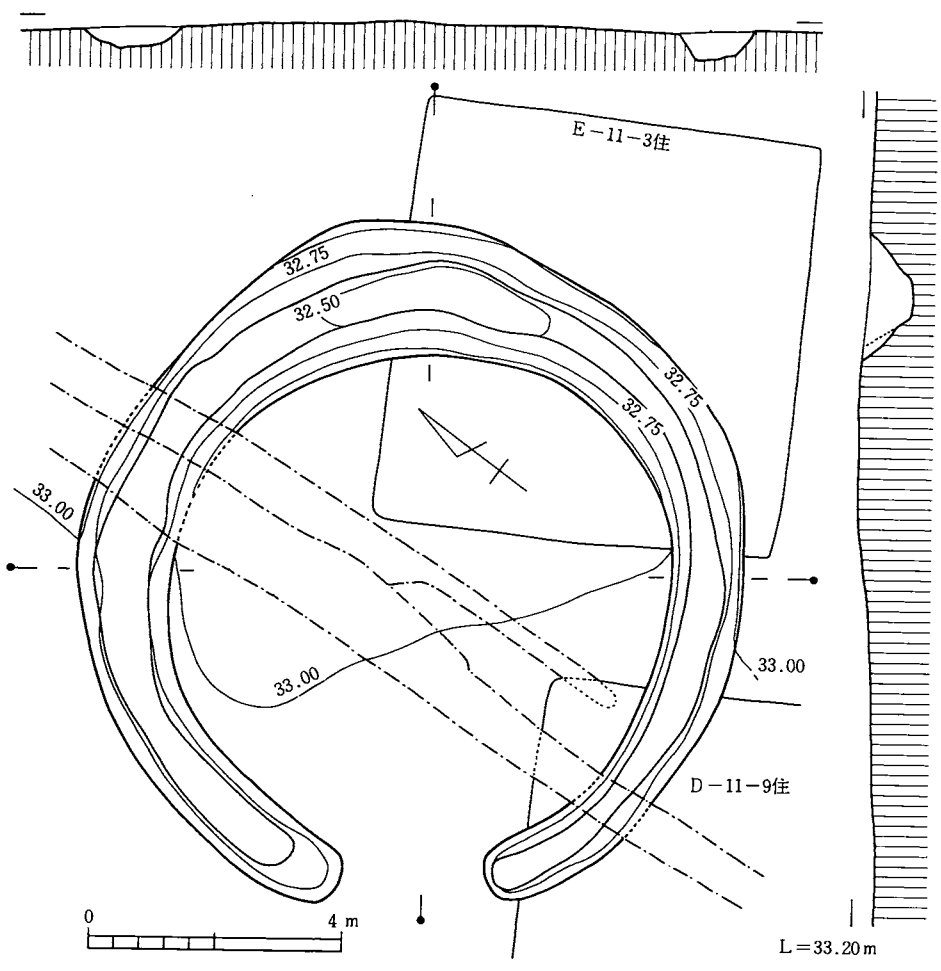
(1)墳丘・周溝（第113図）

周溝３区でＥ－11－３住と、周溝４区でＤ－11－９住と重複し、墳丘のほぼ中央部を南北に走る２条の溝によって切られている。

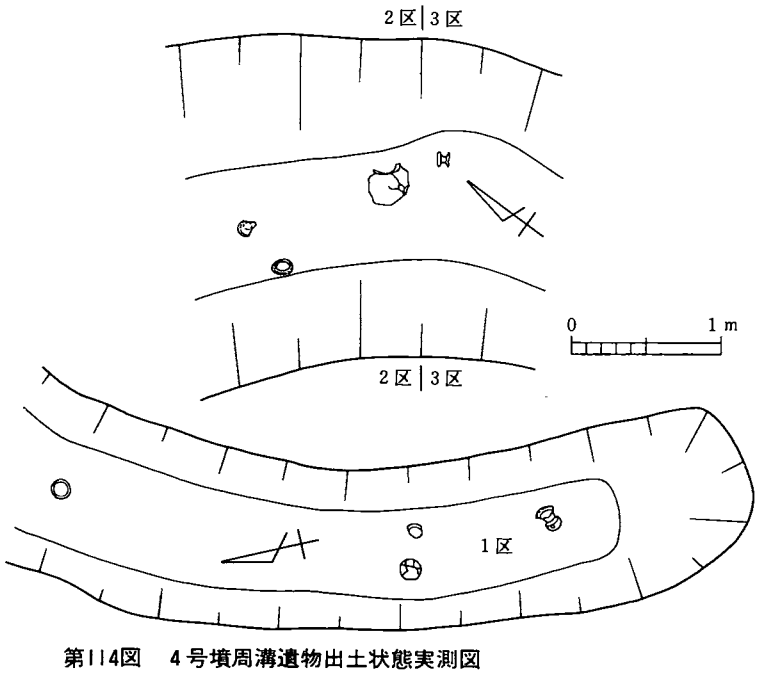
周溝外径10.6ｍ前後、周溝内径８ｍ前後の小型の円墳で、平面形はほぼ円形である。

周溝幅は90～140cmの部分が多いが、３区から４区にかけては２ｍ以上に肥大している。深さは30～70cmを測り、断面は逆梯形を呈している。陸橋部付近は１・４区とも浅くなっており、とくに１区の掘込みは緩やかである。

周溝内堆積土は概ね４層に区分された。１層は炭化物や微粒焼土を含む黒褐色土で、粘性に欠けている。２層はやや硬質の暗褐色土で、１層と同じ含有物がみられる。３層は褐色土であるが、１・２層と同じ含有物をわずかに含んでいる。４層はロームブロックを含む黄褐色土で、２・３区の境界付近など、周溝がローム層まで達している部分のみにみられる。



第113図　4号墳墳丘実測図



第114図　4号墳周溝遺物出土状態実測図

(2)主体部

墳丘はすべて削平され、墳丘の中心部付近は溝によって切られているため、主体部・掘方は検出されなかった。

(3)遺物の出土状態(第114図)

周溝のほぼ全域から土器が出土したが、大半は住居址から混入した土師器片で、古墳に伴う遺物は少ない。

古墳に伴う遺物でまとまった状態を示すのは次の2地点で、他は周溝1区の上層に散乱状態であった。周溝1区では須恵器（瑞1点・杯蓋2点）と土師器（盌1点・台付鉢2点）が点在していた。周溝2・3区の境界付近、すなわち陸橋部の裏側にも、須恵器（杯身2点・高杯1点）、土師器（甕1点）が約1mの間に出土した。

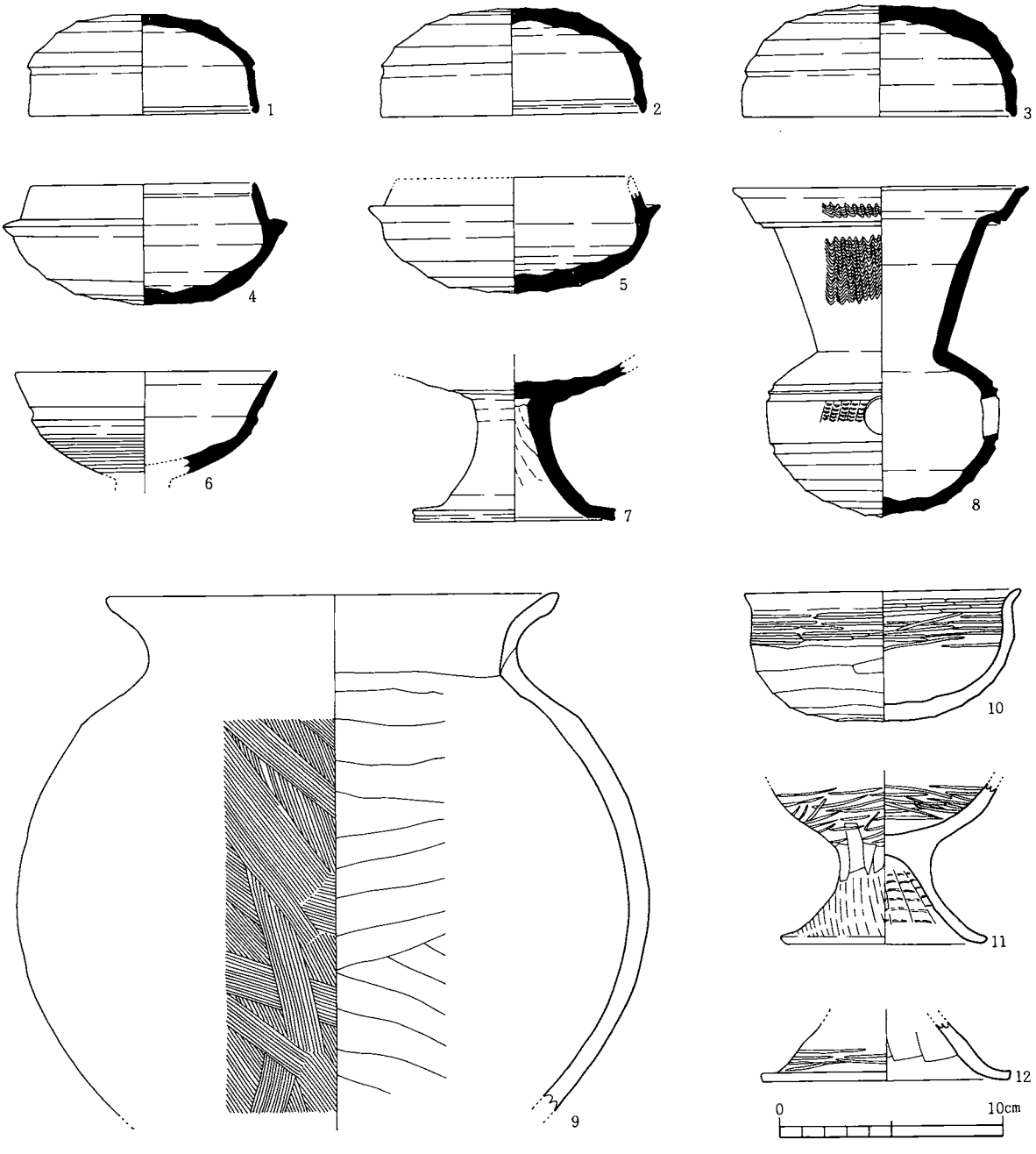
(4)出土遺物

すべて周溝内から出土したもので、土師器と須恵器があるが、量は少ない。

須恵器（第115図1～8）

蓋杯、高杯、瑞と器種も少ない。

杯蓋（1～3）は各々形態が異なる。1は口径10.4cm、器高4.5cmの小型品である。ほぼ完形で、天井部は丸味を帯び、体部との境の稜は比較的鋭い。2は口径12.1cm、器高4.8cmを測るが、器形は1と類似している。



第115図　4号墳出土須恵器・土師器実測図

3は口径12.3cmを測るが、全体に丸味を帯び、天井部と体部の境の稜も丸味が強い。天井部の約2/3はヘラ削りされているが、器壁はやや厚い。1・2に比べてやや後出のものであろう。その他、これらより明らかに後出する杯蓋の細片が出土している。

杯身（4・5）はほぼ同一の器形で、口径や色調などから、蓋の2と組合わさるものである。4は完形品で口径10.1cm、器高5.5cm測る。立上りはやや内傾しているが1.8cmを測り、先端には段が付く。

6は無蓋高杯の杯部で、体部には明瞭な段が付く。底部外面には荒いカキ目がある。胎土に微砂粒を含むが、焼成は良く、黒灰色を呈する。7は無蓋高杯の脚部であるが、杯部の大半は欠失している。

8は口縁部をわずかに欠く壺で、口径13.2cm、器高14.8cmを測る。口頸部は全体的に径が大きく、先端部には段が付く。典型的な第II様式である。口頸部内面、外面の一部、および肩部には自然釉が付着し、この自然釉は杯蓋1の自然釉ときわめて類似している。

土師器（第115図９～12）

甕、盌、台付鉢がある。その他、住居址から混入した土師器片が出土している。

９は図示した部分の約1/2大の破片で、外面全体に薄く煤が付着している。胴部内面はヘラ削りされているが、器壁は厚い。

10は完形の盌で、内外面の上半はヘラミガキされている。胎土・焼成は良く、明褐色を呈する。

11は台付鉢であるが、鉢部は欠失している。おそらく、10のような鉢部が付くのであろう。内外面の調整はやや雑であるが、器表は滑沢である。11・12とも胎土、焼成が良く、赤褐色を呈する。（松本）

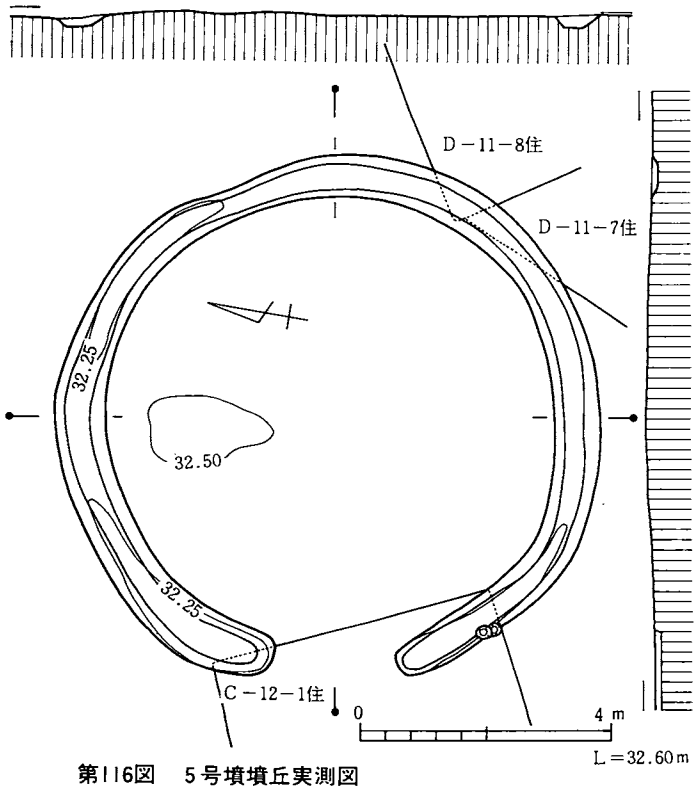
６．５号墳

(1)墳丘・周溝（第116図）

陸橋部でＣ－12－１住を、周溝３区でＤ－11－７・８住を切って築かれている。周溝外径8.6ｍ前後の小規模な円墳で、平面形はやや不整な円形を呈する。上部の削平が強いためか、周溝幅64～88cm、深さ10～20cmを測るにすぎない。

周溝内堆積土は上下の２層に大別される。１層は黒褐色土、２層は明褐色土で、いずれも炭化物や微粒焼土を含んでいる。周溝１・２区では２層を欠く部分も多い。周溝の掘込みが浅く、周溝底はＶ層（ニガ土）に止まっている。

(2)主体部



第116図　５号墳墳丘実測図

墳丘は完全に削平されており、主体部・掘方は検出されなかった。

(3)遺物の出土状態

周溝内から須恵器片、土師器片、凝灰岩片が出土しているが、きわめて少量である。須恵器片は周溝１区のみから出土したが、すべて細片で、散在していた。

周溝１区から出土した土師器のうち２点だけは古墳に伴うものと考えられるが、その他は住居址からの混入である。これらは周溝１～４区から出土している。

(4)出土遺物

須恵器

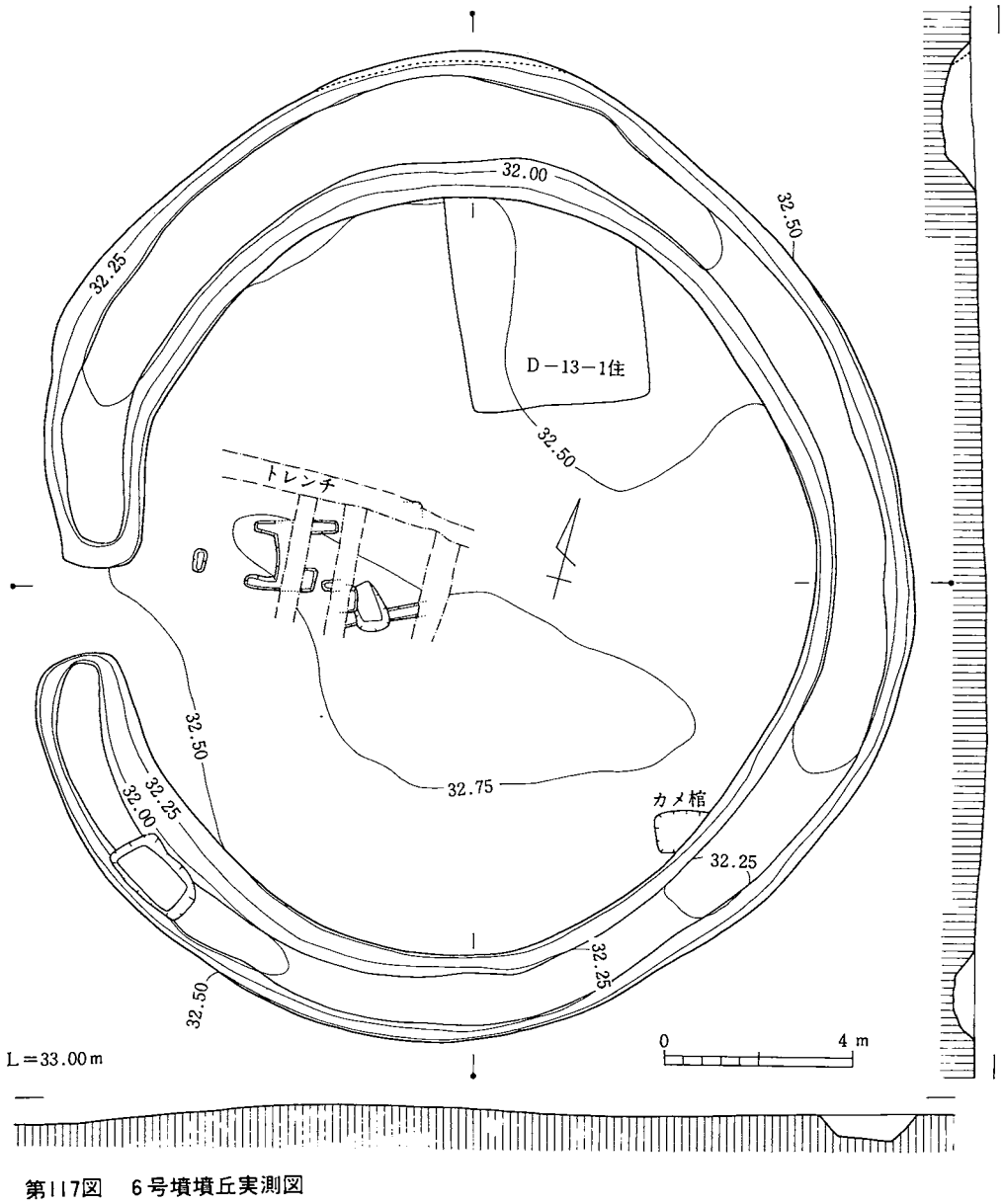
小破片が10点程あるが、図示できるものはない。器種としては蓋杯、壺がある。

土師器

古墳に伴う土師器は２点にすぎず、いずれも細片である。器表にヘラミガキを加えたもので、赤褐色を呈する。高杯の脚部と杯部の破片で、同一個体かもしれない。（松本）

７．６号墳

(1)墳丘・周溝（第117図）

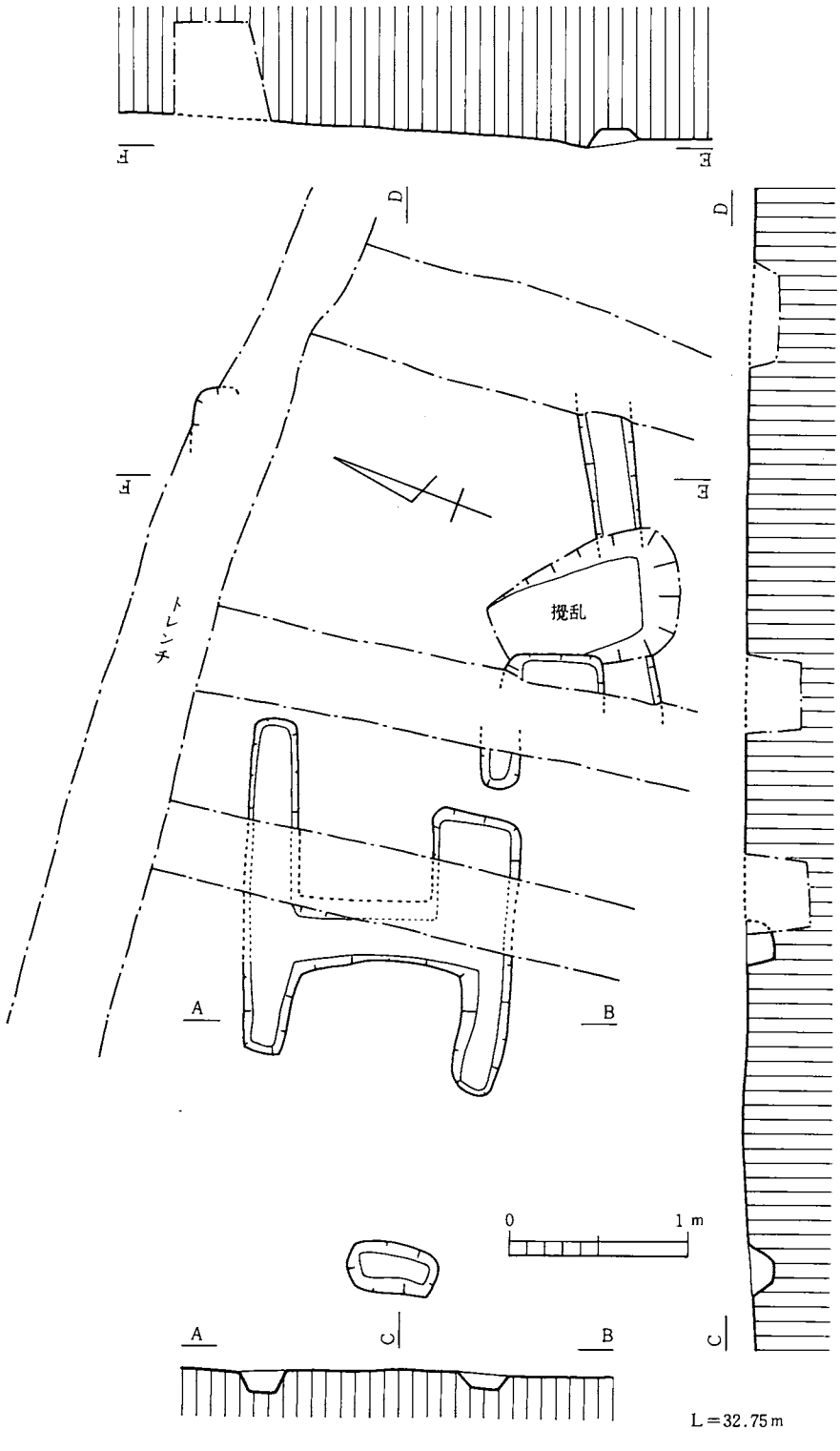


第117図　６号墳墳丘実測図

周溝２区でＤ－13－１住を、周溝３区で甕棺墓を切って造られている。ゴボウの耕作により部分的な攪乱を受けている他は、周溝部分が比較的良く残っている。

周溝外径は19.70～20.80ｍを測る大型の円墳で、平面形はやや不整な円形を呈している。墳丘の中央部から南側にかけてはやや小高くなっているが、墳丘はすべて削平されている。

周溝幅は広く、1.72～2.80ｍを測り、場所によって広狭の差がある。幅の広さに比べて深さは48～60cmと浅く、断面形は逆梯形を呈している。



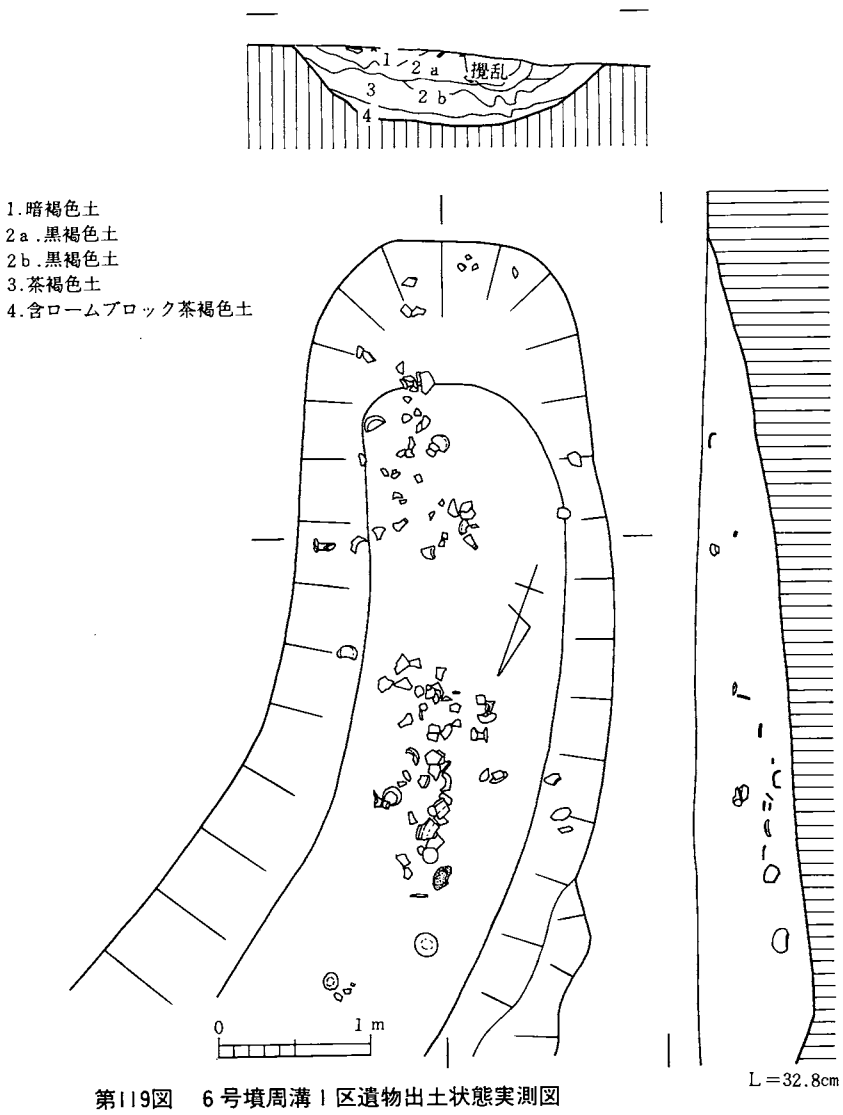
第118図　６号墳主体部実測図

周溝内堆積土は、部分的な攪乱などを除いて４層に区分できる。１層は暗褐色土で、２層は黒褐色土であるが、１・２層の間には大きな相違はない。２層は地点によってわずかに軟硬の差があり、２層に細分することもできる。古墳に伴う遺物が含まれるのはこの１・２層である。３層は茶褐色土、４層はロームブロックを含む黄茶褐色土で、４層は粘性に富んでいる。

周溝４区の周溝底には長さ1.90ｍ、幅1.05ｍ前後の不整な長方形土壙が掘り込まれており、中から馬歯と骨粉が出土した。

(2)主体部

墳丘はすべて削平されており、主体部は消滅しているが、墳丘の中心より陸橋部寄りに掘方の一部が検出された。掘方を検出した面は地表から浅く、試掘溝やゴボウ穴によって分断されており、土色の変化も微妙で詳細については不明な点が多い。掘方の配列からみる



第119図　6号墳周溝1区遺物出土状態実測図

と、横穴式石室と横口式石棺の可能性が考えられるが、いずれとも決し難い。掘方内やその周辺には凝灰岩屑が散乱しており、凝灰岩の使用が窺える。

(3)遺物の出土状態

（第119・120図）

周溝の各区から遺物を出土しているが、古墳に伴う遺物の大半は周溝1区に集中しており、他はごく少量である。

周溝1区の陸橋部から北側にかけて、須恵器を主体に土師器、鉄器が出土した。これらの遺物は、陸橋部端から約2mまでの間に一群、約60cm間隔をおいて約2mの範囲に一群と、2地点に密集している。大半は須恵器であるが、土師器、鉄器、弥生式土器を含んでおり、土師器には古墳に伴うものと住居址からの混入とがある。堆積土が陸橋部から北側にかけて傾斜していることもあって、陸橋部寄りの一群は上位から、北側の一群はやや下位から出土したものが多い。

周溝2区では刀子片と考えられる鉄片が1点あり、他には住居址から混入した土師器片が出土した。

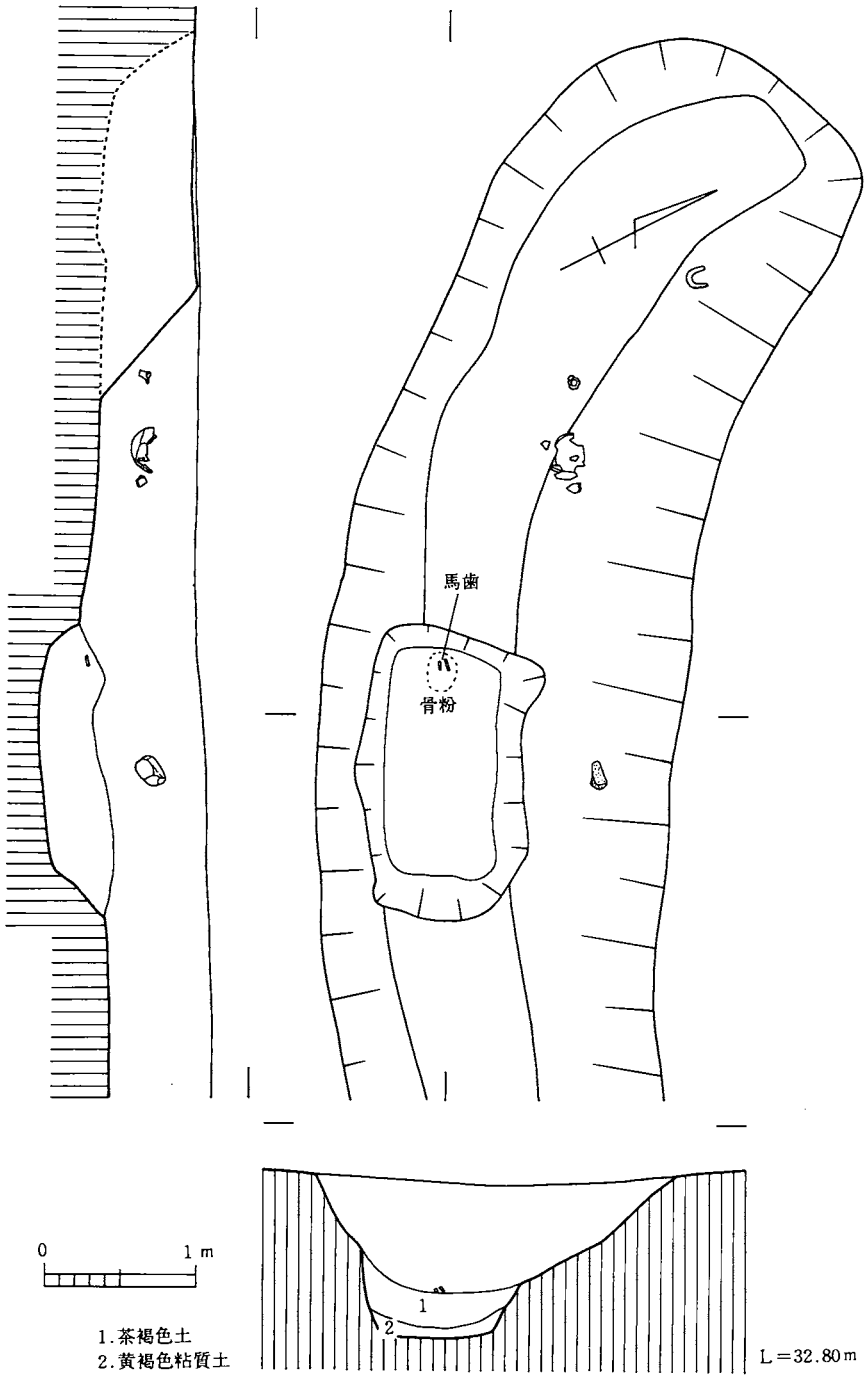
周溝3区では須恵器の大型甕が出土したが、胴部破片が散乱状態であった。その他、甕棺の破片や住居跡に伴う土師器の混入があった。

周溝4区では鉄製鍬先と馬歯が古墳に伴う遺物である。

馬歯は周溝底の土壙の北西端に位置し、土壙底から約25cmの高さにある。土壙内には下部にロームの再堆積層があり、その上は茶褐色土が土壙上面まで満ちていた。馬歯は茶褐色土の上面に位置し、馬歯の周辺部には微量の骨粉が認められた。

この状態から馬の埋納状態を復原すると、土壙を穿ち、土壙壁に頭部をもたせかけるようにして安置し、土（茶褐色土）を覆ったものと考えられる。

土壙を確認したのは、周溝内堆積土の4層の段階である。周溝内堆積土の3層と土壙内堆積土は色調などが類似しており、この前後関係は確認できていないが、3層に掘り込まれている可能性が強い。すなわち、土壙の掘削（馬の埋納）は古墳築造時、若しくは初葬時に行われたものと考えられる。



第120図　6号墳周溝4区遺物出土状態・馬埋納土壙実測図

(4)出土遺物

すべて周溝内から出土したもので、須恵器、土師器、鉄製品がある。

須恵器

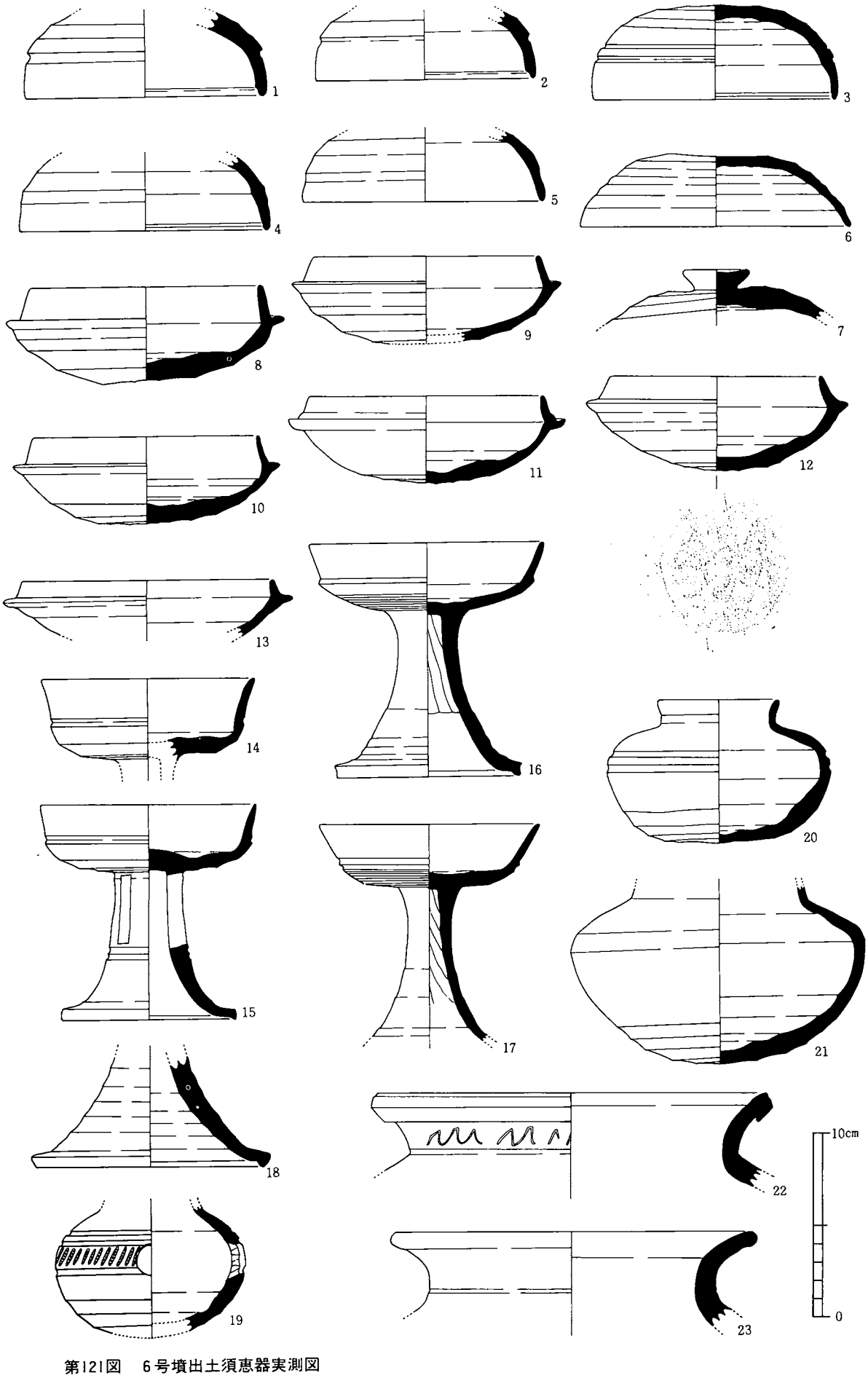
（第121・122図1～27）

器種としては蓋杯、高杯、瑞、短頸壺、坩、広口壺、甕、器台がある。

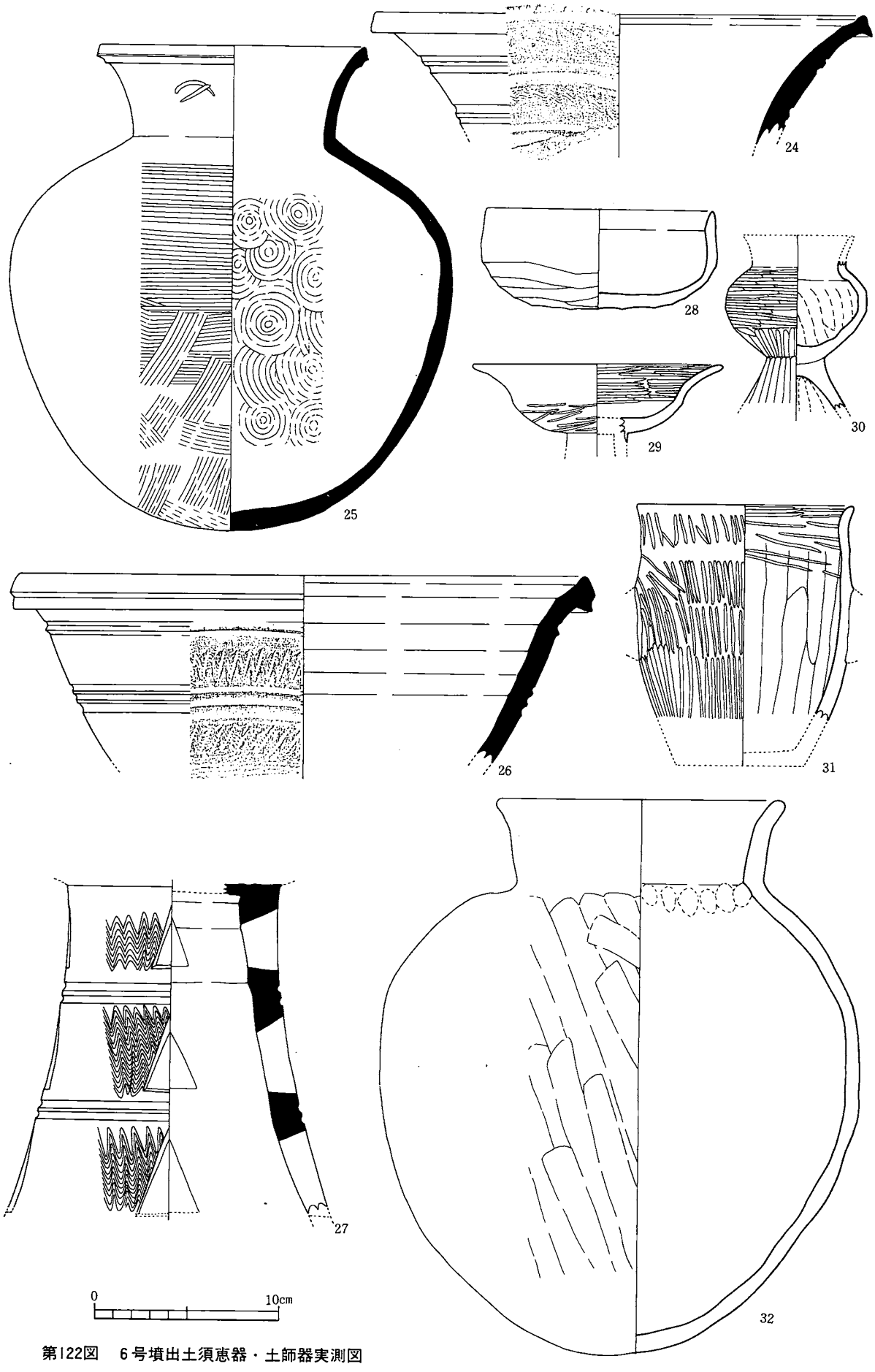
杯蓋（1～6）は4種に分類される。1・2は破片で全形を知り得ないが、天井部と体部の境の稜は鋭い。1は復原口径13cm、2は12cmを測る。天井部の大半はヘラ削りされているが、器壁は厚い。3は口径13.1cmを測り、全体的に丸味を帯びた器形である。天井部と体部の境は、稜というより上下に沈線を施すことによって区別し、口唇部にも浅い沈線を巡らしている。天井部の約2/3はヘラ削りである。4・5は同様な器形で、天井部と体部の境にはごくわずかに鈍い稜が認められる。1～3に比べると器壁は薄い。6は復原口径14.5cm、器高3.8cmを測るが、天井部と体部の境は識別できない。ヘラ削りも、頂部の平坦面に施されているにすぎない。

杯身（10～13）も4種に分類できる。8～10は口径12.2～12.5cm、器高4.8～5cmの一群である。立上りはやや内傾しているが1.6～1.8cmの高さがあり、先端は丸く仕上げられている。底部の約2/3はヘラ削りされているが、8・10の器壁は厚い。11は蓋受部に特色がある。立上りは内傾気味で、底部にも張りがない。12は8～10にやや類似しているが、立上り、蓋受部が異なる。底部のヘラ削りも約1/2に施されているにすぎない。13は小破片であるが、立上りは内傾し、高さも1cm未満である。底部には張りがなく、直線的である。

14～18は高杯であるが、いずれも無蓋高杯で、有蓋高杯は出土していない。14・15の杯部は類似し、15の脚部には三方に長方形透しがある。この他、脚部の破片には、3号墳で出土しているような長脚一段透し



第121図　6号墳出土須恵器実測図



第122図　6号墳出土須恵器・土師器実測図

（第109図29）の脚部破片がある。16・17も類似の器形であるが、杯部の屈曲部や脚部に相異がある。16は焼成不良のため軟質であり、白灰色を呈する。

19は球形胴の瑕の胴部で、肩部には薄く自然釉がかかっている。胴部の孔は直径1.7cmを測る。

20は小形の短頸壺で、口縁部はわずかに外反する。胴部には浅い２条の凹線を巡らし、底部は平底である。焼成は良く、黒灰色～灰褐色を呈している。

21は坩であるが、胴部は肩が張り、口縁部はわずかに内傾している。肩部から胴部にかけては薄い自然釉が付着し、蓋を重ね焼した跡がある。

22・23は口径20cm前後の甕で、口縁部形態は異なる。22の頸部にはヘラ描きによる簡略化した波状文が断続的に施されている。24は復原口径26.8cmの口縁部である。頸部には二段に波状文を巡らし、口縁部断面は三角形である。この他にも、３～５個体分の甕の破片が出土している。

25は広口壺で、ほぼ完形に復原でき口径14.5cm、器高26cmを測る。頸部にはヘラ記号がある。胴部の上半にはカキ目を施し、底部近くは同じ原体でハケ目状に調整している。

26・27は同一個体と考えられる大型器台である。26は復原口径約31cmを測り、焼成はやや不良である。27は26よりさらに焼成が悪く、白灰色を呈する。透し窓は三角形で、四方に施されている。

土師器（第122図28～32）

古墳に伴う土師器は少なく、器種としては杯身、盌、高杯、小型台付壺、甑、甕がある。

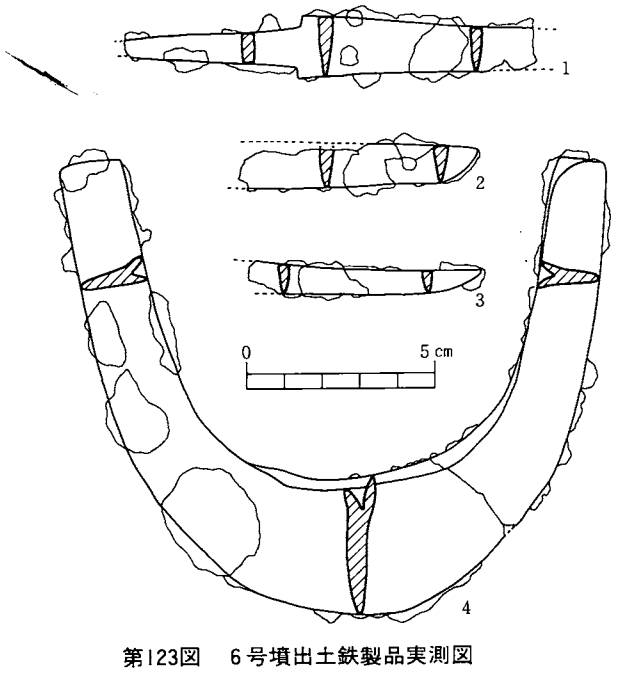
杯身は細片で図示していないが、須恵器を模した立上りをもつ器形である。

盌（28）はやや雑な造りで、底部は平底気味の丸底である。口縁端部はやや尖り気味に仕上げている。

29は高杯の杯部破片で、丸味を帯びた体部に口縁部は大きく横に開いている。

30は小型台付壺で、口縁部と脚下端部を欠失している。外面はヘラミガキおよびミガキに近いヘラ削りで滑沢である。28～30は胎土、焼成が良く、28・29は赤褐色、30は褐色を呈する。

31は約1/4大の破片からの復原であるが、３号墳で見られたような甑の仮器と考えられる。外面はやや雑なヘラミガキであるが、黒色磨研土器の肌に似て黒褐色を呈する。1/4大の破片であるので、把手は１個所に剝離した跡が残されているが、３号墳出土例では本来片方にしか付いていない。



第123図　６号墳出土鉄製品実測図

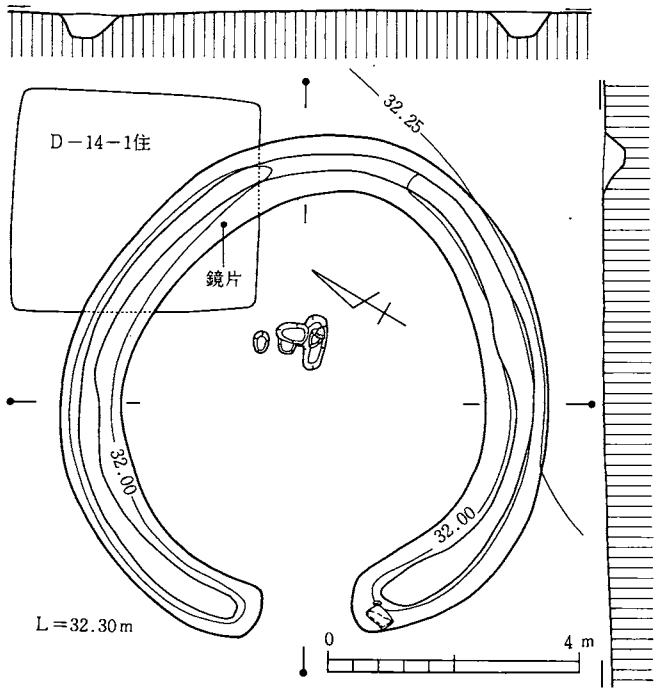
32はほぼ完形に復原でき、口径15.7cm、器高30cmを測る。頸部は直立気味に立ち、先端部はわずかに外反する。胴部はやや長胴で、胴部内面はナデ調整のため器壁はやや厚い。胴部外面はヘラ削り気味にナデ調整している。肩部以下にはほぼ全面に煤が付着している。

鉄製品（第123図１～４）

刀子とU字形鏃先が出土している。１は大型の刀子で、切先部分は欠失している。関は両関で、茎とはほぼ直角に切られている。２・３は刀子の身の部分であるが、３の身幅は６㎜前後で細身である。

U字形鏃先（４）はほぼ完形品で、幅は先端部分で3.5cm前後、基部で1.5～1.7cmを測る。刃先はやや丸味を帯び、それほど鋭利ではない。（松本）

8．7号墳



第124図　7号墳墳丘実測図

(1)墳丘・周溝（第124図）

周溝2区でD－14－1住と重複して古墳が造られている。ゴボウの耕作などにより部分的な攪乱を受けているが、周溝は良く遺存している。

周溝外径は7.72～8.16mを測る小型の円墳で、平面形は不整な円形を呈している。周溝幅は84～120cmを測り、深さは30～40cmである。

周溝内堆積土は上層の黒褐色土と下層の褐色土の2層に区分され、さらに明暗の差などによって各々を2層に細分することができる。

(2)主体部（第125図）

墳丘の中心部からやや北東に扁して、掘方の一部が検出された。掘方の全体像はつかめないが、掘方の中から加工痕を残す凝灰岩片が出土した。規模などについては不明であるが、凝灰岩を用いた箱式石棺であったと考えられる。

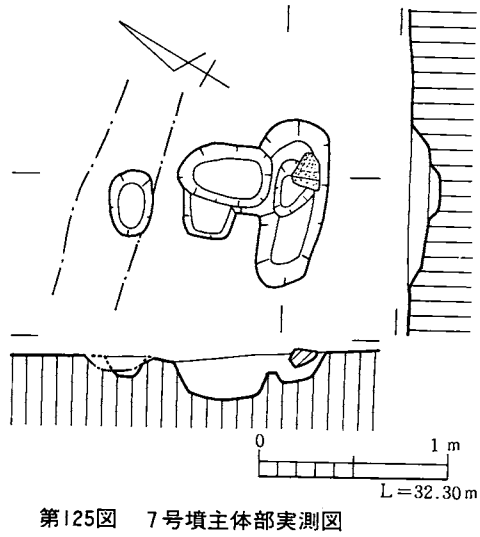
(3)遺物の出土状態（第126図）

周溝内から須恵器、土師器、鏡片、凝灰岩片を出土したが、量は多くない。

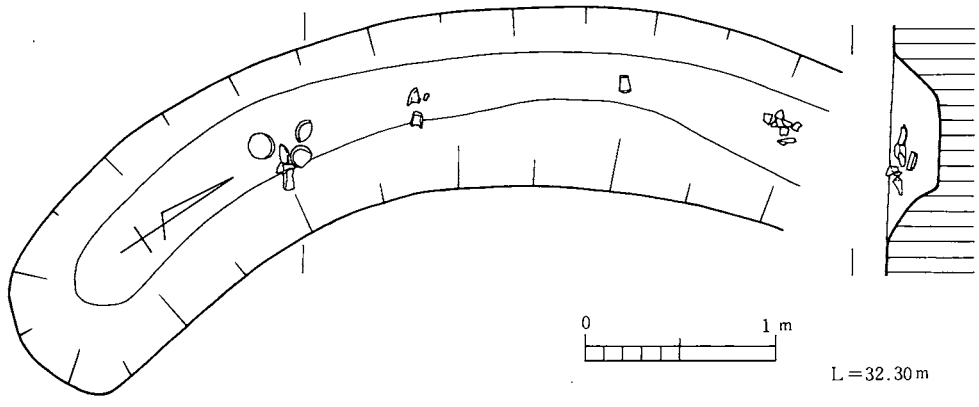
周溝1区の陸橋部端から約2mの地点に須恵器（杯蓋2点、杯身1点）、土師器（高杯1点）が置かれていた。さらにその北方に土師器（台付鉢、長頸壺）が点在している。これらの土器はすべて上層の黒褐色土からの出土で、層位的にみて同一時期とみなされる。

周溝2区の墳丘側の法面から鏡片が出土した。出土地点はD－14－1住との重複部であるが、精査の結果周溝内堆積土に含まれていることが確認されたが、本来の所属は住居跡である可能性も否定できない。

周溝4区の陸橋部横から凝灰岩片が出土した。最上層からの出土で、主体部の破壊に伴って周溝に移動したものであろう。



第125図　7号墳主体部実測図



第126図　7号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態実測図

(4)出土遺物

すべて周溝内から出土したもので、須恵器、土師器、鏡片がある。

須恵器（第127図１～３）

杯蓋（１・２）は同様の器形であるが、１がやや器高が高い。１・２とも天井部の3/4以上がヘラ削りされているが、いずれも天井部器壁は厚い。１は焼成良く、硬質で暗灰色～暗茶灰色を呈する。２は焼成がやや不良で白灰色を呈し、軟質である。

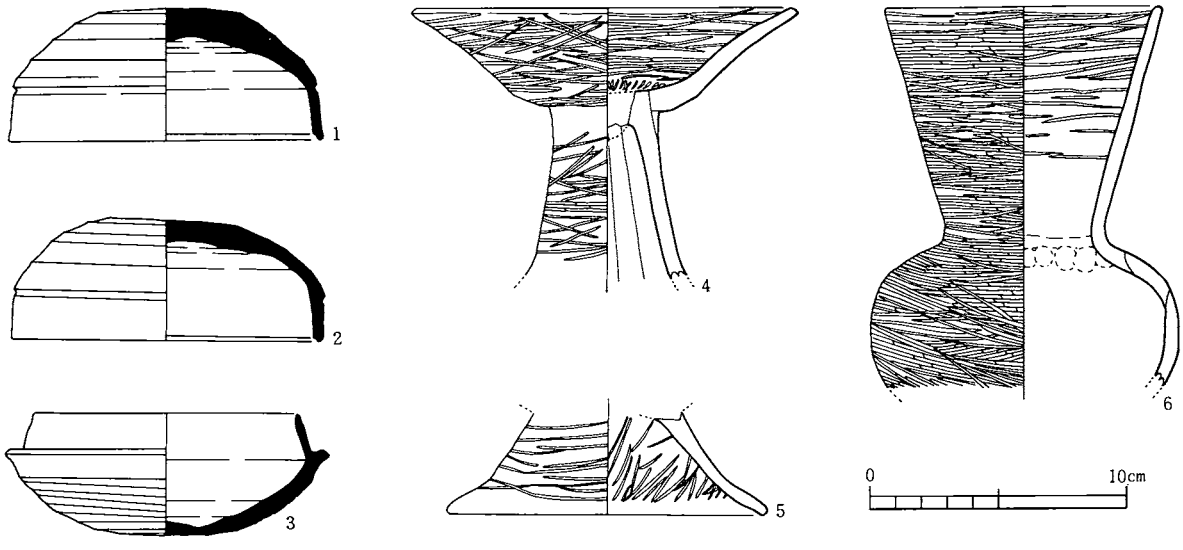
杯身（３）は約1/2大の破片である。焼成が悪く、軟質で白灰色を呈する。底部の張りはやや弱いが、蓋（１・２）に対応するものとみられる。

その他、甕の胴部破片が数点出土した。

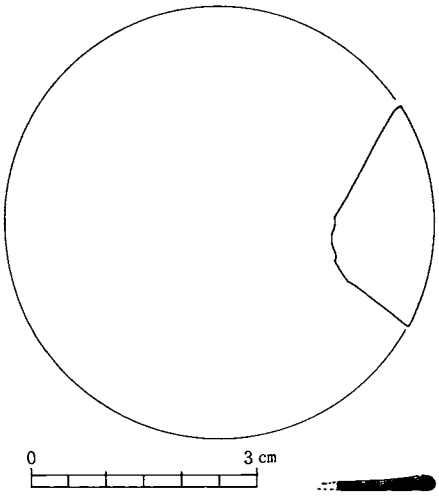
土師器（第127図４～６）

住居址から混入した土師器片は数10点出土しているが、古墳に伴う土師器は破片を含めて数点にすぎない。

４は高杯で、杯部内外面、脚部外面は雑なヘラミガキが施されている。



第127図　7号墳出土須恵器・土師器実測図



第128図　7号墳出土鏡片実測図

5は脚部の小破片であるが、上端は接合面から剥離している。外面は横方向、内面は斜め方向のヘラミガキが施されている。

6は球形胴の長頸壺で、外面は密にヘラミガキされている。

4～6とも胎土がきわめて良く、焼成も良く赤褐色を呈する。

鏡　片（第128図）

長さ2.8cm、幅1.3cmの小破片で、鏡式は不明である。縁は平縁で、厚さは外側で約2㎜、内側で約1㎜を測る。復原面径は5.7cmとなり、多少の誤差を考えても6㎝未満の小型鏡である。破損面は錆化が進み、破損が古いことを示している。破損面への研磨などの二次加工はみられない。鋳上りは良く、鏡面・鏡背面とも滑沢である。（松本）

9．9号墳

(1)墳丘・周溝（第129図）

東西に走る溝によって墳丘を切断され、その他の攪乱も多く、遺存状態は悪い。

周溝外径は13.6～14.6ｍを測る中型の円墳で、平面形はやや不整な円形を呈する。上部からの削平の度合や法面の崩壊によって周溝の幅は不均一で、最も狭い周溝1区で96cm、最も広い周溝3区では2.30ｍを測る。深さも一定ではなく、周溝1区から2区にかけては浅く（20～40cm）、3区から4区にかけては深く（40～60cm）なっている。陸橋部付近でも、周溝1区側は緩やかな傾斜で掘り込まれているのに対して、4区では急傾斜で深く掘り込まれている。

周溝内堆積土は、最も深い周溝4区では5層に区分された。1層は黒褐色土で、部分的に炭化物や微粒焼土を含んでいる。2層は暗褐色土で、1層に比べて粒子が粗く、やや粘性がある。3層は褐色土で、ごくわずかに炭化物を含んでいる。4層は茶褐色土で、ロームのブロックをわずかに含んでいる。5層は黄褐色土で、大半はロームの再堆積土である。周溝1・2区など、掘り込みの浅い所では4・5層が欠けるところが多い。

(2)主体部

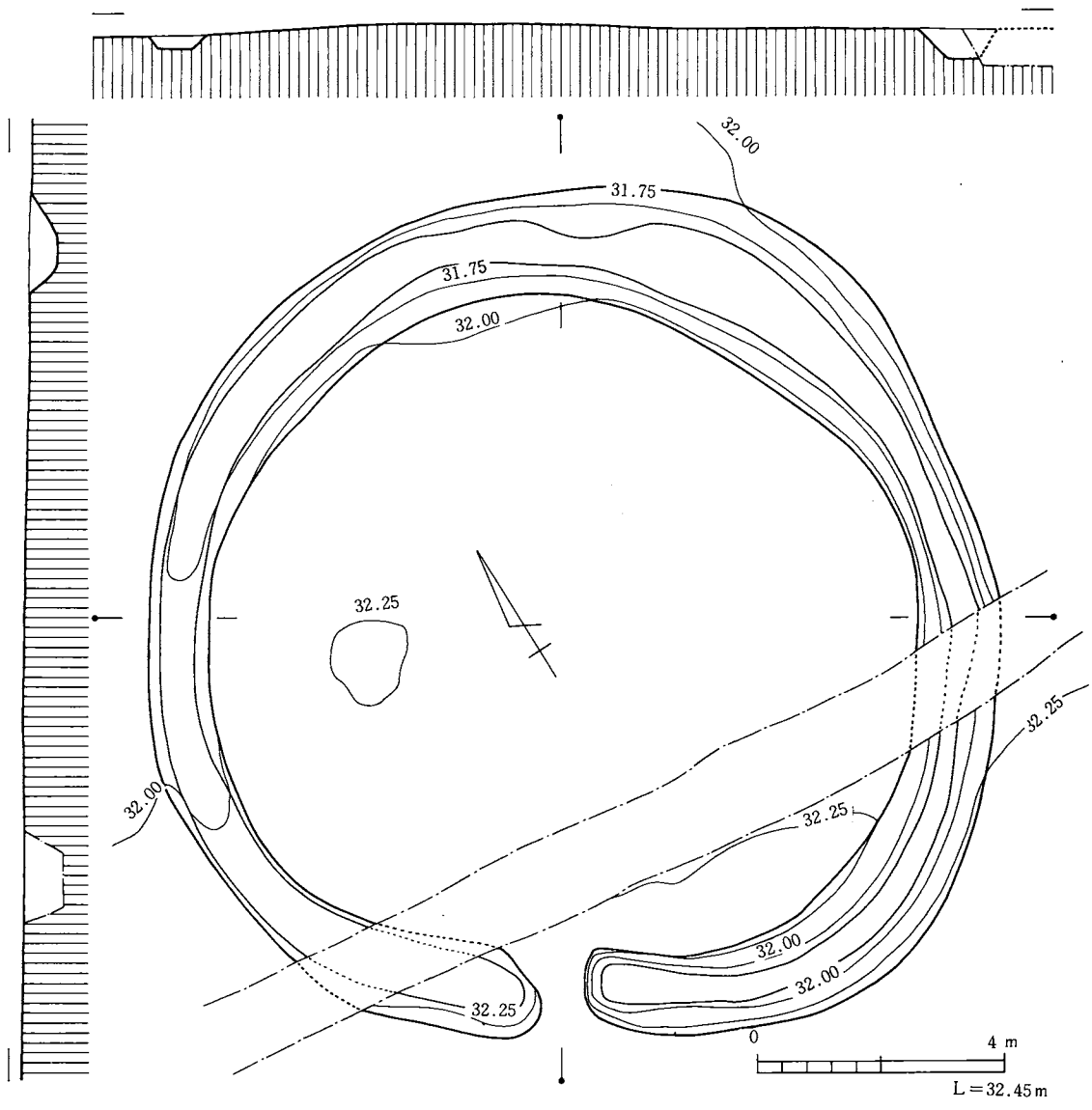
墳丘は完全に削平されており、主体部や掘方は検出されなかった。

(3)遺物の出土状態

周溝内から須恵器と土師器を出土した。遺物のほとんどは周溝1区からの出土であるが、量は多くない。

周溝1区の陸橋部と溝との間に須恵器の高杯、台付壺の脚部、甕の胴部破片が2層中より出土した。周溝1区の2区寄りにも4～5点の須恵器群があり、これらは2層でも下部に含まれている。

その他、周溝1・4区から土師器片（高杯・甕など）を出土したが、これらは住居址からの混入で、古墳



第129図　9号墳墳丘実測図

に伴うものではない。

(4)出土遺物

すべて周溝から出土したもので、古墳に伴う遺物は須恵器が数点あるにすぎない。

須恵器（第130図１～４）

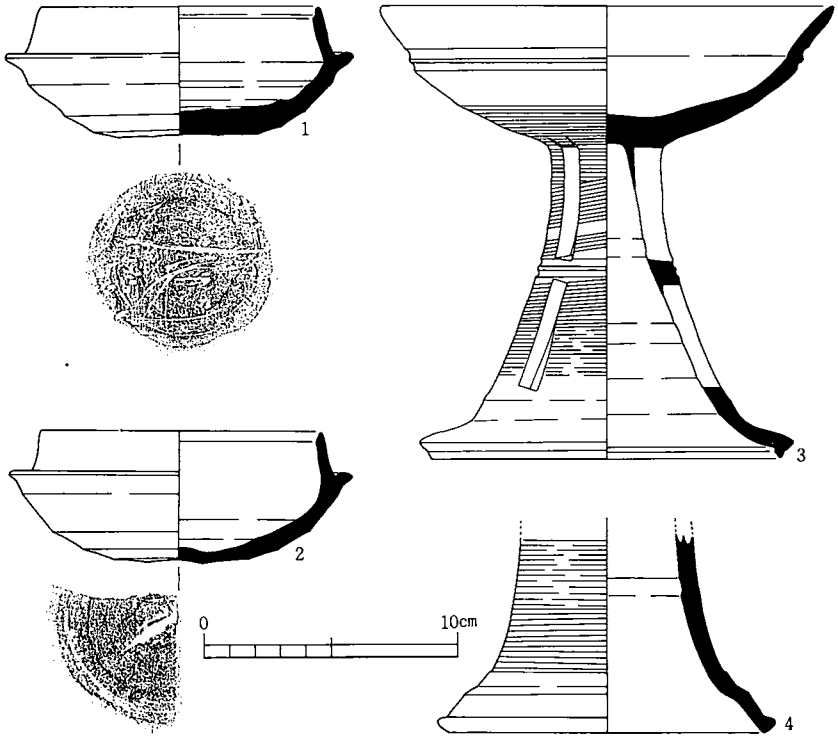
杯身、高杯、脚台、甕があるが、甕は胴部の細片である。

杯身（１・２）は口径約11cm、器高約５cmを測り、立上りの先端部を除いて良く類似している。色調はやや異なり、１は灰色、２は暗灰色を呈する。

３は長脚二段透しの無蓋高杯で、上下段とも三方に長方形透しがある。杯部は径が大きく、浅い。胎土および器面が茶褐色を呈する部分が多い。焼成は良く、硬質である。

４は壺の脚部と考えられる約1/3大の破片である。内外面に自然釉が付着しているが、内面の方が濃い。

（松本）



第130図　9号墳出土須恵器実測図

10.　10号墳

(1)墳丘・周溝（第131図）

墳丘の北側を溝によって切られ、陸橋部付近の周溝は上部からの削平によって消滅しており、全体的に遺存状態は良くない。

直交軸での外径は6.24ｍを測るが、主軸方向にやや細長く、平面形は馬蹄形を呈している。周溝幅は56～76cm前後で、深さは20cm前後と浅い。周溝内堆積土はほぼ１層であった。

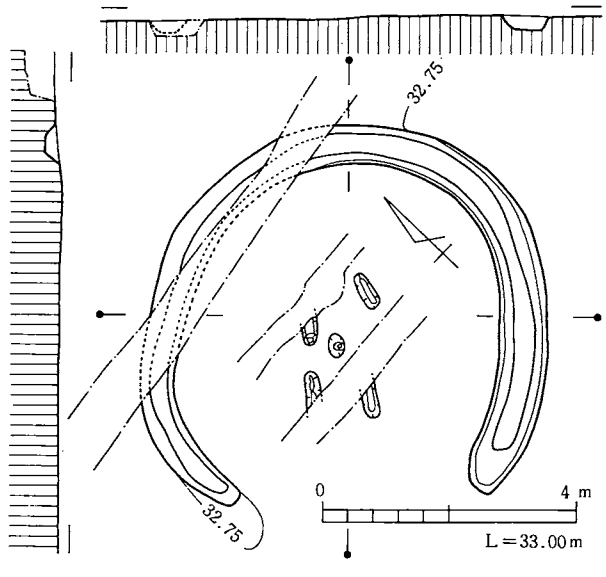
(2)主体部（第132図）

墳丘はすべて削平されており、主体部は遺存しない。墳丘のほぼ中心部に掘方の一部が検出されたが、ゴボウ穴によって分断されている。

掘方の形態・規模からみて、主体部は箱式石棺と考えられる。掘方の中には凝灰岩の細片がみられ、凝灰岩の使用が窺われる。

(3)遺物の出土状態

古墳に伴う遺物は皆無である。　（松本）



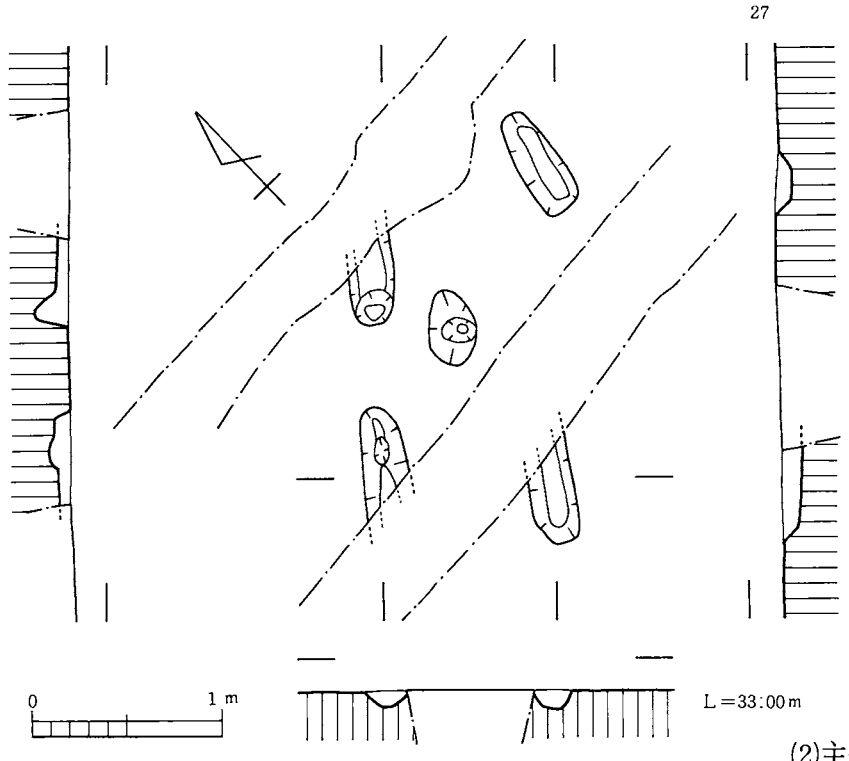
第131図　10号墳墳丘実測図

11.　11号墳

(1)墳丘・周溝（第133図）

南北に走る２本の溝、ゴボウの耕作、上部からの削平などによって遺存状態は良くない。周溝１・４区は比較的遺存状態が良いが、周溝２・３区は削平が著しい。

周溝外径９ｍ強の小型の円墳で、平面形は不整



第132図　10号墳主体部実測図

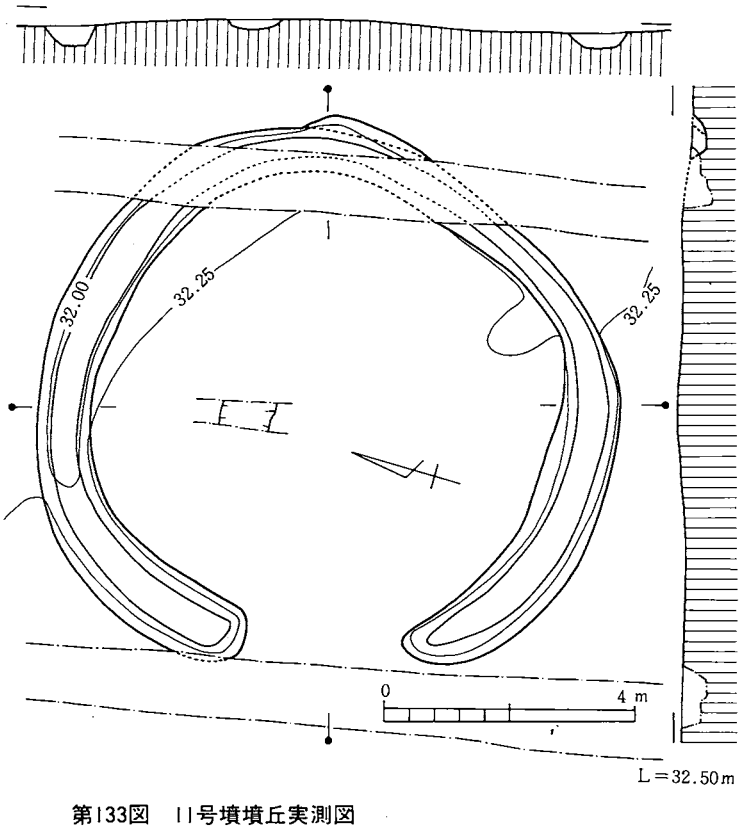
な円形を呈する。陸橋部がやや広くなっているが、削平によって消滅したものと考えられる。

周溝幅は80～112cmを測る部分が多いが、周溝3区では上部からの削平が強く、55cm前後を測るにすぎない。周溝の深さは20cm前後と浅い。

周溝内堆積土は暗褐色の1層と、暗黄褐色（ロームブロックを含む）の2層に区分できる。

(2)主体部

墳丘の中心部の北側に、主体部の掘方の一部と考えられるものが検出されたが、ゴボウ穴などの攪乱が著しく、全体を把むことはできない。掘方の中には、ほぼ原位置と考えられる状態で凝灰岩片（幅約20cm、長さ約30cm）が残っており、主体部の箱式石棺の基底部と考えられる。

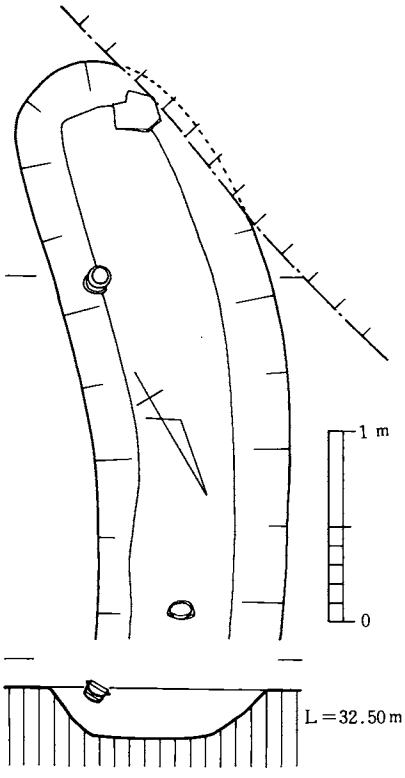


第133図　11号墳墳丘実測図

(3)遺物の出土状態（第134図）

周溝内から須恵器（3点）、土師器（2点）を出土したが、土師器は住居址に伴うものの混入である。

周溝1区では、陸橋部端より約1m北側に蓋杯が1組、蓋を下、身を上に重ねて出土した。その地点から約1.8m北側に杯身が1点置れていた。これらの須恵器は1層からの出土で、住居址から混入した土師器片は2層に含まれていた。



第134図　11号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態実測図

(4)出土遺物

住居址から混入した土師器片と古墳に伴う須恵器があるが、量は少ない。

須恵器（第135図１～３）

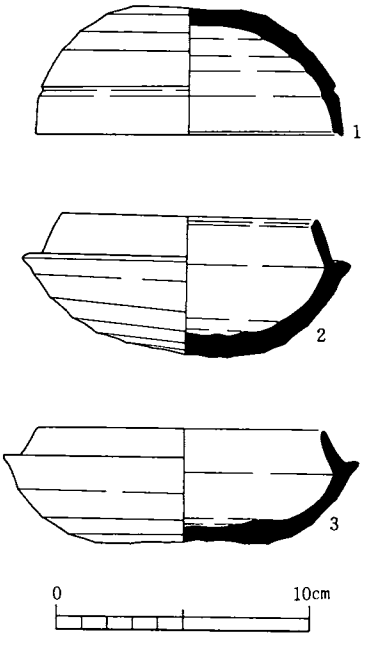
蓋杯、甕があるが、甕は胴部の細片で量も少ない。

杯蓋（１）はほぼ完形で、全体に丸味を帯びた器形である。天井部と体部の境は凹線で画し、体部は比較的短かい。天井部の約2/3はヘラ削りされているが、器壁は厚い。焼成は良く、灰色を呈し、天井部にはわずかに火襷がみられる。

杯身（２）は口径10.1cm、器高5.4cmを測る。器壁が厚く、重厚な造りである。完形品で、立上りはやや内傾している。２は１と重なって（蓋を下に、身を上に）出土し、器形や法量からみてもセットをなすものである。

３は口径11.4cm、器高4.4cmを測る杯身で、２に比べると立上りは内傾し、短かい。法量は２よりひと回り大きいが、器壁は薄い。

（松本）



第135図　11号墳出土須恵器実測図

12．12号墳

(1)墳丘・周溝（第136・137図）

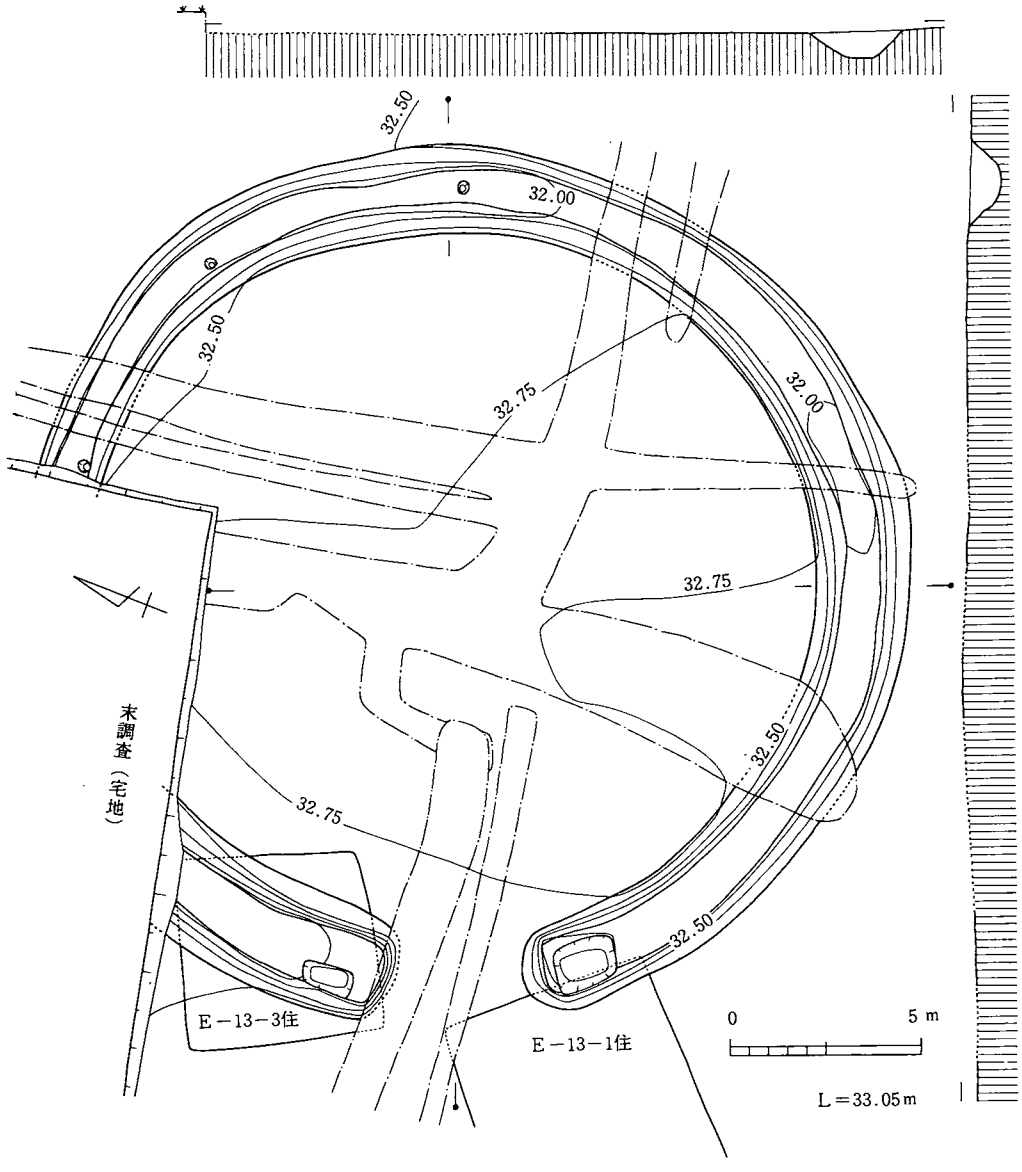
調査区の北端に位置し、周溝１・２区の一部は宅地(圃場整備区域外)のため未調査である。周溝外径23.25m前後の大型の円墳で、平面形は整った円形を呈している。

陸橋部でＥ－13－１・３住を切って造られ、墳丘部は東西、南北に走る数条の溝によって攪乱が著しい。

周溝幅は1.7～3.0mを測り、地点によって広狭の差がある。深さも一定ではないが、80～90cm前後の所が多い。周溝の断面形は逆梯形を呈し、内側法面が外側に比べて緩やかな傾斜である。

周溝内堆積土は概ね５層に区分できた。１層は灰褐色土で、炭化物を含み、粘性に欠ける。２層は暗褐色土で、炭化物や遺物を多く含んでいる。３層は黒褐色土で、黄色土粒や炭化物を含み、遺物も包含されている。４層は褐色土で、黄色土粒やロームブロックを含み、ごくわずかではあるが遺物が含まれている。５層は黄褐色土で、ローム層の再堆積である。

陸橋部を間に、周溝１・４区の周溝底に土壙が１基づつ検出され、各々に馬の埋納がみられた。土壙はやや不整な隅丸長方形を呈している。馬歯はいずれも土壙の端に片寄って出土し、周溝１区の馬歯には轡が、周溝４区の馬歯には土師器を伴っていた。



第136図　12号墳墳丘実測図

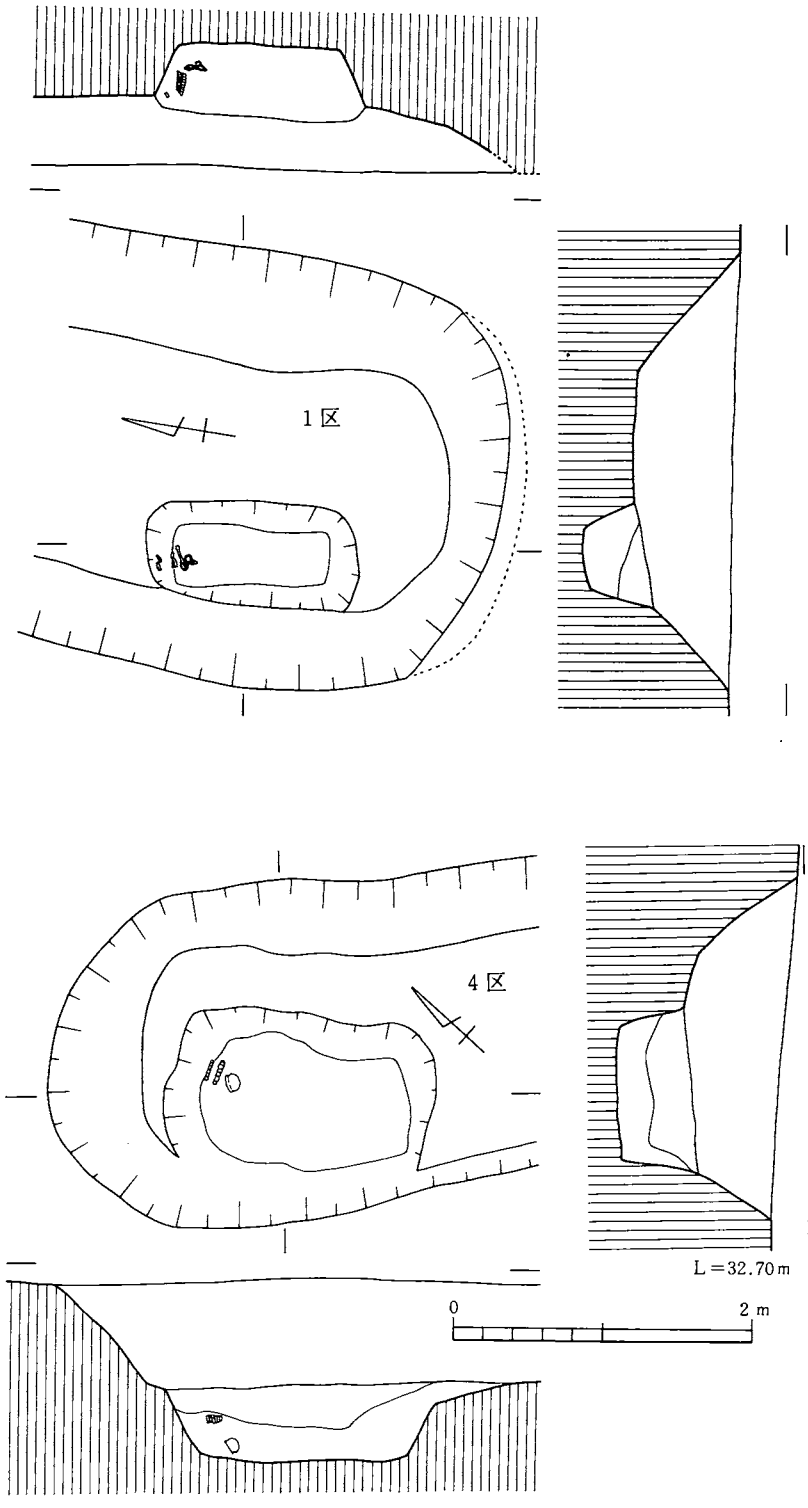
(2)主体部

墳丘はすべて削平されており、墳丘中心部付近は溝による攪乱が著しく、主体部、掘方は検出されなかった。

(3)遺物の出土状態（第138図）

周溝の各区から遺物が出土したが、古墳に伴う遺物のほとんどは周溝１区から出土し、２・３区からの出土物（土師器片）は住居址に伴うものの混入である。

周溝１区では発掘部分のほぼ全域に遺物が出土したが、中央付近に集中している。調査した古墳の中では最も遺物量が多い。これらの遺物は１～４層に含まれていたが、上層のもの程破砕されているものが多い。下層の土器には完形品も含まれているが、特別の配置状態はみられず、雑然としていた。遺物の大半は須恵器であるが、古墳に伴う土師器も多く、鉄器・碧玉製管玉も数点含まれている。鉄器・碧玉製管玉は１層及び２層上位からの出土で、主体部からの移動と考えられる。



第137図　12号墳周溝1区・4区馬埋納土壙実測図

(4)出土遺物

すべて周溝内から出土したもので、須恵器、赤焼土器、土師器、瓦質土器、玉類、鉄器がある。調査した11基の古墳の中で、最も遺物量が多い。

須恵器

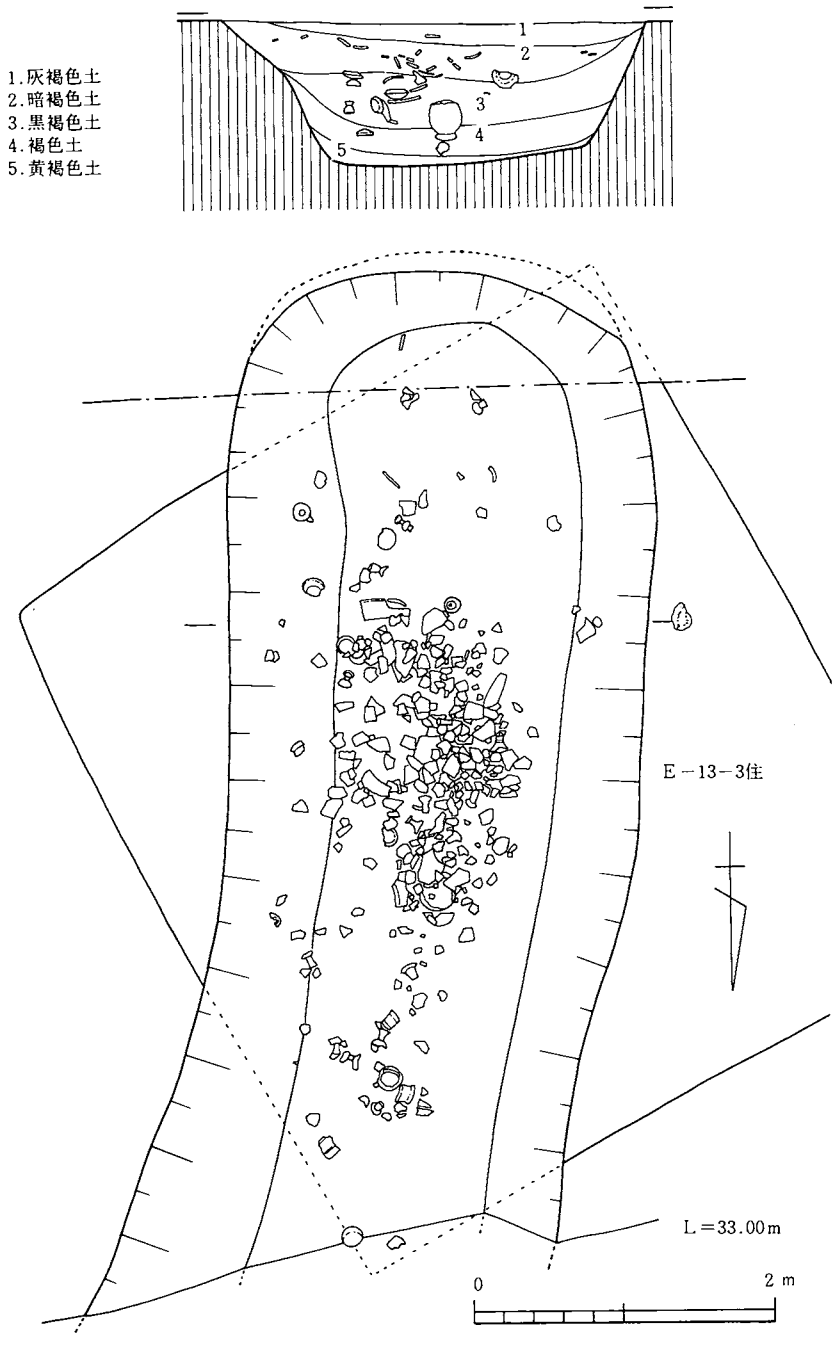
（第139～142図1～47）

器種としては蓋杯、高杯、瑞、提瓶、短頸壺、坩、壺、甕、器台がある。器種、量ともに多いが、かなりの時期差が認められる。

杯蓋（1～9）は5種に分類できる。1はほぼ完形で、口径12.6cm、器高5.1cmを測る。天井部の約3/4がヘラ削りされ、体部との境には明瞭な稜が付く。口唇部前面の段も力強く、全体に丁寧な造りである。2は天井部から体部にかけての破片であるが、両者の境には明瞭な稜が付く。ただ、稜の上下を強く横ナデしており、1より後出するものであろう。体部はやや外開きで、天井部内面には同心円叩き目が残っている。外面は黒色、内面は暗灰色を呈する。

3・4は丸味を帯びた器形で、天井部と体部の境の稜はかろうじて識別できる程度である。天井部の2/3以上はヘラ削りされているが、1に比べると雑である。3は口径13.2cm、4はやや小型で12.7cmを測る。5～7はさらに丸味を帯び、天井部と体部の境はほとんど識別できない。口径14.3～15cmと大型化しているが、器高は5cm未満である。天井部のヘラ削りは雑であるが、器壁は薄い。

8・9はさらに丸味を帯びるが、天井部の頂部は平坦化している。口径12.5～12.7cm、器高3.4cm～4.2cmを測る。天井部のヘラ削りは頂部の平坦面にのみ施され、8は回転ヘラ削りであるが、9は静止ヘラ削りである。



第138図　12号墳周溝１区遺物出土状態実測図

杯身（10～24）は杯蓋よりもさらに変化に富むが、概ね６種に分類できる。10・11・13は口径11.5～12.3cmを測り、立上りも1.5cm前後の高さである。造りは比較的丁寧で、底部のヘラ削りも約2/3の範囲に施されている。

15の類は１点のみであるが、立上りは内傾し、器高が高く、底部はわずかに扁平化している。底部のヘラ削りも約1/2に施されているにすぎない。16・17は立上り高が１cm前後である。いずれも破片からの復原で、時期的には15と大差ないものであろう。18は小破片であるが、立上りが内弯し、高さも1.6cmを測る。19～23は口径10.9～12.0cm、器高 3.5 cm前後の一群で、立上りは短かく内傾し、底部には扁平化がみられる。底部のヘラ削りも1/2以下の範囲に限られ、全体に造りが雑である。

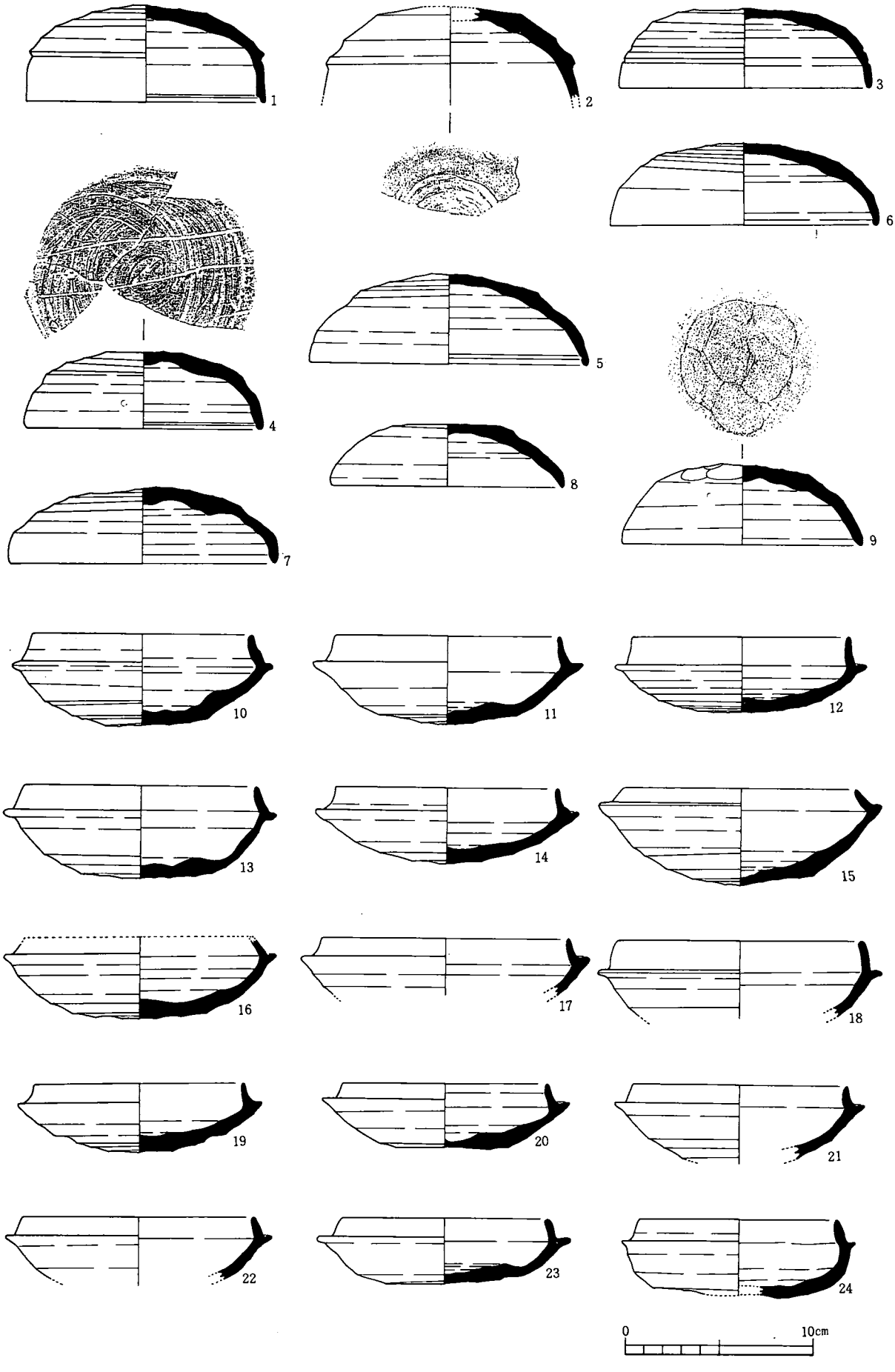
24は一見最古式の須恵器を思わせるが、きわめて雑な造りで、専門の工人の作とは思えない。内底部、外底部ともにナデによる調整であるが、凹凸が多い。

高杯には無蓋（25～30）と有蓋（31～34）がある。25～27は全形を知り得ないが、長脚一段透しの無蓋高杯である。25は全体に丸味を帯び、器壁は厚い。26・27は脚部の破片であるが、三方に長方形透しが施されている。

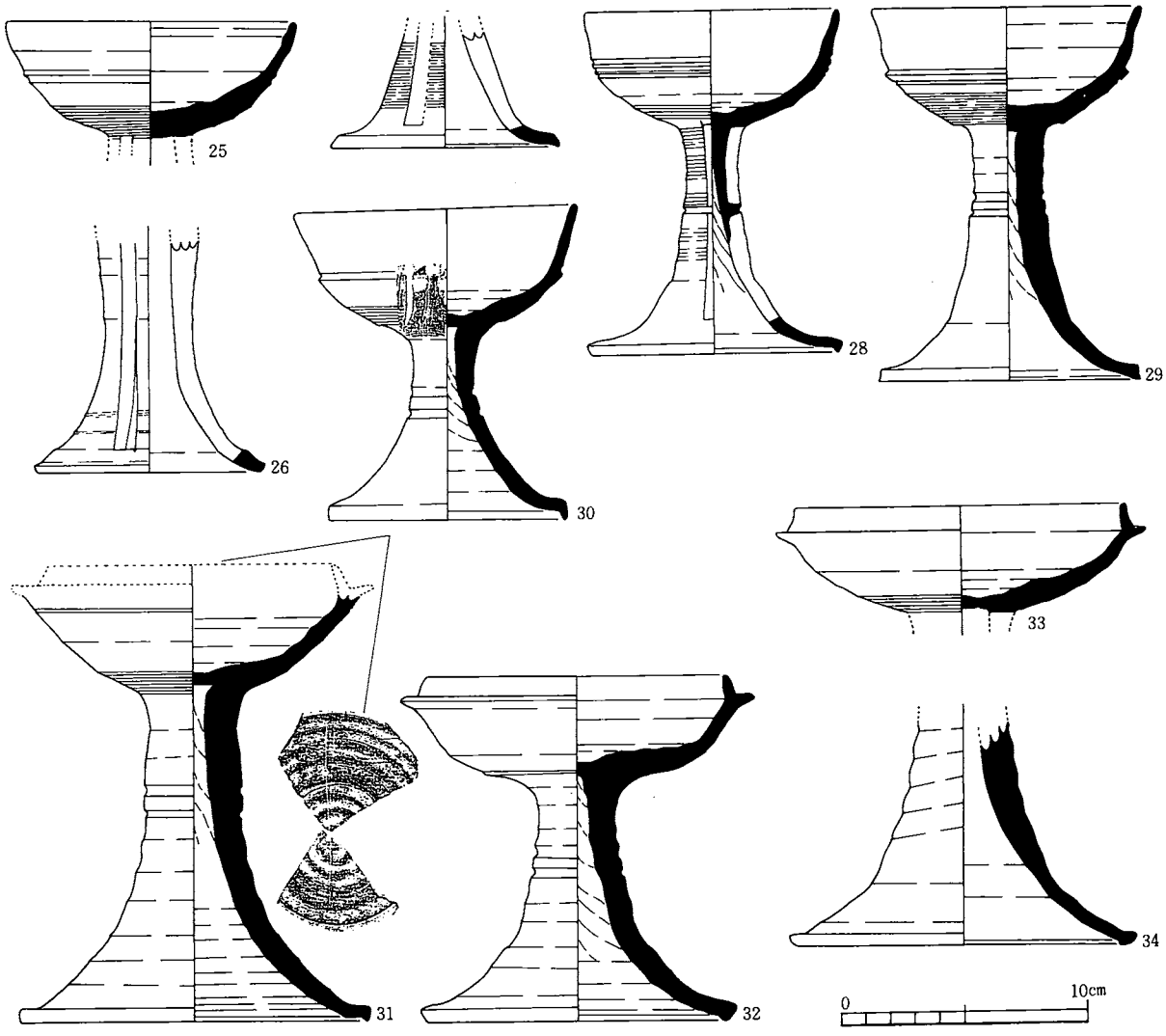
28は長脚二段透しの無蓋高杯で、透し窓は上下段とも二方向にある。脚柱部は細く、上段の透し窓は中まで達していない。29・30は脚部形態がわずかに異なるが、いずれも透し窓はない。杯部は底部と体部の境に明瞭な稜が付き、類似した形態であるが、30の稜はやや丸味を帯びている。

31～34は有蓋高杯であるが、無蓋高杯に比べて総じて脚部が大きい。いずれも脚部には透し窓がなく、透し窓のある有蓋高杯は検出されていない。

瑞（35～38）には時期的な形態差が良く現われている。胴部は肩が張り、尖り底気味の底部（35）から次



第139図　12号墳出須恵器実測図



第140図　12号墳出土須恵器実測図

第に球形化（37）し、38では平底化している。口頸部の変化も如実で、口頸部の径が大から小へ、反比例して口縁部の開きは大きくなっている。35・38はほぼ完形品で、35は口径12.7cm、器高14.5cm、38は口径14.8cm、器高17.6cmを測る。

39は提瓶の胴部から頸部にかけての破片である。胴部外面にはほぼ全面にカキ目を施こし、部分的にナデ調整を加えている。外面には薄く自然釉が付着し、黒色に発色している部分もある。

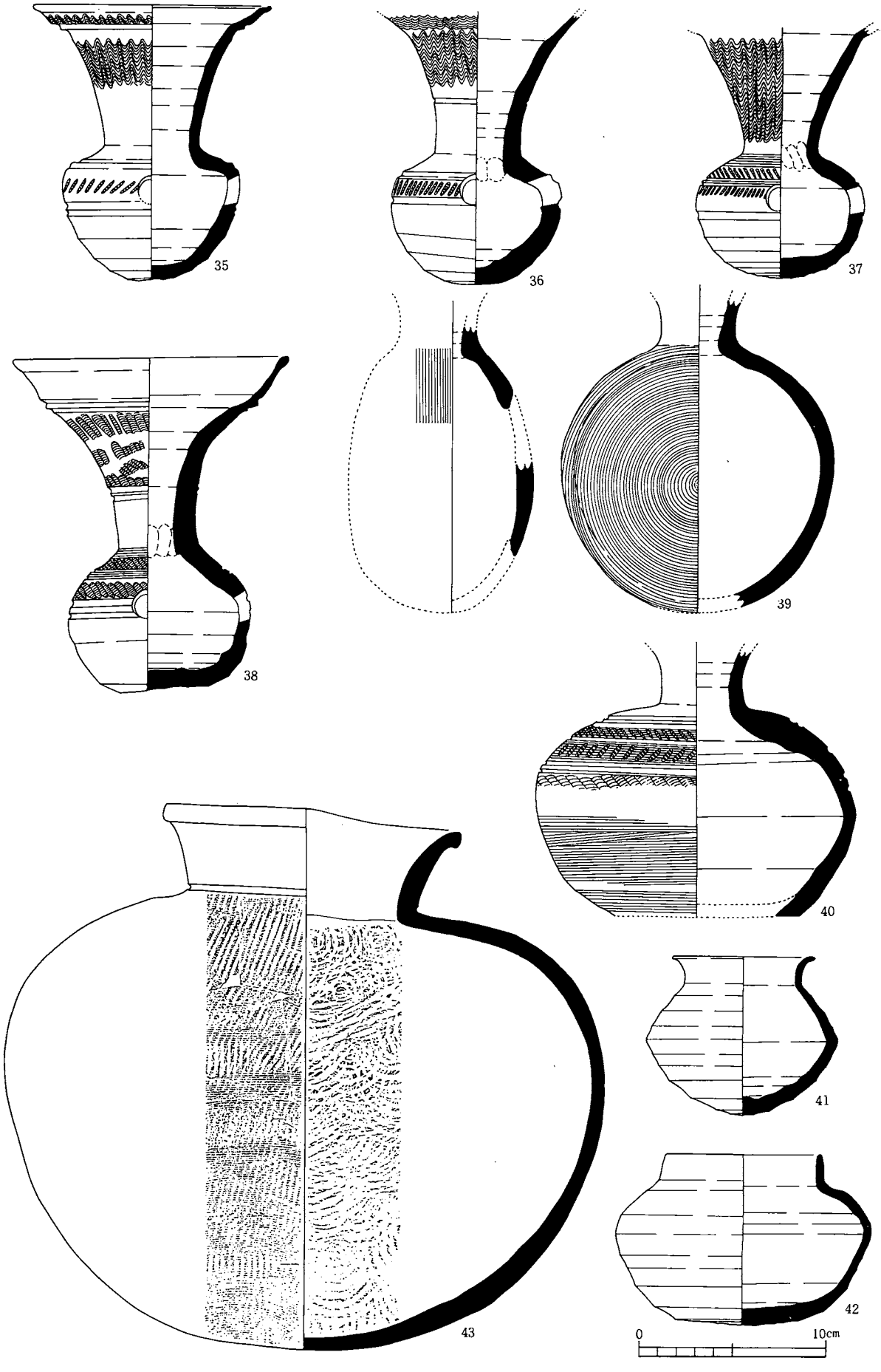
40は細頸の短頸壺で、底部は径の大きな平底である。器壁は厚く、口縁部、底部を欠失している。

41は小型の短頸壺で、口縁部はわずかに外反している。胴部のほぼ中位に最大径があり、底部は尖り気味の丸底である。胎土、整形、焼成ともに良く、暗灰色を呈する。

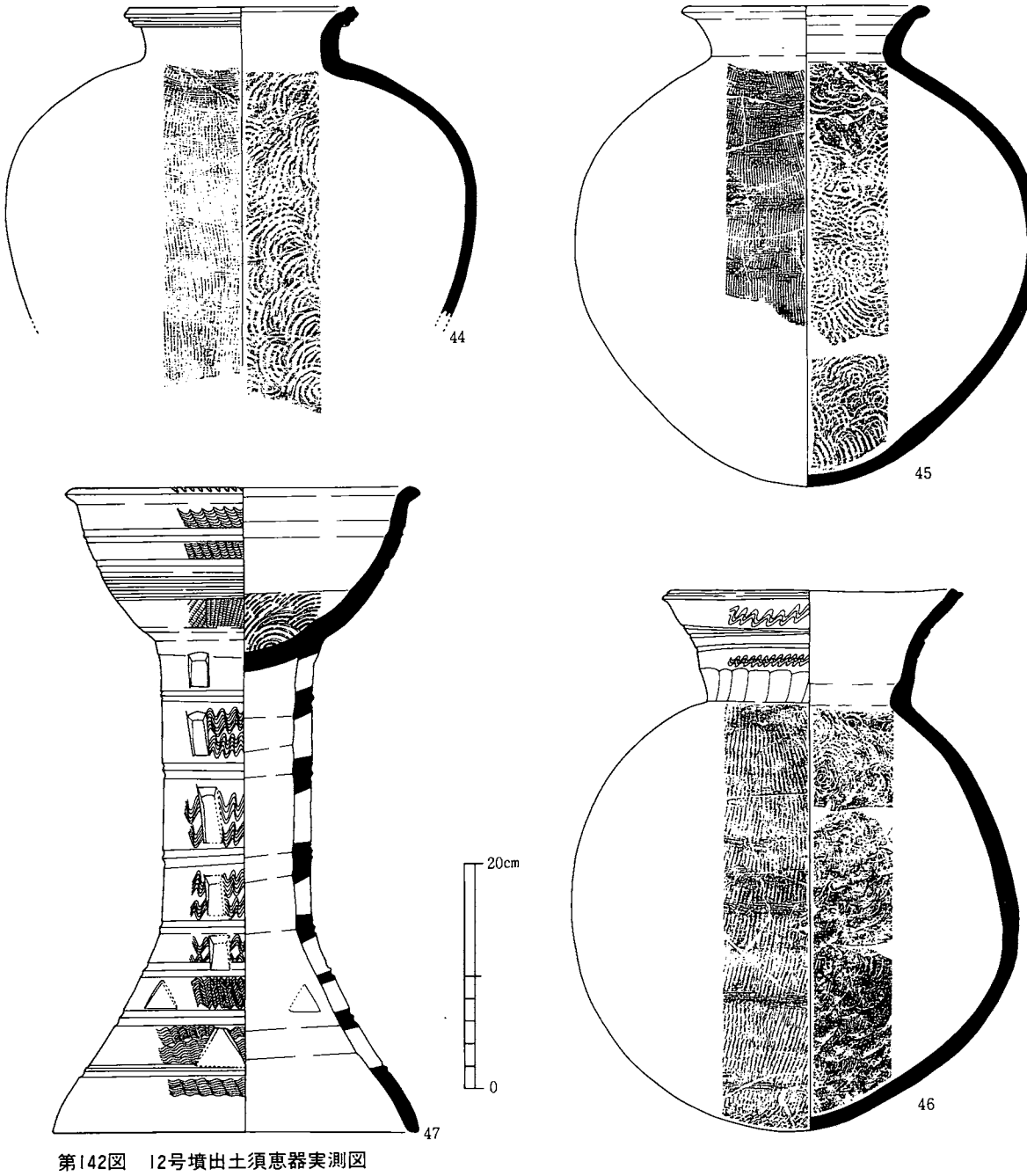
42は坩で、完形品である。口頸部はほぼ直立し、底部は平底気味である。口径8.2cm、器高9.2cmを測る。

43～46は甕で、大小の器形がある。43はややひずんでいるが、小型の甕で、器高の割に胴径が大きい。胴部外面は平行叩き目の上をカキ目調整、内面は同心円叩き目が施されている。44は口径20cmの甕で、胴部内面の同心円叩き目は粗い。胴部外面は木目直交の平行叩き目で、木目が良く観察される。焼成がやや不良で、灰色～淡灰色を呈し、わずかに軟質である。45は口径22cm、器高42.8cmを測る。胴部外面は平行叩き目の上をカキ目調整、内面には同心円叩き目が施されている。内外面の叩き目は、44に比べるとやや細い。44と同じく焼成不良で、色調は同一である。

46は口径26.6cm、器高48cmを測る。44・45に比べて頸部が長く、二段にわたって雑な波状文が施されてい



第141図　12号墳出土須恵器実測図



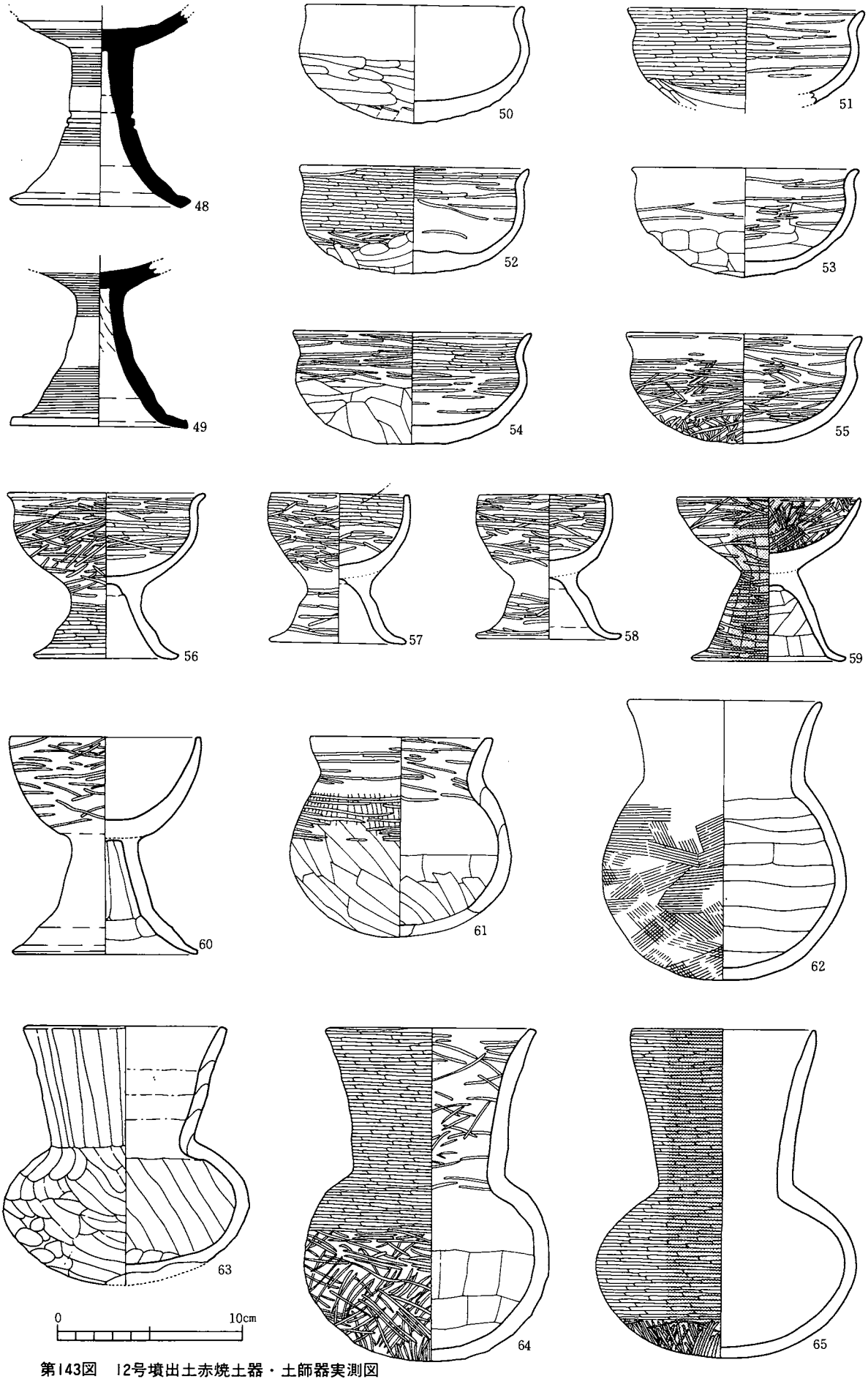
第142図　12号墳出土須恵器実測図

る。胴部外面の調整は前者と同じであるが、内面は細い同心円叩き目の上にナデ調整を加えている。上半では叩き目が残っているが、下半は強くナデられ、叩き目はほとんど残っていない。器壁は厚く、胴部外面、口縁部内面には自然釉が付着している。色調は部位によって異なるが、茶灰色～灰褐色を呈する部分が多い。

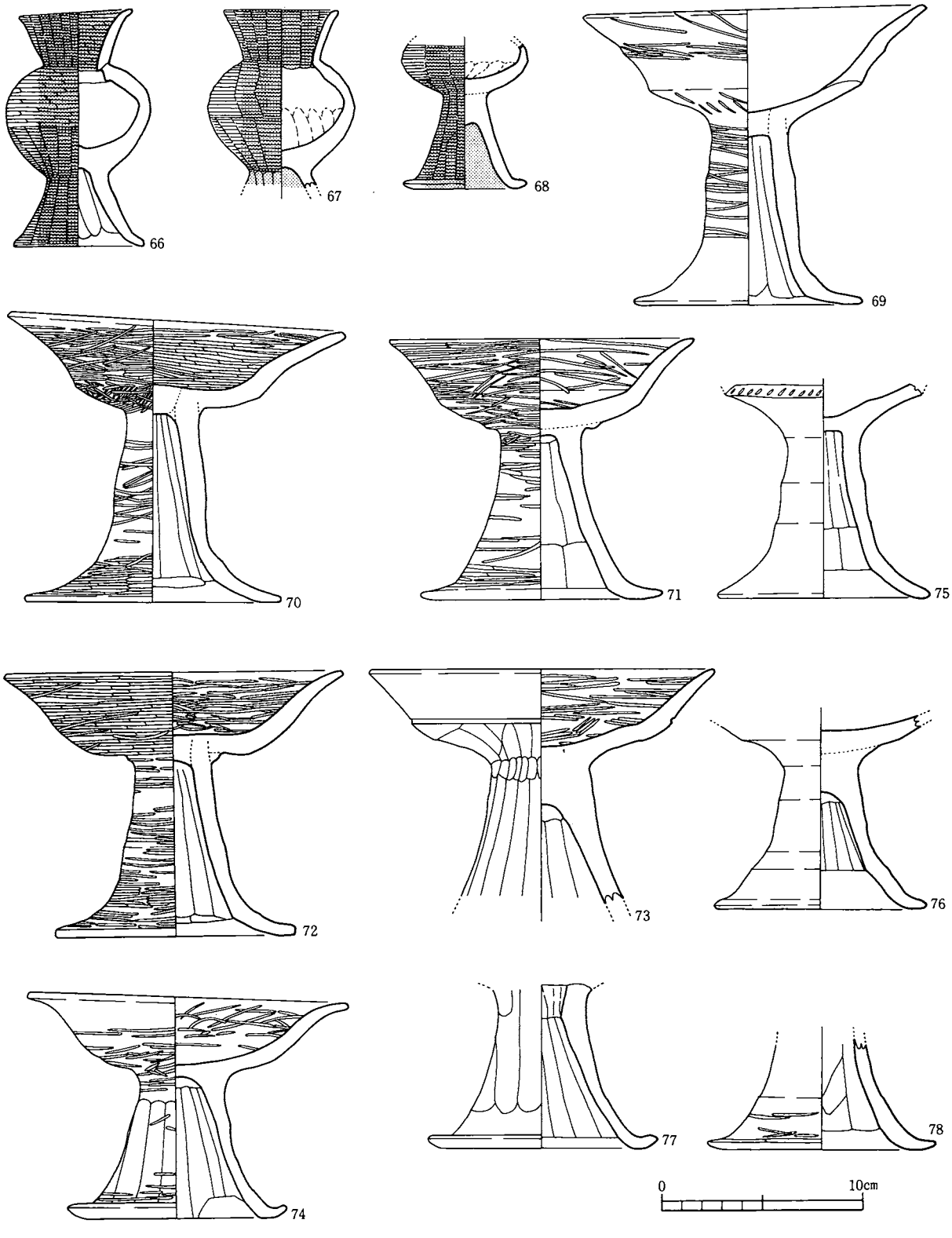
47は杯部口径32cm、器高57.2cmを測る器台である。脚部下半は約1/4大しか出土しなかったが、他の破片は未調査部分に埋没しているものと考えられる。調整、焼成は良いが、脚部下半はやや焼成が悪く軟質である。脚部の透し窓は７段あり、上の５段は三方に長方形透し、下の二段は三方に三角形透しがある。下２段の三角形透しは千鳥に配されている。

赤焼土器（第143図48・49）

整形や調整は須恵器の技法であるが、焼成は酸化焔焼成で、色調は赤褐色を呈する。器形はいずれも高杯で、脚部の形態にはわずかに差異がある。杯部は大部分を欠失しているが、遺存部からみると無蓋高杯と考



第143図　12号墳出土赤焼土器・土師器実測図

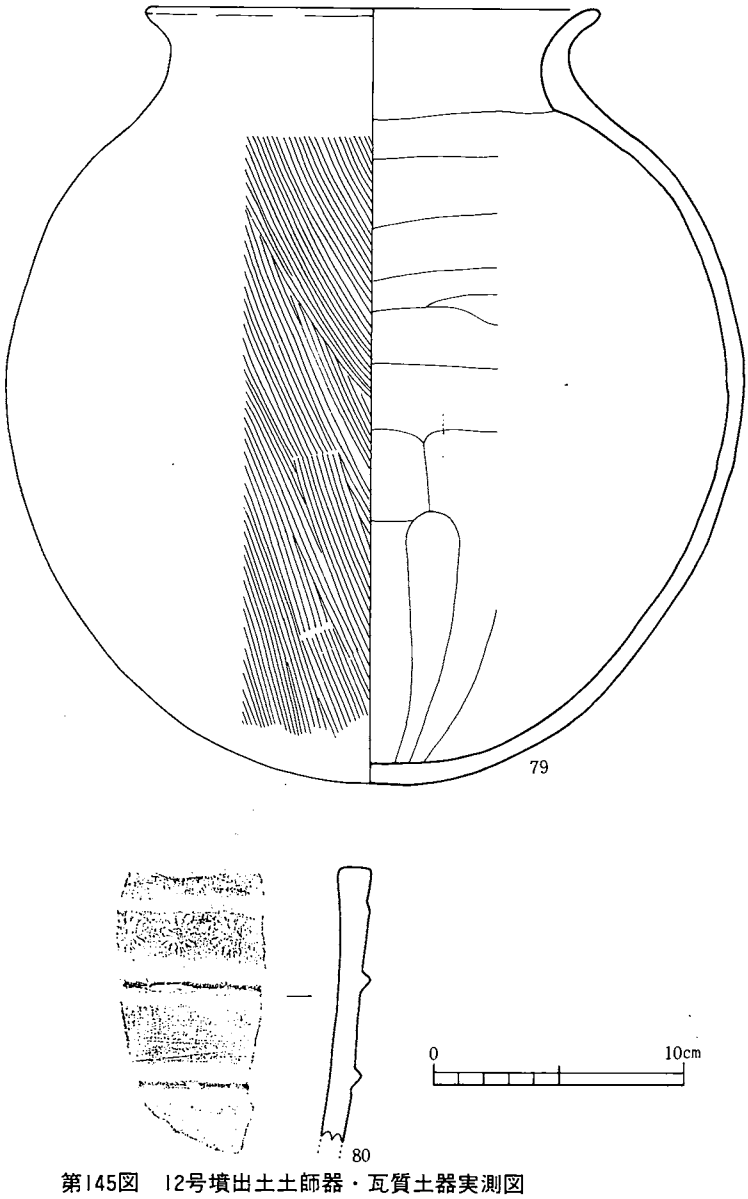


第144図　12号墳出土土師器実測図

えられる。焼成は他の土師器と比べても悪く、器面が荒れている。

土師器（第143～145図50～79）

古墳に伴う土師器がきわめて多い。器種も多様で、盌、台付鉢、短頸壺、長頸壺、小型台付壺、高杯、甕がある。



第145図　12号墳出土土師器・瓦質土器実測図

盌（50～55）は同様の形態である。器面調整は個体によって異なるが、外面はヘラ削りとヘラミガキ、内面はヘラミガキが多い。いずれも胎土は精良で、焼成も良く赤褐色を呈する。55の外底部には黒斑が見られる。50は周溝4区の馬埋納土壙内から出土したもので、古墳築造時の遺物と考えられる。

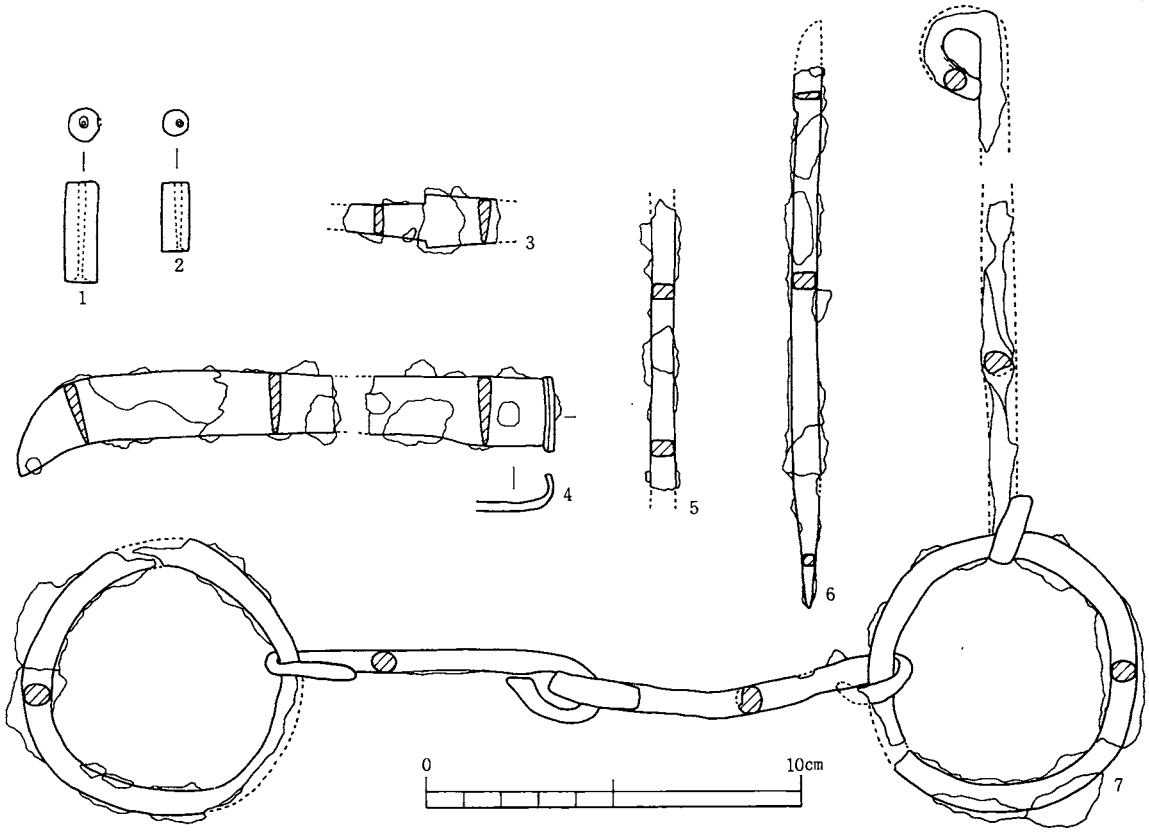
56～60は台付鉢であるが、鉢部と脚部の形態により4種に区分できる。56は小型の盌に脚部を付けたもので、鉢部の内外面、脚部の外面にはヘラミガキが施されている。57・58は類似の器形で、半球形の鉢部に56と同様な短脚が付いている。59は鉢部、脚部ともやや大型になり、鉢部内外面、脚部外面には赤色顔料が塗られている。60はさらに大型品である。56～59が丁寧な造りであるのに対して、整形、調整ともやや雑である。

61は短頸壺で、ほぼ完形品である。口径10cm、器高10.7cmを測る。62～65は長頸壺であるが、口頸部の高さや胴部形態には変化がある。62の胴部は球形に近く、口頸部の高さは約4.5cmである。胴部外面はハケ目とナデ調整、内面はヘラ削りされている。胴部から底部にかけての側面に黒斑がある。63は扁球形の胴部に約6cmの高さの口頸部が付く。口頸部外面、胴部内外面はヘラ削りされている。64は球形の胴部に高さ約8cmの口頸部が付く。口縁部先端はわずかに外反し、頸部の径は比較的大きい。65は64に類似するが、胴部はやや扁球形で、口縁部形態は直口である。外面は丁寧にヘラミガキされ、赤色顔料が塗布されている。

66～68は小型台付壺である。67は脚部を欠くが、66ときわめて類似した器形である。68はやや小型で、壺の胴部は扁球形になる。66には赤色顔料が、67・68には黒漆が塗布されている。66は口径5.7cm、胴部最大径7.4cm、器高11.7cmを測る。

69～78は高杯であるが、器形や調整技法などには差異がある。69・70の杯部は底部が横に延び、稜をもって屈曲して体部は外反する。脚部は筒状の脚柱部が長く、下端部は大きく横に開いている。69は杯部・脚部の外面、70は杯部内外面、脚部外面にヘラミガキが施されているが、69のヘラミガキは粗である。72の脚部は69・70に類似するが、杯部の底部と体部の境は丸い。調整法は70と同じである。

71の杯部は69・70と同一形態であるが、脚柱部がわずかにハの字形に開き、脚部下端はさらに大きく横に開いている。73の杯部は浅く、底部と体部の境には明稜な稜が付く。脚部は下端部を欠失しているが、74・77のような形となるものと考えられる。杯部内面はヘラ削り、杯部の底部から脚部外面はヘラ削り調整であ



第146図　12号墳出土玉類・鉄製品実測図

る。74の杯部は底部から体部にかけて丸味をもち、口縁部は大きく外反している。脚部は全体にハの字形に開き、下端部は折れて横に開いている。

甕（79）はほぼ完形に復原でき、口径18cm、器高30.3cmを測る。胴部は球形で、頸部は短かく、口縁部は大きく外反する。胴部外面はハケ目調整で、内面はヘラ削りである。胴部の中位には煤が付着している。

瓦質土器（第145図80）

口縁部の直下に菊花文を施こし、その下には2条の凸帯を巡らしている。内外面とも横ナデ調整で、暗灰色を呈する。（松本）

玉　類（第146図1・2）

周溝内から管玉が2点出土した。材質は碧玉で、濃緑色を呈する。1は長さ26mm、径8.5mm、孔径1～2mmを測り、わずかに欠損部分がある。2は長さ18mm、径7mm、孔径1～2mmを測り、1よりやや小さい。両者とも主に片側より穿孔し、反対側から補助的な穿孔を行っている。（田尻）

鉄製品（第146図3～7）

刀子、鎌、鉄鏃、馬具が出土した。刀子（3）は茎から身にかけての破片で、両関である。鎌（4）は2片に折れており、直接には接合しないが、同一個体と考えられる。先端部はかなり弯曲し、基部は柄の着装のためにほぼ直角に折り曲られている。6は片関片刃箭式の長茎鏃で、遺存長は14.2cmを測る。

7は周溝1区の土壙から馬歯に伴って出土した轡である。馬銜は二連式で、環状鏡板は直径7.2～7.5cmを測る。鏡板には直接引手が取付けられているが、立聞については不明である。各々の部分の断面は楕円形である。全体的に錆化が進み、細部については不明な点が多い。（松本）

13. 小　結

55年度に調査した古墳は11基（第７表）で、位置的にみて塚原古墳群の東南端に当る重要な部分である。古墳の遺存状態は概して悪く、大半のものが周溝と主体部のごく一部（掘方）を残しているにすぎないが、塚原古墳群を理解する上で重要な意義をもつものと思われる。各古墳についてはすでに記述したので、ここでは11基の古墳について項目別に整理しながらまとめとしたい。

(1)墳　丘

11基の古墳はすべて円墳で、墳丘を削平され地下に埋没した状態であった。調査地一帯は畑作地で、地表には何ら標識物はなく、調査前においては古墳の存在を探知することができなかった。

これらの古墳が破壊され埋没していった事情は、「（前略）漸々ニ作所と成、其跡纔に残るも有。（後略）」という記事[註1]に象徴的に記録されている。

６・12号墳の周溝堆積土の上層から瓦質土器が出土しており、古墳のあるものは室町時代頃には周溝にある程度の窪みを残す状態であったことが知られる。このことは、縦貫道調査区において８号方形周溝墓、丸山６号墳（将軍塚）の周溝部分に多数の中世墳墓[註2]が配置していることでも窺える。

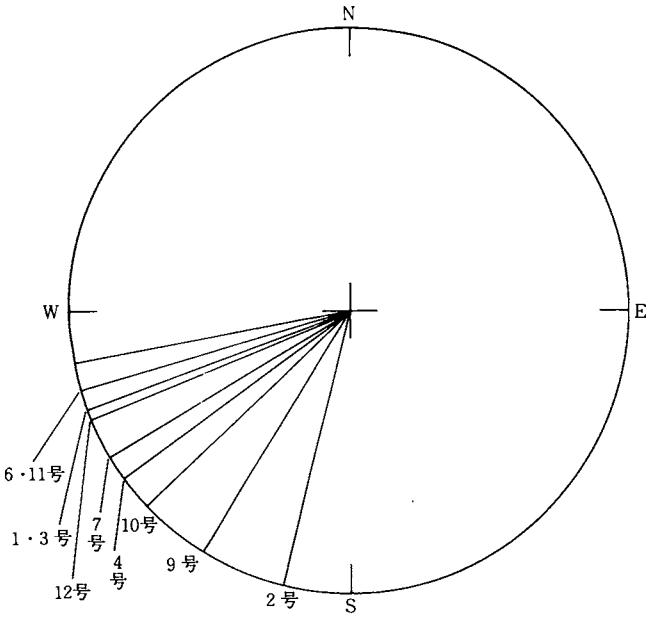
上の原遺跡の調査区に大小の溝が検出され、これらは台地の開発（耕地化）に関連するものと考えられる。溝に伴う遺物はきわめて少なく、個々の溝の年代比定は困難であるが、上限は室町時代、下限は明治時代と考えられ、江戸時代中期以降に属するものが多い。

このようにみると、これらの古墳の多くは室町時代以降、塚原台地の開発（耕地化）によって消滅したものと考えることができる。塚原古墳群全体についてみれば、破壊の波は昭和30～40年代まで続いたようであるが、上の原支群については明治時代以前に破壊されたものと考えられる。

墳丘の規模は直径約23ｍ（12号墳）から６ｍ強（10号墳）の範囲にあり、一定ではない。大まかに見れば、10ｍ以下の小規模墳（４・５・７・10・11号墳）と14～23ｍの中規模墳（１～３・６・９・12号墳）に分け

第７表　古墳一覧表

	墳丘の規模				周溝幅			陸橋部幅	陸橋部方位	主体部	出土遺物	
	A	B	C	D	E	F	G	H			主体部	周溝
１号墳	－	－	－	－	2.20	－	－	3.08	W－20°－S	横口式家形石棺	－	須恵器・土師器・ガラス丸玉・管玉・鉄鏃・刀子
２号墳	14.68	10.48	(15.44)	11.20	(2.32)	1.96	2.80	2.40	W－76°－S	横穴式石室	－	須恵器・土師器・管玉・鉄器片
３号墳	16.68	12.80	(17.44)	12.80	(2.52)	2.12	2.12	2.64	W－20°－S	－	ガラス丸玉	須恵器・土師器・ガラス丸玉・ガラス小玉・手鎌・鉄鏃
４号墳	10.60	7.80	10.60	7.92	1.52	1.16	2.08	2.32	W－36°－S	－	－	須恵器・土師器
５号墳	8.16	7.04	8.64	7.08	0.84	0.76	0.68	2.00	W－10°－S	－	－	須恵器・土師器
６号墳	18.24	14.60	(20.80)	16.08	(2.88)	1.80	2.08	1.84	W－16°－S	横穴式石室又は横口式家形石棺	－	須恵器・土師器・刀子・鍬先・馬歯
７号墳	7.76	6.08	7.72	5.72	0.96	1.04	0.96	1.44	W－31°－S	箱式石棺	－	須恵器・土師器・鏡片
９号墳	13.76	10.64	(13.92)	11.56	1.00	(1.36)	1.72	0.72	W－58°－S	－	－	須恵器
10号墳	5.96	5.12	6.28	(4.92)	(0.60)	0.76	0.64	3.76	(W－43°－S)	箱式石棺	－	－
11号墳	(8.28)	(7.08)	9.20	7.44	0.84	0.96	(0.68)	2.64	(W－16°－S)	箱式石棺	－	須恵器
12号墳	22.70	18.15	－	－	－	2.45	2.40	3.35	W－22°－S	－	－	須恵器・赤焼土器・土師器・瓦質土器・管玉・刀子・鎌・鉄鏃・曲・馬歯



第147図　陸橋部の方位

られる。縦貫道調査区では、大型から小型への推移が指摘されているが[註3]、上の原支群においてはほぼ同時の築造であり、墳丘規模と時間との相関関係は認められない。

2～12号墳は一定の間隔を保ちながら、整然と配置している。このことは、同時性という点以外に、一定の規律（企画）をもって築造されたことを推測させる。

11基の古墳にはすべて周溝があり、1カ所に陸橋部を設けている。上部からの削平を受けているため、検出面が本来の形態、規模を示すものではないが、周溝の幅や深さは墳丘規模に比例している。周溝の断面形はすべて逆梯形で、内側（墳丘側）法面の傾斜は外側に比べて緩やかである。周溝は掘削時、あるいはその直後に1/4前後が埋まっており、また常時水をたたえた形跡はない。古墳の配置と同様、陸橋部の方位（第147図）にも一定の規則性がある。

(2)内部主体

主体部の遺存は悪く、完全に消滅しているか、残っていても掘方の一部を残すにすぎない状態であった。したがって、主体部の構造・規模については不明な点が多い。主体部の種別は次のようになる。

横口式家形石棺……1号墳
横穴式石室……2号墳
横口式家形石棺又は横穴式石室……6号墳
箱式石棺……7・10・11号墳
不　明……3・4・5・9・12号墳

以上のように、1・2・6号墳のように墳丘規模の大きい古墳では横口式家形石棺や横穴式石室を採用し、7・10・11号墳のような小規模墳には箱式石棺が採用されている。そうだとしたら、内部主体の不明な5基の古墳のうち、3・9・12号墳は横口式家形石棺又は横穴式石室、4・5号墳は箱式石棺であった可能性が強い。

ほとんどの古墳の周溝や掘方などから凝灰岩の破片が出土しており、その他の石材は1点も出土していない。すべての石材が凝灰岩であったとするのは短絡的であろうが、石材の大部分は凝灰岩であったことは肯首されよう。

1・6号墳の主体部は横口式家形石棺の可能性がある。横口式家形石棺は九州では福岡・佐賀・熊本に分布しており、塚原古墳群を除けばきわめて散発的に採用されている。しかも、前方後円墳と組合さり、首長系列墓に属するものが多い。年代的には5世紀に盛行している。

塚原古墳群においては、古くから石之室古墳の主体部が横口式家形石棺[註4]であることが知られていたが、縦貫道調査区においても36号方形周溝墓、丸山8号墳、丸山34号墳で横口式家形石棺が確認されている。上の原1・6号墳の場合は不確定としても、主体部が消滅したものや未調査の古墳にも横口式家形石棺が含まれ

ている可能性が高く、この種の石棺のあり方は他の地域とは全く異質である。

塚原古墳群における様口式家形石棺の初源は、現在のところ36号方形周溝墓の5世紀の第2四半紀と考えられる。石之室古墳は墳丘から出土した須恵器[註5]から5世紀の第4四半紀、その他の古墳は6世紀代に属するものと考えられる。上の原支群の1・6号墳の年代は、6世紀の前半～中葉に比定される。

一方、塚原古墳群においては横穴式石室がきわめて少ない。5世紀後半以降、古墳の主体部の主流を占めるのは横穴式石室であるが、塚原古墳群においては数基を数えるにすぎない。この点については、後で考察を加えたい。

(3)出土遺物

調査した古墳の主体部がほとんど消滅していることもあって、3号墳の掘方から玉類が出土した以外は、遺物はすべて周溝内から出土したものである。周溝内からは、住居址に伴う土師器片も相当数出土しているが、これらは除外して、古墳に伴う遺物について概観することとしたい。

11基のうち10号墳は無遺物であるが、他の10基から遺物が出土した。1・3・12号墳は遺物量が多く、2・6号墳は中程度、他は少量である。

出土地点をみると、周溝1区に集中している古墳（1～3、5・7・9・11・12号墳）と、周溝1区と3区に分布する古墳（4・6号墳）があるが、後者の場合でも量的には1区に多い。このように、出土地点は周溝1区に圧倒的に多く、稀に3区に少量の遺物がみられるが、2・4区では皆無に等しい。

出土状態をみると、完形品をかなり含み、破片を含めて多量の遺物が集中している古墳(1・3・12号墳)、量は少ないが、完形品を主体とした遺物が点在する古墳（4・7・9・11号墳)、完形品は1点もなく、破片が散乱状態の古墳（2・6号墳）がある。また、同一の古墳でも3号墳の場合は、下層の遺物は完形品を多く含み、ある程度の配列を示すのに対して、上層出土遺物は破片が散乱状態であるというように、出土状態に相異がみられる。

遺物の種類としては須恵器、赤焼土器、土師器、瓦質土器、玉類、鉄製品、鏡片、馬歯、凝灰岩片がある。全体的には須恵器が圧倒的に多いが、12号墳では土師器も多量に出土している。

須恵器には各種の器形があり、古墳出土品として一般的なものであるが、1号墳出土の有蓋高杯（第97図10・11・16・17・18・19）は他とは異質である。器形・焼成・色調が他とは異なり、破片であっても一見して識別できる。器形的には朝鮮半島製品と類似している点もあるが、舶載品と速断することはできない。胴部外面に細い平行叩き目を施こした小型の甕（第98図30）は、あるいは有蓋高杯と伴うものかもしれない。

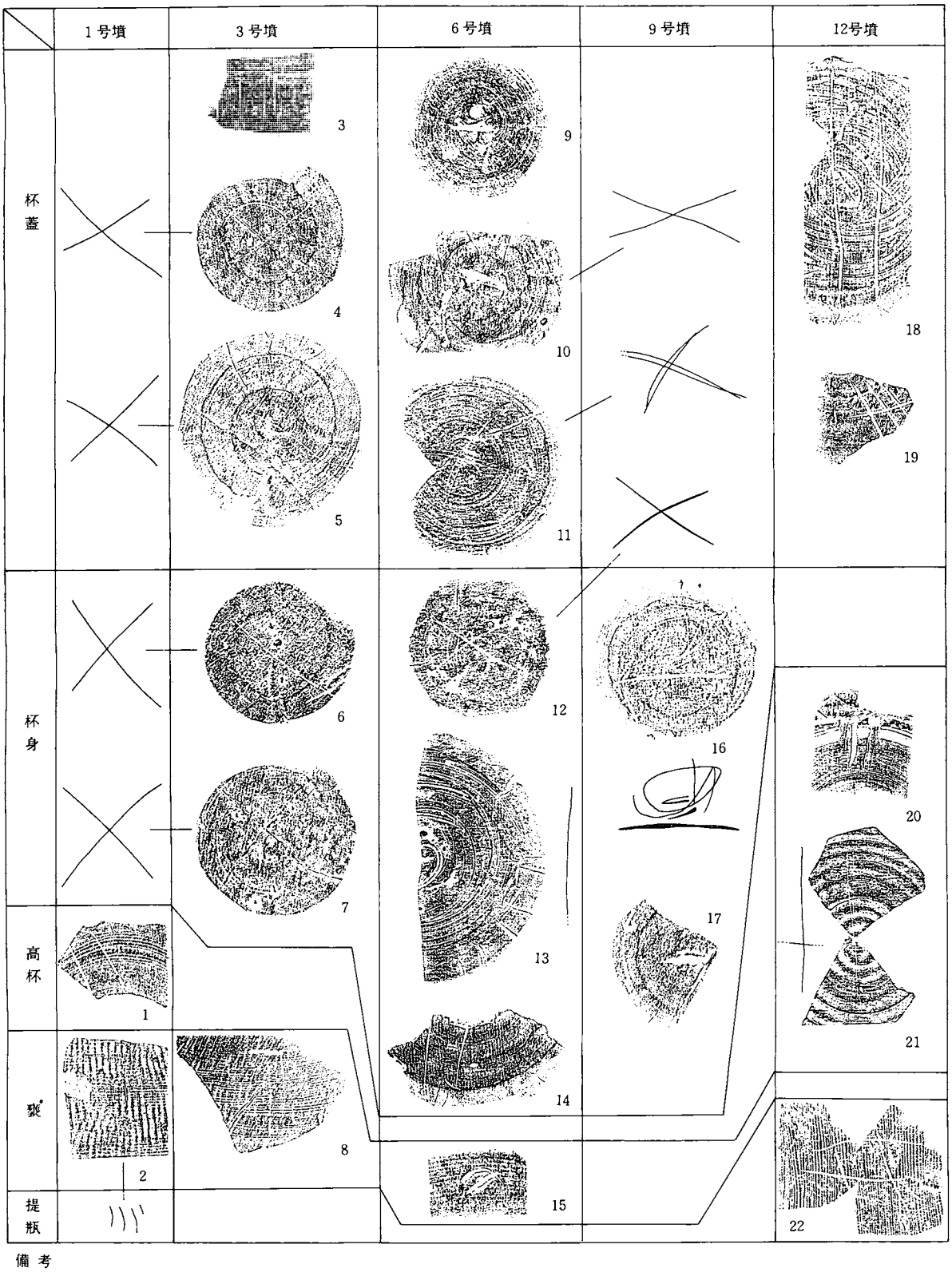
須恵器の中には、第II様式（6世紀前半）に比定される一群がある。従来、肥後においてはこの時期の資料に乏しく、古墳出土品ではあるが今後の指標となろう。

塚原古墳群は宇城古窯跡群[註6]の一角に位置している。古墳時代に限ってみれば、当尾窯跡、元米ノ山窯跡があり、萩尾大溜池窯跡でも古墳時代の須恵器が採集されている。時期的には6世紀後半の窯跡であるが、元米ノ山窯跡は5世紀末～6世紀前半に遡る可能性もある。これらの窯跡の資料は断片的で、今回の出土品と直接対比することはできないが、おそらくこれら一連の窯跡群から供給されたものと考えられる。

ヘラ記号を有する須恵器は小破片も含めて22点(第148図)である。出土した須恵器には破片も多数含まれており、総個体数の算定は困難であるが、概ね250個体程度と推定され、ヘラ記号を有するものは全体の約8.8%にあたる。

出土量の多少にもよるであろうが、出土古墳は1・3・6・9・12号墳で、いずれも中規模古墳である。

器種では蓋杯、高杯、甕、提瓶に施されているが、15点は蓋杯（杯蓋8点、杯身7点）である。高杯、甕



備考

〔1〕ヘラ記号の部位　1.高杯杯部底部外面　2.甕胴部外面　3.杯蓋体部外面　4・5.杯蓋天井部　6・7.杯身底部外面　8.甕肩部外面　9～11.杯蓋天井部　12～14.杯身底部外面　15.甕頸部　16・17.杯身底部外面　18・19.杯身底部外面　20.高杯杯部体部～底部外面　21.高杯杯部底部内面　22.提瓶胴部外面

〔2〕縮尺は約$\frac{1}{3}$

第148図　須恵器ヘラ記号集成図

は各々３点、提瓶は１点であった。

記号の種類は14種のものがあるが、単直線の組合せが多い。第148図２・13・20などはヘラ傷との区別が難しい。記号を有するもので、セット関係の把めるものは少ないが、３号墳の４（蓋杯）と６・７（杯身）は器形、自然釉などの状態からセットをなすものと考えられる。

ヘラ記号の施されている部位は、杯蓋では天井部が多いが、３は体部外面に施されている。杯身はすべて底部外面に施されている。高杯では杯部の底部外面に２点あり、21は杯部底部内面に施されている。22点のうち、内面に施されているのはこの１点だけである。甕は胴部外面に２例、頸部外面に１例があり、提瓶では胴部外面に施されている。

ヘラ記号の線は極細線（13・21）、細線（２・４～７・10～12）、太線（１・３・８・14・16・18・19・22）、極太線（９・15・17）の４種があり、工具の異なりを反映している。

古墳ごとの際立った特徴はないが、12号墳の例は21を除いて肉太の線で描かれている。また、３・６号墳では×が多い。

ヘラ記号の施されている須恵器の年代は６世紀前半～後半のものであるが、６世紀終末には少ない。

ヘラ記号は多くの問題をもち、未解決の部分も多いが、特殊な記号については製品の需給を知る目安となると考えられる。ここで報告した事柄からは何ら結論は導き出せないが、今後の資料としたい。

土師器にも各種の器形があるが、日常用器と共通する器形と、祭祀供献用に特別に製作された土器とがある。日常用器と共通する器形には甕と盌があるが、量はきわめて少ない。

甕は１号墳から３個体、４・６・12号墳から各々１個体が出土しているにすぎない。４号墳出土例は全体の約1/2弱の破片であるが、これは後世の削平によって損われたと考えられ、本来は完形品であったと推定される。他の個体はすべてほぼ完形に復原することができた。さらに、すべての甕の胴部には煤が付着しており、煮沸に使用されている。出土状態からみて、４・６・12号墳は初葬時、１号墳の場合は追葬時に供献されたものと考えられる。このように、供献時期は異なるが、煤の付着する煮沸行為には同義のものがあると考えられる。これらの甕は、集落（住居）で日常生活に使用して煤が付着したのではなく、墓前祭祀として煮沸[註7]が行われたと考えたい。

土師器の盌、高杯、台付鉢、小型台付壺、長頸壺は、器面をヘラガキしたものが多く、赤色顔料や黒漆を塗布したものがあり、祭祀供献用に特別に製作された仮器と考えられる。また、甑のミニチュアと考えられるものも３・12号墳から出土している。

土師器のヘラ記号が１点出土している。12号墳からの出土で、高杯の杯部底部外面に×が施されている。土師器では唯一のヘラ記号である。

周溝から出土した土器（須恵器・赤焼土器・土師器）は、周溝に供献することを第一義としたもの、周溝外で使用され、二次的に周溝に供献されたものに大別できる。前者の例は１・３・４・７・９・11・12号墳にみられ、後者は、１・２・３・６・12号墳において確認することができた。後者の場合、完形品を含む場合もあるが、破砕されているものが多い。

玉類・鉄製品も周溝内から出土しているが、鉄製品のごく一部は原位置と考えられるものの、大半は主体部の盗掘・破壊に伴って移動したものと考えられる。同様なことは、周溝から出土した凝灰岩についてもいえることである。したがって、玉類・鉄製品のほとんどは副葬品であって、周溝出土の土器類とは性格を異にする。

(4)馬の埋納

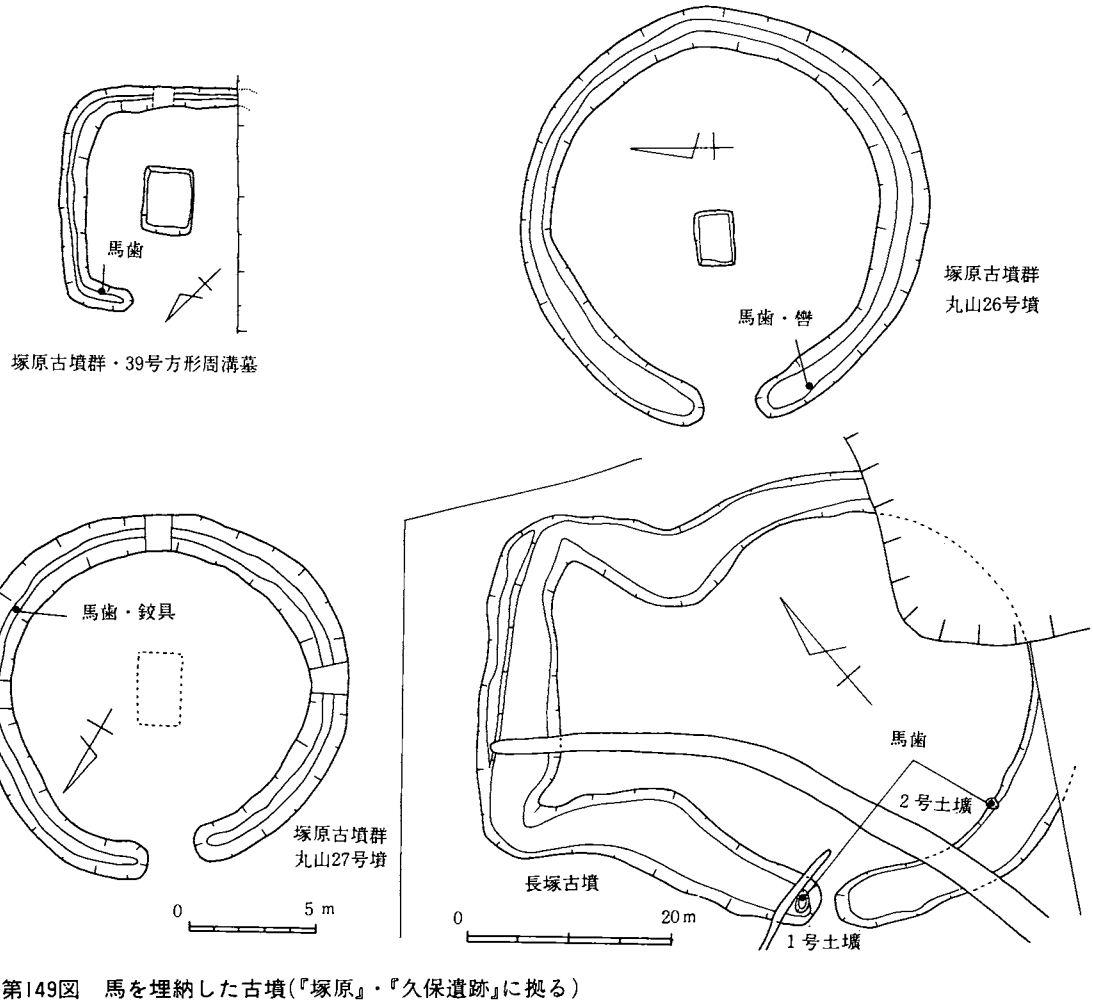
11基の古墳のうち、1・6・12号墳の周溝から馬歯が出土した。6・12号墳では周溝底に土壙が設けられ、馬歯は土壙の中から出土した。6号墳では馬歯の周辺にごく微量の骨粉が認められたが、骨格部は遺存せず、いずれも馬歯だけの出土である。

1・6号墳では馬歯が単独で出土したが、12号墳周溝1区の馬歯には轡が、12号墳周溝4区の馬歯には土師器（盌）が伴っていた。周溝1区の轡は、馬歯からわずかに離れていたが、本来は馬頭に着装されていたもので、軟部の腐食によって離脱したものと考えられる。

馬歯の出土地点は、1号墳は周溝1区、6号墳は周溝4区、12号墳は周溝1区と4区から出土しており、いずれも陸橋部に近い位置から出土している。

6・12号墳の、馬歯を出土した土壙の大きさは第8表のとおりであるが、馬歯は土壙底から浮いて、しかも土壙の長軸方向の一端に片寄って出土した。同様な事例は、長塚古墳陸橋部横の土壙（1号土壙）[註8]でもみられる。このことは、土壙に納められたのは馬の頭部だけではなく、体軀ごと納めた可能性を示している。縦貫道調査区の報文では、「出土地点の周溝は幅90cm、深さ60cmを測り、必ずしも大きなものではない。上部の削平を考慮しても、馬の一頭を納めるには小さすぎる。他の四肢骨が皆無であること」から、頭部だけの埋納と推定[註9]している。長塚古墳の場合も、「土壙中に馬一頭分が入れる状態でないことから、或は馬の頭部だけ埋葬したことも考えられる[註10]」としている。

日本の古代馬は、林田重幸氏[註11]によれば中型馬・小型馬であり、体高は120～130cm前後のものが多いという。



第149図　馬を埋納した古墳(『塚原』・『久保遺跡』に拠る)

第8表　馬の埋納土壙計測表

単位：cm

古　墳・遺構名	長　さ	幅	深さ
上の原6号墳周溝4区土壙	190(150)	105(74)	30～55
上の原12号墳周溝1区土壙	139(104)	68(35～42)	37～47
上の原12号墳周溝4区土壙	180(139)	120(67～87)	43～52
長塚古墳1号土壙	187(163)	87～80(61～65)	33～43
長塚古墳2号土壙	80(24)	66(21)	76～117

備考：（　）は下場の数値

このような小型馬であれば、上の原6・12号墳、長塚古墳1号土壙程度の大きさであれば、四肢骨は多少はみ出すことはあっても、土壙の一端に頭部をもたせかけて体軀を納めることも可能と考えられる。はみ出した部分には土を被えば良く、1号墳では馬歯の上部を土で被い、上面を固めた状態が観察された。

このようにみれば、縦貫道調査区の39号方形周溝墓、丸山26・27号墳、上の原1号墳など、土壙を伴わない事例も体軀ごと納めた可能性が強い。四肢骨の出土がないことは、骨が歯に比べて腐食が早いことを考えれば、頭部だけの埋納の証左とはなり得ない。事実、各々の例は馬歯だけの出土であり、頭部の骨格は発見されていないのだから。

県下の古墳からの馬歯、馬骨の出土例は第9表のとおりである。これらは、周溝への埋納と石室（横穴式石室・横穴墓）への供献とに分けられる。周溝への埋納は1頭分を納めたと推定したが、石室内への供献は京都府岡1号墳[註12]のように部分の供献なのかもしれない。石室内からの出土例で、古城2号横穴は左屍床から1頭分の馬歯が出土している。馬出古墳、つつじが丘横穴群の場合の詳細は不明で、小田良古墳の場合は古墳に伴うものかどうかに難点があり、今後の検討課題としておきたい。

塚原古墳群の実数は不明であるが、総数は数百基に達するものと考えられる。縦貫道建設、城南町歴史民

第9表　馬歯・馬骨出土古墳一覧表

	古　墳　名	所　在　地	墳形	出土地点	種別	伴出遺物		文献
						馬に伴う遺物	その他の遺物	
1	馬出古墳	玉名市玉名字馬出	円　墳	横穴式石室内	馬頭骨		刀子・鉄鏃・轡・勾玉・切子玉ガラス丸玉	①
2	古城2号横穴	熊本市古城町	横穴墓	玄室内左屍床	馬歯			②
3	つつじが丘横穴群	熊本市黒髪町宇留毛浦山	横穴墓	玄室？	脚骨		人骨・須恵器	③
4	塚原古墳群39号方形周溝墓	下益城郡城南町塚原字丸山	方　形周溝墓	周溝	馬歯			④
5	丸山26号墳	〃　〃　〃　〃	円　墳	〃	〃	轡	金環・鉄鏃（主体部）、土師器須恵器（周溝）	④
6	丸山27号墳	〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	鉸具	須恵器	④
7	上の原1号墳	〃　〃　塚原字上の原	〃	〃　（1区）	〃		土師器、須恵器、玉類、鉄器	
8	上の原6号墳	〃　〃　〃　〃	〃	周溝内土壙（4区）	〃		土師器、須恵器、鉄器	
9	上の原12号墳	〃　〃　〃　〃	〃	〃　〃（1・4区）	〃	（周溝1区）轡（周溝4区）土師器	土師器、須恵器、玉類、鉄器	
10	長塚古墳	上益城郡御船町	前方後円墳	〃　〃（2基）	〃			⑤
11	小田良古墳	宇土郡三角町中村字小田良	（円墳）	横穴式石室内	馬骨			⑥

〔文　献〕

① 松本雅明編『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社
② 乙益重隆「古城横穴群」『熊本市文化財調査報告書II（北部地区）』1971
馬歯は57年度に行った県教委の調査で出土。調査担当者高木正文氏の教示による。
③ 上野辰男「つつじが丘横穴群」『熊本市文化財調査報告書II（北部地区）』1971
④ 野田拓治他『塚原』熊本県文化財調査報告第16集 1975
⑤ 緒方勉・田中義和「長塚古墳」『久保遺跡』熊本県文化財調査報告第18集 1975
⑥ 松本雅明・隈昭志・江本直他『小田良古墳』三角町文化財調査報告 1979

俗資料館建設などに伴って全面調査が行われた古墳は、上の原支群の11基を含めて方形周溝墓42基、円墳53基を数え、墳丘をもたない石棺や前方後円墳の周溝の一部などが調査されている。このうち、馬を埋納したものは方形周溝墓１基、円墳５基にみられる。他の地域に比べて、馬の埋納の頻度は高い。このことは、塚原古墳群の被葬者像を考える上で重要である。

１・６・12号墳での馬の埋納は、出土状態からみると古墳築造直後、あるいは初葬時に行われている。おそらく後者の、埋葬に伴って殉殺されたものであろう。古墳時代の馬の埋葬と供献については森浩一氏が論究[註13]されているが、未解決の部分も多く、機を改めて考えてみたい。

〔付記〕　出土馬歯については、現在専門的な調査を依頼中である。その結果については、58年度報告書に収録の予定である。また、埋納状態の復原については、西中川駿氏（鹿児島大学農学部助教授）から有益な教示を受けた。記して学恩に感謝するものである。

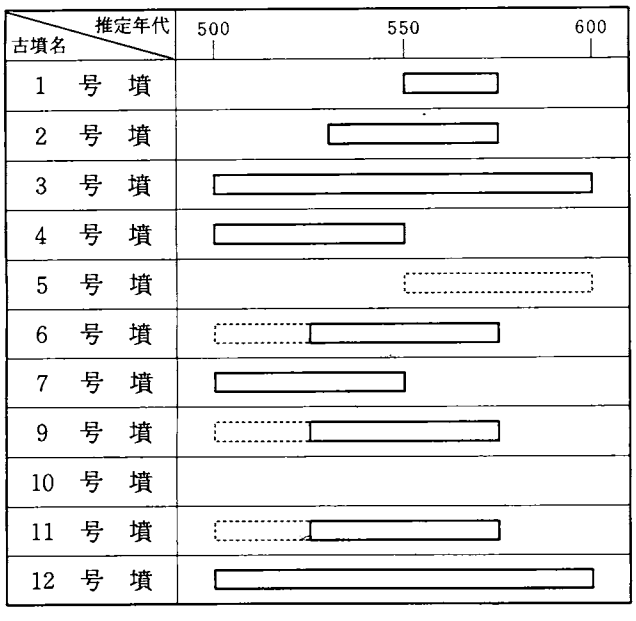
(5)古墳の年代（第10表）

11基の古墳のうち10号墳は無遺物であるが、他の10基の古墳から遺物が出土している。これらの出土遺物、とくに須恵器・土師器から各古墳の年代幅を考えてみた。周溝からの出土遺物はその古墳の全体像を反映するものではないが、一応の傾向は示しているものと考えられる。

塚原古墳群・上の原支群の築造は６世紀前半から中葉におよび、古墳によっては６世紀末まで追葬が行われたものと考えられる。

53～55年度調査区において、６世紀代の住居址は54年度調査区に６世紀後半のものが数基確認されているにすぎず、上の原地区への古墳築造と対照的な動静をみせている。　（松本）

第10表　古墳の推定年代



註

註１　寺本直康『古今肥後見聞雑記』 1784

註２　野田拓治他『塚原』 熊本県文化財調査報告第16集　1975

註３　註２に同じ

註４　小林久雄・三島格「古墳時代」『城南町史』 1965

註５　松本健郎・勢田広行「肥後の須恵器㈠」『九州考古学』第56号　1982

註６　松本健郎・勢田広行「宇城古窯跡群」『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第48集　1980

註７　小林行雄「黄泉戸喫」『考古学集刊』第３冊 1949

註８　緒方勉・田中義和「長塚古墳」『久保遺跡』熊本県文化財調査報告第18集　1975

註９　註２に同じ

註10　註８に同じ

註11　林田重幸「日本在来馬の源流「『馬』　1974

註12　樋口隆康「網野岡の三古墳」京都府文化財調査報告第22集　1961

註13　森浩一「大化薄葬令の馬の殉殺について」『古代史論叢』上巻　1978

第Ⅴ章　考　　察

第１節　出土遺物の検討

１．55年度調査区出土縄文土器の検討

55年度調査区より出土した縄文土器は、Ⅵ式を上限とし、ⅩⅩ式を下限とする。その間、早期から晩期におよぶ18様式が存在する。これらは、相互間の共通性によって８群に大別することが可能であり、それぞれには時期差が考えられる。ここでは、これら土器群の特長を述べ、編年を試みたい。

Ⅰ群　Ⅰ群は、所謂押型文系の土器群であり、Ⅰ式からⅢ式が含まれる。押型文系の土器群は、早期において西日本全域に広い分布範囲をもつ大土器群である。各地においてその編年もさかんであり、九州においては特に豊後地方において編年が確立している。肥後においても近年押型文土器を出土する良好な遺跡が発掘され[註1]、編年も確立されつつあるが、現段階では、豊後の編年を準用することが、最良の方法と考える。したがって本遺跡の資料もこの編年を準用することとする。豊後の押型文は、川原田Ⅰ式[註2]を上限とし、ヤトコロ式を下限とするが、本遺跡の土器は、Ⅰ式がヤトコロ式に並行し、Ⅱ・Ⅲ式がこれに後出する。Ⅲ式は、南九州において手向山式[註3]と呼ばれる土器であり、ヤトコロ式からの派生が考えられる。豊後の押型文土器にも地域によって差異がみられ、別府湾岸においては、川原田Ⅰ式、早水台式等の古型式がみられるが、竹田市を中心とする地域では田村式以降のものが多数を占め[註4]、古型式はほとんどみられない。これは肥後においても同様で、押型文土器の移入時期が、田村式以降の時期にあり[註5]、豊後において押型文土器文化が終焉をむかえたヤトコロ式以降も、肥後以南の地域では押型文土器文化が踏襲され、Ⅱ式或いはⅢ式の出現となったと考えられる。

Ⅱ群　Ⅱ群は、所謂円筒形土器系土器群であり、本遺跡では、Ⅳ・Ⅴ式がこれに含まれる。同筒形の土器は、早期後半期から前期にかけて全国的な広がりをもつが、九州において著名なのは、石坂・吉田・前平の三型式である。これらは従来前期に比定されていたが、近年南九州において層位的な編年が行われ[註6]、早期後半期に比定されている。肥後においても40遺跡以上で、円筒形土器が出土している[註7]。Ⅳ式とした土器がこれにあたる。この土器には、二枚貝による条痕文の他、櫛目条痕文、撚糸文、絡縄帯圧痕文、沈線文などがあることがしられており[註8]、細分の可能性も示唆される。Ⅱ式も器形上から本群に包括することも可能であるが、調整技法から考えて、押型文系土器の一元的な流れの中でとらえることができる。ただ、胎土・焼成等においてⅣ式ときわめて類似しており、並行関係が考えられる。

Ⅴ式は、南九州にその中心をもつ土器であり、塞ノ神式と呼ばれる。九州全域に広がりをもつ土器であり、近年細分が行われ[註9]、その編年も可能となった。鹿児島においては、吉田・前平式の上層から発見されることが知られており[註10]、器形上からⅣ式を吉田或いは前平式と並行関係におけば、Ⅴ式はⅣ式に後出する型式であり、円筒形土器の終焉型式としてとらえることも可能である。

Ⅲ群　Ⅲ群は、所謂轟式系の土器群であり、本遺跡ではⅥ・Ⅶ式がこれに含まれる。同群の土器は、肥後にその中心をもち、九州一円に広がりをもつことが知られる。本群の土器は、従来より四式に分類され、A→B→C→D式の変遷が指摘されている[註11]。この分類にしたがえば、Ⅵ式は轟A式に、Ⅶ式は轟C式に比定される。近年、A式からD式を時間差としてではなく、むしろ形式差としてとらえ、同筒形土器に後出するものとする考えも提示されている[註12]。しかし、本遺跡においてみられたⅥ式とⅦ式の間には、胎土及び調整技法上に相違がみられ、明らかに時期差がうかがえる。東南九州では、アカホヤ火山灰層の直下より轟B式が検出され[註13]、器形上A式がB式に先行する[註14]ものであれば、本遺跡のⅥ式はⅣ式に先行し、Ⅶ式は前期前半期に比定することができる。なお、同土器群に後出すると思われる曽畑式系土器群は本遺跡ではみられず、同土器群の分布範囲を知る上で重要な現象である。

Ⅳ群　Ⅳ群は、所謂竹崎式系の土器群である。本遺跡では、Ⅷ式（竹崎式）がこれに含まれる。竹崎式は、中期において九州全域に分布範囲をもつ。Ⅷ式は、瀬戸内地方にみられる船元式[註15]の強い影響をもって成立した土器であり、将来同一型式としてとらえることも可能である。またⅧ式はⅨ式（阿高式）と供伴することがしられている。

Ⅴ群　Ⅴ群は、所謂阿高式系の土器群であり、本遺跡ではⅨ式（阿高式）・Ⅹ式（南福寺式）・Ⅺ式（出水式）が含まれる。Ⅸ式は、九州における中期を代表する土器であり、九州西部地域に中心をもち、九州一円に広く分布する。一部山口県内からも出土がしられており[註16]、近年同型式の細分も試みられている[註17]。また瀬戸内地方における船元式土器と並行関係が考えられ、同型式の強い影響を受けたと考えられるⅧ式（竹崎式）がたびたび共伴する[註18]。その後同型式の系統は、Ⅹ式・Ⅺ式をへて、本遺跡では出土をみないが、御手洗A式[註19]段階まで踏襲され終焉をむかえる。黒橋貝塚[註20]では、Ⅹ式に伴って瀬戸内地域に分布の中心をもつ磨消縄文系の福田K２式[註21]がみられることがしられており、Ⅹ式を後期初頭期から前葉に、それに後出するⅪ式を後期前葉から中葉に比定することが可能である。

Ⅵ群　Ⅵ群は、所謂磨消縄文系の土器群であり、Ⅻ式（鐘ヶ崎式）・ⅩⅢ式（北久根山式）・ⅩⅣ式（西平式）がこれに含まれる。磨消縄文系の土器は、後期初頭期から中葉にかけて西日本全域に分布する。肥後においては、南福寺・出水式に伴って出土する福田K２式或いは、平城式[註22]の例[註23]はあるが、同群の土器が主流となるのは、Ⅻ式の時期である。東九州においては、すでに後期前半期にその盛行をみる同群の土器が、肥後に移入される時期がおくれるのは、先述したⅤ群、所謂阿高式系の土器群が根強く残存するためであり、それはまた同系の土器の排他的性格によるものとも考えられる。Ⅻ式は、Ⅴ群の土器の終焉型式である御手洗A式段階において移入されることが考えられ、肥後各地の遺跡において、両型式の土器が共伴することがしられている[註24]。以後磨消縄文技法は、ⅩⅢ式・ⅩⅣ式へと踏襲されるが、これは、Ⅻ式からの直接的な影響によって生まれるものではなく、むしろ瀬戸内地方に発達する縁帯文系土器群[註25]の影響が大きいと考えることができる。ⅩⅢ式は、その文様構成から津雲A式[註26]に祖型がもとめられ、ⅩⅣ式は、基本的にⅩⅢ式を踏襲するものと考えられる。近年ⅩⅢ式とⅩⅣ式の中間型式として辛川式[註27]が設定されており、本遺跡でも深鉢０－１類がこれに近似する。

Ⅶ群　Ⅶ群は、所謂御領式系の土器群であり、ⅩⅤ式（三万田式）・ⅩⅥ式（御領式）・ⅩⅦ式（天城式）・ⅩⅧ式（古閑式）・ⅨⅩ式がこれに含まれる。同群は、器面を黒色或いは褐色に研磨することを特長とし、無文化がいちじるしい。

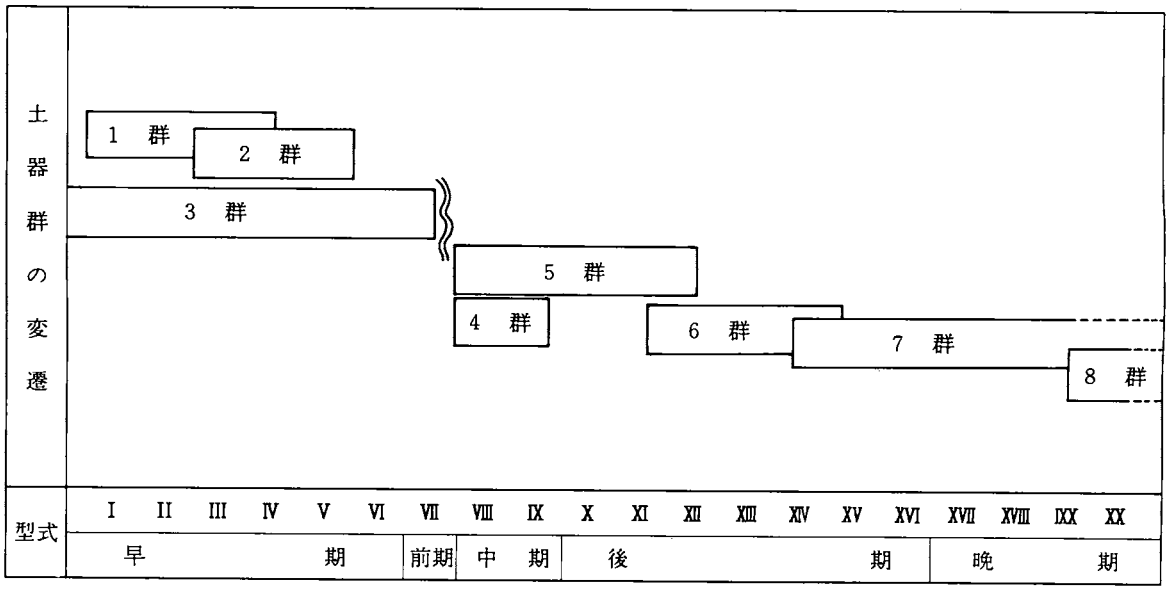
ⅩⅤ式は、他型式に先行する型式として把握されるが、それは、Ⅵ群の終焉型式としてとらえられるⅩⅣ式の

残存がみられ、その器面に文様をほどこす後進的技法から脱しえなかったところにある。また土器組成・器形等から元住吉山II式の影響が強いことがしられ、XVI式以降の土器組成の基礎を形成する。すなわち、同型式の土器は、深鉢、浅鉢を基本とし、注口土器、高坏等によって構成される。ただ本遺跡では、注口土器、高坏が欠落する。XVI式もほぼXV式と同じ土器組成を示すことは、御領貝塚の発掘[註29]によって明らかなところであるが、本遺跡では、深鉢のみしか出土していない。ただ無文化の傾向は着実に進んでいることがうかがえ、文様と呼べるものはほとんど消滅し、口縁部にほどこされた凹線のみとなる。なおXV式とXVI式の中間型式として鳥井原式[註30]が設定されているが、本遺跡では、浅鉢B－2類がこれに該当する。天城遺跡では、御領式に相当する型式を天城II式に、それに先行する型式を天城I式、後出する型式を天城III式とし、I式を後期後半期、II式を後期末、III式を晩期前半期と規定している[註31][註32]。本遺跡もこれにしたがえば、XV式が後期後半期に、XVI式が後期末に、XVII・XVIII・IXX式が晩期前半期に比定される。ただIXX式は、天城遺跡にみることができない。しかし、IXX式は明らかにVII群の範疇に入るべき土器型式であり、突帯文出現をもって晩期後半期と規定するならば、IXX式は晩期前半期に比定することができる。

XVI式において統一性をみていた土器は、XVII式以降地域においてかなりの差異をみせはじめる。島津義昭・山崎純男両氏は、地理的環境によって九州を3地域に分割し、それぞれの地域における編年を試みている[註33]。この分類によれば、本遺跡はII地域に包括され、同地域の偏年を準用してXVII式を天城式に、XVIII式を古閑式に比定することができる。ただ本遺跡では、天城式・古閑式に比定される全器形を把握することはできなかった。IXX式は、XVIII式に後出する土器であり、III地域における黒川式、松添式に、I地域における宮の本式に並行関係が考えられる。また本遺跡より出土する組織痕文土器は、黒川式・松添式にもみられるところであり、同型式に含まれるものと考えられる。

VIII群　VIII群は、所謂突帯文土器系土器群であり、本遺跡ではXX式がこれに含まれる。先述したI地域においては、板付遺跡[註34]、菜畑遺跡[註35]等で良好な資料が出土し、編年も確立されている。しかし、本遺跡を含む肥後においては、江津湖苗代津遺跡[註36]、水の山遺跡[註37]、牟田原遺跡[註38]、上南部遺跡[註39]等の発掘資料がみられるが、いまだ編年を行なうだけの良好な資料を得ていない。本遺跡でも僅か8点が出土しているが、いずれも小破片であり、明確な時期はわからない。ただII地域においては、島原半島において山の寺遺跡、原山遺跡等の良好な遺跡がみられ、同地域からの影響が強く感じられる。本遺跡では、この地域の編年を準用し、一応本遺跡出土の

第11表　縄文土器群の変遷



縄文時代の突帯文土器を山の寺式並行型式と比定する。

以上同一系統の土器を一つの群としてとらえ土器群ごとの編年を行ってきたが、それぞれの土器群の関係については、第11表に示すとおりである。

註

註１　大津町中後迫遺跡、熊本市庵ノ前遺跡、松橋町曲野遺跡で良好な資料がみられる。『中後迫遺跡』所収中後迫遺跡調査団

註２　大分県速見郡山香町川原田洞穴Ⅵ層出土の土器を標式とする。

註３　鹿児島県大口市羽月手向山遺跡出土の土器を標式とする。

註４　大分県大野郡朝地町田村遺跡、同竹田市大字池部ヤトコロ遺跡

註５　肥後においては、田村式以前の押型文土器はほとんどみられない。中後迫遺跡等で多量の押型文土器がみられるが、田村式以前と考えられるものは存しない。

註６　鹿児島県桝ノ原遺跡では、アカホヤ火山灰層直下より塞ノ神式が、その下層より吉田・前平式が出土している。新東晃一「塞ノ神式土器」『縄文化の研究３』所収1982

註７　高木正文「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』所収1977
近年本遺跡を含め、庵ノ前遺跡、曲野遺跡でも出土している。

註８　註７と同じ。

註９　河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第６号、1972。新東晃一「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究３』所収1982

註10　註６に同じ

註11　松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告―」『考古学雑誌47－3』所収1961

註12　註７と同じ

註13　大分県竹田市石井入口遺跡、宮崎県宮崎学園都市遺跡で出土がしられる。

註14　大分県直入郡荻町政所遺跡では、田村式と供伴して尖底厚手土器の口縁部に二枚貝腹縁の放射助圧痕の凸凹連鎖文をほどこした土器が出土しており、九州においては、田村式段階に、貝殻による調整技法がみられることから、器形上同型式に類似し、貝殻による調整をほどこすⅥ式（轟Ａ式）は、田村式並行期にその初源をもとめることが可能である。

註15　岡山県倉敷市船元貝塚出土の土器を標式とする。

註16　山口県美濃ヶ浜遺跡、汐待遺跡など

註17　田中良之「阿高式土器」『縄文文化の研究４』所収1981

註18　玉名市尾田貝塚、玉名郡天水町竹崎貝塚など

註19　菊池郡合志町竹迫御手洗遺跡出土の土器を標式とする。

註20　下益城郡城南町下宮地字萱木に所在する。

註21　岡山県倉敷市福田貝塚の土器を標式とする。

註22　岡山県平城貝塚出土の土器を標式とする。

註23　黒橋貝塚・阿高貝塚等で共伴することがしられる。

註24　菊池郡御手洗遺跡、下益城郡黒橋貝塚などで供伴関係がしられる。

註25　後期中葉に瀬戸内を中心とする地域に発達する土器群であり、彦崎Ｋ１式、津雲Ａ式等に代表される。

註26　岡山県津雲貝塚出土の土器を標式とする。

註27　菊池郡菊陽町辛川遺跡出土の土器を標式とする。富田紘一「辛川式土器」『熊本県大百科事典』所収1981

註28　Ⅹⅴ式中に磨消縄文技法が残存することがしられる。

註29　1951年発掘調査実施。坪井清足「御領貝塚」『城南町史』所収1965

註30　富田紘一『鳥井原遺跡』1977

註31　天城Ⅲ式は、大方天城式によって占められるが、一部に古閑式が混在すると思われる。

註32　熊本県教育委員会『古保山・古閑・天城』所収1980

註33　島津義昭・山崎純男「九州の土器―晩期―」『縄文文化の研究４』所収1981

註34　福岡県福岡市に所在

註35　佐賀県唐津市に所在

註36　熊本県湖東町に所在

註37　大津町矢護川字水の山に所在

註38　大津町矢護川字牟田山に所在

註39　熊本市上南部町に所在

2．弥生土器の編年

(1) はじめに

上原遺跡出土の弥生土器は、各住居址ごとの出土量やセット関係において、必ずしも良好な状態ではなく、また住居址の切り合いがなかった為に、遺構の上から前後関係をとらえることができないなど、問題点が少なくない。しかし住居址の中には、充分とは言えないまでも、セットとしてまとまる資料があり、これらを集合させ、それぞれの欠を補うことによって、一地域の一定の時期の弥生土器群としてまとめることが可能ではないかと考える。これまでまとまった資料に恵まれなかった当地方の実情を考えれば、本遺跡出土土器をもって、一応の編年的な位置付けを試み、もって当面の土器研究の課題に答えておくことが必要ではないかと思われる。したがって本項では、今回検出した12軒の住居址出土土器をもって、「上の原式土器」を設定し、この編年的な位置付けを試みることにする。

なお、本論に入る前に、熊本県における弥生土器の編年的研究の経緯について、簡単にふれておきたい。

(2) 研究史抄

本県の弥生前期の土器については、斉藤山遺跡[註1]、塔ノ本遺跡[註2]、水の山遺跡[註3]、江津湖苗代津遺跡[註4]、久保遺跡、沈目立山遺跡[註5]、境目西原遺跡[註6]、宇土城三の丸跡[註7]などの報告を含めて、計40数ヶ所の遺跡が知られている[註8]。

これらの中で、編年的な視点で論及したものはほとんど見られなかった中で、初期の報告である乙益重隆氏の「斉藤山遺跡[註9]」では、出土土器の特徴について「板付式土器の典型的セットに共存して、縄文式土器の終末と考えられる夜臼式土器のセットが出土した」と述べ、板付遺跡の調査成果とほぼ同様の結果であるとした。しかし、「厳密に言うと本遺跡の大勢は、夜臼遺跡や板付遺跡に比べてやや後退のきらいがあることは否定できない。」と述べ、夜臼式土器を伴う板付式土器段階の中でも形式的に退化し、年代的にもやや下降するものであると位置づけた。いずれにせよ、斉藤山遺跡出土土器を県下では最古の弥生式土器として位置づけられた。

その後も、散発的にではあるが、前期の土器の発見が続くが、編年的な立場に立った論考は無く、多くは北部九州の土器形式による年代決定にとどまり、肥後独自の編年観が示されることはなかった。

ところが、近年西健一郎氏は、斉藤山遺跡の出土土器を再び取りあげ、細部にわたる分析を行った[註10]。特に刻目突帯文土器という用語について「本来、刻目突帯文を有する甕形土器の名称であるが、刻目突帯文土器を含む土器様式をもっとも適切に表現した言葉であると考えるので、様式を総称する言葉としても使用している」と前置きした上で、県内主要遺跡の弥生土器にも言及し、これらを四期に区分して、編年的な序列を提示し、さらに福岡平野および本地域との中間地帯である筑後平野における土器編年との対比を行った。すなわち、Ⅰ期を縄文土器の諸様相が集約され、刻目突帯文土器が成立する過程とし、上南部遺跡出土土器をこの期に位置づけた。Ⅱ期は典型的な刻目突帯文土器が成立する過程として、江津湖苗代津および水の山遺跡出土土器をこの期の古い段階に位置づけた。Ⅲ期を典型的な突帯文土器の変容形として、斉藤山Ⅱ式土器をおき、したがって、斉藤山Ⅰ式をⅡ期の新しい段階に位置付けた。Ⅳ期は凸帯文土器の「く」字形屈曲が消滅する段階でいわばⅢ期に次く、変容第2期と言うべき段階で、久保遺跡、沈目立山、宇土城跡出土土器に代表されるとし、さらに久保遺跡と宇土城跡出土土器の対比からⅣ期が2型式以上の時間的な幅をもつと推定した。

第12表 「黒髪式土器論」年譜略表

年 時	論 者	論 旨	文 献
1955	乙益重隆	土器の特徴から「須玖式に直結した地方相」として、中期に位置づけた。	註(11)①
1959	乙益重隆	粗型は須玖Ⅰ式に求められる。特に甕形土器をA型式(口縁下に沈線をもつもの)と、B型式(口縁下に突帯をもつもの)に分けた。分布論にも言及。	註(11)②
1964	乙益重隆	中九州の第四様式に位置づける。乙益(1959)を受け、A型式からB型式への移行を提示。	『弥生土器集成―中九州地方―』1964
1966	森 貞次郎	後期前半から後期後半に位置づけた。	註(16)
1967	三島 格	中期前半の羽山台式に後続する中期様式とし、中期後半に位置づけた。	註(12)
1969	鏡山 猛 乙益重隆	黒髪Ⅰ・Ⅱ式を設定。Ⅰ式を第三様式として中期後半に、第四様式として後期前半に位置づけた	註(14)
1979	緒方 勉	文化内容において中期的様相をもつもので、後期にまで引き下げる要素が見い出せない。	註(13)
1979	小田富士雄	鏡山・乙益(1969)をほぼ踏襲し、黒髪Ⅰ式をⅢ期(須玖式)、Ⅱ式をⅣ期(原ノ辻上層)とした。	註(15)

同氏の論考は、これまでの散発的に報告された資料を駆使し、縄文晩期から弥生前期の間の編年的な序列を試みた初めてのものであった。ただ資料的な制約から地域を超えた序列を行なわざるを得なかった点はあるにしても、今後も本地域の編年的研究の指標となることは確かである。

このように弥生前期については、西氏によって編年案が示されたことによって、今後の展開が容易になったことは確かである。したがって残された問題は、四期区分され、各期に位置づけられた各遺跡出土資料間の空白をうめることと、将来的には小地域ごとの細かな編年を組みたてることが必要である。

また弥生中期以降についてもふれておかなくてはならない。本県を代表する土器形式として、「黒髪式土器」がある。昭和30年乙益重隆氏によってまとめられ[註11]て以来、森貞次郎・三島格・鏡山猛・緒方勉・小田富士雄氏によって、黒髪式土器に対する見解が述べられたが、これらは諸説紛々とした観がある。この間の経過を年代的に順を追って列記すると第12表のようにまとめられる。

以上のように、「黒髪式土器」の年代観については①中期にとどまるとする説(三島[註12]、緒方[註13])、②中期後半から後期前半とする説(鏡山・乙益[註14]、小田[註15])、および③後期全般に及ぶとする説(森[註16])の三者に大別することができる。筆者はひそかに②の説を支持しているが、このことを立証する良好な資料の発見を待つしかない。いずれにしても、「黒髪式土器」の盛行する時期が、中期から後期へ移り変る時期に一つのピークを迎えることは確実であり、少なくとも中期中葉以前にまで遡ることはないようである。

このように考えてくると、前述した前期から中期への土器様式の推移を見れば、中期前半における土器型式の欠落に気づくはずである。したがって西氏の編年案につづく前期末から、黒髪式出現時期の間の空白期間を埋めることのできる土器群の発見が望まれていたのである。上の原遺跡出土土器は、まさにこの空間期間を埋める土器群として位置づけようとするものである。

(3)「上の原式土器」の設定(第150図)

出土土器は住居址で使用された日常容器であり、器種構成からみると、当然甕と壺が主体を占め、これらに鉢・蓋・器台や特徴なものとして台付深鉢や朝鮮無文土器が加わる。甕と壺の主要二器種を除くと量的にもわずかで、良好なセットとして出土した例は少なかった。また偶然ではあるが、高坏はすべての住居址に欠落していた。このように一軒の住居址ではセットとして不充分である為数軒の住居址を組み合わせること

によってそれぞれの欠を補い、一時期のセットとして操作、再構成せざるを得なかった。このような前提の上に、主に形態、製作手法など型式学的方法により、分類と序列を行った。その結果これらの土器群を大別二期に分け、Ⅰ期（式）とⅡ期（式）とした。さらにⅡ期をA・Bに細分した。

上原Ⅰ期

上原57号・24号住居址を中心に32号・60号住居址出土土器の一部を標式とする。57号住居址は甕のみの単一の器種で構成されていたために、他の器種との関連が明らかにできない。したがって、57号および24号住居址出土土器を主体とし、32・60号住居址出土土器の一部を抽出し援用している。

甕形土器は大別して三者がある。甕Aは口縁端部外面に断面三角形の粘土帯を接合し刻目を施し、口縁下に刻目突帯一条を施したもの。⑤・⑥・⑦がこの類に属する。⑤の口縁部にやや強い屈曲をみるが、⑥・⑦ではわずかにふくらみを持つ程度である。⑤・⑥やや小型のもの、⑦はこれより大型である。3点とも内外面の調整はナデ調整されている。甕Bとした口縁下に一条の沈線をめぐらせるものはまったく認められない。甕Cは口縁部にのみ突帯（上位突帯）をもち、底部が平底となるものである。①・②・③がこの類に属する。①は完形品である。口縁部は内傾気味に直行する。上位突帯は断面三角形でやや粗い刻目を施す。底部はシャープな平底である。②・③も①同様の甕底部破片で、やや上げ底気味のものである。①～③ともナデ調整を基調とするが、胴部下位から底部にかけてヘラ状工具により調整を行っている。この類の甕は57号住居址にのみ認められた。底部の形態や器面調整などからより古い時期の特徴を残している。その系譜は板付式土器に求められる。甕Dは口縁下に二条の刻目突帯をめぐらせるもので、④の1点のみ出土した。器面の調整は甕Aと類似している。甕形土器の中では大型の部類であり、おそらく㉔と同様貯蔵用[註17]としての機能をもったものであろう。以上のように甕はA・C・Dの3種からなり、Bが欠落する。口縁部の特徴は上位下位突帯とも断面三角形をなし、口縁端部に接合される。口縁部の屈曲は⑤などに認められるが、全体として屈曲は顕著でなく、わずかに内傾して直行するものが主体を占めている。底部の明らかになったものは甕Cに限られるが、④～⑦もおそらく①～③に近い形態をとるものであろう。器面の調整は認められない。

壺には二者がある。壺Aは、頸部が内傾気味に立ち上がるものである。小破片であるため全体の形を知ることができないが、器面はていねいなヘラミガキを施している。壺Bは頸部が強くくびれ、頸部と肩部の境に一条の沈線をめぐらすもので、⑪・⑫がこれである。⑪は頸部が直立気味に立ち上り、口縁端部で小さく外反する。⑫も同様の壺であるが、胴部の張りが⑪に比べて弱くなっている。二点ともていねいなヘラミガキを施している。壺Cは肩部が強く張り、胴部最大径が上位にある。頸部は低く、強くくびれる。底部はやや上げ底気味の平底となる。⑨・⑬がこの類に属する。壺はA類（⑧）のような古い形態のものも残るが、主体はB・C類である。すでに前代に見られた装飾はまったく消え、頸部の横位の沈線のみ残される。

鉢は⑭の1点のみ出土したために、前後の形態変化がたどれない。壺⑬とのセット関係からこの期に位置づけた。胴部はややふくらみ、口縁部は直立し、口縁端部外面にやや丸味をおびた断面三角形の粘土ひもを貼り付けている。口縁部内側の突出は認められない。底部は上げ底気味の平底となる。内外面ともていねいなヘラミガキにより仕上げられている。

朝鮮無文土器⑮は、この期の土器群セット関係を特徴づけるものとして注目される。やや深い鉢型土器で、胴部はストレートに立ち上り、口縁部外面に断面円形の粘土ひもを貼り付けている。底部が小さく突出し無文土器としての特徴をよく備えている。

以上Ⅰ期とした土器群は甕・壺・鉢・朝鮮無文土器からなるが、全体的な特徴は刷毛目技法の出現をみておらず、ナデ調整を主体とするていねいなつくりのものが多い。また甕Dとした④の大形甕は、おそらく東九州における「下城式土器」にその源流が求められるのではないか。阿蘇外輪山西側の阿蘇郡西原村冠ヶ岳[註18]

にもこの類の土器群が出土していて、この種の土器の伝播経路を考える上で一つの示唆を与えるものである。またこの時期には朝鮮無文土器や磨製石鏃・石包丁・柱状抉入石斧、片刃石斧などの大陸系石斧のセットが供伴するが、こうした傾向はこの段階までで、次のII期になると磨製石鏃の集落内での生産が開始されるものの、他の大陸系石器のセット化は認められなくなる。

上の原II A期

上原60・61・66号住居址を主体とし、これに30・32・68号住居址出土土器の中から一部を抽出した。

甕はD類の出土を見なかったが、A・C類は引きつづき認められ、特にA類が主体を占めるようになる。またB類はこの段階に出現し、後の黒髪式土器にまで受けつがれる息の長い土器群である。甕A類とした㉒～㉔は上位突帯が外側へ強くのびて「L」字状の口縁に近くなり、突帯の先端部が下がるものも認められる。これらの底部は、㉕～㉗ようにな肥厚して外底部の一部が小さな上げ底をつくるものが考えられる。内外面とも刷毛目調整され、突帯の上下のみ横ナデされている。I期で認められた⑤・⑥の煮沸用甕のものと⑦の貯蔵用甕の分化は、この段階でも㉔の大型甕に顕著に認められる。甕B類とした⑲～㉑の中で、⑱・⑳は完形に復原できた数少ない傾である。特に⑳はこの時期の特徴を示すものであろう。長い胴部の最大径は上位にあり、口縁部は内弯気味に立ち上っている。口縁部は鋭く屈曲し、端部に粗い刻目を施している。底部は肥厚し、外底部の中央をおそらく指先で削り取る程度の上げ底である。器面は荒れているが、刷毛目調整が行なわれている。㉑も同様の甕である。⑲の口縁部の突帯は断面三角形であり、⑳・㉑に比べるとやや古い形態を残している。本来的にはI期の範疇の中に入るものかも知れない。甕C類についてはこの期では顕著なものが認められない。⑯に加えて、⑰のように口縁部端に刻目を施さない一群が認められる。また⑱の甕は大別してC類に属するとみられるが、形態や整形の粗雑などは、異質な観がある。外面は粗いナデ調整、内面は刷毛目調整される。甕の底部形態について、器体全体から判明したものは、⑱・⑳の2点のみであるが、㉕～㉗にその一部を掲げたように、かなりの変化が認められる。形式的な変化を追うなら㉕→㉖→㉗→⑳さらにII B期の㊶→㊵へと移行するはずである。一方I期C類①～③の平底ないしやや上げ底気味の平底はこの期の⑱にその片鱗をとどめるものの、主体は⑳ないし㉕～㉗のような形態のものになるものと考えられる。

壺には大小があって、小形のものでは㉘のように胴部の張りは弱く頸部はあまりくびれず短かく外反する。器面はヘラ磨きにより仕上げている。また㉙のように頸部に断面三角形の突帯をめぐらし、頸部は外弯し、口縁部は強く屈曲して内側に小さく突出する。器体は内外面ともていねいなヘラ磨きを施している。㉚の底部は㉙のものと考えられ、わずかに上げ底気味の平底となる。㉚・㉛と同状頸部に突帯をめぐらせるもので大形の壺で、㉜はこの底部である。外面にはていねいなヘラ磨きが施されている。

蓋形土器は二点出土している。大小二者あるが、つまみ部の形態はこの期の甕底部の形態に共通するものがある。㉟の台付の深鉢型土器は、㉞との供伴資料で特殊な器形である。内外面ともていねいなナデ調整を施こし、脚部外面はタテ方向のヘラ削りにより仕上げている。脚部の形態は後出的要素が強いが、調整方向は古い様相を残している。

以上II A期の土器群は、I期にはほとんど認められなかった刷毛調整手法が甕に多用され、部分的に古い手法を残すものの、その主体は刷毛調整手法に変化してきている。また壺は、基本的にはI期の延長上にあるが、頸部に突帯をめぐらせるものなどが新たに加わる。さらに蓋形土器はこの段階に初めて出現する器種である。

上原II B期

II A期とII B期とは大きな時間差はなく、II期の中で、より後出的な手法・形態・器種を抽出することに

よってII B期としてまとめたもので、将来的には充分変更が可能なものである。

甕Aでは、㊵のように上位突帯が下位突帯に比べて著しく大きくなるものがある。また甕Bの中では、㊲のように口縁部が外方へ長くなるとともに、内側が小さく尖出するいわゆる「T」字形口縁の初現的な特徴をそなえたもの、あるいは㊳のように口縁部の突帯はさらに大きくなり、胴部が強く張るものが認められる。特に甕口縁部の接合方法では、甕B類㊴や甕C類㊱のように、粘土帯を口縁端部に上部から接合したものがあり、II A期まで主流であった、口縁端部の外側に粘土帯を接合する方法との大きな変化が認められる。こうした手法はII B以降における甕製作技法の主流となるものであろうか。甕底部はさらに上げ底が発達し、脚台に近いものが出現する。㊶・㊷の底部はその一部を示したものである。

壺は胴部下半の破片のみで詳細は不明である。㊹の壺底部にみられるように、刷毛調整も認められる。

器台は2点出土している。㊻・㊼の二点のいずれも甕㊲との供伴が明らかであるので、この時期に位置付けた。おそらくII B期あるいはII A期を初現とするものと思われる。

以上本遺跡出土の弥生式土器について、いくつかの遺構を単位として、I期・II A期・II B期に分類し、序列を行った。これらの年代については、土器の形態・製作技法・器種構成などを総合的に分析すると、この三期区分の中でI期とII A期の間に最も大きな画期を見い出すことができる。すなわちこの画期をもって仮に弥生前期と中期との境とすることができるのではないかと想定している。したがって上原I期を前期終末、II A期を中期初頭、II B期を中期初頭にやや遅れる前半期頃に位置付けておきたい。しかし土器における形態・製作技法・器種構成の各要素の中で、特に製作技法に含まれる土器の調整方法の場合は、その変化が特に甕形土器に現われるが、壺など他の器種の場合には、その変化はやや遅れて現われる場合が多い。本遺跡例でもこうした傾向が認められる。また器種構成の面では、I期では壺・甕に加えて鉢が加わり、II A期では、蓋形土器や台付深鉢型土器、II B期では器台というように、時期的推移は器種構成の充実の過程でもある。したがって将来的には、新たな資料の発見によってさらに精密でしかも総合的な分析を行なうことによって、より完全な編年を確立する必要がある。（野田）

註

註1　乙益重隆「斎藤山遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961

註2　帆足文夫・松本祐一『塔の本遺跡発掘調査』玉名女子高校社会部報第17集　1972

註3　隈　昭志「熊本県水の山遺跡における配石墓群の一例」『考古学雑誌』第50巻第1号　1964

註4　高木正文「久保遺跡」『熊本県文化財調査報告』第18集　熊本県教育委員会　1975

註5　緒方　勉「沈目立山遺跡」『熊本県文化財調査報告』第26集　熊本県教育委員会　1977

註6　富樫卯三郎　『境目西原遺跡』　宇土市教育委員会　1969

註7　富樫卯三郎・安達武敏・河北　毅　『宇土城三ノ丸跡』　宇土城三ノ丸跡発掘調査団　1982

註8　註(7)に同じ。河北　毅「熊本県弥生前期遺跡地名表」

註9　註(1)に同じ。

註10　西健一郎　「斉藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討」『九州文化史研究所紀要』第27号　九州文化史研究会　1982　福岡

註11　①乙益重隆　「南九州」『日本考古学講座』4　河出書房　1955　東京
②乙益重隆　「黒髪式土器について」『藤尾支石墓群調査報告』　熊本県旭志村教育委員会　1959　熊本

註12　三島　格　「羽山台遺跡調査概報」『九州考古学』35号　九州史学会　1967　福岡

註13　緒方　勉　「黒髪式土器雑考—甕形土器の底部変化をもとにして—」『谷頭遺跡』　谷頭遺跡調査団　1978　熊本

註14　鏡山　猛・乙益重隆　「九州」『新版考古学講座』4　雄山閣　1969　東京

註15　小田富士男　「弥生土器入門講座－九州５－」『考古学ジャーナル』83号　ニューサイエンス社　1958　東京

註16　森貞次郎　「弥生文化の発展と地域性－九州－」『日本の考古学』III　河出書房　1966　東京

註17　この種の甕は他の甕に比べて著しく大きく、仕上げもていねいである。また二次焼成の痕跡も認められない。

註18　島津義昭氏採集資料による。

３．古墳出土須恵器の検討

―須恵器編年（案）第II様式の設定―

(1)出土須恵器の概観

調査した11基の古墳のうち、10号墳は無遺物であったが、他の10基の古墳から須恵器が出土した。須恵器はすべて周溝から出土したもので、追葬などを反映して同一古墳の場合でも形態（時期）差がみられるが、型式学的な抽出は可能である。

出土状態などをも加味して抽出した古式の須恵器は、従来肥後において資料の乏しかった第II様式に相当するもので、今後の基準資料となるものと考えられる。

かつて筆者らは、窯跡出土資料を操作して肥後における須恵器の編年試案[註1]を呈示したが、第Ⅰ・II様式については欠落したままであった。上の原支群出土の須恵器の一群は、この空白を埋める資料を多く含んでいる。

須恵器の編年は、窯跡出土資料を用いることが一般的となり、資料の豊富な地域においては細分化も進んでいるが、窯跡資料の少ない地域にあっては、遺跡出土資料を用いざるを得ない。しかも、須恵器の形態変化には地域差があり、短絡的に遠隔地の編年を準用するには問題もある。そこで、当座の指標として、古墳出土資料により編年案の空白を埋めておきたい。

将来、該期の窯跡資料が出現することは否定できないが[註2]、その時こそ、今回の操作を検証する絶好の機会である。

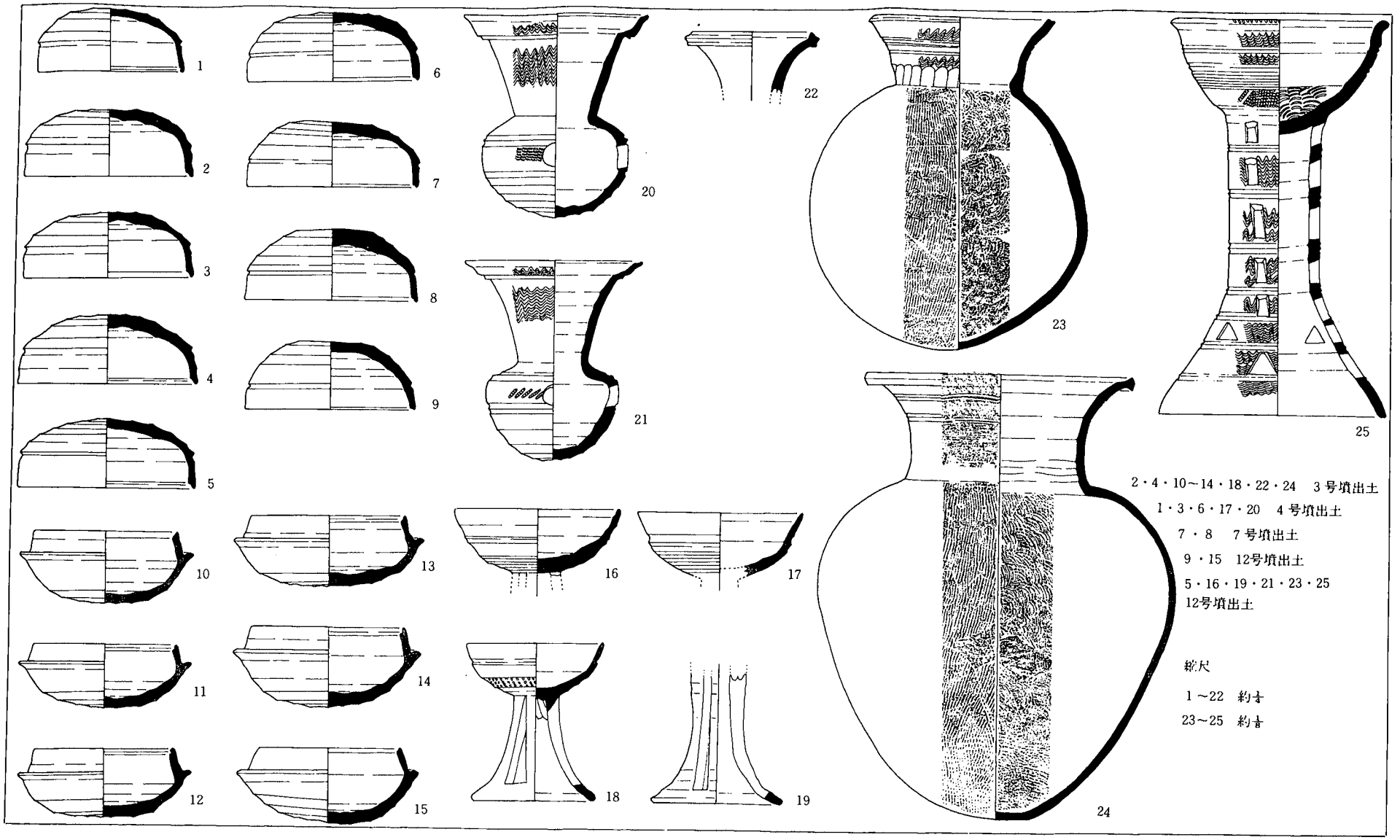
(2)第II様式の設定（第151図）

九州の須恵器編年において、岩戸山古墳（福岡県八女市）出土資料が大きな基準となっている。岩戸山古墳出土資料は、器種が限定され、年代の下降するものも含まれているが[註3]、大型器台を基準として第II期[註4]に位置づけられた。岩戸山古墳は、被葬者や築造年代の判る数少ない古墳[註5]であり、この編年観は現在も踏襲されている。ここでも、岩戸山古墳出土資料を第II様式の並行資料とし、前後の様式との差異、出土状態などを加味して抽出した。

蓋杯（第151図１～15）

蓋杯は最も量が多く、古式のものは３・４・６・７・９・11・12号墳で出土している。

杯蓋は５類に分類できる。蓋Ⅰ類(1)は口径10.4cm、器高4.5cmの小型品で、器形的には蓋III類に類似する。



第151図　須恵図(第II様式)編年(案)

蓋II類(2)は全体的に丸味を帯びた器形で、天井部と体部の境の稜は鈍い。天井部の約$\frac{2}{3}$はヘラ削りされているが、器壁は厚い。蓋III類（３～５）の器形は蓋I類に類似し、天井部と体部の境には明瞭な稜が付く。天井部の$\frac{2}{3}$以上はヘラ削りされ、口唇部内面には明瞭な段が付く。口径は12～13cmを測る。蓋IV類（６～８）は丸味を帯びた器形であるが、天井部が平坦化し、天井部と体部の境ではほとんど屈曲せず、稜は簡略化し、凹線・沈線で画される場合が多い。口唇部内面は有段となるが、やや弱い感じである。口径は12cmをわずかに越えるものが多い。蓋V類(9)は体部が短く、やや外開きになり、全体として半球形に近づいている。後出する要素を含んだものであろう。

杯身は３類に分類できる。身I類（10～12）は器形や焼成状態（胎土・自然釉）などからみて、同一窯の生産と考えられる。口径は10cm前後で、立上りは1.4～1.7cmを測り、わずかに内傾する。立上りの先端は内傾するもの（10）、有段のもの（11）、沈線を施こもの（12）があり、工人差を示すものであろうか。身II類（13～14）は口径11cm前後を測り、I類よりわずかに大型である。立上りの内傾度は少なく、高さも２cm前後を測る。身III類（15）は口径10cm前後で、I類と同規模であるが、調整等に粗雑さがみられ、立上りも内傾している。

出土状態、器形、法量、焼成状態などから蓋杯のセット関係をみてみたい。２（蓋II類）は濃緑色の自然釉が厚く付着し、３号墳周溝１区の下層から出土したものである。10～12（身I類）は同様な出土状態を示し、自然釉もきわめて類似し、蓋II類と身I類が対応するものである。３・４（蓋III類）と13・14（身II類）は法量、焼成状態からみてセットと考えられ、蓋III類と身II類が対応する。９（蓋V類）と15（身III類）は11号墳の周溝から重なって出土したもので、蓋V類と身III類がセットを成すものとみてよい。蓋IV類に対応する身は図示していないが、４号墳でみると身III類に近い器形と組合わさるものと考えられる。

高杯（第151図16～19）

小型の無蓋高杯のみで、有蓋高杯などは出土していない。杯部は半球形を呈し、脚部は長脚一段透しである。脚部は屈曲点をもたずに広がり、先端部も単純に丸い。透し窓には三角形（18）と長方形（19）がある。

甕（第151図20・21）

わずかに形態の異なるものが２点出土している。20は頸部の基部がやや大きく、頸部は直線的に上方に延び、口縁部で大きく屈曲する。胴部はやや角ばった球形である。21は頸部の基部がやや細く、頸部は外反気味である。口縁部の屈曲は20に比べて弱い。胴部は肩の張った球形を呈する。

提瓶（第151図22）

口縁部の小破片のみの出土で、胴部器形は不明である。口縁部形態からみて、提瓶としては古式のものであるが、第III様式に下降する可能性もある。

甕（第151図23・24）

23は球形の胴部に、逆八の字形の口縁部が付く。頸部の上半にはやや雑な波状文が二段にわたって施され、下半部はヘラ削り調整されている。胴部外面は平行叩き目の上に部分的にカキ目を施している。胴部内面は同心円叩き目の上にナデを加えているが、叩き目は消去ってはいない。

24の胴部は肩が張り、口縁部は大きく外反し、先端部は角ばる。頸部は沈線によって三段に画され、上二段に丁寧な波状文が施されている。胴部外面は平行叩き目の上に部分的にカキ目調整し、内面は同心円叩き目・円孤叩き目の上にナデを加えている。

23・24は器形は大きく異なるものの、胴部内外面の調整はきわめて類似しており、同一様式に属するものと考えられる。

器台（第151図25）

大型の高杯形器台で、台部は半球形を呈し、端部は丸くわずかに外反する。外面の上半には波状文、中位

から低部にかけてはカキ目、底部には木目直交の平行叩き目が施されている。内面底部には円孤叩き目が残る。脚部は中位までは筒状を呈し、下半部は八の字形に開いている。脚部は二条の沈線と中央の突出部によって8段に区画され、各段に透し窓や波状文がある。透し窓は上から5段目までは長方形透し、下2段が三角形透しで、長方形透しは縦1列に配されている。透し窓はいずれも三方に配されている。波状文は2段目から最下段までにみられるが、最下段を除いて2単位ずつ施されている。

以上が第II様式に相当すると考えられる須恵器の概要である。蓋杯・高杯・瑞・甕などは、細かく見れば形態差がみられるが、同一様式内に許容されるものと考えられる。また、有蓋高杯や壺類についての資料は欠落しており、形式学的な抽出にも誤診があるかもしれない。これらは、今後の資料の追加を持って補訂していきたい。（松本）

註

註1　松本健郎「肥後における須恵器の編年（予察）」『生産遺跡基本調査報告書II』　熊本県文化財調査報告第48集　1980

註2　宇土郡不知火町・元米ノ山窯跡出土資料に、第I様式後半～第II様式に含まれると考えられる杯蓋細片がある。

松本健郎・勢田広行「宇城窯跡群」『生産遺跡基本調査報告書II』　熊本県文化財調査報告第48集　1980

註3　小田富士雄「九州古式須恵器資料」『九州考古学研究（古墳時代編）』　1979

註4　水野清一・樋口隆康・岡崎敬『対馬』　1953

註5　森貞次郎「筑後風土記逸文に見る筑紫君磐井の墳墓」『考古学雑誌』第41巻第3号　1956

第２節　弥生時代住居址と集落の構造

上の原遺跡のある台地は、巾約200ｍ、全長500ｍを超える細長い丘陵で、頂部は平坦化している。丘陵は北西部で一旦くびれて塚原古墳群のある通称「塚原台地」へつながり、その先端部は御領・阿高の両貝塚のある丘陵と相対面している。また基部もくびれて南東側の山地へとつづいている。いわば「独立丘陵」状をなしていて、「上の原台地」とも呼ぶべきであろうか。丘陵頂部の海抜はほぼ35～40ｍまでの範囲で、水田面との比高差は約20～25ｍである。

今回検出した弥生時代の竪穴住居址は計13軒で「上の原台地」の南東部側に集中していて、南北約150ｍ、東西約70ｍのほぼ長楕形におさまる範囲内で、しかも台地の中央部に分布している。またこれらの垂直分布は、標高37.50ｍから39.00ｍの間にあり、37.50ｍ～38.00ｍの間で古墳時代の集落と重複している。しかし古墳時代集落の中心は35.0ｍ～36.0ｍの間にあり、弥生時代の集落立地とわずかな差異を生じている。

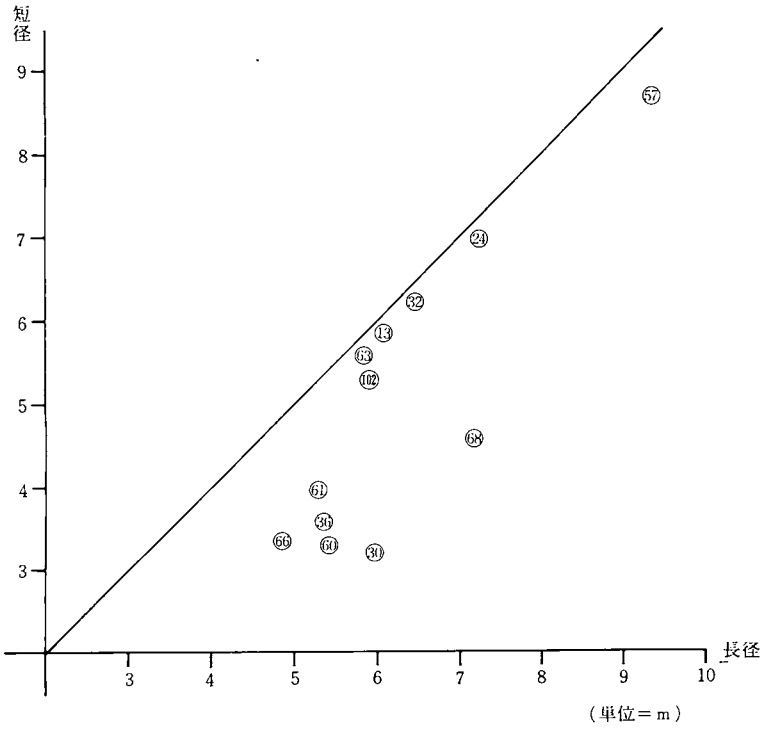
これらの住居址の構造上の特色についてふれ、つづいて集落を特色づけるいくつかの問題についてまとめておきたい。

１．住居の構造

(1)平面プラン

住居を平面プランで大別すると、円形と楕円形のものとがある。円形プランの住居址は13・24・32・57・63・102号の６軒である。57号住居址の長径9.36ｍ×短径8.70ｍが最大で、最小は68号住居址の長径5.85ｍ×短径5.60ｍであった。しかし57号住居址はその規模と構造から、他の５軒に比べて突出した存在であり、平均的な規模は径６～７ｍの範囲のものである。

第13表　弥生時代住居址の形態と規模



楕円形プランの住居址は、30・36・60・61・66・68号・藤山１号の７軒である。７軒の中で68号および藤山１号住居址は、楕円形より隅丸長方形に近く、他の５軒はいずれも「小判形」のような長楕円をなしていて、しかも小規模かつ床面積の小さいものである。

したがって本遺跡の住居プランは、円形ないし楕円に限られ、その比率は円形プラン６軒に対して、楕円形プラン７軒であった。また床面積を比較すると、円形プランが大きく、楕円形プランのものが小さい。この間には明確な一線を引くことができる。

なお楕円形プランの中では、長軸方位を表に表わすと第13表のようになる。これによると北から東へ50°前後振る30・36・68号と北から西へ40°前後振れる60・61・66の二つの群に分れている。

(2)壁高（竪穴の深さ）

住居の掘り込みの深さは、各住居址によって上部からの削平程度が異なっていて、これらを比較することはできない。しかし、最も保存状態が良かった24号住居址では最大0.85m、32号住居址で0.75mを測った。また他の住居址床面の絶対高も、24・32号と大差ないので、旧状はこれと同等か以上の深さがあったものと思われる。

(3)柱穴

円形プランのうち24・32・57・63号の4軒には、床面中央に方形ないし楕円形の地床炉をもち、この周囲に同心円上に主柱穴を配するが、13・102号では炉址・柱穴とも認められなかった。主柱穴の数はそれぞれ重複・切合によって正確に割り出すことは困難であるが、大概7～9本程度であったと推定される。また大型の57号住居址の場合は、柱穴が同心円上に二重に配列されていて、規模の大小によって、構造上のちがいがあったことがわかる。

一方楕円形プランの中で、68号と藤山1号住居址の2軒には、不整ながら柱穴を確認できたが、他の5軒には柱穴が認められなかった。この5軒はいずれも床面積が小さい為に、柱穴は竪穴の外側に設けられていたとも考えられるが、地山がかなり削平されていたために、竪穴周囲の状況については明らかにすることができなかった。

このように床面での柱穴の有無は、プランのちがいと、床面積の大小に深く関わりがあったことが考えられる。そして特に定形化した柱穴配列をもつ円形プランのものは、阿蘇郡西原村谷頭遺跡や菊池郡大津町日向遺跡出土例とほぼ同様の構造と考えられる。また二重の柱穴列や、出入口部分の柱穴列をもち、かつ大規模な57号住居址の場合は、集落内においても特殊な機能をもっていたものと考えられる。

(4)炉址

特に円形プランの中で、24・32・63号の3軒には、床面中央に、長方形ないし楕円形の浅い地床炉を持っていた。炉址にはいずれも炭化物・焼土粒の堆積が認められたが、長期間火を受けた痕跡はなく、炉としての機能を充分にはたしていたか否かは疑問である。おそらく食物調理の為の炉等は屋外に設けられていたと考えられる。

(5)貯蔵穴

貯蔵穴を他の土壙や柱穴と区別して認定することは難かしい。これらの中で特に楕円形プランの30・36・66号の土坑は、壙の断面がわずかに袋状をなし、また土器の出土状態などから、いわゆる貯蔵穴としての機能を持つものと考えることができる。貯蔵穴の平面形は、円形のもの（36号）と方形のもの（30・66号）とがあり、設けられる位置も、長辺の壁に沿った中央部に設ける場合（30・36号）と短辺の一方に設ける場合（66号）とがある。いずれにしても、貯蔵穴は円形プランのものにはなく、楕円形プランにのみ設けられて

いて、こうした現象は楕円形プランの竪穴の機能を考える上で、一つの手がかりとなるのではないだろうか。

（野田）

2．集落の構造

(1)住居址の年代

住居址内出土土器は、その住居の使用過程、廃絶時期、さらに埋没過程など、いくつかの場合が考えられる。一般的には土器の出土状態および、それらの中で主体となる土器群を抽出することによって年代を把握することが必要である。しかし、前節で編年作業に用いたそれぞれの住居址は使用時期とみなされる一括資料においても古い土器と新しい土器との混在は通有に認められる現象であって、どの土器をもって使用時期とするかは、極めて困難な作業である。こうした現象を前提として、各住居址の年代を出土土器の型式によって表わすと、一定の傾向を読み取ることができるのではないかと考えられる。

まず円形プランの24・32号住居址は、Ⅰ期～ⅡA期にかけての遺物を出土しているが、壺はⅠ期のものであるが、甕はⅡA期が主体となっている。したがって使用時期の中心はⅡA期と考えられる。57号住居址はⅠ期のみで構成されている。63号は出土土器が少ないために明らかにできないが、ⅡA期のものが出土している。102号はⅡB期のもので構成されている。

楕円形プランの30・36・61・66号住居址はⅡA期のみで構成されている。60号住居址はⅠ期かⅡB期までを出土しているが、その主体はⅡA期以降にある。また68・藤山1号住居址はⅡB期のみで構成されている。

出土土器の年代観から見ると円形プランのものはⅠ期からⅡB期のものまであり、楕円形プランのものも同様であるが、全体的な傾向として、円形プランのものが楕円形プランのものに先行するという結果となった。少なくとも円形プランの中ではⅡB期の土器をもつ住居址は6軒のうちわずか1軒であり、楕円形プランのものではⅠ期の土器をもつ住居址は7軒のうち1軒にすぎないという結果を取り上げても、平面プランから見た使用年代の差異が読みとれる。

第14表　弥生時代住居址の時期

プラン	住居址名	Ⅰ	ⅡA	ⅡB
円形	上の原 13号			
	上の原 24号			
	上の原 32号			
	上の原 57号			
	上の原 63号			
	上の原102号			
楕円形	上の原 30号			
	上の原 36号			
	上の原 60号			
	上の原 61号			
	上の原 66号			
	上の原 68号			
	藤　山 1号			

(2)集落の構成

13軒の住居址はそれぞれ重複することなく、土器型式からみると2型式にまたがる範囲のものであって、その機能した期間は極短期間であったと考えられる。いわゆる「継続型の集落」ではなく、「断続型」ないし「廃絶型の集落」として位置づけることができる。

円形プランの中で、57号住居址は規模・構造とも他の住居地に比べて秀でていて、さらに集落中央部に位置している。したがって57号住居址はこの単位集団の中の中心的な建物としての機能を有していたものと

考えられる。周辺部に取り囲む12軒の住居址すべてを同一単位としてとらえることは、困難であるが、大概円形プランと楕円形プランで小規模な住居地によって構成されている。その数の比率は円形プラン６軒に対して楕円形プラン６軒で同数である。先に楕円形プランの構造についてふれたように、これらの住居址の多くが円形プランのものに対して小規模であり、柱穴を持たず、中には貯蔵穴を持つものがあると指摘した。そしてこれらの住居址が住居機能をもつものではなく、倉庫的な機能をもつものではないかと想定した。もしこうした規定が事実であったとするなら、居住機能をもつ円形プランの竪穴内１軒と楕円形プランの倉庫１基を一単位とする６つの単位からなる集落が、大型住居址の周辺を囲むことになる。２軒（１基）一対の単位を１家族とすれば６家族を単位集団とする集落であったことになる。ところが各住居址間にはわずかな時間差があり、こうした想定は13軒すべての遺構の同時性を前提とした場合にのみ成立する仮説である。しかし住居址出土土器は大別２型式、細別３型式としたが、その間の時間差はほとんどなかったものと考えられる。それはある時期に使用されている土器群が、常に主体となる土器とこれに、より古い型式の土器、さらに新しい型式の土器の三者から構成されることが通有の現象であり、上原Ⅰ期からⅡＢ期までの形式差が、同時性の範囲内におさまるか否かの問題を解決する必要がある。調査者としては若干の異同があったとしても、同時併存の立場をとっておきたい。

(3)集落と墓地

集落の南東部に隣接して、２基の甕棺を検出した。甕棺はいずれも上原ⅡＡ～ⅡＢ基の土器であって、この集落に伴う墓地の一部であったと考えられる。集落の規模や営続期間からみて、この二基の甕棺にとどまるとは考えがたいが、周囲にこれ以上のものは発見できなかった。この一帯は耕作による地下げが行なわれていて、すでに失われていたとも考えられる。

このように集落と墓地との立地は、同一の丘陵上にあっても、先端部の低い部分に集落、基部の高い部分に墓地を営むといった関係にあったことがわかる。また集落を区画し、墓域を区画するような施設を検出することが出来なかった。おそらくこうした施設は伴わなかったものと思われる。（野田）

第３節　塚原古墳群をめぐる二・三の問題

１．将軍塚古墳の再検討

(1)将軍塚古墳とは

将軍塚古墳は、塚原古墳群中の消滅した古墳の１基である。大正末年頃、破壊に伴って小林久雄氏による応急調査が行われ、写真・略測図などの記録と遺物の一部が小林コレクション[註1]として保管されている。

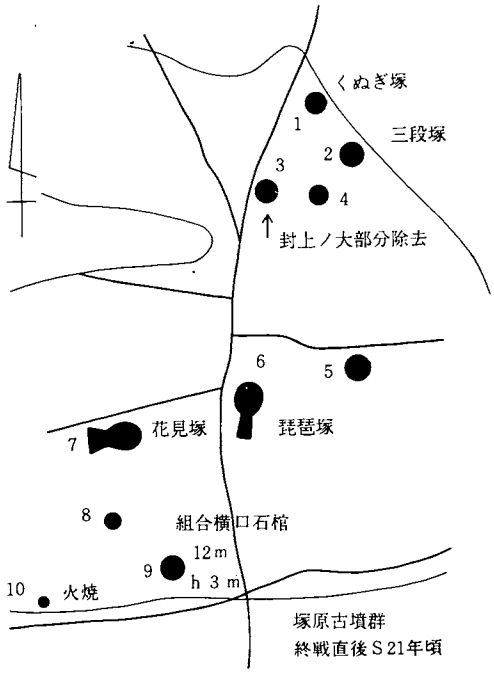
将軍塚古墳の概要については『城南町史』[註2]に紹介され、豊富な鉄製品の出土と、石障を有する横穴式石室[註3]として注目されてはいたが、充分な評価を受けていたとは言い難い。この古墳は塚原古墳群を理解する上できわめて重要であるので、塚原古墳群（上の原支群）の調査成果をまとめるにあたり、資料を採録することとした。

(2)将軍塚古墳関係の資料

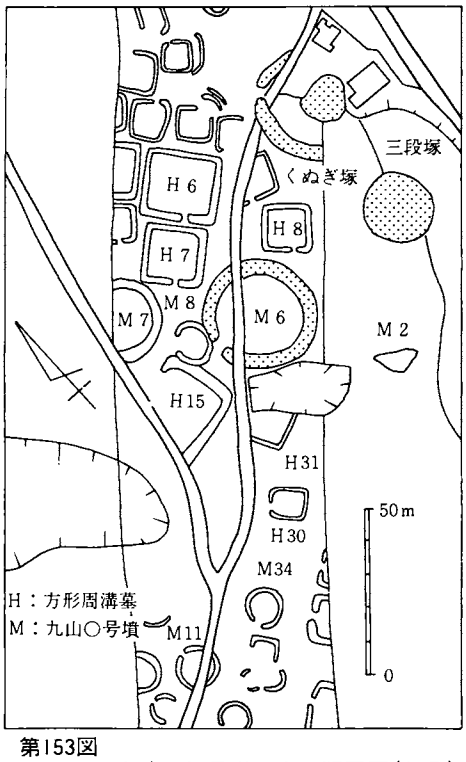
将軍塚古墳についての概要は『城南町史』に報告されている。さらに、小林コレクションの中に写真原版、出土遺物（鉄器）が含まれている。また、小林氏による石室略測図、塚原古墳群配置図の複写図が三島格氏のもとに保管されている。

(3)将軍塚古墳の比定（第152～154図）

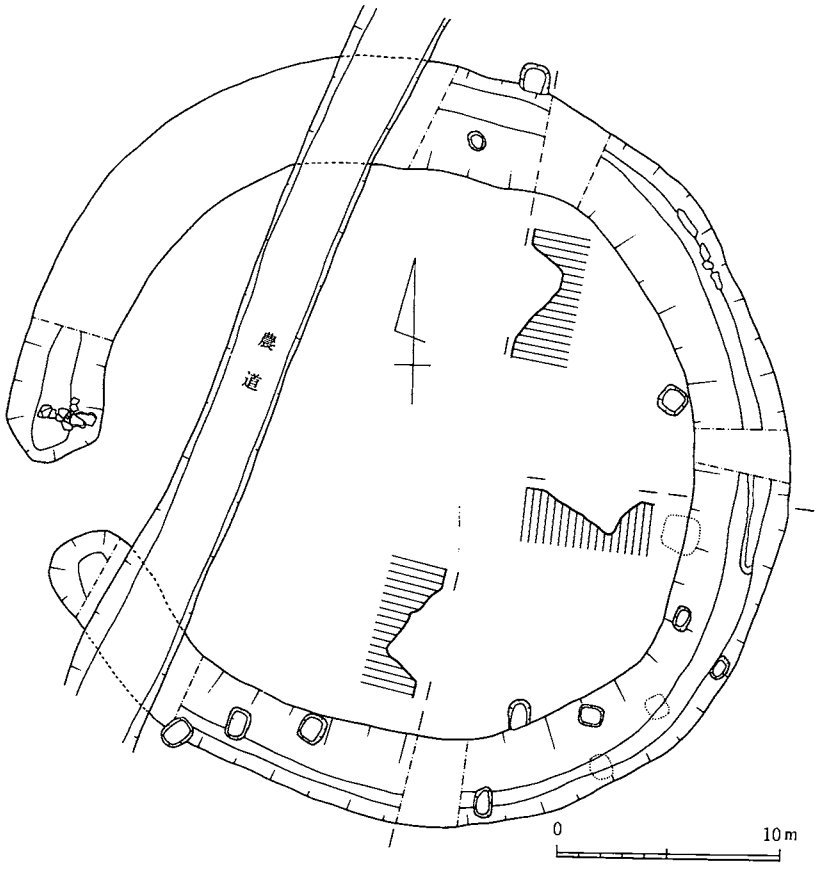
昭和47～48年度、九州縦貫自動車道建設に伴って塚原古墳群の発掘調査が行われた。約30,000㎡におよぶ調査区から、墳丘部を削平され、周溝部が埋没していた方形周溝墓・円墳など100基以上が検出された。調査区の中に将軍塚古墳が含まれていることが予測されたが、「調査区内に存在したといわれる将軍塚古墳については、その所在を裏付ける



第152図　塚原古墳群配置図（小林久雄氏原図、三島格氏筆写による）



第153図
塚原古墳群縦貫道調査区配置図(部分)
(『塚原』に拠る。一部改変)



第154図　丸山６号墳(将軍塚古墳)実測図(『塚原』に拠る)

遺構等は検出することができなかった[註4]」と報告されている。

第152図は小林久雄氏の作成による配置図を、昭和30年代に三島格氏が複製して保管されているものである。縦貫道調査区の古墳配置図(第153図)と対照すれば、将軍塚古墳と丸山６号墳が同一古墳であることが容易に看取される。

丸山６号墳(第154図)は周溝外径33～34.5ｍ、周溝幅3.2～4.2ｍを測る大型の円墳である。西側の部分を農道によって削られているが、その他の部分の周溝は良く残っており、周溝内から土師器と安山岩板石が出土している。周溝付近には14基の中世墳墓(土壙墓)が造られており、五輪塔の火輪・地輪が出土している。

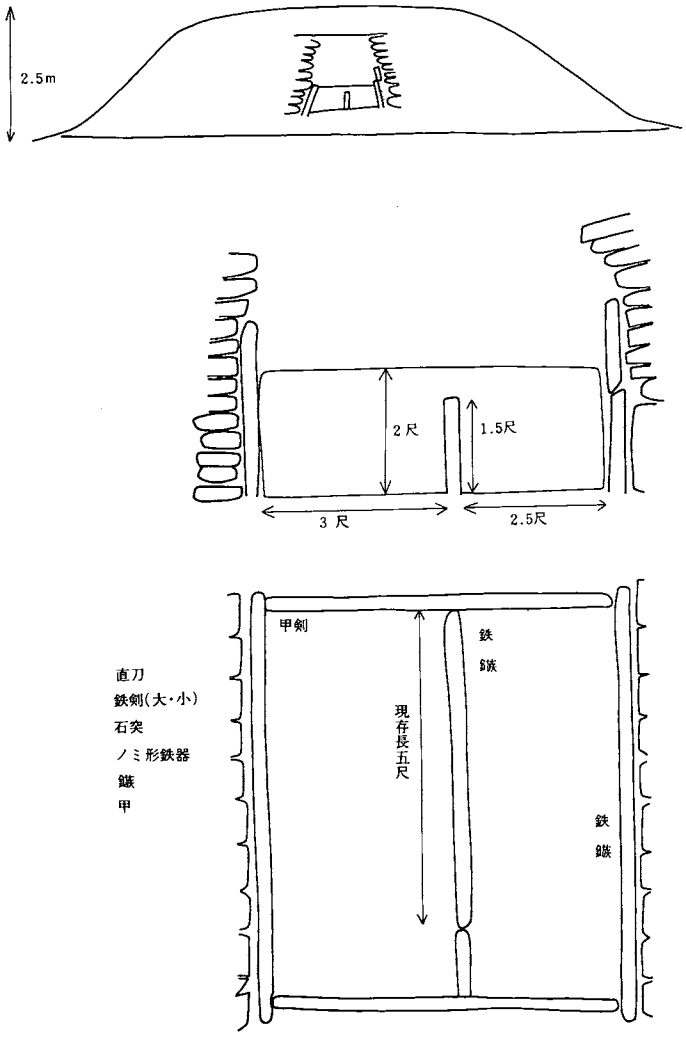
墳丘部はすべて削平されており、主体部の掘方は検出されていない。第155・156図でみると墳頂部はかなり平坦で、小林氏の計測では高さ2.5ｍと記録されている。

(4)将軍塚古墳の内部主体(第155～156図)

将軍塚古墳の内部主体については、破壊時、小林久雄氏が撮影された写真が公表[註5]されており、『城南町史』の記述とあわせて、その概要を知ることができる。さらに、小林氏による略測図(第155図)を入手することができた。

将軍塚古墳の横穴式石室は、石障系石室[註6]、あるいは肥後型横穴式石室と呼ばれるものである。石障区画の内法は1.6～1.7ｍと考えられ、石障の高さは左右のものは約90cm、奥壁寄りのものは約60cmと記録されている。石障区画内は中央に石障よりやや低い仕切石を立て、石室の主軸方向に沿って２区に区画されている。石室の周壁は石障の外側にほぼ接する位に積まれており、石障の高さまでは垂直に近いが、石障の上部から持送りを急にしている。これらのことから、石室は一辺2.0ｍ前後の方形プランで、小型の横穴式石室が推定される。写真などでみると、石材のほとんどは安山岩板石と考えられ、このことは丸山６号墳の周溝から安山岩板石が出土していることとも符号する。

第155・156図は羨道側から奥壁側をみたものと思われ、この時点ではすでに羨道部が失われているが、羨道は短小なものであったという。したがって玄室の奥行、石室の全長などは不明であるが、石室平面形は方形に近いものと推察される。



第155図　将軍塚古墳略測図(小林久雄氏原図、三島格氏提供)

(5)将軍塚古墳の出土遺物

(第157～160図)

将軍塚古墳からは鏡や多量の玉類も出土したらしいが、小林氏の調査時にはすでに持去られており、詳細については知り得ない。鉄製品はきわめて豊富で、小林コレクションの中に含まれており『城南町史』にも紹介されている。『城南町史』に記録されている鉄製品の品目、数量は次のとおりである。

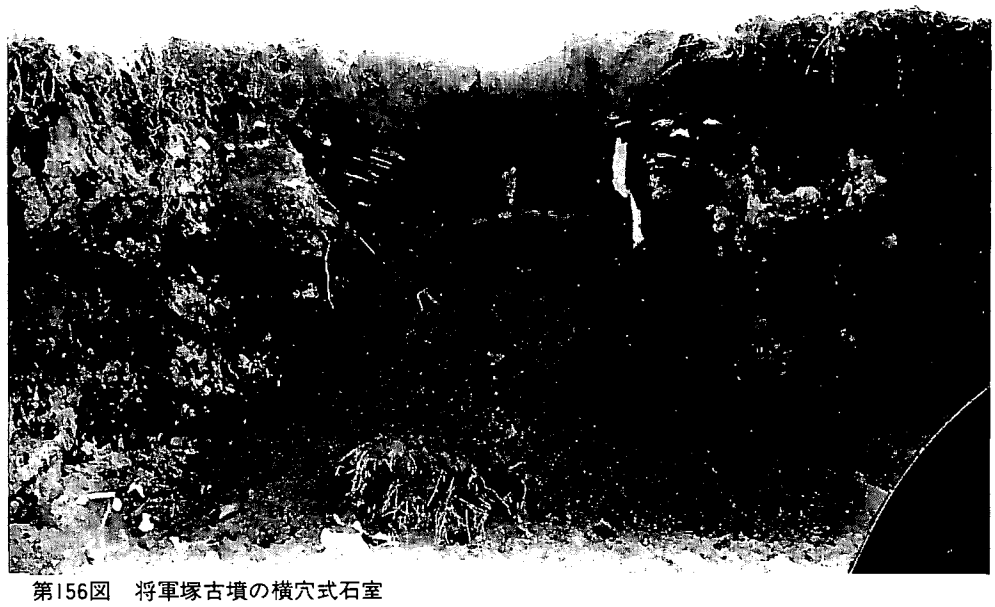
短甲1　　剣身4　　直刀身3
刀子3　　鉄鏃47　　鉄鎗・矛3
鉄鍬4　　不明鉄器2

今回の資料調査で確認したものは以下に示すとおりであるが、数量等については『城南町史』と若干相違する点もある。

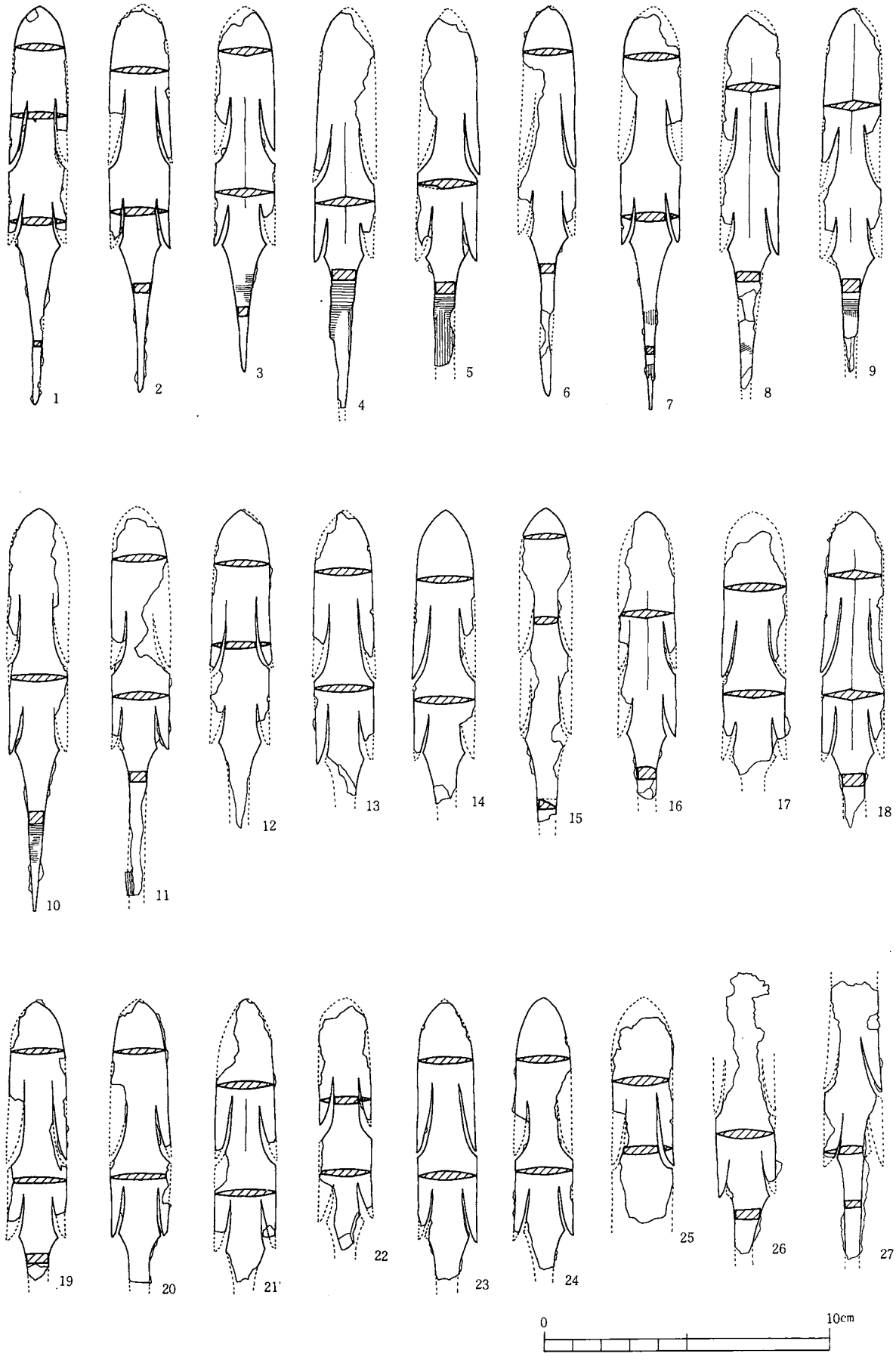
これらの鉄製品は発見後約60年を経ているため、自然劣化などによる破損もあるが、全体として遺存状態は良好である。

鉄鏃(第157・158図1～46)

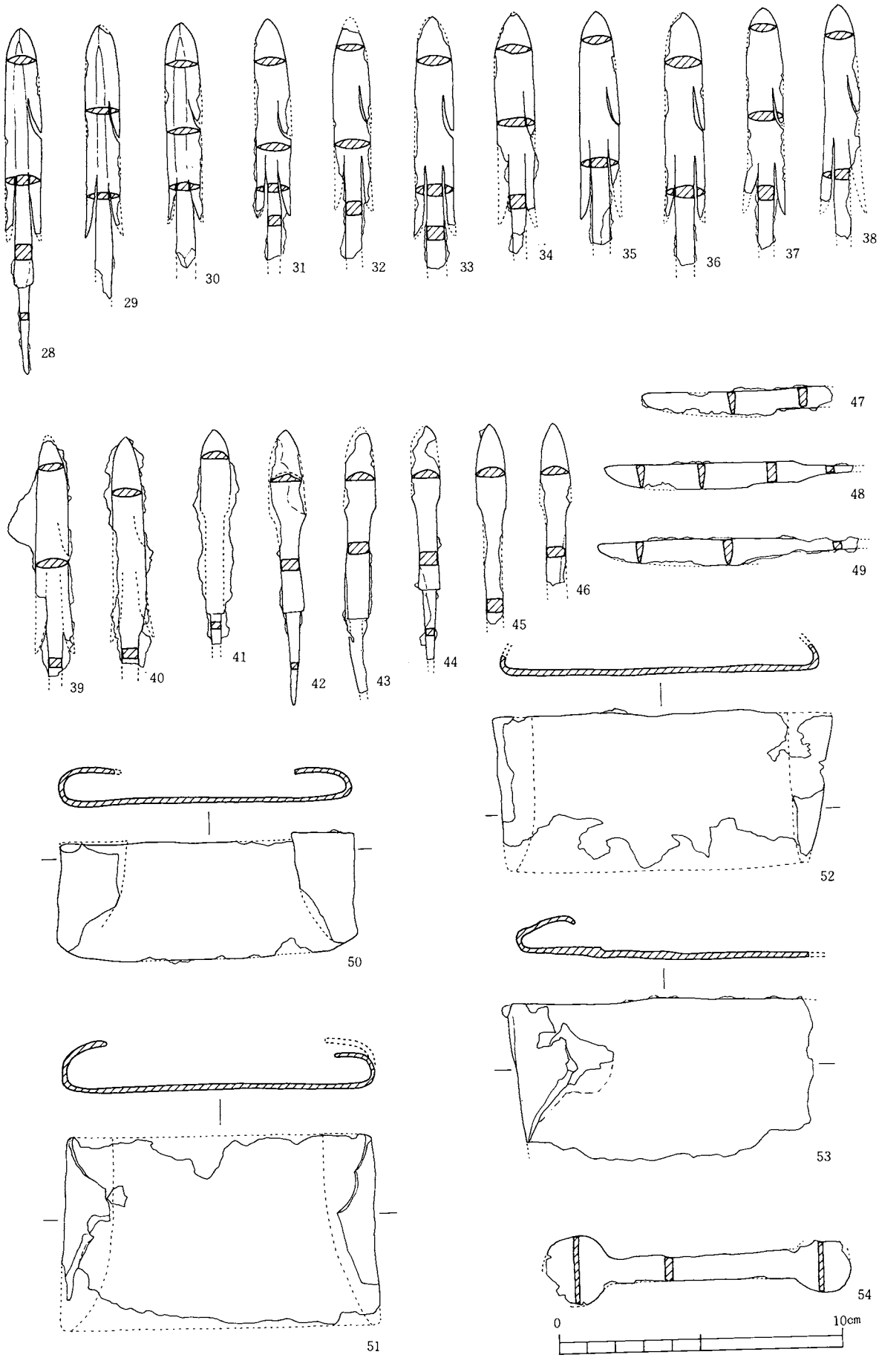
総数で50点を数えた。形態により3種に分類できる。1～27は所謂二段逆刺鉄鏃で、ほぼ同一の規格である。幅2cm前後、全長は13



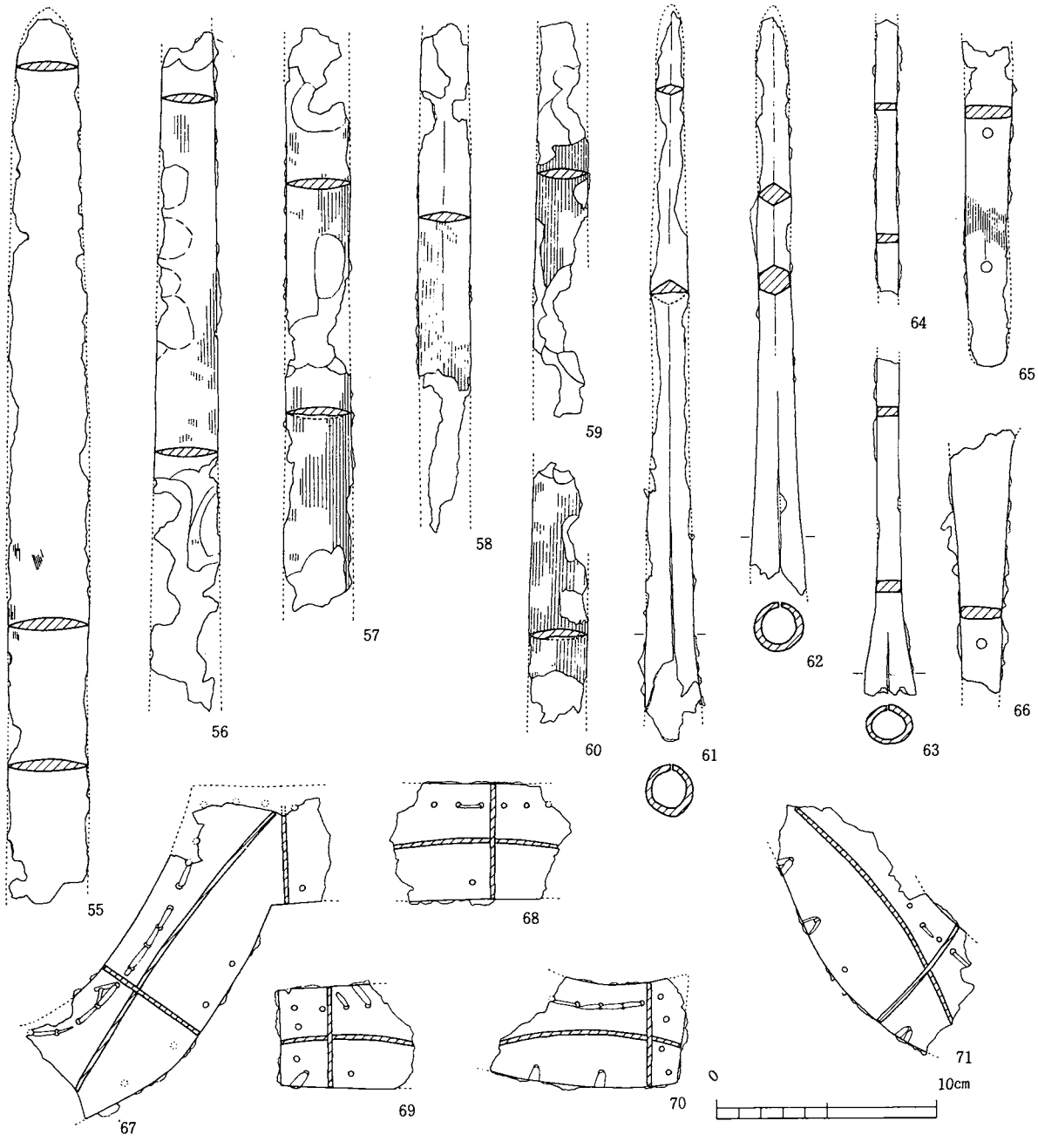
第156図　将軍塚古墳の横穴式石室



第157図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図



第158図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図



第159図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図

～14cmを測る。遺存状態の良いものでは中央に鏑が確認される。茂山護氏の分類[註7]ではII－A$_2$類に属する。

28～40も二段逆刺鉄鏃[註8]であるが、上段の逆刺は一方にしかなく、前者に比べて細身で、先端もやや尖り気味である。遺存状態の良い28は、全長12.2cmを測る。

41～46は後藤守一氏分類[註9]にいう片丸造狭鋒長三角形式で、42の全長は9.7cmを測る。

刀子（第158図47～49）

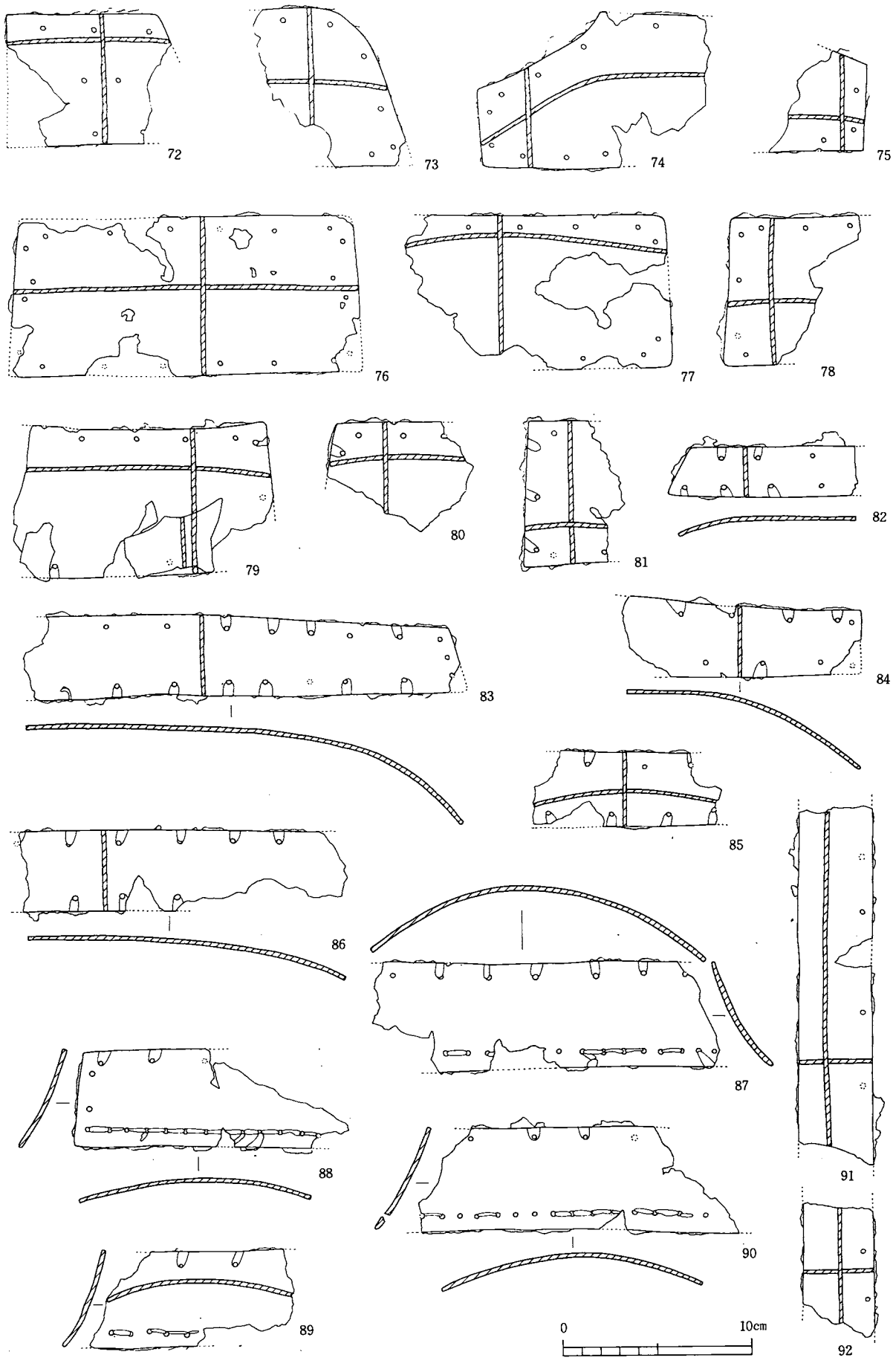
いずれも小型の刀子で、関の状態などは破損、錆などのため不明である。

鍬先（第158図50～53）

鉄板の両端を折曲げたもので、幅には広狭の差がある。木質の付着は認めない。

不明鉄器（第158図54）

両端が円形となり、その間を幅1cm前後の鉄板で結んでいる。厚さは両端の円形部分が2mm前後、中央部は約3mmである。



第160図　将軍塚古墳出土鉄製品実測図

鉄剣（第159図55～60）

原形を留めているものはない。57・59・60は同一個体の可能性があり、点数は4振と考えられる。58を除いて、遺存部からみてかなりの長剣である。

鉄矛（第159図61～64）

刃部の断面が菱形を呈するもの（61・62）と、断面長方形を呈するもの（63）がある。64は63と別個体とすれば、矛の点数は4点となる。

短甲（第159～160図67～92）

長方板革綴短甲で、一領分には部材が不足している。長方板は台形を呈しており、76はほぼ全形を知り得る。その他、帯金（82～86）、引合板（91・92）、裾板（87～90）などがあるが、後胴押付板などは見当らない。裾板には3種の幅があり、下端部には革組覆輪がみられる。その他の部材にも革綴の跡が観察される。表面では側縁部と直交し、裏面では直交および斜交する綴方である。[註10]

以上が将軍塚古墳出土鉄製品（小林コレクション）の概要であるが、縦貫道建設に伴う丸山6号墳の調査では周溝内から土師器が出土している。器形としては広口壺、小型丸底壺、高杯などがあり、高杯が多い。

(6)将軍塚古墳の再評価

将軍塚古墳は縦貫道調査区の丸山6号墳に比定されることが明らかとなり、石室構造や出土遺物についても再整理を試みた。従来、出土遺物の質量から、将軍塚古墳を塚原古墳群中の主要古墳の一つに数えてはいたが、丸山6号墳に比定されることにより、旧にも増して重要性を高めたといえる。

丸山6号墳は周溝外径が30mをこえ、塚原古墳群においては大型円墳に属する。その他、丸山4号墳、くぬぎ塚古墳、りゅうがん塚古墳、三段塚古墳、石之室古墳などが30mをこすが、主体部構造、出土遺物などの明らかなものは少ない。

将軍塚古墳の内部主体は、平面形が方形に近い小型の横穴式石室で、石障を巡らし、内部を2区に区画するものである。周壁の上部は持送りされ、肥後型横穴式石室と呼ばれるものである。

周溝から出土した土師器、石室内出土の鉄製品（とくに鉄鏃、鋤先、短甲）からみて、その年代は5世紀の第2四半紀前後に比定することができよう。そうすれば、この種の石室としては小坂大塚古墳[註11]などに先行する最古式のものとなり、石室の系譜を考える上できわめて重要である。

略方形プランの玄室と穹窿形天井を特徴とする肥後型横穴式石室は、中九州における横穴式石室の類型として古くから注目されていた。初期の段階では周壁に沿って石障を巡らし、その内部に屍床を配置する場合が多い。肥後型横穴式石室あるいは石障系古墳については、近年乙益重隆[註12]、柳沢一男[註13]、河野法子[註14]らによって論及されているが、その出目と系統について充分に解明されているとは言えない。

従来、肥後型横穴式石室の祖形を小坂大塚古墳に求めていたが、将軍塚古墳はそれに先行するものである。将軍塚古墳の屍床配置は樋ノ口古墳[註15]、小浜崎2号墳[註16]に類似例がみられるが、石室全体としては重盛塚古墳[註17]が注目される。重盛塚古墳は未調査であるが、略方形の玄室に安山岩の石障を巡らし、周壁は安山岩割石を小口積みにしている。

このように、初期の肥後型横穴式石室の形成には宇土半島、緑川流域が重要視され、重盛塚古墳の石室構造が明らかとされれば、その出現期の様相はさらに明らかにされるものと考えられる。

さらに、鏡・鉄甲をはじめ、豊富な鉄製品の副葬は、その被葬者が軍事的色採を強く保持しており、統括的な首長から武器の管理責任と軍事的職掌を委ねられた豪族[註18]の有力構成員であったことが想定される。このように、塚原古墳群の造営集団が武人集団として浜戸川中流域を支配した豪族であるとすれば、塚原古墳群

の理解に新たな視点となろう。　（松本）

〔付記１〕　小林コレクションの採録にあたっては下記の方々の援助を受けた。記して深謝するものである。また、故小林久雄氏の学恩に対して、敬意を表するものである。

小林麟也・三島格・白木原和美・甲元真之・米倉秀紀・熊本大学文学部考古学研究室

〔付記２〕　将軍塚古墳出土の二段逆刺鉄鏃が１点、京都大学文学部に所蔵されている。

京都大学文学部考古学研究室『考古学資料目録』２　1968

註

註１　小林久雄氏が収集された遺物・資料類で、城南町歴史民俗資料館に保管されている。

註２　小林久雄・三島格「古墳時代」『城南町史』 1965

註３　河野法子「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第２号　1982

註４　野田拓治他『塚原』 熊本県文化財調査報告第16集　1975

註５　註２書の巻頭写真

註６　石障の定義については一定しておらず、広義・狭義の解釈が行われているが、ここでは狭義に解釈する河野法子の考えに従う。註３に同じ。

註７　茂山護「二段逆刺を有する鉄鏃について」『宮崎県総合博物館研究紀要』第５輯　1980

註８　註７ではこの種のものは二段逆刺鉄鏃に含められていないが、二段逆刺鉄鏃の一種とした方が妥当であろう。

註９　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第４号　1939

註10　小林行雄「紐綴結合」『続古代の技術』 1964

註11　浜田耕作・梅原末治『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』　京都帝国大学文科大学考古学研究報告第１冊 1917

註12　乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『国學院大学大学院紀要』第11輯　1980

註13　柳沢一男「肥後型横穴式石室考」鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』 1980

註14　註３に同じ

註15　松岡史「古代」『唐津市史』 1962

註16　池水寛治「鹿児島県長島町小浜崎古墳群Ⅰ」『鹿児島考古』第５号　1971

註17　三角町教育委員会『三角町の文化財』 1983

註18　北野耕平「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第54巻第４号　1969

2．塚原古墳群の範囲

(1)塚原古墳群の現状

塚原古墳群は、多くの古墳が開墾・採土などによって墳丘部を削平され、周溝や主体部の一部が地下に埋没している。

江戸時代、多数の古墳が存在したことは『肥後国誌』[註1]や『古今肥後見聞雑記』[註2]によって容易に推察される。『肥後国誌』下益城郡廻江手永、塚原村の条に「九十九塚。塚原ノ地名依之、九十九ノ塚諸所ニアリ、其所以ヲ知ラス、里俗此塚ハ百ケ所ニアリトテ百本ノ串ヲ造リ塚毎ニ一本ヅツ立ルニ、一本ハ必ズ残ル故ニ九十九塚ト云、享保年間農夫過ツテ塚ノ傍ヲ崩セシニ、内ニ石棺有テ崩レタル中ニ、亘リ二寸計リノ金ノ環アリシヲ驚キ怖レテ旧ノ如ク納メタリト云。」とある。

同様な記事が『古今肥後見聞雑記』に、「同郡塚原村ニ九十九塚有、村号是ニよると云り。伝へ云、古へ土蜘退治之節官軍の将を蔵めし塚也と云。于今塚之内より武器之類出る由。漸々ニ作所と成、其跡纔に残るも有。今算るに十六七も塚と見えしハ有之。」

これらの地誌により、古墳の実数はともかく、多数の古墳が存在し、漸次消滅していったことが窺える。

塚原台地の頂部はほぼ全面が畑地であるが、この開発（耕地化）に伴って古墳群が消滅していったであろうことは、先に考察（第Ⅳ章第4節13）したとおりである。

現在、塚原台地上に墳丘の遺存する古墳は10基[註3]（前方後円墳2基、円墳8基）を数えるにすぎない。昭和30年代、『城南町史』編纂事業では13基[註4]の古墳が確認されており、30～40年代にも4基の古墳が消え去ったことになる。幸い、古墳の破壊は墳丘部に止まり、周溝や主体部の一部は地下に埋没している。

(2)調査略史

小林久雄氏の本業は医者であるが、初代城南町長を務め、また考古学者としても多くの先駆的な業績がある。塚原古墳群の調査も、小林氏を嚆矢とする。氏は破壊の通報などを受けては調査を実施し、将軍塚・日焼塚・岸甲古墳などを調査し、その資料は『城南町史』に紹介され、小林コレクションとして保管されている。

戦時中、小林氏同行のもとに梅原末治氏が塚原古墳群を調査し、石之室古墳についての報告[註5]がある。

昭和30年代、『城南町史』編纂事業として塚原古墳群の調査が行われた。発掘が行われたのは石之室古墳だけであるが、その時点で現存する古墳13基と、大正末～昭和20年代に破壊・消滅した古墳についての報告があり、塚原古墳群に関する基本資料となっている。

昭和47～48年、九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査が行われ、約30,000㎡の範囲に方形周溝墓39基、前方後円墳1基、円墳42基、石棺18基、石蓋土壙1基などが調査[註6]された。この内、墳丘が遺存し、地表に標式が認められたのは前方後円墳1基と円墳1基で、その他は埋没した古墳であった。調査が縦貫道予定地に限られたこともあってか、その報告の中には古墳群の範囲については触れていない。

上記の成果に触発され、昭和51年、塚原古墳群の範囲確認調査が行われた[註7]。調査は縦貫道調査区の両側（東西）約14haにおよび、試掘によって埋没古墳を探知し、古墳群の範囲を確定しようとするものであった。その結果、試掘区域の大半の10.5haに古墳の広がりが推定された。

これらの成果をもとに、昭和51年、塚原古墳群は国史跡に指定され、縦貫道はトンネルによって塚原台地

を通過することとなった。

昭和54年、城南町教育委員会による松手地区の確認調査が実施され、北地区・南地区の西端部でも古墳の埋没が確認された。[註8]

昭和56年、城南町教育委員会によって丸尾地区の一角（56年度町教委調査区とする）の確認調査が行われ、方形周溝墓3基、円墳1基、石棺墓1基を発掘し、周溝の一部と考えられるものが4カ所で確認されている。

(3)塚原古墳群の範囲（第2図）

現存する古墳、およびこれまでの調査結果を総合して、塚原古墳群の範囲について整理してみたい。説明の都合上、県教委の範囲確認調査で使用された地区区分に準じ、縦貫道調査区、東地区（縦貫道調査区の東側）、北地区（縦貫道調査区の西側で、松手の谷以北）、南地区（松手の谷以南）に区分する。

縦貫道調査区は塚原台地を南北に横断しており、約3haの範囲に方形周溝墓39基、前方後円墳1基、円墳42基などが調査され、分布密度は約370m²に1基の割合である。

東地区にはくぬぎ塚、三段塚、丸山1・2号墳が現存する。地形的にみると、縦貫道の東側約120mの地点で南北から谷が弯入し、縦貫道付近では約500mを測った台地の幅は急に狭くなり、70～80mを測るにすぎない。このくびれ部の北側の谷頭に、かつて丸山5号墳が存在したというが、現在では確認できない。従来、塚原古墳群の範囲をこのくびれ部までとする見方が強かったが、上の原支群の発見により、その範囲が確定された。

上の原支群の調査結果から、塚原古墳群の東限は1・5号墳を結ぶ線で画される。ただ、55年度調査区の北東部にはかなりの平坦面があり、1号墳の在り方からみて、この部分に古墳が広がっている可能性があるが、広範囲ではないと思われる。丸山溜池の東南にも格好の舌状丘陵があるが、開墾などによる削平が著しく、古墳の有無については確認できない。

東地区の北・南限は、南北から弯入した谷によって画されるが、ほぼ等高線の30mライン以上に古墳が分布したものと考えられる。

上の原支群では約7,500m²の範囲に11基の古墳が検出され、分布密度は約680m²に1基の割合となり、縦貫道調査区に比べると密度は低い。おそらく中心部を離れた縁辺部では、この程度の分布状況を示すのであろう。

北地区は、松手の谷より北側の三角地帯であるが、現存する古墳はりゅうがん塚1基だけである。北地区の北側斜面は比較的緩やかで、台地裾には現在の集落が占地している。

縦貫道調査区の北端では、標高21m付近まで古墳が確認されている。同様に、56年度町教委調査区でもほぼ20mラインに古墳が検出されており、北地区については標高20m以上に古墳の広がりが想定される。そして、これまでの調査結果をみると、北地区の北側斜面には方形周溝墓が多い。56年度町教委調査区では、約5,500m²に8基の方形周溝墓・円墳が確認されており、分布密度は690m²に1基の割合となり、上の原支群の数値に近い。

南地区は地形的にさらに2分される。縦貫道から西へ約500mは、東から西へ緩やかに傾斜する台地が三角形に延びるが、500～600mの間は鞍部となり、さらに西側は嘴状に約650mほど西へ延びている。ここでは前者を南地区、鞍部から西側を南（岸）地区とする。

南地区には花見塚・琵琶塚の二前方後円墳と、石之室・北原甲・日焼塚の5基が現存するが、いずれも変形が著しい。これまでの確認調査からみて、南地区のほぼ全域に古墳が分布するとみられ、地形等の観察結果を総合すれば、標高25mライン以上に限られるようである。

南（岸）地区はきわめて幅の狭い丘陵で、古墳が群在するような地勢ではない。この丘陵にはかつて岸甲・岸乙・岸丙の3古墳が尾根上にあったとされるが現存しない。また、畜舎建設時にも土師器が数点出土[註10]している。地形的にみて、この地区には散発的に古墳が築造されたものと考えられる。

以上のように、内容の最も明らかな縦貫道調査区をはじめ、東地区・北地区・南地区・南（岸）地区を概観したが、南（岸）地区以外は便宜的な地区区分で、本来は同一の群に属するものである。南（岸）地区は地形的に前者と隔絶されているが、塚原古墳群の1支群に含ませた方が理解しやすい。

南（岸）地区を除いた推定範囲面積は、約242,500㎡である。縦貫道調査区、上の原支群、56年度町教委調査区の平均分布密度は580㎡に1基の割合であるので、機械的に算定すれば、塚原古墳群の総数は418基となる。範囲のやや不明確な地点もあり、その点を考慮しても、古墳数は350～400基を推定することができる。

南（岸）地区は、先にも述べたように、散在するものと考えられ、地形からみても20基以上の存在は考えられない。

（松本）

註

註1　森本一瑞『肥後国誌』 1772

註2　寺本直康『古今肥後見聞雑記』 1784

註3　前方後円墳……花見塚・琵琶塚

円墳……りゅうがん塚・くぬぎ塚・三段塚・丸山2号墳・丸山1号墳・石之室・北原甲・日焼塚

註4　註3の他、小木古墳・岸丙古墳・丸山3号墳が現存したとされている。

註5　梅原末治「肥後の二古墳—豊田村石之室と免田町の鬼の釜古墳—」『史跡と美術』第169号　1946

註6　野田拓治他『塚原』 熊本県文化財調査報告第16集　1975

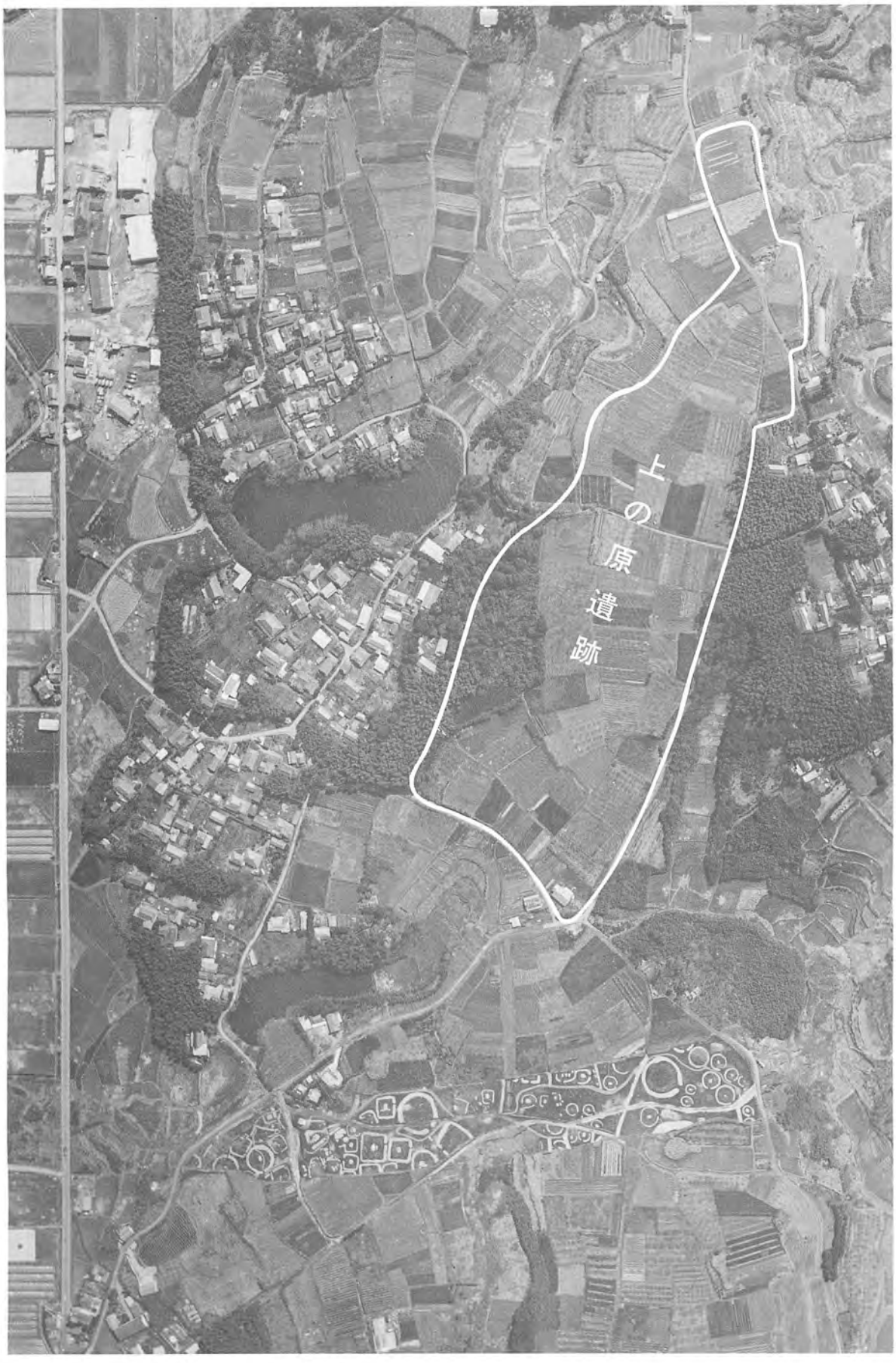
註7　隈昭志・緒方勉・杉村彰一『塚原古墳群調査報告書』 熊本県教育委員会　1976

註8　豊崎晃一・下村悟『塚原古墳群松手地区調査報告書』 城南町文化財調査報告第2集　1979

註9　高野啓一・豊崎晃一『塚原古墳群調査報告書—塚原丸尾地区古墳群範囲確認調査—』　城南町文化財調査報告第3集　1982

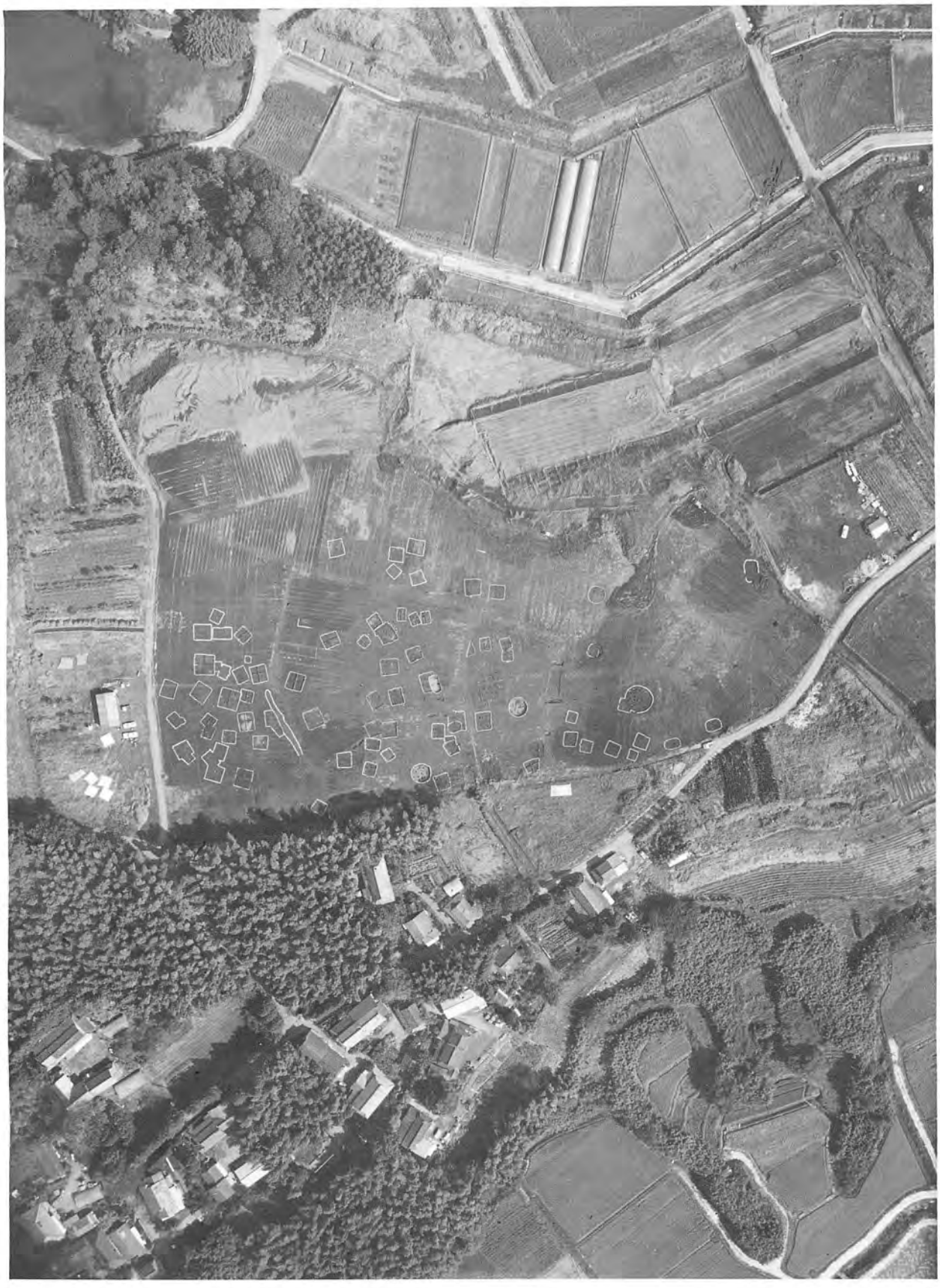
註10　野田拓治「古式土師器の成立と展開—特に中部九州における編年試案—」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』 1982

図　　版



図版１　上の原遺跡空中写真（下は塚原古墳群）

図版２　上の原遺跡遠景(北東から)



図版３　上の原遺跡空中写真(昭和53・54年度調査区)

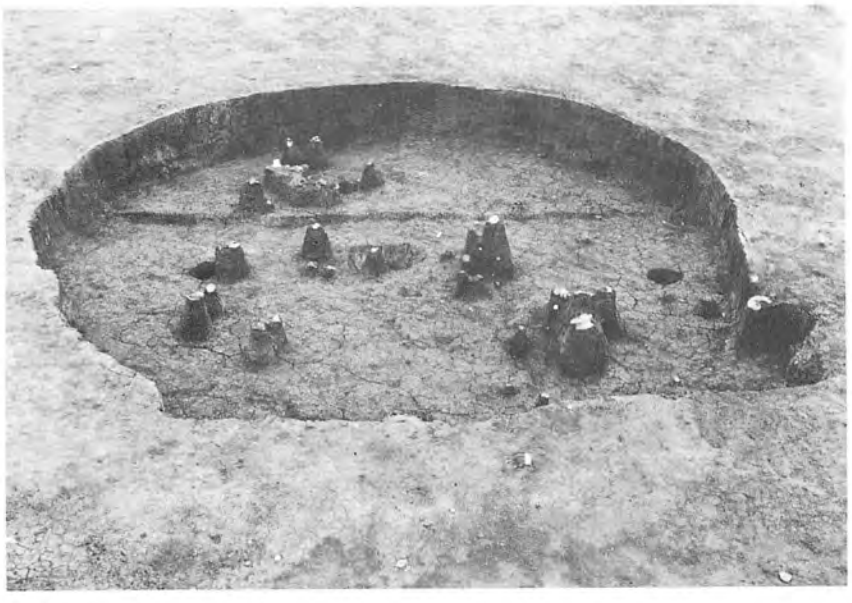
集石遺構

集石遺構

上の原13号住居址

図版4　集石遺構、上の原13号住居址

上の原24号住居址



上の原32号住居址

上の原32号住居址

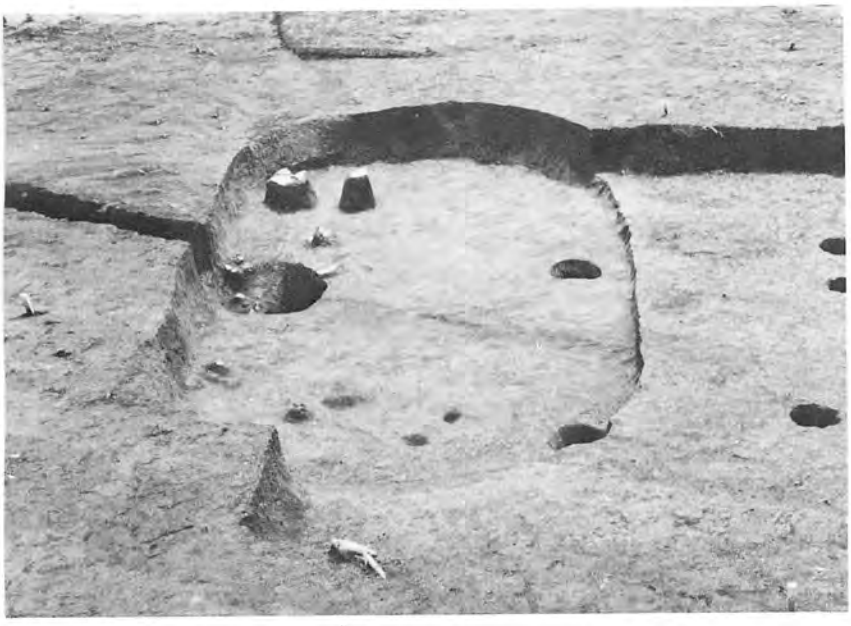
図版５　上の原24・32号住居址

上の原57号住居址

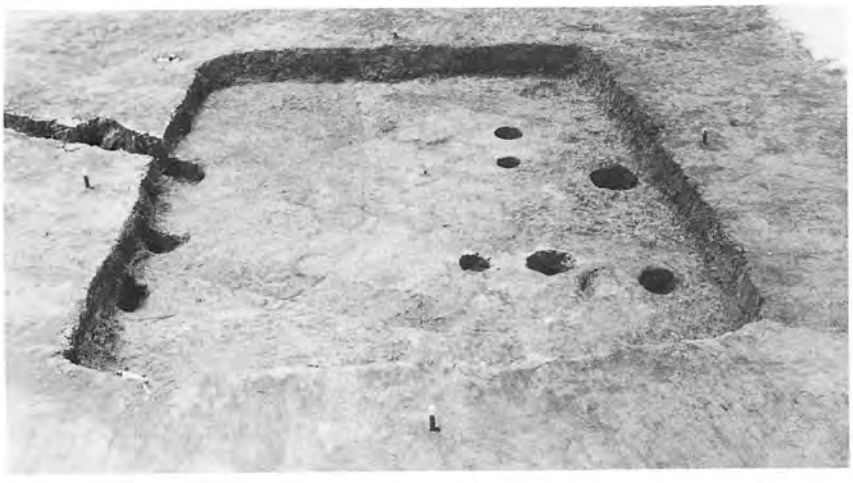
上の原57号住居址

上の原63号住居址

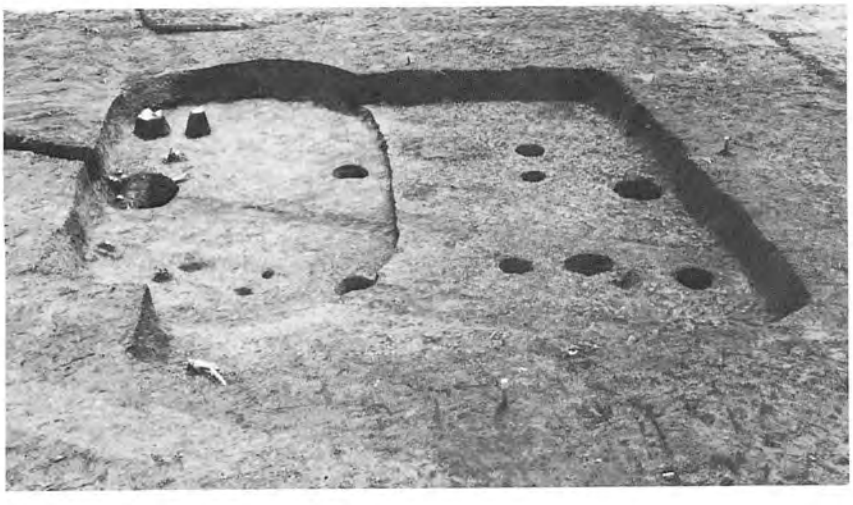
図版 6　上の原 57・63 号住居址



上の原30号住居址



上の原30号住居址



上の原30号住居址

図版７　上の原30号住居址

上の原36号住居址

上の原60号住居址

上の原60号住居址

図版 8　上の原36・60号住居址

上の原61号住居址

上の原66号住居址

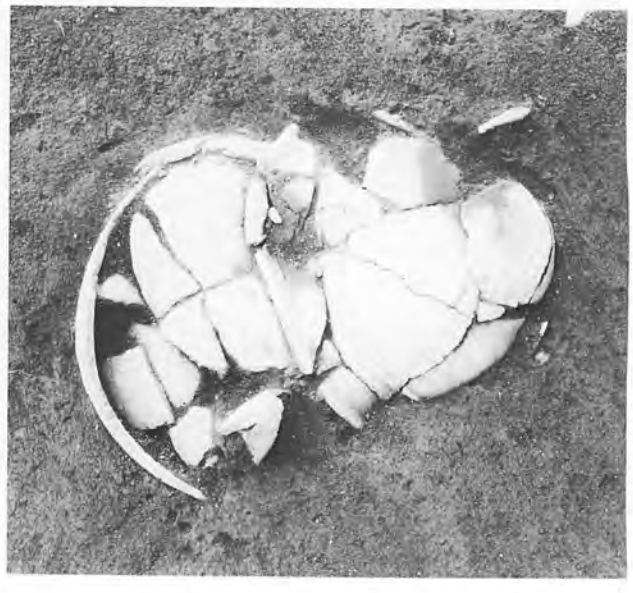
上の原68号住居址

図版９　上の原61・66・68号住居址

藤山１号住居址

藤山１号住居址

▲藤山１号甕棺



▶藤山２号甕棺

図版10　藤山１号住居址、藤山１・２号甕棺

1

5

6

2

10

14

3

7

4

9

8

図版11　弥生土器(24号住居址出土土器)

30－1

30－2

32－15

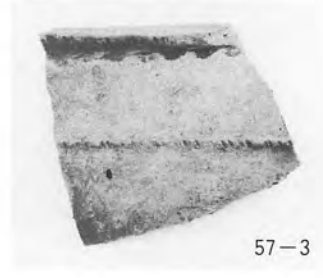
32－6

32－11

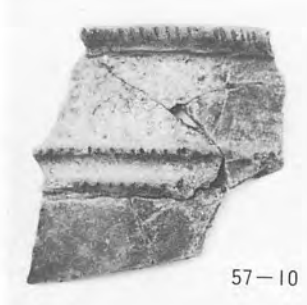
32－12

32－8

32－9


57－3

57－4


57－10

57－3

図版12　弥生土器(30・32・57号住居址出土土器)

60－3

60－4

60－8

60－6

60－13

60－9

60－17

61－4　61－5

61－2

66－4

図版13　弥生土器(60・61・66号住居址出土土器)

66－6

68－4

藤山1－3

102－6

102－5

藤山1－1

藤山1号・上

藤山2号・上

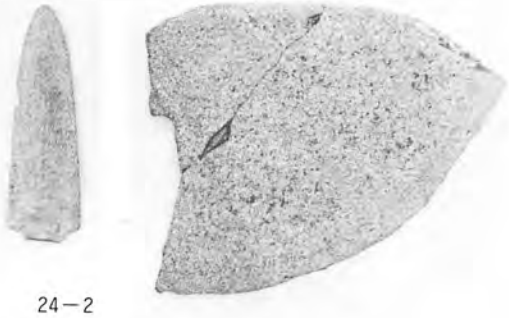
藤山1号・下

藤山2号・下

図版14　弥生土器(66・68・102号住居址出土土器、藤山1・2号甕棺)

西平式土器

24－1



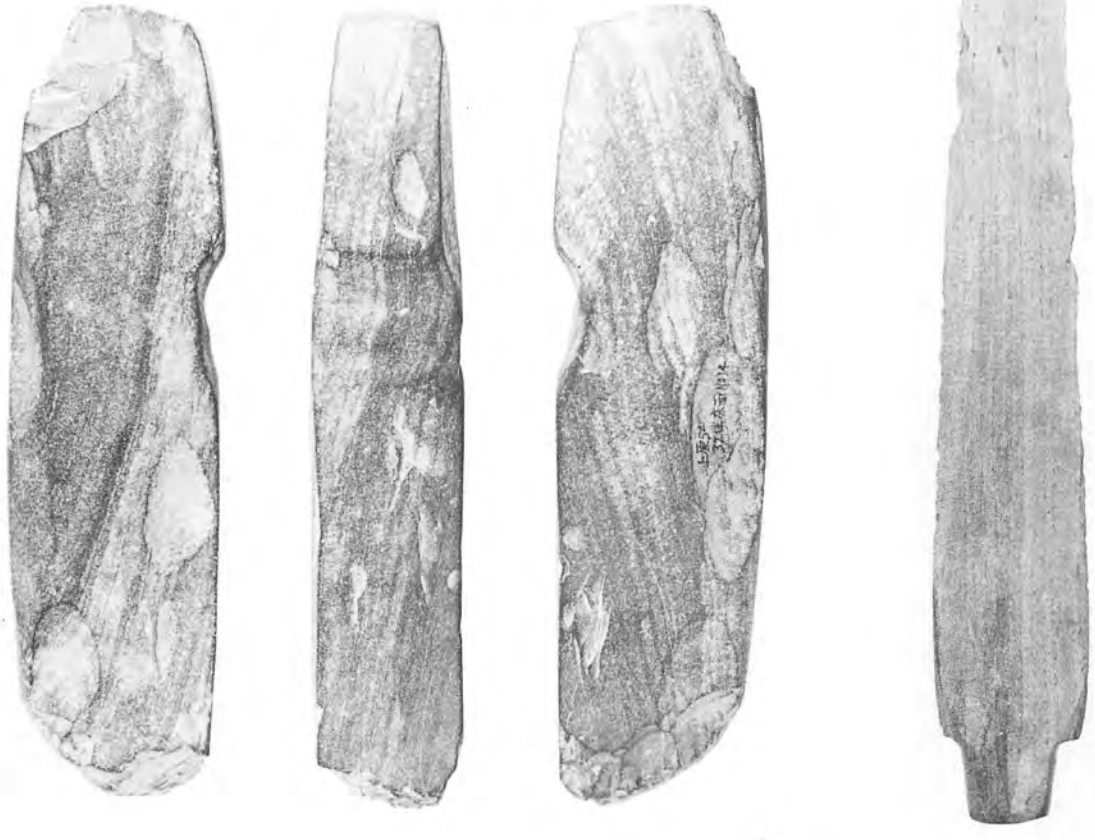
24－2

24－3

32－1

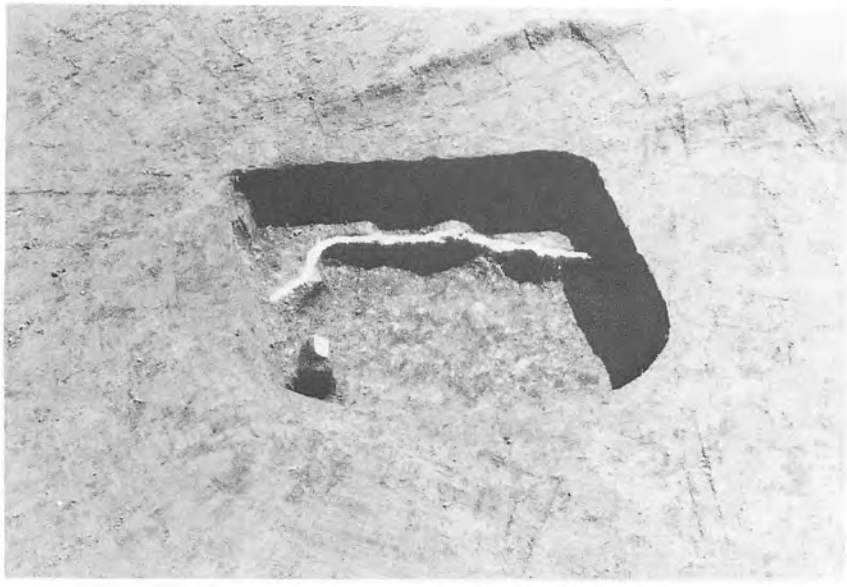
32－2

32－3



32

図版15　縄文土器・大陸系石器(24・32号住居址)



①E－10－1号土壙

②G－10－1・2号土壙

③D－12－1号甕棺墓

図版16　縄文・弥生時代の遺構と遺物(55年度調査区)

①Ⅰ号墳全景

②Ⅰ号墳主体部

③Ⅰ号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

図版17　Ⅰ号墳

①ⅠⅠ号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

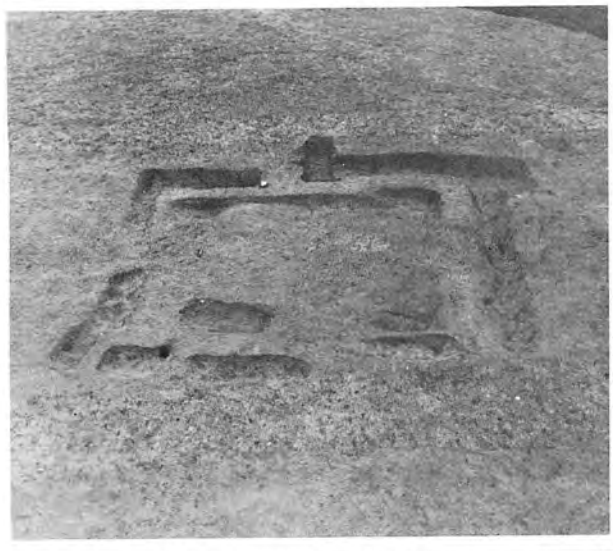
②ⅠⅠ号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

③④ⅠⅠ号墳周溝Ⅰ区出土馬歯

③　④

図版18　ⅠⅠ号墳

①２号墳全景



②

③

②２号墳主体部
③２号墳周溝Ⅰ区と溝の断面

④２号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

図版19　２号墳

① 3 号墳全景

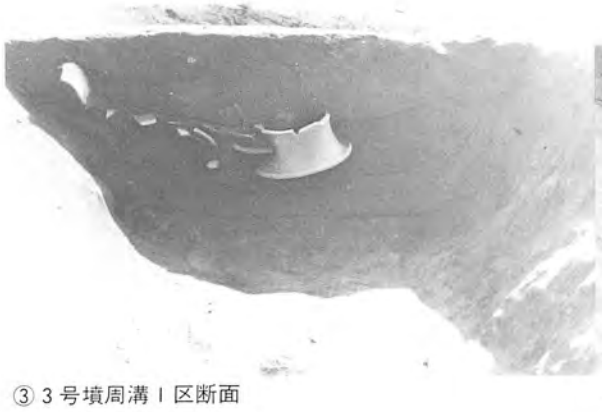
② 3 号墳周溝 I 区遺物出土状態

③ 3 号墳周溝 I 区遺物出土状態

図版20　3 号墳

① 3 号墳周溝 I 区遺物出土状態

② 3 号墳周溝 I 区遺物出土状態

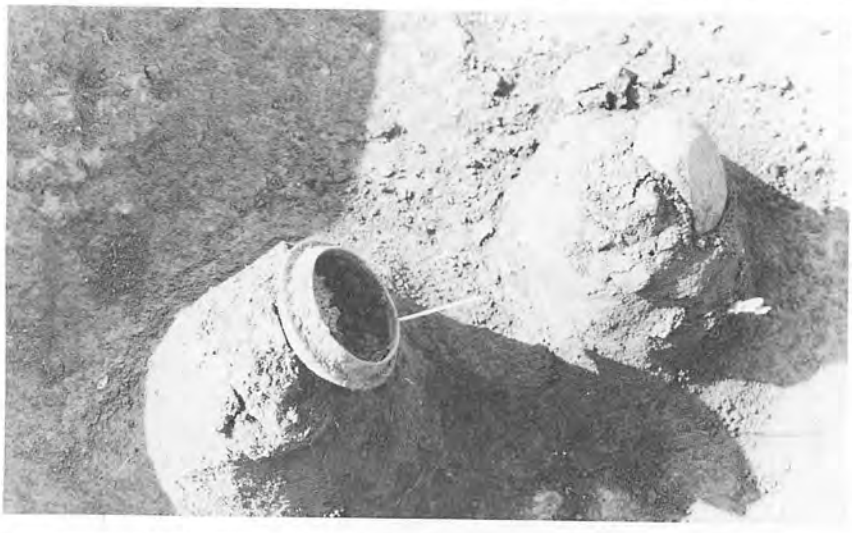


③ 3 号墳周溝 I 区断面

④ 3 号墳周溝 4 区断面

図版21　3 号墳

①４号墳全景



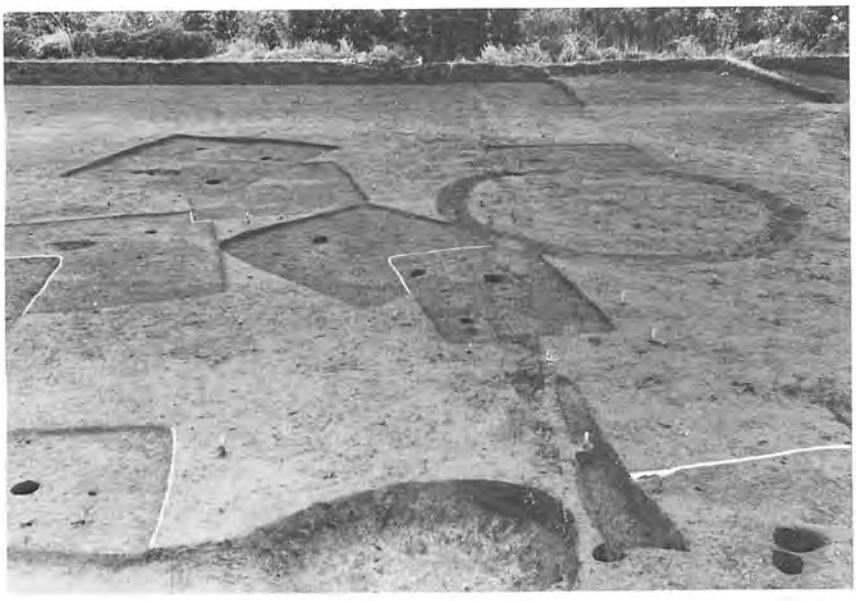
②４号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

③

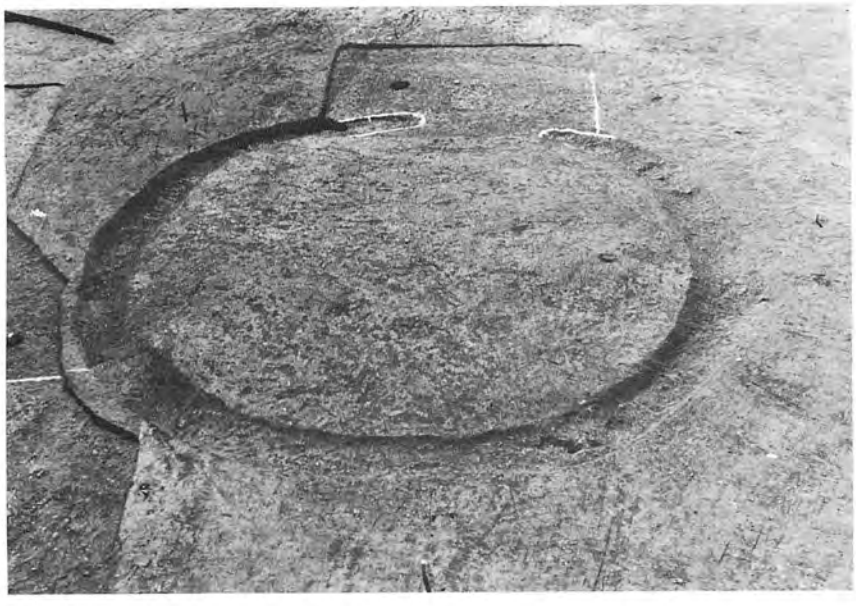
④

③４号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態
④４号墳周溝３区断面

図版22　４号墳



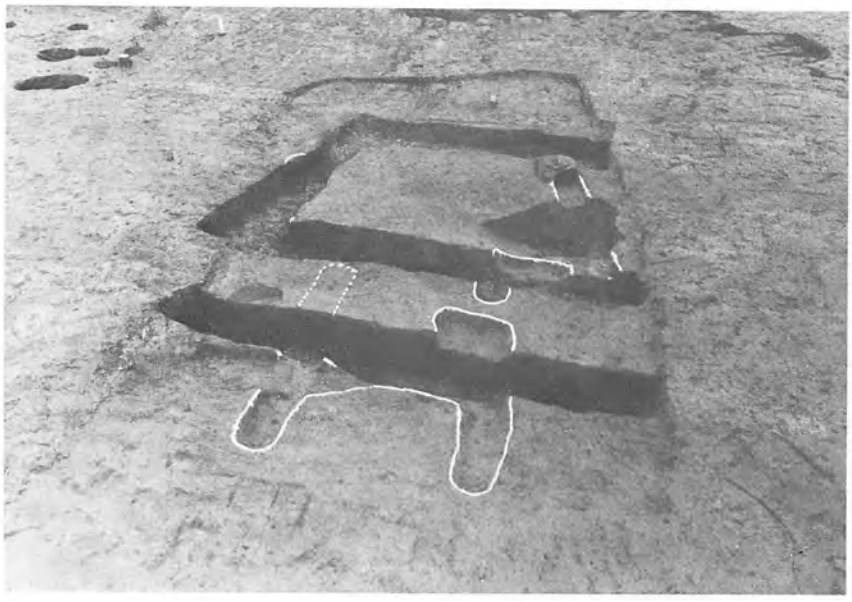
① 5 号墳と周辺の住居址群



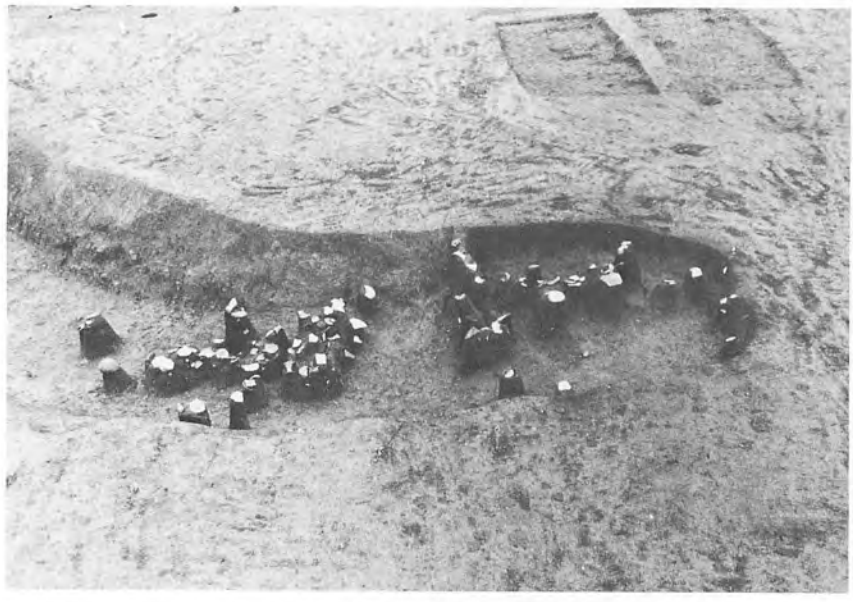
② 5 号墳全景

③ 6 号墳全景

図版23　5 ・ 6 号墳



① 6 号墳主体部



② 6 号墳周溝 I 区遺物出土状態

③ 6 号墳周溝 I 区遺物出土状態

図版24　6 号墳

① 6号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

②

③

④

② ③ 6号墳周溝4区馬の埋納土壙
④ 6号墳周溝4区土壙出土の馬歯

図版25　6号墳

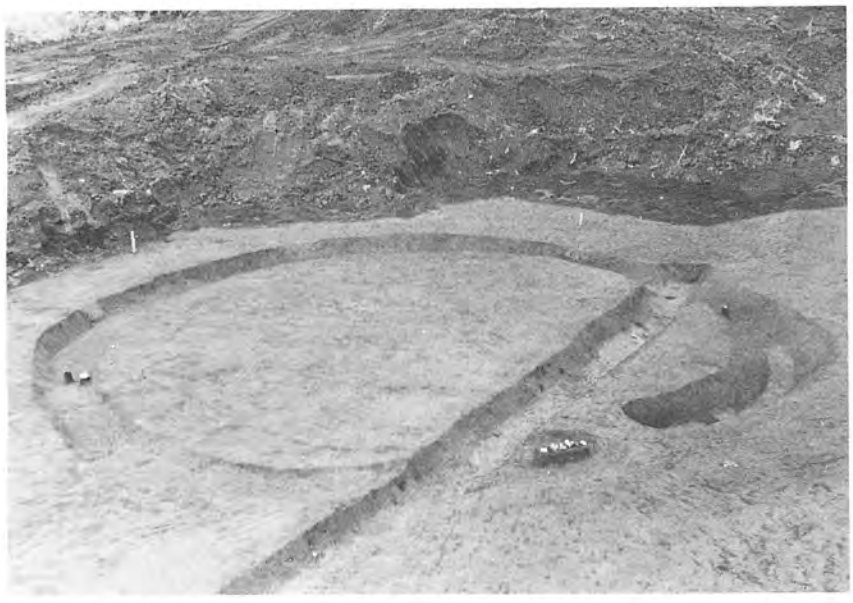
① 7 号墳全景

② 7 号墳周溝 I 区遺物出土状態

③ 7 号墳周溝 I 区遺物出土状態

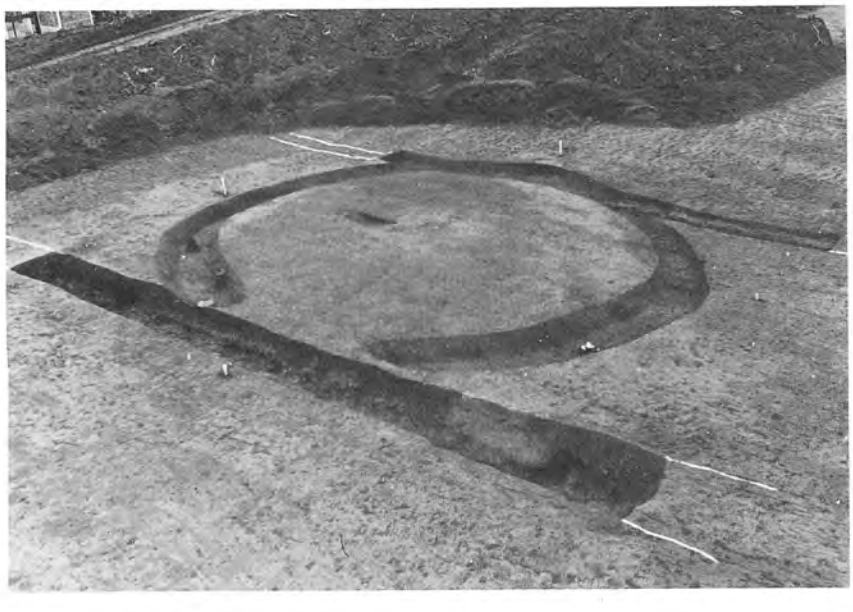
④ 7 号墳周溝 4 区断面

図版26　7 号墳



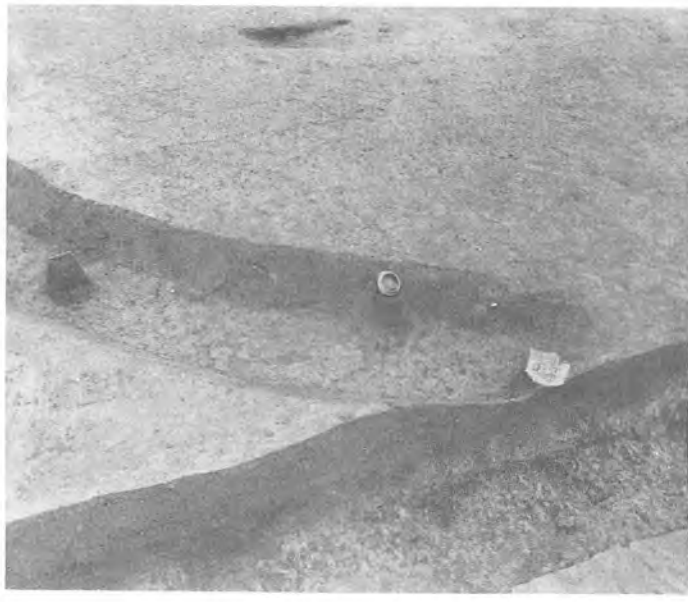
①９号墳全景

②10号墳全景



③11号墳全景

図版27　９～11号墳



②

①②11号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

①

③12号墳全景

④12号墳周溝Ⅰ区遺物出土状態

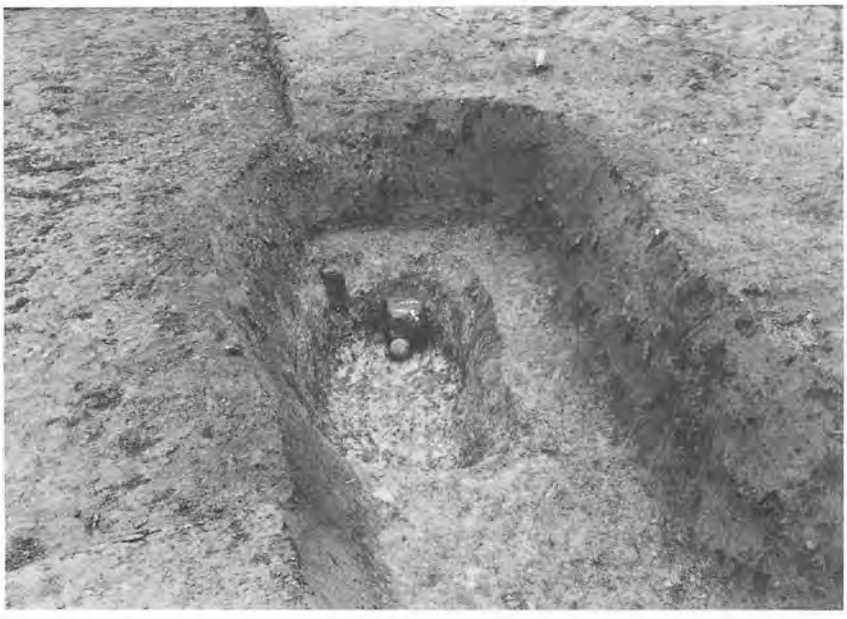
図版28　11・12号墳

①12号墳周溝Ⅰ区全景

②12号墳周溝Ⅰ区、馬の埋納土壙

③土壙出土の馬歯と馬具

図版29　12号墳



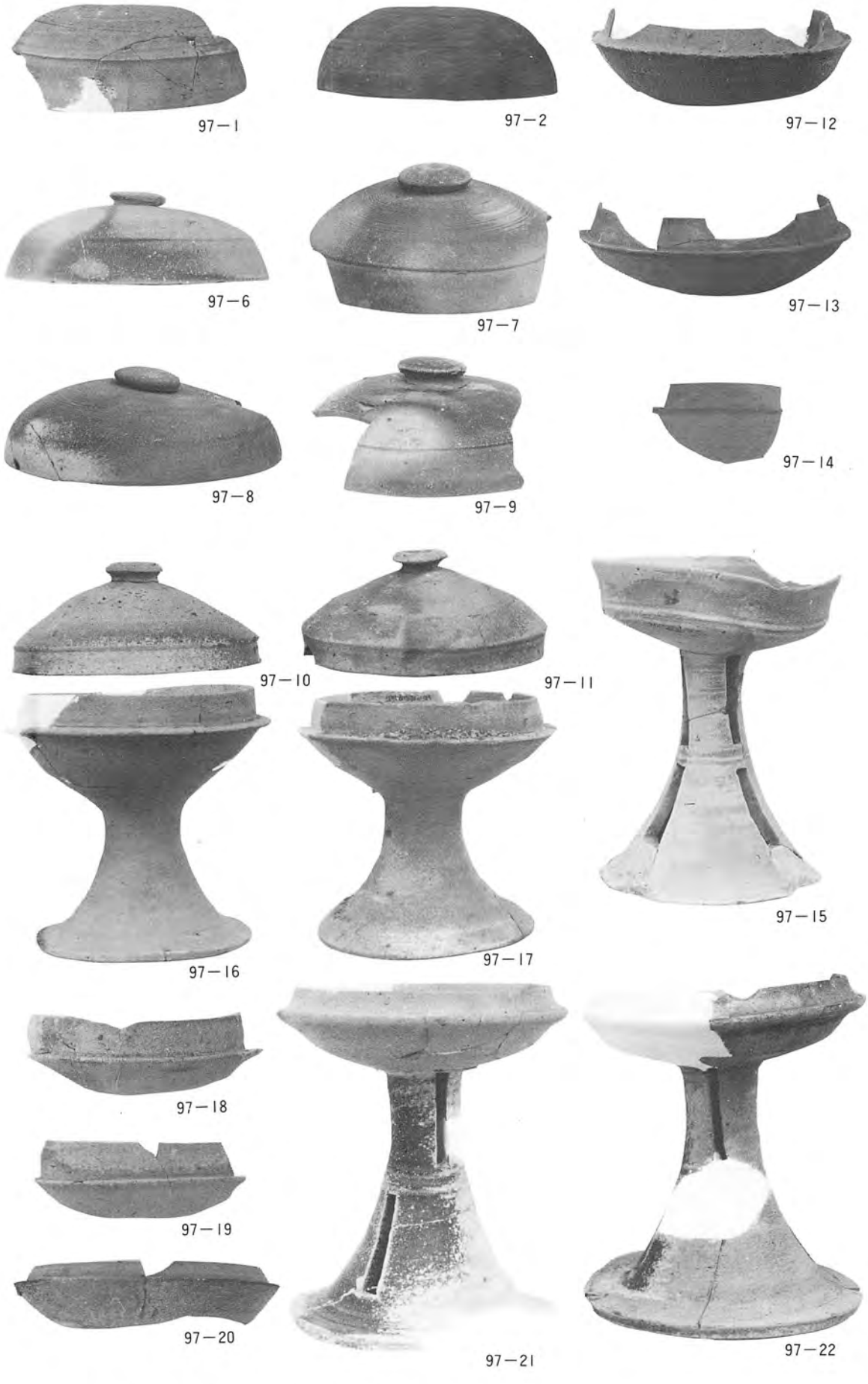
①12号墳周溝4区、馬の埋納土壙

②土壙出土の馬歯と土師器

③12号墳周溝1区断面

④12号墳周溝2区断面

図版30　12号墳



図版31　1号墳出土遺物(遺物番号は挿図番号と対照)

98－23

98－24

98－25

98－26

98－27

98－28

98－29

98－30

98－31

98－32

図版32　1号墳出土遺物

99－35

99－36

99－37

99－38

100－1　100－2

1号墳

2号墳

104－1

104－3

104－4

104－5

104－6

104－7

104－8

104－9

図版33　1・2号墳出土遺物

104－10

104－11

104－12

104－13

104－15

104－14

104－16

104－17

104－18

104－19

2号墳

3号墳

108－1

108－2

108－3

108－4

108－6

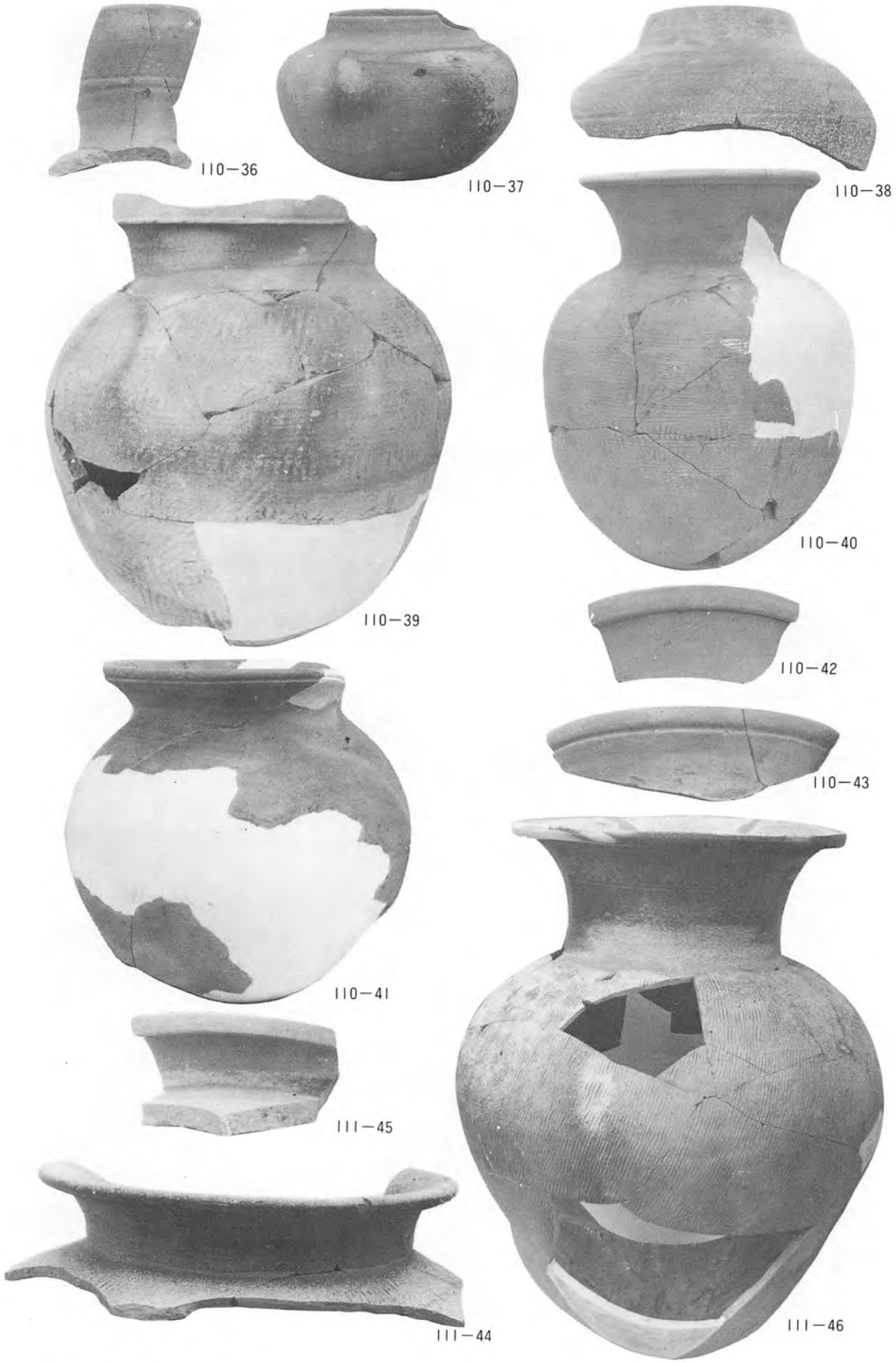
108－5

108－8

108－10

図版34　2・3号墳出土遺物

図版35　3号墳出土遺物



図版36　3号墳出土遺物

111－47

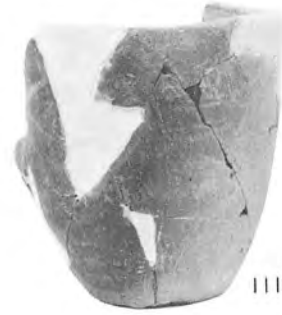
111－48

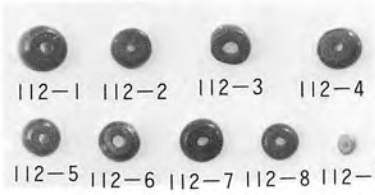
111－49

111－50

111－51

111－52


111－53


112－1 112－2 112－3 112－4
112－5 112－6 112－7 112－8 112－9

112－10 112－11 112－12 112－13

3号墳

4号墳

115－1

115－2

115－3

115－4

115－5

115－8

115－6

115－7

115－9

115－11

115－10

115－12

図版37　3・4号墳出土遺物

121－1

121－2

121－4

121－5

121－6

121－8

121－9

121－7

121－10

121－11

121－12

121－13

121－14

121－16

121－20

121－15

121－17

121－21

121－22

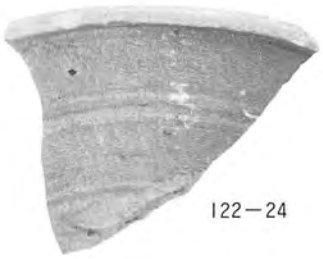
121－18

121－19

121－23

図版38　6号墳出土遺物

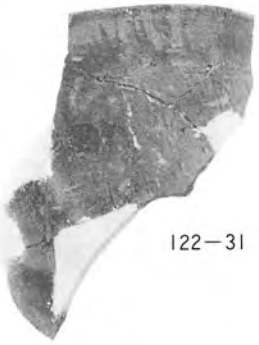
122－25



122－24

122－30

122－28



122－31

122－26

122－29

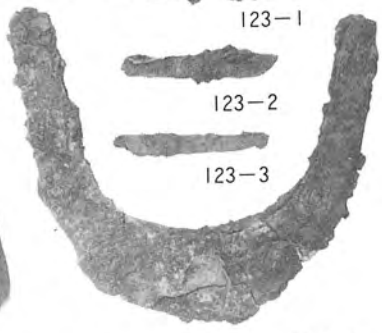
122－32

122－27

123－1

123－2

123－3



123－4

6号墳

7号墳

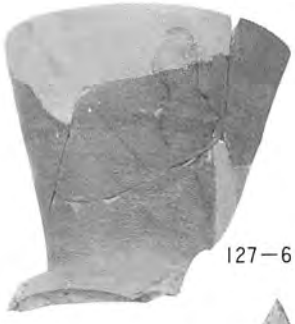
127－1

127－2

127－3

127－4

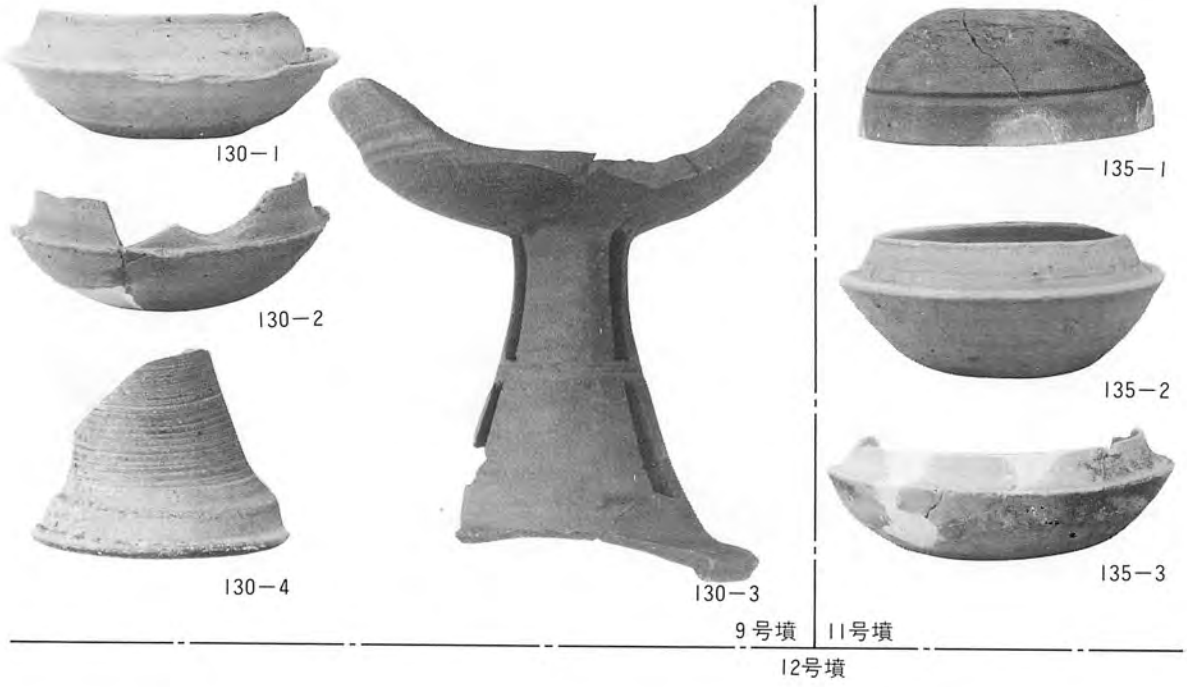
127－5

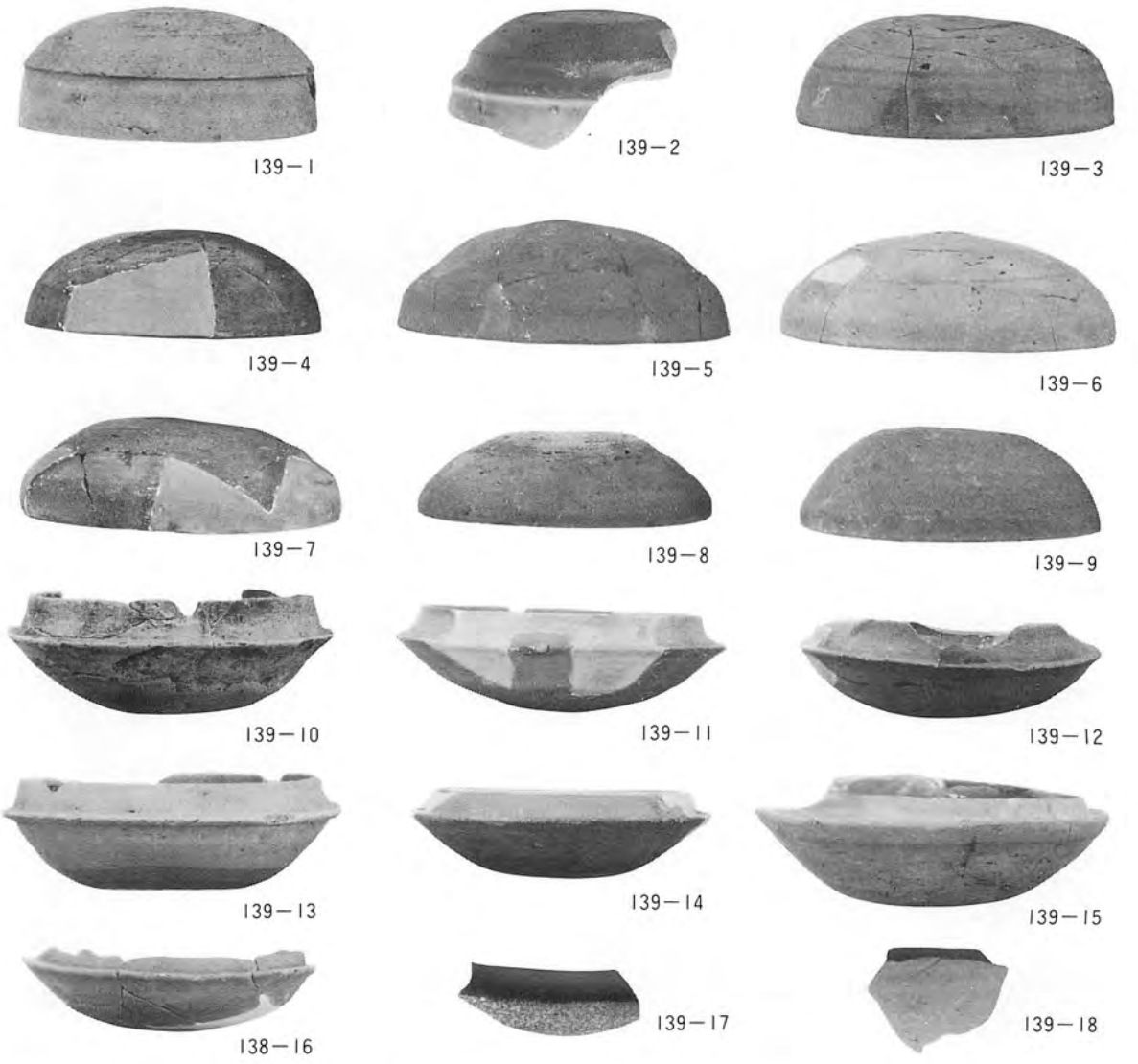


127－6

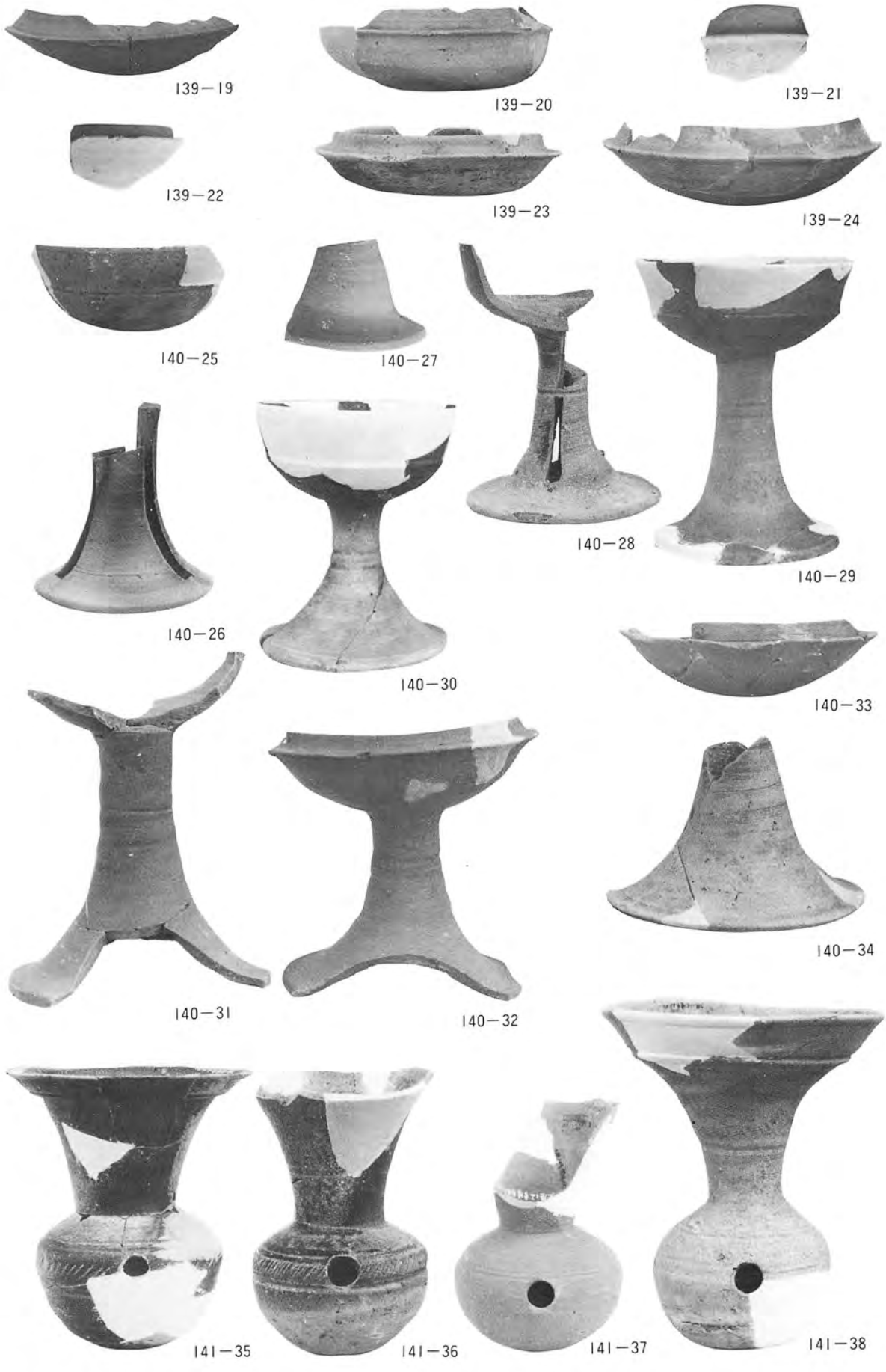
128－1

図版39　6・7号墳出土遺物





図版40　9・11・12号墳出土遺物



図版41　12号墳出土遺物

141－39

141－40

141－41

141－42

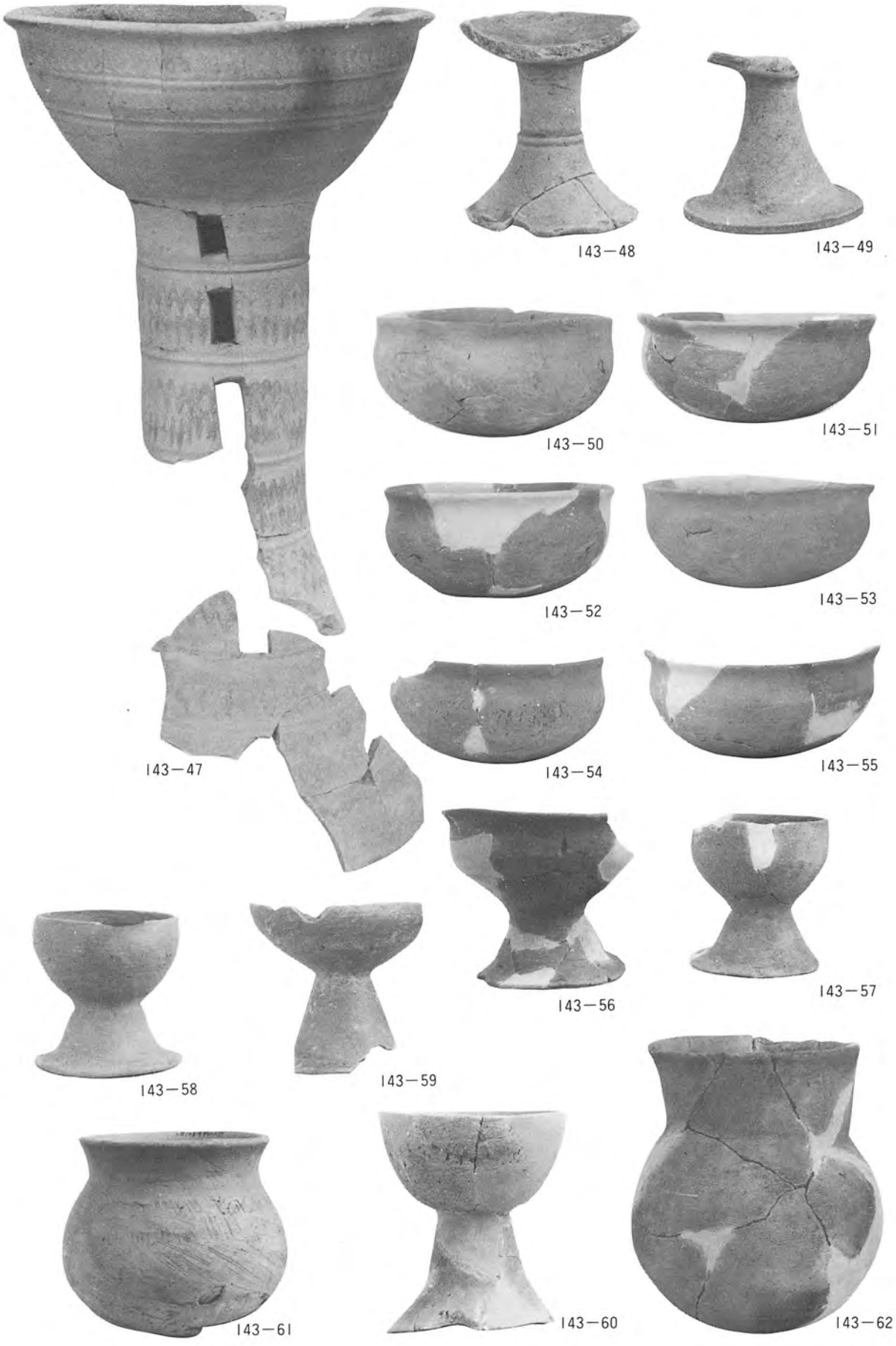
141－43

142－44

142－45

142－46

図版42　12号墳出土遺物



図版43　12号墳出土遺物

143－63

143－64

143－65

144－66

144－67

144－68

144－69

144－70

144－71

144－75

144－72

144－52

144－76

図版44　12号墳出土遺物

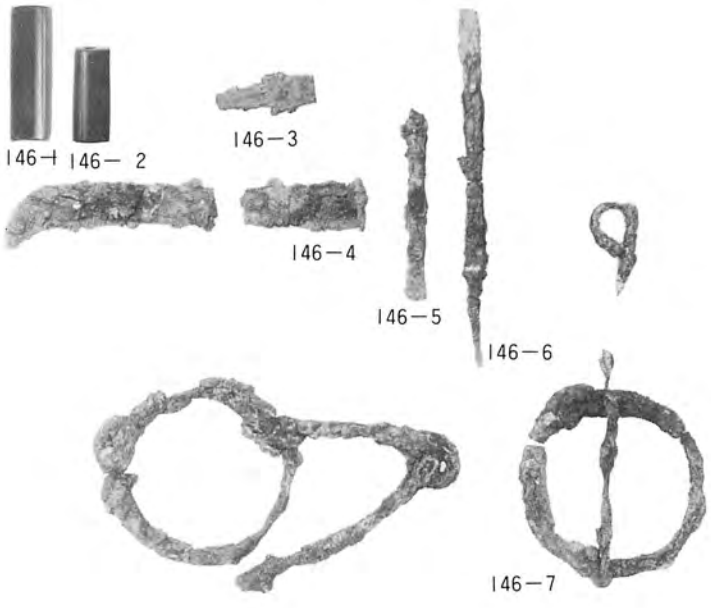
144－74

144－77

144－78

145－79

145－80



146－1　146－2　146－3　146－4　146－5　146－6　146－7

図版45　12号墳出土遺物

熊本県文化財調査報告　第58集

上の原遺跡 I

昭和58年３月31日

発行　熊本県教育委員会
〒862　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　凸版印刷株式会社
〒810　福岡市中央区渡辺通２－１－82
電気ビル別館５階
☎（092）771－2161

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 58 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上の原遺跡 1
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日